

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ギフトテッド

【作者名】

龍翠

【あらすじ】

なのはたちのクラスメイトの主人公がマテリアルズと出会う。ただそれだけのお話。

特別な能力も魔力もないただの一般人がマテリアルズといちゃこらするだけのお話。本当にそれだけです。伏線？ 展開？ そんなものはない。ただマテリアルズが書きたいだけだ！ 特にシュテルが！ シュテルと！ シュテるんと！

オリ主ものなのでその点に嫌悪感を抱く方は回れ右をしていただけだと思います。また、オリ主ですがいわゆる神様転生ではなく、チート能力もありません。大人びた平凡な一般人を意識しています。意識しているだけです。ついでに、原作キャラはできるだけ性格を崩さないようにしていますが、崩れてしまう時もあるかもしれませぬ。この点は私の文章構成の問題です。ごめんなさい。

あと一つだけ嘘ついています。魔力はないけど特別な出自ならあります。

この小説の形をとった駄文は自サイトとピクシブでのマルチ投稿

となっております。ちなみに自サイトでは夢小説の形式を取つていたりもします。

この作品にギアーズは出てきません。ギアーズが出てこなかったif世界だと思つてください。管理局と協力して解決して、恩返しに一時的に管理局に協力している、そんな感じに思つていただければと。

感想は泣いて喜びます。批判でも構いません。直せるところは直していきたいです。

2014/2/8 完結しました。

2014/3/3 後日談を投下開始。月一で連載できればいいなあ。

第一話 出会い（前編）

もしこの世界に魔法があるのなら。そんな非科学的なことを想像しない子供はいないだろう。誰もがそんな夢を見て、胸を躍らせる。夢を、希望を溢れさせた瞳で。

くだらない。

海鳴市の裏道にある小さな書店で、少年は小さな声で毒づいた。初めて見る雑誌のその文章を読んで、鼻で笑う。

短い黒髪に黒目という、典型的な日本人の男の子だ。私立聖祥大学付属小学校に通う四年生。放課後にこの書店に立ち寄るのが少年の日課になっている。

名前は西崎秀一。親しい友人からはシユウと呼ばれている。

シユウは雑誌を閉じると、丁寧に本棚にしまった。何かおもしろい本がないかと、店の奥へと入っていく。

本棚が壁一面、それと店内に三列しかない小さな書店だ。だが地下に倉庫のようなものがあるらしく、週に一回は全ての本が何かしらの本と入れ替わっている。ほとんどが少し古い本だが、暇つぶしにはちょうどいい場所だ。

端の本棚を隅から隅までゆっくり見て、一度最奥のカウンターにたどり着く。店主の老人と目が合い、会釈する。老人は朗らかに笑うと、小さく手を振ってきた。あまり本を買うことがないのに、なぜかこの店主には気に入られている。

店主から視線を外し、次の本棚へ。しかし、シユウの視線が本棚にいくことはなかった。

「……あれ？」

どこかで覚えのある少女がそこにいた。黒を基調とした服を着て、本棚を難しい顔をして眺めている。どこで見たかなと首を傾げて、すぐに思い当たった。

クラスメイトの高町なのはだ。だが確かに顔はうりーつだが、髪型が違う。今日学校が終わってから髪を切ったという可能性もあるが、

今更短くするとは思えない。

少年の知る高町なのは、小さなツインテールのような髪型だ。対する目の前の少女は、ショートヘア。顔は同じでも別人と見た方がいいだろう。

双子かな？ 聞いたことないけど。

別段親しいわけでもないので気にする必要はないのだが、なぜ声をかけてみたくなった。とりあえず確かめてみよう、そう思って少女に近づき、口を開く。

「高町さん？」

返事はない。反応すらない。眉すらぴくりとも動かさず、ただただ本棚を睨み続けている。

「なのはさん？」

呼び方を変えてみると、反応があった。少女が顔をシュウに向け、しばらくシュウのことを観察する。やがて少女の口から出た言葉は、

「人違いです」

そんな短い言葉だった。だが、声色はなのはとよく似ている。もっとも、なのはの声もあまり聞いたことではないのだが。

「やっぱり違うんだね。よく似ているね。双子？」

少女が小さく首を振る。再び本棚へと視線を戻しながら、

「違います。知り合いではありませんが、ナノハと血縁関係はありません」

「へえ……。じゃあやっぱり、なのはのことは知ってるんだね」

「……………はい」

少女の表情が少しだけ渋いものになった。シュウの質問が答えを誘導したものと察したらしい。

「それにしても、よく似てるね」

「……………」

返答はなし。反応すらしなくなった。どうやら警戒されてしまったらしい。シュウは苦笑すると、少女が見ている本棚へと視線を送る。ミステリー小説が並んでいるコーナーだ。

「何か探してるの？ よければ手伝っけど」

少女はシュウの顔を一瞥して、わずかに顔を伏せる。何かを考えていたのだろうが、すぐに顔を上げると、ではお願いしますという答えが返ってきた。

「何の本？」

「少し古い小説らしいのですが……」

そう前置きして少女が答えたタイトルは、確かに古いものだった。十年ほど前に出版されたものだ。つい先週にそのタイトルを見て、シュウ自身もここで読みふけた記憶がある。

一週間前。つまりは、すでに入れ替えられている可能性の方が高い。

「おもしろいと聞いて探していたのですが、どこの書店にもなくて。ここで見かけたという話を聞いたので、探しに来たのです」

「なるほど。でも、多分探しても見つからないと思っよ」

「そうですね。売ってしまったのなら仕方ありません。他を探します」

少女が無表情で答え、出口へときびすを返す。シュウはそれを慌てて呼び止めると、振り返った少女に笑いかける。

「大丈夫。多分在庫はあるから。ちょっと来て」

怪訝そうに眉をひそめる少女を連れて、シュウは店主の方へと向かう。すぐに二人に気づいた店主が、シュウと少女を見て目を丸くした。

「なんだ、知り合いだったのか。女の子の方はあまり見ない子だったから知らなかったよ」

「知り合いというか……。知り合いによく似た子っただけなんだけど」

ふむ、と店主はシュウと少女を交互に見る。だがすぐにまあいいかと笑い飛ばした。

「で？ 何か探してるのかい？」

「うん。こっちの女の子がね。ちょっと昔の本なんだけど……」

そう言ってシュウがタイトルを告げると、ああそれかと店主は得心したようにうなずいた。待っていなさいと言ってカウンター奥の扉

へと消えていく。

「……不用心ですね。盗まれたらどうするつもりでしょうか」

「さあ……。まあ僕たちを信用してくれてるってことだろうね」

そんな会話を交わしている間に、店主が戻ってきた。手には一冊の分厚い本。ハードカバーの本だ。

「ほら、嬢ちゃん。これだろう？」

店主が手渡してきた本を、しかし少女は受け取らずに表紙だけを確認する。すぐに少女はうなずいて、言った。

「はい。間違いありません。おいくらででしょうか？」

「値段？ ああ、値段か……。いくらにしよう」

店主がつばやいた言葉に、少女が小さく首を傾げた。

少女は知らないことだろうが、この本の値段は店主の気まぐれによつて変動する。定価より高くなることはないが、店主に気に入られればかなり安く売ってくれるのだ。その代わり、取り寄せなどのサービスはなくあくまで在庫限りの販売だが。

店主から聞いた話では、この店は道楽のようなものらしい。だから別に利益を上げるつもりはないのだとか。

「よし、決めた。ただでいい」

「……は？」

店主の言葉に、少女が意味が分からないといった様子でそんな声を出した。店主は柔和な笑みを浮かべて、言う。

「こんな裏道の寂れた書店に来るってことは、他じゃ見つからなかったんだろう？ それでも探し続けて、ここに来た。嬢ちゃんなら大事にしてくれそうだからな。ただで持つて行っていいよ」

それを聞きながら、シュウは苦笑した。この後に続く言葉も知っている。シュウも一度言われたことがある言葉だ。

「その代わり、たまにでいいから顔を見せてくれな。本の話でもしようじゃないか」

店主はこうやって話し相手を見つけている。本当に道楽の店なんだとよく分かる。

「……ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきますま

「うん。またいつでも来てくれ。おすすめの本とかも教えてやるからな」

笑いながら手を振る店主に見送られ、二人は書店を後にした。紙袋に包まれた本を大事そうに抱え、少女はどこか満足そうだ。もっとも、表情の変化がほとんどないため、何となくそう感じるだけなのだ。

しばらく歩いて大きな道に出たところで、少女はシュウに小さく頭を下げた。

「ありがとうございます。あなたのおかげです。私でできることであれば、何かお礼をしたいのですが……」

「いや、いいよ。気まぐれみたいなものだし」

「そういうわけには……」

少女はうつむいてしばらく考える。その様子を見て、律儀だなと苦笑する。

「じゃあ……。僕はいつも放課後あの書店にいるから、たまにいいから寄ってよ。その本の感想とかも聞きたいから」

顔を上げた少女はまだ何か言いたそうにしていたが、やがて諦めたように小さく首を振った。

「分かりました。読み終えたら、必ず」

「うん。そうだ、僕は西崎秀一。友達からはシュウって呼ばれてる。君は？」

「名前、ですか？ シュテルです」

外人さんかな、とシュウは少し驚いた。なのはと同じ顔なため日本人だろうと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

「それじゃあシュテル。また、いずれ」

「はい。ありがとうございます、シュウ」

少女は頭を下げると、シュウに背を向けて歩いて行く。シュウはそれを見送りながら、

「……僕もあっち方向なんだけど。今更言えないなあ」

そんな情けないことをつぶやいて、仕方ない時間をつぶそうと書店

へと戻っていった。

翌日の放課後。シユウはいつも通りに書店へと向かい、

「あ」

店主と会話を交わしているシユテルを発見した。シユテルは無表情で会話を続けているが、店主の方は楽しそうに笑っている。

すぐに店主と目が合い、店主が手を振ってきたことによってシユテルも気がついた。シユウを見て、小さく会釈をする。

シユウが二人のもとへと近づくと、シユテルが無表情のまま言った。

「お待ちしていました、シユウ」

「あ、うん……。え？もしかして、もう読み終えたの？」

驚いてつい聞いてしまう。シユウはあの本を読み終えるのに一週間近くかかった。もちろん立ち読みなので一日二時間ほどが限界だったのだが、それにしても早すぎる。

「とてもおもしろかった……。つい」

「すごいね……。読むの、早いんだね。うらやましい」

本心からそう言つと、シユテルは、そうですかと首を傾げただけだった。

「えっと……。立ち話もなんだし、どこか行く？」

「ナンパか」

店主が笑いをかみ殺しながらそんなことを言う。シユウは慌てて、違う違うと勢いよく首を振った。

「……」

「別に構わないけどな。まあ君自身が気を遣いそうだし」

またいつでも来なさい、と笑顔で手を振る店主に見送られ、二人は店の外へ出た。

さて、どうしよう。

計画があったわけではない。ゆっくり話をするなら無難に喫茶店などにも行くべきだろうが、手持ちのお金はあまり多くない。だがシユテルが側にいるため、あまり考える時間もない。

やばいまずいどうしよう。本格的に焦り始めたところで、シュテルが言った。

「どこか公園にでも行きましようか」

「え？ あ、うん」

では、と先を歩き始めたシュテルを慌てて追う。まさか女の子に先導してもらうことになるとは思わず、助かったやら情けないやらで意気消沈してしまった。

しばらく歩き続け、たどり着いたのは池のある公園だった。大きめの池の周囲にはベンチが点在している。ただ遊具などがなかったためか、ひどく閑散としていた。

シュテルはベンチに腰掛ける。シュウもその隣に、少し距離をおいて座った。

うわ、二人きりだ……。

まさか誰もいない場所に来るとは思わなかった。妙に心臓の音が高鳴ってくる。なぜか緊張してしまう。何も無いはずなのに、だ。

「シュウはよく本を読むのですか？」

しばらくして、シュテルが口を開いた。それなのに、
「う、うん」

それだけしか返答できなかった。そうですか、とシュテルは黙ってしまう。

何か、何か喋らないと！

わざわざ足を運んでくれたシュテルに申し訳ない。せっかく友達になれそうだと思っただけに、余計に慌ててしまう。しかし何を話せばいいのだろうか。

頭を抱えているシュウの隣では、シュテルが膝の上に何かを載せて手を動かしていた。それが視界に入り、シュウは首を傾げる。

……猫？

いつの間にか黒猫がシュテルの膝の上で丸くなり、眠っていた。シュテルはその猫を優しく撫でている。表情はいつもの無表情だが、どこか柔らかいものを感じた。

「飼い猫？ シュテルを迎えに来たとか？」

自然とそんな言葉が出てきた。シュテルは首を振って否定する。

「おそろく野良猫でしょう。どうも猫に懐かれるようですね。」

困ったものです、と言った言葉とは対照的に、言葉に棘がない。一人と一匹の様子を見ているだけで、心が和んでしまう。

「かわいいね。撫でも大丈夫かな？」

「おそろくは」

そつと猫を撫でる。毛がふわふわとしており、とてもさわり心地がいい。もしかするとどこかの飼い猫かもしれない。

「いいなあ、動物に懐かれるって。僕はどうしてか動物に懐かれることが少なくて」

「そうですね。私自身はなぜ懐かれるのかよく分からないのですが……」

「動物は人の本質を見るらしいから……。きっとシュテルはいい子だからだよ」

いい子ですか、とシュテルは小さな声でつぶやいた。なぜか自嘲するような言い方だった気もする。

猫を通してほどよく緊張がほぐれたシュウは、いつの間にか自然と言葉が出るようになっていた。

他愛のない話を続けて、何となくだがシュテルの家族構成を理解できた。

家族は四大家族で、理由は分からないが親はいないらしい。近くのマンションに部屋を借りて、姉妹四人で暮らしているそうだ。もっぱら本を読んだりなどして日々を過ごしているらしい。学校のことを聞くと、それははぐらかされた。

シュウも自分のことを話す。古いアパートで暮らしていること。学校はなのと同じ学校だと伝えると、あの学校ですか、と理解を示していた。知り合いとは聞いていたが、どうやらそれなりに親しい間柄ではあるらしい。

そしてふと気がつく、すっかり太陽は沈んで辺りは暗くなってい

た。

「すみません、話しすぎました」

膝の上に載せていた猫を足下に下ろし、シュテルが立ち上がる。シュウも立ち上がって、名残惜しそうに去って行く猫を二人で見送った。

「それでは私は帰るとします。シュウ、よければお送りますが」

「え？ あ、いやー！ いいよ大丈夫！」

さすがに女の子に送られるのは男として立場がない。むしろここは自分が送ると言いたかったのだが、シュテルに言われたことにより自分は言えなくなってしまった。

そうですか、と言ったシュテルは、では、と一度だけ頭を下げて歩き始める。かなりあっさりとした別れ方だ。

「あ、待って！ シュテル！」

「何でしょうか？」

「また……会えるかな？」

シュテルはしばらく無言。緊張しながら言葉を待っていると、夕方なら、買い物に行っていないければここにいます」

それだけを告げると、足早に去って行った。

それはつまり……来てもいいってこと、かな？

立ち去っていくシュテルを見送って、シュウも帰路につく。足が軽く感じた。

S i d e : : S t e r n

「ただいま戻りました」

自宅の扉を開けて中に入る。台所からの良い香りが鼻をくすぐる。きつと今頃レヴィが喜んでいることだろう。

まっすぐに台所に向かうと、鍋をかき混ぜている王と目が合った。

「む、戻ったか。もうすぐ仕上がる。すまぬが食器の準備を頼むぞ」

「はい。分かりました」

うなずき、手洗いを済ませて人数分の食器を取り出していく。カレー用の皿で、この家で最もよく使われる食器だ。取り出すついで

に、炊飯器からご飯をよそっていく。

「今日はカレーなのですね。レヴィが喜びます」

「ああ。別にあやつがうるさいからカレーにしたわけではないぞ？」

「……このハンバーグは？」

「ユーリが言ったからではないぞ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ王。分かっています、とシュテルがうなずく。

「さあ、手早く済ませてしましましょう」

「ぐぬ……。貴様、やはり我を尊敬しておらん？」

「尊敬していますとも」

王と何度もしたやりとり。事実自分は王のことを心の底から敬愛しているのだが、相手にしっかりと伝わっているかは定かではない。ハンバーグカレーをリビングのテーブルに持って行くと、テレビを見ていたレヴィとユーリが歓声を上げた。

「わーい！ カレーだ！ 王様大好き！」

「は、ハンバーグです！ ディアーチェ、ありがとうございます！」

「……ふん」

王はそっぽを向いたまま席に座る。その顔は真っ赤だ。シュテルはほんの少しだけ微笑を浮かべると、自分も席に座った。

「それでは、いただきますしょう」

「いただきますーすー」

レヴィが真っ先に、元気よく言ってカレーを食べ始める。この子は相変わらず元気だ。

「じゅるでむ、シュテルさ」

カレーで口をいっぱいにしたレヴィが口を開く。シュテルがわずかに睨むと、慌ててカレーを呑み込んだ。

「ずいぶんと機嫌が良さそうだね。何かあったの？」

言われて、少し驚いた。表情に出していたつもりはなかったのだが。

「いえ、別に。友達ができただけですよ」

もっとも、相手がどう思っているかは分からないが。しっかりと会

う約束をしたわけでもない。来てくれなければ、それで関係も終わら
だろ。別にそれでも構わないのだが、話していて居心地良く感じて
いたので、それでは少し寂しくもある。

そんなことを考えていると、他の三人が目を丸くしていることに気
がついた。

「……………何か？」

「い、いや、何でもないぞ」

「うん、そうそう！ 何でもない何でもない！」

「何でもありません！ 本当に！」

そして三人とも慌てたようにカレーを食べ始める。

シュテルはわずかに首を傾げたが、深くは気にせず自分も食事を
再開した。

第二話 出会い（後編）

シュテルと出会ってから一週間。シュウは毎日のようにシュテルと会って話をしていた。

どうでもいいような学校の話や、最近発売された小説の話。他愛のない話題ばかりだったが、それだけでとても楽しく思っていた。

一日だけシュテルが来なかった日がありその時は嫌われたのかと怖くなったものだが、翌日にはいつも通り現れて謝罪までされたものだ。お詫びにともらったクッキーはとてもおいしかった。料理はそれなりにと答えていたことがあったが、普通に上手だと思う。

ただそのクッキーよりも、それと一緒に渡された紙切れの方がシュウにとっては嬉しかった。

「お互いに連絡が取れないのは不便でしょう」

そんなことを言って差し出された小さな紙切れには、携帯電話の電話番号が書かれていた。当然シュテルの電話番号で、思わず、いいの？と聞き返してしまったほどだ。

それからは、帰宅後の夜も電話で話をしていたりする。

「……そんな冗談ばかり言うつ先生だね」

この日もシュウは夜に電話をしていた。相手はもちろんシュテルだ。電話の向こう側から水と食器の音が聞こえてくるので、洗い物をしながら相手をしてきているのだろう。

『おもしろい先生ですね。私も一度会ってみたいものです』

「授業はおもしろいけど、私生活はかなりずばらしいけどね。シュテルとは気が合わないと思うなあ」

『そつでしよつか』

かちやり、と食器と食器の当たる音がして、水の音が止まった。洗い物は終わったらしい。

「洗い物、してたんだよね。邪魔だったかな？」

『いえ、お気になさらずに。私も貴方との会話はなかなか楽しいので』

「そう言ってもらえると素直に嬉しいよ」

笑いながら言って、だがその後の言葉はなかった。

シュウが怪訝そうに眉をひそめる。シュテル？と問いかけてみるが、返事はない。来客でもあったのだろうかと電話を切らずに待っている。

『すみません、シュウ。急用が入りました。切りますね』

「あ、うん。いってらっしゃい……って、もう切れてる」

最後に聞こえた声は、シュテルにしては珍しくどこか焦りを含んだ声音だった。普段から感情の起伏に乏しいシュテルだが、よくよく観察してみるとかすかな変化は見受けられている。今回も分かりにくかったが、シュテルの焦燥はしっかりと伝わってきた。

「何かあったのかな？ ……姉妹だけで暮らしてるって話だったけど……」

以前にも一度同じことがあった。いつもの待ち合わせ場所に来なかった日の前日だ。ベンチで座って話していると、突然シュテルが無言になり、そして急に立ち上がったかと思うと今回と同じ言葉を発して走って立ち去ったのだ。

その時は自分が何か怒らせるようなことを言ってしまったのだろうと思うていたのだが、もしかすると違うらしい。

「……ちょっと行ってみようかな」

シュウはそうつぶやくと、自宅を後にした。

シュテルの様子を見るために家を出たのはいいが、当然のごとくシュウはシュテルの家を知らない。マンションだとは聞いているが、あまりにも情報が少なすぎる。仕方なくシュウは、とりあえずはいつもの公園へと向かった。

いつものベンチに座り、小さくため息をつく。携帯電話を取り出して、だがすぐにしまつという行動を何度も繰り返す。電話をかけてみればいいとは思いつつも、もし手が離せない用事なら迷惑になるだろう。

「それにしても、ここは相変わらず人がいないなあ」

普段から人気のない場所だ。気にすることは無いと思いつつも、確かな違和感を覚える。どうしてかと首を傾げて、すぐに理由に思い至った。

音が、ない。

普段なら、かすかにだが車の音が聞こえてくる。この場所は人が少ないといっても、この近くの道は人が通ったりもする。だが、今晩はそれらが一切ない。ただただ無音。静寂の支配する世界。

「……………なんでも？」

さすがに異常事態だとは思うが、理由は分からない。何かしらの避難命令でもあったのだとしても、警官の姿は見るはずだ。

「……………」

さすがに不安になって立ち上がったところで、

「……………」

目の前の池の中央が、かすかに光っていることに気がついた。何だろうと思つて池に近づくと、ゆっくりと光の球体が浮かび上がってくる。淡い光を放ちながら、それは上空へと上ってゆき……………。

突然、球体が軌道を変えた。先ほどまでと違い、すさまじい速度でシューウの方向へ飛んでくる。

「……………」

何が起こったのか分からず間抜けな声を出す。あまりのことに身動きがとれない。

なんだこれ。何が起こってるの。どうすればいいの。

思考は一瞬。しかし肝心の行動に関するものは何一つない。

球体がシューウに迫り、ぶつかると思った時、

「じつじつしていきたくたさー」

聞き慣れた声。そして目の前に立つのは黒い少女。

少女は持っている杖を目の前に出すと、光の壁のようなものが出現した。球体はその壁に衝突に、勢いそのままに反対方向へと吹き飛ばされる。

「ナノハ、行きましたよ」

少女の声。聞き慣れた声。

「うん… 任せて、シュテル！」

上空から聞こえてくるのは、先ほどと似通った声だ。こちらは昼間によく聞く声。

そう思った直後、目映い光の柱が球体を直撃した。そして球体は光を失い、地面へと落下する。池の反対側だ。

「ロストロギア、封印完了！ シュテル、お疲れ様！ そっちの子は大丈夫そう？」

反対側で、目の前の少女と色違いの衣服を着た少女が叫んでくる。目の前の少女は、待ってくださいと短く答えると、振り返った。

「すみません、巻き込んでしまいました。大丈夫でした……か……」
少女の声が尻すぼみに小さくなる。その目が大きく見開かれる。

ああ、こんな表情もするんだな。

そんなことを思う。先ほどの異常事態よりもそちらの感想の方が強い。

「……えっと。くんばんは、シュテル」
「……………」

シュテルはゆっくりと目を閉じて、小さくため息をついた。

この世界の他にも多くの世界がある。

それらの世界には魔法と呼ばれる技術が存在している。

今回、君が巻き込まれたのはこちらのミス。申し訳ない。

そんな内容のことを聞いた気がする。半分以上聞き流したのではつきりとは覚えていないが。

現在、シュウがいるのは小さな部屋。中央に四角形のテーブルがあり、四方にいますがそれぞれ置かれている。アースラという名の船の個室らしい。

正直よく分からないが、巻き込まれただけらしい。とりあえず命は無事なので、怒るつもりもない。腹がふくれたから良しとする。

目の前のテーブルには盆に載せられた料理があった。今は空だが、なかなか美味だった。

あの後、シュウはシュテルとなのはに連れられて、アースラと呼ば

れる船に入った。船らしいが、その全体を見てはいないので実感がわかない。入ってすぐに少し年上かと思われる少年が出てきて、この部屋へと通された。

「巻き込んでしまって、すまない。しっかりと説明するから……」

という言葉をかき消したのは、シュウの腹の音。少年はしばらくぼかんと呆けた後、苦笑して言った。

「何が食事でも持ってきてよ」

そして食べながらの説明が始まる。シュウの意識は八割方が食事に割かれていたので、話の内容はおぼろげにしか理解していない。

それでも、食事の後に始まったなのはたちの話はしっかりと聞いていた。

ジュエルシード事件。闇の書事件。闇の欠片事件。砕け得ぬ闇事件。全てを聞き終える頃には、すでに夜も遅い時間になっていた。途中で少年が別の機会にしようかと持ちかけてきたが、大丈夫だからと一度に聞かせてもらった。

「これでこの世界に関わる事件は一通り話したことになる。ただ、くれぐれも他言は……」

「大丈夫、分かっている。無理言って教えてもらったしね」

本来ならここまで詳細なことを教えてもらうことはできないらしい。だが事前に魔法の関係者、それもシュテルと面識があったために話してくれたようだ。彼女のことを教えるためには、その前提として知っておくべきことだとして。

話し終えた少年は、テーブルに置かれていたコップを手に取った。中に満たされているのはただの水だ。それを一気に飲み干し、言う。「さて、と。もう遅い時間になっているから、今日は泊まっていくといい。ちゃんと明日の学校に間に合うように送ろう」

「いやあ、それはいいや。よく分からない場所で寝られるほど神経図太くないから」

思わず少年が苦笑する。それもそうか、と。

「それよろしね」

「んっ」

「シュテルとちょっとお話したい」

「……………」

少年が渋い表情を浮かべる。腕を組んでしばらく考え込む。シュウは少年の言葉を、ただじっと待った。

「……少し、相談してきても？」

「うん」

少年は立ち上がると、部屋を後にした。

一人残されたシュウは今までの出来事を振り返る。どうにも現実味がない。まるで夢を見ているような、そんな感覚だ。

でも……夢じゃない。

目の前で起きたことを思い出し、そしてシュテルの姿を思い出し、

格好良かったなあ……………。

表情が緩む。同時に、少し情けなくもなる。魔法のことなど何一つ知らないので守ってもらうことになったのは当然なのだろうが、それでもわずかにでもある男のプライドは見事に砕け散ってしまった。

どんとと自己嫌悪が激しくなっていく。うあー、と意味不明なうめき声を漏らしたところで、

「すまない、待たせた。……………ん？」

「……………あ、いや、何でもないです」

頭を抱えてもだえているところを見事に目撃されてしまった。恥ずかしさで顔が真っ赤になる。

少年は何となく察しがついているのだろう、苦笑するだけで何も言わずに席に座ると、メモ用紙を一枚差し出してきた。書かれているのは、どこかの住所。

「なにこれ？」

「シュテルたちが今暮らしている場所だ。心配しなくても、本人たちに許可を取っている。どこで調べたかと疑われることはない」

「……………それは、どうも」

個人的には驚かせてみたかったというのもあったので、それはそれで残念に思う。

とにかく、善は急げだ。シュウはメモ用紙を受け取ると、すぐに席

を立った。

「お話ありがとうー！ とりあえずシュテルに会ってくるよー！」

「え？ あ、ああ……。地上まで送ろう！」

シュウの突然の行動に驚きつつも、少年はうなずく。すぐに少年も立ち上がって、シュウの先導を始めた。

閑静な住宅街にある、大きくも小さくもないごく普通のマンション。シュテルたちが住んでいるのはそんなマンションだった。周囲には同じような建物がいくつか並んでいる。

シュウはマンションの玄関に向かう。側の機会でクロノから聞いていた暗証番号を入力。すぐに自動ドアが開く。

ドアの奥は、少し広めのエントランスだった。目の前にエレベーターが二基あり、そのさらに横には階段がある。シュウはエレベーターに乗り込むと、住所に従って階数ボタンを押す。

すぐに目的の階に到着し、エレベーターから出てまっすぐの廊下を進む。すぐに左右に延びる長い廊下に出た。目の前は街の景色が広がっている。

廊下をさらに進み、突き当たりの部屋へ。表札を見ると、名前は何も書かれていない。

「1111で……合ってるよね……」

シュウは一度大きく深呼吸すると、震える指先でインターホンを押しそうとして、

「……挙動不審ですよ、シュウ」

背後からの声に、跳び上がるほど驚いた。振り向いた先にいたのはシュテルだ。左手には近くのコンビニのレジ袋。何か買い物をして行ったらしい。

「管理局から話は聞いています。そろそろ来る頃だろうと思っていました」

「あ、えっと……。うん」

しどろもどろになっているシュウにシュテルは首を傾げる。だが何も言わずにシュウの横を通ると、右手でドアを開けた。

「えいぞ。話は中ではしょう」

通されたのは、リビングらしき部屋。中央にテーブル、その三辺にソファが置かれ、もう一辺の奥にはテレビが設置されている。壁際にはいくつかの本棚など。

シュウはシュテルに促されるまま、ソファに腰掛けた。ふかふかのソファは高級感がある。

「コービーとコア、どちらがいいですか？」

リビングの隣の部屋、キッチンになっている部屋からシュテルの声。

「え？ えっと……」

「オレンジジュースやミルクなどもありますが。もちろん麦茶も。あとは紅茶や……」

「ま、待って待って！……ずいぶんとたくさんあるんだね」

「そうですね？……そうかもしれないですね」

それなりに来客は多いので、とシュテルは淡々とつぶやいた。それはつまり管理局の人が来るということだろうか。

「じゃあ、シュテルと同じもので。来客って、管理局の人とか？」

「ではもう夜遅い時間でもありますし、ホットミルクにしておきます。来客は管理局もそうですが、ナノハたちの方が多いでしょうね」

レンジの軽い音が聞こえてすぐに、シュテルは湯気の立つマグカップを二つ持ってきた。その一つをシュウの目の前に置き、もう一つを持ったままシュウの対面に座る。シュウは、いただきますと言ってからマグカップに口をつけた。

「ふう……。落ち着く……」

「いろいろと疲れたでしょう。巻き込んでしまってますみませんでした」

シュテルが深々と頭を下げる。突然のことにシュウは反応できない。シュウの沈黙を謝罪を受け取ったと勘違いしたのか、シュテルが続ける。

「管理局から私たちの事情も聞いているかと思います。この先、私と

関わることで先ほどよりも危険な目にあわせるかもしません」

すぐに理解する。シュテルが何を言おうとしているのかを。自分が聞きたくない言葉を言おうとしているのを。

いやだ。

「短い間でしたが、貴方と話をしている時間はとても有意義なものでした。ありがとうございます」

いやだ。

「きっとこれがお互いのためです。もう会わないように……」
「いやだー」

無意識にテーブルを強く叩いて立ち上がり、叫んでいた。シュテルがわずかに目を見開き驚いているが、知ったことではない。

「僕はシュテルとの話が楽しかった。シュテルと会うのが楽しみになってた。シュテルは、どうだったの？」

「……私も、楽しかったですよ。ですが……」

「なら、それで十分だ。僕はシュテルと会えて本当に嬉しかったんだ。それがこんな、訳のわからないことで終わるなんていやだ」

「ですが、私に関わるということは、こちらの……魔法の世界に関わるということですよ。今回以上に危険なことも必ず起きます」

「その時はその時だー」

また叫ぶ。聞いたシュテルはもう驚かない。ただ、少し目を細めてシュウを見つめてくる。

「僕はシュテルと友達になりたい。これが僕の本音。……まあ確かに今夜のことは怖かったけど、シュテルのことをよく知るいい機会になった」

「そういうものですか」

「そういうものです」

胸を張って言うと、シュテルが肩をすくめた。どうやらもう何も言うつもりはないらしい。そう察して、シュウは満足そうにつなずいた。席に座り直し、ホットミルクを一口すすめる。

「」の話をべつ切り出そうか考えていたのがばかみたいですね」

対面で同じようにミルクをすすりながらシュテルがつぶやく。バ

力だね、とシユウが同意すると、はい、とシユテルは小さくうなずいた。

「シユテル。ずっと言おうと思ってて言えなかったことがあるんだけど」

「はい。何でしょうか？」

「僕と、友達になってよ」

満面の笑顔でそう言う。普段なら言おうと思っていても恥ずかしくて言えなかった言葉だが、今日はなぜかすんなり出てきた。そのことにシユウ自身が少なからず驚いている。

シユテルはそんなシユウの様子をしばらく観察して。

そして、薄く微笑んだ。

「物好きな方ですね……」

そうかな、とシユウがはにかみ、そうですよとシユテルが笑う。

シユテルの笑顔を初めて見たシユウは、

笑っている顔も可愛いなあ。

そんなことを思っていた。

Side::Stern

時間も忘れてシユウと会話をしていると、いつの間にかシユウが船をこぎ始めていた。どうやら長く引き留めすぎてしまったらしい。

「すみません、シユウ。長話が過ぎました」

「……そんなことないよお……」

「……起きていますか？」

「……起きてますよお……」

これはだめだ、とシユテルはため息。静かに立ち上がると、シユウの側へ。軽く体を押すと、シユウの体は抵抗なくごろんとソファに横になった。そのまま整った寝息を立て始める。

「……そう言えば、シユウの自宅を知りませんね」

両親に連絡しなければきつと心配するだろう。だがシユテルはシユウの自宅のことは何一つとして知らない。シユウが寝てしまった今となっては聞くこともできない。

「仕方ありませんね」

シュテルはそつと部屋を出て廊下を歩き、物置から余っている毛布を取り出す。それをリビングへと持って行き、シュウの体へそつとかけた。今晚はもう泊めるしかないだろう。

「おやすみなさい、シュウ」

シュテルは小さな声で言うと、明かりを消してそつとリビングを後にした。

Side: Hero

「おっはよー…」

「ぐえー…」

お腹に強烈な衝撃を受け、シュウは覚醒した。勢いよく体を起こそうとしてソファから転げ落ち、そのままずっとくまる。思った以上に痛い。痛すぎる。

「何をしておるか、たわけ！ 普通に起こさぬか！」

「じゅめーん…」

痛みを堪えながら視線を上げると、二人の少女が何かを話していた。二人とも知っている顔だが、雰囲気は全く違う。シュテルと同じように。

「……フェイト……じゃなくて、レヴィ？」

「お？ ボクのこと知ってるの？」

「そっちは……ディアーチェ、だっけ。あ、王様？」

「……ディアーチェでよい」

ディアーチェはシュウを一瞥すると、興味がなさそうに視線を外した。そのまま台所へ行くこうとして、すぐに立ち止まる。

「……朝食は米とパン、どちらが良いのだ？」

「え？ どっちも好きだけど、米派かな」

「そっか」

そしてそのまま立ち去ってしまった。なぜ今朝食の話をはじめたのだらう。

といついより、今は何時でどいついつ状況だ？

「ねえ、レヴィ」

シュウに構わずにテレビをつけるレヴィに声をかけると、リモコンを持ったまま顔をこちらに向けてきた。

「今は……何時？」

「六時三十分！ もつすぐ朝ご飯！」

「……そっか、ありがとう」

完全に朝だ。雀も元気よく鳴くわけだ。いつの間にか太陽が昇るわけだ。女の子の家に一泊。何をしているんだろう、自分は。

「情けない……」

つぶやき、うなだれる。そんなシュウへと、お茶の入ったコップが置かれた。

「ど、どござ……」

今までの三人とは違い、見たことのない女の子が立っていた。三人よりも少し小柄で、おどおどと緊張しているようだ。

「ありがとう。えっと……。ユーリ、かな？」

「あ、は、はい……。えと、その……。失礼しました！」

大慌てて台所へと逃げていく。守ってあげたくなるかわいさだ。

「……ユーリに手を出したら王様に怒られちゃうぞー」

「いや、そんなつもりはないんだけど」

思わず苦笑する。ユーリから受け取ったお茶を飲み、ほっと一息。今更後悔したところでどうすることもできない。とりあえずこのまま流れに任せよう。

とりあえずはそう決めて、シュウはレヴィと一緒にテレビを見ることにした。

七時になってリビングのテーブルに朝食が並ぶ。白ご飯にお味噌汁、焼き魚と和風なメニューだ。並べていくのはシュテル。

「おはようございます、シュウ」

「あ、うん。おはよう。ごめんね、泊まっちゃって……」

「いえ、お気になさらずに。学校には間に合いますか？」

「まあ……。多少は遅刻しちゃうけど、大丈夫」

それを聞いたシュテルは、申し訳なさそうに顔を伏せた。慌ててシュウが手を振って言う。

「いや別にシュテルが悪いわけじゃないから！ 夜遅くに押しかけた僕が悪いんだし！ 本当に気にしないで！」

そう言っても、シュテルの表情は晴れない。少し重たい空気になってしまい、巻き込んでしまった他の三人にも申し訳ない。そう思っていたのだが、

「レヴィ、その醤油を取れ」

「ふあい」

「口を空にせぬか」

「あ、ディアーチエ。私も使いたいです」

「うむ。では先に使うといい」

おそろくいつも通りなのだろう。何とも思わないのかと三人を眺めていると、

『うぬらの問題だ。うぬらで解決せい』

頭の中でディアーチエの声が響いた。これが念話というやつなのだろう。便利なものだ。

「シュウ」

「あ、はい」

シュテルに呼ばれ、背筋を直す。なぜかひどく緊張してしまう。

「お詫びにはなりません……。せめてご自宅までお送りします。貴方の家族には私から説明しますので。魔法のことは伏せさせてもらいますが……」

「いや、大丈夫だよ。必要ない」

「そういうわけにはいきません」

これは納得しそつにないな。

内心で苦笑。本来に来てもらう必要性はないのだが、これを断ってもまた別の償いを探し始めるのだろう。だったら一緒に来てもらうのもいいかもしれない。自分だけがシュテルの家を知っているというのも不公平だと感じてもある。ちょっといいだろう。

「じゃあ……お願いします」

「はい」

そこでやっとシュテルは顔を上げた。

昼食後、二人は早速シュウの家へ向かう。学校の方はすでに諦めているので急ぐこともしない。しばらく歩き続け、さらに細い道を通り、その建物は見えてきた。

「あれ」

「……あれ、ですか？」

シュテルの声に困惑の色が混ざる。それも当然だとシュウは思う。

二階建ての小さなアパート。しかも老朽化が進み、人が住んでいることすら疑ってしまうほどだ。事実、このアパートには現在シュウともう一組しか住んでいない。

シュウはシュテルを連れて外壁の古びた階段を上がる。一歩歩くごとに甲高い金属音が小さく響く。そして上りきって廊下に入ってしまうの部屋、二一号室がシュウの部屋だ。鍵を開けて、中に入る。

「何もないけどごんぞ」

「お邪魔します」

シュウが続いて入ったシュテルが、すぐに絶句した。シュウは苦笑するしかない。

玄関からすぐに短い廊下があり、そこに流し等が備え付けられキッチンを兼ねている。小さな廊下の奥には六畳一間。奥の壁は大きな窓になっていて、一応ベランダがある。部屋の中央にちゃぶ台があり、隅には座布団が積まれている。押し入れもあり、そこには布団とシュウの少ない私物が収納されている。

かなり寂しい部屋だ。テレビもなければ本棚やクローゼットもない。本当に寝て起きてご飯を食べるためだけの部屋。

「書類上はここで親と二人暮らし」

「書類上、ですか？」

「うん。本当は一人暮らし。いろいろあって捨てられたも同然だから」

衝撃的なことを何でもないことのように言う。目を見開いて固

まっているシュテルに笑いかけ、気にしないでねと言つ。自分自身の生活に慣れているので何とも思っていない。

シュウは押し入れから学校の荷物と制服を取り出すと、そこでシュテルの方を見る。すぐに意図を察してくれたようで、シュテルは扉の方へと向いてくれた。手早く着替えを済ませ、荷物を持つ。

「それじゃあ、行ってくるね。一緒に来てくれてありがとう」
「いえ……」

再びシュテルを伴って自宅を出る。しっかりと鍵を閉める。金属音でうるさい階段を下りて、シュウは笑顔で後ろのシュテルへと振り返った。

「じゃあ、行ってきます！ また放課後に」

「はい。お気をつけて」

うん、とシュウは笑顔で走り出す。そしてすぐに、待ってくださいというシュテルの声に引き留められた。

「ん？」

「今日は夕食をカレーにしよつと思ひます。よければシュウも……一緒にどうですか？」

シュウは首を傾げる。なぜ誘ってくれるのか分からない。妙な同情でもされてしまったのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになるが、

「……シュテルの手作り？」

「……どこにこだわるんですか。まあ、そうですね」

シュテルがうなずくのを確認して、シュウは嬉しそうに破顔した。

「行く！ 食べたい！」

「はい。では放課後に」

「うん…… 楽しみにしてる！」

そう言つて走り出す。新しい楽しみができた。今日は……いや、今日も良い一日になりそうだ。

S i d e e …… S t e r n

「ただいま戻りました」

「シュテルるんおかえりー！」

シュテルが帰宅すると、レヴィが笑顔で出迎えてくれた。戦闘衣服を着込んでいる。

「……管理局ですか？」

「うん。今日はボクが行ってくるねー！」

どこか嬉しそうに言うレヴィ。「この子は相変わらず双方の思惑を一切気にしない。それがいいところでもあるのだが。」

「気をつけて。今日はカレーにしますよ」

「ほんとにつ？ やったー！」

嬉しそうにはしゃぐレヴィ。そしてそのまま家を出て行った。上機嫌な旗歌が聞こえてくる。

「……ただし、少し辛めのカレーになりますよ」

「いやシュテル、それは先に言ってやれ」

一部始終を見ていた王がため息をつく。シュテルは素知らぬ顔で、「蜂蜜を用意しておきます」

「うむ。ところで、急にどうした？」

王と会話しながらシュテルはキッチンへ。材料の有無の確認をしながら、必要なものをメモ帳に書いていく。

「まあ少し。今日は夕食にシュウも来ますが、構いませんか？」

「む……。まあいいだろう」

仕方ないといった様子だが、王もシュウのことを嫌っていないことは分かっている。でなければ、わざわざ朝食をシュウに合わせるようなことはしないだろう。

「シュテルに友達と聞いて我が耳を疑ったが……。良い変化のようでは何よりだ」

王のそんな言葉が小さく聞こえてきたが、シュテルは聞かなかったことにした。

シュテルはシュウの顔を思い浮かべながら、さてどんなカレーにしたものか、と考える。その表情はいつもの無表情ではあったが、どこか楽しげにも見えるものだった。

第二話 食事

シュテルに見送られて学校に到着した頃には、すでに二時限目が終わろうとしている時間だった。校門をくぐった時に警備員がかなり驚いた顔をして声をかけてきたものだ。

「どうしたんだ、西崎君。いつもはかなり朝早いのに……」
「いろいろありまして……」

苦笑してそう答えると、そうかがんばれ、ととても心配そうな表情をしていた。何か勘違いされているような気がするが、説明することもできないので気にせず校舎へ向かう。教室にたどり着いたのは、二時限目が終わるチャイムが鳴ってからだだった。

教師がすでに退室していることを確認して、シュウは教室の扉を開けた。何人かがシュウに気づき、驚いた顔をしながらも挨拶をしてくる。それに一つ一つ丁寧に返し、シュウは窓際にある自分の席に向かった。

席について、ふう、と一息。何人かの友人から声をかけられたが、シュウは校門と同じようにいろいろあって、で全て済ませた。疲れているのを感じ取ったのか、友人たちはすぐに離れていく。

三限目まで寝よう……。

ソファで寝てしまったためか、体の節々が痛い。疲れが取れていない。少しでも休もうと思って机に突っ伏したところで、

「西崎君」

声を、かけられた。

朝に聞いていた声だが、雰囲気の違い。顔を上げると、高町なのはがそこにいた。今までほとんど会話らしい会話をしたことがなかったのに、どうしたのだろうか。

ああ、考えるまでもなかった。

昨日のことだと容易に想像できる。

「あの、昨日は大丈夫だった？」「ごめんね、巻き込んだじゃって」

「いやいや、気にしてないよ。だから高町さんも気にしないで」
「うん……」

うなずいたものの、未だになのはの表情は晴れない。どうしたものかと考え、助けを求めてなのはの席にいるであろうなのはの友人たちを見ようとして。

周囲が静かになっていることに気がついた。視線が自分たちに注がれている。当然なのはの友人たちも自分たちを驚いたように見ていた。

「……えっと……」

ほとんど会話したことがない組み合わせ、しかもなのはが自分に申し訳なさそうに謝るといっておまけ付き。頭の中で警鐘が響く。これはまずい。

事態を打開するために口を開こうとしたところで、

「ちょっと、なのはは何をしたのよ……」

なのはの友人、アリサの怒声でシユウの頭は真っ白になる。

だめだ、もういろいろだめだ。帰りたい、今すぐ帰りたい。

アリサを先頭にしてなのはの友人たちが集まってくる。ほとんど会話をしたことがないのだが、名前は覚えている。フェイト、すずか、はやてだ。

「アリサ、落ち着いて。事情はあとでちゃんと話すから」

そう言ったのはフェイトだ。この言葉からフェイトも魔法の関係者だったことを思い出す。

「そっだよ、アリサちゃん。こいで騒ぐと西崎君の迷惑にもなるから、ねっ」

「ほら、みんな見てるよ？ とりあえず戻るで？」

すずかとはやて。どうやら全員が魔法の関係者、もしくは魔法を知っていると判断していいのだろう。

「ああ、もう、分かったわよー！ とりあえずこいつもお昼一緒にさせるから、二人は納得いく説明をしなさい」

「うん、うん」

なのはが戸惑いつつもうなずく。つもりこれは、自分も一緒になの

はたちと昼食を取れということなのだろう。本来なら光栄だと思うところだが、事情が事情だ。

……帰りたい……。

心の底からそう思いつつ、

「返事はー」

「はい……了解……」

「ここで嫌だと言える勇氣はさすがになく、シユウは渋々うなずいた。

「なるほど、事情は分かったわ」

昼休み、校舎の屋上。そこでシユウはなのはたちと昼食をとっていた。なのはたちの昼食風景を眺めながら、自分は何をやっているんだろうと考えてしまう。

今はなのはとフェイトからアリサとすずかに事情を説明してもらっているところだ。シユウ自身は巻き込まれた自覚はあっても口ストロギアなどに関してはほとんど知識がないため、二人に完全に任せられている。

頼りになるなあ。

そう思うと同時に、昨日から女の子に頼りっぱなしだという事実になんざ少しばかり落ち込んでしまう。どうにかしなければならぬ。どうにもならないが。

「あたしたちも魔法のことを知ったきっかけは巻き込まれたことだけだ……。あんたも災難ね、西崎。そうそう滅多にないことらしいのに」

「まあそのおかげで、シユテルたちのことをよく知ることができたし、僕にとっては良いことだったよ」

「シユテル……って、なのはちゃんによく似た子だったっけ？」

そう聞いたのはすずかだ。なのはがうなずく。

「うん。西崎君はシユテルと知り合いだったみたいで……。お互いにすごく驚いた顔をしたよね。私もびっくりしちゃったけど」

「いやあ、あれは衝撃的だったね。魔法って。友達が魔法少女って。

何のアニメだ」

「あなたの言いたいことはよく分かるわ……」

苦笑しつつアリサがうなずく。当人であるのはとフェイト、はやては複雑そうな表情だ。

「シュテルとはまた会った約束とかもしてるし、また魔法関係で何かあったらよろしくね。……女の子に頼るのは男として情けないけど」

「それは諦めるしかないな。リンディさんとかに聞いて、魔法の資質でも調べてもらったら？　もしかしたらあるかもしれへんで」

「ないってさ」

「確認済みやったか」

アースラに行った時に最初に確認されたことだ。以前民間人を巻き込んだこともあり、少し特殊なシステムを組み込んだ結果だったそう。魔力を持っていない人間は入れないはずだったとか。だが調べてみてもやはり魔力など見つからなかったため、結界の方に不備があったのだろうということになっていた。

あの時はなすがままの状態だったので言われていることも理解できていなかったが、今にして思えば本当に悔しいとも思う。少しでもあればシュテルを手伝えるかもしれないのに。

「ないもんは仕方ないなあ……」

「そうだね……。まあ、今後ともよろしく、ということだ」

苦笑しつつなのはたちに言う。なのは、フェイト、はやての三人は笑顔でうなずいてくれた。

「魔法のことだとあたしたちはちょっと手伝えないけど、なのはたちに言いにくいことがあったら言いなさいよ。力になってあげるから」

「うん。もう友達だしね」

アリサとすずかも笑顔で言う。どうにも一人だけの秘密だと苦しい気持ちも少しはあったので、魔法関係以外の人と話せることができるといってはなかなか大きい。シュウは心から感謝して、よろしくとうなずいた。

「AJJNDP……」

話が一段落したところで、なのはが口を開く。なのはの視線はシュ

ウの手元に注がれている。

「お昼ご飯は……それだけ……？」

シュウの手には、ビニール袋に入ったパンの耳。当然ジャムやマーガリンといったものもない。揚げパンというわけでもなく、本当にただの食パンの耳だ。

「うん。知り合いのパン屋さんからもらったんだ。タダで」

シュウの自宅の側にある商店街では、なぜかシュウは有名になっている。いつの間にかなので自分でもよく分らないが。だがこうして貴重な食料を確保できるのはありがたい。

「お弁当は……？ 作ってもらえないの？」

「あ………。できれば触れてほしくないかな？」

泣き笑いのような表情を浮かべるシュウ。それを見たのはは、ただ黙ってうなずくだけだった。

放課後。シュウは学校を出て、さてどうしようかと途方に暮れた。シュテルから夕食に誘われはしたが、いつものようにして落ち合つのが決めていない。かといって自分からシュテルの家に訪ねるのも、なんだか催促しているようで気が引けてしまう。シュテルがその程度のことを気にしないとは思いつつも、もし嫌われたらと思うと怖くて行動できない。

とりあえずシュウはまっすぐに自宅に帰る。うるさい階段を上り、自宅の扉を開けようとしたところで、

「おかえりなさい、シュウ」

廊下の奥から声をかけられ、跳び上がるほど驚いた。慌ててそちらへと視線を向けると、文庫本を片手に持ったシュテルが立っていた。シュウの姿を確認したシュテルは、文庫本を閉じてこちらへと歩いてくる。

「シュテル……。こんなところで、なにを……？」

「今日のやるべきことは終わったので、シュウを迎えに来ました。自宅を教えてもらったことですし」

いや、そついう意味じゃ……。

なおも口を開こうとして、しかしシュウは苦笑とともにため息をついた。せつかく来てくれているのに、それを責めることなどできるはずもない。

「まだ急がないよね？」

「はい」

「じゃあ良ければどうぞ」

シュウはそう言って、自宅の扉を開けた。

ちゃぶ台に麦茶が満たされたコップが二つ。一つはシュテルの前に置き、もう一つは自分の前に置く。シュテルは、いただきますと言いつつ少しづつ麦茶を飲んでいく。

「じゅめんね、家にはそれしかなくて」

「いえ、お構いなく」

そうは言われても、シュテルの家を訪問した時は朝食を出してもらっている。そして今から夕食までご馳走になるのだ。正直申し訳ない気持ち強いのだが、だからといってどうすることもできない。せめてお茶請けなどでもあればよかったのだが。

シュテルの対面に座り、シュウはまじまじとシュテルを観察する。ちびちびと麦茶を飲んでいたシュテルはそれにすぐに気がつき、小さく小首を傾げた。

「何か？」

「え？ えっと……」

可愛くて見ていたなんて口が裂けても言えない。言えば確実に呆れられる。ため息をつくシュテルの姿が容易に想像できる。

シュウはわずかに慌てた後、

「本当に似てるな、て思ってただけだよ」

「……ナノ八ですか？」

「うん、そう」

「ナノ八の姿を借りたのですから当然ですが……」

「いやあ、分かってはいるけど……。今日はちょっとした理由でなのはたちとお昼ご飯を食べたから、余計にね」

なるほど、とシュテルはまた麦茶を飲む。シュウは冷や汗をかきながら、「ごまかせたかなと内心で安堵した。

「ナノハと食べたのですか」

不意にそんなことをシュテルが言う。シュウは首を傾げながら、そつだよと肯定すると、

「そつですか」

会話が終わってしまった。ただ、なぜかこれ以上この話題に触れてはいけない気がする。とりあえずは気にせず、シュウはシュテルの視線から外れて着替えをすることにした。

「……見ないでね？」

「貴方は私をどう思っているのですか」

「あはは、冗談だよ」

笑いながら、シュウは手早く着替えを済ませる。終わった頃にはシュテルも麦茶を飲み終えていた。

「では行きましょう。ただレヴィが出かけていますので、待ってもらつことになると思います」

「ああ、うん。もちろん大丈夫だよ」

シュウはシュテルと共に部屋を出ると、しっかりと鍵を閉めてシュテルの家へと向かう。シュテルが隣を歩くが、お互いが無言。どうにも奇妙な沈黙だが、不快な沈黙でもない。

シュテルたちが暮らすマンションにたどり着く。エレベーターで上の階へと上り、すぐにシュテルたちが暮らす部屋にたどり着いた。

「エンヤ」

「あ、うん……。お邪魔します」

シュテルに通されて、部屋の中に。前回と同じくリビングへと案内される。そこには読書をしている者とテレビを見ている者の二人がいた。ディアーチェとユーリだ。

「む……」

先にディアーチェがシュウに気づき、視線を送ってくる。シュウがわずかに緊張した面持ちで、こんにちはと言つと、ディアーチェはわずかに苦笑してみせた。

「よく来た。……なぜ緊張している？ 朝に会ったばかりであるう
が」

「まあ、うん。確かにその通りなんだけど……。なんでかな？」

我が知るか、とディアーチェは苦笑のまま言って、本を閉じて席を
立った。テーブルに本を置き、キッチンへと向かう。

「何を飲む」

「え？ あ、いや、お構いなく……」

「何を飲む」

全く同じ言葉で再度聞かれた。これは答えなければ同じことを繰
り返されるのだろう。シュウは少し考え、

「じゃあ、麦茶で」

「……貴様が良いのなら構わぬが」

どこか納得のいっていない表情でキッチンへと消える。シュウは
頬を指先でかきながら、怒らせたかなと少し不安になった。

「大丈夫ですよ、シュウ。とりあえずは座ってください」

「あ、うん」

シュウの心の内を察してシュテルがそう言ってくれる。シュテル
がそう言うならきっと大丈夫なのだろう。シュウは促されるままソ
ファに座る。

「あ……」

そこでようやく、ユーリがシュウの存在に気がついた。ユーリはし
ばらく唾然とした後、慌てて立ち上がってキッチンの方へと消える。
顔を真っ赤にしていたが、大丈夫だろうか。

「あれ？ もしかして僕、嫌われてる？」

「いえ、ユーリは人見知りするだけですよ」

「それなら……いいんだけど……」

ユーリとも朝に会っているので人見知りをすると何となく分
かってはいたが、「こゝまではっきりと避けられると少々傷ついてしま
う。本当に何かしてしまったのではと考えてしまっが、シュテルの様
子を見るにそれはなさそうだ。いつものことだとばかりに、無表情で
テーブルの上を片付けている。

程なくしてディアーチェが戻ってきた。手にはお盆を持っており、麦茶の入ったコップと湯気の立つコーヒークップが四つ。そのディアーチェの後ろには、その背に隠れてこちらをうかがい見るユーリの姿。

「ほれ、受け取れ」

「あ、ありがとう」

ディアーチェからコップを渡され、すぐに受け取る。ディアーチェはその後にテーブルにカップを並べていく。その一つはシュウの前にも置かれた。

「え？ あ、あの……」

「いらぬなら残せ。その時はレヴィイが飲むであろうよ」

「いや、さすがに残り物を飲ませるわけには……。いただきます」

麦茶のコップを置き、温かいカップを手取る。満たされているのはカフェオレらしい。他の三人ののを見ると、ユーリがシュウと同じカフェオレで、ディアーチェとシュテルはブラックコーヒーのようだ。

「レヴィイと連絡が取れました。あと一時間ほどで戻るそうです」

「そうか。ではこれを飲み終えたら準備を始めるとしよう」

「はい。ああ、シュウはゆっくりしておいてください」

微妙に腰を浮かせたシュウの機先を制してシュテルが言う。シュウは、いやでも、と首を振って、

「」馳走になる立場だし、手伝えることがあれば……」

「お誘いしたのは私です。貴方はお客様の立場ですよ。のんびりしていきましょう」

そう言いながら、カップを傾けるシュテル。シュウはまだ納得できずに複雑な表情でカフェオレを飲む。ほどよい甘さがシュウの好みだ。カフェオレのおいしさに思わず頬が緩むが、それでも納得できない気持ちに変わりはない。

それを察したのだろう、シュテルが小さな声で、仕方がありませんね、とつぶやいた。それはシュウには聞こえなかったのだが。

「そう言えば、王。明日の買い出しがまだでしたね」

突然そんなことを言うシュテル。ディアーチェはわずかに怪訝な表情を見せたが、それは一瞬のことだった。すぐにシュテルの意図していることを察して、ああ、とうなずく。

「そうであったな。明日は我ら全員用事がある。故に買い出しをしておかなければならなかったのだが……。さて、どうするか」

ディアーチェがちらりと視線をユーリによこす。ユーリもすぐに意図を察したが、不安そうな表情を見せるだけだった。

『ユーリ。シュウなら大丈夫です。私が保証します』

『……シュテルがそう言うなら』

瞬時に交わされる念話。シュウは不思議そうな表情で三人の様子をつかがうが、当然念話は聞こえない。

「じゃあ、わたしが買い出しに行きます。でも何を買えばいいのでしょっつ？」

ユーリのそんな言葉。シュテルは念話で礼を言いつつ、そうですねと考える仕草をする。

「今から決めるのも時間がかかりますし……。すみませんがシュウ。お願いできますか？」

「……<?」

まさかここで自分に話しが振られるとは思っておらず、間抜けな声を出してしまっ。

「すみませんが明日の夕食の買い出しをお願いします。メニューはそうですね……。せっかくなのでシュウが決めてください。貴方の好きなもので構いませんよ」

「僕の好きなもの？」

「はい。明日の夕食までに貴方の家に届けに行きます」

シュウにとってはとてもありがたい申し出だった。そう思うが、そこまで好意に甘えていいのかとも思っってしまう。

「今から何を作るかを考えて買い物をすると思に合わないだけです。貴方がメニューを提供する代わりに私が夕食を提供する。今日の夕食をご馳走する代わりに買い出しに行ってもらっ。これでどうでしょっつか？」

なんだかかなり無理矢理な気もする。明らかにこちらが得ばかりしている。だがこれ以上反論を言っても聞いてもらえない気はしない。シュテルは先の言葉の後にすぐに立ち上がって、財布と買い物袋を用意し始めていたためだ。

シュテルは手早く準備を終えると、財布と買い物袋をユーリに渡した。

「ではよろしくお願いします。シュウも。お気をつけて」

「いまいち納得はできないけど……。うん。行ってくる」

実際に口に出してみてもシュテルは素知らぬ顔だ。自分の席に戻り、コーヒーを飲み始める。

シュウは大人しくシュテルたちの好意に甘えることとして、ユーリに促されてその場を後にした。

シュテルたちの住まうマンションから一番近いスーパーにシュウは来ていた。先導するのはユーリだ。シュウはこの辺りの土地勘はあまりないため、ユーリだけが頼りになる。

スーパーに入って、シュウはすぐに買い物かごを手に取った。のんびりしているとユーリが全ての荷物を持ってしまいそうだ。シュウの意図を察したのか、ユーリは笑顔で礼を言った。

「では、何を買いますしょうか？」

「どうしようか。僕の好物でいいって言われても、好き嫌いであまりないからなあ……」

正確に言えば、引っ越してきてから贅沢なことは一切していないだけだ。食事もそれに含まれるため、いつの間にか自分の好き嫌いですら分からなくなっている。確か、以前はハンバーグやカレーが好きだったような……。だが、この二つはシュテルとの今までの会話で、マテリアルズの誰かの好物でもあることは知っている。誰のかまでは聞いていないが。

この二つを除くととなると、と首をひねる。やがて出てきた答えは、

「唐揚げ、かな……」

「唐揚げ！ いいですね」

「味噌汁やおにぎりとかもおいしいよね」

「……シユウ。」

「煮魚とかも捨てがたいし、味噌煮もいいなあ。お好み焼きとかも好きだ」

思い出していくとどんどん出てくる。料理のイメージを浮かべるだけで、よだれが出てきそうだ。どれもが最近食べていない。味噌汁やおにぎりはともかく。

「まあ、最初に思い出したもので唐揚げでいい」

「ですね」

どことなく安堵の表情を浮かべるユーリ。二人は必要なものはと意見を交わしながら、スーパーの奥へと入っていった。

唐揚げの材料とその他諸々の食材を買い終えたシユウとユーリは、そのまま寄り道せずにマンションへと戻る。のんびりしていたつもりはないのだが、マンションを出てからもう一時間が経とうとしている。

「もうレヴィは帰ってるかな？」

「どうでしょう。レヴィはいつも連絡された時間から三十分前後しますから」

「じゃあかなり待たせてしまっている可能性もあるのか」

一時間までに帰ってこられたことに安堵していたが、もしそうなら急いだ方がいいかもしれない。もっともあとは一直線の廊下だけなので今更のことではあるが。とりあえず少しでも走ろうとしたところ、

「あれ、シユウにユーリ！ ただいまー！ じゃなくて、もしかしておかえりー？」

背後からの声に振り返ると、何とも目のやり場に困る衣服を着たレヴィが笑顔で立っていた。ところどころに擦り傷などあるのが少し気になる。

「おかえりです、レヴィ。わたしたちも買い出しから帰ってきたところですよ」

「買い出し！ ボクも行きかけた！」

「そうですね。今度一緒に行きましょう！」

「おー！」

なにやら二人で盛り上がっている。シュウは一人蚊帳の外だ。いきなりこんなところで買い物計画を練り始めた二人に苦笑し、シュウは一人きびすを返す。そして、

「今のうちに飯にしておまおう」

ぼそりと言。走る。

「え！ それひどい！ ちょっと待ってよー！」

それをしっかりと聞き取ったレヴィが慌ててシュウの後を追いかけて、ユーリも楽しそうに笑いながらその後続いた。

「なるほど、唐揚げですか」

帰宅後、シュテルはシュウから買い物袋を受け取り、中身を冷蔵庫など適切な保管場所に素早く入れていく。その動作が早すぎて手伝うこともできない。仕方なくシュウはそのシュテルの行動を見ながら、うなずいて答えた。

「うん。だめだったかな？」

「いえ、問題ありませんよ。……唐揚げなら大丈夫でしょう」

シュウが首を傾げる。シュテルはそれにすぐに気がつき、こちらの話ですと手を振った。

「では夕食の準備をします」

「分かった。手伝うことは？」

「いえ、あとは盛りつけるだけなので……。そんな悲しそうな顔をしてないでください。では盛りつけ終えたものから運んでもらえますか？」

「了解！」

よつやく仕事をもらえたことに安堵しつつも、この程度しかないのかとため息も同時に出てしまう。シュテルたちは気にするなと言うが、これでは本当に申し訳ない。

とりあえず今はそれよりも、とシュウは思考を中断して、よつやく

与えてもらえた仕事を始めた。

……それもすぐに終わったが。

「いただきますー！」

部屋で元気な声が響く。声の主はレヴィで、言った直後にスプーンを驚づかみ、カレーを朽ちに運ぶ。その様子が幼く見えて少し可愛いと思える。

自分を含む他四人は手を合わせて落ち着いた様子でいただきますと言った後、シュウもカレーを口に運ぶ。だが口に入れる前に、

「んー……」

声にならない悲鳴が聞こえてきて、思わずシュウは手を止めた。声のした方向を見ると、レヴィが口とのを抑えて苦しそうにしている。そのあまりの様子にシュウは青ざめてしまつが、

「やはりだめか」

「言わなければと思ったのですが」

シュテルとディアーチェ、ユーリは落ち着いていた。シュテルがあらかじめ手元に置いてあった冷たい水が満たされたコップをレヴィに渡し、ディアーチェはその間にレヴィのカレーの側に蜂蜜を置く。それだけで何となく理由は察することができた。

「ちよ、ちよっとー！ 辛いよこのカレーー！」

「カレーですから」

「カレーだからな」

「カレーですもの」

シュテル、ディアーチェ、ユーリがざらりと受け流す。それは分かっているけどまだ何かを言おうとしていたが、ディアーチェに蜂蜜をたっぷり入れてもらうことで納得したらしい。

「うんー！ おいしいー！」

嬉しそうなレヴィの表情。ディアーチェは苦笑して、

「……明日のレヴィの夕食は蜂蜜ご飯だ」

そんなことを小声でつぶやいていた。さすがに本当にしないとは思つが。

「すみません、シユウ。お騒がせしました」

シユテルがシユウに頭を下げてくる。シユウはいやいやと手を振って、

「見ていて楽しいよ。賑やかな晩ご飯は久しぶりだから、特に」

「ん？ シユウの家はそうじゃないの……むぐ」

『たわけ。シユテルから聞いているだろう。黙っておいてやれ』

『あー、そうだった。ごめん』

そんな念話が交わされていたが、もちろんシユウには分からない。ディアーチェがレヴィの口を手で塞いでいるだけのように見える。その後、手をどかし、レヴィのカレーで汚れた手を見てため息をこぼしていた。

賑やかだな、と何となく自分も楽しい気分になりながら、シユウはカレーを口へと運ぶ。シユテルがこちらをじっと見ているのは気のせいだろうか

「……………ん。おいしー」

シユウが勢いよく食べ始めると、シユテルは、お口に合って良かったですと薄く微笑んだ。

その後もレヴィの笑い声、ユーリの忍び笑い、シユウとディアーチェの呆れ声などが混ざり合い、賑やかな夕食の時間になっていた。シユウも時折会話に混ざりながら、久しぶりの賑やかな食事に自然と頬が緩み、笑顔になっていた。

食後。レヴィは風呂へ、ユーリとディアーチェはリビングで何かしらの相談、そしてシユウとシユテルは二人並んで洗い物をしていた。シユテルが泡を洗い流し、シユウがタオルでそれらを拭いていく。適当とすら思えるほど短い時間で洗い終わっているのに、皿は新品のようにきれいになっている。

きれいになった皿たちを感嘆の表情で眺めていると、隣から呼ばれた気がして振り返った。

「あれ？ 呼んだ？」

「はい。呼びましたよ」

いつの間にかシュテルの担当は終わっていた。あとは全て拭きだけになっている。

「カレーは……どうでしたか？」

タオルで食器を拭き始めながらシュテルが問ってくる。一見無表情に見えるが、どことなく不安そうにも見える。シュウはどうしてこんな表情をするのだろうかと思議に思いつつも、笑顔で言った。

「おいしかったよ。本当に。今まで食べたカレーの中でも一番おいしかった！」

「そう、ですか。ありがとうございます」

小さな安堵の吐息。どうやらシュテルは自分のことで結構気を遣っていたらしい。そのことに悪いとは思いつつも、少し嬉しくも思う。

「できればいいから、また呼んでほしいな」

そんなことをだめで元々で聞いてみると、シュテルは何でもないとこのように、

「あらかじめ連絡さえいただければ、いつでも来ていただいて構いませんよ」

シュウが驚きに目を丸くする。手から皿を落としそうになり、慌てて支え直した。

「本当……？」

「はい。シュウさえ良ければ、ですが」

「い、いやいや！ 頼むのは僕だし！ じゃあ……また連絡、するね」

「お待ちします」

かちやり、とシュテルが食器を置く。ふと気がつくと、シュテルがほぼ全ての食器を拭いていた。シュウは慌てて手に持っている食器を拭き終える。そして時計を見ると、もう夜八時になろうとしている。

「もうこんな時間ですね。……家まで送ります」

「いや、大丈夫だよ。気にしないで」

思わず苦笑。確かに自分よりもずっと頼りになるし強いのだろうが、夜中に女の子に送ってもらおうというのは、男としてはとても情け

ない。

「じゃあ、ディアーチェ、ユーリ。帰るよ。レヴィにもよろしく」

「む。そうか。気をつけてな」

「また来てくださいね」

隣の部屋から二人が手を振ってくれる。そのことがとても嬉しくて、シュウは破顔しつつ自分も手を振った。

玄関まで来て扉を開ける。振り返ると、シュテルがいつもの無表情でシュウを見つめていた。

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だって。心配性だね」

「……巻き込んだ前例がありますから」

「あー……」

まだ気にしているのかと少し驚き、同時に不安になる。今回のこれも、それを気にしてのことだろうか。確かめようとも思ったが、肯定されることが怖いので結局聞けずのため息をついただけになった。

「それじゃあ……。おやすみ、シュテル」

「はい。おやすみなさい、シュウ。また明日」

「……！ うん、また明日！」

シュテルから自然と出たまた明日という言葉にシュウは満面の笑顔を浮かべると、手を大きく振って廊下を走っていった。

Side:Stern

シュウを見送った後、シュテルは再びキッチンに立つと、明日の朝の準備を始める。シュウが買ってきてくれた材料を使っていく。

「ふむ。明日の分か」

背後から王の声。シュテルは振り返ってうなずいた。

「はい」

「……とりあえず五人分はあるのだな？」

「はい。五人分作りますか？」

「うむ。せっかくだ、明日は散策にでも出かけよう」

王はそう言つとりビングに戻っていく。シュテルは唐揚げの準備

を再開しながら、テーブルに置かれたものを見る。

少し前から使い始めた自分たちの弁当箱。自分が赤色、王が紫、レヴィが水色、ユーリが白色の弁当箱だ。そしてそれらと一緒にもう一つ。

新品の黒色の弁当箱が、自分たちのものと一緒に並んでいた。

第四話 お弁当

シュテルたちの家で夕食をご馳走になった翌日。シュウは目覚まし時計の音で目を覚ました。時計を叩いて音を止め、時間を見る。午前七時。いつも通りだ。

起き上がって、ゆっくりと伸びをする。流しの棚へと向かい、そこから昨日のパンの残りを取り出す。租借しながら着替え、すぐに学校の準備は終わった。

「ふう。」「ちそうさまでした」

パンを食べ終え、袋はゴミ箱へ。腹が満たされたとは言えないが、食べない日の方が多いので満足はできる。

「さて、行くところかな」

準備も整え朝食も終えた。自宅にいてもやることがないので学校に向かうとする。荷物を持って扉を開けようとしたところで、インターホンの音が鳴った。

「……………」

最初、何の音が一瞬分からなかった。それほどこの音は久しく聞いていない。ここを訪ねてくる人などほとんどいないからだ。シュウは警戒しつつそつと扉を開けて、

「おはようございます、シュウ」

シュテルの顔を見て、啞然と口を半開きにして固まってしまった。たつぷり十秒間はシュテルを凝視したまま硬直して、その直後にはつと我に返る。

「ど、どつしたのっ？ こんな時間にー」

そう問いかけると、シュテルは申し訳なさそうに頭を下げた。

「そうですね。朝早くにすみません。迷惑だとは思いましたが……」

どうやらいらぬ誤解を与えたいらしい。シュウは用件を聞いたつもりだったのだが、来訪の時間を咎められたのだとシュテルは判断したようだ。シュウは慌てて首を振って言う。

「いや別に怒ってるわけじゃないから！ 単純に驚いただけ！ それ

で、どうしたの？」

そうですか、とシュテルはわずかに安堵の表情を見せる。だがそれは一瞬で、またいつもの無表情に戻ると小さな包みを差し出してきた。

「どうぞ」

「え……？ なに、これ……？」

「ただのお弁当ですよ」

そっか、とシュウは受け取って、その包みをしばらく眺め、そしてすく、

「お弁当っ？ なんで？」

思わず大声を出していた。

「ナノハから昨日の昼食のことを聞きました。差し出がましいとは思いましたが……。必要なければ、どなたかご友人にでも差し上げてください」

そう言ってきたびすを返そうとするシュテル。シュウは慌てて呼び止めて、振り返ったシュテルにおずおずといった様子で問う。

「い、いいの……？ 本当にもらっても？」

「ええ、構いませんよ。もとより貴方のために作ったのですから」

「お、おお……。じゃあ……。ありがたくいただきます」

お気になさらずに、とシュテルは平坦な声で答え、そのまま立ち去っていく。本当にこれを届けにきてくれただけらしい。シュウはシュテルから手渡された包みに視線を落とし、情けなく相好を崩した。

「シュテルが僕のために……。どうしよう、すごく嬉しい」

もちろんシュテルからすれば深い意味はなかったのだろうとは思う。ただそれでも、弁当を作ってもらったということそのものが嬉しく、思わずその場で小躍りぐらいしてしまいたくなる。シュウは大事そうにその包みを荷物に加えると、スキップしそうになりながら家を後にした。

「おほほ……っ……っ……っ？」

教室に入ってくるクラスメイトのうち、シュウと親交のあるものは皆同じ反応を示した。シュウがこの輪にも入らずに一人でいる場合のほとんどが寝ているか読書をしているかなのだが、この日は机に頬杖をつきながらにやにやと笑っていたためだ。これほど機嫌の良さそうなシュウを誰も見たことがないだろう。

友人たちは何があったのか聞くべきかと考えたが、触らぬ神にたたり無しという判断のもと、そそくさと自分の席に向かっていく。誰も話しかけようとはしない。

授業のチャイムがなって教師が入ってきた時も、シュウの様子に目を丸くしたものだ。

昼休み。待ちに待った昼休み。シュウは誰よりも早く道具をしまい、弁当箱を取り出して、目を輝かせながら開けようとしたところで、「シュウ。ちょっと来なさい」

アリサに呼び出された。シュウは待てを言い渡された子犬のような目でアリサを見る。さすがに罪悪感を覚えてしまう。

「……お弁当、持ってきていいから。一緒に食べない？」
「んー……」

真剣に悩むシュウ。普段シュウは誰かに誘われると喜んでついて行くような人間なので、悩まれるとは思わずアリサが表情を曇らせる。やがて聞こえてきた、いいよ、という声に心底安堵してしまった。アリサたちのいつものメンバーと屋上に来る。シュウは大事そうに弁当箱を抱えたまま笑顔を崩さない。隣を歩くなのはがその様子をおかしそうに笑っているのが気になるが、今は些細なことだ。弁当を食べたい。

屋上のいつもの場所にたどり着き、全員が座ったところで、シュウは何も言わずに早速弁当箱を開けた。なのはたちは何も言えずにその様子を見守っている。

弁当箱は長方形の二段になっているものだった。下段にはのりが巻かれたおにぎりが三個並び、さらに隅に漬け物が添えられている。上段にはある食材がたっぷり入っていて、あとはサラダとフルーツ

といったメニューだった。

たつぷりに入った具材、唐揚げと見て、シユウは思わず苦笑していた。どうやら昨日の買い出しの時点ですでに計画していたらしい。言ってくればよかったのに、と思いつつふと視線を上げると、こちらをまじまじと凝視している女の子たちと目が合った。

「……………え？ なに？」

シユウがわずかに驚いて問いかけると、なのはが笑顔で言う。

「何でもないよ。それがシユテルのお弁当？」

「うん。そう……………。いや待って、なんで知ってるの？」

まだ誰にももらったものか言っていないはずだ。それなのになのはに言い当てられたことに驚くが、

「シユテルから、昨日のお昼ご飯について聞かれたの。わざわざ聞いてきたぐらいだから、作ってくるのになって」

「い、いつの間になんやりとりを……………」

「うん。念話で」

なんて便利なのだろうかと思つ。電話代が浮く。すばらしい。

「へえ、これをあの子がねえ……………。料理できるとは聞いてたけど、なかなかやるじゃない」

「……………」

じつとシユウがアリサを見る。またもや待てと言われた子犬の瞳。すぐにアリサはそれを察して、食べていいわよ、と言った。

シユウはすぐに顔を輝かせ、食べ始める。すごい勢いだ。

「なあ、シユウ。おいしいか？」

はやての質問にシユウは一度だけうなずく。

「じゃあ一口だけ……………」

「だめ」

「ええ……………。ケチやな」

「だめ」

初めて作ってくれたお弁当だ。誰にも譲る気はない。シユウの意思は硬い。冗談やって、とはやては笑いながら自分の弁当を食べ始め

た。

「これなら大丈夫そうだね、なのは」

フェイトがなのはに耳打ちする。なのはは笑顔でうなずいた。

「うん。みんな、ありがとう」

シュウの昼食を知ったなのはは、どうしても放っておけなくなっていた。今日は自分たちの弁当を少しずつ分けてあげるつもりでもあった。知ってしまった以上は少しでも助けたい、そう思っていたからだ。

「シュテルちゃんは？」

「シュテルから聞いたわけじゃないけど……。ユーリから毎日作るよなことを聞いたよ」

シュテルの行動の真意は分からない。一人の友人としての気遣いからか、巻き込んだ罪悪感によるものなのか、それともまた別の感情からか。きっと本人にも分かっていないのだろう。なぜだかそんな気がする。

ともかく、これ以上自分たちでできることはない。さすがに人の家庭のことにまで首を突っ込むわけにもいかない。今のところは、二人のことを見守ろう。なのははそう決めていた。

あつという間に完食したシュウは、その後の授業は幸せそうな表情ですっと受けていた。教師たちの間では、今日はそっとしておこうという取り決めがなされたのか、生徒を指名する時でもシュウが当てられることはなかった。

放課後。シュウはいつもの公園へと向かいながら電話をかける。相手はもちろん、

『はい。シュテルです』

聞こえてきた声に、シュウは自然と笑みを浮かべる。

「もしもし、シュウです。お弁当ありがとう。おいしかったー」

それを聞いたシュテルが、電話の向こう側でわずかに微笑んだ、気がした。

『それは良かったです。作った甲斐があったというものです』

「あはは。えっと、お礼とかはどうしたらいいかな？」

昨日の夕食といい今日の弁当といい、さすがに世話になりすぎていと自分でも思う。何かしらの礼ぐらいしたいと思ったのだが、シュテルの返答は必要ないというものだった。

『私が好きでやったことです。本当に気にしないでください』

「いや、でもそれだと……」

『明日は何がいいですか？』

「ええー」

思わず声が裏返る。申し訳ないという気持ちと、それ以上に嬉しいという気持ちが強い。

「さ、さすがにそれは……」

『気にしないでください。二人分も四人分も手間は変わりません』

「そ、そう……？ えっと……。何でもいいよ。」

さすがに希望を言えるわけもない。シュテルは、そうですかとどこか残念そうにつぶやいた後、

『ではまた明日の朝に届けに行きます』

「う、うん。ありがとう……」

『いえ。ではまた後ほど』

そして電話が切れる。シュウは切れた電話を眺めながら、表情をにやかせながらも首を傾げた。

なぜ、シュテルはいつも自分に良くしてくれるのだろう。ただの友人のはずのシュウに対して。シュウにとってはシュテルは大切な存在になりつつあるが、向こうもそうだとはさすがに思えない。

「今度聞いてみようかな」

そんなことを考えつつ、シュウはいつもの公園に向かった。

Sidee·Stern

電話を閉じる。小さくため息。豚肉を買い物がこに入れる。

シュテルは近所のスーパーに来ていた。今日の夕食と明日の朝食の準備だ。あとはシュウの弁当用。

ふと考える。どうして自分はここまで世話を焼こうとするのだろ

う。シユウはただの友人。それだけのはずだ。だが、どうしても放っておけない、そう思っている自分がある。そのことを王に告げてみる

と、
「我に聞くな」

という短い答えが返ってきただけだった。

「どうにも……分かりませんね。これが心というものでしょうか」

つぶやく。答えなどは求めていない。誰かに聞かれたくもない。

「不快でもありませんし……。今は気にしないでおきましょう」

「この感情もいつか分かる時がくるかもしれない。それまでは、今の関係を続けていこう。」

シユテルは微笑みつつ一っただけうなずくと、レジへと向かった。

第五話 雨のち晴れ

シュウの通う学校では土曜は午前授業で終わる。いつもならシュウは授業が終わった後はまっすぐに家に帰り、その後に図書館や近くの書店に行くのだが、今日ばかりは違った。

最後のホームルームの後、シュウはすぐに荷物を持って席を立つ。友人たちに遊びに誘われるが、用事があるからと全て断った。そして、一人慌ただしく教室を飛び出していく。向かう先は決まっている。シュウたちの家だ。

「曇ってきてるなあ……」

走りながら空を見る。どんよりと黒い雲が空を覆っている。今にも雨が降ってきてそつだ。

「せめて着くまでは降りませんように……」

そつ祈りながら走る。ひたすらに走る。

だがシュウのそのささやかな願いは、叶えられることはなかった。

「おー……いらっしやいシュウ！ びしょびしょだね！」

扉を開けて出迎えてくれたレヴィが笑いながら言う。シュウは引きつった笑みを浮かべる。シュウが走っている間に雨が降り始め、すぐに土砂降りになった。昼食に招待されたこともあまり遅くなくなってはいけなさと無視して走っていたのだが、その結果が全身びしょ濡れという有様だ。当然、申し訳なくて家にかかることはできない。

さらに悔しいことに、マンションにたどり着いたところで雨足は遠くなくなっていった。

「いめん、せつかく来たけど、ちよつと家で着替えてくるよ……」

そつ言ってきたびすを返すと、一瞬呆気にとられたレヴィがすぐに慌て始める。

「ちよ、ちよつと待って！ とりあえずシュテルに聞いてから……」

シュテルの名前を聞いたところで、シュウはわずかに動きを止め

た。だが、ずぶ濡れの今の姿を見られることがなぜか恥ずかしく感じ、やっぱり逃げよつと足を前に。そのままエレベーターまで走ろうとしたところだ、

「……何をしているのですか」

背後からの冷たい声に、シュウは驚いて固まり、レヴィも、ひうつと小さな悲鳴を漏らして硬直した。二人そろって振り返ると、玄関で二人の様子を見つめるシュテルの姿。その手に持っているのは、バスタオル。

まったく、とシュテルはため息をつきながらシュウの元へと歩いてくる。そしてその頭にバスタオルをかぶせた。

「わびっ」

「いんなに濡れて……。急ぐ必要などなかったのに。風邪でもひいたらどうするのですか」

そう言いながら、シュテルがシュウの髪を拭く。シュウはなされるがままになっていたが、やがて小さな声でつぶやいた。

「……「じめた」

「いえ、お気になさをいす」

シュテルはタオルから手を離すと、部屋へと向かって歩き始める。着いてこないシュウへと振り返り、

「予想はできていたので、お風呂を沸かしてあります。そのままでは風邪をひくでしょう。入ってください」

「……いっの〜」

「今更遠慮なんてしないでください」

シュテルがどこか寂しげにそんなことを言う。シュウは少し驚いて目を見開き、やがて薄く微笑んだ。

「うん。ありがとうっ」

礼を言って、シュテルの後に続く。

そして後に残されるのは、完全に放置されてしまったレヴィ。

「……ぶー」

少しふて腐れたように唇を尖らせながら、扉を閉めた。

少し熱めのお湯に浸かりながら、シュウは大きなため息をついた。バスルームと浴槽は少し広めのものだ。一人程度なら同時に入ってもまだ余裕がある。今は当然シュウしかないため、その広めの浴槽でのんびりと体を伸ばしていた。

「あー……。気持ちいい……」

体が冷えていたためか、熱めのお湯が心地いい。ぼんやりしていると、すぐに眠気が襲ってくる。もういつそのこと、少し寝てしまおうか。

いや、怒られるか。確実に。

シュテルたち四人は、全員がシュウを待っていてくれたらしい。キッチンのテーブルに大きめのお皿が五個並べられているのを見ている。すでに盛りつけも終わらせているらしく、あとは温めるだけだとか。

早く上がった方がいいかな、と判断してシュウは立ち上がる。早くなる。

「シュウ」

ガラス戸越しの声。シュウは慌ててまた湯船に浸かった。

「湯加減はどうですか？」

シュテルの声だ。驚き慌てながらも、平静を装って答える。

「ちょうどいいよ。気持ちいい」

「そうですか。こちらは昼食を温めてきます。少し時間がかかりますので、ゆっくりと暖まってください。着替えを置いておきますね」

何かを置く軽い音がした後、シュテルの歩き去っていく音が続いて聞こえる。シュウは安堵のため息をついて、ならお言葉に甘えてと再びリラックスする。すぐに眠気が襲ってきた。

「あー……。気持ちいい……」

二度目のセリフ。その表情は幸せそう。

そのまま五分ほどが過ぎたところで、至福の時間は終わりにした。バスルームから出ると、足下に小さなかごがあり、そこにバスタオルや着替えなどが入っていた。バスタオルを手に取り、体を拭いていく。全身しっかり拭いたところで、ふとシュウは着替えへと視線を向

けた。

誰の服？

ここは女の子の四人暮らしだ。当然男物などあるはずがない。まだ子供である自分たちにはそれほど体型の違いはないため着れることは着れるだろうが、女の子の服を借りるのはさすがに申し訳ない。それ以上に少し恥ずかしい。

そつと着替えを取り出してみて、シュウは首を傾げた。

「……………男物？」

安心するのと同時に少し不安になる。まさか自分が知らないだけで、他にも誰かが住んでいたりするのだろうか。もちろん住んでいたとしても問題はないのだろうか、なぜだろう、あまりいい気分にはなれない。

複雑な心境のまま服を着る。少し大きめで袖などが余った。自分よりも年上の人の服だろうか。どんな人だろうと考えるが、いくら考えたところで答えが分かるはずもない。シュウは苦笑すると、とりあえずそのことは忘れてリビングへと向かった。

リビングのテーブルにはすでに料理が並んでいた。楕円形の大きめの皿に溶けたチーズ。湯気が立っているので先ほど温め終えたところなのだろう。

「シュウ。ちょうど今呼びに行こうと思っていました」

飲み物を載せた盆を持って、シュテルが立っていた。シュテルに促されて、席へと座る。対面に座るディアーチェと目が合うと、ディアーチェが薄く笑った。

「服のサイズはどうだ？」

「え？ あ、ちよつと大きいかな……………。誰の服？」

「クロノ執務官の服ですよ。ディアーチェと一緒に借りてきました」

そう答えたのはユーリだ。レヴィと並んで座り、スプーンを持ってじつと皿を見つめている。

「クロノ執務官……………。ああ、あの人か」

そこでやっと思い出した。それと同時に心の底から安堵する。クロノはアースラに行った時に世話になった人だ。特に問題がある人

ではない。

「なんだかずいぶん安心したって顔だねー。何を考えてたの？」

聞いてきたのはレヴィ。好奇心に瞳を輝かせている。おそらく本当に他意はない。故に余計に恥ずかしい。妙なことを考えていた自分が情けない。

「いや、別に。気にしないで」

そう答えるだけで精一杯だ。

「さて、では食事にしましょう」

シュテルがそう言ってシュウの隣に座り、五人は手を合わせた。

昼食のドリアを食べ終え、五人はそれぞれ会話を交わす。といってもシュウは話を振られない限り会話には参加しなかったが、四人の話を聞いているだけで楽しかった。それに、聞いているだけでも分かることがある。四人の関係性などは最初の説明よりもむしろこういった会話で察してきた。

ふとシュテルが視線を時計へと向ける。シュウも一緒に見ると、時刻は午後四時になっていた。

「そろそろですね」

シュテルがつぶやき、シュウが何が？ と首を傾げたところでインターホンが鳴った。シュテルが対応のために部屋を出て行く。

「……誰かと約束あったの？ 帰った方がいいかな？」

対面のディアーチェにそう聞くと、首を振られた。

「気にするな。」「」「」

「はあ……」

そして待つこと数分。戻ってきたシュテルと一緒に入ってきたのは、

「「」ん「」ちは、西崎君」

なのはとフェイト、はやて、そして見慣れぬ三人組と犬二匹。

「……なにこの集まり」

「ちゃんと自己紹介しておこうかなって。魔法のことについてはあまり話してなかったから」

答えたのはフェイトだ。どうやら自分のために集まってくれたらしい。シュウはどこか他人事のようにへえ、とうなずくと、はやての後ろの三人組に目を向ける。

「とうこととは、その三人がヴォルケンリッター？」

「そうだが……。誰から聞いた？」

そう答えたのはポニーテールの女性。シュウがクロノさんに、と答えるとうなずいて納得していた。

「では我らの出自に関しては改めて言う必要もない……。シグナムだ」

ポニーテールの人がそう言ったのを皮切りに、順番に挨拶をしていく。

「あたしはヴィータだ」

一番幼そうな赤髪の子が言って、次に金髪の女性が続く。

「シヤマルよ。よろしくね、西崎君」

そして最後に、

「ザフィーラだ」

「犬が喋った！」

「うおっ！」

青い犬が口を開いた瞬間、シュウは目を輝かせて身を乗り出していた。青い子犬は突然のことに驚いて固まっている。

「撫でていい？ 噛まない？」

「いや、私は……」

「大丈夫。噛まへんよ」

「主っ？」

シュウが青い犬の頭を撫でる。犬は不服そうにしていたが、大人しく撫でられていた。

「守護獣だっけ？ 犬だね」

「かわいいやろ？」

「……………」

犬は無言。ヴィータが笑いをかみ殺しているのが少し気になったが、シュウは気にせずまで続ける。

「ちなみにこっちの赤い犬がアルフ。かわいいでしょ？」

フェイトがそう言って、赤い子犬を差し出してきた。シュウが再び瞳を輝かせる。

「かわいいー！」

「撫でていいよ？」

「フェイトっ？」

「では遠慮なく」

青い犬から手を離し、今度は赤い犬を撫でる。両方ともふわふわの毛で、とても撫で心地がいい。顔がだらしなく緩んでしまっていることを自覚しているが、止められない。

「西崎君は動物が好きなの？」

そう聞いてきたなのはにシュウは視線を向け、うなずく。

「うん。あとシュウでいいよ。友達はみんなそう呼ぶから」

「え……？ いいの？」

「え？ 友達じゃだめ？」

驚いて聞き返すシュウに、なのはもわずかに驚く。だがすぐに笑顔になって、

「そんなことない！ よろしくね、シュウ君ー！」

「はいよろしくー」

そんな会話を交わしている間に、いつの間にかシュテルが出かける準備をしていた。財布と折りたたみ傘の確認をしているシュテルにシュウが首を傾げると、シュテルはすぐに気づいて説明する。

「夕食の買い出しに行ってください。少し量が多いので……。なのは、ご一緒していただけませんか？」

「うん。もちろん」

なのはがうなずいてこちらも準備を始める。といっても折りたたみ傘を持ったただけだが。

「買い物なら僕が……」

「いえ、貴方はここにいてください。せっかくなので、他の方とお話を。では行きましょつか、なのは」

「うん。それじゃあいってきます」

二人そろって部屋を出て行く。シュウはどこか寂しそうにその背を見送った。一部始終を見ていたはやては、どこかおもしろそうな笑顔になる。

「なるほどな」

「なるほどって、何が？」

はやてのつぶやきに反応したにはヴィータだ。はやては首を振って、何でもないよと笑った。

「ところでシュウ君……でええかな？ 王様の料理はどうやった？」

「なっ！ 何を言っか子鴉！」

皆がきて我関せずと読書を始めていたディアーチェエが即座に反応する。シュウの方は、言葉の意味が分からずに怪訝そうな表情を浮かべた。

「ディアーチェエの料理って……。もしかして、あのドリリアはディアーチェエが？」

驚いて聞くと、ディアーチェエがそっぽを向いた。ほんのりと頬が赤くなっている。

「そうらしいで。それで、感想は？」

「ええい、黙れ子鴉！ 感想などいらぬわ！」

「あ……。そうだよな、僕の感想とかどうでもいいよね」

「な……。ま、待てシュウ！ そういう意味ではなくてだな……。」「シュウが悲しげに目を伏せ、ディアーチェエが慌てふためく。このようなディアーチェエの反応は滅多に見れるものではないので、レヴィとユーリは目を丸くしていた。

「もちろん聞きたいとは思っが、その、なんだ……」

「うん。すぐくおいしかった。本当に」

「む……。そ、そうか……。いや、それならばいい……」

再びそっぽを向いてしまうディアーチェエ。ユーリがこっそりとディアーチェエの前へと場所を移動して、

「ディアーチェエ。顔がにやけてます」

「ユーリ……」

その言葉にディアーチェエが再び慌て、はやてたちが笑う。シュウは

ぼんやりとディアーチェを見て、

かわいいところもあるんだなあ。

こっそりと心の中でつぶやいた。

シュテルとなのはが帰宅して、すぐに夕食の準備が始まる。どうやら全員がここで夕食を食べていくらしい。人数が多いので、鍋とカセットコンロははやてとなのはがそれぞれ一セットずつ持参した。

太陽が沈み始めた頃に鍋が煮え、食べ始める。せっかくだからと、それぞれの鍋で水炊き、すき焼き、うどんすきにした。ちなみにうどんすきのレシピははやての提供による。

各自それぞれ移動しながら食べていく。その時々で人の組み合わせは変わり、会話の内容も変化していく。それでも皆が意識してシュウを会話に入れようとしていたので、シュウも遠慮なく会話に参加することができた。

やがて夕食も終わりかけ、箸の動きが鈍くなる。移動も少なくなり、のんびりとした会話になっていく。シュウはその頃を見計らって、そっと部屋を後にした。

キッチンに面しているベランダに出る。物干し竿があるだけの少し寂しいベランダだ。このマンションのベランダはそれなりに広く造られているため、少し寂しくも感じる。

室内から聞こえてくる会話の声を聞きながら、シュウはのんびりと空を眺める。

「シュウ。どうかしたのですか？」

呼ばれて振り返ると、シュテルが立っていた。手には湯気の立つお椀。シュテルはシュウの隣まで歩いてくると、お椀を差し出してきた。

「雑炊です。いかがですか？」

「ありがとう。もらっつね」

シュテルからお椀とお箸を受け取り、まだ熱いそれを少しずつ食べる。

「うん。おいしー」

「それは良かった。ところで、何をしていたのですか？」

「んー……。空を見てただけ、だよ。あまり意味はないかな」

「空、ですか」

シュテルもとなりで空を見る。まだ雲が濃くかかっていたはずだが。

「ほんの少し前まではね」

シュウが口を開くと、シュテルがこちらへと視線を向けてくる。それでもシュウは空を見上げたまま、続ける

「ずっと一人で家にいて、」
「飯食べて……。寂しいと思うこともなくなって、なんて言えればいいのかな、いろいろとどうでもよくなってたんだ」

「……………」

「シュテルと会って、一緒にご飯を食べたりして、今日みたいなことにも一緒にいさせてもらえて……………」

そこでシュウは笑った。自嘲するかのように。自分に対して冷たく笑う。心を冷やそうとする。

「一人のご飯がつらくなりそうだよ……………」

心を冷やす。また一人になった時に耐えられるようにと。だが、ぬくもりを知ってしまったと、そんなことは当然できるはずもなく。

「……………一人は、嫌だなあ……………」

気づくと、涙が流れていた。ぬくもりをもらったがために、家での孤独が怖くなる。孤独の冷たさを思い出すだけで体が震えてくる。ただただ一人。ただただ無音。もう慣れてしまっていたはずなのに、たった数日こうして過ごしただけでそれが何よりも怖い。

「シュウ」

シュテルがシュウの頬に触れる。手で涙を拭い、薄く笑みを浮かべた。

「一人でいる必要はありません。いつでもここに来てください。私たちはいつでも貴方を歓迎しますよ。貴方はもう家族も同然ですから」

「……………シュテル……………。ありがとう」

シュテルにつられるように、シュウも微笑んだ。

二人はそつと手を繋ぎ、今度は無言で星空を眺める。いつの間にか雲はなくなり、星の淡い光が二人を優しく包んでいた。

第六話 風邪

案の定風邪をひいた。

原因は分かっている。土曜日に土砂降りの雨の中を長時間走ったことが原因だろう。シュテルの家で風呂に入れてもらってはいたが、手遅れだったのかもしれない。

「うっ……」

頭痛にうなされながら、シュウは時計を見た。午前十時。もうあまり時間がない。

シュテルとディアーチェから、今日も昼食と夕食に誘われている。シュウにとってもありがたい申し出ではあるので軽い気持ちで約束してしまっただのが、この状態ではどう考えても行くことができない。

「約束破るのは嫌だけど……。風邪うつしちゃ、悪いしね……」

せめて連絡だけでもしておこう。そう思ってちゃぶ台に置いてある携帯電話に手を伸ばそうとするが、

……。あ、無理。

頭痛がひどくなって諦めた。もう少し休んでから連絡しよう。そう決めて、再びベッドに潜り込む。それにしても。

シュテルが作るのかな、ディアーチェが作るのかな……。食べたかったなあ……。

空腹に耐えながら、シュウは小さくため息をついた。

次に目を覚ましたのは、携帯電話が鳴ったからだ。ぼんやりとした意識のまま頭痛をこらえて携帯電話に手を伸ばす。表示されている名前を見て、シュウは驚いて時間を確認した。午後一時。きつとかなり待たせてしまったに違いない。

シュウは慌てて通話ボタンを押すと、すぐに言った。

「うめん」

『……突然ですね。急用でも入りましたか？』

電話の相手、シュテルの声はどこか不機嫌そうだ。それもそのはず

だろう。昨日は正午までには行くと言った覚えがある。

「急用……。うん、急用が入ったんだ……。だから今日は行けそうにない。ごめんね、先に連絡をと思っていただけ……。」

怒らせることはしたくなかったが、心配させることはもったいなくなかった。そのためシュテルの勘違いをそのまま利用する。

『……………』

無言が返ってくる。怒ってるかな、と不安になりながら、シュテル？ と呼びかける。

『体調でも悪いのですか？』

突然言い当てられてシュウは押し黙る。それを凶星と取ったのか、シュテルがわずかに苦笑する気配が伝わってきた。

『大方、私たちに心配かけないように先ほどのことを言ったのでしょうが……。わかりやすいですよ、シュウ』

「面目ない……………」

全てを言い当てられシュウは情けなくなる。自分はそんなに単純な性格をしていただろうか。

『今はご自宅ですね？ では今日の約束はまた後日ということにいたしまししょう』

「うん……。本当にごめんね……………」

『いえ、お気になさらずに。では』

電話が切れる。シュテルの声が聞こえなくなる。それだけで寂しさを覚えてしまうあたり、自分の心はとても弱くなってしまったようだ。

……………寝よう。

シュウは再びベッドに戻ると、すぐに目を閉じた。

次に目を覚ました原因は、聞こえてくるはずのない音が聞こえてきたからだ。部屋の扉側、短い廊下に備え付けられている流しから音がする。ぐつぐつと何かを煮込む音。一体誰かと体を無理矢理に起こしてそちらを見る。

廊下への扉は閉じられているが、誰かがそこで何かをしていること

は分かった。少しずつ思考を開始して、寝る前の電話を思い出す。電話を切る前に自分が自宅にいるかどうかをわざわざ確認していたような気もする。

……もしかしなくても……。

扉が開けられる。そこに立っていたのは、やはりと言いつべきかシュテルだった。

「おや、起こしてしまいましたか」

シュテルの手には小さな鍋。シュテルはそれをちゃぶ台に置くと、一度流しの方へと戻る。次の戻ってきた時には、お椀とスプーンを持っていた。

「台所をお借りしました。事後承諾になってしまい申し訳ありません」

「いや、それはいいけど……。どうして？　むしろどうやって？」

「どうして、というのは理由でしょうか。体調が悪いと聞いたためです。貴方の声の調子から衰弱していると判断してここに来ました」

まさか声から判断されるとは。次があれば声にも気をつけよう。そう心に決める。

「どうやって、というのは家に入った手段でしょうか。鍵、空いていました」

不用心ですね、とシュテルはため息交じりに付け足す。それを聞いて昨日の記憶を思い出そうとしてみるが、そんな細かいところまでははっきりと覚えていない。だが確かに閉めた記憶がないような気がする。

「以後気をつけます」

「そうしてください。……まあ……。そのおかげで貴方を起こさずに済みましたか」

途中で起きられるというのは想定外でした、とつぶやきながら、シュテルはお鍋からお椀に中身を移していく。そのお椀とスプーンを差し出してきた。中身を確認すると、おかゆだった。黄色い何かが混ぜられている。

「むしろいいんです。芋がゆにしてみました」

「ああ、なるほど……」

スプーンですくって口に運ぶ。一口食べて、二口食べて……。気づけばお椀は空になっていた。あ、と切なげな声をシュウが漏らすと、シュテルはうつすらと苦笑を浮かべ、シュウからお椀と取り上げる。すぐにお代わりを入れてくれた。

再び差し出されたお椀を受け取り、また食べる。そしてあつという間にお鍋は空になった。

「十分に用意したと思っていたのですが……。シュウ、まさか朝食は……」

「食べたと思うっ？」

「……愚問でした」

呆れたようにため息をつくが、その表情は柔らかい。そんなシュテルの顔を見ながら、シュウは何となく幸せな気持ちになる。今までは風邪をひいても、ただ寝て治したものだ。

不意に額に冷たいものが触れた。シュテルの手だ。ひんやりとしていて気持ちがいい。

「まだ熱いですね……。風邪薬を買ってきたので、それを飲んで眠ってください」

「う……。薬は飲みたくない……」

「子供ですか。飲みなさい」

子供です、という当然の反論はシュテルに睨まれてできなかった。渡された水と薬を胃に流し込む。錠剤なので飲みやすくはあったが、やはり嫌悪感の方が強い。

「薬なんて……」

そんなことをつぶやきながら布団にもぐる。横になると急に睡魔が襲ってきた。どうやらまだまだ回復は遠いらしい。シュテルが言うようにこのまま眠ってしまうとする。

早くも朦朧とした意識の片隅でシュテルへと視線を向けると、優しい微笑を浮かべてこちらを見つめていた。おやすみなさい、とかすかに聞こえてくる。いつまでいるんだろうと思いつつも、起きた時に側にいてくれたら嬉しいな、など思いながら眠りに落ちた。

S i d e : S t e r n

シュテルはシュウが眠ったことを確認すると、押し入れの方へと向かう。ごめんなさい、失礼しますと小声で謝罪して押し入れのふすまを開けた。押し入れは上下に分かれていて、上段には何も無い。おそらく普段はここに布団をしまっているのだろう。

下段には段ボール箱がいくつかときれいに畳まれた衣服やタオル、学校に必要なものなど。シュテルは目的のものがすぐに見つかったことに安堵しつつ、タオルを手に取った。流しへと向かい、冷水で濡らしてしっかりと絞る。それをシュウの額に置くと、表情が幾分か和らいだように見えた。

そこまでのことを終えて、シュテルは持ってきていた文庫本を取り出す。とりあえずはこのまま様子を見るため待機とする。文庫本を開こうとしたところで、ふすまを開けっ放しにしていたことに気がついた。

もう一度押し入れに向かい、閉める。その直前に、段ボールの上に置かれている写真立てに気がついた。悪いとは思いつつも手にとって見てみる。

夫婦と思われる男女と、その男と手を繋いでいる笑顔のシュウ。この男女がシュウの両親なのだろう。そしてもう一人。

「妹がいるのですね」

女と手を握っているのはシュウよりも幼い女の子だ。順当に考えればシュウの妹だろう。そう言えばシュウの家族構成は聞いていない。

いずれ聞いてみたいと思いつつながら写真立てを戻し、ふすまを閉めた。

「……………」

珍しくシュテルが息を呑む。視界の上、ふすまの上、天井。小さな穴が空いている。すぐに何食わぬ顔で戻り、読書を始めるふりをする。そつと待機状態のルシフェリオンを握り、魔法を展開。目に見えない魔力の玉がシュテルの目の代わりとして押し入れの穴の奥へ。

そこにあつたのは、監視カメラと思しきものだった。

「……………」
シュテルは内心で動揺しながらも表情には出さず、魔法を解除する。誰が何のために仕掛けているのかは分からないが、今自分にできることは何もない。シュテルはとりあえずカメラのことを意識から追い出した。

Side: Hero

今度は自然と目を覚ました。シュウはゆっくりと目を開き、体を起こす。まだ体は重たいが、幾分か楽にはなった。

窓の外は暗く、部屋も電気が消されている。シュテルが消していつてくれたのだろう。そこまで考えて、扉の開閉の音で思考は中断された。

廊下を歩いて部屋に入ってきたのは、やはりシュテルだった。手には買い物袋がある。

「起きたのですね、シュウ」

いつもの無表情でシュテルが言う。シュウは笑顔でうなずいた。

「うん。おはよう。……夜だけど」

「はい。おはようございます。夜ですが」

シュテルは買い物袋をちゃぶ台に置くと、夕食を作ってきます、と言って部屋を出て行った。流しから音が聞こえ始める。

しばらく待つと、昼と同じく鍋とお碗を持ってシュテルが戻ってきた。今回も芋がゆのようだった。

「うどん」

差し出されたお碗を受け取り、ゆっくりと食べ始める。今回はお碗は二個あり、そのうちの一個でシュテルも食べ始めた。

無言で食事は進み、すぐに鍋は空になった。今回もシュウがほとんど食べてしまった。

「食欲はしっかりあるようですね」

「食欲だけはね」

自嘲気味に言うシュウの額にシュテルの手が触れる。冷たくて気

持ちいいなあ、とまた思ってしまった。

「少し下がりましたね……。しっかりと眠れば、明日には治っているでしょ？」

「うん……。ごめんね、助かったよ」

心の底から言つと、シュテルはどういたしまして、と変わらぬ表情で答える。

「では風邪薬を飲んで眠ってください」

「いやさすがに無理だよ！ もう眠気もないし……！」

「横になっていればそのうち眠れますよ」

いやそれはさすがに、と言おうとしたところで水と薬を手渡された。洪々といった様子で胃に流し込み、また布団に横になる。本当に眠くなってしまつあたり、自分は本当に単純らしい。

「ではシュウ。明日の朝にお弁当を届けに来ます。あと夕食はいかがですか？」

「ん……。いいの？」

「今更そんなことを聞かないでください」

それを聞いたシュウは苦笑。じゃあお願いします、と答える。

「はい。では私はそろそろお暇いたします」

そう言つたシュテルの手を、シュウは反射的につかんでいた。わずかに驚くシュテルと、自分でも不思議に思つてしまふシュウ。だがどうしてか、離す気にはなれない。

やれやれ、といった様子でシュテルはため息をつく。だがその表情に棘はない。

「貴方が眠るまではここにいますよ」

「ん……。ごめんね」

シュテルの手がシュウの頬に触れ、お気になさらずに、という言葉が聞こえてくる。シュウはそれに笑顔を浮かべると、また深い眠りに落ちていった。

風邪をひくのも悪くない、そんなことを思いながら。

第七話 ヒーローショー

ある日の放課後、学校からの帰り道。シュウはいつも通りに着替えるために自宅へ帰るところだった。この後は普段通りシュテルたちの家で夕食をご馳走になる予定だ。正直自分でもかなり依存してしまっていると思う。

「ん？」

車が頻繁に行き交う大きな路地の歩道を歩いていると、向かい側から見覚えのある人影が走ってきた。人影はフェイトにうりーつだが、まとう雰囲気は全くの別物。ならば答えは一つだけ。

「レヴィィ？」

レヴィィはシュウに気づくことなく横を通り過ぎていく。しかしすぐにはっとしたように振り返り、シュウの姿をその目にとらえた。

「シュウ！ いいところであつた！」

「は？」

「一緒に来てー！」

「え？」

レヴィィの勢いに流されるまま、シュウは右手を捕まれてレヴィと一緒に走る。何が何だか分からないが、緊急事態なのかもしれないと思い、レヴィについて行くことにした。

そしてたどり着いたのはデパートの屋上。そこで行われているのは、期間限定のヒーローショーだ。日曜日の朝に放送されている特撮番組らしいが、詳しいことはシュウには分からない。ヒーローが怪人に何かを叫び、躍りかかる。歓声を上げる子供たち。そしてレヴィ。

「いつジャー！ そこだー！」

レヴィはとても楽しそうにしている。きっとこれを見るために来たのだらう。それは分かるが、なぜ自分が連れてこられたのかが分からない。

「ねえ、レヴィ。僕が来る必要って……」

「今いいと……」

「あ、ごめん……」

怒られたことに少し落ち込む。とりあえずは自分もショーを見るが、元となつていている番組を知らないのていまいちコンセプトが分からない。ただ集まつていている子供の人数と歓声の大きさからして、それなりに人気のある番組なのだろうことは分かる。

三十分ほどしてショーは終わった。そしてアナウンスが流れる。

『期間限定販売のお菓子はステージ横での販売となります。このショー限定の販売となりますのでお見逃しなく……』

アナウンスが流れ始めた直後、レヴィはまたシュウの手を取るとステージへと走る。どうやら期間限定のお菓子というのも目的らしい。だがやはり自分には関係ないのではと思ったが、すぐに謎が解けた。

『なお、お一人様一個の販売となりますのでご注意ください』

つまりはお菓子を買ったための頭数。少し残念に思ってしまうのはなぜだろう。

レヴィと一緒に列に並び、目的のお菓子を購入する。お菓子を受け取ったレヴィの表情はとても嬉しそうで、見た目の年相応の幼さだ。

「はい」

ステージから少し離れたところで、レヴィに自分が購入した分を差し出した。するとレヴィはぱっと顔を輝かせたが、すぐに表情を曇らせて上目遣いに自分を見てくる。どうしたのかと首を傾げると、

「いいの……？ 勢いで連れてきちゃったけど、シュウも欲しいんじゃない？」

どうやら自分のことを考えてくれていたらしい。シュウは思わず笑顔を浮かべると、首を振った。

「僕は大丈夫。この番組、知らないしね。僕の分はレヴィに上げるよ」
今度こそレヴィに笑顔の花が開いた。シュウからお菓子を受け取り、大切そうにお菓子を抱きしめる。えへへ、と無邪気に笑つ。

「ありがとー！ じゃあボクの分はユーリに上げようかな」

「ん？ ユーリに？」

「うん。ユーリも好きなの、これ」

レヴィの話によると、本当はユーリと引率のディアーチェも一緒に
見に来る予定だったらしい。だがディアーチェとユーリに予定が入
り、シユテルも買い出しのために同行できず、仕方なくレヴィ一人で
見に来たというわけだ。

「ユーリは今日のショーを楽しみにしてたから……。せめてお土産だ
けでもって思ってたんだ」

「そっか……。レヴィは優しいね」

そう言っ頭を撫でてやる。見た目は同年代なので普通は嫌がら
れそうなものだが、レヴィは頭を撫でてもらうことが好きらしい。に
へら、とだらしなく笑つと、

「そっかなー。えへへ、もっと撫でてー」

子犬か子猫のように甘えてくる。シユウは苦笑しながらも、レヴィ
が満足するまで撫でてやった。

デパートから出た二人はそのまま家路につく。レヴィの手にはビ
ニール袋が握られていて、中に入っているのはもちろんあのショーの
お菓子だ。シユウは先に一度自宅に戻ろうかとも思ったが、わざわざ
着替えに戻るのも面倒になったのでこのまま一緒に行くことにした。

デパートへ向かった時とは対照的に、のんびりと歩く。レヴィはデ
パートからずっと上機嫌で、鼻歌など歌っているほどだ。例の特撮番
組の主題歌らしいが、見たこともないシユウには当然分かるはずな
い。

しばらく歩いて公園にさしかかったところで、

「あれ？ レヴィにシユウ？」

公園の方から声をかけられた。見ると、フェイトが子犬のアルフと
一緒にこちらへと歩いてくるところだった。アルフを見た瞬間に
シユウが瞳を輝かせる。

「アルフー！ 撫でてさせてー」

「ええええ……」

アルフが思わず立ち止まり、シユウが少し傷ついたように落ち込

む。それを見てアルフはどう思ったのか、仕方ないね、とつぶやいてシュウのとこるへとやってきた。

「少しだけだよ。あたしだって女の子なんだから恥ずかしいんだよ」

「了解！」

シュウがアルフを抱きかかえて頭を撫でる。アルフはやれやれと首を振っていたが、抵抗はしなかった。

「オリジナル、オイッスー！」

「あはは。こんばんは、レヴィ」

シュウがアルフに夢中になっているので、レヴィとフェイトは二人で話を始める。

「珍しい組み合わせだね。どこに行ってたの？」

「デパート！ ちょっとヒーローショーを見に！」

「ああ……。好きだって言ってたね、特撮」

「うん！ だってかっこいいし！ こっつ、シュバッって！ ピカッって！」

「そ、そうだね……」

あまりに抽象的すぎてさすがに意味が分からない。隣で聞いているシュウすら思わず苦笑していた。フェイトとは本当に対照的で、性格も表現もかなり子供っぽい。

子供の自分が言うことでもないけど。

ぼんやりとそんなことを考え、アルフを解放する。地面に下りたアルフは、振り返って聞いてくる。

「もう満足したのかい？」

「うん。こっつめんね」

「撫でられるくらいいいね。ほごほごならね」

アルフはそう言つと、フェイトのもとへと戻っていく。フェイトがそれを迎えて、頭を撫でていた。レヴィがそれを少し羨ましそうに見ているのはきつと気のせいだろうか。

「……変身魔法でも覚えようかな」

「レヴィ……」

「冗談だよ、冗談！」

レヴィが慌てたように言う。先ほどの声には真剣な色が帯びていたが、あえて何も言わないことにした。

「じゃあシュウー！ そろそろ帰ろうー！ シュテるんに怒られちゃうー！」

「それもそうだね……。それじゃあフェイト。また学校で」

「うん。またね、シュウ」

シュウとレヴィが手を振って、フェイトも手を振る。今度こそ二人は家への道を歩き始める。

「ようこそ、レヴィ」

レヴィと並んで歩きながら口を開く。レヴィは上機嫌を維持したまま鼻歌を歌っていたが、シュウに呼びかけられて中断した。

「なに？」

「そんなに撫でられたいの？」

撫でられることが好きだとは聞いたが、わざわざ変身魔法を覚えてまでとは思っていなかった。問われたレヴィは笑顔でうなずく。

「うん。大好き！」

「なんで？」

「へ？ なんてって……」

理由を聞かれると、今度は返答に窮していた。首を傾げ、なんでだろ？ と自問している。しばらく歩きながら考えていたようだったが、やがてレヴィは一度だけうなずいた。

「うんー！ 分かんないー！」

「あはは……。予想はしてたよ」

シュウは思わず笑みを浮かべた。深く考えすぎないところがレヴィのいいところでもある。感覚的なもので理屈で説明することはできないのだから。

「レヴィ、わざわざ変身魔法を覚えなくてもさ」

「うん」

「僕でよければ、いつでも撫でてあげるよ」

それを聞いたレヴィが、ふえ？ と間拔けな声を漏らして立ち止まった。呆けたように立ち止まっていたので、心配になって振り返

る。レヴィはまだしばらく啞然としていたが、すぐに満面の笑顔になった。

「ホントに？」

「うん。もちろん」

「えへへー。約束だよ！」

嬉しそうに笑いながらレヴィが走る。シユウは慌ててそれを追った。

「たっだいまー！」

「お邪魔します」

レヴィの元気な声が室内に響き、シユウの控えめな声はそれにかき消される。少しして、シユテルとユーリが顔を出した。

「お帰りなさい、レヴィ。いらっしやい、シユウ」

「レヴィ！ ショーはどうでしたか！」

挨拶もそこそこにユーリがレヴィのもとへと走る。レヴィはユーリへと身を乗り出して、

「すっごくおもしろかった！ えっとね……」

熱く語り出した。ユーリも熱心にそれを聞いているので、邪魔しないようにシユウは先に家にかかる。

「すみません、シユウ。レヴィがお世話になったみたいで」

「いや、僕も楽しかったよ」

「それならば良いのですが……。今王と夕食を作っているところなので、もう少々お待ちください」

「ん。分かった」

シユテルがキッチンへと戻るのを見送って、シユウはリビングに入る。いつの間にか決まっていた自分の定位置に座り、ふう、とため息をついた。正直に言うとしたらただ疲れていたりもする。

すぐにレヴィとユーリが入ってきて、ユーリが嬉しそうにシユウに駆け寄ってくる。

「シユウー お菓子ありがとうございますー！ すごく嬉しいです！」

「あはは。どっぴいたしまして」

「ここまで喜ばれるとは思ってもみなかった。どうやら本当に好きらしい。ユーリはその後すぐにキッチンへと行き、何かを話し始めている。

レヴィはリビングに戻り、こちらでも自分の定位置に座った。お菓子の袋を開けようとしたが、すぐに夕食が出てくるだろうことを思い出したのか部屋の隅に置く。それでも視線は頻繁にお菓子へと向いていたが、やがて諦めがついたのか小さくため息をついてシュウに向き直った。

「シュウー」

「今日はほんとにありがとう！ 助かったよー！」

「一緒に行ったただけだね……。まあ喜んでもらえてるなら、それでいいけど」

レヴィの笑顔を見ていると、放課後を潰した甲斐はあったというものだ。こういうのも、たまになら悪くない。

「せっかくだからさ、レヴィ。僕にもそのヒーローのこと教えてよ」「おおー！ シュウも興味あるっ？ いいよいいよ教えてあげるー！」

喜色満面に語り出すレヴィ。その屈託のない笑顔を見ながら、

うん。悪くない。

心からそう思った。

第八話 来訪

「おっじゃましまーす！」

シュウの部屋で、普段なら絶対にならない大音声が響き渡る。元気なことはいいいことだが、これでは近所迷惑だ。そう判断して、叫んだレヴィにディアアーチェが注意する。

「やかましい。近所迷惑だ。すなわちシュウに迷惑がかかる」

「ああー」「めんシュウー！」

言われて、レヴィが部屋の主へと頭を下げた。

シュウは部屋の中央で、ぽかんと間抜けな表情を晒していた。

日曜日の昼前。約束もないし書店にでも行こうかと思っただけぼんやりしていると、唐突に自宅のドアが開いてレヴィが現れた。続いてディアアーチェ、ユーリ、シュテルが入ってくる。

「突然すまぬな。何かをするところであったか？ 我らのことは気にするな」

ディアアーチェがそう言い、続いてユーリが、

「お邪魔します、シュウ。お元気ですか？」

「にこやかにそう言う。最後にシュテルがいつもの無表情で言う。

「お騒がせしてすみません。」「迷惑でしたか？」

シュウは首を振る。迷惑なはずがない。来てくれて本当に嬉しい。だがしかし、せめて事前に連絡ぐらいは欲しいものだ。突然すぎて何も用意をしていない。

「……………ちょっと待って」

シュウは客人四人をその場で待機させると、部屋の隅に積まれた座布団をちゃぶ台に並べる。続いてお茶でも入れようとしたところで、「ジュースを買ってきました。いかがですか？」

シュテルが持っていたビニール袋を掲げてみせる。中に入っているのはオレンジジュースとリンゴジュースのようだ。シュウは思わず笑顔になると、じゃあもらっね、とビニール袋を受け取った。

流しに立ち、棚を見る。紙コップぐらいあるだろうと思ったが、一個もなかった。

「紙コップも買ってきました。同じ袋に入っていますよ」

「……ほんとだ。使わせてもらっね」

結局自分が用意したものは座布団だけになる。いつも通りなのが、まさか自分の家でもこんなことになるとは。せめて何かお菓子でもあればいいが、そんなものがあればすでにシュウの朝食になっている。

せめて体を動かそう、そう決めて紙コップにジュースを注いでいった。

ちゃぶ台にジュースの入った紙コップが並ぶ。それぞれ中身を確認せずにコップを取り、のどを潤していく。

「やっぱりジュースは百パーセントだね」

「ですね」

レヴィとユーリが笑顔で言って、シュウも黙ってうなずく。一気に飲み干し、一息ついたところで全員をぐるっと見回した。

「……それで、急にどうしたの？」

シュウがそう聞くと、ディアーチェが、うむ、とうなずいて答えてくれる。

「レヴィとユーリがシュウの家に行ってみたいと言い出してな」

「だってシュテるんばかりずるいし」

「ずるいぞすし」

「何がずるいかはよく分かりませんが、ならみんなで行きましょうといついことになりました」

最後にシュテルが締めくくる。四人の言葉を聞いたシュウはなるほどと一いつなずいた。

「動機がすごく単純すぎる気がするけど、一応納得。でもできれば、家を出る時でいいから連絡ぐらい欲しかったかな……」

「それについてはその通りです。すみません」

シュテルが静かに頭を下げる。責めているつもりもなかったシュウがまさか謝罪されるとは思わず、少し慌ててしまっ。

「別に怒ってるとかじゃないから……！ ジュースも買ってきてもらったし！ そ、それに「うちも何も用意できないし！ お昼ご飯とかもないよー！」

「それなら弁当を作ってきておいたぞ」

「用意周到すぎて何も言えない……。うん。まあせっかく来たんだし、何もないけどゆっくりしていいよ」

シュウは苦笑とともにため息をついて、おかわりを入れてくる、と全員のコップを回収して流しに向かった。

昼食は四人が持ってきた弁当をちゃぶ台に広げた。弁当と言っていたが、二段重に様々なおかずが詰められている。家で食べるには少しもったいない気もしてしまっ。

「まさか家でこんなに豪勢なものを食べることになるなんて……」

そう言って、口に食べ物を入れる。それを見ていたディアーチェが苦笑した。

「豪勢と言いながら最初に口に入れるのはおにぎりか。せっかく作ったのだ、遠慮はするなよ」

「そうだよシュウ！ ボクも手伝ったんだからいろいろ食べて！ ほら、これとか！」

レヴィが紙皿に焼き魚を盛りつけ、シュウに差し出してくる。それを受け取る前に、その紙皿にさらにユーリが少し形の崩れたハンバーグを盛る。

「これは私が作ったんですよ！ 食べてくださいー！」

「では我はこれを勧めよう」

「私はこちらを」

ディアーチェは卵焼きを、シュテルは春巻きをさりげなく盛って。シュウの目の前に置かれた時には、おかずで山になっていた。

「うん、嬉しいんだけど……。ゆっくり食べさせてほしい、かな……？」

「そう言わずに食べるんだー！」

「ちょ、やめ、レヴィ……！」

レヴィがシュウの口へと半ば強制的に食べ物詰め込む。ユーリ

が楽しそうに笑い、シュテルが呆れ、ディアーチエが叱る。場所は変わってもいつもと同じ食事風景だ。

「むぐ、ぐ……。おいしい……」

「でしょー！ さあ、もっと……」

「いい加減にきなさい、レヴィ」

シュテルが注意したところで、レヴィは残念そうに手を引っ込めた。できればもう少し早く止めてもらいたかったが。とりあえず口の中のを租借して、のどの奥へと流し込んだ。

「ふう……。うん。本当においしい」

「そうですね。それを聞いて安心しました」

「少し早起きした甲斐があったというものだ」

シュテルとディアーチエが満足そうにうなずく。ただ、それを聞いたシュウは小さく首を傾げて、二人を笑顔で見た。

「つまりここに来たのは計画的だった？」

「……………」

二人がそろってそっぽを向く。凶星らしい。シュウは苦笑するが、悪い気はしない。今まではここに訪ねて来る者などほとんどいなかったのだ。こうして来てくれただけで、驚きよりも嬉しさの方が勝っていた。

わいわいと楽しげに食事を進める四人を見て、シュウは幸福感に包まれていた。

これを両親が見たらどう思うだろう。

そんなことを思いながら。

夕方。今度はシュテルたちの家で夕食を食べるために移動を開始する。昼食をご馳走になったからと断ろうとしたが、すでに準備は済ませていると押し切られてしまった。ありがたいのだが、どうにも申し訳なく感じてしまう。

どうにかして恩返しをしないとなあ。

前を歩く四人を見ながら、シュウは考える。この四人に自分ができることなどあるかが分からないが。

やがて、前を歩いていた四人が唐突に足を止めた。

「どうしたの？」

シュウが怪訝そうに聞くと、シュテルが振り返った。しばらく何かを考えていたようだが、仕方ないというように首を振り、言う。

「シュウ。すみませんが、先に向かっておいってください。少し用事ができました」

「ん……。別にいいけど、用事って……」

内容を聞こうとしたところで、これもまた突然不思議な感覚がシュウを襲った。気がつくのと、周囲の雰囲気が変わっている。自分たち以外の人がいなくなり、とても静かになった。

「ああ、魔法関係か……」

シュウがつぶやく。仕方ないね、と四人を見ると。

全員が目を丸くしていた。

「え？ あ、の、シュテル……？」

シュテルは無言。静かに目を閉じ、ため息をついた。

Side:Stern

アースラのエイミィから念話での通信が入る。

『ごめんね、シュテルちゃん！ とりあえず結界の展開は完了したから、ロストログアの回収お願い！』

緊急の依頼として舞い込んできたものは、もうすぐこの近辺に出現するだろうロストログアの回収だ。緊急の依頼は今に始まったことではないのでそれは構わない。最近少し多くなってきた気がするが、そんなこともあるだろう。しかしそれよりも。

『エイミィ・リミエッタ。また一般人が巻き込まれています』

『えっ！ 嘘！ 誰？ 知ってる人？』

『シュウだ。貴様らは何をやっておるのだ』

念話に割り込んできたのはディーアーチェだ。その声は少し不機嫌そうであり、実際表情もかなり険しいものになっている。

『ええっ！ 確かに結界の設定も調整もしたはずなのに……。おかしいなあ……』

少し考える時間があり、そして唐突に通信の設定が切り替わった。念話から、実際に声が聞こえるものへと。

「こちらエイミー。シュウ君。聞こえるかな？」

どこからともなく聞こえてくる声にシュウがわずかに驚くが、すぐに笑顔になる。

「聞こえますよ。オペレーターさん、でしたっけ」

「うん、そう！ ごめんね、また巻き込んだじゃって……。もう一度設定を見直して原因を究明するから……！」

エイミーの申し訳なさそうな声にシュウは苦笑する。どうやら前回のことである程度慣れてしまったようだ。

と、突然、分かった！ というエイミーの明るい声。

「シュウ君は人間じゃないんだ！ だから結界に巻き込まれるんだ！」

「……………」

重い沈黙が周囲を支配する。あ、あれ？ とエイミーの困惑した声だけが響く。

「エイミー……………」

別の声。執務官、クロノの声だ。

「エイミー・リミエッタ。あとでゆっくりお話をしましょうか」

シュテルの静かな声。エイミーが狼狽したような声で、

「……………めん！ ちょっと場を和ませようとした冗談のつもりで……………」

「……………」

「管理局。あとで訓練室を貸せ」

そう言ったのはディアーチェだ。エイミーがさらに慌てる。

「待って何をするつもりかな……！」

「エイミー、言い残すことがあれば今のうちに考えておくんだ」

「見捨てられたっ？」

ぎゃあぎゃああと通信で騒ぐ。シュテルはそれを聞きながら、小さくため息をついた。ふと見ると、シュウは腹を抱えてうずくまっている。

「ぶ……………く……………」

どつやら噴き出すのを必死に堪えているらしい。シュテルはそのシュウの様子を見ながら薄く微笑むと、

「さて、では冗談は置いておきまして……。始めましょうか」
出現した上空の光の奔流を鋭く見据えた。

出現したロストロギアの封印後、シュテルは一人アースラに來ていた。夕食の支度は王に任せている。待っているから早くしろ、とのことだった。

「失礼します」

ブリッジに入ると、すぐ側に艦長のリンディが待機していた。お疲れ様、と笑顔で出迎えてくれる。

「こちらが封印したロストロギアです」

そう言って、シュテルは小さな箱を差し出した。どういった効果を持ったロストロギアか分からない。リンディはそれを受け取ると、そのままクロノに渡した。

「ありがとう、シュテルさん。クロノ、あとはよろしくね」

「はい、分かりました」

クロノが一礼して去って行く。それを見送った後、リンディは改めてシュテルに向き直った。

「またあの子を巻き込んでしまったけど……。その後の様子はどうか？」

すぐにシュウのことを言っているのだろうと察しがつく。そうですな、とシュテルは少し考え、意趣返しをすることにした。

「自分の正体について思い悩んでいましたよ」

「う……」

奥の方からエイミィのうめき声。リンディがくすくすと忍び笑い。

「冗談です。特に何も。ただあまり気にしないでほしいとの伝言を預かっていきます」

「そう……。わざわざありがとう。でも何かしらの形で何かお詫びをします、とだけ伝えてもらえませんか？」

「はい。承りました」

うなずき、そしてきびすを返す。ブリッジを出ようとしたところで、

「立て続けにロストロギアが飛来するなんて……。何が原因なのかしら……」

そんなつぶやきが聞こえてきた。

Side:Hero

「あ、おかえり」

テーブルに夕食を並び終えたところで、シュテルが戻ってきた。ただいま戻りました、と律儀に返事をしてくれる。

「戻ったか。では夕食にするぞ」

「はい」

ディアーチェが言って、それぞれの席につく。皆で手を合わせ、いただきます、と同時に言う。今日もいつもの夕食が始まる。

「それにしても、今日は本当に驚いたなあ」

シュウの言葉に、シュテルが申し訳なさそうに眉尻を少し下げた。

「すみません、シュウ。次からは必ず連絡します」

「あはは。別に大丈夫だよ」

笑いながら返事をして、

「またいつでも来てね」

と付け足す。それを聞いたシュテルはしっかりとうなずく。

「はい。必ず」

シュテルの言葉を聞いて、シュウは嬉しそうに微笑んだ。

第九話 読書

ある日の放課後。シュウは行きつけの書店に立ち寄っていた。店主に会釈して、おもしろそうな本がないか探し始める。

「……………あれ？」

見つけたのは本ではなく人だった。推理小説のコーナーで見知った人が立ち読みをしている。確かに家でもよく本を読んでいるところを見かけるが、こんなところで会うとはさすがに思わなかった。

「ディアーチエ？」

呼びかけてみると、ディアーチエが振り向いた。シュウの姿を認め、少し驚いたように眉を持ち上げる。

「なんだ、シュウか」

そう言ったディアーチエはすぐに視線を本へと落とした。熱心に読みふけっている本が気になり、そっと下からのぞいてみる。推理小説だった。

「気になるなら言えばいい。タイトルくらい言っぞ」

ディアーチエの呆れたような目。自然と視界に入るだろうから当然と言えば当然か。シュウは照れたように頬をかき、姿勢を戻す。

「推理小説が好きなの？」

「推理小説が、というわけではない。目についたものを読んでいるだけだ」

そう言つと、ディアーチエは本を閉じて棚に戻す。次の取ったのは、その右側の棚からだ。「こちらは今はファンタジー小説のコーナーとなっているらしい。ディアーチエはタイトルと表紙を確認すると、すぐに読み始めた。

シュウは、「このまま」にいてもいいのだろうかと少し悩む。読書中の人間に声をかけ続けるほど無神経な人間ではない。素直に自分も本を探るのが得策だろうと判断してその場を離れようとしたが、ディアーチエ本人から呼び止められた。

「探している本でもあるのか？ 我でよければ手伝うが」

「あ、いや……。僕もおもしろそうな本がないかなって探してるだけだから。……よく読みながら話せるね」

「それぞれに意識を向けているだけだ。魔導師ならこれぐらいはできて当然のことだぞ」

それはすごい、と素直に感心する。同時に便利そうだな、とも。

「僕でもできるよつになるかな」

「我が知るか」

素っ気ない返事だ。シュウは苦笑すると、先ほどまでディアーチェが持っていた本を手を取った。聞いたこともない推理小説だ。

「これ、おもしろかった？」

「いや」

え、とシュウはわずかに驚く。あれだけ熱心に読んでいたのならおもしろいのだろうと思ったのだが。

「展開稚拙、伏線回収不足、犯人の動機が逆恨みな上に犯行方法はご都合主義。三流もいいところだ」

「言いたい放題だ……。！ なんで読んでたの？」

「読みかけたからだ。それ以上の理由はない」

それよりもこちらを勧める、とディアーチェは本を読みながら起用に棚の本を引き抜いた。その本を受け取りタイトルを見てみるが、これも聞いたことのないものだ。

「まあ……。ディアーチェが言うならきつとおもしろいんだろうね。どれどれ……」

シュウも本を読み始める。「こちらはディアーチェのように器用ではないので会話と並行することはできない。ディアーチェもそれを分かっているのか、シュウが読み始めてからは話しかけなくなった。

どれぐらいの時間が経っただろうか。ディアーチェに肩を叩かれながら振り返ると、あきれ果てたような表情がそこにあった。首を傾げながらも時計を確認して、すぐに理由に思い至る。もう午後七時だ。外はかなり暗くなっている。

「ずいぶんと集中していたな。気に入ったのなら、勧めた我としても満足だ」

シュウは本を閉じて、照れくさそうに笑った。

「うん。おもしろいね、これ。気に入ったよ」

「そうか」

「もうちょっとで読み終わるから、あと三十分待つて」

「そう……。待てー！ シュテルに何と言えば……！」

ディアーチェが慌て始めた時には、シュウはすでに読書を再開していた。そこからは、もう声をかけても反応しなくなった。

シュウは三十分と言ったが、実際は十分ほどで読み終えていた。ふう、とどこか満足したようなため息をつき、本棚へと本を戻す。それを確認して、ディアーチェは長々とため息をついた。

「まったたく……。早く帰るぞ。今頃レヴィが騒いでいるだろう」

ディアーチェが本を抱えてそう言って、カウンターへと消える。一瞬しか見えなかったが、先ほどまでディアーチェが読んでいた本がまざっていたと思う。読み終わらなかったのだろうか。自分だけが読み終わるまで待たせてしまったことに後悔する。

ディアーチェを追ってカウンターへ向かうと、店主と目が合った。

「なんだ、知り合いか？」

店主が気さくに笑いながら言う。シュウがうなずくと、ふむ、と店主は手をあごに当てる。少し考え、にやりと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「シュテルちゃんがいるのにこんな子ともお近づきになっているとは……。やるなー」

「いや違うから！ 思っている関係と絶対に違うから！」

分かっている皆まで言うな、と店主が手を上げる。今度はディアーチェに向き直ると、少し驚いている様子のディアーチェに笑顔を向けた。

「その本は持っていつてくれていいよ。二股かけてる彼氏さんに出してもらうから」

「いや色々とおかしいよー」

その後、関係を説明するのにさらに十分の時間を要した。シュテルとの関係から始まり、最近夕食をこ馳走になっていることまで。もちろん魔法のことは伏せておいたが。

全て聞き終えた店主は、自分のことのように嬉しそうだった。

「そうか。最近明るくなったのはそのためか」

え、とシュウが間抜けな声を上げる。店主はその間にディアーチェへ、今度は真剣な表情を向けた。

「この子と仲良くしてやってくれ。強がってばかりいるが、寂しがり屋なんだ」

シュウが驚いて目を瞠った。予想以上に店主に観察されていたらしい。気恥ずかしくなって何も言えなくなる。ディアーチェはそんなシュウを一瞥して、店主につなずいた。

「言われるまでもない」

すっかり暗くなった夜道を二人は歩く。向かうはマンションだ。隣を歩くディアーチェは黙ったまま何も言わない。シュテルと念話をする、と言っていたのでシュウも邪魔しないようにただ黙々と歩く。

シュウの右手には紙袋が握られている。中に入っているのはディアーチェの本だ。結局店主から譲られる形になってしまった。その代わり、シュテルと同じくディアーチェにも時折顔を出すように言っていたが。

やがてディアーチェが小さくため息をついた。どうやら念話は終わったらしい。

「終わったぞ。寄り道せずに戻ってくるように」とのことだ」

「あはは。怒ってるかな？」

「誰のせいだと思ってる」

まったく、とディアーチェは呆れるが、その表情は柔らかい。

「とじろで、この本……読んでなかった？」

疑問に思っていたことを聞いてみると、ディアーチェは、そうだが、

と当然そうにうなずいた。どうやら何を聞かれたのか理解してないらしい。シュウは少し考えて、なるほどうなずいた。

「そっか、これはシュテルにか」

「ああ。あやつもよく本を読むのでな。お互いにおもしろいと思う本があれば、こうして相手にも勧めている」

なるほどね、とシュウはうなずいた。続いてもう一つ聞いてみる。

「あの書店は、もしかしてシュテルから聞いたの？」

「そうだ。そう言えばシュテルはシュウから聞いたと言っていたな」

ディアーチェは足を止め、シュウを見る。シュウもすぐに立ち止まって振り返った。

「良い店主、良い書店だ。あの男性もなかなかおもしろいやつだ。これから通わせてもらおう」

ディアーチェがうなずきながら言つのを見て、シュウは少し嬉しくなった。自分にとっても、あの書店は常日頃からお世話になっている。こうしてあの書店の常連が増えるというのは喜ばしいことだ。

再びディアーチェが歩き出し、シュウもその隣を歩く。しばらくお互いに無言で歩いていたが、やがてディアーチェが口を開いた。ただ、珍しいことにその声は少し聞き取りにくいぐらいには小さかったが。

「よければ、その、なんだ……。我一人では少々行きづらいというものもある。あそこに行く時は声をかける。だから……」

「うん。一緒に行くよ」

ディアーチェは少し目を丸くし、すぐにわずかに笑みを浮かべた。

夕食後。シュウとディアーチェはテーブルに向かい合って座っていた。お互いに難しい表情をして、押し黙っている。シュウの隣にはシュテルがいて、こちらはとある本を読んでいるところだ。

「なるほど、そういう捉え方もあるか……」

そうつぶやいたのはディアーチェだ。視線をシュテルの持つ本に向け、ふむ、と腕を組む。

「ディアーチェの言う方が多分正しいんだろっけど、僕はそう感じた

かな」

二人が話しているのは、ただの本の感想だ。お互いに自分はこう思ったというのを話している。その本は、現在シュテルが読書中だ。「しかし、その考え方なら、あの犯人の動機に矛盾が発生するぞ?」「うん。でもその動機に關してもさ……」

楽しげに二人で話を進める。その部屋の隅では、レヴィとユーリがテレビを見ている。二人も最初こそ話を興味深そうに聞いていたが、すぐに飽きてテレビへと行ってしまった。そしてシュテルは、いつもの定位置で本を読んでいるだけなのだが、どこか不機嫌そうだった。

「そうなる」と犯人はずいぶん和阿呆だな。恋人を殺してそれだと報われん」

「まあそうなるよね」

びっくり、とシュテルの眉が動いた。だが何事もなかったかのように時間は進む。

「これは是非ともシュテルの意見を聞かねばならんな」

「うん。今どのあたりかな? 妹が犯人だって名乗り出たところかな」

「……………」

シュテルが小さくため息をつく。本を閉じてそっとテーブルに。そしてシュウとディアーチェを順番に見る。

すぐに悟った。これは怒らせてしまったらしい。

「シュウ」

「……………」

「ディアーチェ」

「……………」

呼ばれて、二人は静かに返事をする。

「一言だけ言わせてください。うるさい、と」

「……………」

「……………」

神妙な面持ちで謝罪を口にする二人。シュテルはそんな二人に満足したのか、再び本を手にとって読み始める。シュウとディアーチェ

はしばらく押し黙っていたが、目が合うと苦笑を交わした。

その二人の様子にもシュテルはすっかりと気づいていたが、今回は何も言わない。ただ少し嬉しくは思う。本の議論など今までやっていなかったことだ。二人で帰ってきた時は何かなかっただろうか少し心配したのだが、どうやら少しは仲良くなったらしい。

喜ばしいことだと納得しているが、同時に少し苛立ちも感じる。そんな自分の感情に自分が一番戸惑ってモいる。

そのシュテルの感情の揺れ動きなど知らない二人は、

「シュウ。推理小説ではこの本が一番おもしろい。読んでみるがい」

「お、ありがと。じゃあ僕はこの本を勧めておくよ。ファンタジーでは一番おもしろかった」

お互いに本を差し出して読書が始めていた。

第十話 縛鎖

「あー！流れ星！」

車の中。隣で嬉しそうに叫ぶ妹。呆れる自分。

「何言ってるの。今は昼だよ」

「ほんとだよー！ほんとに流れ星だよー！ほらー！」

必死な声。窓の外を示す小さな手。そちらへと目をやる自分。そして見つける、こちらへと向かってくる光の塊。

そして……。

「っー」

シユウはかつと目を見開き、飛び起きた。混乱した頭で周囲を見回す。見慣れた自分の部屋で、窓からは朝日が差し込んでいる。少しだけ寝過ごしてしまったらしい。

「……夢、か……」

忘れてたくても忘れられない、昔のこと。時折夢に見ては、こつやつて飛び起きる。忘れるなという警告だろうか。そんなものなどなくとも、忘れられるはずがないというのに。

気分のいい目覚めだとは到底言えない。もう一度寝ようかとも思ったが、朝日を見てしまつと寝ようとも思えなくなってしまう。仕方なくシユウは着替え始める。が、途中で動きを止めた。頭痛がひどい。

「あー……。まあ、そつだよね……」

あの日の夢を見た後はいつもこつだ。だが普段は我慢できる痛みなのだが、今日はひどい。あまりの痛みで、立ち上がるうとした時に意識が飛びかけた。立ち上がるだけでこれなら、歩くとどうなるのか。考えるだけでも嫌になる。

シユウはまたため息をつくと、ゆっくりとした動作でちゃぶ台に置いてある携帯電話に手を伸ばした。

学校は……。休もう……。

休む旨を連絡した後、再び布団に横になる。だが、何かを忘れている気がする。そしてそれはすぐに思い出した。

呼び鈴が押される。部屋に音が響く。シュテルが弁当を持ってきてくれたのだろう。シュウはのろのろと立ち上がると、頭痛がひどくならないように注意しながら玄関へと向かう。ドアを開けると、果たしてシュテルがそこにいた。

「おはようございます、シュウ……。大丈夫ですか？」

シュウの顔を見た瞬間、シュテルがわずかに眉を寄せる。シュウはどうか笑顔を作ると、

「おはよう、シュテル。大丈夫だよ。元気」

「無理しないでください。上がりますよ」

シュテルは靴を脱ぐと、シュウをすぐに支える。そしてそのまま部屋の中へ。無理をしているのがすぐにはれてしまったらしい。

かなわないなあ……。

心の中で苦笑して、シュテルに連れられて布団に座る。

「風邪……ではないようですね。熱もありません」

「うん。ただの頭痛だよ。ちよっと昔の夢を見て……」

「昔の夢、ですか」

シュテルの表情がかすかに曇る。そのことには気づかず、シュウは続ける。

「ちよっと嫌なことを思い出したただだよ。あまり気にしないで」

シュテルはしばらく黙っていたが、やがて小さな声で、分かりましたと返事をした。立ち上がり、流しに向かってコップに水を入れる。それをちゃぶ台に置いて、シュテルはすぐにきびすを返した。

「朝食でも買ってきてみましょう。何がいいですか？」

「じゃあお言葉に甘えて……。あ、でも任せるよ」

「分かりました」

シュテルが部屋を出て、ドアの閉まる音が続いて聞こえてくる。シュウは力なくため息をつくと、布団に横になった。心配させまいと強がってみたが、逆に心配させてしまったようだ。

「じつにも……だめだなあ……」

自分はシュテルの隣にいてもいいのだろうか。離れた方がいいのでは。そんなことばかり考えてしまう。シュテルが聞けばきっと呆れられてしまうのだろうか。そんなことを考えている間に、シュウは再び眠りに落ちた。

白い部屋で眠る妹。二度と立ち上がることでできなくなった妹。自分を薄気味悪いもののように見る両親。運ばれていく棺。泣き崩れる知らない人々。走馬燈のような光景。

夢だ……。

なんて分かりやすい夢だろうか。過去のものばかり見せて、何の嫌がらせだろう。

目の前に並び立つ知らない大人たち。友人だと思っていたクラスメイトたち。そして、自分の両親。

気味悪い……。

呪われた子だ……。

疫病神め……。

聞きたくない。だが耳をふさいでも聞こえてくる。当然だ。これは夢なのだから。なんてたちの悪い夢だ。

最後に目の前に立つのは、いや、目の前で這いつくばっているのは、自分の妹。恨みがましく睨み付け、呪詛を吐き出す。

いやだ……。聞きたくない……。

お兄ちゃんなんかいなければ……。

Side:Stern

シュウの部屋に戻ると、ひどくうなされた声が聞こえてきた。慌ててシュウに駆け寄ると、苦しそうに喘いでいる。目からは涙が流れ、息も荒い。とてもではないが、黙って見ていることなどできない。

「シュウ」

シュウの肩を握り、軽く揺さぶって呼びかける。だが治まらない。「シュウー」

強く、叫ぶように呼びかけ、頬を軽く叩く。するとシュウがゆっく

りを目を開き、シュテルを見る。焦点が合っていない。

「シュウ、大丈夫ですか……?」

問いかけ、少し待つと、シュウの瞳の焦点がようやく合ってきた。シュテルの姿を認めたのか、安堵の表情を浮かべる。

「シュウ……」

もう一度呼びかけると、シュウはシュテルの手を掴んできた。少し驚いてしまい、だがシュウの手が震えていることに気がついて首を傾げる。

「じゅん、シュテル……。ちょっとだけ、このままで……」

弱々しい声がシュテルの耳に届く。シュテルはわずかに困惑しながらも、シュウの手をしっかりと握り返した。

「はい。私はちゃんとここにいますよ」

十分近くもそのままの体勢で過ごし、やがてシュウがゆっくりと体を起こした。

「もう大丈夫ですか?」

「うん。じゅんね」

申し訳なさそうに謝る少年。その姿はとても儚く見えて、今にも消えてしまいそうに思える。

「ちょっと昔の夢で……。こんなにひどいのは久しぶりだけど……って、ああそうか……。今日は何日だった」

シュテルは首を傾げながらも口付を答えると、シュウは得心したようにうなずいた。

「それでか……。去年と同じだ。去年の今日も、頭痛と夢がひどかったから」

仕方ないね、と自嘲する。心の底から自分を嫌悪しているような笑みだ。自分の存在を否定してしまっような笑み。

「今日が、どうかしたのですか?」

おそろおそろ聞いてみると、シュウが小さく首を振る。

「ただの事故。二年前にね。まあそれが発端で僕は追い出されたわけだけ」

「事故が原因で？ 何故？」

シュウが無表情にシュテルを見つめてくる。踏み込みすぎただろうか、と不安になっていると、やがてシュウは悲しげに微笑んだ。

「つまらない話だよ？ どこにでもあるような、そんな話」

それでも聞きたい？ と視線で問いかけてくる。シュテルは迷わずうなずいた。

「はい。教えてください。貴方のことを」

S i d e : P a s t

最初は本当に些細なことだった。シュウがまだ四歳の頃、保育園で両親が迎えに来るのを待っていた。いつもの日常。いつもの光景。シュウは友達と一緒に保育園の遊具で遊んでいた。

そこに降ってきたのは小さな石。どこから飛来したかも未だ分かっていない。その石はシュウたちの保育園へと落ち、小さいながらも爆発を引き起こす。石の落下地点の側にいた園児数名が重軽傷を負う。シュウもその中にいたが、幸い擦り傷程度だった。

これが、一回目。

それから数ヶ月後、再び同様の事件が起こる。今回は日曜の公園で。子供を連れて遊びにきている人などが大勢いた中に、また石が落ちてきて小規模な爆発を起こす。幸い死者などはいなかったが、人が大勢いたために被害は前回よりも多くなった。その時もシュウは両親に連れられてそこにいて、擦り傷だった。

それが、二回目。

一度や二度ならまだいい。誰もが大不運な事故だと思う。二度も被害にあった被害者だと皆が同情する。

だが、三回目からは周囲の反応は変わってきた。

三回目はデパートの屋上。遊戯コーナーがあり、そこに落ちた。そこにはまたしてもシュウが居合わせる。三回の落石の事故に必ず居合わせる子供。それに最初に気づいたのは、幼稚園での友人だった。

「しゅっいちくん、またなの？ さんかいとも、ぜんぶだねー」

聞いたのは、その子の母親。それを聞いた母親は周囲に警告を発す

る。あの子は危ない、と。最初は誰も相手にしなかったが、四回目、五回目と続くと同調する人が増えてきた。

そして、シュウが五歳になる頃には、シュウに近づく人は誰もいなくなっていた。よく遊んだ友人ですら、シュウに近づくことはない。保育士ですら極力関わろうとはしてこない。どこに行っても、孤独になった。

唯一の例外が両親と妹だった。両親は、気にすることはない、いつか分かってくれるとシュウを慰め、妹はまだよく分かっていることもあったのだろう、純粹にシュウと遊んでくれていた。数少ない味方だった。

小学生になってもそれは変わらない。両親はシュウがいじめられるかもと不安に思っていたらしいが、まず近づくことを忌避されるがためにそれすらもなかった。

孤独のまま、ただ家族と共に過ごす時間が流れ。シュウの妹ももうシュウのことを理解していたが、それでも一緒にいてくれていた。

二年生に進級してからの休日。家族で山へとピクニックに行く予定だったが、急な仕事で両親は一緒に行けなくなった。その代わりに、隣に住む親切な人が一緒に行ってくれることになった。周囲と同調してシュウを避けてはいるが、そこまで気にしていない数少ない人物。その人が運転する車で山道を登る。

「あー！流れ星！」

車の中。隣で嬉しそうに叫ぶ妹。呆れる自分。

「何言ってるの。今は昼だよ」

「ほんとだよ！ほんとに流れ星だよ！ほら！」

必死な声。窓の外を示す小さな手。そちらへと目をやる自分。そして見つける、こちらへと向かってくる光の塊。

そして……。

石は車へと直撃した。車は道から逸れ、崖下へと転落する。回る視界。よく分からない浮遊感。次に目を覚ました時には、我が目を疑った。

運転席の人は、死んでいた。どんな死に方をしていたかは覚えてい

ない。思い出そうとすると吐き気を催す。おそらくとても悲惨な死に方だったと思う。

隣の妹は、両足が折れ曲がった車のボディに潰されていた。呼吸はあるため、死んではない。

そして自分は。

かすり傷だった。腕や足をすりむいただけ。ただ、それだけ。

幼心にも異常性を感じてしまう。同乗している二人だけが被害を受け、自分はほぼ無傷。運がいい、とはとてもではないが思えない。

助けを求め車から出ようとしたが、ひしゃげた車内から出ることはできなかった。

それから数時間が経過して。

駆けつけてきたのは両親だった。どうやって知ったかは分からないが、シユウと妹の二人を助け出すと、さめざめと泣いていた。その腕の中で、シユウは安心して眠りへと落ちていった。

病室で目を覚ました時には、状況は一変していた。

両親までもが、シユウを避けるようになっていた。退院の時に迎えに来た時も、最低限の会話しか交わさなかった。

シユウはすぐに退院して、向かった先は、葬儀場。誰の葬式かは、言わなくても分かる。運転をしていたあの人だ。家族だろうか、みんなが泣いていて、シユウに気づいた多くの人が敵意をむき出しにしてシユウを睨んできた。ひそひそと、シユウに聞こえない声で会話を交わす。時折漏れ聞こえてくる声は、死神、呪われた子、など。

唐突に一人の女性が立って、

「あんたさえ……あんたさえいなければ……！」

女性は周囲の大人が取り押さえ、シユウ自身も周りの大人に連れ出されていた。

病院では妹が目を覚ましていた。シユウを見て、妹は不可解なものを見るかのように目を細める。そして言った。

「じじいとお兄ちゃんは元気なの？」

「じじいして私だけこんななの？」

「どうして私だけ、歩けないの？」

シュウは何も答えられない。ただただ黙ってうつむいて。

「お兄ちゃんさえいなければ、私は元気だったの？」

幼い妹の言葉。ただそれだけ。ただそれだけのはずなのに、今までで一番心を抉った。

自分さえいなければ。その時は本気でそう思った。

そして自宅ではさらに追い打ちをかけられる。

「住むところと金は用意してやる。学校も手配しよう。明日には家を出る」

父の言葉。

「貴方がいると、わたしたちの家までが壊れちゃうのよ。分かるでしよう？」

母の言葉。

味方は誰もいなくなった。

そうしてシュウは、両親に連れられて遠くの土地へとやってきて。

そこで一人残されて、今に至る。

ただの、無知で不運な子供の話。

Side: Hero

「こんなところ、かな」

話し終えたシュウは、小さくため息をついた。シュテルは黙って聞いてくれていた。それがとてもありがたい。人に話したためか、少し気が楽になった気もする。

「そんなこんなで、僕は家族にも見捨てられて一人暮らし。ここに来た当初は、他人との関わりも絶ってたくらいだよ」

外に連れ出してくれたのは、今の学校の教師だ。不運すぎるが、君は無害だと無理矢理外に連れ出された。また誰かが傷つけば理解するだろう、そう思っていたが、妹との事故以来、石が降ってくることもなくなった。

「僕が引き寄せてたのか、ただの不運なのか、今でもそれは分からない

けど……。少なくとも、僕と一緒に出かけなければ、あの人は死ぬことはなかったし、妹も不自由なことにならずにすんだとは思ってる。事故の後だから何とでも言えるだけかもしれないけど」

シュウはシュテルの表情を見る。うつむいて、何かを考え込んでいた。シュウは苦笑する。

「もしこれ以上僕といるのが嫌になったなら、気にしないでいいよ。連絡しないようにするから、シュテルも……」

「それはないので気にしないでください」

即答だった。何かを考え込んでいたはずなのに、あまりの返事の早さに思わず啞然としてしまう。自然と笑みがこぼれた。

「……ありがとう」

「お礼を言われるようなことは何もしていませんが……」

本気で意味が分かっていないようにシュテルは首を傾げていた。それが、そのことがとても嬉しい。

「ようこそ、シュウ」

「んっ」

話し終えたところで空腹感を覚え、シュウはシュテルが持って帰ってきたビニール袋を見る。シュテルが無言で差し出して、シュウは恥ずかしそうにそれを受け取って中を漁る。

「『両親のことですが』

「ひっ」

おにぎりとプリン、ゼリーがあった。シュウはおにぎりを取り出して、包装をとって。口へと運び、

「本当にシュウを見捨てたのですか？」

そっぴたりと動きを止めた。

「……どうして？」

「『この世界のことなので私は正確には知りませんが、私立の学校というのとてもお金がかかるものだと聞いています。本当に見捨てたのなら、わざわざそんなお金を出すでしょうか。むしろそもそも、まあ質はともかくですが、住む場所まで用意して。体面もあるのかもしれませんが、少し不可解だと感じました』

「……………」

「シュウ。貴方のご両親は、そこまで貴方を嫌ってなどいないのでは……………」

「やめて」

力のないシュウの声。弱々しい声だったのに、シュテルはそれ以上続けることができなくなっていた。シュウは目を閉じ、小さく首を振る。

「これでも……………割り切るのに苦労したんだよ。明日には迎えに来てくれるって、何度も思ったんだ。今更……………そんな希望なんて……………いらない、よ……………」

少しづつ、声がかすれていく。いつの間にか、涙が溢れていた。

シュウは大人びているが、実際には普通の小学生だ。親が恋しくなはずがなければ、一人で寂しくないはずがない。今まで多くのことを耐えてきたのだろう。それを察したのか、シュテルは目を閉じ小さく頭を下げた。

「すみません。忘れてください」

「……………うん。僕の方こそごめんね。心配してくれたのに」
いえ、とシュテルは首を降った。

重たい沈黙が部屋を支配する。シュウは急いでおにぎりを食べてしまつと、努めて明るく言った。

「ちあてー！ 今のごとは忘れて！ 今日は何しようかなー！」

シュテルはそんなシュウを見て、少しだけ寂しげに微笑んだ。

昼食を食べて、その後は何もすることがないという理由で場所を移動することになった。向かうのはもちろんシュテルたちのマンションだ。しっかりと戸締まりを確認して、アパートを出る。

そして絶句した。

「どっしました？ シュウ」

目の前で立ち止まったシュウを心配してシュテルが声をかけてくる。続いてシュウの目の前にいる人物を見て、さらに首を傾げる。

黒髪黒目、スーツ姿の男。年は自分の記憶に間違いがなければ三十

五歳だ。

「……お父さん」

「……っ」

シュテルが驚いて目を見開く。シュウはただ黙って相手を見据える。今頃何しに来たとしても言つようじ」。

「……」

父は何も言わない。ただ黙ってシュウを見ている。シュウも無言で睨み続ける。やがて父は、なぜか満足したようにうなずいた。

「生きているようじゃ何より」

「……」

「その子は友達か？」

父がシュテルを見る。シュテルは小さく、どうも、と会釈をする。

「ふむ。私たちに多くの迷惑をかけてしぶとく生きているかと思えば、友達まで未だ懲りずに作っているとは」

シュテルの目がゆっくりと細められる。不快感を露わにしているが、シュウは気にしないでと笑いかける。

「最低限のお金はもらっているのです。いつも感謝しています。お父さん」

「当然だ。しかし……」

尊大な態度を崩さない父。いつからこうなったのだろうか。昔はとても優しくかったのに。父はシュテルを少し観察して、鼻で笑った。

「お前にはふさわしい友達だな。平日の昼間に遊びほつけるなど、くだらない人間……」

「黙れ」

シュウの冷たい声。父が思わず言葉を止める。

「いろいろと迷惑をかけた、いや今もかけてるから、僕のこととは好きに言っつていいよ。でも、シュテルは僕の大事な人だ。あなたでも、悪く言っつのは許さない」

父を睨み付けて言い捨てるシュウ。父は驚いているようだったが、小馬鹿にするように鼻で笑う。シュウからシュテルへと視線を移し、

「……っ」

シュテルが目を大きく見開き、息を呑んだ。こんな反応を見るのは初めてだ。

「今日は少し確認しにきただけだ。これでも忙しいからな。せいぜいがんばることだ」

父はそう言い残し、歩き去って行く。シュウはただ黙って見送るだけだった。

Side:Stern

マンションへと向かう途中、シュテルはシュウに鍵を預け、先に向かってもらうことにした。自身はシュウを見送った後、別の場所へと転移する。たどり着いたのは、アースラだ。

ブリッジに向かうと、艦長のリンディがにこやかに出迎えてくれた。

「あら、いらっしやいシュテルさん。今日は何も仕事がなかったはずだけど、どうかしたの？」

「はい。個人的に貴方をお願いしたいことがあります」

私に？ とリンディが驚いて聞き返す。シュテルからの個人的な依頼など滅多にないので驚くのも当然だろう。むしろリンディに対しては初めてかもしれない。

「ある人物のことを調べてもらいたいです。管理局の過去の局員から含めて」

「誰かにもよるわね……」

「シュウの父親です」

リンディが眉をひそめる。どういふこと？ と真剣な表情で問いかけてきた。

「先ほど、シュウの父親とお会いしました。その時に……」

そこで一度言葉を切り、目を閉じる。これを言えばもう引き返せないが、少しでも真実に近づけるなら。目を開き、告げる。

『息子に関わるな』という念話を送られました」

「……」

リンディが息を呑む。信じられない、といった様子で。そしてシュ

テルは最後の言葉を告げた。
「シュウの父親は魔導師です」

Side: Past

事故の直後、自分と妹を抱く両親。暖かな白い光が自分たちを包んでいた。自分と妹の小さな傷がふさがっていく。それを見て、シュウは、どこか楽しそうに笑った。

魔法みたいだ……。

シュウがつぶやく。両親がそれに気づき、優しく微笑む。

そうだよ、お父さんたちは魔法使いなんだ。

優しい声。シュウはすごいなと笑う。

だから安心しておやすみ。

そこで突然シュウは眠りへと落ち、短い記憶は奥深くへと封じられた。

第十一話 ハンバーグ

学校が終わってからの放課後。シュウはいつも通りにシュテルたちのマンションに行く。呼び鈴を鳴らして少し待つ。反応がない。

「出かけてるのかな？」

どこかで時間を潰そうかと判断してきびすを返そうとした時、ドアが勢いよく開かれてユーリが飛び出してきた。その表情は焦りの色で染まっている。

「シュウー 助けてくださいー！」

「ど、どうしたの？」

あまりの剣幕にシュウは驚くが、その後の異変で全てを察した。部屋の奥から何かが焦げるような嫌な臭いが流れてくる。そしてユーリはエプロン着用。シュウは慌ててキッチンへと向かう。フライパンから黒っぽい煙のようなものが立ち上っていた。

「なにこれなにやったの！ー！」

「ハンバーグを作ろうとして……！」

「燃えたの？」

「燃えちゃいました！」

そつとフライパンに近づいてみる。すでに火は消されていて、焼かれていたハンバーグらしきものも炭化しているものの燃えてはいない。消化はした後らしい。

「どっやって消したの？」

「これで、です！」

シュウが振り返る。それを見た瞬間、思わず頬が引きつっていた。ユーリの背中から赤黒い翼のようなものがはえている。自己紹介でもするかのように、翼はいろいろな形に変形していく。聞くところによると、これが魄翼というものらしい。

魄翼が少し伸び、フライパンを包み込む。こうして空気の侵入を防いで鎮火したらしい。

「無理矢理だね……。それは熱くないの？」

「はい。これも魔法みたいなものですし」

そつとフライパンを流しへと入れ、ユーリは魄翼を消した。その表情は少しだけ得意気にも見える。

「後処理ができているなら……。助けてほしいことって？」

それを聞いたユーリはすぐに泣きそうな表情になった。

「シユウは……。料理ができますか？」

「料理？ 得意ではないけど、まあ少しぐらいは」

書店で料理の本を借りて、一人で作ったことも何度かある。簡単なものしか作れないが、同年代の子には負けない自信ぐらいはある。

いや、さすがになのはやはやてには勝てないか。

なのはは喫茶店の子だと聞く。料理ぐらい母親から教わっているだろう。はやては最初は自分と同じ一人暮らしで、家族ができてから料理は彼女がしていると聞く。たまにしか料理をしない自分とは比べるまでもない。

そんなシユウの心情など知らずに、ユーリはぱつと顔を輝かせた。

「教えてください！ ハンバーグの作り方！」

「…………え？」

ぺたぺたとユーリが肉をこねる。シユウは隣で静かに見守る。シユウの手には料理の本。ハンバーグの作り方は覚えていないので、ここから指示を出している。手伝おうかとも思ったが、どうやらユーリは自分一人の力で作りたいらしい。

肉をこねおえ、フライパンに火をかける。肉を楕円形にして、フライパンに載せていく。肉の焼ける香ばしい匂いが食欲をそそる。

「うん。いい感じだね」

シユウはそつと胸をなで下ろす。あれだけ騒いでいたわりには、ここまで順調にきている。見ていたところ、失敗らしい失敗もなかったので成功するだろう。そう思っていたのだが、ユーリの表情は未だに真剣そのものだ。

シユウはフライパンへと視線を落とし、少し首を傾げた。先ほどから、肉が少しずつ膨らんできているよつな気がする。そう思っていた

直後に、

「わっ……」

二人はそろって悲鳴を上げる。軽い音ともに、肉が破裂した。ユーリがどうしようどうしようどと慌てふためき、シユウはそんなユーリを宥める。

「とりあえず落ち着いて。まずは火を消して……あっち！」

破裂した肉がシユウの顔面に直撃する。顔をおさえ、流しの冷水ですぐに冷やす。その間もやはりユーリは一人慌てたままだ。むしろシユウに被害が及んだことでさらに追い詰められたようで、顔面蒼白になっている。

「ごめんなさいシユウ……ど、どうしましょう……どうすればいいですか……」

「落ち着いて！ とりあえず火を……火を消して！ あっっ！」

再び肉がとんでくる。ユーリが慌てて火を消したが、肉の破裂は治まらない。

二人で右往左往している間に、肉はまた完全に焦げ付いてしまった。

その後も本の書いてある通りに焼いていくが、失敗が続く。なぜこつも失敗ばかりなのか、隣に立つシユウですら分からない。

やがて最後の材料になり、ユーリが心配そうにフライパンへ肉を投下。緊張の面持ちでそれを見守るシユウ。

再び肉がふくれあがる。ユーリが泣きそうな表情をして、シユウが半ば本気で諦めた頃。肉は小さく破裂しただけで終わった。

「……ん？」

その後もそれぞれの大きな塊が何度か破裂したが、今までのような大事にはならなかった。せいぜい小さな欠片が大量にできてしまっただくらいだ。今までのことを思えば、十分成功だと言えるだろう。

ユーリは嬉しそうにシユウへ笑顔を向け、シユウも一度だけうなずいた。

「うん。まあ成功ってことでもいいんじゃないかな」

ユーリが歓声を上げる。今日見た中で最高の笑顔だ。それを見ただけで、今までのことが報われた気がした。

しばらくして、三人が帰ってきた。三人一緒の用事だったらしい。

「ただいま戻りました」

「ただいまー！」

「戻ったぞ」

シュテル、レヴィ、ディアーチエがそれぞれ口にして、そしてすぐに顔をしかめた。部屋は未だに少し焦げ臭い。シュテルとディアーチエはすぐに何かを察したらしく、小さく嘆息しただけだった。

「ユーリ。怪我はないか？」

そう言いながらキッチンへと入るディアーチエ。そこで待っていたのは、満面の笑顔のユーリだった。

「ディアーチエ！ 見てください、一人で作れました！」

テーブルの上のハンバーグを指し示すユーリ。皿に盛られたハンバーグは少し歪な形をしていたが、それでも一目でハンバーグと分かるものだ。ディアーチエは感心したように、おお、と驚いていた。次に流して洗う物をしているシュウを見て、事情を察したのかわずかに苦笑を漏らした。

「すごいぞ、ユーリ！ さすがは我らの盟主だ」

「えへへ」

ディアーチエに褒められて、ユーリが相好を崩す。だらしない笑みがそこにはあった。

その様子を見ながら、シュテルはシュウの隣へ。横に立ち、小さく頭を下げる。

「ユーリのお願いを聞いていただいたみたいですね。ありがとうございます。すぐに夕食の準備をします」

それを聞いたシュウは、少しだけ疲れたように微笑んだ。

今日もテーブルに夕食が並ぶ。メニューはもちろんユーリが作ったハンバーグだ。それぞれの皿に二枚と欠片が少しずつ。ただし

シュウの席にはない。

「あれ？ シュウは？」

不思議に思ったレヴィが聞くと、他の三人は一様に首を傾げるだけだ。

「今日はキッチンで一人で食べると言っていたな」

「私のせい、ですか？」

ディアーチェの言葉にユーリが怯える。これでも罪悪感ぐらいはある。それに、シュウにも食べてほしかったという思いもあった。

「連れてきますー！」

「あ、ユーリー！」

ユーリが隣のキッチンへと向かい、レヴィがそれを追いかける。シュテルとディアーチェは先に食事を始める。

「シュウー！」

キッチンに入ったユーリが叫ぶ。シュウはテーブルの前で、目を見開いて固まる。テーブルには皿に盛られたハンバーグ。

「……………」

よく見ると、それは焦げ付いた大量のハンバーグだった。成功するまでに失敗したものだ。ユーリがシュウへと視線を投げると、シュウは気まずそうに視線をそらした。

「……………」

そう言いながら、焦げたハンバーグを口に放り込む。ゆっくりと租借して、呑み込んで、笑う。

「………」

ユーリは無言。しばらくシュウのことを見つめていたが、やがて頭を下げた。

「………」

「………」

慌てたように言うシュウ。そして再びハンバーグを口の中に。

「ほら。早く食べないと冷めちゃうよ？ せっかく作ったんだから」

「……はい。」

ユーリが笑顔でうなずくと、レヴィと共にリビングに戻った。

ユーリが戻ってくる直前。

「我らも手早く食べて、シュウを手伝うぞ。さすがにあの量は一人で無理だろう。」

食事を進めながらそう言うディアーチェ。対するシュテルもうなずいて同意する。

「ですが、しっかりと味わってください。ユーリが王のために作ったのですから。」

「む……。分かっておる……。」

少しだけ顔を赤くし、黙々と食べ続けるディアーチェ。そこにユーリとレヴィが戻ってきて、席に座った。

「ユーリ。うまくできている。うまいぞ。」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

ユーリが嬉しそうに笑う。その笑顔を見ていると、ディアーチェも自然と笑みがこぼれた。

「ディアーチェのためにたつぷりと愛情を込めましたから！」

「……うっ、うむ……。」

そっぽを向くディアーチェ。顔は真っ赤になっている。シュテルはそんな二人の様子を見つつ、一人素早く食事を終わらせた。

キッチンに向かうと、シュウは無言でハンバーグを頬張っていた。

シュテルを見て、右手を挙げる。ただの挨拶だ。

「すみません、シュウ。私もいただきます。」

小皿を取り出し、ハンバーグを入れていく。一口食べると、焦げ特有の苦みはあるがしっかりとハンバーグの味はしていた。二人で黙々と食べていく。

「すまぬ、待たせた。」

「私が失敗したもので私も食べます。」

続いてディアーチェとユーリが入ってきて、

「ボクにもちようだい！」

最後にレヴィが戻ってくる。みんなで焦げ焦げのハンバーグを食べていく。シュウは口を動かしながら四人の様子を見て、思わず苦笑していた。

隠れて食べる意味はなかったかな。

後片付けを済ませ、シュウは帰路につく。今回の見送りはユーリだ。マンションから出て、自宅への道をのんびりと歩く。

これって、少し情けないよね……。

端から見れば年下の女の子に送ってもらうという図だ。思い描いただけで情けなくなる。実際は四人の中では戦闘能力が一番高いらしいが。そんなことを考えながら少しだけ落ち込んでいると、シュウ、と自分を呼ぶ声が聞こえた。

どうしたの、と聞きながらユーリに向き直る。ユーリは少し迷っていたようだったが、やがて震える声で言った。

「今日は本当にありがとうございました。無事に作れたのはシュウのおかげです」

「いやいや、僕は隣で指示を出してただけだから。ユーリががんばった結果だよ」

「そんなことはありません！ 本当に、感謝しているんですよ？」

上目遣いにこちらを見てくる。シュウは少し照れくさそうに頬をかく。恥ずかしいのでこれ以上は何も言えない。

「また……手伝っていただけますか？」

おそろおそろといった様子で聞いてくるユーリ。シュウは微笑むと、もちろん、と明るく答えた。

第十二話　なのは

買い物に付き合ってください。

休日。昼前にシュテルたちのマンションを訪れると、シュテルからちょうどいいとばかりに誘われた。普段世話になってばかりいるのだから荷物持ちぐらいはしよう、そう思って二つ返事で了承したのが一時間ほど前。スーパーの特売コーナーから脱出して、店前にあるベシチに腰掛けている。

「この世界の人の底力には驚かされます」

「うん。否定しない」

スーパーの広告があり、安売りされる卵などを購入するために訪れた。二人はビニール袋を持っていて、シュテルの袋には十個入りの卵と豚肉が三パック。シュウの袋にも十個入りの卵があり、あとは菓子類がいくつかだ。

卵がかなり安く売られていたために真っ先にそちらへ向かったのだが、すでに主婦の軍団があった。二人も負けじとその中に突入して何とか一個ずつ確保することはできたが、さすがのシュテルにも疲労が見える。無理もないと思う。

「少し休憩して帰りましょう」

というシュテルの言葉に賛成して、今はここで休憩中というわけだ。缶ジュースを少しずつ飲んでいく。

「この後はどうするの？　まっすぐ帰るっ」

「一応そのつもりですが……」

どこか行きたいところでも？　とシュテルが視線で問うてくる。シュウは少し考え、特にないかたと首を振るうとしたところで、

「あー　シュテル！　シュウ君ー！」

二人を呼ぶ声。そちらを見ると、なのはが笑顔で手を振っているとこだった。そのままこちらへと駆け寄ってくる。

「ああ、ナノハ」

シュテルが立ち上がり、なのはを出迎える。走ってきたなのはは躊躇いもなくシュテルの手を取って嬉しそうな笑顔を見せる。

「こんなところで会うなんて思わなかったー!」

「そうですね」

シュテルは相変わらずの無表情だが、どこか柔らかいものを感じる。なのはに握られた手もふりほどこうとはしない。やはりこの二人は仲が良いらしい。

「ナノハはどうしてここに?」

そうシュテルが聞くと、なのはがポケットからチラシを取り出した。今朝シュテルのマンションにも配られたチラシだ。

「お買い物、だよ。シュテルたちは?」

「見ての通りです」

シュテルがベンチに置いてある袋を示すと、そっか、となのははまた笑う。本当によく笑う子だな、と最近改めて思うようになった。

「じゃあシュウ君は……えっと……。荷物持ち?」

今度は遠慮がちに、おずおずといった様子で聞いてくる。

「うん。卵しか買えなかったけどね」

「やっぱり中は……」

「行くのなら相応の覚悟を」

「じ」

シュテルの忠告になのはは思い切り顔をしかめた。スーパーの入り口を見て、どうしようかと悩んでいるようだ。

「……私たちならもう少しここにいます」

シュテルがそう告げると、なのはは顔を輝かせた。すぐに行ってくるから! と店内へと駆け出す。どうやら、買い物をしなければという使命感とせっかくなかえたのにといい感情がせめぎ合っていたらしい。よく分かるな、とシュウは密かに感心した。

「11の後の予定ですが」

そう言いながら、シュテルがベンチに座る。

「喫茶店にでも寄りましょっか」

「いいけど……。と11の……」

シュウが首を傾げて聞くと、シュテルはスーパーの方を、なのはが入っていった方を指さした。

「翠屋です」

買い物を終えたなのはに翠屋に行くことを告げると、一瞬驚いた後とても喜んでいった。なのはに先導してもらい、シュウとシュテルはその後に続く。出発する前になのはが、私が案内していいの？ とシュテルに聞いていたが、シュテルはなぜ聞くのですかと首を傾げていた。

ここから翠屋までは結構距離がある。三人はその間のんびりと話をしながら歩き続ける。道行く人はなのはとシュテルを見ると、驚いたように振り返っていた。

「やはり少々目立ちますね」

シュテルがつぶやいて、なのはは苦笑する。

「私たち、そっくりだもんね」

時折周囲の視線を受けながら、しかし二人はさほど気にしない。なのはは楽しげに、シュテルはどこか柔らかい無表情で会話をしている。シュテルと自然に話をしているなのはを見て、少しだけ羨ましいと思ってしまった。

翠屋に着いた時には、すでに昼を少し過ぎていた。ほとんど満席状態のようで、かなり繁盛しているようだ。初めてここに訪れたシュウは少し驚いてしまった。喫茶店と聞いていたので、もっとこぢんまりとした静かな場所……村中にあるようなものをイメージしていたのだが。

「ちょっと待っててね」

なのはが店内へと入っていく。どうやら空いている席がないか確認しに行ってくれたのだろう。すぐに戻ってきて、大丈夫みたい、と笑顔で教えてくれた。

なのはに案内されて店内へ。隅の窓際の席が空いていたので二人はそこに向かう。

「ちょっと忙しそうだから手伝ってくるね」

そう言い残し、なのはは店の奥へと消えていった。

「じつって、有名な喫茶店だったりする？ イメージと違うんだけど」「それなりに」とは聞いています。それに今は昼食時ですし。もう少し時間が経てば落ち着くと思いますよ」

シュテルの言った通り、時間が経つにつれて店内の忙しさは少しずつ落ち着いていった。だがそれでも、客が一人もないという状態にはならなかったが。とりあえずシュウは、もう少し店が落ち着くまではメニューを見て時間を潰すことにする。

「……あ」

間抜けな声を漏らしたシュウに、シュテルが首を傾げる。シュウは財布を取り出すと、中身を確認して頬を引きつらせた。小銭しかない。

「私が出しますので気にしないでください」

「いや、でも……。さすがに出してもらってばかりだし……」

「はい。今更気にしないでください」

「……はい」

女の子にばかりお金を出させているというのはいかがなものなのだろう。確かに自分はまだ働いていないので気にしてはいけない部分かもしれないが、男のプライドというものは理屈では説明できない。あまりにも情けなさすぎる。

「……忘れよう」

シュウは大きなため息をつき、再びメニューに視線を落とす。

少しして、店内も落ち着いていく。そうしたところで、

「お客様。」注文はお決まりでしょうか？」

「あ、はい。えっと……」

答えようとして、だがすぐに、あ、と声を漏らした。目の前で立っているのは、他にもないのはだ。先ほどと違い、エプロンを着用している。

「へえ……。かわいいね」

「そ、そうかな？ ありがとう」

なのはが照れくさそうな笑顔を浮かべる。動作一つ一つが様に

なっているのはさすがと言うべきか。シュウとシュテルが注文を告げると、なのははきれいに一礼してカウンターへと向かっていった。ちなみに二人ともナポリタンだ。

少しして、店員がナポリタンを持ってきてくれる。食べている間になのはが戻ってきた。エプロンはすでに着ておらず、その代わりに手にはお盆。そこには皿に載ったショートケーキ。

「これ、お母さんから」

「え？ いいの？」

思わずそう聞いてしまおう、

「うん。気にしなくて大丈夫だよ」

そう言ってくれたので、遠慮無く食べることにした。とりあえずは先にナポリタンを食べ終えなければならぬが。

「そうだ、シュテル。呼んでたよ。」

なのはの言葉にシュウが首を傾げる。ここで誰が、と思ったが、シュテルの方は静かにうなずいただけだった。

「あの方も物好きな方ですね。すみません、シュウ。少し席を外します」

「あ、うん」

シュテルが席を立ち、そして店内の奥へと消えていく。シュウはそれを見送って、不思議そうに首を傾げた。なぜシュテルが奥に、しかも店員と顔見知りのごとく会釈だけが入っていくのだろうか。

「シュテルはちょっと前から、ここによく来てるよ」

そう教えてくれたのはなのはだ。シュウが驚いていると、なのはが説明してくれる。

「最初は、この街で暮らすから妙な誤解が生まれる前に顔合わせを、てことで、シュテルたちが挨拶に来てくれたの」

「それは……驚いただろっね」

自分の娘とつり二つの子だ。さらにはその周囲には娘の友達のそっくりさん。きつととても驚いたことだろう。

「あはは。みんなすごく驚いてた。その後いろいろあって、お母さんがシュテルのことを気に入っちゃったみたいで……。養子にならな

いかって聞いたこともあったみたい」

「へえ……。でも断ったみたいだね」

「うん。自分には王や家族がいますからって」

シュテルならそう答えるだろう。それは容易に想像がつく。常にディアーチエを第一に考えて行動しているような節もあるほどだ。

「今ではたまにお店の手伝いに来てくれるんだよ。……私と一緒にいると今度はお客さんが驚いちゃってるけど……」

「……だろうね……」

それも容易に想像がつく。この二人は髪型や目つきの違いこそあれ、一目見ただけでは区別がつかない。

その後もなのはシュテルのことを教えてくれる。シュテルと出会った経緯や、今では大切な友達の一人ということなど。仲の良さがよく分かる。

そんなことを話していると、シュテルが戻ってきた。手に盆を持って、お待たせしましたと座っていた席に腰掛ける。盆に載せられていたのはショートケーキだ。

「おかえり、シュテル。それは？」

「お待たせしたお詫び、ということ……。どうぞ」

そう言ってシュテルがショートケーキをシュウとなのはの前に配る。自分の前にも一つ置いた。シュウは少し首を傾げながらも、まあいいかとフォークを手にとってケーキを口の中へ。先ほども思っていたが、ここのケーキはおいしい。

「あれ？」

少しだけ違和感を覚える。それはなのも同じだったようで、少し困惑した表情を浮かべていた。

「お母さんの味とちよつと違うよつな……？」

「私が作りましたから」

「へえ、そっか。シュテルが……。えー！」

思わずなのはと目を見合わせ、次いでシュテルを見る。シュテルは涼しい顔で、自分のケーキを口に運んでいた。呑み込み、ふむ、と感想を口にする。

「やはり桃子さんの味にはほど遠いですね。精進しなければ」

「いや十分美味しいと思うよ？ そんなに違いがあるとは思えないんだけど」

シユウが素直な感想としてそう言ったのだが、シユテルは納得していないのか首を振る。まだまだです、と。

「んー……。まあシユテルがそう言うなら、そうなんだろうね。僕は十分美味しいと思うんだけどな」

ふと、シユテルがシユウを見た。目が合って、シユウが首を傾げる。

「美味しい、ですか？」

「うん。すごく」

「……そうですか」

シユテルが薄く微笑んだ。そんな気がした。

Side: N an o h a

シユテルとシユウの二人を見送ってから、なのはも翠屋を後にした。この後はフェイトと買い物に行く約束がある。そろそろ向かった方がいいだろう。

それにしても……。

シユウが美味しいと言った時、シユテルが一瞬だけ見せた微笑は今まで見た中で一番嬉しそうなものだった。あんな表情もするんだな、という嬉しさと同時に、シユウが少し羨ましいと思う。自分ももっとシユテルと仲良くなりたいのに。

シユテルに自然な笑顔が増えつつある。これは素直に喜ばしいことだ。そう考えるだけで、少し気分が良くなってくるのも事実だ。

ふと携帯電話を見る。約束の時間が迫っている。

「急がないと……」

なのはは携帯電話をしまうと、慌てて走り出した。

第十三話 フェイト

ある休日の昼前。シュウは今日もシュテルたちのマンションにいる。今日はゆっくり来ようと思っていただけだが、書店に向かう途中にレヴィに見つかり、半ば強制的に連行されて今に至る。シュウを連行した張本人であるレヴィは、連れてきたことで満足したのかテレビ番組に夢中になっていた。

テレビに流れているのは、最近話題の特撮だ。先ほど聞いた話では、休日ということもあり一話から一挙放送しているらしい。特にすることもないシュウも、レヴィの隣で一緒に見ている。

「でねー。でねー。次の敵がすっごくかっこいいんだ！ でも大幹部が変なことするせいで……」

ネタバレ全開である。佳境を迎える頃にはどのように決着がつくか分かってしまう。それでも見ていておもしろいと感じるのは、番組の出来が良かったためか。

やがて正午になり、その特撮の特集番組が終わる。おもしろかったー、と言ってレヴィが立ち上がる。

「さてー。行こう、シュウー」

「いやどこに？ というより聞きそびれていたんだけど、今日はレヴィ一人なの？」

現在、部屋にはシュウとレヴィの二人きり。他の三人の姿は見えない。それを聞くと、レヴィはうなずいて答えてくれる。

「うん。シュテルんはアースラに行っていて、王様とユーリは子鴉っちに会いに行ってる。ボクはシュウが来たら……えっと……。おもてなし？ しろって言われてるー」

「へえ……。じゃあ一人でお留守番か。でもさっきは出歩いてたね」「シュウを迎えに行ったの！ そしたら家にいないし！ 探したんだからねー」

「あ、はい。すみません」

なぜか怒られた。少し理不尽だと思っが、悪い気はしないので気にしないでおく。

「それで、どこに行くの？」

シュウの言葉を聞きながら、レヴィは出かける準備をする。その際に小さな紙片を握りしめて、それに書かれていることを何度も確認している。シュテルかディーアーチェにでも持たされているのだろうか。やがてレヴィは出かける準備を終え、シュウに向き直った。

「オリジナルのと同じよー」

レヴィのオリジナル。つまりはフェイト・テストロッサ。聞いた話によれば、レヴィが一人で留守番すると聞いたフェイトが心配して、レヴィを自宅に招待したらしい。さらに後で聞いた話によれば、最初は渋っていたレヴィだったが、フェイトの、カレーもあるよ？ の一言で即決したそうだ。

シュウはフェイトの自宅を知らないのでレヴィに案内してもらった。先導するレヴィは鼻歌を歌い、とても機嫌が良いようだ。鼻歌は先ほどまで見ていた特撮のテーマソング。

しばらく歩き続け、やがてマンションが見えてくる。どうやらそこがフェイトの自宅らしい。

レヴィに続いてエレベーターに乗り、上階へ。インターホンを押すと、エプロンを着用しているフェイトが出迎えてくれた。

「おいっすー 遊びに来たよ、オリジナルー」

レヴィが元気よく挨拶する。フェイトも笑顔になって言う。

「うん。いらっしゃい、レヴィ。それにシュウも」

「僕まで来てごめんね。迷惑じゃないかな？」

「ちっとも。気にしないで上がって」

フェイトが先に中へと戻り、レヴィとシュウがそれに続く。奥からはカレーの香りが漂ってきた。レヴィが嬉しそうに笑顔になる。

「カレーだー」

「もうすぐできるから、待っててね」

フェイトはそう言つと、キッチンへと向かう。シュウはレヴィと一

緒にリビングへ。リビングには見知らぬ女性がテーブルを拭いていた。

「……………えっと。お邪魔します？ 初めまして？」

シュウがそう言つと、女性は苦笑する。

「アルフだよ。この姿で会うのは初めてだけどね」

「ああ……………なるほど」

使い魔であるアルフは犬の形態と人間の形態があるとは聞いていたが、人間の姿を見るのは初めてだ。言われて見れば、確かに犬の時と同じ特徴がいくつもある。むしろ知っているがらなぜ気づかなかったのか、自分が少し恥ずかしい。

「……………ねえ、アルフ」

シュウが声をかける。アルフが顔をそむける。

「……………」

「……………はあ。分かったよ……………」

アルフは小さくため息をつくと、子犬になった。すぐにシュウが笑顔になり、子犬のアルフを抱きかかえ、撫でる。

「うん。いい撫で心地だ」

「どうも」

「……………むー」

それを不満そうに見ているのはレヴィだ。拗ねたようにシュウをじっと見ている。それに気づいたのはアルフで、内心で苦笑しつつシュウに言った。

「ほら、もういいだろ？ フェイトを手伝いたいんだ」

「ん。分かった。ありがとう」

シュウが解放すると、アルフは人間形態に戻って、じゃあねと軽く手を振る。そしてキッチンへと消えていった。アルフを見送ってから、シュウはやっとレヴィが自分を見ていることに気づいた。

「ん？ どうしたの？ レヴィ」

「……………何でもない」

ちえー、と口をとがらせ、いすに座るレヴィ。シュウは首を傾げるだけだった。

「お待たせー」

フェイトがカレーを四人前持ってくる。皿をテーブルに置き、いすに座る。シュウとレヴィが隣同士で、フェイトとアルフはそれぞれの向かい側に座った。四人同時に手を合わせ、いただきますと口にする。

レヴィがすぐにカレーを口に運んだ。しっかりと味わって、呑み込む。すぐに満面の笑顔になった。

「おいしいー さすがオリジナル！ すげー！」

「あはは。ありがとう」

フェイトは楽しげに笑い、自分も食べ始める。シュウも一連のやり取りを眺めてから、食べ始める。

「ん。おいしい。甘口〜」

「うん。レヴィが甘口でないと食べられないから」

なるほど、とシュウはうなずく。そう言えばシュテルたちの家でカレーが出てきた時も、レヴィはハチミチをたっぷり入れた特製のものだった。シュウは中辛程度がほどよくて好きなのだが、誤って食べてしまったレヴィはそれすら悶絶していたほどだ。

シュウは何度かうなずいて、レヴィに言った。

「子供だね」

「なんだとー！ これでもボクはマテリアルだぞ！ 偉いんだぞ！」

味覚と知識は関係ないけど、と思いつつも、シュウはごめんごめんと笑いながらレヴィを撫でる。それだけでレヴィは気分が良くなつたのか、だらしない笑みを浮かべると、

「分かればいいんだよ。えへへー、もっと撫でてー」

「うん。なでなで」

レヴィはご機嫌になって、大好きなカレーを食べることすら忘れてしまっている。シュウの方はレヴィを撫でながら、器用に片手で食べていた。そんな二人の様子を見ながら、フェイトは微笑む。アルフもどこか感心したような表情をしていた。

「二人とも、すくく仲がいいよね。びっくり」

「そうかな？ でもフェイトもだよな？ 一つしてレヴィが遊びに来るくらいだし」

「カレーで釣ってるような気もするけどな」

フェイトはレヴィの横に移動すると、手をどけたシュウの代わりに手で始める。お？ とレヴィが首を傾げ、フェイトを見る。

「どうしたの？ オリジナル」

「ううん。何でも無いよ。ちょっと撫でていてもいいかな？」

「いいよいいよ、もっと撫でて」

嬉しそうなレヴィ。カレーを思い出したのか、鼻歌を歌いながら食べ始める。そんな様子のレヴィを見ながら、フェイトは優しく微笑んだ。

「一つして見ていると双子の姉妹だね」

「奇遇だね、シュウ。アタシもそう思うよ」

アルフもうなずく。それを聞いたフェイトは、そうかな、と照れくさそうに笑い、レヴィの方は無反応。カレーに夢中だ。

「フェイトがお姉ちゃんで、レヴィが妹かな？ 手のかかる妹？」

「手のかかる、は分からないけど……。でもかわいいよ？」

「お姉ちゃんの感想だよねそれ」

三人でそんな話をして、笑う。カレーを食べ終えたレヴィが皿を前に出した。

「お代わりー」

「はい。ちょっと待ってね」

フェイトは受け取ると、すぐにお代わりを用意する。受け取ったレヴィがまた食べ始める。とても美味しそうに食べるレヴィは見ていて飽きない。

「そう言えば、レヴィ」

「ん？ なに？」

シュウが呼ぶと、口を動かしながら振り向いた。スプーンは口に入れたままだ。

「どうしてフェイトをオリジナルって呼ぶの？ なのはとかは名前で呼ぶの？」

「めんどくさいから」

「……分かった。分からないことが分かった」

呼ぶ気も覚える気もないらしい。ある意味レヴィらしいが、それ故に何を言っても無駄だろう。それにレヴィは人のことをよく愛称で呼ぶ。オリジナル、というのも愛称のつもりなのかもしれない。

「食べた食べた！」「ちそうさまー」

レヴィは満足したのか、スプーンを置く。そしてすでに食べ終わっていた他の三人のお皿も持ってキッチンへ向かう。流しにお皿を置くと戻ってきた。

「意外だ。偉いね、レヴィ」

「むー！ 当然じゃないか！ だってやらないとシユテるんに怒られるからー」

「うん。納得した」

「でもちゃんと必ず片付けてくれるよ。たまに一緒に洗い物もしてくれるし」

「一人で待っててもつままないから」

それでも嬉しいよ、とフェイトが言つと、レヴィは少しだけ照れくさそうに笑った。

その後は四人で他愛もない話をして、一緒にボードゲームをしたりする。フェイトとレヴィは端から見ていると本当に姉妹のようだった。ただ、時折フェイトが少し悲しげな表情をすることが気になったが、何となく察しはつく。

アリシア、だっけ……。

フェイトの姉とも言える存在。少しだけレヴィに重ねているのだろうか。シユウはアリシアのことは知らないで憶測にもならないが。

「あ、もうこんな時間だー」

レヴィが声を出す。時計を見ると、午後五時を回っていた。太陽はすっかり傾いている。

「そろそろ帰さう、シユウ」

「そうだね。遅くなったらシュテルに怒られるし。……レヴィが」
「あう……。帰るよ！ 急いで帰るよ！」

慌てて玄関へと走るレヴィ。シュウもそれを追って玄関へ。
「あ、待ってレヴィ。お土産」

そう言ってフェイトが渡したのは、棒付きのキャンディ。大きな袋に入ったもので、中にはいろいろな色のキャンディがある。
「まんまるみずいろ……」

レヴィが嬉しそうに叫ぶと、すぐに包装を破って中から水色のキャンディを取り出した。それを口に入れ、うなずいて言う。

「おいしいー。やっぱり水色に悪いものはないな……」

「あはは……。そうだね」

「はい、シュウ」

シュウもレヴィからキャンディを受け取ると、口に入れる。甘い味が口の中に広がる。

「うん。おいしい。ありがとう、レヴィ。フェイトも」

「ううん。気をつけてね。またね、レヴィ、シュウ」

フェイトの見送りを受けて、シュウとレヴィは帰路についた。

Side:Fate

二人を見送って、フェイトは静かにドアを閉めた。急に静かになった部屋を見回して、フェイトはため息をつく。寂しくないと言えは嘘になるが、言っても仕方のないことだ。リンディとクロノに心配をかけるわけにはいかない。

「それにしても、レヴィはまた一段と元気になってたね」

洗い物を始めながらフェイトが言つと、それを手伝うアルフがうなずいた。

「そうだね。シュウに懐いてるみたいだったし」
「すごいよね。どうやって信頼を築いたのかな」

もちろんシュウに打算などがないことは分かっている。シュウはいつも自然体だ。生活面でいろいろあることは知っているが、少なくとも自分が知る限り、交友関係ではいつも楽しそうにしている。それ

があの子たちにはいい影響を与えているのかもしれない。

「私も……見習おうかな……」

フェイトがそうつぶやく。あの二人と遊んだ先ほどの時間を思い出しながら。

自然と表情が柔らかくなり、笑顔が生まれていた。

第十四話 端午の節句

がちゃがちゃと耳障りな音がする。シュウはその音で目を覚ました。何の音だろうかと、寝ぼけた頭で考える。すぐに、出入り口のドアの音だと気がついた。では何故そのような音がするのだろうか。誰かが開けようとしているのか。

その考えに至った瞬間、シュウは慌てて飛び起きた。すぐに時計を確認して、しかし首を傾げる。午前六時。約束の時間よりかなり早い。

「シュウー… シュウってば…」

ドアの向こう側から呼ぶレヴィの声。なぜこんなに朝早くにと自問するが、分かるはずもなく。シュウはぐっと伸びをすると玄関に向かった。ドアを開けると、嬉しそうにレヴィがそこにいた。

「やっと起きた！ おはよう、シュウー！ 迎えにきたよー！」

「うん。おはよう、レヴィ。早くない？」

あくびをかみ殺しながら聞くと、レヴィはそうかな？ と頭に疑問符を浮かべる。どうやら自覚はないらしい。まだ寝てただけだなあと苦笑すると、

「レヴィ、やはり二二でしたか」

階段の方からシュテルの声。二人同時にそちらを見て、レヴィは怯え、シュウは苦笑を濃くした。

「まだ早すぎると……言いましたよね……？」

ゆっくりとシュテルが歩いてくる。表情はいつもの無表情。それなのにいつもと違う威圧感。当事者でないシュウですら今すぐ部屋に逃げ込みたい。

「あの、シュテルん、これは違うんだ……」

「……………」

「ほ、ほらー… どつせだから起こしてあげようと思って！ そうすればたくさん遊べ……」

直後。レヴィの悲鳴が静かな朝に響き渡った。

三十分後。シュウは自分の部屋で味噌汁をすすっていた。ちゃぶ台には白ご飯と焼き魚。全てシュテルが用意してくれたものだ。そのシュテルはシュウの対面に座り、一仕事終わってお茶を飲んでいる。あの後、レヴィを帰らせたシュテルは、起こしてしまったお詫びとして朝食を用意してくれた。希望を聞かれたので和食と答えたところ、目の前の品を出されたというわけだ。買い出しを含め三十分で作り終えた時はさすがに驚いた。

静かな部屋。静かな時間。シュウが朝食を食べる音とシュテルがお茶をすする音だけが聞こえてくる。のんびりとした時間だが、シュテルと一緒にこの時間はそれなりに気に入っている。

やがて、シュテルは小さくため息をついた。見るとお茶を飲み終えたようだ。自分へと視線を移し、目が合う。

「どうですか？」

シュテルの控えめな問いかけ。すぐに朝食の味を聞いているのだと気づく。

「うん。美味しいよ」

正直に答えると、シュテルはそうですかとうなずいただけだった。

「この後はどうしますか？」

「九時にシュテルたちのところ、としか決めてなかったからね……。今から寝るのも中途半端で嫌だし……」

少し考え、それに、と付け加える。

「せっかく来てくれたんだし、もう少しお話したいかな？」

それを聞いたシュテルは少しだけ眉を持ち上げる。少しだけ表情が柔らかくなった気がした。

「ではもう少しだけ、お話でもしましょうか」

その後、本来の約束の時間まで、二人はのんびりと話をしていた。時折お互いに無言になってしまう時もあるが、別段気まずい沈黙でもない。のんびりとした時間が緩やかに流れていく。

やがて九時になり、二人は支度を整える。といっても、シュウには

持って行くものがないので戸締まりの確認程度なのだが。いつもの道を歩いてシュテルたちの住まうマンションへ向かう。途中のいくつかの民家では鯉のぼりが上がっていた。

「子供の口って感じがするね。どこかで柏餅でも買おうかな……」

たまにはそんな贅沢品を買つのも悪くない。そう思って言ったのだが、シュテルからだめですと止められた。首を傾げると、

「柏餅なら用意してありますよ。あと王がちまきも用意してくれています」

「ほんとに？ ……僕も食べていいの？」

「もちろんです。……ちなみに手作りですよ」

後半は少しだけ小さな声で付け足してくる。しっかりと聞き取ったシュウは顔を綻ばせて、それは楽しみだと期待に胸を膨らませる。シュテルはシュウのそんな様子を見て、少しだけ嬉しそうに目を細めた。

マンションにたどり着いて、リビングに入る。部屋のテーブルには大量の柏餅とちまきが積まれていた。あまりの量にシュウは思わず絶句するほどだ。シュウがシュテルを見ると、さっと視線をそらした。

「……初めて作るものでしたので、材料の量が分からず……」

「買った材料を使い切ったら、すごい量になった？」

「その通りです」

シュウは苦笑。これだけの量があれば昼食としても十分そうだ。さすがに量が多すぎるとは思つが。

シュテルがキッチンへと向かい、シュウはいつもの席へ。読書をしていたディアーチェが、視線をシュウへと向ける。すぐに本へと戻した。

「どうして、どうしてちまき……」

シュウが問いかける。ディアーチェが再び視線をシュウへとやり、言い。

「子鴉に聞いたのだ。どこの場所ではちまきも食べるものだと。こ

の世界の風習については詳しくない。違ったのなら許せ」

「まあ僕も詳しいわけじゃないから」

キッチンからシュテルが戻ってくる。手に持ったお盆には熱いお茶が二つ。シユウとディアーチェ、そして自分の席の前に置く。

「そう言えばレヴィとユーリは？」

いつもならもっと騒がしいはずだが、今は騒がしさの最たる原因となる二人がいない。珍しいなと思い聞いてみると、ディアーチェは本を閉じてテーブルに置いてから言う。

「買い出しだ。すぐに戻るであろうよ」

「へえ……。何を？」

「鯉のぼりが欲しいとか言っていたな」

その言葉にシユウは啞然として、次いで苦笑した。外に出ればどこかの民家のものを見れるだろうに、鯉のぼりとは。

「さすがに他の家にあるような大きいものは買ってこないでしょう。」

それ以前にそこまでの金銭を渡していませんが」

「でも、それだといつ帰ってくるか分からないね」

「もつ少し待ってから念話でも送ります」

そんな会話を交わしながら、三人はお茶を飲んで雑談を続ける。

レヴィとユーリが帰ってきたのは、それから一時間以上も後、正午前になってからだだった。

「王様、鯉のぼりあったよー」

元気な声で報告するレヴィ。それを聞いたディアーチェが何を言っているのかと怪訝そうに眉をひそめる。聞いていたシユウも首を傾げた。レヴィの手にはそんな大きなものは何もないが、魔法か何かで収納しているのだろうか。

「はい、」

そう言っレヴィが差し出したのは小さなビニール袋。ディアーチェの表情がいよいよ困惑に深く染められる。ビニール袋を受け取ったディアーチェは中身を取り出して、む、と小さくうなった。出てきたのはプラスチックの棒にかなり小さな鯉のぼりがついたもの。

「……………鯉のぼりだな」

「なるほど、小さくはありますが、確かに鯉のぼりです」

シュテルが感心したようにうなずく。えへへ、とレヴィが嬉しそうに笑った。

「商店街のお店でたくさん飾っていたのでお願いしてきました」

そう報告するのはユーリだ。ユーリの手にもビニール袋が握られ、中の小さな鯉のぼりが見て取れる。そのビニール袋を四袋も持っていた。つまりは人数分だ。

「これはシュウの分です」

ユーリが差し出してきたものを受け取る。中から鯉のぼりを取りだしてしばらく眺め、薄く微笑んだ。

「ありがとう、ユーリ」

お礼を言つと、ユーリが照れたように笑ってくれた。

二人が帰ってきたのでシュテルがお茶を入れ直し、それぞれに配る。では、とシュテルが言う。全員で手を合わせ、いただきますと言った。

シュウはまず柏餅を手取る。一口食べて、相好を崩した。ほどよい甘さのあんこでとてもおいしい。続けて二個目も食べる。ふと隣を見ると、シュテルがこちらを見つめていた。

「どうでしょうか」

少しだけ不安そうな声。初めて作るものだから気になるのだろうか。シュウは頬張っていた柏餅を呑み込み、笑顔で言った。

「すごくおいしいー 柏餅はシュテルが作ったんだっけ？」

「はい。お口に合ったようで良かったです」

「いやほんとにすごくおいしいよ……。うん」

続いてちまきを食べる。こちらはディアーチェが作ったと聞いている。それを思い出してディアーチェの方を見ると、ちまきを手に取ったシュウをこちらも見ている。苦笑しつつ、口に入れる。ちまきは見たことはあっても食べたことがないため比較するものがないが、美味しいと思う。なのでうなずいて言う。

「うん。おいしいよ、ディアーチェ」

「む……。そうか。いや待て、なぜわざわざ報告する」

「気にしてるかなって」

「気にしてなどおらんわー!」

少し顔を赤らめてそっぽを向く。シュウは笑いながら、次のものに手を伸ばした。

食事後はいつも通りの時間を過ごす。リビングでみんなとのんびり過ごし、雑談を交わす。いつもと違うのは、大量に作られた柏餅がテーブルにまだあることだ。時折誰かが思い出したように手を伸ばし、少しずつ数を減らしていく。夕方になってもまだかなりの量が残っていた。

「今日はみんな用事があるんだっけ」

そつ言いながらシュウは帰り支度をする。もつとも持ってきているものは何も無いが。

「はい。すみません、シュウ。夕食もと思っていたのですが」

「いやいや、気にしないでよ」

申し訳なさそうに謝ってくるシュテルにシュウは慌てる。こういう日もあるだろうとしか思っていないので改めて謝られると少し困る。ただ確かにシュテルの料理が食べられないのは少し残念には思うが。

四人はそれぞれ何かしらの準備をしていた。デバイスの準備もしているため管理局から呼び出しでもかかっているのだろうか。ただシュテルは他の三人と違い、柏餅をせっせと袋に詰めていた。

「作りすぎましたから、ナノハたちにも」

どうやらこれから向かう先にはなのはたちもいるらしい。そっか、とうなずくシュウ。そんなシュウに、シュテルはおもむろに大きな袋を差し出してきた。驚いているシュウの目の前で、袋を少し揺らすシュテル。早く受け取れ、というのとらしい。

シュウは一先ず受け取って中身を確認する。柏餅とちまきがたっぷりと入っていた。

「もつ飽きているかもしれませんが、捨てるのももつたいたないのでよろしければ」

「いやいや、飽きてない！ いいの？ 本当にいいの？」

「はい。もちろんですよ」

「おおー！ ありがとうー！」

嬉しそうに礼を言うシュウ。そんなシュウの様子を見て、シュテルは満足そうに一度だけうなずいた。

そろそろ四人が出発する時間になったので、シュウは先に退室することにする。もらった柏餅とちまき、小さな鯉のぼりもしっかり持っている。

「それじゃあ、今日もありがとう。また呼んでね」

「はい。特に予定がなければ明日にでも」

「いいの？ じゃあまた明日」

いつものやり取りのあと、笑顔で手を振るシュウ。シュテルも小さくだが手を振ってくれた。

帰宅後。シュウはちゃぶ台に小さな鯉のぼりを置く。柏餅とちまきを広げ、食べ始める。いくつ食べても飽きないおいしさだ。一つまた一つと数を減らしていく。

「晩ご飯としては栄養がちょっと悪いだろうけど……。うん。悪くない」

幸せそうに食べ続けていた。

Side: Stern

シュウを見送った後、シュテルは部屋の中に戻る。すでに三人は支度を終えていた。シュテルも自分のデバイスを持って、お待たせしましたと告げる。

「よし、では行くか」

そうディアーチェが告げると、レヴィがおー！ と元気な声で返事をして、ユーリがはいと笑顔でうなずく。転移魔法で二人が先に転移した。

「……ところでシュテルよ」

シュテルも転移魔法を使おうとしたところまで王に呼び止められる。

何か？ と首を傾げると、

「あの大量の柏餅……わざとだな？」

「はい、そうですよ」

真顔でうなづくシュテル。やはりか、とディアーチエは苦笑した。

「あんなものでも、用意しないよりはましでしょう。何も食べずに寝てしまうということもありそうですから」

「それはそうだな」

ディアーチエは苦笑してうなづく。まだ短い付き合いだが、それぐらいは手に取るように分かる。先に行くぞ、と言ってディアーチエも転移した。

「さて、私も行きましょつか」

そう言って転移魔法を展開する。転移の直前にテーブルに置かれたままになっている鯉のぼりが視界に入り、

「……………」

シュテルはわずかに微笑んで、その場から姿を消した。

第十五話 はやて

本棚が並び、大量の本に囲まれた館内。つまりは図書館にシユウはいた。特に目的があったわけではない。気まぐれに足を運んだだけだ。たまには書店ではなく図書館というのも悪くはない。特に座って落ち着いて読めるというのがいい。

シユウは三冊ほどの本を適当に選ぶと、隅に設置されているテーブル席に座って本を読み始めた。それが開館の十時ぐらいで、ふと気がつくともう昼前だ。今日の昼は特に約束もないので、このまま夜まで読もうかと思う。

「……………何をやっておるのだ」

そう思っていた矢先に声をかけられた。振り返ると、少し不機嫌そうに立っているディアーチェがいた。その手には本が五冊ほど。シユウは少し驚きながらも、笑って言った。

「図書館だから本を読んてるよ？」

「そういう意味ではないわ」

ディアーチェは呆れ果てたというようにやれやれと首を振った。少し待っておれ、と言ってカウンターの方へ歩いて行く。そこで持っていた本を全て渡すと戻ってきた。返却にきたらしい。

「シユテルはどうした？」

「今朝お弁当はもらったよ。ただ今日は一日用事があるからってどこかに行っちゃったけど。聞いてない？」

「む……………。確かに言っておったが、貴様と一緒にだと思っていたのだが……………」

違ったのか、と意外そうに目を丸くするディアーチェ。だがすぐになるほどと何度かうなずいて、

「例の件か。ならば仕方ない」

「何のこと？」

「気になるな。じちらのことだ」

ディアーチェはそう言つと、本棚へと本を取りに行った。それを見送りつつシュウは首を傾げる。魔法関係のことなのだろうが、何一つ力になれないというのはもどかしいものがある。管理局の人に頼んでも少し教えてもらつべきだろうか。

そんなことを考えていると、自分の背後に立った人影に気がつかなかった。本へと視線を落とそうとしていたシュウに声かけられる。

「シュウ君」

振り返ると、そこにいたのは一人。一人ははやてだ。笑顔でこちらを見ている。

「こんにちは、やな。こんなところで会つとは思わんかったで」

「こんにちは、はやて。ちょっと驚いたよ。……で、そっちの人は誰？」

はやての奥、車椅子を押している女性に目を向ける。女性が一度だけ礼をする。

「この子はリインフォース。そう言えばまだ紹介してなかったな」

「初めまして。主ははやてから話は聞いているよ。よろしく頼む」

そう言つて手を差し出してくるリインフォース。シュウはその手を取ると、笑顔でよろしくね、と言つた。

「そう言えばシュウ君は一人なんか？ マテリアルの子は？」

「ああ、さっきディアーチェと会つて……」

「な！ 子鴉！」

シュウが切り出したところで、うるたえたような叫び声上がる。見ると本を数冊抱えたディアーチェがはやてを見て固まっていた。そんなディアーチェを見てはやてが笑顔になる。

「王様！ 奇遇やなあ、こんなところで」

「ちっ……。貴様が来ると知つていれば来なかったわ」

忌々しい、と吐き捨てるように言つてきびすを返すディアーチェ。去り際に、帰ると短く言い捨てる。そしてそのまま歩き去るうとしたディアーチェを、

「ああ、待つてや王様！ もうちょっとお話ししようやー！」

慌てて追いかけるはやてとリインフォース。そして少し離れた場

所でなにやら言い合いを始めている。二人とも場所に気を遣ってか小声なため、内容までは聞き取れない。周囲の利用者も無反応だ。どこからかすかに、今日もか、という苦笑の音が聞こえてきた。どうやらそれなりの頻度で起こっていることらしい。

初めてあの光景を見るとどうしても不仲に思えてしまうが、お互いにお互いの家を訪ねることもあるなど、関係は悪くないようだ。けんかするほど仲がいいとはよく言ったものだ。

しばらくして二人が戻ってきた。ディアーチェは不機嫌そうな表情だが、はやての方は反対にすこぶる機嫌がよさそうだ。いつも以上の笑顔を振りまいている。

「シユウ君。今日の夜は暇か？」

はやてがそう問いかけてくる。今のところ約束などはないのでうなずくと、嬉しそうに手を叩いた。

「ならい飯食べにこうへんか？ 王様と料理勝負や！」

「どこからそんな流れになったのかいまいち分からないけど……」

一体どこから料理の話になっていたのだらう。想像ができないことと思わず苦笑してしまうが、料理勝負というのは見たことがないのでおもしろそうではある。

「うん。じゃあお邪魔するね」

そう言つと、よっしゃ！ とはやてがガッツポーズをした。

その日は結局太陽が傾くまで図書館に居座っていた。夕方になり、買い出しに行くという二人と一緒に図書館を出る。

「それじゃあ材料を買いそろえたらあたしの家に集合な。王様、すっぱかしたらあかんぞ？」

「たわけ。貴様こそ忘れてたなぞぬかすなよ」

そう言つて二人は途中で別れる。はやてにはリンフォースがいるので、シユウはディアーチェの方についていくことにした。シユウがついてくることを確認したディアーチェは、しかし何も言わずに黙々と歩く。シユウも黙ってその後についていく。

最初の目的地のスーパーが見えたところで、ディアーチェが口を開

いた。

「すまぬな、シユウ。つまらぬことに巻き込んでしまった」

シユウは一瞬驚き、すぐに笑う。何を気にしているのかと。

「いやいや、おもしろそうだし、いいよ。」飯も食べられるし」

「そうか……。ならば良い」

ディアーチェはどこか満足したようにうなずくと、スーパーに入っ
ていった。一緒に入ろうとしたところ、公平にならないから待ってお
くように言い渡された。

買い物が終わり、八神家に到着する。想像していた家よりも一回り
大きくシユウが驚いていると、玄関の前で二人を待っていたはやてが
それを見てまた笑う。

「アリサちゃんやすずかちゃんの家の方が当然やけどすごいで？」

「ああ……。まああの二人ならどんな豪邸でも不思議じゃないけど。
金持ちだし」

それでも一度は見てみたいとは思う。ただ入ってみたいとまでは
思わないが。

八神家の入ると、ヴォルケンリッターが出迎えてくれる。リビング
へと案内してくれるのはシグナムだ。ディアーチェと視線が合うと
どこか気まずそうにしている。

「ディアーチェ。シグナムさんと何かあったの？」

「気にするな」

「……はあ」

それはつまり何かあったということなのだろうが、教えてくれそう
な気配はない。気にしないことにした。

リビングに通されて、ヴィータがお茶を持ってきてくれる。「ゆっ
くり、と緊張した面持ちで言う。少し可愛いと思ってしまった。

「まるで喫茶店だね」

思わずそんな感想が出てくる。丁寧にリビングへと案内され、お茶
を出され。自分は何かしただろうか。

「シユウ君はお客様だから、ゆっくりしてな」

そう言ってキッチンへと向かうはやて。ディアーチェもそれを追う。

「えっと……。お構いなく。僕のことには気にしないでね」

一応そう言うておくが、他の飲み物はどこだお茶請けはどこだと右往左往を続けているので自分の声は届かなかったようだった。

出されたお茶を飲みながらテレビのバラエティ番組を見ていると、キッチンからはやてが出てきた。手にはお盆、その上には炊きたてのご飯と肉じゃが。

「おおー。肉じゃがー」

思わず歓声を上げるシュウ。肉じゃがなどかなり久しぶりだ。目の前に並べられていくと期待感が高まる。

「みんなの分もちろんあるからな。でもちょっと待ってな？」

「はい、大丈夫です」

「今回の主役はシュウ君ですから」

シグナムとシャマルがそう応じる。はやては一つづなずくと改めてシュウに向き直った。

「それじゃあ……。どうぞ、シュウ君。一応それなりに自信はあるよ」
「？」

「それは楽しみだ！ じゃあいただきますー！」

手を合わせ、肉じゃがを食べ始める。ご飯も食べる。久しぶりに食べる肉じゃがは、そう言えばこんな味だったなと少し懐かしさも感じられた。あつという間に食べ終え、ふう、と一息ついて箸を置く。

「うちそうさま。すごく美味しかったー！」

「はい、お粗末さんでした。いやあ、そんな美味しそうに食べてくれると、あたしも嬉しいわあ」

上機嫌に言うはやて。シュウは料理はしても食べてもらうことはないのですが、その感覚はあまり分らないが、そういうものなのだろう。だからこそ正直に言うようにはしているのだが。

「では次は我だ」

キッチンから出てきたディアーチェも盆を持っていた。その上に

はとろとろのチーズが入ったカレー。それをシュウの前に置く。

「おお！ チーズカレーだ！」

「反応同じだな」

思わずヴィータが言うが、シュウは気にしない。目の前に出されたチーズカレーで頭はいっぱいだ。エサを与えられた子犬のごとく、じっとディアーチェの言葉を待っている。

「……待たなくていい。さっさと食べる」

「いただきます！」

シュウはスプーンを手に取ると、すさまじい勢いで中身を減らしていく。肉じゃがと同じく、「こちらもあつ」という間に食べ終えてしまった。

「おいしかった！ いやあ、すごく満足だ」

幸せそうに言うシュウ。出した側としてもそれを聞ければ満足だ。だが、今回の名目は料理勝負でもある。作って食べて終わり、というわけではない。

「それで、シュウ君。どっちが美味しかった？」

はやてに聞かれ、ああそうかと思い出す。今の今まで勝負のことなど忘れていた。腕を組んで少し考える。肉じゃがの味を思い出し、カレーの味を思い出し……。そして出た結論は一つだけだ。

「うん。分からないね。せめて一緒の料理を作ってもらわないと」

「ああ……」

「そうであるうな……」

はやては苦笑し、ディアーチェがため息をつく。二人ともどうやらこの結果を察していたらしい。ならなぜもう少し打ち合わせをしなかったのかと言いたいところだが、ディアーチェがそれを拒否している。そうなので何も言わないでおく。

「それでもどちらかと言えば、ディアーチェかな。僕の好みの問題だけだ」

はやてとディアーチェがそろって目を丸くして、次いではやてが肩を落とし、ディアーチェが得意気に表情を綻ばせる。当然の結果だといっしょに「」。

「シユウ君の好みを知ってるだけあるなあ……。でも次は負けへんで？」

「ふん。次も返り討ちにしてやるわ」

そんな会話を交わす二人。やはり関係は良好なのだろう。むしろこうして見ていると、二人はまるで、

「姉妹みたいだね」

思わず声に出してしまった。そしてその反応は劇的だった。ヴォルケンリッターたちが表情を強ばらせ、はやてが喜色満面になり、ディアーチエが憤怒の形相になる。先に口を開いたのははやてだった。

「やっぱりそう見えるか？ 見えるよな？ いやあ、さすがシユウ君やー！」

「誰が姉妹だ！ 誰と！ 誰が！」

叫ぶのはディアーチエだ。えー、とはやてが不満を言う。

「あたしは姉妹でもいいと思うけどなあ。お姉ちゃんって呼んでくれてもいいんじゃない？」

「誰が呼ぶか！ 阿呆が！」

「じゃあ逆か？ お姉ちゃん」

「貴様……。！ 表に出ろ！ ジャガーノートを食らわせてくれる！」

どつやら自分が発した一言はちよつとした爆弾だったらしい。だがこれすらもいつものことなのか、ヴォルケンリッターたちはすでに立ち直って自分たちの夕食の準備を始めている。

「つれないなあ、王様。あたしは王様のこと、好きやで？」

「黙れ子鴉！ 我は貴様などとは会いたくないわ！」

「そんな……。それはひどいわ……」

はやてが涙声になると、ディアーチエが珍しく狼狽する。

「な、なぜそうなる……。待て、我はそのようなつもりでは……」

「なんて、冗談やけどな」

「子鴉貴様あー！ 表に出ろおおおおー！」

騒ぐ二人。食事の準備を終え、主を待つヴォルケンリッターたち。

シユウはその光景を見て、今日も平和だなあ、と微笑んだ。

Side: Hayate

シュウとディアーチェを見送り、はやては玄関のドアを閉じた。少しだけ寂しげにその扉を見つめ、そしてリビングに戻る。

「彼女は少し柔らかくなりましたね」

リインフォースがやってきて車椅子を押ししてくれる。はやては微笑むと、うなずいた。

「うん。シュウ君のおかげやるうな」

ずっと彼女たちのことが気になっていた。特に今後についてをだ。今後についてのはまだこれから決めていかねばならないが、シュウがきつと良い方向に導いてくれることだろう。なぜだかそんな確信がある。

「これからよろしくな、シュウ君」

新しい友人に向かって、はやては樂しげにそうつぶやいた。

第十六話 五月雨

しとしとと雨が降る。冷たい雨が周りの地面を濡らしていく。シユウはその様子をぼんやりと眺めている。今いる場所はシユテルとよく来る公園で、大きな木の下にいる。目の前には晴れていたなら二人でよく座るベンチがあり、さらにその奥には池。草地の上にレジャーシートを広げ、シユウはそこに座っていた。

隣にいるのはシユテルだ。黙々と本を読んでいる。シユウも先ほどまで本を読んでいたのだが、少し休憩して周囲の様子を眺めていた。

休日の朝にシユウの住居へとシユテルが訪ねてきた。少し出ませんか、と。すでに梅雨入りしており空模様も悪かったが、そんな日に歩くのも悪くないかなと了承した。そして二人でのんびりと歩いていたところで案の定雨が降り始め、今に至る。

レジャーシートや本を数冊持ってきていたことから、シユテルはこうなることは予想していたらしい。最初からどちらかの家にいればいいのにと一度は思ったが、こうして雨の音を聞きながら本を読むのも悪くはないと思えてきた。それに、隣にはシユテルもいる。

しとしとと雨が降る。周囲を濡らしていく。全てに水を与えていく。

「ふああ……」

大きな欠伸をして、シユウは腕を伸ばして伸びをする。目をこすりながら隣を見ると、「こちらを見ているシユテルと目が合った。

「疲れましたか？」

シユテルが聞いて、シユウが首を振る。

「大丈夫。気にせず読んでね」

「はい」

シユテルが再び本に視線を落とす。シユウはそれを見て微笑むと、自分も本を手にとって続きを読み始める。昼までに一冊読み終えし

まおうと、なぜかそんなことを思ってしまった。

そしてしばらくして、シュウは顔を上げる。灰色の雲ぐしにかすかに見える太陽の光が、ほぼ真上へとさしかかっている。もうお昼だ。シュテルを見ると、また目が合った。思わず苦笑すると、シュテルがそつと包みを差し出してくる。首を傾げて受け取って、包みをほどこいて中を見る。弁当箱だ。

「お昼にしましょうか」

「うん。そうだね」

二段重ねの弁当箱を開けると、上段には小さめのサンドイッチが並んでいた。下段には海苔のおにぎり。全てが片手で食べられるものだ。本を読みながら、ということを想定していたのだろうか。

いただきます、と手を合わせ、シュウはサンドイッチを手に取った。具材はハムとレタスだ。シンプルながら、それ故に食べやすい。それを口に入れて、うなづく。

「うん。おいしい。さすがシュテル」

素直にそう言つと、シュテルが小さく頭を下げた。

「光荣です」

そしてまた食べ始める。ゆっくり降り続ける雨の中、のんびりと食べていく。とても静かな時間だ。

やがて全て食べ終えて、弁当箱を包み直す。二人は食事を終えると、また読書へと戻ろうとして、

「……………」

シュウはちらりとシュテルを見る。食事の名残か、器用に片手で本を読んでいる。シュテルの顔とその手を交互に見て、シュウは逡巡して、しかしすぐに口を開いた。

「ねえ、シュテル」

「はい」

すぐに返事が返ってくる。視線は本に落とされたままだが。

「手、繋いでいい？」

「……………」

シュテルが顔を上げる。怪訝そうに眉をひそめ、どつしたのかと言

いたげにシュウを見る。その視線を受けて自分が口走った言葉の意味を理解して、少し恥ずかしくなって顔を背けた。

「いや、ただ何となくだったから……。気にしないで」
「構いません」
「……………」

今度はシュウが間の抜けた声を漏らした。どういう意味か分からずに首を傾げていると、シュテルは黙ってシュウの手を掴む。びくりとシュウが体を震わせ、しどろもどろになって狼狽してしまった。

「あ、えっと、シュテル……………」

「これでいいですか？」

「あ、うん……………」

「こともなげに言うシュテルを見て、シュウは内心で少し気落ちした。やはり自分はそれほど意識はされていないらしい。ただ、それでも手を繋いでくれるということは嫌われていないということでもある。そう考え、それでいいかとシュウは納得した。

シュテルの手は温かい。なぜか妙に安心してしまう。片手でシュテルの体温を感じながら、シュウはまた視線を本に落とした。

Side:Stern

シュテルは視線だけをシュウへと向ける。少しだけ嬉しそうにしているシュウは、また読書へと戻っている。片手はシュテルの手を握ったままだ。そんなシュウを見て、内心で首を傾げた。なぜ、手を繋ぎたいと言ってきたのだろう。

少し考えたが、本人の心の内のことなので理解できるはずもない。シュテルは早々に思考を打ち切ると、また視線を本へと戻す。

ただ、少しだけ。少しだけ恥ずかしいと感じてしまうのはなぜだろうか。

シュウの手は少し冷たい。この雨で冷えてしまったのかもしい。まだ寒さが残る季節だ。簡単な防寒具ぐらいは誘った側である自分が持ってきておくべきだったか。そう思ったが、今から取りに行くことはできなかった。今の時間をもう少し一緒に過ごしたい。そ

う思ったからだ。

さらに時間が流れ、雨足が遠くなってきた。今日は夕方から少し天気が回復すると聞いている。雨が上がれば帰って温かいココアでも入れよう。そんなことを考えていると、不意に肩が少し重たくなった。何が、と思つてそちらに視線を向ける。シュウの頭がそこにあった。

「……シュウ？」

呼びかけてみると、整った寝息が返ってくる。シュテルは一瞬唖然とした後、仕方のない方ですね、と我知らず微笑んでいた。

Side: Hero

シュウはゆっくりと目を開ける。いつの間にか眠ってしまったように、頭が少しぼんやりとしている。だから、目を開けてすぐにシュテルの顔を見た時は、まだ冷静に物事を考えられなかった。

「おはようございます、シュウ」

シュテルのどこか優しいげな声。シュウは少しだけ笑顔になって、「おはよう、シュテル」

答えたところで、思考が一気に戻ってくる。いつの間にか横になっている体、目の前にあるシュテルの顔。そして、頭の下にある何か柔らかないもの……。

膝枕。

「うわぁー」

その結論が出た瞬間、シュウは慌てて飛び起きた。シュテルが少しだけ目を丸くする。

「どうかしましたか？」

きょとんとした様子でそう尋ねてくるシュテル。シュウは慌てながらもその場で頭を下げる。

「う、うめー」

謝罪の言葉を口にするのと、対するシュテルは意味が分からないといった様子で首を傾げるだけだ。シュテルは少し考えて、寝てしまったことなら構いませんと少し違うことを許してくれる。それもある

が、それではない。

「いや、そうじゃなくて、いつの間にかシュテルの膝を枕にしてしまったみたいで……」

「それも別に構いませんが……」

むしろどうしてそんなに狼狽しているのか、と聞きたげなシュテルに、シュウは余計に言葉を詰まらせた。謝罪の必要はないと言われたようなものだが、それでも納得はできない。

「本当にごめん……」

もう一度心から謝罪すると、シュテルの方が納得していない様子だったが、まあいいでしょうと会話を打ち切った。

「私としては問題なかったのですが」

「いやそこはちょっと気にしてほしいなあ……」

「そうですね？ 貴方が気持ちよさそうに眠っていただけで十分なのですけど」

「……えっ」

口を開けて呆けるシュウを置いて、シュテルは片付けをする。最後にレジャーシートを片付けるだけというところまできて、シュテルは忘れ物やゴミが残されていないか確認する。全てが終わって改めてシュウは視線を向けられたが、シュウは固まったままだった。

「シュウ。そろそろ帰りましょう」

シュテルの言葉にシュウが我に返った。慌ててレジャーシートから離れ、畳むのを手伝う。顔が真っ赤になっているのだが、シュテルに何も言われないだろうか。

「では行きましょう」

シュテルが手を差し出してくる。シュウはその手をしばらく見つめ、逡巡してしまう。シュテルがなかなか手を引っ込めないのが、シュウは遠慮がちにその手を取った。

先を歩くシュテル。それを追いかけるシュウ。そして繋がれた手。

シュテルの手はやはり温かく、そして柔らかかった。それを意識するとすぐにまた顔が赤くなる。マンションに着くまでに落ち着かなければならない。

そんなシュウの考えなど知るよしもなく、シュテルは帰路を歩いて行く。その表情はいつもより柔らかい。どこか機嫌が良さそうなものだ。もちろん後ろを歩くシュウはそのことに気がつかないのだが。雨足はすでに遠のき、二人はお互いの手を握って淡々と歩く。濡れた地面の上をゆっくりと、時折水たまりを避けながら。雨の後の世界をのんびり歩く。

「ねえ、シュテル」

前を歩くシュテルに声をかける。何でしょうか、と声だけが返ってくる。

「今日はどうしたの？」「こんな雨の日に」

自分でも今更それを聞くのかと思ってしまうが、ずっと気になっていたことだ。するとシュテルは足を止めて振り返り、いつもの無表情で言う。

「特に理由はありません。たまにはこういうものも悪くはないかと思っただけです」

「そう？」

「はい。無理に付き合わせてしまい、すみません」

そう言っって頭を下げるシュテル。シュウはまさか謝られるとは思っておらず、途端にしどろもどろになってしまっ。

「い、いやー！ そんなことないから！ 僕も雨は嫌いじゃないし……」

ならいいのですが、とシュテルは言って、また歩き始めた。安堵のため息をついて、シュウはすぐにその後を追う。今もまだ手は繋がれたままだ。

雨は嫌いじゃないと言ったが、好きでもない。雨の日は空の暗さのせいもあるのか、少し昔のことを思い出してしまっ。すぐに気が滅入っってしまう。

でも……。

目の前のシュテルを見る。初めて会った魔法使い。明日からの雨はこの子と過ごした今日という日を思い出せることだろう。それならもう少し、雨が好きになれるかもしれない。そこまで考えて、シュ

ウはふと思う。自分はいつまでシュテルたちと一緒にいられるのだろう。

そんな答えのない考えを始めると、自然と歩みが遅くなった。シュテルが怪訝そうに振り返り、

「どうかしましたか？」

「……いや、何でもない。気にしないで」

そう笑顔で答える。シュテルは、そうですかと言った後もしばらくシュウの表情を見ていたが、やがて前に向き直ると歩き始めた。

今は……いいか。気にしなくても。

自分の側にシュテルがいる。シュテルの手を握っている。それだけで今は十分だ。そう自分に言い聞かせ、シュウはシュテルの隣に並んだ。遠慮がちに話しかけると、シュテルがいつも通りに返事をしてくれる。そう、今はこれだけで十分。

しとしとと雨の降った街。通り過ぎた雨。濡れた道を歩く二人。先ほどまでは人がいないかのような静かな世界だったが、ようやく楽しげな二人の声が聞こえてきた。

第十七話 労働

ある日の午前。シュウが自室の掃除を済ませ、お茶を飲みながら一息ついてしていると、突然の来訪客がやってきた。ドアを叩き、シュウを呼ぶ声が聞こえてくる。

「シュウー。開けてくださいー。お願いしますー!」

この声はユーリか。シュウは、どうしたのかなと疑問に重いなうながらも立ち上がり、玄関へと向かう。ドアを開けると、果たしてそこにユーリがいた。シュウの顔を見て、嬉しそうにぱっと顔を輝かせる。いつの間にもやら慕われたものだ。なぜかは分からないが。

「シュウー。お願いしたいことがありますー!」

「うん。とりあえず入って!」

続けて口を開こうとしたユーリを宥め、自室へと招き入れる。ちゃぶ台の前に座ったユーリに冷たいお茶を出し、自分はその向かい側に座ってからどうぞと手で合図をした。お茶を飲んで落ち着いたのか、ユーリがうなずいて話し始める。

「実はディアーチェたちに何か贈り物をしようと思っています!」

「へえ。なんで?」

「え? えっと……。お世話になったらプレゼントをしないとイケないって、テレビでやってました!」

なるほど、とシュウはうなずく。間違っではないのだろうか、そんな突発的に上げるものでもないとは思っが。だがあの三人ならきくと喜ぶだろう。ユーリが望むのなら、それを手伝うぐらいはしよう。

「何を買おう?」

「それはえっと……。秘密ですー!」

なるほど、つまりプレゼント選びかな。そう考え、あの三人ならどんな物なら喜ぶだろうと考え始める。だが、次の言葉にそんなものは吹き飛んだ。

「だからシュウー! お仕事を紹介してくださいー!」

「いきなり難易度が上がったね！ いやさすがに無理だから！」

それ以前になぜいきなり仕事ときたのか。そう聞くと、ユーリは少し難しい表情をした。

「今のお金は、管理局の皆さんに協力することです。自分でいるお金です。みんなでもらっているお金です。ちゃんと、自分でお金をもらって、それで贈り物をしたいんです」

「気にしすぎだと思っけどなあ……」

以前、シュテルから家計のことを少しだけ聞いたことがある。管理局の嘱託魔導師として働き、そこからお給料をいただいていると。食費などの必要なお金以外はそれぞれ均等に四人に分けているそうだ。その分けられたお金ならユーリが自分で稼いだお金と言っても大丈夫だと思っのだが、どうやらあまり納得はしていないらしい。

じっとシュウを見つめてくる。期待に満ちた眼差しで。こうなると、シュウもさすがに断れない。シュウは小さくため息をつく、立ち上がった。

「分かった。ただ僕もそういったお願いができるところは限られるから、期待はしないでね」

「はい……ありがとうございます！」

ユーリの笑顔を見て、まあ悪くないか、と納得してしまった。

「と……いっわけです」

相手に簡単な成り行きを説明する。相手は納得したように何度もうなずいて、笑顔を見せた。

「分かったわ。接客とかなら大丈夫かしら？」

この人なら了承してくれるだろうと思っていたが、まさかこんなに軽く引き受けられるとは。シュウはユーリを前に出して、お願いしますと頭を下げた。

かくして、ユーリはエプロンを着用する。翠屋のエプロンを。

「い、いい、いらっしやいませ……」

入り口で緊張した面持ちで挨拶するユーリ。来店したおばさん二

人はユーリを見ると少し目を丸くし、すぐに柔和な笑顔を浮かべた。かがんでユーリと目線の高さを合わせる。

「あらあら、かわいい店員さんね。どこの子？」

「あ、えっと……。その……」

「ちよっと、お仕事の邪魔をしちゃ悪いでしょう？ それじゃあ席に案内してもらえぬ？」

二人からの続けざまの言葉にユーリは一気に泣きそうな表情になる。助けを求めるように周囲を見回す。それに気づいたアルバイトの人がすぐにフロアに入りしてきた。おばさん二人がアルバイトの人に案内されながら、それじゃあねとユーリに手を振る。ユーリはずっと固まっていた。

「うん。無理そうだな」

桃子から与えられた仕事は、来店したお客様を空いている席に案内する、というものだった。この時間帯に来る人は急いでいる人もいないので、少しぐらいの失敗は大目に見てもらえるからというものだったのだが。

失敗する前に挑戦すらできてないね。

シユウは苦笑すると、席を立った。人見知りするユーリにこの仕事は難易度が高い。残念だが断ることにしよう。

また何かあったらいつでも来てね、という桃子の言葉に見送られ、シユウはユーリを連れて翠屋を後にした。ユーリは茫然自失としている。おそらく自分でもあそこまで何もできないとは思ってもみなかったのだらう。シユウは苦笑すると、さて、と仕切り直しにかかった。

「次に行こうか」

「次……ですか？」

不安げにこちらを見つめてくるユーリ。シユウはうなずくと、

「とりあえず、アースラに行こう」

そう言って、ユーリに手を差し出した。

「なるほど、事情は分かった」

そう言っつうなずいたのは執務官のクロノだ。二件目にして早くも最終手段の管理局頼みだ。そのことに自分が少し情けなくなるが、こればかりは仕方が無い。

「とりあえず艦長に聞いてくるよ。待っていてくれ」

クロノはそう言っつてその場を後にした。二人はそれを見送り、お互いに無言でクロノが戻ってくるのを待つ。

やがて戻ってきたクロノは一枚の書類を持っていた。それを二人に差し出して、言っつ。

「ユーリにはこちらの仕事を。心配することはない、ただの資料運びなどの雑務だ。難しいことはないし、人と話すことも最小限で済む。これなら大丈夫だろう？」

安堵のため息をいつつうなずくユーリ。続いてクロノはシュウに言っつ。

「せつかくだから君も体験していかないか？ 基本的にはユーリと一緒にだ。ユーリも君と一緒にの方が安心できるだろう」

もとよりユーリと共に行動するつもりだったが、お墨付きをもらえらるならその方がいい。クロノの言葉に、シュウはありがとつうなずいた。クロノもつうなずきを返し、言っつ。

「それじゃあ仕事の内容を説明するよ。終わりの時間は君たちに任せらる」

そう前置きして、クロノの説明が始まった。

仕事の内容は単純だったが、それ故にハードだった。資料室から各部屋への往復をかなりの回数こなしている。一つの部屋に資料を持つて行けば、次はこちらを頼むと指示される。その繰り返しで、二人は常に足を動かしていた。ただ、それでもしつかりと仕事ができていることが嬉しいのか、ユーリは嬉しそつうに続けている。ほとんど巻き込まれただけの体に近いシュウも、その表情を見ただけで十分だ。

時折休憩を挟みながら、ひたすらに資料を運び続ける。使い終わっ

た資料を元の部屋に戻すのも二人の役目だ。ひたすらに何往復も繰り返し、やがて海鳴市の時間で午後六時を回ったところでクロノから連絡が入った。そろそろ終わろうかと。

「も、もう少し……」

ユーリが言って、クロノが苦笑する。

「気持ちありがたいが、そろそろ君たちを送り返さないと僕が怒られるんだ。誰から、とは言わなくても分かるだろう？」

「う……。はい、そうですね……」

ユーリがうつむいてうなずき、シュウは少し想像する。ディアーチェヤシュテルが怒っている様を。今日は七時から夕食だと聞いている。そろそろ帰らないといけないだろう。

「それじゃあ、最後に艦長室に行こうか。艦長が待っているから」

そう言うクロノに先導されて、二人は艦長室に向かう。さほど歩いてもせずに艦長室にはたどり着いた。どうやら最後の資料運びは艦長室の側を意図的に選んでくれたらしい。

失礼します、と言ってクロノが室内に入る。シュウとユーリも、やや緊張した面持ちで入室した。

「いらっしゃい、シュウ君、ユーリさん」

和室のようなそつでないような、何とも微妙な部屋を見てシュウは苦笑した。聞いてはいたし知ってはいたが、何度見てもこの部屋は慣れない。シュウとユーリはクロノに促され、リンディの前に座る。

「今日は本当にありがとう。仕事が捗ったって、みんな喜んでいたわ」「いえ。「うちら」そ急なお願いを聞いていただいてありがとうございませす」

答えるのはシュウだ。ユーリはシュウの影で小さくなっている。その様子もいつものことなのか、リンディも何も言わず淡く微笑むだけだ。

「それじゃあ、ごちそう」

リンディが封筒を二封差し出してくる。シュウとユーリがそれぞれ一封ずつ受け取り中身を確認すると、五千円札が入っていた。シュウが、うあ、と妙な声を漏らす。

「いいんですか？　こんなにもらって」

「ええ、もちろんですよ。正当な対価だから」

リンディは笑顔でそう言う。ただ資料を運んでいたただけなのには思っが、とりあえずはリンディの好意に甘えてありがたく受け取ることにした。

「ありがとうございます」

シュウが礼を言うと、ユーリも頭を下げた。リンディはいえいえと手を振る。

「また良ければ手伝ってね。歓迎するわ」

リンディに見送られ、二人は艦長室を後にする。そのままクロノに地上まで送ってもらい、アースラを後にした。

ユーリは何を贈るか決めていたらしい。帰りにデパートに寄ると、ユーリは大急ぎで買い物物を済ませていた。シュウは入り口で待つ。十分程度で戻ってきたユーリの手には大きめの紙袋があり、中にはラッピングされた箱が三つ収まっていた。

「お金は足りた？」

「ばっちりですー」

嬉しそうに言うユーリ。シュウも満足そうにうなずくと、マンションへと向かう。

マンションにたどり着いたのは午後七時になりそうな時間だった。ユーリがドアを開けてたただいまと言うと、奥から誰かが駆けてくる音。すぐにディアーチェが姿を現した。

「ユーリ！　戻ったか！　今までどこに……」

「ごめんなさい、ディアーチェ。ちょっとお買い物に行っていました」

嘘は言っていない。シュウは隣で思わず苦笑してしまう。ひとまずユーリと共に室内に上がりリビングに向かうと、すでに夕食が並んでいた。ハンバーグだ。

「わー！　ハンバーグですー」

「はい。冷めないうちに食べてください」

そう言ったのはシュテルだ。すでに席について、全員分のご飯を準備

備している。レヴィは待ちきれないとばかりに目を輝かせていた。

「あ、その前にですね……。」「これを、三人に……」

ユーリが紙袋からラッピングされた箱を取り出すと、三人に渡す。三人はそれぞれ大なり小なり驚いた様子だった。

「ありがとうございます、ユーリ」

最初に言ったのはシュテルだ。続いてディアーチエ。

「突然どうしたというのだ……。いや、ありがたく受け取っておく」

「ユーリ、ありがとー！」

最後にレヴィ。ユーリは何かやり遂げたかのように、少し誇らしげな表情をしていた。全てを知っているシュウはそれを微笑ましげに眺める。そして、シュテルも。

食事後。シュウは玄関に向かう途中でシュテルに呼び止められた。

「シュウ。ありがとうございます。わざわざ連絡していただいて」

気にしないで、とシュウは笑う。今回の顛末は資料運びの合間を縫ってシュテルに連絡済みだった。実は今日の夕食も、一日がんばったユーリを労うためのメニューだった。

「ちなみに、何をもらったの？」

シュウが聞くと、シュテルは首を振って言う。

「秘密、というところで」

「そっか。分かった」

大人しくうなずき、シュウは玄関へと向かった。

S i d e : Y u r i

シュウを自宅へと送るために、シュウの隣をユーリは歩いていた。歩きながら、今日一日の出来事を振り返る。何から何までシュウに頼りっぱなしだった。

「シュウ」

「ん？」

「今日は、ありがとうございます」

せめて心からのお礼を口にする。するとシュウは、

「いや、僕も貴重な体験ができて良かったよ」

そう笑顔で言ってくれる。いつもの、屈託のない笑顔だ。その笑顔を見ていると、ユーリも自然と笑みがこぼれてくる。

いつかは、私もみんなを支えられるようになりたい……。

そんなことを心に思いながら、ユーリは今日もシュウの隣を歩いた。

第十八話 七夕

とある家の夜の庭。シユウはそこで呆然と立ち尽くし、考える。なぜこつなつた。

目の前ではどこから持ってきたのか、大きな笹が飾られている。知り合いたちが願い事を短冊に書き、吊していく。庭にはテーブルが出され、様々な料理が並べられていた。こういう行事ではなかったはずだが。

シユテルとなのはが二人で短冊に何かを書いて、なのはが笑ってシユテルが嘆息している。あまり見ない光景なので少し新鮮だ。こついつのもいいなとは思つのだが、それでもやはり、なぜ自分もここにいるのだろつとは思つ。

高町家の庭で、シユウはそう思った。

発端は学校から帰る時だった。さて帰ろつと帰宅の準備をしていると、なのはが駆けてきた。どつしたのかと首を傾げていると、なのはが目の前で息を整えてから言つ。

「ねえ、シユウ君。今晚、暇かな？」

突然の問いかけ。クラスメイトの何人かが驚いて二人を見るが、シユウとなのはは気づかない。

「シユテルとの約束があるけど、どつしたの？」

「シユテルもあとで誘つつもりだったんだけど……。よければ家に来ない？ お父さんが葉竹をもらってきてるから、みんなで願い事を書こつてことになつてるの」

「……ああ。そう言えば今日は七夕だっけ」

完全に忘れていた。そついった行事とは縁が無かつたので当然と言えば当然なのだが。なのははどうかな？ と少し不安げにこちらをうかがっている。

「分かつた。シユテルには僕から聞いておくよ。多分大丈夫だとは思ひげど」

「ほんとに？　ありがとうっ！　じゃあお願いー」
嬉しそうに笑うのは。シュウは了解、と一つづなずくと、教室を後にした。

夜までの時間はさほど長くない。シュウは自宅には戻らずに、そのままシュテルたちのマンションに向かう。シュテルたちにも準備があるだろうと考え、道すがら携帯電話でシュテルに連絡をすることにした。

『はい、シュテルです』

「コールで出たことに驚きつつ、シュウは歩きながらなのはからの誘いを説明した。するとシュテルは、七夕ですかとつぶやき、しばらく考え込む。のんびりと次の言葉を待っていると、やがて分かりましたとの返事があった。

『ではナノハの「自宅に伺いましょう。王やレヴィたちにも伝えておきます』
「うん。よろしくね」

電話を切って、そろそろ急ごうかとシュウは走り始めた。

マンションでシュテルたちと合流して高町家へ向かう。道中、レヴィやユーリはとてもテンションが高かった。七夕って何をするんだろうねー、とそんな言葉を交わしている。シュウが首を傾げてシュテルとディアーチェを見ると、行けば分かると答えたとのことだった。

「きつとあれだよユーリー！　お団子が食べられるんだー！」

「いやそれはお月見だから」

苦笑しつつ訂正する。実際にあちらでどういったことをするのか聞いていないが、あまり期待させてしまつのはいけないだろう。とりあえずはハードルを下げておこうと思う。

「じゃあ何を食べるの？」

「……食べることから離れようか……」

レヴィの中では行事と食べ物かイコールで繋がっているらしい。確かにほとんどの場合は間違いないが、さすがにそればかりとい

うわけではない。

「まあ、行ってからの楽しみというところで」

「はい」

元気よく返事をするレヴィとユーリ。うなづくシユウ。後ろで見ていたディアーチェが、

「どこの父親だお前は」

呆れながらそんなことを言って、シユテルがため息をついていた。

高町家に到着し、インターホンを押そうとしたところではのが笑顔で出てきた。押そうとしていた体勢のままシユウが驚いて目を丸くする。

「よく気づいたね……」

「うん。シユテルからの念話で」

なるほど、便利だ。こういった時は少し羨ましくなる。

なのはに案内されて敷地内へ。建物には入らずにそのまま庭へ向かう。どこから調達してきたのか、そこには立派な葉竹があった。その周囲にテーブルが並び、料理が所狭しと並べられている。レヴィがそれを見て目を輝かせたのは言うまでもないだろう。七夕について間違った解釈をするのではと思うが、いずれ正せばいいかと今は何も言わないでおく。

「こちらを認めた何人かが向かってくる。フェイトとはやてだ。

「レヴィー！ 来たんだね」

「来たよー！ おいしいものが食べられると聞いてー」

「あはは。うん。たくさん食べられるよ」

そう言いながらフェイトはレヴィの手を取ると、テーブルの一つへと連れて行く。レヴィも喜んでフェイトに連れられていった。

「王様、これはあたしが作ったんよ。食べてなっ」

「ふむ。……なるほど、なかなかの見た目だ」

「いや味ー 食べてっ……」

いつの間にかディアーチェもはやてと一緒にいる。はやてがきれいに盛りつけられた皿をディアーチェに押しつけようとして、対する

ディアーチェはそれを無視して感心した様子で葉竹を眺めていた。少くづらひ話してあげても、と思っていると、ディアーチェがおもむろにはやての料理に手を伸ばし、口に入れる。

「うむ。悪くない」

ぶっきらぼうなその言葉。はやてはしばし啞然とした後、すぐに嬉しそつに笑った。

「願い事用の短冊。ちゃんと五色あるよ」

「なるほど。では一枚いただきませう」

シュテルはなのはと短冊に向かっている。どうやらこれから願い事を書くらしい。

「みんなとずつと仲良しでいられますように」と

「ナノハを倒せますように」

「ひどいー」

「冗談です」

いい関係だなあ、と二人のことを眺めた後、いつの間にかユーリの姿までなくなっていることに気がついた。周囲を見回すと、高町家の家族に囲まれていた。

「へえ、君がユーリちゃんか！　かわいいなあ……」

あの人は確かなのはの姉だったか。その母親がユーリを撫でながら、またいつでも翠屋に来てねと楽しそつに言っている。どうやら先日働いた時にとても気に入られているらしい。ユーリは困惑しているようだが、しかし嬉しそつでもある。

そして自分は一人、取り残されていた。

「……何だろつこの疎外感は」

苦笑して、シュウは短冊に手を伸ばした。

そして今に至る。

料理に舌鼓を打ち、短冊に願い事を書き、親しい者と談笑し……。そんな中で、シュウは一人だけ庭の隅で短冊を睨み付けていた。願い事を書くころとは思ったのだが、何も思い浮かばない。料理にも手を付けず、ずっと考え込んでいる。

腕を組んで唸っていると、ジュースの注がれたコップを差し出され

た。少し驚いて顔を上げると、シュテルが立っていた。

「オレンジジュースです。ずっとここにいますね」

「ありがとう。うん、ちょっと輪に入りづらいかな」

「ここにいるほとんどの者は魔法の関係者、またはその家族と友人だ。なのはたちがどのような事件に直面したか知っている人たちだけだ。自分は簡単に話を聞いただけの部外者。そんな自分が輪に入れるはずがない。

「そんなことは誰も気にしないと思いますが」

「うん。僕が気にする」

「そんなものですか」

「そんなものです」

オレンジジュースを一口飲み、のどを潤す。少し空腹も感じ始めてきた。

「いちぢらもどつぞぞ」

そう言っただけでシュテルは料理が載った皿を差し出す。盛られているのはサンドイッチだ。礼を言って受け取り、口に入れる。すっかり慣れ親しんだ味だ。

「……あれ？　これって」

「はい。私が作ってきたものです」

「こともなげにシュテルは言い、シュウはそっかとおつづやいて口を動かす。呑み込んで、笑顔で言った。

「うん。さすがシュテル。美味しい」

「誰が作っても材料が同じなら変わらないとは思いますが……。光栄です」

その後は静かな時間が流れる。サンドイッチを頬張りながら、目の前の賑わいを眺める二人。輪の中には入らずに、シュウは傍観者の立場を貫く。これで、いい。

「そう言えば、なのはとはもついいの？」

ふと疑問に思いそう尋ねると、シュテルが小さくうなずいた。

「ナノハから、シュウのところへ行くべきだと」

「ふつん。なんで？」

「なぜでしょうっ？」

二人して首を傾げる。考えても理由は分からず、二人はすぐに、まあいいかという結論に達した。会話が止まってしまったので、今度はシュウから問いかける。

「シュテルは願いたい事はもう書いたの？」

問われたシュテルは一つうなずき、指で指し示す。すでに吊されている短冊の数は結構なものになっていたので分からないが、あのだれかにあるのだろう。内容を聞くと、秘密ですと言われてしまった。

「僕はどうしようかな」

「思い浮かんだものを書きましよう。一枚だけとは言われていませんし、思いつく全てを書いてもいいと思いますよ」

シュテルの言葉に、なるほどとうなずく。全て書いてもいいなら、これは書いておきたいというものがある。ただ見られるのが恥ずかしくて書いていなかったものだが。シュウは短冊に文字を書くこと、りあえず一枚目と笑顔で言った。

「あとは……」

短冊をもう一枚手に取り、少し考える。そして思い浮かんだものは、自分にこんな感情がまだあったのかというものだった。思わず自嘲を漏らすと、シュテルが首を傾げてくる。何でも無いよと笑い、りあえずそれも書いておいた。

「二枚目。あともう一枚」

「意外と欲張りですね」

「そうかな？　そうかも」

笑いながら、三枚目はすぐに書き終えた。それを葉竹へと持って行き、吊す、すぐに戻ってきた。シュウの短冊には誰も気づかない。

「何を願いましたか？」

「ん？　秘密」

何か飲み物を取ってくる、と言ってその場を離れる。吊した後書いた内容を後悔した。さすがに少し恥ずかしい内容だ。近くのテーブルからジュースを取ってくると、すぐに庭の隅へと引き返す。だがそこにシュテルはおらず、

「……………」

葉竹の、シュウが吊した短冊の真下にシュテルがいた。書いた一枚を思い出し、少し恥ずかしそうに頬をかく。葉竹の方に行くとき、シュテルが少しだけ振り返り、すぐに視線を戻す。

一枚目。

『家族と仲直りできますように』

自然とこれを書いたということは、自分はやはりまだ家族の中に戻りたいと思っているらしい。自覚はないが。

二枚目。

『シュテルたちとずっと一緒にいられますように』

シュテルはその短冊を見て、固まっていた。シュウ自身は顔が真っ赤になっている。

「えっと……………。あまり見ないでほしいかな……………」

シュウが遠慮がちに言うと、シュテルは振り返り、すみませんと頭を下げてきた。慌てて手を振るシュウ。

「別に怒ってるわけじゃないから……………」

「シュウ」

「あ、え、なに？」

真剣な声で名前を呼ばれ、姿勢を正してしまつ。シュテルはそんなシュウの手を取ると、ほんの少しだけ微笑んだ。

「貴方が望むのなら、私は……………私たちは貴方の側にいますよ」

シュウが目を大きく見開く。シュテルはまたいつもの無表情に戻り、それだけです、と締めくくつた。

「……………ありがとう、シュテル」

「いえ」

手を繋ぎ、葉竹を眺める二人。シュウは、今の生活が続きますように、そつ心の底から願っていた。

そんな二人を眺める三人。アリサとすすか、それになのはだ。

「なかなかいい雰囲気じゃない？ あとはシュウに度胸があれば！」

「度胸も何も、これだけ人が多いと無理だと思つよ？ アリサちゃん」

「じゃはは……」

少しだけ羨ましそうに、だが温かく見守っていた。

三枚目。

『みんなの願い事が叶いますように』

その短冊は、瞬きの間もないほどの一瞬、淡く発光した。だが誰もそのことに気づかなかった。

第十九話 里帰り

「……………」
シュテルたちのマンションのリビングで、シュウはどんよりとした空気に包まれていた。時刻は朝八時。少し前に管理局からの呼び出しを受けてレヴィが向かったのだが、レヴィですら話しかけようとしていないほどにシュウの周囲はとても重い。

シュテルとディアーチェはそんなシュウの様子をうかがいつつ、対応に窮している。なにせここまで気落ちしているシュウは初めて見る。声のかけ方からして分からない。

しばらくシュテルとディアーチェは視線を交わしていたが、やがてシュテルが小さくうなずいた。シュウに向き直り、言う。

「シュウ。どうしたのですか？ 私たちでよければ聞きますが」

シュテルの言葉を聞いて、シュウは胡乱な瞳をシュテルに向けた。シュウがゆっくりと笑顔を作る。だが顔のあちこちが引きつっており、笑顔とは言えないものになっている。

「明日……………」

「はい」

「父さんから呼び出しを受けた……………」

「……………はい。」

予想外の言葉にシュテルだけでなくディアーチェも眉をひそめた。シュウの両親はシュウをあからさまに避けて遠ざけているようだったのだが、そのシュウを呼び出してどうするつもりだろうか。

「目的が分からなくて行くのが嫌だ……………」

いっそのこと無視しようかとも思ったが、学費や生活費などは出してもらっている以上、そんなことはできない。理由も目的も分からないが、行かないという選択肢は初めからない。

「なるほど、それで朝から元気がないのですね」

シュテルが納得したようにうなずき、シュウは申し訳なさそうに頭

を下げた。

「じめんね、気を遣わせちゃって……」

しっかりと頭を下げるシュウに、シュテルがいえ、と首を振る。それでもシュウは頭を上げられない。やがてシュテルが、つまり実家に帰ると？ と会話を続けてきた。

「うん。一応そうなると思う。まあ話をしたら帰ってくるけどね」

なるほど、とシュテルが考え込む。どうしたのだろうかと首を傾げていると、やがてシュテルが、分かりましたと一つうなずいた。

「では私も一緒にしましょう」

「……へ？」

「一人だから不安なのでしょう。それとも、私では役者不足でしょうか」

「い、いやいやそんなことはもちろんないけど……！」

両親に一人で会うというのはかなり心細いものがあったので、シュテルの申し出は正直嬉しいものだ。だが、シュテルの意図が分からない。自分の父親の態度は以前一度見て知っているはずだ。もう一度会いたいとは思わないだろう。

「理由でしたら、この世界の他の土地も見たいというだけです。他意はありません」

シュウの表情からシュウが何を気にしているのか察したのだから、シュテルがそう言った。シュウは未だに納得していなかったが、来てくれるなら、とシュテルの申し出をありがたく受けることにした。さすがにシュテルに不快な思いはしてほしくないのです、実家に行く時は別の場所に待機しておいてもらえばいいだろう。

ではそういうことで、とシュテルはうなずくと、ディアーチェに向き直った。

「王。すみませんが、明日は外出します」

「うむ。気をつけて行ってこい」

特に反論もせず、ディアーチェは興味なさげにうなずいただけだった。

翌日。シュウとシュテルは朝の八時に合流して、九時の電車に乗った。シュウの実家まではここから少し遠く、新幹線で一時間ほど。時間にしては短い、距離で考えるとかなりのものだ。電車賃も安くないので、呼び出しがなければわざわざ帰らなかっただろう。

両親の呼び出しは手紙によるものだった。その手紙には往復の金も同封されていた。一人分しかなかったため、シュテルの電車賃は出せなかった。涼しい顔で問題ないとは言っていたが。

新幹線では同じ列の席に座り、到着をのんびりと待つ。その間、シュテルは本ではなく、クリップで留められた紙束を見つめていた。文章が羅列してあるので何かの、おそらくは魔法関係の資料だろう。邪魔をしてはだめだろうと思い、シュウは到着まで眠ることにした。

新幹線から降りた後は各駅停車の電車に乗る。十駅ほどで降りた場所は、普通の町並みだった。高層ビルが建ち並ぶわけでも田園が広がるわけでもない。適度に田園があり、民家が並び、マンションが点在し、といった都会とも田舎とも言えない町。海鳴とさほど変わらなうとも言える。

「うん、ですか？」

「うん。あまり寄り道したくないから、行くつか」

いい思い出のあるところではない。それに、シュウの顔を覚えている人も少なくないだろう。寄り道せずに向かうことにした。

人目を避けるように大きな道を避けて歩く。時折遠回りをしていくことにシュテルも気づいているだろうが、幸い何も言わずにいられた。そのことに心の中で感謝しつつ、歩を進める。一時間ほど歩いたところで、民家が並ぶ住宅街が見えてきた。その中の一軒、一際大きい建物へとシュウは向かい、門の前まで来たところでシュテルへと振り返る。

「この家ですか？」

「うん」

敷地の広さや家の大きさなどは八神家と同じようなところだ。ただ、シュウの実家は洋風に近い造りの家で、三階建てになっている他、地下室もある。昔はよく地下室を秘密基地と言って遊んだものだ。

「それじゃあ、シュテル。終わったら連絡するよ。近くに本屋さんがあったはずだから……」

「いえ、私も行きます」

「そっか……。え？」

シュテルの言葉にシュウが間抜けな声を出した。シュテルは変わらずの無表情で続ける。

「一人だと心細いでしょう。心配しないでください。私は一切口を挟みませんから」

言われたシュウは、どうしようかと悩んでしまう。確かに一人で両親の顔を見るよりかはシュテルがいてくれた方が心強いが、そこまで巻き込んでしまっていていいものだろうか。どうしようかと考えていたが、その思考は中断せざるを得なくなった。

「……何をしている」

実家から出てきた男、シュウの父親。シュウは驚いて振り返り、表情を強ばらせる。そんなシュウの手を、シュテルは黙って握ってくれた。

「さっさと入れ。近所に迷惑だ」

父がそう言って中へと消える。シュウは一つ深呼吸すると、「ごめんねとシュテルに謝罪する。シュテルと一緒にのどろろを見られた以上、選択肢はなくなった。一緒に行くしかないだろう。」

「よろしくね、シュテル」

シュウの弱々しい声に、シュテルはしっかりとつなずきを返した。

父に通された部屋は、六畳ほどの和室だった。ちゃぶ台と座布団があるだけの部屋だ。何のための部屋かは詳しくは知らない。その部屋には先客がいて、母親が先に座っていた。母はシュウを一瞥すると、心底嫌そうに鼻を鳴らす。シュウは思わず苦笑しつつも、その向かい側に座った。シュテルはその隣だ。

「誰よ、その子」

母の投げやりな言葉。シュウは笑顔で答える。

「友達。心配してくれて、一緒に来てくれたんだ」

母は、あつそ、とそれほど興味もないのか、すぐに顔を背けた。

父が母の隣に座る。茶などは当然出ない。ちゃぶ台だけが間に座る不思議な空間。やがて父がおもむろに口を開いた。

「秀一。単刀直入に言う」

「なに?」

「引っ越してもらおう」

「……な……」

突然の言葉にシュウは言葉を失い、シュテルはわずかに目を細めた。父はそんなシュウの様子など知ったことではないという体で言葉が続ける。

「転校の手続きは終えている。次の学校はさらに遠くなるが、気にすることでもないだろう。引っ越しの準備は自分でしろ。明日には業者が荷物を取りに行く」

矢継ぎ早に言う父。シュウの頭は真っ白になっている。なぜ、今まで放置していたくせに、突然転校なのか。意味が分からない。父がさらに言葉を重ねるより前に、シュウはちゃぶ台を叩いて父の言葉を止めた。

「……なんだ」

不機嫌そうな父の顔。シュウは少し怯むが、それで引き下がれるはずもない。

「転校は、嫌だ。友達がたくさんいる。今の家から離れたくない」

はつきりと拒否の意思を伝えると、しかし父は鼻で笑って一蹴した。

「お前に拒否権があるとでも思っているのか? いいから支度をしておけ」

あまりの横暴のシュウは怒りで我を忘れそうになるが、しかしぐつと目を閉じて首を振った。父の言う通り、自分に拒否権はない。父は父親であり、金を支払っているのもこの両親だ。自分には何の権利もない。シュテルたちと別れなければならないのは残念だが、仕方のないことなのだろう。

シュウがため息とともにシュテルへと振り返る。そして、絶句し

た。

シュテルは静かにシュウの両親を睨み付けていた。不愉快だからといった理由の目ではない。明らかに敵を見る目だ。だが、シュテルはシュウが見ていることに気がつく、すぐにいつもの無表情に戻った。

その後はほとんど会話もなく部屋を出た。両親は当然見送りに来ない。意気消沈したまま玄関まで歩いていると、

「あ……………」

「……………」

車椅子の少女が玄関で固まっていた。シュウを見て、言葉を失っている。

「お兄ちゃん……………」

少女の、妹の声。だがシュウは何も言わず、妹の横を通り過ぎて靴を履く。

「また、逃げるんだね」

妹の声。シュテルが振り返ろうとするが、シュウがそれを止める。

「……………行くっ」

「分かりました」

妹には何も声をかけずに、シュウは実家を後にした。

今更。今更何を言えるというのか。自分を恨む妹に対して、何を。

駅までたどり着いたところで、シュウは大きなため息をついた。家に帰ってから忙しくなる。心の準備もしなければならぬ。

せめて、海鳴に着くまでに……………。

そう決心してシュテルへと振り返る。だがシュウの思惑に反して、シュテルは天を仰いで目を閉じていた。少し嫌な予感がしつつもシュテルの言葉を待つ。そしてシュテルの言葉は、予想通りのものだった。

「すみません、シュウ。仕事が入りました。先に帰っておいてください」

「え？ いや、でも……」

どじりして、と思つ。こんなタイミングで。今でなくていいだろうに。

「すみません。ではまた」

シュテルはそう言つて、きびすを返して歩いて行く。シュウにはその背中を、呼び止めることなどできなかつた。

Side:Stern

シュテルは来た道を戻り、やがてシュウの実家へとたどり着く。インターホンを押すと、シュウの両親が出てきた。シュテルを見て、わずかに驚いた様子だつた。

「忘れ物か？ ならさつさとするといい。ずっと無言で何をしに来たのやら……」

後半はぶつぶつと独り言のようだつた。シュテルは無表情で言う。

「はい。忘れていたことを」

「ならさつさと……」

しろ、という言葉は出させなかつた。シュテルは相手が反応できないように、素早く結界を展開し、そして、二人にデバイスを、ルシフェリオンを向けた。

「時空管理局囑託魔導師、シュテルと申します。ご同行願えますか？」

時間をさかのぼり、新幹線の中。シュテルは眠っているシュウの寝顔を横目で見、資料を読み進める。それは、シュウの両親に関するものだつた。

西崎ケイン 及び 西崎さくら に関する報告書。

西崎ケイン。元管理局所属の魔導師。現在は研究者として活動。主にロストロギアに関する研究を行っている。特に後述するロストロギアに対しては執着を見せている。さくらと結婚後に管理局を退職し、住居をさくらの故郷である第九十七管理外世界の地球へと移している。

.....
西崎さくら。元管理局所属の魔導師。ケインと同様、現在は研究者として活動。ただしケインほど表だって活動はしておらず、ケインのサポートをメインとしている。ケインと結婚後、故郷である第九十七管理外世界の地球へと戻り、研究を続けている。

.....
二人の共通事項。定時連絡では、十年ほど前に子供を授かるが、管理局の仕事に巻き込まれ、生むことはできなかった。そのことに絶望しての管理局退職と見られる。

共通して熱心に取り組んでいる研究対象のロストロギアは、願いを叶えるというもの。前述の経緯から何かをするつもりではと疑われていたが、そのロストロギアの規模を考慮し、その可能性は否定された。

そこまで読み終え、シュテルはシュウを見る。死んだはずの二人の子供。存在していないはずの存在。そつとシュウの手を握る。人の温かさがある。そのことに我知らず安堵する。そして資料の最後の一枚を見る。二人が研究しているロストロギアについて書かれていた。

二人が調べているロストロギア。願いを叶えるとされているが、現在までこのロストロギアによる大規模な被害などは出ていない。おそらく効果そのものが弱く設定されていると思われる。そのため、叶えられる願いは小規模なものになっているようだ。ただしそれ故に暴走も確認されており、ロストロギアの中では危険度は低いものとされている。

その願いを叶えるロストロギアの名称は以下の通り。

ギフトッド。

第二十話 真実

暗い闇の中、彼は目的もなく漂っていた。行きたいところも何もない。ただ、流れに任せてそれは進んでいく。時空の流れに身を任せ
て。

やがて彼はたどり着いた。どこかの世界。名前など知るはずもない。興味もない。興味があるのは、願っただけだ。最初で最後のマスターの命令を唯々遂行するのみ。やがて彼は、二人の人間を見つめる。つい先ほどまで泣いていたのか、二人とも目が赤い。二人の心の内を探り、彼らの願いを聞こうとする。

その瞬間、流れ込んできたのは深い悲しみだった。体が引き裂かれ
そうな悲しみ。そして叶うはずもない願い。あまりに悲壮で切実な
願い。その願いを聞いて、彼は悩む。彼には無から有を生み出すこと
はできない。だが、どうしても二人の願いを叶えてやりたい。

だから彼は、決断した。

「ん……」

シュウはゆっくりと目を開く。最初に視界に入ったのは、鈍色の天井だ。当然自分の部屋ではなく、シュテルたちのマンションでもない。

夢、かな……。何の夢だったっけ……。

思い出そうとするが、ほとんど思い出せない。暗い場所にいた気がするが、それだけだ。

いや、今は夢のことよりも……。

周囲を確認する。ベッドだけがある部屋で、シュウはその部屋に寝かされていた。ドアは一つだけで、そのドアの形状からここがアースラの中だろうことは分かる。次に疑問に思うのは、どうして自分がここににいるのか、ということだ。

目を閉じ、記憶を掘り起こす。シュテルと別れた後、シュウは帰り

の切符を買って、ホームで電車を待っていた。そこで声をかけられて、振り返ると、

「ディアーチェと……ユーリ……」

二人がいたのは覚えている。ディアーチェは不機嫌そうな表情で、ユーリは申し訳なさそうな表情だった。それを認識した瞬間に意識が途切れたはずだ。つまりは、彼女たちが自分に対して何かをしたのだろう。

なぜ、と思つが考えても答えが出ないことは分かっている。シユウはすぐに思考を中断すると、ドアへと向かう。だが、どうやってもドアは開かなかつた。

「……なんじゅ。」

首を傾げ、ベッドへと戻る。先ほどは気がつかなかつたが、ベッドの側には小さなテーブルがあり、水とお菓子、果物が用意されていた。しばらくここにいろ、というような意図が伝わってくる。シユウは苦笑しつつもベッドに腰掛けて、誰かが来るのを待つことにした。

水を飲んだところで、唐突に中空にモニターが出現し、驚いているシユウの目の前で別室の映像が流れ始めた。

Side:Stern

テーブルとiusがあるだけの部屋にシュテルはいた。テーブルの反対側には二人、シユウの父親ケインと、母親のさくらがいる。ここまで二人は特に抵抗することもなく、大人しくついてきていた。

二人の向かい側に座るのはリンディとクロノだ。シュテルはその側で立って、シユウの両親の様子を観察している。

やがて、ケインが口を開いた。

「どついつつもりかな？ 管理局」

どこか不機嫌そうな声だが、緊張の色もある。リンディはそのケインに対し、笑顔で答える。

「少しお話を聞かせていただきたくお呼びいたしました。秀一君のことうについてです」

「あれが何かしましたかな？ あれとはほとんど絶縁状態ですが、ま

あ一応親だ。責任ぐらいはとりまじょう」

おいくらで？ とケインが薄く笑いながら聞いてくる。あまりに不快な言い方だが、さすがと言つべきか、リンディとクロノは表情を変えなかった。

「いえ、特に何もしていません。ただ秀一君のことについて聞きたいだけです」

「ふむ。生活のことですか？ これは親子の問題。あなたたちが気にすることではないはずですが」

その通りだとは思つ。ただし、普通の親子なら、という前提条件があるが。

リンディがシュテルへと目配せする。シュテルは一つうなずいて、少し前まで自分が読んでいた資料を二人に差し出した。怪訝そうな表情でそれを受け取った二人だが、それを読んで表情を険しくする。やがて、シュテルを睨み付けてきた。

「ずいぶんと調べたようだね。こんな個人的なことまで調べられるとはさすがに思わなかったよ」

口調が変わった。いや違つ、とシュテルは内心で否定する。口調が戻ったと捉えるべきだろう。おそらくはこれが本来の彼であり、シュウの前でのあの態度は、仮面を被ったものだ。

「改めて、お話を聞かせていただきます」

シュテルがそう言つと、ケインはため息をついてうなずいた。

「貴方たちにはロストログアの無断使用の疑いがあります。理由などあれば聞きますので、正直に話してください」

そう言ったのはリンディだ。ケインとさくらがうなずく。

「管理局が調べた記録では、貴方方のお子さんは生まれることなく亡くなっているそうですね。秀一君は養子ですか？」

リンディが聞いて、ケインとさくらが首を振った。二人で目配せして、今度はさくらが口を開く。

「養子じゃないわ。そんなことは調べているはずでしょうっ？」

そこまで言うてから、さくらは不機嫌そうに眉をひそめた。三人を順番に睨み付ける。

「ある程度の予想をしているのなら、先にそちらを話してほしいわね」
その言葉に、分かりましたとリンディがうなずいた。

Side…Hero

「……………」
シユウは黙ってモニターに映る映像を、食い入るように見つめていた。モニターに映る映像は、別室での光景だろう。なぜここに両親がいるのか、とは思つが、会話の流れから察するにどうやら魔法の関係者だったらしい。全く気がつかなかった。

「シユウ。入るぞ」

部屋のドアが開かれ、ディアーチェが入ってくる。シユウは力なく笑つと、いらつしやいと出迎えた。その表情を見て、ディアーチェが一瞬だけ言葉に詰まるが、すぐに鼻を鳴らしてシユウの側まで来た。「先ほどはすまなかった。納得させてから連れてくるべきなのであるうが……………」

「いいよ。気にしないで」

シユウの言葉にディアーチェは少し黙ると、分かったと小さくうなずいた。そしてシユウにクリップで留められた紙束を差し出していく。受け取り、内容を見る。自分の両親について書かれたものだ。少しだけ驚き、モニターに再び視線を向ける。

「シユウにはつらい内容になるだろう。聞かない、という選択肢もある。我らは強制はせぬ」

「……………大丈夫。聞くよ」

「……………そうか」

ディアーチェはそれきり黙り込んだ。だが退室するわけでもなく、側にくれる。何も言ってくれないが、側に誰かがいるというだけで心強い。シユウはディアーチェに感謝しつつ、モニターの音を聞きながら手元の資料に目を落とした。

Side…Stern

「貴方たちが願いを叶えるロストロギア、ギフトッドを調べ始めたの

はお子さんが亡くなってからですね？」

リンディの言葉に、ケインとさくらがうなずいた。二人とも神妙な面持ちだが、別段取り乱す様子はない。

「どういった手段かは分かりませんが、貴方はギフテッドを手に入れた。そして、その研究を始めた。管理局などの然るべき機関に提出しなかったのは、それを利用するため」

またもうなずく二人。だが今度は少し時間がかかった。答えることをしたくないかのよう」。

「貴方がギフテッドを利用する目的は……。お子さんの蘇生、ですね？ その結果が秀一君であり、つまりは秀一君はギフテッドによって蘇生された子。こんな推測をとりあえずは立てましたが、間違いはありますか？」

「いや、ない。見事に正解ですよ」

ケインがやれやれと苦笑しつつ首を振る。さくらも諦めたようにため息をついて笑った。

「まああれの存在が知られた時点ですぐにばれるとは思っていましたがどね。それにしても、手が早い。それで、私たちはどうすればいいのです？」

ケインの問いかけに、リンディとクロノは少し呆気にとられた。今ある情報で簡単に推察しただけのものが正解だとは思わなかった。だが二人はそれを認めている上に、自分にある罪とはしっかりと向き合うつもりのような。今はこれ以上を求めべきではないかもしれない。

事実確認や裏を取るのには後でさらに詳しくするとして、今はとりあえず二人にもっと詳しく話を聞くことが先決だろう。リンディはそう判断して、これからのことを提案しようとして、

「……………待ってください」

そこでシュテルは口を挟んだ。リンディがこちらへと振り向いてくる。シュテルはただ黙ってケインとさくらの様子を観察していた。今は二人とも、こちらを不思議そうに見つめている。

考える。ケインとさくらはギフテッドを使用後もギフテッドに対

する研究を続けていた。二人の経緯から疑われることは容易に想像できるだろうに、それでも続けることを選んだ。まだ手元にあるということだろうが、子供の蘇生以外に何かに使ったということか。

手元にある、という条件なら、なぜ管理局に伝わるような公の場で研究を行ったのかも疑問だ。他のロストログアの資料などは自由に手に入るのかもしれないが、ギフトッドそのものは彼らが保有している。そのものを研究した方が早いのではないだろうか。わざわざこの世界を離れなくても、ここで静かに研究を続けた方が確実では。

つまりは、ギフトッドは彼らの手元にはない。もしくは。

手元にあっても、容易に調べることができないか。

先ほどまでの二人の様子を思い出す。罪を負うことを良しとしているような素振りだった気がする。自分たちに罪があると決まれば、それを急いで決めてしまったそうな。そう思うと、さくらのあのため息は、諦めではなく安堵では。

自分たちのことはどうでもいい、と。守るべきものが他にあるのか。

少し前のことを思い出す。シュウの家にケインがやってきたことを。そのタイミングを。今まで放置されていたシュウの元へとやってきた理由。シュウの家の監視カメラ。そこから得られる情報で変わったことと言えば、

私たちの存在。

シュテルはまっすぐにケインとさくらを見る。二人はシュテルの考えを察したのか、わずかに顔を青ざめさせた。それでもシュテルは言う。

「これは私の勝手な推測です。貴方たちはギフトッドを使っています
ん」

リンディがわずかに眉を持ち上げる。続けて、と手で合図を送ってくる。

「ギフトッドで願いを叶えたのではなく、ギフトッドが願いを叶えた。貴方たちは、いつの間にか願いを叶えられていただけです。違いますか？」

押し黙る二人。シュテルは続ける。

「ギフテッドの研究をこの世界でしないのは、容易に利用することができないからです。それでも研究を続けるということは、利用できないだけで身近にあるのですね」

ケインがシュテルを睨み付ける。さくらが顔を伏せる。シュテルはその様子に小さくため息をついた。

「西崎秀一という存在が、ギフテッドそのもの。違いますか」

シュテルの言葉に、ケインとさくらは押し黙る。しばらくの間は無言の時間が流れたが、やがてケインが力なくうなずいた。それを見てさくらが驚くが、ケインが悲しげに微笑むとさくらも目を伏せてうなずいた。

「シュテルさん、だったね。君の推測通りだ。間違っていないよ」

そうですか、と答えるだけにとどめ、シュテルはため息をついた。今の推測は、今ある情報から推測できるものの中で、ある意味で、自分にとって一番当たってほしくないものだった。

「詳しいお話を聞かせていただけますか？」

黙り込んだシュテルに代わり、リンディが言う。ケインはうなずいて、ゆっくりと語り出した。

Side: Past

ある冬の日、ケインは公園のベンチで隣に座る妻を優しく慰めていた。妻は、さくらはもう数時間も前から泣き続けている。何度も何度も、自分と死んでしまった子に謝っている。ケインとさくらに捕まえられた犯罪者が、脱獄して逆恨みで二人を襲った。悪いのは相手であってさくらではないのだが、それでもずっと謝り続けている。

特に、生まれてくるはずだった子に対して。

ケインはさくらを立たせると、自宅へと向かって歩き出す。雪が降って積もっている。ここには風邪をひいてしまっただろう。さくらはなかなか立ち上がるうとしなかったが、ケインの懇願を聞き入れて重い腰を上げてくれた。

それを見つけたのは、その帰り道でだ。

道中に赤ん坊が捨てられていた。狭い道の隅に、裸の赤ん坊が雪中にいた。ケインは驚きながらも慌てて赤ん坊を抱き寄せる。一体親はどうしたのか。周囲を見回しても誰もいない。

どうしたの？ とさくらがケインの抱く赤ん坊を見る。驚くさくらに、ケインは言った。

とりあえず警察に届け出よう、と。

その後、この国の組織が手を尽くして赤ん坊の親を探したが、手かりは一切なく、結局見つからなかった。その結果、養護施設に預けられることになったのだが、

私たちが引き取ります。

ケインとさくらは、その赤ん坊を引き取ることにした。

自分が拾ったから放っておけない、というのがケインの理由であり、さくらは、死なせてしまった自分の子の分も生きてほしい、という思いがあった、とのことだ。

自分の子に付けるはずだった名を、秀一という名を与え、我が子のように大切に育てた。その数年後に実子も生まれる。そして、異変が起き始めたのはそれからすぐのことだった。

秀一の周囲でおかしなことが起こり始めた。悪い話ばかりが目立つが、実はもう一つある。秀一が知るはずもない誰かの落とし物をよく見つけてくるという些細なものだ。この二つを手がかりに、今まで二人の中で禁忌としてきた秀一に対する研究を始めた。

「その結果、秀一の存在に行き着いた。ギフトッドそのものだということ」

「よくその考えに至りましたね……。何か理由が？」

「ああ……。今はもうないが、その頃はまだ、秀一は微弱ながら魔力を持っていたんだ。秀一が探し物をする時にその魔力が少し大きくなる。そのデータを取って当てはまるデータがないか探していたところに、たまたま研究施設に居合わせた研究者が言ったんだ」

ケインさん。お久しぶりです。何をお調べですか？ ……お

や、この魔力の波長……。どこかで見覚えがありますね。

ああ、そつだ。思い出しました。確かロストロギアの中にそれと同じものがあつたはずですよ。

その言葉を頼りに管理局のデータベースからロストロギアを一つずつ調べていき、完全に一致したのが、一致してしまったのが、ギフテッドだった。

次に調べるのは、なぜ秀一の周囲で異変が起こるのか。こればかりは最後まで分かることはなく、時間だけが流れていった。やがて、秀一とつて忘れられない運命の日が訪れる。人を死なせ、妹を巻き込んでしまった日。この事故のため、二人は最も有力視していた仮説を検証することにした。

自分たちの魔力がギフテッドに何かしらの影響を与え、異変が起こっているのでは。

この仮説を信じて、ケインとさくらはその対策に乗り出した。自分たちの魔力に反応するならば、自分たちから遠ざけておけばいい。魔力のない場所まで遠ざけてしまえばいい。その時から二人は仮面を被った。秀一の呪いを嫌う最低最悪な親の仮面。その仮面で感情を隠し、秀一を家から追い出した。避難させたのだった。

Side::Stern

「そんな演技をする必要があつたのですか？」

ケインの話の後、シュテルが聞く。ケインは分からない、と首を振ったが、

「でも、ただ遠ざけるだけじゃだめだ。優しくしていれば、秀一は帰る家があると思ってしまう。帰ってきてしまう。その時に何か起こってからでは遅いんだ」

「だから、私たちはシュウを追い詰めた。精神的に追い詰めて、私たちが嫌いになるように」

さくらが言葉を引き継ぐ。シュテルは、そつですか、とため息をついた。

「貴方たちが罪を被ろうとしたのは、シュウを守るためですね」
「さくらがうなずく。」

「管理局はロストロギアを収集して安全に封印する。それは人の形を取っていても例外ではないでしょう。特に、実際に異変が起きてしまっているのなら」

リンディは目を伏せて重くうなずいた。異変を起こすロストロギアならば封印しなければならぬ。例えそれが人の形を取っていても。

「だから俺たちが罪を被って秀一から注意が逸れるなら、それでいいと思ったんだ。……もう手遅れだけどね」

自嘲気味に笑うケイン。シュテルは、そのケインを冷たく見据える。

「貴方たちはそれで満足でしょうが……。シュウの気持ちを考えたことがありますか？」

「……それは……」

「シュウは毎年、最後の事故の日を思い出すそうです。そのたびに体調が悪くなるそうです。たった一人でその苦しみに耐えているシュウの気持ちを、考えていますか？」

考えているとは言わせません、とシュテルは先に相手の口を塞いだ。静かに冷たく相手を見据え、続ける。

「一つ、教えておきますが。魔力から避難させるために海鳴を選んだようですが……。この町には、先天的に魔力を持って生まれた子がいます。貴方たちを超える魔力資質を持った子が。当然訓練など受けていないのでかなりの量の魔力が漏れていたと思いますよ」

「……っ！ それは、つまり……」

「貴方たちはきつと、ここに送ってから異変が起きないから仮説は正しかった。そう思ったのでしょう。それはただの偶然です。仮説が正しかったのなら、被害が大きくなることはあってもなくなることはありません。……まあ……。貴方たちの気持ちも嘘ではないでしょうし、私が貴方たちなら同じことをしたと思いますよが」

そこまで言って、シュテルはため息をついた。リンディへと向き直

る。

「リンディ艦長。今後はどうなりますか？」

突然話を振られたリンディが少し目を丸くするが、少し考えてすぐに答えた。

「シュウ君と異変との因果関係が分からない以上、まだ様子見になるでしょうね。とりあえず現状維持ができるように手を尽くすわ」

ただ、とリンディの表情が暗くなる。シュテルから視線をそらし、ケインとさくらへと向ける。

「もしも因果関係が証明されて、なおかつそれを回避する手段がなければ……。可能な限り手は尽くしますが……」

「分かっています。私たちもできる限り協力します」

シュウと異変の因果関係。すぐに分かるものではないと思うが、残されている時間も少ないかもしれない。シュテルは一礼すると、その部屋を退室した。

楽観視はいけませんね。因果関係の証明はあの人たちに任せるとして、私は回避方法を探りましょう。

今の生活を続けるために。シュテルは一人静かにうなずいた。

Side: Hero

シュウのいる部屋へと入ってきたシュテルは、真っ先に頭を下げて謝罪をした。勝手なことをした、と。

「いいよ。父さんと母さんの本音を聞いて、嬉しいから」

「すみません。……。ああ、シュウが聞いていたことは話していません。今後どうするかは、シュウ自身が決めてください」

「うん。まあとりあえずは現状維持でいいかな。連れ戻されたくはないし」

あはは、とシュウは笑う。その笑顔は少し寂しそうで、それを見ていたシュテルは少し目を細めた。

「でも、水くさいよねえ、血は繋がってないみたいだけど、親子なのに話してくれたらいいのに」

「きつと貴方のことを想ったよ、ですよ」

シュウが首を傾げる。シュテルは少し考える素振りを見せ、次いでどこか申し訳なさそうに目を伏せた。

「先ほどは感情的になってしまいました……。あの二人はシュウのことを本当に想っていたのだと思います。事実を話せば、あることが確定します。貴方はきっと、自分を責めるでしょう」

「……………」

「異変が貴方が原因で起こったのなら、あの事故も貴方が原因と捉えることができます。あの二人はそう考えさせないためにもこの手段を取っていたと思いますよ」

なるほどね、とシュウは苦笑した。ゆっくりとため息をつく。モニターでリンディたちと話す両親を見る。今まで見ていた無愛想な表情はなく、真剣に自分のために話し合ってくれている両親。少しだけ嬉しくなる。

「まあ、なるようになるか」

「そうですね。……できる限り手は尽くしますよ」

「ありがとう。僕にできることがあったら、言ってね」

シュテルが真剣な表情でうなずく。シュテルを頼もしく思いながら、シュウはそれでも心に決める。

これからは、もっと一日一日を大切にしよう。

「よしー。シュテル、帰ろうかー」

「そうですね。帰って夕食にしましょう」

立ち上がったシュウに差し出されるシュテルの手、シュウはその手をしっかりと握ると、シュテルと共にその部屋を後にした。

後に残されたのは、音が流れるモニターだけ。やがてそのモニターも消え、電気すらも消えると、後には静かな闇が横たわった。

第二十一話 デパート

またか。

シュウはデパートの屋上で、内心でため息をついた。目の前で行われているのはヒーローショー。そして当然のように、隣にはレヴィがいて大はしゃぎだ。小さな子供たちに混ざってヒーローを応援している。

今回は偶然レヴィと出会ったわけではなく、昨日のうちに誘われていたことだ。レヴィ曰く、行きたいところがあるから一緒に行こう、と。最初はどこにと思っていたが、来てみれば前と同じデパートのヒーローショーだったというだけだ。

楽しそうだから、まあいいか。

ヒーローショーではなくレヴィを見ながら、シュウは苦笑しつつもうなずいた。

ショーの後は今回も限定販売のようなことが行われるらしい。レヴィもそれに向かうのかと思ったが、予想外にもそちらへは何の興味も示さずに、シュウの手を取って下りの階段へ向かうレヴィ。思わず目を丸くして、あれはいいの？ と聞いてみると、

「うん。前と同じだから」

そう言うとレヴィは歩く速度を速くする。何かを振り切るようになるほど、とシュウは納得してうなずいた。

本当は行きたいのか。

そう思ったが口には出さない。せっかくレヴィが我慢をしているのだ。水を差す必要もないだろう。

「それで、次はどこに行くの？」

シュウが聞くと、レヴィは振り返ると元気よく答えた。「ご飯」と。

レヴィが案内したのは、デパートのレストランフロアまでだった。そこまで来て、飲食店の多さにレヴィは驚いていた。シュウへと振り

返ると、頬の引きつった笑みを浮かべてくる。

「もしかして……決めてない？」

「うん。行けば何とかなると思ったから」

「そっか」

レヴィの言葉にシュウは笑う。この子らしいなど。まずは一通り見てみようと考え、フロアをゆっくりと歩いて行く。シュウの後ろからレヴィがついてくる。珍しそうに周囲をきよるきよると見回している。

やがてフロアの反対側までたどり着いた。そのことにレヴィが少し驚き、聞いてくる。

「シュウ、ご飯はどうするの？」

「どうしようかな。レヴィは何か食べたいものはある？」

「カレーライス！」

聞くまでもなかったとシュウは笑う。シュウは手を差し出すと、じゃあ行こうかとレヴィの手を取った。

レヴィを連れて入ったのは、カレー専門店だ。このカレーはとても美味しいことで評判で、学校でもクラスメイトたちが時折話をしてるのを聞くことがある。今は昼を少し過ぎた時間なので、店内にはちらほらと空席がある。これが昼時や夕食時などは行列ができるらしい。

シュウはカウンター席に向かい、レヴィもその隣に座った。この店に入っただけに匂いで気づいたのだろう、レヴィはそわそわと落ち着きがない。そんな様子にシュウは優しく微笑むと、レヴィにメニューを差し出した。

「はい、レヴィ。選んでね」

「ありがとー！ えっと……。うわ、いっぱいあるー！」

メニューを開いた瞬間、レヴィが顔を輝かせた。写真を一つずつ順番に見て、これがおもしろそう、あれもおもしろそうとても楽しそうだ。ただこの調子だと決めるまでに時間がかかりそうではある。シュウは店員が持ってきた水に口をつけつつ、レヴィの注文が決まるのを待った。

レヴィの注文が決まったのは、それから十分もしてからだった。悩んだ末に選んだのはナンカレーだ。「ご飯とは別にナンと呼ばれる食べ物もついているメニュー。」

「この間シュテるんに作ってもらったんだ。これ、すごくおいしいんだよー。」

「へえ。じゃあ僕も同じものにしようかな」

「それがいいよー。」

レヴィの元気な声にうなずいて、シュウは店員を呼ぶ。人が少ないためかすぐにやって来た。レヴィがこれ、とメニューを指さすと、かしこまりましたと丁寧に頭を下げてくれる。

「辛さはどうしまししょうか？」

「一つは普通で。もう一つは可能な限り甘口にしてあげてください」

「かしこまりました」

最後にまた礼をして立ち去る店員。それを見送ってから、レヴィは速くもスプーンを手に取った。期待に満ちた眼差しで、カレーが来るのを待っている。ほほえましい光景に、シュウの頬も自然と緩んだ。

やがてカレーが運ばれてくる。カレーライスが一皿に、別のさらには平べったいナンが置かれている。それが二セット。

カレーライスを置いて、店員はすぐに一礼して戻っていく。さて、とスプーンを手に取ったところで、

「いただきますー。」

レヴィの声。早速一口目を食べて、レヴィがおお、と少し感動したようだった。

「すごいよシュウー。すっごいおいしいカレーだー。」

「気に入ったのなら良かったよ」

「うんー。でもま、王様のカレーの方がおいしいけど」

最後の方は少しだけ小声になっていた。そうだね、とシュウもうなずく。だがそれもそのはずだろう。ディーチェは一人一人の好みを把握していることが多い。カレーなどはレヴィの大好物のため、どんな辛さでどんな具材が好きかも熟知しているだろう。レヴィのための特製カレーなのだ。専門店とはいえこんなところに劣るとは思

えない。

でもこっちもなかなか、と言いなながら食べ続けるレヴィはとても嬉しそうだった。そのことにひとまずは胸をなで下ろす。こんなに喜んでいるならレトルトのものを買ってみるのもいいかもしれない。そう考え、シユウは店員を呼んだ。

昼食後、次に入ったのはデパートの中にある遊戯施設だ。クレーンゲームなどといった子供が好きそうなものが並べられている。それらを見て、レヴィは目を輝かせていた。

「シユウー あれしようー あれー！」

レヴィが指し示したのは、クレーンゲームだ。中には動物のぬいぐるみが並んでいる。

「どれが欲しいの？」

「かっこいいやつー！」

「いやだからどれ……！」

苦笑しつつ、シユウは財布から百円硬貨を取り出す。先ほどのカレーですでに結構な出費だったが、もう少しぐらいならいいだろう。この子たちには夕食をこ馳走してもらっているのだから、これぐらいは払おうと思う。

硬貨を入れ、クレーンを動かす。クレーンはゆっくりと動き始める。狙うのは、レヴィが指し示したライオンのぬいぐるみ。

「おお……？」

レヴィが少し目を丸くする。クレーンはライオンの真上で停止する。

「おお……！」

クレーンがライオンを持ち上げる。ゆっくりと元の場所へ戻っていく。そして、

「おおおおおー……！」

ライオンが落ちて、取り出し口から軽い物が落ちる音が聞こえてくる。シユウはそこからライオンのぬいぐるみを差し出すと、はい、と手渡した。

「すごい！　こんな特技があったなんて！」

「特技……なのかな？」

クレーンゲームは昔から得意ではある。だがしかし、昔から自分が欲しいものは一切取れず、友人が欲しがっているものはよく取れた思いがあがる。

その後も、レヴィの言われるままに三個ほどぬいぐるみをいただいた。犬と猫、虎のぬいぐるみだ。レヴィは嬉しそうにそれを抱きかかえている。大切な宝物を持つかのように。ふとレヴィは何かを思いついたのか、唐突に走り始めた。

「レヴィ？」

「ちよっと待っててー」

慌てて呼ぶと、レヴィのそんな返事。言われた通りにその場で待っている、レヴィはすぐに戻ってきた。その手にはビニール袋が二つ握られている。片方からはライオンが顔をのぞかせ、もう片方は猫だ。猫の方はそれ一つしか入っていないのか小さな袋に入っている。

「はいー」

レヴィに猫のぬいぐるみが入った袋を手渡された。シュウが怪訝そうに眉をひそめていると、レヴィが答えてくれる。

「シュテるんにはシュウから上げた方がいいんだよ。王様がそう言うてたー」

シュウが、どうして？　と首を傾げるが、どうしてだろう？　とレヴィも首を傾げてしまう。二人は少し考えて、すぐにまあいいかと思考を打ち切った。レヴィがシュウの手を取り、歩き始める。

「今度はあれー」

「はいはい……」

今度はお菓子が景品のゲームへと連れて行かれた。

マンションへと帰ってきたのは午後六時。休日の半分をレヴィに献上したことになる。これも悪くない、とは思っているが。

「たっただいまー」

レヴィが元気よく言って、リビングの方に駆けていく。王様ユーリ

これあげる、という声が聞こえてくる。こっちはいいのかな、とシュウは持たされていた袋の一つを見た。現在シュウが持たされている袋は二つで、一つは猫のぬいぐるみ、もう一つはお菓子が大量に入った袋だ。帰ってみんなで食べることで、デパートや帰り道では一つも食べていなかった。何度も誘惑に駆られてはいたようだが。

シュウは袋を持ったままキッチンへ。ここではシュテルが夕食の準備をしていた。

「ああ、おかえりなさい、シュウ。もう少し時間がかかります」

「うん。何か手伝えることはある？」

「いえ、後は待つだけなので」

シュテルはそう言つと、鍋にふたをして手を洗う。シュテルが手を洗い終わるのを待ってから、シュウは袋の一つを差し出した。シュテルが不思議そうにしながらもそれを受け取る。

「ぬいぐるみ、ですか？」

「うん。デパートのゲームセンターで取ってきたんだ。シュテルには僕から渡せつてレヴィがね」

「そうですか」

ぬいぐるみを袋から出して眺めるシュテル。なぜだか緊張してきたが、その理由がシュウには分からない。じつとシュテルの言葉を待つ。やがて、シュテルがぬいぐるみを抱きかかえて言った。

「ありがとうございます、シュウ。大切にします」

「あ、えっと……。うん」

シュテルはいつもの無表情だったのだが、なぜだか今日はそれをしっかりと見る事ができずに、シュウは逃げるようにリビングへと向かった。

夕食後。シュウはお茶を飲みながらリビングの様子をのんびりと眺める。ぬいぐるみを気に入ったのか、テーブルに並べてにこにこ笑っているレヴィとユーリ。こうして見ているとやっぱり女の子なんだなと思う。時折ぬいぐるみを撫でては、やわらかいだのふかふかだのと楽しそうにはしゃいでいる。

ディアーチェは本に視線を落としていたが、時折そんな二人を見ては少し嬉しそうに笑っている。シュウに見られていることに気がつくくと、慌てたように表情を隠していたが。

シュテルの方も本に視線を落としていた。その膝の上には猫のぬいぐるみ。レヴィやユーリと違いぬいぐるみに対する反応がほとんどないが、ずっと持っているということとはそれなりに気に入っているのだろう。

四人の様子に満足げにうなずく。一日歩き回って疲れたが、その甲斐はあったというものだろう。

「それじゃあ帰るよ」

立ち上がりつつ言いつつ、

「はい。お気を付けて」

「気をつけて帰るのだぞ」

「また来てくださいね」

シュテル、ディアーチェ、ユーリがそう言ってくれる。レヴィは、「今日はボクが送っていく日だー」

思い出したようにそう言った。

Side:Levi

レヴィはシュウと並んで歩く。今日は一日しっかりと遊べたので気分がいい。そのお礼もこめて、レヴィがシュウへと言う。

「シュウ、今日はありがとうー 楽しかったよ」

「いや、「うちら」そ。ただちょっと歩き疲れたけどね」

苦笑混じりに答えるシュウ。そっかとレヴィはうなずく。

「あとぬいぐるみも！ あんなに嬉しそうなのシュテルんは久しぶりだよ」

「ああ、喜んでもらえてたのか。なら良かったよ」

嬉しそうに笑うシュウ。その笑顔を見ただけでも、今日は誘って良かったと思える。ただ、シュウにとっては迷惑だったのでは少し思ってしまう。

「ねえ、シュウ。また一緒に来てくれる？」

不安に思いながらそう聞いてみると、シユウは少し目を丸くした後、笑顔でうなずいてくれた。

「もちろん。いつでも誘ってね」

そう言って頭を撫でてくれる。レヴィは幸せな気持ちにながら、やっぱりシユウはいいやつだ、と嬉しそうに笑っていた。

第二十二話 海

夏休み。学校から解放された子供たちが遊び尽くす夢の期間。もちろんシユウも例外ではなく、夏休み二日目から自宅でだらけきっていた。布団に横になり、小説を黙々と読み耽っている。今は昼前で、起きてからずっとこの調子だ。

「……………何をしているのですか、シユウ」

声をかけられ顔を上げると、部屋の入り口にシユテルが立っていた。呆れたようにこちらを見ている。

「いらっしやい、シユテル」

「邪魔します。……………鍵が開いていましたよ」

「うん。来るかなと思って」

「……………そうですね」

シユテルはため息をつきながら玄関の側のキッチンへ行く。少しして戻ってきた時には、冷たいお茶が注がれたコップを二つ持っていた。それをちゃぶ台に置く。

「せめて起きてください」

「ん。了解」

立ち上がって、ぐっと伸びをする。シユテルの向かい側に座り、お茶を飲む。それなりに汗をかいていたのでただのお茶がとても美味しい。

「ナノハから夏休みだと聞きましたが、宿題があるのでしょ。やらなくていいのですか？」

「うん。終わったから」

「……………は？」

シユウが部屋の隅を指さす。そこには昨日のうちに片付けた問題集の山があった。あとは日記など、前もってできないものだけだ。

「それなりの量だと聞いていましたが……………」

「うん。一日は二十四時間あるんだよ？」

「そう、ですね……。はい。いいことだとは思いますが」

「こちらも気を遣わなくてよくなりますし、とシュテルがつぶやく。シュウが首を傾げると、

「レヴィがプールに行ってみたいと言いました」

唐突にそんな話が始まった。すぐにそこからの誘いを察して、プールの、とシュウは笑う。

「いいね。いつ?」

「明日です。海に行こうかなと」

「……海か。ちょっとだけ予想の斜め上だよ」

せつかくなので、とシュテルがうなずく。泳ぐ、または遊ぶという目的では大差ないのだろうし、どちらでもいいのかもしれない。むしろ海の方ができることは多いだろう。それ故にどうせ行くなら海に、ということだろうか。

「僕も行っていい?」

一応聞いてみる。シュテルは、何を今更、といった様子で眉をひそめた。その様子にシュウは少し嬉しそうに微笑む。

「明日の朝七時に迎えに来ます。必要なものは今日中に用意しておいでください」

「うん。どこまで行くの? 電車賃とかはいくらぐらいいるかな?」

「お気になさらずに。こちらで用意します。これから王たちと買い物に行きますが、シュウはどうしますか?」

一瞬、行きたい、と言いかけたが、口に出しかけたところでその言葉を呑み込んだ。おそらくはこれから水着などを買いに行くのだろう。さすがに女の子たちの買い出しの中に混じる勇気はない。シュウは首を振って、今日はいいやと伝えた。

「分かりました。これは夕食にどうぞ。夜は少し用事がありますので」

シュテルが差し出してくる弁当箱をありがたく受け取る。まだほんのり温かい。どうやら作ってすぐここに来てくれたらしい。いい匂いもってきて、食欲がそそる。

「先に言っておきますが、夜まで我慢してください。あとで後悔しま

すよ」

「わ、分かってるよ？ もちろん」

ちよっと食べようかなと思っていた矢先だったので、思わず頬が引きつってしまふ。その表情からシュウの考えを察して、シュテルは小さくため息をついた。仕方のない方です、と。

「コンビニのパンでよければどうぞ」

「お、ありがとう」

次に差し出されたのはコンビニの袋で、中にはメロンパンとジャムパンが入っていた。嬉しそうなシュウの笑顔を見て、シュテルは満足したようにうなずきを一つ、そして立ち上がる。

「それではシュウ、また明日」

「うん。いつてらっしゃい」

シュテルを玄関まで見送り、そして戻ってすぐにメロンパンの封を開けた。

翌日。天気は快晴。海水浴日和だ。蝉の鳴き声がうるさいが、これがないければ夏とも思えない。そしてシュウは、今日も布団で横になっていた。

「……暑い……」

早く海に入りたいと思う。ちゃぶ台の上には昨日のうちに用意した荷物があり、準備は万端だ。念のため、全財産を入れた財布も用意してある。あとはシュテルたちを待つだけだ。欠伸をかみ殺していると、ドアの開く音がした。

「シュウー おっはよー」

真っ先に聞こえてくるのはレヴィの明るい声。次いで足音がして、本人が入ってくる。未だに布団で横になっているシュウを見て、レヴィが少し目を丸くした。

「だめだぞシュウー ちゃんと起きないとー」

「準備はできてるよっ？」

「なら問題ないねー」

ぐっつと親指を立てるレヴィ。その後ろで、シュテルたちがどちらに

呆れているのか分からないため息をついた。

最寄りの駅から電車で海へと向かう。それほど遠くもないので、海水浴場にはすぐに着いた。まだ朝のためか、人はそれほど多くない。だがこれが昼になれば人でいっぱいになるのだろう。

「さて、レヴィ。海に来たわけだが」

砂浜にビニールシートを広げながらディアーチエが言う。

「何をしたいのだ？」

「遊びたい！」

「うむ。具体案を聞こうか」

言葉に詰まるレヴィ。どうやら何をするかまでは考えていなかったらしい。慌てる様はなかなかかわいいと思う。

「とりあえずさ、レヴィ。水着を買ってきたのなら泳いできたら？」

苦笑しつつ助け船を出すと、そっか、とレヴィが顔を輝かせた。それじゃあ着替えるねとその場で服を脱ごうとしたのを慌ててディアーチエが押し止める。シュウは何も言えず慌てて視線をそらしていた。

「阿呆か貴様！ こんなところで着替えるやつがいるか！ ついてこい！」

ディアーチエがレヴィの首根っこを掴んで引きずっていく。あー、と言いながらレヴィはされるがままになっている。いつてきますと手を振ってくるあたり余裕があるらしいが。

「では私たちも行きましょうか、ユーリ」

「はい」

「じゃあ僕は荷物を見ておくよ。いつてらっしやい」

お願いしますと頭を下げるシュテルとユーリを見送り、シュウは一人残された。とりあえずは全員の荷物を一カ所にまとめる。それだけですることはなくなった。

十分ほどして四人が戻ってくる。全員が水着姿になっていた。シュテルだけは何故か上にパーカーを羽織っていたが。手に文庫本を持っているというとは泳ぐ気はあまりないらしい。

「お待たせしました。シュウもどうぞ」

「あ……。僕はここに居るから、みんなで遊んできたら？」

「もしかして、シュウは泳げないのですか？」

そう聞いてきたのはユーリだ。そう捉えられるかと思いつつも首を振って不定する。

「誰かが遊び疲れたらでいいよ」

そう言いながら自分の荷物から文庫本を取り出す。今のところは一緒に行く気がないと分かったのか、どこか不満そうな表情をしながらもシュテルを除いた三人が海へと向かった。それを見送ってから、シュウはシュテルへと向き直る。どうぞ、と言うとシュテルはシュウの隣に腰を下ろした。

「シュテルは行かないの？」

「最初は荷物を見ておこうかと思っていましたから。後ほど王と交代する予定です」

なるほど、とつなずく。その後にシュテルの水着を横目でしっかりと見て、すぐに目をそらした。その一連の視線の動きに気づいていたのか、シュテルがじろりとシュウを睨んでくる。

「水着というのはよく分からないので……。何か言いたければ遠慮無くぶっせ」

「うん。似合ってる。かわいい」

「……。そう、ですか。光栄です」

今度はシュテルが視線をそらした。ほのかに頬が赤くなっている。どうやら少し照れているらしい。その様子にシュウは笑うと、文庫本を開いて読み始めた。

その後は一人ずつ交代しながら海で遊んだ。遊ぶといっても、海ではしゃぐレヴィとユーリに付き合う形になっていたが。途中で昼食を挟みつつずっと遊んでいたが、やがて日が傾いて空が赤くなってきた頃、レヴィとユーリが戻ってきた。休憩をのぞいても六時間以上遊んでいたことになる。

戻ってきた二人は、疲れたと言いながらも満足そうな笑顔だった。

「では着替えてくる」

ディアーチェが二人を連れて着替えに行く。残されたシュウとシュテルは三人を見送ってまた文庫本に視線を落とした。もうすぐ二冊目も読み終わる。

「レヴィとユーリは満足したかな？」

「十分でしょう。あんなものまで作っていましたし」

視線を後方へ。そこには少し大きめの砂の城があり、周囲で時折写真が撮られている。レヴィとユーリが作っていたもので、シュウたち三人も手伝わされていたものだ。完成した時のレヴィの喜びようはあまり見られるものではなかった。

砂の城を見ながらシュウは笑う。楽しめていたのなら何よりだ。ただ遊んでばかりで疲れているのも事実なので、帰った後はゆっくりと眠れそうだ。それでも、次があればもう少しのんびりしたいとも思う。

本を読み終え、荷物にしまう。ディアーチェたちはまだ戻ってこない。隣を見ると、シュテルも読み終えたのか本をしまっているところだった。シュテルと視線が合い、シュウは理由もなく少し慌ててしまう。

「えっと……。ディアーチェたち、遅いね。まだかかるのかな？」

シュテルは特に目立った反応は示さず、そうですねとディアーチェたちが向かった方を見た。しばらくそのまま無言でいたが、やがて振り返ってシュウに言う。その表情はどこか困ったような苦笑に見えた。

「どうしたの？」

聞いてみると、シュテルはいえ、と首を振る。少し考えてから言った。

「せっかくだから夕食を食べていこう、ということですよ。近くのコンビニまでお弁当を見に行ってくる、と」

「お弁当って何と、コンビニ？」

海へと振り返る。海水浴客はかなり減ってきている。もうすぐ暗くなるため海から出るようにという指示もあった。あとは砂浜で遊

ぶ人が残るぐらいだろう。昼よりはかなり静かになるはずだ。そう思うと、「ここで食べる弁当というのも、

「うん。悪くない」

シュウがつぶやくと、シュテルはそうですなと一つうなずいた。

やがて日が沈み、星空が広がる。シュウはシュテルと並んで座り、海を見つめながらのんびりとディアーチェたちを待つ。居心地のいい静かな無言の時間。場所が変わってもシュテルと二人の時はさほど変わらないものだ。

やがてディアーチェたちがコンビニの袋を提げて戻ってきた。

Side:Dearche

帰りの電車で、ディアーチェはため息をついて本を閉じた。この状況は集中できるものではない。両肩にレヴィとユーリの頭があり、二人とも眠っているためだ。遊び疲れたためだろう。二人の幸せそうな寝顔を見ていると起こす気にはなれない。もう少し寝かせておくことにする。

真向かいに座っているはずの二人も静かなので怪訝に思いながらもそちらを見て、ディアーチェは少し驚いた。シュウとシュテルが、お互いに寄りかかって眠っていた。シュウはともかく、シュテルがこれほど無防備な姿を見せるのは珍しい。

それだけシュウを信頼しているということか。

奇妙な関係になったものだと思う。元は赤の他人だったはずなのに、気がつけばシュウを家族の一人として見てしまっている。シュウの方はどう思っているのかは分からないが。

仲良く眠る二人を見つめ、ディアーチェは淡く微笑んだ。本人たちにはあまり言わないが、今の生活はそれなりに気に入っている。管理局に使われるのは本意だが、この四人を守るならそれもいいだろう、と。

ああ。悪くない。

そんなことを思いながら、ディアーチェは一人うなずいていた。

第二十三話 鍵

夏休み。多くの学生が勉強やスポーツ、遊びに興じる中、それとは対照的に何もすることがなくむしる暇を持て余す者も当然ながら少なからずいる。シュウはそんな中の一人だ。成績は良い方ではないが悪い方でもないでそれほど勉強する気もなく、スポーツは嫌いだはないが誘われなければやるうとはしない。遊びに関してもスポーツと同様、誘われなければ出かけることそのものが少ない。

そして今日もシュウは貴重なはずの夏休みをどのように消化しようか悩んでいた。シュテルたちのところへ遊びに行こうかとも思っていたが、彼女たちにも都合があると思い、あまり行きすぎるのもよくないと考えた。今日は自宅でのんびりしていたのだが、やはり暇すぎて困る。

「……少し出かけよう」

散歩でもしてみようかと思い、シュウは自宅を後にした。

そして現在いる場所は、シュテルたちの部屋の前。なぜか自然とこちらへと足が向いていた。習慣、と言っているのかは分からないが、恐ろしいものだ。どうしようかと少し考えていたが、せっかくここまで来たのだからインターホンを押した。

軽い音がかすかに聞こえてくる。その後は少し無音が続いたが、やがてドアの鍵が外される音がした。そして隙間だけ空けられ、顔をのぞかせたのは、

「……おはよう、ディアーチェ」

ディアーチェはシュウを認めると、わずかに目を丸くした。

「どうした、シュウ。今日は約束はなかったはずだが」

「うん。ちょっと気まぐれ。ごめんね、迷惑なら帰るよ」

「いや、そう言うわけではない。……まあ、入れ」

ディアーチェが扉を開ける。エプロンをしているところから、何か

料理でもしていたらしい。シユウはディアーチェの後に続き、ドアを閉めた。

「今日は我以外は出かけている。一応来ていることぐらいは伝えておくが、すぐには戻っては……」

「いや、いいよ。ディアーチェの言う通り約束してたわけじゃないし。暇だから来ちゃったってだけ」

むしろお仕事の邪魔とかしたら悪いし、と言うと、ディアーチェはそうかと苦笑していた。そのままリビングに通され、すぐにお茶が出される。それと共に何かお茶請けを出そうと棚を見ていたようだったが、ディアーチェはすぐに少し考える素振りを見せ、戻ってきた。

「シユウ。洋菓子は好きか？」

「え？ うん、まあ好きだけど」

「ならばちょうどいい。少し待っておれ」

そう言っただディアーチェがキッチンへと戻っていく。シユウは首を傾げながらも、お茶を飲みながら待つことにした。何を待てばいいのかは分からなかったが。

十分ほどしてリビングに戻ってきたディアーチェの手にはお盆があり、その上には十個ほどのマフィンが載せられていた。どうやら作っていたものはこれらしい。ディアーチェはお盆をテーブルに置くと、エプロンはずしすいすいに座った。

「我も一人で退屈だな。暇つぶしに作っていたのだ。あやつらが帰ってきた時のおやつにちょうどいいだろう」と

「へえ……。え？ それって僕が食べちゃだめじゃあ……」

不安になって聞くと、ディアーチェが苦笑する。気にするなと手を振りながら、

「それなりの数を作った。これを全て食べたとしても問題はない。むしろ感想を聞かせてほしいぐらいだ」

感想と言われても、とシユウも苦笑しながらマフィンを手を取った。一口かじり、味わうようにゆっくりと租借しながら呑み込む。ほどよい甘さと柔らかさでちょうどいい。シユウは一度つなずき、手に取った一個をとりあえずは完食する。

「うん。美味しいよ、ディアーチェ。よく分からない洋菓子店で買うよりは美味しいと思う」

「そうか。だがシュウ。洋菓子店のマフィンを食べたことがあるのか？ お前が？」

訝しげに問いかけてくるディアーチェに、よくぞ聞いてくれましたとシュウは胸を張って、自信満々に答えた。

「ない……」

「うむ、だろうな」

分かってはいた、とディアーチェが苦笑しつつマフィンを手に取り、食べ始める。今回の出来はなかなかだ、と本人もそれなりに納得したようだ。これならあいつらも満足するだろう、と。その様子を見て、シュウは思わず笑みをこぼす。

「ディアーチェってな」

「なんだ」

「優しいよね」

途端にディアーチェがとても渋い表情をした。認めたくなさそうな、しかしあまり否定する気にもなれないそんな表情。その変化が少しおもしろくて眺めていると、ディアーチェがやれやれと首を振った。

「優しくなどしておらん。あやつらは我の手駒だ」

「うん。でも優しいよね」

「……むじ……むじ……」

腕を組んで唸るディアーチェ。シュウはそんなディアーチェの様子をおもしろそうに眺めながら、二個目のマフィンに手を伸ばした。

その後はマフィンを時折つまみながら、くだらない世間話をして過ごしていた。最近はどういった本を読んだ、どういった書店があった、など本に関わるものが少し多くなるのがディアーチェとの会話だ。ただマフィンが美味しかったので作り方を聞くと、少し照れくさそうにしながらも嬉しそうに教えてくれた。必死で表情を隠そうとはしていたが。

「教えてから言うのもなんだが……。作る機会があるのか？」

「……さあ……。まあ、いずれ、ね」

時折自炊などもするが、それすら最低限のものだけだ。こういった手の込んだ料理などはあまりやらない。だが料理そのものは嫌いではないので、いずれ作る時があるだろう。練習ができないというのも困りものだが。

「材料ぐらいならいつでも用意してやる。まあ、たまには作りに来るといい」

教わったことをメモ書きしていたシュウは、その言葉に少し驚いて顔を上げた。ディアーチェはシュウの方へは見向きもせず、そっぽを向いたままだ。

「いいのっ」

「それぐらいは、な。ただし、シュテルがいる時だけだ。味見役ぐらいいるだろう」

「どうしてシュテル？」

「貴様は……。いや、何でもない」

何かを言おうとしたディアーチェだったが、諦めたかのようにため息をついた。やれやれと首を振る。シュウは首を傾げるばかりだ。

「どうせなら教えてくれたディアーチェに味見をしてほしいけど」

「む……。まあ、我でも構わん……」

ディアーチェは小さな声でそう言つと、そのまま黙ってリビングを出て行ってしまった。いつまでも首を傾げているシュウだけがそこに残された。

メモを何度も読み返していると、しばらくしてからディアーチェが戻ってきた。いつもの席に座り、そして片手をシュウへと突き出してくる。きよとんとしているシュウへと、突き出された片手が揺らされる。早く受け取れ、というかのようだ。

手を出して、ディアーチェの手に握られていたものを受け取る。見ると、金属でできた板のようなものだった。なんだろう、と考えていると、ディアーチェが教えてくれる。

「この部屋のカードキーだ。持って行け」

「へえ、こっつてカードキーなんだ……っつて、え？ 持って行けっつて？ 誰かに届けるの？」

「なぜそっつなる… 貴様が管理しろと言っている。誰もいない時はそれで勝手に入ればいい」

ディアーチェの真意が理解できず、シュウは啞然としてしまう。それなりに仲良くさせてもらっているつもりではあったが、さすがに鍵をもらつたというのが気が引けてしまう。他人の自分が持っているものではない。

「気持ちありがたいけど……」

そっつ言つて断るつとしたが、ディアーチェがシュウを睨んできた。慌てて口を閉じる。

「家には何もないのでらっつ」

「え？ まあ、うん。本ぐらいだね」

「この家にあるものは好きに使え。暇つぶしに本を読むもよし、料理をするもよし。我らにもそれぞれ部屋があるが、そこにさえ入らなければ問題はない」

納得していないシュウへと、それに、とディアーチェが続ける。

「我らにとってはお前はもう家族も同然だ。持っついても問題はな
い」

「……へっ」

「……忘れる」

ディアーチェがまたそっぽを向く。少しだけ見えたその顔は、ほのかに赤く染まつていた。シュウは先の言葉の意味を考え、少し嬉しくなる。自分も家族に数えてくれるのか、と。家族の温かさなどもうすっかり忘れてしまったが、ここならそれを思い出せるだろうか。

手の中にある鍵を見て、そっつと握りしめる。ディアーチェへと笑顔
を向け、言っつた。

「ありがとう、ディアーチェ。じゃあ、もらつつね」

「……ああ」

ディアーチェはそれきり黙り込み、シュウはその横顔を静かに見つめていた。

日が沈みかけた頃、三人が帰宅した。そして三人とも、少なからず驚いていた。

「たわけ！ 入れすぎだ！ 卵焼きでも作るつもりか！」

「あはは！ 方向転換して卵焼きでも作るうか！」

「開き直るな阿呆！」

キッチンに並んで立つディアーチェとシュウ。シュウが笑い、ディアーチェは怒りながらシュウからポウルをひったくっている。しばらくして三人に気がついたのか、シュウが片手を上げた。

「おかえり！」

「……ただいま戻りました……」

現状把握ができずに困惑しているシュテルと、未だに無言のレヴィとユーリ。そんな三人へ、シュウがリビングのテーブルを指さす。少しだけ申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「失敗作がたくさんできて……。捨てるのはもったいないから、ちよつと食べてくれると嬉しいかな？」

リビングのテーブルには失敗作のお菓子類がある。ディアーチェから鍵をもらった後、時間もあるし菓子作りでもしようとなつて作ったものだ。だが予想以上に難しく、見事に失敗が続いていた。おそらく晩ご飯はこのまま菓子類だけになるだろう。

まずシュテルがリビングへと向かい、歪な形のマフィンを手にする。一口かじり、ゆっくりと租借して、ふむ、と一度うなずいた。

「シュウ。作ったのは初めてですか？」

「うん。お菓子なんて作る機会がなかったから」

「なら十分良く作れていると思いますよ。美味しいです」

それなら良かった、とシュウは笑う。そしてそれを許さないのがディアーチェだ。

「たわけ！ 我が教えておるのだ！ その程度では困る！」

なるほど、とシュテルがうなずいた。静かにシュウの隣に立ち、小さな声で耳打ちする。おそらく長くなります、と。それを聞いたシュウは、苦笑しかできない。

「とりあえずがんばるよ」

「シュウ！ もう一度ここからだ！」

ディアーチェの声に、シュウは了解、と答えて料理を再開した。

リビングのテーブルに並ぶお菓子の山。マフィンを始めとした洋画菓子類が並び、それぞれの席の前にはジュースも用意される。レヴィとユーリは大喜びだが、シュテルの表情はいつも以上に無表情だ。長く一緒にいれば、これが怒りの表情だと分かる。シュウですら分かるのだから、ディアーチェももちろん理解しているだろう。

「ディアーチェ」

シュテルの声。ディアーチェが頬を引きつらせながら、シュテルを見る。

「反省してください」

何を、とは言わない。言わずとも分かるだろう、と。ディアーチェは神妙な面持ちで一つうなずき、

「すまぬ、調子に乗りすぎた」

素直に謝罪する。シュテルは小さくため息をついて、

「とりあえずはいただきますしょう。五人でなら食べきれる量ですし」

「お菓子が晩ご飯なんて幸せだー！」

「私もです！ たくさん食べます！」

「味は保証しないよ。いやほんとに」

そんな会話を交わしながら、食べ始める。五人一緒のテーブルで。

家族のように。

シュウは口を動かしながら四人を見る。先ほどディアーチェから鍵をもらったことをシュテルに話したのだが、シュテルの反応はそうですか、の一言だけだった。反対されないことに胸をなで下ろしつつ嬉しくなる。ここにいていいのだと思えた。

片手で鍵を握りしめ、シュウは嬉しそうに微笑んだ。

第二十四話 花火大会

高町家のリビングにて、シュウは落ち着かない様子でいすに座っていた。オレンジジュースを少しずつ飲みながら、かすかに聞こえてくる声に耳を傾ける。

『これでよし。どうか、シュテルちゃん』

『わあ、シュテル、似合ってる！　かわいい！』

『光栄です。貴方も似合っていますよ、ナノハ』

『えへへ、ありがとうございます！』

楽しそうな会話である。そんな場所に自分がいられないことに不満は覚えない。むしろ戻ってきた時になんと言えればいいのかとずっと悩んでいる。シュウはまた一口オレンジジュースを飲み、思考をフル回転させていた。

今日はこの街の花火大会がある。近くの公園に露店などが数多く並び、それなりの規模のものだ。その花火大会のことを知り、早速シュテルを誘ったのが三日前の出来事。その時は承諾してくれたのだが、なのはとも約束があると聞いてはいた。

まさかそれが、浴衣を借りに行くこととは思いつかなかったが。

何も聞かされていないシュウがシュテルと一緒に高町家に行くと、シュウは一人リビングに通され、オレンジジュースとケーキを出された。そして女性陣は別室へ。男一人、シュウだけがリビングに残されることになった。

余談だが、なのはの兄はすでに出かけており、父は喫茶店で仕事だ。母は一時的に抜け出してきてなのはとシュテルの着替えを手伝いに来たらしい。

どんな浴衣なのかな、と少し楽しみにしながら待っていると、やがてリビングのドアが開かれた。満面の笑みの桃子が先に入ってくる。

「お待たせ、シュウ君」

「いえ。あ、ケーキご馳走さまです。美味しかったです」
頭を下げるシュウに桃子がいえいえ、と手を振る。

「それじゃあ……。なのは。シュテルちゃん」

桃子が二人を呼ぶと、なのはが少し恥ずかしそうに、シュテルはやはりいつもの無表情で部屋に入ってくる。シュウはその二人を見て、おお、と感嘆のため息を漏らした。

なのはの浴衣は白を基調としたもので、桃色の桜の柄がある。素直にかわいいと思えるが、しかしなのははなぜか一步下がっている。

シュテルはなのはとは反対の色の浴衣だ。黒色を基調としたもので、桃色の桜の柄は同じ。クールなシュテルによく似合う浴衣だと思う。シュウはシュテルの浴衣をまじまじと見つめ、一度うなずいて笑顔で言った。

「うん。すごく似合ってると思う。かわいい」

「ありがとうございます」

礼を言うシュテルの表情はどこか嬉しそうにも見える。その様子を見守っていたなのはと桃子は満足そうにうなずいた。

「それじゃあなのは。私は翠屋に戻るから。あまり遅くなりすぎないようにね」

「うん。ありがとうございます、お母さん」

桃子が手を振って部屋を出て行く。それを見送ってから、なのはがシュテルへと言う。

「私たちも行く。フェイトちゃんたちも待ってるだろうし」

「そうですね。……シュウ」

シュテルが呼ぶ。シュウはコップと皿を流しへと持って行ってからうなずいた。

戸締まりをして、公園への道を歩き始める。ここからだと少しだけ歩くらしい。この周辺の地理に明るくないシュウは、二人から一步遅れて歩く。二人の後ろ姿を眺めながら。こうして見ていると、双子がおそろいの浴衣を着ているように見える。なのははとても楽しげに、シュテルも機嫌良さそうに会話をしていた。

しばらく歩いて神社が見えてくる。到着、となのはが言ったところ

で、

「おおー！なのはちゃん見つけたでー！」

そんな声。見るとはやてが手を振っていた。側にはヴォルケンリッターの面々もいる。

「はやてちゃん！ お待たせ！」

「あたしらも今来たところやから、気にせんといて。フェイトちゃんたちもまだやし」

楽しげに会話を始める二人。シュテルはそんな二人をしばらく見ていたが、少し待ってからなのはに声をかける。あ、ごめんとなのが振り向いた。

「シュテル、ありがとうー！」

「いえ。ではまた後ほど、浴衣を返却に伺います」

「うん。お母さんにも伝えておくね」

お願いします、とシュテルは少し頭を下げ、シュウへと振り返った。行きますよ、と公園の中へと歩いて行く。シュウは少し驚きつつも、シュテルの後を追った。

「シュテル。なのはたちとの約束は？」

「終わりました」

シュテルの言葉にシュウが首を傾げる。

「浴衣を借りること、公園まで一緒に行くこと。約束したのはこの二点だけです」

「あ、ああ……。そうなんだ」

なぜそんな中途半端な約束だったのかは分からなかったが、もしかするとシュウがシュテルを誘うことを予想してのものだったのだから。もしそうならなのはには感謝しなければならぬ。心の中でなのはに感謝していると、不意に手を握られた。

「え、あ……。シュテル？」

シュテルが自分の手を握っている。目を丸くしているシュウへと、しかしシュテルはその様子に首を傾げていた。

「公園は混雑していいそうですから、はぐれないようにです」

「あ、うん……。そうですよね」

少しだけ肩を落とす。そんなシュウの様子を見て、シュテルはやはり首を傾げていた。

花火までまだ時間がある。二人は露店を巡りながら時間を潰すことにした。焼きそばなどの食べ物を買っているところや射的などのゲーム関係の露店など、出ている店は様々だ。こういった場所は初めてなのか、シュテルは視線を頻繁に動かしていた。

少し歩いたところで小腹が空いてきたので、二人は焼きそばとフランクフルトを購入して、人が大勢行き交う道から横に出る。草地になっっている場所は人が少ない。二人と同じように、買ったものを食べている人がいるぐらいだ。ベンチなどがなかったため、二人は立ちながら食べることにした。

並んで立って焼きそばをすすする。お互いに無言だったが、いつものことだ。やがて二人とも食べ終えて、ゴミを捨てて混雑している道に戻る。また露店巡りへと出発する。

しばらく歩くと、シュテルが唐突に立ち止まった。ある店を凝視している。何かやりたいものでもあるのかと同じ方向へ視線を向け、すぐに納得した。

「何してるの？」

その店まで行き、そこにいた人物に声をかける。スーパーボールすくいのお店で遊んでいる人物はレヴィとユーリだ。その後ろにディアーチェが立っていて、声をかけられたディアーチェは少し驚きながらも振り返った。

「お前たちか。一人がやってみたいと言うのでな。付き合っている」

レヴィとユーリはシュウたちに気づかない。スーパーボールが浮いた水槽をじっと凝視している。緊張感が二人から伝わってくるようだ。内容はともかく。

「とりゃー」

レヴィが勢いよくポイを水槽に突っ込む。そして当然の結果として、すくえずに破れた。

「しそー… なんてー…」

レヴィが愕然と言って、見守っていたディアーチェとシュテルは呆れたようにため息をつく。シュウは苦笑しかできない。ユーリの方は、そつと水面にポイを入れ、一個、また一個とすくっていく。だがやはり初めてで慣れていないためか、五個ほどすくったところで破れてしまった。

「残念だったね、嬢ちゃんたち。浮いているやつなら一個ずつ持って行きな」

悔しそうに唸るレヴィとだめでしたと笑うユーリ。二人は一個ずつスーパーボールを手に取ると、振り返った。

「あれ？ 二人とも、どうしてここに？」

そこでようやくシュウとシュテルに気づいたのか、レヴィが目を丸くする。ユーリはシュテルの浴衣を見て、目を輝かせた。

「シュテル、それが浴衣ですか？ すごく似合っています！」

「ありがとうございます、ユーリ」

素直に礼を言うシュテルと、珍しそうに浴衣を観察するユーリ。シュウがそんな三人の様子を微笑ましく眺めていると、ディアーチェの少し大げさな咳払いが聞こえてきた。そちらに視線を向けると、ディアーチェはレヴィの首根っこを掴み、ユーリの片手を握る。次にシュテルと自分に目配せをして、

「では我らは次に行くとする」

それだけ言うときびすを返して歩き始める。シュウが啞然としている前で、レヴィとユーリが笑いながら手を振ってきた。また後で、という言葉は周囲の音に紛れてあまり聞こえなかった。

「行っちゃった……。シュテル、良かったの？ 一緒に行かなくて」
ディアーチェが消えていった方向を指さしながら聞くと、シュテルは一度うなずいた。

「はい。今日は貴方と約束をしましたから。王にも伝えてあることです」

「そう……。？ あまり気を遣わないでね」

「はい。分かっています」

二人はそんな会話を交わしながら、ディアーチェたちとは反対方向

に歩き始めた。

それから時間が経ち、花火の時間が近づいてくる。シュウとシュテルは公園の側にある神社に来ていた。長い階段が特徴の神社で、ここからは花火がよく見える。ただその階段故にあまり人は来ていない。それでも他に人目があることから、シュウはシュテルと共に神社の裏手に回った。

神社の裏手にはほとんど何もなかった。目の前に草木が生い茂る林が広がるだけだ。ただ、位置的にここからでも花火は見ることができる。シュウは周囲に人がいないことを確認すると、安堵のため息をついて後ろの壁にもたれかかった。

「ここなら落ち着いて花火を見られるよ」

シュウがそう言うと、分かりましたとシュテルも壁にもたれかかる。二人で静かな夜空を見上げ、静寂が二人を包む。静かな夜の静寂だ。携帯電話の時計を確認すると、予定の時間まであと十分ほどある。

「ねえ、シュテル」

シュウが声をかけると、シュテルがこちらと視線を合わせる。シュテルに見つめられたシュウは内心で緊張しつつ、言葉を続ける。

「シュテルたちはこれから、どっするの？」

「この後は着替えるために一度ナノハの家に向かいますが」

「そうじゃなくて……」

説明の仕方が分からずに、それでも何とか伝えようとシュテルをまっすぐに見つめる。それだけで察したのが、シュテルはなるほどと一度うなずいた。

「将来的な意味でしたら、決まっています。とりあえずしばらくは、囑託魔導師として動くとは思いますが」

「うん……。ねえ、シュテル」

「はい」

「僕に気を遣ってない？」

シュテルがわずかに目を見開いた。それを凶星だと判断して、シュ

ウは続ける。

「もしも、もしもだよ。誰かがシュテルたちの力を必要としていて、シュテルたちもそれに協力したいと思ったのなら、僕のことには気にしなくていいから。シュテルたちと一緒にいるのは楽しいけど、縛りたいたいまで思っていないから」

シュテルはシュウの言葉を黙って聞いていた。シュウをまっすぐと見つめ、やがて目を閉じる。小さくため息をついた。

「どういった心境の変化ですか？ 突然すぎますよ」

「うん。ちょっと前に僕のためにいろいろ動いてくれてたよね。嬉しいし感謝してるけど、わざわざ僕のために時間を使わなくてもいいよってこと」

なるほど、とシュテルは一度うなずいた。夜空へと視線を戻す。返事がないことにシュウは少し気落ちしながらも、シュテルと同じ夜空を見上げた。やがて花火の開始時間になる。

「分かりました」

シュテルの声。シュウは少し驚くが、シュテルは気にせず続ける。

「誰かが私たちの力を必要としていただけなら、私たちはそれに応えます」

「うん」

「ですがそれは、貴方も含まれています。シュウ」
「……うん」

視線を夜空へ。その瞬間に小さな花が咲いた。花はやがて次々と咲いていく。星の光の中、炎の花がいくつも咲いていく。咲いては、消えていく。

「なるほど、これは素晴らしい。とても綺麗だと思います」

「うん。シュテルと見に来て良かったよ。一緒に来てくれてありがとう」

次々と咲いては消えていく花火を見ながら、シュウが笑顔で言う。シュテルはちらりとシュウの表情を確認して、すぐに花火へと視線を戻す。やがてシュテルは、

「じつからいそ。誘っていただきありがとうございます」

優しげに微笑みながら、そう言った。そっとシュウの手を取ると、シュウもシュテルの手をしっかりと握り返してくる。

手を繋いだまま、二人は星空に咲いては消えていく花々を、いつまでも眺め続けていた。

Side:Stern

花火の後、高町家で着替えたシュテルはシュウを送り、自身はアースラに来ていた。用件は回収したロストロギアの引き渡し。何とも危ないことに、祭りの最中、道に転がっていたものだ。発動も暴走もしていないことが幸いだった。

封印処理をしたロストロギアをリンディに渡す。リンディはそれを受け取り、次の瞬間には封印を解除した。何を、とシュテルが言うよりも早く、リンディが表情を険しくする。

「やはりこれね、なのね」

リンディのつぶやきにシュテルが首を傾げる。リンディが険しい表情のまま教えてくれる。

「最近この世界に飛来したロストロギアは、内包されている魔力が消失しているのよ。一つ残らず、全て」

なるほど、とシュテルはうなずいた。今回のロストロギアが発動していなかったのも魔力が枯渇していたからなのだろう。ただ、一つ気になることはある。

「内包されているはずの膨大な魔力は、どこに消えてしまったのかしらね」

リンディのつぶやきに、シュテルの背筋が冷たくなる。効果の弱いロストロギアばかりだったが、それらの魔力を全て集めるとユーリに、エグザミアに届く量にはなるはずだ。そのことに薄ら寒いものを感じながらも、シュテルは一礼してその場を後にした。

第二十五話 お出かけ

シユウはある人からの依頼を受け、シュテルたちのマンションに朝早くから向かっていた。欠伸をかみ殺しながら、今日はどうしようかと考える。といっても、だいたいの計画などは考えてもらっているのが基本的にはそれに従うのだが。

昨晚、シユウが寝ようとしていた頃に電話があった。

『明日はユーリが一人で留守番だ。すまぬが一緒にいてやってくれ』
急な頼みだったが、どうせ暇を持て余しているので快諾した。そして明朝に依頼主のディアーチェが来てメモを渡されている。そのメモには、植物館のチケットが二枚と今日の日程表が書かれていた。参考程度にしてくれと言われているが、他に案はないのでありがたく頂戴した。

マンションにたどり着き、インターホンを押す。すぐに誰かが駆けてくる音の後、ドアが開かれ、ユーリが顔をのぞかせる。シユウの顔を見て、表情を輝かせた。

「シユウー！ お待ちしてました！ みんな早くに出かけてしまっ
て……」

「うん。そうみたいだね。僕と一緒にだとならないかもしれないけど、一緒にお留守番してようか」

「そんなことないです！ ありがとうございます！」
ユーリが嬉しそうな笑顔でそう言った。

リビングでシユウはシュテルたちが用意していったという朝食を食べる。バターロールを縦に切り、ウインナーと炒めたサラダを挟み、最後にチーズをたっぷりかけたホットドッグのようなものだ。ユーリと二人でトースターで温めてリビングで食べる。シンプルながらも美味しかった。

それとは別の香ばしい匂いもしている。キッチンには弁当箱が二

つあり、これはユーリが作ったものらしい。がんばりました、と胸を張って言っていたので自信作なのだろう。中身を聞くと、秘密だそうだ。

「ユーリだけお留守番って珍しいね。ディアーチェとよく一緒にいるのよ」

ホットドッグを平らげてジュースを飲みながら聞くと、ユーリはそうですなと寂しそうに眉尻を下げる。

「ディアーチェが、たまには気分転換も必要だろうと。私はディアーチェと一緒にいたいのですけど」

「なるほど。ユーリはディアーチェが好きなんだね」

「はい……大好きです……」

元気よく答えてくれる。人見知りをするのにこういったことはストリートに伝えてくるのがユーリだ。言われているディアーチェは照れていたりに対応に困っていたりと見ていて飽きない。ただ、ユーリがディアーチェに依存しすぎないかとユーリ以外の三人は心配しているようだ。自分のやりたいことを見つけてくれることが一番なのですが、とシユテルはよく言っている。

今日のこと、ユーリのやりたいことを探すための一環なのかもしれない。

「とりあえずディアーチェから植物館のチケットを預かってるから、今日はそこに行こうか」

「はい……初めてなので楽しみですよ……」

先ほどの寂しそうな表情から一転、目を輝かせるユーリにシユテルは微笑んだ。

リビングで少し雑談をしてから、二人は出発した。植物館は隣の水にあるのでそこまでは電車で向かう。電車を降りた後は徒歩だ。三十分ほど歩いて目的地の植物館に到着した。長方形のような形をした建物で、大きなパートぐらいの大きさがある。

「わあ……。大きい建物ですね……」

「そうだね。……行こうか」

「はい…」

早速中に入り、受付にチケットを渡す。受付の人は二人を見て、笑顔でどうぞと通してくれる。通り過ぎてから、最近の子供は進んでいるわね、と聞こえてきたがきつと気のせいだろう。二人はとりあえず案内に従って、順番に見ていくことにした。

熱帯地方の植物や別の時期の植物など、普段では見られないような植物を見るたびにユーリは目を丸くしていた。何を見るにしても興味津々といった様子で、シユウがのんびりと歩いている間にあちらこちらへ走り回っている。時折これは何かと聞かれるが、当然答えられるはずもない。パンフレットを渡してからは、一人で駆け回っていた。

昼過ぎには全て見終えることができ、植物館を後にして最寄りの公園へ向かう。鉄棒とジャングルジムがあるだけの小さな公園だったが、それでも夏休みということもあってか遊んでいる子供たちはいた。シユウとユーリは公園の隅にあるベンチに座った。

「結構早く見終わったね……。それで、どうだった？」

ユーリが持ってきていたリュックから弁当箱を取り出しながら、

「とても楽しかったです！ 見たこともないものがいっぱい……。

あんなにたくさんお世話するのは大変でしょうね」

「まあ人手はそれなりにあるとは思いつけど、大変だろうね」

そんな発想になるのかとシユウは思わず苦笑した。渡された弁当箱を受け取り、膝の上に広げる。そして、おお、と驚きの声を漏らす。

「がんばりましたー！」

嬉しそうに言うユーリ。おにぎりが詰められた段とおかずが詰められた段の二段で、おかずはハンバーグだった。以前一緒に作った時よりもかなりうまくなっている。ただ失敗しているところもあり、

「粉々だね」

「あつ……」

ハンバーグは大小の違いはあるものの、六個以上の欠片に分解されていた。これはこれで器用だと思ってしまうのだが。先ほどまでの

元気はどこにいったのか、ユーリは肩を落としていた。

シュウはそんなユーリをちらりと見て、ハンバーグの欠片を口に入れる。ゆっくりと食べて、味を確認する。呑み込んでから、笑顔で言った。

「うん。おいしいよ、ユーリ」

本当ですか、とユーリが顔を上げ、笑顔になった。シュウはうなずきながら弁当を食べ進めていく。ユーリはその様子に満足したのか、上機嫌で自分も弁当を食べ始めた。

ユーリよりも早く弁当箱を食べ終えたシュウは、ディアーチェから渡されたメモをこっそりと見る。植物館を早く見終えてしまったと思っていたのだが、ディアーチェの計画と比べると十分程度の誤差しかない。それだけユーリの行動パターンを理解しているということか。ディアーチェらしいと思いつつ次の予定を確認する。それを見て、なるほど、とシュウはうなずいた。

食べ終わり、弁当箱を片付け始めたユーリに声をかける。

「ユーリ。デパートでヒーローショーがあるらしいけど、見に行く？」

「本当ですか！ 行きますー！」

シュウの言葉に目を輝かせる。やっぱりユーリも好きなんだなと思いつつ、足を動かし始めた。

海鳴市に戻ってきた二人は早速デパートに向かう。屋上にたどり着くと、ちょうどヒーローショーが始まったところだった。内容はレヴィと見たものとは少し違うようだ。舞台を見た瞬間にユーリの表情が明るくなる。シュウはユーリを連れて、前の方の席へと移動した。

怪人が登場した時や観客の子供が怪人に捕まる時など、ユーリははらはらとした様子でずっと見ていた。そしてヒーローが登場した時は他の子供たちと一緒にになってヒーローの名前を叫ぶ。思わず笑みがこぼれてしまう。

やがてショーが終わり、二人は屋上を後にした。メモにはこの後は買い物と書かれている。

「やっぱりヒーローはカッコイイですね！　すごく興奮しました……！」

「うん。見ていてよく分かった」

どこに行こうかと考えながらそう返事をする。買い物とは書かれていたが、具体案が示されてはいなかった。どうしようかと真剣に悩んでしまう。

「シュウ。どうかしました？」

ユーリがそう尋ねてくる。シュウは一瞬答えようかどうか迷ったが、まあいいかと素直に言った。

「買い物、どこか行きたいところはあある？」

シュウの言葉にユーリが目を瞬かせる。その後少し考える素振りを見せ、ちらりとシュウの表情を伺ってくる。シュウが首を傾げると、ユーリが遠慮がちに言う。

「ここに行ってみたい、です」

デパートの案内図を指して、ユーリはそう言った。

そして来た店はペットショップだ。子犬や子猫がゲージに入れて並べられている。ユーリは歓声を上げながらゲージへと走って行く。

「すっごくいいです！　かわいいです……！」

子犬を見つめながら嬉しそうに言うユーリ。その様子を見ると、やっぱり女の子なんだなと思うってしまう。少し後ろからそんなユーリの姿を眺めていたが、すぐにその表情が暗くなっていることに気がついた。

「どうしたの？」

肩を叩くとユーリが振り返る。何でも無いですよ、と眉尻の下がった悲しげな笑みで答えた。再びゲージへと視線を戻し、ただちよつと、と続ける。

「かわいそうだなって……。こんなところに閉じ込められて……」

「……ああ。それは、まあ……」

確かにこんな狭い場所に閉じ込められ、人の見世物にされてかわい

そつだとは思つ。買い手が見つかるまでの辛抱なのかもしれないが、買われた先で幸せになれるかも分からない。ユーリは子犬に手を伸ばしながら、感情のない声で言う。

「ディアーチェたちも、少し前までは閉じ込められていました」「え?」

「紫天の書の一部として。夜天の書の中に。とても長い間、閉じ込められていました」

ユーリがすつと立ち上がる。シュウへと振り返り、まっすぐと見つめてくる。シュウが驚きで固まっていると、ユーリが柔らかく微笑んだ。普段はあまり見ない、慈愛に満ちた優しい笑みだ。

「ディアーチェ、シュテル、レヴィ……。三人のことを、よろしくお願いします。三人とも、シュウに心を許しているみたいですから」

その言葉を聞いて、シュウは妙に納得してしまった。そして、もっと早く気づくべきだったかなと自分を恥じる。

ディアーチェたちがユーリの幸せを願うように、ユーリもまたディアーチェたちの幸せを願っている。紫天の書の盟主として、三人の生活を守るうとしていいる。お互いがお互いに同じことを想っている。いい関係だな、と羨ましく思ってしまう。

「ねえ、ユーリ」

「はい?」

ユーリがかわいらしく首を傾げる。シュウは少し考えた後、言った。

「ユーリと同じことを三人とも想ってるよ。ユーリにはやりたいことを見つけてほしいって」

だから。

「みんなで見つければいいんじゃないかな? これから先のことを」

ユーリが目を見開き、すぐに笑顔になった。いつもの無邪気な笑顔だ。それもそうですね、とどこか嬉しそうだ。

「帰ったらディアーチェとお話してみます!」

「うん。そうしなさい」

はい、と元気よく返事をして、ユーリは子犬たちに手を振って店の

出口へと向かう。シュウもそれに従った。

その後もいくつかの店を見て回り、そしてマンションに帰り着くと午後六時頃になっていた。三人とも帰ってきており、ディアーチェとシュテルが料理をしていた。帰ってきた二人に気がつくのと、遅かったなどディアーチェが言ってくる。そのディアーチェへとユーリは歩いて行くと、

「ディアーチェ、お話があります！」

「む？ な、なんだ？」

「来てください」

「え？ あ、うむ……」

腕を掴まれ、引っ張られていくディアーチェ。シュウとシュテルは啞然とそれを見送った。

「……シュウ。何があったのですか？」

「うん。まあ、ちょっと……」

考える。このままここにいていいのかと。ディアーチェとどのような話をしているかは分からないが、この後は四人で何かしら話をすることも出来ない。そう考え、シュウはよしと一度うなずいた。

「じゅめんね、シュテル。今日は帰るよ」

「……………」

シュテルはシュウを見る。やがて小さくため息をつくのと、分かりましたとうなずいた。どうやら何かを察してくれたらしい。シュテルはすでにできあがっているおかずを小さなプラスチックの容器に詰めると、ビニール袋に入れてシュウに手渡してくれた。ありがたく受け取り、玄関へと向かう。

「それではシュウ。おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

挨拶を交わして、シュウはその場を後にした。

その日の夜。電話をかけてきたシュテルによると、四人ともやりたいうことを探すことになったらしい。それをお互いに支えていく、とい

う形で落ち着いたそうだな。

『今日はお疲れ様でした。それと、いろいろとありがとうございます』

「いやいや、余計なことを言っちゃった気がするから……。ごめんね」

『いえ。助かりましたよ。では今日はこれで失礼します』

「うん。おやすみ」

電話が切れる。少し寂しく感じながらも、携帯電話をちゃぶ台へぐっと伸びをして、布団に潜り込む。

あの四人がずっと仲良く一緒にいられますように。

そんなことを思いながら、眠りへと落ちていった。

第二十六話 花火

「花火をしたい？」

シュテルたちのマンションで本を読んでいると、レヴィとユーリから突然そんなことを言われた。突然のことで唾然としているシュウの隣では、シュテルが立ち上がりキッチンへと行ってしまふ。それに続いてディアーチェもキッチンへと消えた。

「花火って、この前見たじゃない」

「うん。打ち上げ花火じゃなくて、手で持つやつ！ 打ち上げ花火もやりたいけどさー」

「夜に子供がやっているのを見て、おもしろそうだなって話していたんですよ」

レヴィとユーリが続けて言う。ユーリも何も知らなければ子供にしか見えないのだが、今は何も言わないでおく。花火か、とシュウは考える。今の季節ならコンビニでも売っているが、どういったものを買えばいいのかが分からない。何かいいのがあったかと記憶を探っている。

「では行きましょっか」

シュテルのそんな声。振り向くと、出かける準備を済ませたシュテルとディアーチェがいた。

「えっと……。どうしよう」

一応聞いてみる。ディアーチェの返答は予想通りのものだった。

「花火を買いにだ。決まっておるだろう」

昼前に出発し、コンビニやデパートなどを巡り多種多様な花火を買い集めた。昼食はコンビニのおにぎりで済ませ、いろいろな店を回っていく。夕方になって帰ってきた時には、全員の両手に花火の入った袋が提げられていた。かなりの量になっている。

「わすがっ！……買いますぎじゃないかな？」

リビングのいすの座りながらシュウが苦笑する。そうですねとシュテルが同意して、

「それならオリジナルたちも呼ぼうよ」

レヴィの提案で管理局側のメンバーも呼ぶことになった。シュテルがなのはへ、ディアーチエがはやてへ、レヴィがフェイトへと連絡する。ディアーチエはかなり渋っていたが、何とか説得した。電話を終えた三人によれば、なのはたちは夕食の後に来てくれるらしい。

「それじゃあ僕たちもご飯にしよう。お腹減ったし」

「そうですね。……」
「ソベニのお弁当ですが」

温めてきます、とシュテルがキッチンへと向かう。それに続いてシュウもキッチンへ向かい、飲み物を用意するついでに全員の水筒にお茶やジュースを入れておく。いつでも出かけられるように。

夕食の後、なのはたちを待ちきれないレヴィとユーリの要望もあって近くの公園へ向かった。

誰もいない街。人気のない公園。その中央で、シュウは水の入ったバケツとライターを準備する。レヴィとユーリが期待に胸を膨らませ、きらきらとした瞳でシュウの準備を待っている。シュテルはバリアジャケットの姿で、手にはルシフェリオン。目を閉じていた彼女だったが、シュウの準備が終わると同じぐらいに目を開けた。終わりました、と。

シュテルが行っていたのは広域の結界魔法だ。買ってきたものの中には打ち上げ花火も含まれているが、この近辺で許可されている場所がない。それならばと結界魔法を使って誰にも迷惑がからないようにした。

「いいの？ 結界魔法なんて使っちゃって」

管理局の許可も取らずに、と心配したシュウだったが、ディアーチエは鼻で笑っただけだ。

「なぜ奴らの許可がある。気にすることではなかるう」

「そう、なのかな……？」

不安を感じているシュウが正解だった。レヴィとユーリが花火に

火をつけようとしたところで、シュテルの携帯電話が鳴り始める。リンディ艦長からです、とシュテルは電話に出た。会話が聞こえるように設定するのも忘れない。

「はい、シュテルです」

『シュテルさん？　こちらリンディだけど。結界魔法を使っているか？』

「ええ、使っています。……打ち上げ花火のために」

え、と電話先で言葉に詰まるのがシュウにも感じられた。わずかな沈黙の後、リンディが声を押し殺して笑う。あらそう、と朗らかに。

『了解したわ。せっかくだし、後で私たちも行つていいかしら？』

シュテルがちらりとディアーチェを見て、ディアーチェが渋々ながらうなずいたのを確認して、構いませんと返答した。

『ありがとう。それじゃあ、楽しんでね』

通話が切れる。全く怒られなかった。いいのかこれで。

「それじゃあ気を取り直してー！」

レヴィが叫び、花火に火をつけた。

手持ち花火をつけて走り回るレヴィとユーリ。危ないよと声をかけたが、聞き入れてもらえなかった。かなりテンションが上がっているようだ。

「元気だなあ……」

苦笑しつつ、シュウはこっそりとある花火を回収する。一番好きな花火で、これをレヴィたちに譲るのは少しもつたいない。落ちていて花火をするということができそうにないためだ。

「シュテル。後でこれ、一緒にやらない？」

回収した花火を持ってシュテルへと聞く。静かに花火の光を見ていたシュテルがこちらへと顔を向け、分かりましたとうなずいた。

しばらくしてなのはたちが到着する。はやての方はヴォルケンリッターたちも一緒だ。さすがに人数が多くなりすぎではと思ったが、三人とも追加の花火を買ってきてくれていた。そのすぐ後にリンディとクロノ、エイミィも合流。こちらも近所で買ってきたという花

火を持参。

気づけば大人数になっていた。みんなで花火をしてはしゃいでいる。当然ながらかなり騒がしくなってきた。

「……うん。いいことだ」

シュウは満足げに笑う。仲がいいのはいいことだ、と。ただこういった集まりになると自分は輪に入りにくいというのが困ったところでもある。だが見ていて楽しいのでやはり嫌いではない。せめて自分に魔法の才能が少しでもあればと思うが、叶わない願いだ。

シュテルの姿を探すと、なのはと二人で話をしていた。二人とも手には花火があり、なのはは楽しそうに笑い、シュテルもわずかに微笑んでいるように見える。邪魔するのも悪いと考え、シュウは一人その場を後にした。

公園から離れ、側の神社へ向かう。シュテルはかなり広い結界を張ったようで、神社の階段を上りきってもまだ結界の中だった。振り返り、階段の下を見る。そこからは公園を一望することができ、花火の光も確認できる。色とりどりの光が幻想的だ。

そばらくその光景を見ていたが、やがてシュウは公園から視線を外した。持ってきた花火にライターで火をつける。小さな火花が散り始め、ぷつくりと小さな赤い玉ができていく。線香花火だ。その場にしゃがみ、線香花火をじっと見つめる。静かな光で、吹けば消えてしまいそうだ。

一本目が終わり、二本目に火をつける。他の花火ほどの派手さはないが、この静かな花火がシュウは好きだった。

「綺麗な花火ですね。一ついただけますか」

声をかけられ、シュウが驚いて体を震わせる。その振動で線香花火の火が落ちてしまった。

「あ……」

思わず悲しげな声が漏れてしまう。声をかけたシュテルが少しだけ眉尻を下げ、申し訳なさそうに言う。

「すみません。驚かせてしまいましたか」

「あ、いや……。驚いたけど、気にしないで、まだたくさんあるし」

苦笑しつつ、シュテルに線香花火を渡す。受け取って、自分の隣にしゃがんだシュテルの線香花火に火をつける。小さな火花が静かに散り始めた。シュウも自分の線香花火に火をつける。

「なのはともういいの？ 話をしてみたいだけだ」

「ただの世間話です。お気になさらずに」

そう答えた後、それにしても、と続ける。

「他のものとは違い、控えめな花火ですね」

「うん。僕はこれが一番好きなんだ。……でも人によるだろうし、つまらなかつたら遠慮しないで戻ってね」

一人でも楽しめるものだし。そう言ったが、シュテルは首を振った。花火に目を落としたまま、言う。

「私も嫌いではありません。こちらの方が静かだと思います」

「そう？ それなら嬉しいかな」

それきり、お互いに無言になってしまった。

線香花火を二人でただただ見つめ続ける。風もなく暗い静寂の中、線香花火のかすかな音だけがはつきりと聞こえてくる。線香花火の淡い光が暗闇の中で目立っている。二人はそんな線香花火を、飽きることなくずっと続けていた。

持ち込んだ線香花火を半分ほど終えたところで、シュウは公園へと視線を向けた。相変わらず色とりどりの光が踊っている。ここから見るだけでも和気藹々としていて楽しそうだ。シュテルへと視線を向けると、不機嫌そうに少しだけ目を細められる。それを見て、少し焦ってしまう。

「な、何も聞かないよっ」

「ならばいいのです」

シュテルが次の線香花火に火をつける。乾いた笑みを漏らしながら、シュウも同じく火をつける。

「シュテル」

「はい」

「ありがとう」

シュテルは何度か目を瞬き、次いで、何のことでしょうかと呆れた

ような声を返してくる。シュウは何でも無いと花火を見つめつつ小聲で言った。

さらに時間が経ち、線香花火から火が落ちる。隣ではシュテルの線香花火からも火が落ちたところだった。シュテルの視線を受け、次の線香花火を取ろうとして、

「……あ」

最後の一つだった。それなりに回収してここまで持ち込んだつもりだったが、もう全て使い切ったらしい。少し寂しげにため息をつき、その最後の一つをシュテルへと差し出す。だがシュテルは首を振った。

「好きなのでしょう？　なら私に遠慮せずに」

「ん……。いや、でも見ていれば同じだし」

「それは私にも言えますが」

「あ、そうだよな」

それもそうだとうなずいたが、どうしても一人だけにする気にもならない。しばらくシュウが悩んでいると、シュテルが小さくため息をついた。シュテルの手が伸び、線香花火の先を掴む。シュウが驚いていると、シュテルはシュウとは視線を合わせずに言う。

「なら二人で。それならば良いでしょう」

「うん」

シュテルの提案に、シュウは笑顔でうなずいた。二人で同じ線香花火を持ち、火をつける。最後の線香花火が柔らかな光を放ち始める。二人でその様子を静かに見守る。同じ線香花火を持っているため二人の体は密着しているのだが、どちらもそれには気づかない。

そして最後の火が落ちて、二人はそろって満足そうにため息をついた。顔を見合わせ、シュウは笑う。シュテルも少しだけ笑ってくれた。

「それじゃあ戻るつか」

「そうですね。……ああ、待ってください」

帰り支度を始めたシュウを止め、シュテルは公園へと視線を向け

る。何度かうなずき、シュウへと視線を戻した。すぐに片付けを手伝い始める。

「どうしたの？」

「王から現在位置を聞かれました。もう少しそこにいるとのことです。シュウ、こちらへ」

荷物を持って階段へ。シュウもそれに続き、二人は階段に腰を下ろす。未だに意味が分からずにシュウが首を傾げているので、シュテルが公園へと指を指し、教えてくれた。

「もうすぐ打ち上げ花火をするそうです。ここからならきつとよく見えるでしょう」

「ああ……。なるほど。それはいいね」

得心してうなずき、少しだけ楽しみになる。そう言えば公園の花火の光もいつの間にか少なくなっていた。今頃打ち上げ花火の準備中か。

「僕たちは手伝わなくていいの？」

「王が待っていると言ったのです。お言葉に甘えましょう」

「分かった」

うなずいたところで、公園から光が上り始めた。それは天高く舞い上がり、大きな花を咲かせる。花火大会のものと似たものだが、今日は距離がとても近いので迫力が違う。思わず感嘆のため息を漏らしてしまった。

「ディアーチェにはお礼を言わないとね」

「ええ、そうですね」

並んで座り、花火を眺める二人。花火の光で映し出される二人の影。二人の影は寄り添うようにして映し出されていた。

Side::Stern

シュウに手を引かれ、階段を下りていく。暗くて危ないからとのことだったが、飛んで下りれば問題ないのではとも思う。ただ、シュウと手を繋いでいるとなぜか心が温かくなるので嫌いではない。シュウの言葉に甘えて、手を繋いで階段を下りていく。

公園に戻ると、花火を終えたメンバーが後片付けをしていたところだった。ディアーチェがシュウとシュテルの姿を認めると同時に大きく目を見開く、慌ててこちらへとディアーチェが走ってきて、口早に言う。

「戻ったか。そちらの片付けは済んでいるな？」

「もちろん」

「ならば先に帰れ。夜食の準備を頼む。さっさと行け」

半ば追い出されるような形で二人は公園を後にする。眉をひそめ、二人で顔を見合わせる。お互いに意味が分からずにただただ首を傾げるしかない。

とりあえずは指示に従おう、その結論に達し、二人はマンションへと歩き始める。その後ろ姿をディアーチェが見守っているが、そんなことに二人は気づかない。

ずっと手を繋いでいたことに二人が気づいたのは、マンションにたどり着いてからだった。

第二十七話 マテリアルズ

「お出かけお泊まり温泉だー！」

バスの車内でレヴィの声が響く。真後ろに座るシュウは苦笑するしかない。あまり人の乗っていないバスだが、数少ない乗客たちは心の広い人ばかりらしく、元気ねえと笑ってくれている。

現在、五人は温泉旅行に向かう途中だ。発案は温泉特集を見ていたユーリ。場所などの計画を決めたのはディアーチエだ。せっかくだから遠出をするかとの案もあったが、初めての温泉ということもあり、海鳴市の郊外にある温泉に向かっていた。

シュウはその話を聞きながら、その間は会えないなと少し寂しく思っていたのだが、気づけばメンバーに組み込まれていた。嬉しいのだが、自分が邪魔しているものかと今でも思っている。一度シュテルにも聞いたのだが、今更何をと呆れられてしまった。

レヴィの声が少しずつ大きくなっていく。我慢の限界がきたのか、レヴィの前に座るディアーチエが叫ぶ。

「やかましいー！」

レヴィの声が瞬時に消え、目の前から悲しげな気配が漂ってくる。どうしたものかと思うが、自業自得とも言えるのでシュウは何も言えない。他の席からは忍び笑いまで聞こえてくる。

そんな一行を乗せたバスは、昼過ぎには旅館に到着した。他の乗客が全員降りるのを待ってから、シュウたちも下車する。旅館の玄関に向かうと、従業員が出迎えてくれた。

「予約をしているハラオウンです」

シュテルがそう言うと、従業員が部屋へと案内してくれる。

旅館の予約をしてくれたのはリンディだ。自分たちでは外見的に難しいということもあり、シュテルがリンディに依頼していた。快く引き受けてくれた上、どう説明したのか当日は自分たちだけで大丈夫なようにしてくれたらしい。

案内された部屋はそれなりに広い部屋で、五人で寝ても問題ない広さがある。一先ずシュウは自分の寝床を確保するため、部屋の隅に自分の荷物を置いておく。予算の都合上一部屋だけなのは仕方ないと思うが、さすがに女の子たちの中で寝るのはかなり気まずい。自分の布団はできるだけ隅にしてもらうとしよう。

「おお、お菓子があるー!」

レヴィが部屋の中央のちゃぶ台に向かう。見ると上には小さなかごにちよつとしたお菓子が入れられていた。早速レヴィが一口に入れ、幸せそうな表情になる。次いでユーリも食べ、おいしいですと喜んでいた。

「言っておくがお菓子のおかわりは有料だ。あまり買えぬからな?」

ディアーチェがそう言つと、レヴィとユーリが残念そうに肩を落とした。それを見たディアーチェが、

「いや、まあ少しぐらいは頼んでやるから……。ええい! そんな顔をするな!」

かなり慌ててそう言った。

Side::Levi

お菓子を食べながら、レヴィはかこの隣に置かれていた館内説明書を手に取った。なにやら難しいことが前半部分に書かれているが、そこは飛ばす。あとでディアーチェかシュテルが読むことだろう。後半の館内施設一覧を見て、ある一室に目をとめる。卓球台。

タツキユウ? 何かテレビで見たよつな……。

むむむ、と唸りながら記憶を探る。すぐに思い出した。小さな玉を小さな木の板で打ち合う遊びだ。そう、遊びだ。

「シュウー!」

行動は迅速に。呼ばれたシュウがびくりと体を震わせ、自分を見る。どうしたの? と笑顔で聞いてくる。

「タツキユウー!」

「……やりたいの?」

「……!」

シュウがうなずいてくれる。すぐにディアーチェとシュテルに、少
し行ってくるかと告げる。二人はレヴィが放り投げた館内説明書を
拾って読んでいたところで、どうぞと言っただけだった。

「それじゃあ出発―」

「はいはい……って、引つ張らないで！ 行くから―」

「いつてらっしゃい」

シュウの手を取って走り出す。後ろからユーリの声が小さく聞こ
えた。

シュウから卓球についての説明を聞き、従業員から道具を借りて
さっそく遊んでみる。シュウが打った小さなボールを全力で打ち返
すと、ボールはシュウの顔面横を飛んでいって壁に当たった。

「……レヴィ。ルールは……覚えてる？」

「うん。ごめん」

「結構怖かった。今のは怖かった」

「……ごめんね？」

シュウの表情はかなり引きつっている。どうやら本当に怖かった
らしい。申し訳なくなつて謝ると、シュウは苦笑しただけだった。

再びシュウがボールを打つ。レヴィも今度は手加減して、しっかりと
相手のコートにボールを返す。そしてラリーを続けていく。軽い
音が響き、それがとても心地いい。

「もう少し早くぐらいいなら何とかなるけど、続ける？」

「うん――」

元気よく返事。そしてラリーの応酬を始めた。

どれぐらい続けたらだろうか。汗だくになったシュウがもう無理と
言ったところで中断した。

「シュウ、もうちょっと鍛えた方がいいよ？」

「うん……。自覚はしてる。ごめんね」

「でもまあ、楽しかったから良しとしとく！」

「あはは……。そう言ってもらえると、付き合った身としては嬉しい
かな」

シュウが立ち上がり、側の自販機に向かう。

「何か飲む？」

「オレンジジュース！」

「了解」

シュウは自販機からオレンジジュースを二つ購入し、片方をレヴィに渡してくれる。二人で飲んで、一息つく。ほどよく疲れているのでいつもより美味しく感じられた。

「シュウ。今日は来てくれてありがとう」

「ん？ どうしたの急に」

「言っておきたかっただけだよ」

レヴィが笑顔でそう言うと、シュウは首を傾げていた。

Side:Dearche

ユーリとシュテルは館内を一回りしてくると出かけたため、ディアーチェは部屋で本を読んでいた。自分もついて行くのかとは思っていたが、レヴィとシュウが戻ってくる時のために留守番をしている。

「む……………」

扉の方から音が聞こえ、そちらを見やる。シュウが戻ってきたところだった。ディアーチェが一人だけなのを見て、シュウは少し驚いているようだった。

「戻ったか。レヴィはどうした？」

「館内を探検してくるってさ。飽きたら戻ってくると思うよ。……迷子になってなければ」

「まあ大丈夫であるっ」

シュウは自分の荷物から本を一冊取り出すと、ディアーチェの向かい側に座った。読み始めようとしたシュウを見ると、お互いに視線が合ってしまう。シュウが首を傾げるので、何でも無いと手を振った。

「温泉まで来たのにやることは変わらんと思っただけだ」

「あはは……………。遠出なら観光地を巡ったりとか考えるけど、郊外とは言え地元だしね」

「しむ」

自分もあまり外に出ようとは思えない。結局は普段通りというわけだ。たださすがにずっとここにいるというのももったいないので、後ほどユーリと散策ぐらいには行くかどうかは思う。そこまで考えて、ふと思つ。シユウはここにいていいのかと。

「シユウは出かけぬのか？」

「ん？ まあ、一人で出歩いてもね。それとも一緒にどこかに行く？」「…………いや、遠慮しておく」

残念、とシユウが笑う。どこまでそう思っているのか自分には分からない。シユウが本に視線を落としたので、自分も読書を再開した。

しばらく読み耽り、シユウが本を置いた音がしたので顔を上げると、大きな欠伸をしたところだった。思わず笑ってしまつと、シユウも照れたように笑う。

「せつかくなのだから温泉でも入ってきたらどうだ？」

「ん……………。あとでのんびり浸かりたいなあ……………」

「そうか」

そこで会話が途切れる。シユテルは無言の時間もいいものだと言っていたが、自分としてはどうしても気になってしまつ。何か言葉を発さなければと思い、すぐに「一つ思い当たった」。

二人でいられる間に言っておくか。

ディアーチェも本を置くと、シユウが怪訝そうに眉をひそめた。

「あれ？ もついいの？」

「ああ。先に「一つ言っておくつか」と思ってな……………」

シユウが首を傾げる。ディアーチェは姿勢を正すと、しっかりとシユウと向き合った。

「いつもありがとつ。感謝している」

シユウが驚いて目を見開く。その様子を見て、ディアーチェは顔が赤くなるのを感じてそっぽを向いた。本を手に取り、表情を見られないうつに顔を隠す。しばらくして、シユウの声が聞こえてきた。

「驚いた……………。でも、なにが？ お礼を言われるようなこと、してないよっ」

「そんなことはない」

視線だけをシュウに向ける。シュウは意味が分からずに首を傾げている。

「お前が我らの元を訪ねてくるようになってから、我らの生活にはまた色がついた。ユーリやレヴィなどはお前が来るのを楽しみにしているほどだ。それだけで十分感謝する理由にはなる」

「そう言ってもらえると嬉しいけど、僕は何もしてないんだけどね。ご飯とかご馳走になってるし。でも……どういたしまして、でいい？」

「うむ……。一度は言わんからな」

「あはは。うん。でもしっかり覚えておくよ」

シュウが満面の笑顔で言って、ディアーチェはくつとのを鳴らした。立ち上がり、シュウの元へ。きょんとしているシュウの腕を取ると、

「ここにいる暇があるならシュテルでも探してこい」

半ば追い出すようにしてシュウを室外へと追放する。シュウの困惑の表情が見えたが、気にしないことにする。

「……まったく……」

ディアーチェは自分の席に戻ると腰を下ろし、そしてわずかに頬を緩めた。

Side: Yuri

シュテルと途中で別れ、ユーリは旅館を囲んでいる森を歩いていった。しっかりと整備された道で、この道は旅館の周りを一周するように造られている。簡単な散策ができるようにと造られているようだ。が、ユーリ以外に人はいない。

「……あ」

反対側から歩いてくる人影があった。シュウだ。うつむいて、難しい表情で何かをつぶやいている。

「シュウ」

呼ぶと、反応を示した。顔を上げたシュウと視線が合う。シュウは

ユーリの姿を認めると、優しげな笑顔を見せてくれた。

「やあ、ユーリ。シュテルは一緒じゃないの？」

「はい。途中で別行動になりました。今は散策中です」

「なるほどね」

うなずきながらシュウはユーリの元まで来ると、そこで反転、ユーリと並んで歩く。ユーリが不思議そうにしていると、

「一人でいても退屈だし、一緒に行くよ」

そう言って、ユーリのペースに合わせて歩いてくれる。ユーリは少しだけ嬉しくなり、自然と笑顔になっていた。

シュウと並んでのんびりと歩く。時折足を止めては木々や草花を観察する。そのたびにシュウも立ち止まってくれ、一緒になって見てくれていた。

「静かですね。鳥の鳴き声がよく聞こえます」

「そうだね。まあ今は夏休みとはいえ、平日だからね。本当ならもっと賑やかかも」

「それも楽しそうです」

少なくとも心細さを感じながら一人で黙々と歩くよりはましだろう。先ほどまでは実はシュテルと別れたことを後悔していたので、シュウが来てくれて本当に良かった。

所々で草花を観察し、道中は他愛ない話をしながら歩いていると、いつの間にか旅館まで戻ってきていた。そのことに寂しさを覚えながら小さくため息をつく。そのユーリの様子を見ていたシュウは、ユーリの頭に手を載せてきた。怪訝そうにシュウを見ると、

「また今度、散歩でもしようか。今度はみんなと……ディアーチェも一緒に」

「はい……是非」

シュウの誘いに、ユーリは嬉しそうにつなずいた。ディアーチェと一緒にならより楽しくなりそうだ。

並んで部屋に戻りながら、ユーリはシュウを見る。シュウは少し眠たいのか欠伸をしていた。

「あの……。シュウ」

「ん？」

「ありがとうございます」

ぴたり、とシュウが立ち止まった。またかといった様子で苦笑している。ユーリは怪訝そうにしながらも、言葉を続けた。

「いつも一緒にいてくれて。みんなを支えてくれて。ありがとうございます」

シュウは少し考えるような仕草をして、次いで天を仰ぐ。すぐにユーリへと顔を向け、やはりいつもの笑顔で言う。

「むしろ僕が支えてもらってるよ。こちらこそありがとうございます」

シュウの言葉にユーリは満足して、シュウの手を取ってまた歩き出す。今頃はもうシュテルも戻っているだろう。嬉しそうにシュウの手を握りながら、部屋まで楽しそうに歩いて行った。

Side:Stern

夕食後に温泉に入ろうということになった。全員で支度をして温泉に向かう。浴室の前でシュウと別れ、中に入る。レヴィが真っ先に着替えを済ませ、温泉へと駆けだした。

「いっちばーんー」

元気な叫び声が聞こえ、すぐに大きな音が聞こえてくる。その直後にはいつも通りの、ディーアーチェの怒鳴り声が響き渡った。

四人で体を洗い、湯船に浸かる。少し熱めのお湯が自分にはちょうどいい。一息つくくと、すぐにレヴィとユーリが別の湯船へと向かっていった。それなりの種類があるが全て一通り入ってみるらしい。

「王はどうするのですか」

「我はここにいら」

ディーアーチェはため息とともにそう言う。かなり無防備な姿で、このような姿を外で見るとは思わなかった。

「ここにシュテルよ」

呼ばれ、振り返る。ディーアーチェが入り口の反対側を指さしていた。

「露天風呂があるようだ、行ってみてはどうか？」

シュテルもそちらを見る。ガラス戸があり、露天風呂はこちら、という張り紙があった。シュテルはしばらく考え、やがてうなずいた。自宅では露天風呂は体験できない。一度行ってみるのもいいだろう。

「では行ってきます」

「うむ。おそらく我らは先に戻る」

「はい。分かりました」

すぐに戻ってくるつもりだったが、とりあえずは何も言わずに露天風呂へ向かうことにした。

ガラス戸を上げ、シュテルは少しだけ目を睜った。石などで造られた湯船はかなりの広さだ。それを囲うように竹で造られた高めの壁がある。空は満点の星空だ。

「なるほど。これは素晴らしい」

うなずいて、湯船へ向かう。つま先を湯に入れたところで、

「へ？」

そんな間の抜けた声が奥から聞こえてくる。見ると、湯船の奥でシュウが呆然としてこちらを見つめていた。なぜここに、と思って一度振り返る。入り口は二つ。男湯と女湯にそれぞれ繋がっている。つまりは混浴。

なるほど、と一つうなずき、シュテルは迷いなくシュウの元へと向かう。我に返ったシュウが顔を真っ赤にして慌てて意味のない動きをしているが、どうかしたのだろうか。

「失礼します。どうかしたのですか？ シュウ」

「あ、え、そ、あ、う、あー……」

言葉になっていない。シュテルは首を傾げつつ、シュウの隣に腰を下ろした。シュウが体を強ばらせたのだが、シュテルはそれに気づかない。一息ついて、星空を眺める。

「あ、あのね……シュテル……」

よつやくシュウがまともな言葉を発した。シュテルがシュウを見ると、しかしシュウはそっぽを向いていた。

「じ、じは混浴……だったんだね……」

「そのまじですね」

「ほ、僕はすくじ出るから……」

慌てて立ち上がるシユウ。歩き去ろうとするシユウの手を掴み、それを止める。シユウが振り返るが、相変わらず視線だけはこちらを見まじりもしない。

「どうしたのですか？……私が何かしてしまいましたか？」

そう問うと、シユウは勢いよく首を振った。内心で安堵しつつ、では何故と問いかける。

「……恥ずかしいから……」

「……はっ」

それきり黙り込むシユウ。シユテルもしばらく固まっていたが、やがて薄く微笑んだ。シユウの手を引き、隣に座らせる。やはりシユウはこちらを見ようとはしない。

「何を気にしているのかは知りませんが……。少し付き合ってください
い」

「じゅう……。了解……」

観念したのか、シユウは口元までお湯につかりながら言った。

しばらく話を続けていると、シユウも慣れてきたのか少しはこちらと視線を合わせるようになってきた。それでも下手に下を向けないのはやはり恥ずかしさ故か。一応体にタオルは巻いているのだが。

「なんだか今日はみんなにお礼を言われたよ。僕の方が言わないといけないのにな」

そんなことを苦笑しながら言ってくる。そんなことがあったのかとシユテルは少し驚いていた。レヴィやユーリならともかく、デイアーチエが素直に感謝の言葉を口にするなどほとんどないことだ。

「ではせっかくですし」

「えっ？」

「私からも、ありがとう」と言っておきます」

「……何に対して？」

不思議そうにそう聞いてくる。シュテルは目を閉じ、言う。

「私と友達になっていただいて、ありがとございませす」

シュウが驚いて目を丸くする。シュテルは満足したのかゆっくりと息を吐くと、立ち上がった。お先に、と声をかけてガラス戸へ向かう。

「シュテルー」

シュウの声。シュテルが振り返ると、シュウも立ち上がってこちらをまつすぐに見ていた。

「僕の方こそ！ 友達になってくれてありがとっー」

それを聞いたシュテルは、珍しく満面の笑顔を浮かべた。それを見て目を大きく見開いているシュウを残して、シュテルは露天風呂を後にした。

Side: Hero

誰か助けて。

心の中で助けを求めるシュウ。しかしそれを聞き入れてくれる人は誰もいない。むしろ今回はかりは、シュテルたちが完全に敵だ。紛うことなき敵だ。

就寝時、シュウは当初の計画通り部屋の隅に布団を移動させ、そこで寝ようとしていた。しかしそれを許さなかったのがレヴィ。

「シュウー！ なんでそんな遠くで寝るのさー」

その声に他の三人が気づき、布団が移動される。初めは五つ並んだ布団の端だったのだが、

「寝ている間に逃げたりしそうですねー」

ユーリの何気ない一言によって、自分の布団は真ん中になってしまった。

「いやいやいやいや、恥ずかしいよ本当に……！！」

「今更何を言っておるか。シュテルの膝枕も体験済みだろう？」

「それとこれとは話が……。どうして知ってるのー！！」

「え？ 言っではいけませんでしたか？」

「まさかの本人からの報告か！ 穴があったら入りたい……！！」

そんな一騒動を経て、現在シュウはど真ん中で布団に入っている。もちろん間違ったことが起こるわけがないのだが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「すみません、シュウ。嫌でしたか？」

シュテルの小さな声。そちらを見ると、布団に潜っているシュテルと目が合った。シュウはどう答えたものか迷って、すぐに苦笑して首を振った。

「本当にただ恥ずかしかっただけだから。気にしないで」

そうですか、と目を閉じるシュテル。シュウも諦めて眠りにつこうと目を閉じる。しかしすぐに目を開けて、小声でシュテルを呼んだ。

「はい」

返事が返ってくる。シュウは目を閉じて、言う。

「みんなにお礼を言われたから、僕も言うっておくね」

「はい」

「僕と出会ってくれてありがとう。シュテルと会えなかったら、きっと僕は今も家で一人でいたから」

全ての始まりに感謝する。例えこの先何があるかと、何に巻き込まれようと、それだけは変わらない自分の本心だ。シュテルはしばらく黙っていたが、

「「じゅん」そ、どついたしまして」

そんな優しい声が返ってきた。それを聞いたシュウは少しだけ照れて笑う。幸せな気持ちに浸りながら、シュウはゆっくりと眠りへと落ちていった。

第二十八話 心

「お邪魔します」

そう言いながら、シュウはマンションのシュテルたちの部屋に入った。先ほどインターホンを押したのだが反応がなかったため、もらっていた鍵で開けて中に入る。中からしっかりと鍵をかけて、リビングに向かう。

誰かが帰ってくるまで本でも読んでおこうかな、とそんなことを考えながら何の警戒もせずにリビングに入ったため、人影があることにかなり驚いた。いつもの自分の席、その隣に座っているのは他でもないシュテルだ。泥棒かと疑っていたため、シュテルの姿を認めて安心する。

どうして出てくれなかったのかな。

「シュテル？」

呼びかけてみるが、反応はない。そっと前へ回り込んでみると、本を開いたまま整った寝息を立てている。珍しいなと思いつつ、シュウはシュテルを起こさないように自分の席に座った。持ってきていた本を開いて読み始める。

静かな部屋で、シュウは一人本を読み進める。聞こえてくるのは隣からの寝息だけだ。時折そちらへと視線を向けるが、シュテルが目覚ます気配はない。シュウはシュテルの寝顔を見て、少しだけ頬を緩めた。

遠慮がちにシュテルの手に触れる。やはり反応を示さない。

「……………」
シュウはシュテルの手にそっと触れたまま、シュテルの顔をじっと見つめる。しばらく見た後に目を閉じ、自分の心と向き合う。

おそらく自分はシュテルのことが好きなのだろう。まだまだ短い生なのでこれが恋愛感情だとは明言できないが、シュテルと一緒にいるだけで心が安らぐし、できるならばこの先もずっと一緒にいたい、

隣にいてほしいと思う。

思うだけなら……自由だよな……。

シユウは小さくため息をつく、背もたれにもたれかかった。ゆっくりと息を吐いて、自嘲する。こんなことを自覚して何の意味があるのか、と。

シユテルのことが好きだ。しかし、シユウはその気持ちを告げようとは思っていない。シユテルたちには魔法の力があり、管理局内でも重宝されるほどの力だと聞く。本人たちは管理局に正式に所属する気はあまりないようだが、それでも今後も魔法と関わらないということはないだろう。

逆に自分には魔法の才能はない。魔力も持っていない。魔法と関わることはできない。その道に進もうとしても、シユテルたちの足を引っ張るだけになるだろう。四人とも自分のことを家族だと言ってくれてとても良くしてくれているが、足手まといになることだけは避けたかった。シユテルたちには自分の道をしっかりと歩いてほしい。

自分の感情をシユテルに告げれば、常は無愛想だが心根は優しい彼女だ。おそらく自分の道にシユウも連れて行ってくれるだろう。

シユウを守りながら。

人を背負ってどこまで進めるのか。当然一人で進むよりも短いに決まっている。シユテルの足枷になるくらいなら、こんな感情は封じてしまう方がいい。

この感情は、この気持ちは、ずっと心に秘め続けよう。彼女たちの未来のために。

まあ、シユテルが僕のことをどう思っているかは知らないけど。

苦笑しつつシユテルを見る。無防備な寝顔。いつも無表情だが、時折折せてくれる笑顔がシユウは好きだった。

シユテルの隣に居続けることはできない。それは分かっている。だが、せめて。彼女たちが地球にいる間だけは隣にいたい。諦め切れていないだけのただの自己満足だろうが、それはシユウの嘘偽りない気持ちだ。

この生活がもう少しだけ続きますように。

そう願いながら、シユウはいつの間にか襲ってきていた眠気に身をゆだねた。

Side: Stern

シユテルは目を覚ますと片手に温もりを感じ、少し驚いた。そちらを見るといつの間に来ていたのかシユウがいて、シユテルの手を遠慮気味に握って眠っている。少しだけ呆れつつも、自然と頬が緩む。

毛布でも取りに行こう。そう思って立ち上がるつもりだったが、すぐに思い直した。シユウは自分の手を握っている。このまま行けば起こしてしまうかもしれない。そう考え、シユテルはシユウが起きるまで読書を再開することにした。

片手で本を開き、視線を落とす。だがどうにも落ち着かず、すぐのため息をついて本を閉じた。テーブルに置いて、またため息をつく。

隣のシユウはよく眠っている。その寝顔を見ていると安心できる。理由は分からないが。

ふと思い出す。以前リンディから聞かれたことがある。シユウのことをどう思っているのかと。その時は質問の意味が分からずに首を傾げていると、リンディは苦笑いを浮かべて何でも無いと手を振っていた。

シユウの顔を見る。片手から伝わる温もりを意識する。それだけで心が安らぐ。

自問する。自分はシユウをどう思っているのか。

最初はただの共通の趣味を持った友人、だったのだろう。それがいつの間にか、一緒にいる時間が長くなっていった。今では、戦闘中などはともかく、自宅などでは隣にいなければ落ち着かないとすら感じてしまっている。

何なのでしょうね、この感情は。

自分で自分の感情が分からない。本当に自分はシユウをどう思っているのか。自分が聞きたいぐらいだ。なのはと模擬戦の後に聞いてみた時など、どうにも答えにくそうな、複雑な表情をされてしまっ

た。

シュウをどう思っているのか。一言で言ってしまうえば好きだ。王やユーリ、レヴィ、それになのはももちろん好きだ。だが、どうにも好きの意味が違うような気もするが、言葉にはできない。

しばらく自問を続けていたが、やがて小さくかぶりを振った。自分では答えを出せそうにない。それに急いで答えを出す必要もないだろう。この世界に住むシュウとはいずれ別れることになるのかも知れないが、その時まで隣に居てくれていれば十分だ。

そう結論づけたところで、シュテルはさてどうしたものかと悩んでしまう。本を読もうとしても集中できず、かといってシュウはいつ起きるか分からない。テレビを見ようかとも思ったが、この時間の番組はあまり興味がない。

しばらく考えて、また隣のシュウを見る。とても気持ちよさそうに、幸せそうに眠っている。

私ももう少しだけ、休みましようか。

シュテルはシュウの手をしっかりと握る。その温もりを確かめるために。手放さないように。そうするだけで、不思議な安心感に包まれる。その安心感に身を委ね、シュテルはそっと目を閉じた。

Side: Dear chie

「……………何だこれは」

帰宅したディアーチエの第一声がそれだった。

今いる場所はリビングだ。シュウとシュテルが寄り添うようにして眠っていた。二人とも、何とも幸せそうに眠っている。シュウはともかく、シュテルのこのような姿を見るのは珍しい。これも変化かと思いつつ、いいことだとも思う。

ディアーチエは毛布を取ってくると、二人に掛けてやる。一人満足そうにうなずき、ディアーチエはリビングの電気を消した。そのままキッチンへと向かい、冷蔵庫の中身を確認する。

今日の夕食はシュテルが作ることになっていたが、せつかく二人で仲良く寝ているのだ。今日は自分が作る。そう考え、ディアーチエ

は料理を始める。途中でユーリとレヴィが帰ってきたが、リビングを見るとディアーチェの考えを察したのか、ユーリは黙ってキッチンに来て自分を手伝ってくれる。レヴィもせっかくお昼寝しているのだからキッチンに来て手伝いを始めた。

「ようし！ 王様、ボクは何をすればいい？」

「うむ。とりあえず静かにしておれ」

「……………」

無言で肩を落とすレヴィ。ユーリが笑いながら、一緒にやりましようとしてレヴィを連れて行く。二人でジャガイモの皮むきを始めた。

ディアーチェはリビングに視線を移す。暗い室内で、シユテルとシユウが眠っている。まだ眠っていることを確認して、仕方のない奴らだ、と不機嫌そうに悪態をつく。

そんなことをつぶやくディアーチェは、誰にも見られないように淡く微笑んでいた。

第二十九話 因果

「今日は自信作だ！ 心して食せ！」

海鳴市の外れにある広い公園、その隅の広場でディアーチェが腕を組んでそう言った。ビニールシートが広げられたその上には、弁当の箱がいくつも並べられている。それら数多くの品を見て、レヴィとユーリは瞳を輝かせていた。

夏休みも残すところあと二週間弱。ユーリ発案、ディアーチェ計画のもと、一行は少し遠出のピクニックに来ていた。出発時の天気は快晴。ピクニック日和である。

朝に出発して、電車に一時間以上揺られ、駅からさらに一時間歩く。二時間以上の時間をかけてたどり着いた自然公園は、遊具などはほとんどない、大勢で遊べる空間があるだけの公園だった。公園の一部区画ではとても長い滑り台などそういったものもあるらしいが、ほとんどはある程度整備されただけの草原だ。

自然公園にたどり着いた時には、すでにいつもの昼食の時間を過ぎていた。レヴィの要望もあり、とりあえずは公園の隅で昼食を取ることにする。

ビニールシートに並ぶのはディアーチェ作のものと、シュテル作のもの、そしてなぜかシュウが作った弁当もあったりする。弁当作りのために朝早くに起こされもした。

円を描くようにビニールシートに座り、シュウが手を合わせていたいただきますと言う。それに倣い、シュテルたちも手を合わせた。

「さて、ではまずはシュウの料理の腕がどれほどか、確かめさせてもらうとするか」

「いや、期待しないでよ。本当に」

意地悪そうに笑い、ディアーチェがシュウの弁当箱からおかずを一品とっていく。シュテルたちもそれに続き、全員一斉に口に入れる。味わうようにゆっくり租借して、呑み込んで、ディアーチェが複雑そ

うな表情を浮かべた。

「まずくはない。いや、美味しいのだと思う。だが何か足りない……」

「愛情ですねー。テレビでやってました!」

そう叫んだのはユーリだ。その言葉にショックを受けたようにレヴィがシュウを見て目を伏せる。

「つまりシュウは、ボクたちのことが嫌いってこと?」

「いやいや、ユーリ何言ってるの! レヴィも真に受けない!」

「じゃあ好き?」

「両極端だね……! いや好きだけど! 認めるけど!」

レヴィとユーリが嬉しそうに笑い、ディアーチェが大声で言うなどそっぽを向く。シュテルはずっと無言だった。

「……シュテル?」

不安になって呼びかけてみる。シュテルは視線を上げると、一度うなずいた。

「シュウ。がんばってください!」

「……あ、はい……」

シュテルの口に合わなかったかと肩を落としながら、シュウは自分の作ったおかずを頼張る。次にシュテルのおかずを食べて、大きなため息をついた。続けて食べれば分かる。シュテルの料理に比べると自分の料理はまずい部類に入るかもしれない。シュテルでこれなのだから、ディアーチェの料理と比べるとどうなることやら。

「ですが、私はこの味も嫌いではありませんよ」

そうつぶやくように言いながら、シュテルはシュウのおかずをゆつくりと食べていく。シュウは力なく微笑むと、ありがと、と短く礼を言った。

昼食を終えた後は自由時間だ。レヴィとユーリは海鳴市最長と言われる滑り台を体験しに、ディアーチェはその付き添いとして行ってしまった。昼食の場に残されたのはシュウとシュテルの二人。一緒に片付けをして、今はシュテルからお茶を受け取って少しずつ飲んで

いるところだ。

本を読んでいるシュテルの隣で、シュウは小さく欠伸をする。風がとても心地よく、睡魔が襲ってくる。せつかくここまで来たのに、寝てしまつのはもったいない。

「眠たそうですね、シュウ」

シュテルの声。シュウはシュテルを見て、苦笑してうなづく。

「うん。ここは気持ちがいいから……」

「寝てしまってもいいと思いますよ。帰宅の時は起こします」

「ここまで来て寝るのはもったいないかなって」

「なるほど、そういうものですか」

何度かうなずいて、シュテルはまた視線を落とす。シュウは苦笑を返して、また小さく欠伸をした。ついでにぐっと伸びもする。ふと視線を上げた先で、シュウは、ああ、と残念そうな声を漏らした。それを聞いたシュテルがシュウを見る。

「天気が悪くなりそうだね」

シュウの言葉。シュテルはシュウの視線を追って、そしてシュテルもうなずいた。二人が見る先、まだ遠いところだが、暗雲がゆっくりとこちらへと近づいてきているらしい。雨でも降りそうだ。

「王たちに連絡だけしておきます」

「うん。よろしく」

念話の方へと意識を傾けたシュテル。シュウはその様子を横目で見ながら、せつかく来たのにな、と残念そうにしながら暗雲をぼんやりと見つめていた。

ディアーチェが戻ってきて、少しした頃には雨が降り始めた。なかなか強い雨で、ここから最寄りのコンビニまで走るとびしょ濡れになってしまつ。

「参ったな」

ディアーチェが不機嫌そうに言って、シュウが仕方ないよと笑つ。天気が味方しなかったが、こつこつ時もあるだろう。通り雨だと判断して、五人はこの場所で、大きな木の下で時間を潰すことにした。

話をしながら雨が上がるのを待つ。だがすぐにシュテルの携帯電話が鳴り、失礼しますと断って電話に出る。しばらくして電話を切ったシュテルの表情は、とても険しいものになっていた。何となくだが、そうと分かる。

「シュウ。この後の予定は空いていますか？」

突然のそんな言葉。もとより予定などないのでうなずくと、分かりましたとシュテルはディアーチェたちに向き直る。

「リンディ艦長からです。アースラに来てほしいと」

シュテルの声音から感情が読み取れない。自分を律するかのような、冷たい声だ。その声に、シュウは一抹の不安を覚えた。

雨はまだまだ降り続ける。

アースラに着くと、クロノが出迎えてくれた。クロノはシュウを見ると、悲しげに表情を曇らせる。だが一瞬後には、その感情を隠して無表情になっていた。クロノの案内のもとアースラの廊下を歩いて行く。

「……」

少し歩いてたどり着いた部屋の前でクロノが言って、扉を開ける。その部屋に入って、シュウは少し驚いた。

部屋は中央にテーブルとイスがあるだけの小さな部屋だった。その奥に、艦長であるリンディがいて、あと二人、シュウを見つめる人物。

「元氣そうだね、父さん、母さん」

ケインとさくらはシュウの声を聞いて、棘のない声を聞いて、思わず笑顔になっていた。何度もうなずき、言う。

「ああ。元氣だとも。……シュウ、今までのことだが……」

ケインの言葉に、シュウは静かに首を振った。

「だいたい聞いてるからいいよ。もうちょっと違う方法をとって欲しかったけど」

「……すまない」

「まあ、……に来たからこそシュテルたちに会えたしね」

そう言って、自分の後に入ってきたシュテルたちへと振り返る。シュテルはいつもの無表情だが少しだけ口の端が持ち上がっており、レヴィは照れたように笑う。ディアーチェはそっぽを向いていて、ユーリはその様子を見ておかしそうに笑っていた。

「それで、わざわざ僕を呼び出した理由は？ 別にいいとはいっても、怒ってないわけじゃないよ？」

今更とやかく言うつもりはないが、許すか許さないかで言えば許せない。だからこそ、今更自分の生活を邪魔してほしくないとでも思っただけだ。それなら拒否するつもりだ。

だが、リンディから放たれた言葉は、そんな些細な問題ではなかった。た。

「シュウ君。これからする話を、よく聞いてください」

管理局の協力のもと、ギフトッドに対する研究は一気に進められた。その切り出しで、両親がゆっくりと話し始める。とても辛そうに、シュウとは視線を合わせずに。

蓄積されていたデータを解析した結果、シュウの周囲で起こっていた異変の原因が判明した。それはとても単純なものだった。

西崎秀一は魔力を有していない。しかしギフトッドが人の形を取り続ける以上、一定量の魔力は消費し続けているはずだ。ならその魔力はどこから使われているのか。

外からの魔力。

幼少の頃はギフトッドそのものに残されていた魔力を使い、人としての存在を維持する。残りが少なくなってきたからは、外部から調達する。外部になれば、呼び寄せてしまえばいい。そうして呼び出されたものが今までの異変、強い魔力を帯びた物質が飛来してきたものだ。

海鳴市に来てから異変が起こっていないのは、前回の異変の時に莫大な量の魔力を回収できたため。それがまた枯渇しそうになっただけから再び異変が起き始める。現在頻発しているロストロギアの飛来だ。

「ではロストロギアの魔力がなくなっていたのは……」

「シュウが吸収したのだろうね。自身の存在維持のために」

ケインの言葉に、シュテルが黙って顔を伏せる。小さな声で、そうなりますか、とつぶやく。その声は少し震えているようだった。

「シュウと異変との因果関係がはっきりした……。してしまった……」

「そして管理局が協力した以上、管理局もそれを把握している」

なるほど、とシュウはうなずいた。どうやら知らないところで、自分の運命が決まっていたらしい。そのことに少しだけ悲しくなるが、だがどこか他人事のように捉えている自分もいる。思わずシュウが自嘲気味に笑うと、クロノがそのシュウへと頭を下げた。

「すまない。「こちらとしても、できる限り手を尽くした。だが……」

「異変を起さずに維持できるなら、監視などはについても今までの生活が守れたのでしょうけど……。異変を起すととなると、管理局はそれを無視できない……。次に呼び寄せられるものが危険なロストロギアではないと、誰も断定できない。だから……管理局の決定は……」

クロノの言葉を引き継いだリンディが、まっすぐにシュウを見つめる。一切の感情を隠していたが、その瞳が揺れていることに気がついてしまう。

「ギフテッドの、封印処理。それが管理局側が出した決定よ。……ごめんなさい、シュウ君。本当に、ごめんなさい……」

リンディが頭を下げる。シュウは黙ってその様子を見守っている。

「封印して……。どうして！ どうにかならないのっ？」
そう聞いたのはレヴィだ。答えるのはケインとさくら。

「この決定が出そうになっただけからは、どうにかしてこちらから魔力を与える術がないか調べていた。だが……」

「調べた限りでは、見つからなかった。私たちではシュウを救うことはできない……」

さくらが目を伏せる。レヴィがまだ言い募ろうとしたが、ディアーチェがそれを止めた。レヴィの非難がましい視線に、ディアーチェは

ゆっくりと首を振る。

「当事者であるシュウが何も言っておらんだろっ」

二人が、部屋の全員がシュウを見る。シュウは少し考え、シュテルへと振り返る。

「ねえ、シュテル。人に魔力を分け与えることってできたよね」

「はい。やってみますか？」

「うん。お願い」

シュテルがルシフェリオンをシュウへと向ける。淡い光がシュウを包み込む。だがそれらはシュウへと入ることはなく、周囲へと四散して消えてしまった。やっぱりか、とシュウが苦笑して、シュテルも小さくため息をつく。

「貴方の意思に関係なく、ギフトッドそのものが人から魔力を吸収することを拒絶しているのでしょう。人の子となるために、そうしたのかもかもしれませんね」

「完全に裏目に出てるけどね。恨むよ、当時の僕」

その時は意識すらなかったけど、とシュウは乾いた笑みを浮かべる。どうやら避ける手段は本当にないらしい。シュウはリンディへと向き直り、言った。

「一週間だけ、時間をください」

リンディが顔を上げ、少しだけ驚いたようだった。シュウが笑顔で続ける。

「一週間後に大人しく封印されます。逃げません。だからあと一週間だけ、僕に時間をください」

シュウが頭を下げると、リンディは今にも泣きそうなほどに表情をゆがめた。しっかりと一度うなずき、答えてくれる。

「分かりました。本局には私から伝えておきます」

「お願いします。それでは」

そう言って、シュウはきびすを返す。急ぐようにその部屋を後にした。

シュウが部屋を出て行く。ディアーチェたちがそれを追い、シュテルはリンディたちへと向き直る。今まで我慢していたのだろう、さくらはその場で泣き崩れ、ケインはそのさくらを抱きしめていた。

「あの子は……私たちを責めなかったわね……」

リンディの声。シュテルは、そうですなと嘆息混じりに返す。

「貴方は、シュウと一緒になくてもよろしいのですか？」

シュテルがケインとさくらに問いかける。二人は少し驚いた様子だったが、しっかりとつなずきを返した。泣きそうな表情のまま笑顔を浮かべる二人。

「あの子は、多分君たちと一緒にいることを選ぶだろう」

「だから、あの子と一緒にいてあげて。勝手なお願いというのは分かっているけど……」

元よりそのつもりです、と返答してシュテルは部屋を立ち去った。内心の動揺を押し殺しながら。

リビングで、シュウがいつものように本を読んでいる。その様子は平時と変わらない。死刑宣告も同然の通達を受けたにもかかわらず、シュウはいつも通りだ。

違いますね、とシュテルは内心で首を振った。本を読むスピードが明らかに違う。かなり急いで読んでいるようにも見える。

「すまん、シュテル。我らが声をかけても無反応でな……」

そう言ってきたのはディアーチェだ。シュテルは仕方ありませんと首を振り、シュウの隣に腰を下ろした。シュテルに気づいたのだろう、シュウが少しだけ顔を上げ、だがすぐに本へと視線を戻す。

「何をしているのですか、シュウ」

「読めない本を読んでしまおうかなと。もう読めなくなるだろうし」

そうですか、とシュテルはそれ以上何も言えなかった。そっとシュウの手を握ってやると、シュウがびくりと体を震わせる。そしてシュテルを見てきたシュウの目は、ひどく怯えたものだった。

「……ねえ、シュテル」

「はい」

「封印って」とは、僕は消えるってことだよな」

「……はい」

「……僕は、死ぬの？」

答えられずに顔を伏せる。封印といっても、ギフトッドが破壊されるわけではない。だが、西崎秀一という人間の自我は完全に失われてしまっただろう。それを死と言わずに何と言っのか、シュテルには思い浮かばない。

「……ねえ、シュテル」

「はい」

シュウの呼びかけ。シュテルはしっかりとシュウを見る。もしも、もしもシュウが自分に助けを求めるなら、それに応えよう。そう心に誓って。

だが、シュウの言葉は違うものだった。

「一週間だけでいい……。一緒に、いてもらえない、かな……」

シュテルが目を瞪る。少し言葉に詰まったが、しかしシュテルはしっかりとうなずいた。

「はい。もちろんですよ、シュウ」

それが、このきっかけを作ってしまった自分ができる、精一杯のことだ。

例えば自分が調べようとはしなくても、異変が起き始めていた以上管理局はいずれシュウに行き着いただろう。それでも、自分の意思がシュウの封印を早めたことに変わりはない。そのことをシュウがどう思っているのかと不安になるが……。

貴方が望むのならば、私はずっと側にいましょう。

シュウの震える手をしっかりと握り、嗚咽を漏らし始めたシュウをそっと抱いた。

第三十話 黄昏

翠屋のテーブルで、シュウはシュテル作のケーキに舌鼓を打っていた。アースラから戻った翌日にシュテルにケーキをもう一度食べたと言うと、驚いたことに一時間後には翠屋と話をつけてしまった。申し訳ない気持ち強いのだが、気にしないようにと何度も言われている。

ケーキを切り分け、口に運ぶ。ほどよい甘さでシュウの好みの味だ。シュウの向かい側では、シュテルがその様子を静かに見守っている。

「あの、シュウ君……」

自分を呼ぶ声に振り返ると、なのはがそこにいた。視線を落とし、何度も口を開けては閉じるを繰り返している。それを見れば、なのはが何を言いたいのか察することができた。

「シュテルから聞いた？」

なのはが驚いて目を丸くする。反対に、シュテルの反応は少し視線を上げた程度だ。

「えっと……。うん。あの、それで……」

「そんなわけで、僕はあと一週間しかいられません。いやあ、短いね！」

おどけた調子でそう言う。なのはが戸惑っている間に、シュウはケーキを大急ぎで食べてしまう。「ちこそつま、と立ち上がると、素早く出入り口へと歩き出す。

「あ、シュウ君……」

なのはの呼ぶ声は聞かなかったことにして、シュウは翠屋を後にした。

少し歩いたところで立ち止まる。すぐにシュテルが追ってきた。一言も発さないシュウの手を取り、シュテルが歩き出す。

「さて、次はどこに行きましょうか」

「…………ん。じゃあ次は…………」

手を繋いだ二人は街の喧騒の中へと消えていった。

Side::Nanoha

「それ、本当なの？」

八神家のリビング。なのはからの話に、フェイトとはやてが思わず聞き返していた。シュウとシュテルが帰った後、なのははシュテルから念話で聞いた話をフェイトとはやてに話しているところだ。この二人に話すことはシュテルからも許可をもらっている。

「うん。シュテルから聞いた話だから間違いないと思う」

「そんな…………。せっかくあの子たちとも仲良くなっていたのに…………」

あの四人が現在最も信を置いている人間は、間違はなくシュウだろう。だがそのシュウはあと一週間でいなくなってしまう。管理局の封印によって。管理局の判断は組織としては正しいのだろうが、あの四人から見ればどう映るだろうか。

「どうにかならんのかな…………」

そうつぶやいたのははやてだ。だが、今回はかりは自分たちではどうしようもないだろう。リンディヤクロノ、ユーノ、それにシュウの両親が解決策を必死に探したらしいのだが、手がかりすら見つからなかったのだ。そういった知識のない自分たちが見つけれられるはずもない。

三人はしばらく重苦しい空気を共有し、そして同時に、長々とため息をついた。せめてあと一週間、あの子たちの邪魔はしないでおう。そう心に誓って。

Side::Hero

楽しい時間ほどあっという間に過ぎていくものだ。

一週間。シュウはその期間を思う存分楽しんだ。シュテルと図書館や買い物に出かけたり、レヴィやユーリも連れてヒーローショーを見に行き、ディアーチェを交えて夕食の準備などをする。そんな毎日を過ごし、さらにはこの間行っただけかだというのに、また温泉旅行

に出かけました。

シュテルを始め、皆がシュウのために動いてくれる。いつもの四人だけでなく、要望さえ出せば、管理局やなのはたちも協力してくれる。なのはたちの家に遊びに行った時など、事情を知っているだろうに何も言わずに普段通り接してくれたのは、とてもありがたかった。

約束の日の前日は、シュテルたちのマンションで静かに過ごす。リビングで、トランプや雑談に花を咲かせる。普段と同じように。そして夜は、この日はシュテルのマンションに泊まることになった。

リビングのソファに横になるシュウ。シュテルからは自分の部屋とベッドを提供すると言われていたが、さすがに断っている。シュテルの部屋には興味があったが。

シュウの傍らでは、シュテルが本を読んでいる。寝ないのかと聞くと、まだ起きていますとの答え。

シュウは毛布にくるまり、目を閉じる。今日で終わりだと思うと、恐怖が一気にこみ上げてくる。知らず知らずのうちに体を震わせていると、手に温かいものが触れた。見ると、シュテルが手を握っていた。

「シュウ。もう何度も聞きましたが……」

シュウが目を閉じたまま苦笑する。この一週間、一日に最低でも一回は、四人の誰かから聞かれたことだ。

「貴方が望んでくれるなら、私たちは貴方を連れてどこにでも行きましょう。その意思是……ないのでしょうか」

「ないよ、と短く答えると、シュテルは小さくため息をついた。

自分が望めば、きっとシュテルたちは本当に自分を連れて逃げてくれるのだろう。ただその先に何が待っているのか分からない。シュテルたちの生活を、自分の都合で奪いたくはない。それが正直な気持ちだ。それに、自分が行く先で、自分が呼び寄せた何かに巻き込まれる人を見たくはない、というのもある。

シュテルの手に少しだけ力が込められる。シュテルを見てみるが、特に変化はない。シュウはシュテルの手をしっかりと握り返し、眠りへと落ちた。

「……」

リンディの問いかけに、シュウは静かにならずいた。

約束の日。シュウはアースラに向き、最後は自分の部屋でと願うと、すんなりと希望が通ってしまった。現在いるのは、あのアパートのシュウの部屋だ。読みかけの本がちゃぶ台にある。そう言えば読み終えていなかったと今頃になって気がついた。

部屋にいるのはシュウとシュテルたち、リンディとクロノ、なのは、フェイト、はやて、そしてシュウの両親だ。ヴォルケンリッターや他の管理局の人間は結界の展開などの雑務を行っている。

「できればもう一つお願いが」

リンディに向かって言うと、リンディが首を傾げてどうぞと返ってくる。

「できれば……。シュテルたちに封印してもらいたいと」

管理局の面々が目を丸くする。ただシュテルたちは予想ができていたのか、何も言わずにデバイスを展開した。その様子を見ていたリンディが、仕方ないわね、と苦笑する。

シュウが部屋の中央に立ち、シュテルたち四人がその周りに立つ。

その間、誰も何も言わない。静かに魔方陣が展開されていく。

「さて、いつでも始められるが……。シュウ、今からでも考え直さんか？」

「ボクたちには気を遣わなくてもいいんだよ？」

「私たちはみんなシュウのことが大好きです。シュウを守るためなら

……」

手を上げて、言葉を遮る。シュウが首を振ると、三人は悲しげに顔を伏せた。

「……始め、ますか？」

シュテルの声。その声はどこか震えているようにも聞こえる。

シュウが一つづつと、淡い光がシュウを包み始める。

「みんな、元気でね」

シュウが思い出したように、自分たちを見守っている面々に声をか

ける。それに対する反応は様々だ。リンディとクロノは頭を下げ、なのはたちは泣きそうになりながら手を振ってくれる。両親は何かを言おうとしているようだが、結局何も言えずにうつむいてしまった。

次にシュウは側にいる四人を見る。静かに封印魔法を展開している四人。

「レヴィ。あまりシュテルやディアーチェに迷惑かけちゃだめだよ？」

レヴィは返事をせずにつつむいた。嗚咽のようなものが聞こえてくる。「ごめんねと小さく謝ると、次にユーリを見た。

「ユーリは……。もう少しわがままを言えるようになるっね」

「はっ……」

涙を堪えながらつなずくユーリ。次に見るのはディアーチェだ。

「ディアーチェ。みんなのこと、よろしく」

「分かっておる」

そう答えるディアーチェの表情は、ない。無表情の仮面を被り、シュウを静かに見送ろうとしてくれている。後のことは心配するな、言外に言われている気がして思わず苦笑してしまった。

最後に、シュテルを見る。無表情のシュテルと視線が合い、どうしようかと少し考える。最も長い時間を共有したので、今更言うことも何もない。

……いせ。

言わずにおこうと思っていたことがある。ただ、これは呪いだ。言えば相手を縛り続ける呪いの言葉だ。だが、それでも、シュウは口にした。消える間際になって、欲が生まれたのだから。

「シュテル。一つ、頼んでいいかな？」

「何でしようか？」

「僕のこと、忘れないでね」

シュテルが息を呑む。シュウは照れたように笑っただけだ。

「たまにでもいいから、思い出してほしいかな。僕のこと」

シュテルはしばらく押し黙っていたが、やがてしっかりとつなずい

た。

「もちろんです。絶対に忘れませんよ」

「ごめんね、と小さく謝ると、何がですかと返される。シュテルらしいなと思ってしまう。」

「今までありがとう、シュテル。楽しかったよ」

「「ちら」そ。とても楽しかったですよ、シュウ」

静かに言葉を交わす。いつもの会話。こんな時だというのに、それがとても心地いい。

そして、ゆっくりとシュウの体が光の粒子となって崩れていく。レヴィとユーリが何かを叫んでいるようだが、音はもうほとんど聞こえない。少しだけ恐怖心を持ちながらも、シュウが柔らかい笑顔を浮かべた。

「ああ、そうだ……。最後に一つだけ」

ぴたり、と周りの喧噪が止まる。か細くなっているシュウの言葉を聞き逃さないために。

「僕は……」

いたずらっぽく笑う。楽しげに笑う。

「シュテルのことが、好きだったよ……」

シュテルが大きく目を見開くのをぼんやりとした視界の中でもしっかりと捉え、シュウは満足そうに口の端を持ち上げ。

そして、静かな闇の中へと意識を沈めた。

Side::Stern

シュウが消えてしまった場所に残されたのは、淡く光る小さな宝石。これがギフトッドなのだろう。シュテルはその宝石をそっと手に取り、胸元に抱き寄せる。

「ずるいですよ、シュウ……」

温かい雫がシュテルの頬を伝い、宝石に落ちて消えていった。

Side::Gifted

暗い、とても暗い闇の中、シュウは意識を取り戻した。周りには何

もない。光もなければ音もない。本当に何も無い空間だ。

なんだろう、これ、と首を傾げていると、唐突に目の前がまぶしくなった。手で目を覆おうとするが、今の自分に手が、体がないことに気づいただけだった。

光がゆっくりと収まり、人の形を取る。長めの金髪に褐色の瞳をした女だった。年は二十代半ば頃だろうか。白衣を着て、不適に笑ってこちらを見ている。

「やあ、ギフトッド。いや、シユウと呼んだ方がいいかな？ 気分はどうかな？」

誰？

声を出そうとするが、出なかった。そのことに申し訳なく思うが、女はすぐにかからからと笑う。

「ちゃんと聞こえているよ。あたしは……いや、名前なんていいか。ギフトッドを造った者の意識データ、とでも思ってくれればいい」
思わず息を呑む。女は楽しそうに笑っている。

「さてさて、これから完全に封印されるわけだけど……。この空間が閉鎖されるまでまだもう少し時間がある。一緒に暗い闇を楽しもうじゃないか」

何だろうこの人は。けんかを売っているのだろうか。これでも怖くて怖くて仕方がないというのに。そしてその心情を読み取ったのか、女はやはり楽しそうに笑っていた。

「まあ怖いだろっね。今の君は人と意識レベルが同じだから。よければ君に、夢を見せてあげようか？」

夢？

「ああ、そうとも。恐怖を紛らわすことしかできないけどね。どうかな？」

どうしてそんなことを、と思う。一体何を考えているのかと。女は、ふむ、と腕を組んだ。少し考える素振りを見せ、そして言う。

「ただの「褒美だよ。長い期間、ずっとがんばってくれたからね。最後ぐらいは、安らかに眠ってほしいんだ。ほんとだよ。」

優しげに微笑む女。手を伸ばし、両腕を広げる。おいで、と囁きか

けてくる。シュウは少し躊躇いながらも、その腕の中へと飛び込んでいく。

「さあ、子守歌を歌ってあげよう。夢を見るために。ゆっくりとおやすみ、私のかわいいギフト」

Side: Hero

シュウはリビングで目を覚ました。ソファから起き上がり、欠伸をする。先ほどまで何か夢を見ていたような気がするのだが、思い出せない。

「シュウ。どうかしましたか？」

隣に座るシュテルが首を傾げて聞いてくる。シュウは少し考え、何でも無いよと首を振った。

「そうですね。ではそろそろ夕食にしましょう」

シュテルがテーブルに広がっている料理を指し示す。カレーや唐揚げ、ハンバーグなど様々な料理が並んでいる。

「早く食べないとシュウの分も食べちゃってー」

レヴィの声。カレーライスを食べている。隣ではユーリがハンバーグを頬張っていた。

「ディアーチェのハンバーグは美味しいですー」

ディアーチェは無言。見ると、少しだけ照れたように頬を染めていた。シュウと目が合い、すぐにそっぽを向いてしまう。

「片付けられんどう。さっさと食べ」

シュウは苦笑すると、いただきますと食事を始める。

いつもの夕食。いつもの会話。平和な日常。なんだかそれが、今よりも大切なものを感じる。

夕食が終わり、それぞれが自由に時間を過ごす。レヴィとユーリはテレビを見て、ディアーチェは読書。シュテルは怪訝そうにシュウを見ていた。

「どうかしたのですか、シュウ。機嫌が良いように見えますが」

そうかな、と笑う。確かに、今はとても気分がいい。幸せだな、と実感できている。

だが、そこで不意に睡魔が襲ってきた。大きな欠伸を一つ、目をこする。それを見たシュテルがかすかに苦笑を浮かべた。

「少し休みますか？ 心配せずとも、起こして差し上げます」

シュウは少し悩む。今の幸せを手放したくはないなど。だが睡魔には抗えず、どんとんと眠気が強くなってくる。仕方なくシュウはソファに横になった。そのシュウの手に温かいものが触れる。シュテルの手だ。見ると、少しだけ顔を赤くしながらも、シュテルは笑顔でシュウを見つめていた。

「おやすみなさい、シュウ。良い夢を」

その言葉にシュウも笑顔を浮かべる。そしてそっと目を閉じる。

おやすみ……シュテル……。

恐怖感など一切ない幸福感に包まれながら、シュウは眠りへと落ちていく。安らぎの中へと。

そして、西崎秀一はいなくなった。

Side：Stern

シュテルは主のいない部屋に一人佇んでいた。この世界を離れる前に、もう一度ここに来ておこうと思ったためだ。

シュウがいなくなってから数ヶ月、桜の舞う季節になっていた。シュウと初めて会った日からちょうど一年だ。まだそれだけの期間しか経っていないことに驚いてしまっ。

封印されたギフトッドはリンディたちに預けられた。今頃はもう研究なども終わり、どこかに静かに安置されていることだろう。

シュテルはそっと目を閉じる。一緒に同じ時間を過ごした友人を思い出す。たった数ヶ月の期間だったというのに、自分の中でシュウは大きな存在になっていた。

「おや、また来てくれていたのか」

背後からの声に振り返る。シュウの父親、ケインがいた。優しげな微笑みを浮かべている。最初に会った時とは別人のようだ。

「リンディさんから話は聞いたよ。」の世界を出て行くそうだね

「はい。今日の夜に発ちます」

先日、エルトリアという世界からユーリの力を借りたいという姉妹が訪れた。世界を救うためにエグザミアの力が必要だと。それを聞いたユーリが協力を決め、それに自分たちも同行することになった。

貴方の示してくれた道ですよ、シュウ。

誰かが自分たちの力を必要としているのなら、それに応えよう。それはシュウから言われたことでもあり、あの後皆で決めたことでもある。だからこそ自分たちは、この世界を離れる選択肢を選んだ。

「じゃを君」

ケインの言葉に我に返ると、小さな箱を四箱差し出されていた。箱の表面にはそれぞれに自分たちの名前が書かれている。

「実はシュウに頼まれていたんだ。造ってほしいと。私たちを恨んでいるだろうに頭を下げたね。だからそれは、シュウから君たちへの、最後の贈り物だ」

「……そうですか。わざわざ、ありがとうございます」

シュテルは自分の箱をそっと開けた。中に入っていたのはペンダントだ。星形に成形された小さな宝石がついている。シュテルがそれを着けると、ケインは笑顔でうなずいた。

「うん。似合っているよ」

「ありがとうございます」

素直に礼を言う。ケインは笑うと、それじゃあ、と部屋を出て行ってしまった。

シュテルはもう一度振り返る。部屋をゆっくりと見る。片付けられはしたが、あの頃と同じ雰囲気を持った部屋を。

シュテルはそっと目を閉じると、雫を一滴、畳に落とした。

「私も貴方のことが好きでしたよ、シュウ」

ずっと考えていた自分の気持ちだ。その言葉をこの世界に、この場所に置いていく。新たな旅立ちのために。思い出はそっと胸にしまい込む。

「それでは、ならはです」

シュテルは優しげに微笑み、静かに告げる。きびすを返し、その部

屋を後にする。胸元のペンダントが日の光を受けて少しだけ輝いた。

主のいなくなった静かな部屋に、今日も夕焼けの光が降り注ぐ。
その光を受ける者は、誰も居ない。

第三十話 B 黎明

暗い暗い夢の中、シュウは静かにそれを見つめていた。終わっていく世界。世界が崩れ、消えていく光景。そして自分の隣には、見知らぬ人影。

お前のせいじゃないよ……。

人影が言う。姿をよく見ようとしても、真つ黒な影で分からない。

さあ、おいで。あたしのかわいいギフトッド。

人影に連れられて、シュウはその場から姿を消した。

Side:Stern

泣き疲れたのか、シュウはソファで眠っている。その様子を見つめ、シュテルは一人ため息をついた。どうしたものかと考えるが、自分ではどうすることもできないと分かっている。またため息をつき、シュテルは立ち上がった。毛布を持ってきてそれをシュウにかけてやる。おそらくこのまま朝まで目を覚まさないだろう。

シュテルは部屋の電気を消し、ソファに座り直した。暗い室内の中で考える。

できれば、シュウを助きたい。それが本音だ。だがシュウを助けるためには、その根本の問題を解決しなければならない。シュウを連れて逃げる、という選択肢は、シュウが受け付けないことだろう。故に見つけるべきは、ギフトッドに魔力を与える方法だ。

「考えていても仕方ありませんね」

シュウを落胆させることになるだろう。今はそれでも構わない。彼を助けるために彼に嫌われる道を選ぼう。シュテルは寂しげにならずくと、そのまま目を閉じて眠りに落ちた。

翌日。シュテルは朝食の準備を済ませ、シュウの起床を待つ。目を覚ますのはまだまだ先だろうと思っていたが、意外と早くに目を覚ました。目をこすり、シュテルを見つめてくる。

「……おはよう、シユテル」

「おはようございます、シユウ」

挨拶を交わし、朝食を用意する。バターを塗ったトーストにコーンスープと簡単に食べられるものだ。シユウは出された朝食を、のんびりと食べていく。

「ディアーチェたちは？」

「まだ部屋にいます。もう起きてはいると思いますよ」

実は念話でしばらく話をさせてほしいと頼んである。快諾してくれているので、王たちがリビングに来るのはもう少し後だろう。

「そっか。さて、と……。今日はどうしようかな……」

ぐっと伸びをして笑うシユウ。そのシユウへ。シユテルは真剣な面持ちで切り出した。

「シユウ。お願いがあります」

「ん？ なに？」

「貴方の一週間を、使わせてください」

意味が理解できずに首を傾げるシユウ。シユテルはそれ以上は言わず、じっとシユウを見つめる。やがて少しずつ意味を理解してきたのか、シユウの表情は悲しげなものになっていった。それを見ると胸が締め付けられるようだが、「こちらも譲れない。」

「何を……？」

「貴方を助ける方法を探します」

それを聞いたシユウは、力なく微笑んだ。どうにも反応に困っているようだ。

「別に、いいよ？ それよりも僕は……」

「お願いします、シユウ」

頭を下げるシユテル。シユウは驚いたように目を睨り、やがて苦笑した。

「分かった。ありがとう、シユテル」

「いえ……。こちらこそ、ありがとうございます。シユウ」

その日の昼頃、シユウの見送りを受けつつ、シユテルはアースラへと転移した。

「よろしくお願いします、師匠」

「いやだから師匠はやめて……」

管理局の無限書庫。シュテルはそこに来て、ユーノと会っていた。無限書庫を移動しながらの会話で、ユーノは引きつった笑みを浮かべている。

「ナノハの師匠なのですから、私の師匠でもありません」

「どついう理屈なの、それ！ いやもういいけど……」

諦めたようにため息をつきつつも移動は続ける。シュテルもそれを追い続ける。

ユーノに案内してもらったのは小さな部屋だ。テーブルといすが一つずつ、そして大量の書物が床に山積みされている。ユーノはシュテルを部屋に入れると、しっかりと扉を閉めた。

「管理局の人たちが調べていた本はあそこの一角。ギフトッドに関する記述が明確にあるものだよ。あっち側が今日集めてきたもので、ロストロギア全般の資料。これでいいかい？」

「はい。ありがとうございます」

「うん。なのにも協力してあげてほしいって頼まれてるしね。何かあったらいつでも呼んでほしい。あと食事とかも簡単なもので良ければ持ってくるから」

「すみません。助かります」

言いながら、シュテルは早速本を二冊ほど選び出す。それを宙に浮かせて同時に読み始める。その上でさらに、他の資料を探して部屋を歩き回り始めた。

「……がんばって」

ユーノは小さな声でそうつぶやき、静かに退室していった。

三日後。シュテルは今も小さな部屋に閉じこもったまま、資料を読み続けている。食事や仮眠以外で休むことはせず、ひたすらに読む。今日も仮眠から起きてからはずっと読んでいたが、突然の来客にシュテルは顔を上げた。

「シュテル、大丈夫？」

なのはが心配そうに顔をのぞかせ、部屋に入ってくる。手には食事の載った盆があり、それをテーブルに置いてくれる。

「ナノハ……。どうしたのですか？」

「ユーノ君とクロノ君に、シュテルがずっと部屋に閉じこもって調べ物してるって聞いて……。せめて何かしっかり食べてほしいなって」
盆を見ると、普段差し入れでもらっているものとは違うメニューだった。どうやらなのはが作ってくれたらしい。少し嬉しくなり、頬がわずかに緩む。

「すみません、ありがとうございます」

「ううん。こんなことしかできなくて、ごめんね……」

「得手不得手がありますから、お気になさらずに」

シュテルは読み進めている本の半分ほどを一度床に下ろし、手を合わせて食事を始める。それでも残り半分は自動的にページが捲られていき、読み進めていく。なのはは感心したようなため息をつき、すごい、と言葉を漏らしていた。

「じゃあ、邪魔をしないうちに戻るね。シュテル、がんばってね」

なのはが手を振り、シュテルも手を振り返す。笑顔を浮かべたなのはは、そのまま退室していった。

さらに数日が経過し、約束の日の前日。すでに真夜中。時間はもう、あまりない。

「……………」まで、ですか」

シュテルは最後の一冊を閉じて、本の山の頂にそつと載せる。これでこの部屋にあるもの、連日運ばれてきた追加の資料、それら全てを読み終えた。そして導き出された結論は、管理局と同じもの。打つ手が無い。だが、一つだけ、不確実ながらも試す価値があることを見つけた。ただしかなりの危険が伴うことでもある。

資料を読み進めていくうちに分かったことは、ギフトッドには意思があるということだ。願いを叶える前に会話を交わした、という記述もあった。魔力を拒絶しているのはギフトッドの意思かもしれない。

そうであるなら、その意思に接触さえできれば、可能性はあるだろう。問題は、どうやってギフトレッドの意思に接触するかだ。これも方法はあるにはあるが、シュウにとっても自分にとっても危険なものだ。

しかし、やらなければ結局は同じ、ですね。

シュテルはうなずくと、部屋を出てアースラに向かった。

アースラにたどり着いて、シュテルはすぐにリンディを呼び出した。まだ日も昇っていない時間だったので眠っているかと思ったが、どうやら起きていたらしい。シュテルがリンディの部屋に入ると、コーヒーを出してくれた。

「こちらも今まで調べていたのだけど……。私たちではどうしようもないわね」

リンディがお茶を飲みながら言う。そうですか、とシュテルもコーヒーを飲み始めた。

「シュテルさんの方は？」

「……………」

シュテルは無言。少しだけ考える素振りを見せ、そしてリンディに頭を下げた。お願いします、と。

「半日ほど待っていただけますか？ 試しておきたいことがあります」

そして顔を上げたシュテルの目を見て、リンディは何かを察したのか薄く微笑んだ。分かりました、と小さくうなずく。

「何か協力できることはあるっ？」

「ではシュウの家の周辺に結界をお願いします。私は魔法を使うことができませんので」

その言葉に怪訝そうに眉をひそめたが、シュテルはそれ以上は何も言わずにゆっくりとコーヒーロー飲み終えた。

昼前になり、シュウが自宅へと戻ってくる。シュテルは部屋の中央に立ち、静かに待ち続けた。シュウはシュテルを見て、嬉しそうな笑顔を見せてくれる。シュウに続いて入ってくるのはディアー

チエたちだ。朝方に全員を呼び出したのだが、その時はシュウの家だと聞いてとても驚いているようだった。

シュウがシュテルの前まで歩いてくる。ディアーチエたちは部屋の入り口で、その様子をじっと見守っている。

「シュテル。何をするの？」

シュウの言葉に、シュテルはうなずいた。

「調べて分かったことですが、ギフテッドには意思があるそうです」

「そう、なの？」

「はい。ギフテッドの意思に接触を試みようかと思います」

シュウが、どうやってと首を傾げる。シュテルはそれには応えずに、ユーリに目を向けた。見られたユーリが居住まいを止す。

「ユーリ。一つお願いがあります」

「はい！ 何でしようっ？」

「駆体を一時放棄します。後ほど戻ってくる時にご助力をお願いします」

「はい。わかりまし……え？」

ユーリが絶句して、レヴィも驚きで目を丸くしている。だがディアーチエだけはシュテルの意図を察したのか、少し驚きはしたもののすぐになるほどとうなずいていた。紫天の書を取り出し、ページを捲っていく。

「我も準備をしておこう。十分に気をつける」

「はい……。ありがとうございます、王」

察しながらも引き留めようとはしない王に、シュテルは心から感謝した。さすがは自分たちの王だとも思う。少しだけ笑みを浮かべると、改めてシュウへと向き直った。

「えっと……？」

「貴方は気にしなくて大丈夫です。手を出して、目をつぶってください」

指示を出すと、シュウはおずおずといった様子で手を差し出してくる。どこか不安そうに瞳を揺らしながらも、しっかりと目を閉じた。シュテルは満足そうにつなずき、シュウの手を握る。驚いたのかシュ

ウの体がびくりと震えたが、今は気にしないことにする。

シュテルはそつと目を閉じると、駆体の放棄を開始する。本来なら一度データなどを闇に戻すところだが、シュテルは闇に戻らずに、シュウの中に眠るギフテッドへと潜っていった。

Side:Dearche

「……行ったか」

ディアーチェはシュウだけになった部屋を見て、小さくため息をついた。シュウのためとはいえ、無茶をするものだと思う。シュテルは自身の駆体を放棄して、データだけの存在となってシュウの中へと潜っていった。現在、シュウからシュテルの魔力を感じるといふ奇妙なことになっている。

「始まったのかしら」

入り口からの声に振り返ると、リンディがいた。クロノとなのはも一緒だ。その三人へとディアーチェはうなずく。

「シュテルは？」

なのはの問いに答えたのはユーリだ。

「会いに行きました。シュウの中の、ギフテッドに」

Side:Stern

気づけば、シュテルは真っ白な小さい部屋にいた。家具も道具も何一つない、白だけの部屋。すぐに放棄したはずの体があることに気がつくが、だがこれは幻のようなものだろうとも自覚する。

さて……。どうするべきでしょうか。

中に入る、という発想は人間にはないだろう。そのためここに来たのもおそらく自分が最初だ。当然事前の知識などあるはずもなく、ここから素早くギフテッドの意思を探さなければならぬ。

とりあえずは周囲の壁を調べてみようかと移動しようとしたところ
で、

「やあ、やはり君が来たね、シュテル」

驚きつつも声のした方向、先ほど見ていたはずの正面の壁を見る。

すると、いつの間にか人の姿があった。長い金髪に褐色の瞳の女だ。資料を含め、自分は一度も見ることがない。

「ああ、そんな警戒しないでいいよ。ただの過去の亡霊だから。そうだね、パストとでも名乗っておこうか」

そう言うと、パストと名乗った女はからからと楽しげに笑う。シュテルはそんなパストの動作をしつかりと見る。動きを見逃すまいと観察を続けながら、

「貴方が、ギフトテッドの意思、ですか？」

シュテルの問いかけに、パストの笑顔の質が変わる。楽しそうなものから、困ったようなものへと。そして小さく首を振った。

「ではギフトテッドの意思まで案内していただけませんか？」

「いやいや、それは無理な相談だよ」

「何故ですか？」

シュテルが相手を睨むように目を細める。パストが肩をすくめ、怖いなあと楽しそうに続ける。

「だって、「こ」にはいないから」

「……は？」

「君たちが会ってるじゃないか、ギフトテッドの意思には」

どづいづいことですか、とは聞かない。意味を理解したシュテルは、小さくため息をついた。

「さすがだね。そうさ、ギフトテッドの意思は、西崎秀一という人間だ」
パスト曰く。ギフトテッドは無から有を生み出すことはできない。

それは人の意識なども例外ではないため、人間となる時にギフトテッドは自分の記憶を封印して、その上で人として生まれた、ということだ。つまりは、最初からシュテルはギフトテッドの意思に出会っていたといふことになる。

「……残念です」

「何が？」

「私では……シュウを救うことができなかった……」

ギフトテッドの意思は、魔力の拒絶とは関与していない。ならば自分が取れる手段はもうない。そのことに落胆してしまう。こづなって

しまつたら、最後の一週間はシユウと共に過ごすべきだった。

だがそれを聞いたパストは笑顔をさらに深くした。にやにやと小馬鹿にするようなそんな笑みだ。思わずシユテルが睨むがパストは動じない。

「見当外れではないよ、シユテル。君がここに来たことは正解だ」

「どういうことですか」

「あたしが、魔力を拒絶している張本人だからね」

シユテルが目を丸くする。パストの言葉の意味を理解するのと同じ時に、シユテルはすぐに思考を回転させる。この女を説得しなければならぬ、と。

「魔力の拒絶をやめていただけませんか。その結果がどうなるか、お分かりでしょう」

ゆっくりと語りかける。パストは、分かっているさと理解を示してくれるが、しかし首を縦には振ってくれない。

「封印となるなら仕方がないね。大人しく封印されよう」

「何故、ですか？」

「ん？ 簡単さ。人間が信用できないからだ」

その言葉を発した瞬間に、パストの表情は真剣なものになっていった。敵意にも似た感情をシユテルへと向けてくる。思わず怯みそうになってしまつが、シユテルはしっかりと相手を睨み返した。すると、パストの視線が少しだけ逸らされた。どこか嬉しそうにも見える。

「さすがだね……。ああ、続きだけどね。ギフテッドは願いを叶えることができる。ただ十分な魔力さえあれば、シユウは無意識に人の願いを叶えてしまう。それはとても危険なものだ」

「ギフテッドはそれほど力の強いロストロギアではないと聞いていますが」

パストが顔の前で舌を鳴らしながら指を振る。外れだ、というパストの表情は、何かを自慢したくてたまらないといった子供のような表情だ。

「ギフテッドはね、ロストロギアと呼ばれているものの中でも凶悪な

部類に入ると思うよ。なんせ、無から有は生み出せない、だけで他に制限がないからね」

シュテルが訝しげに眉をひそめると、パストは小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ギフトテッドの力が弱いんじゃない。与えられる魔力が少ないだけだ。ギフトテッドは、与えられる魔力に応じて願いを叶える。魔力さえあれば、世界を滅ぼすことすらできるよ」

「……ずいぶん詳しいんですね」

「まああたしが作ったものだし」

シュテルが大きく目を見開いた。その様子がおかしいのか、パストが忍び笑いを漏らす。シュテルはすぐに表情を引き締め、パストへと言葉を投げかける。

「貴方の言い分は理解しました。そしてその通りだとも思います。確かに人間には信用できない者が多いでしょう」

「そうだろう？ だから……」

「それでも、お願いします。シュウを利用するものがあるなら、私が排除します。ですから、どうか……」

深々と頭を下げるシュテル。パストは先ほどまでの嘲笑に近い笑みを引つ込めると、どこか寂しげに眉尻を下げた。いい子に出会えたものだ、と小さな声が聞こえてくる。やがてパストは、仕方がないねと苦笑した。

「では聞くが、君はシュウを守るといふ。ではそんな君は、シュウを、ギフトテッドを利用しないと誓えるかい？ あんたほどの魔力があれば、叶えられる願いも大きなものになる」

「先のごことは分かりませんが、今は利用するつもりはありません」

「……正直だね」

呆れたようにため息をつき、だがパストはどこか楽しそうだ。

「君は危険を冒してまでここに来たんだ。無事に帰れる保証もないのに。そんな君に敬意を表して、君の魔力だけは受け付けてあげよう。それ以上の譲歩はしない」

シュテルが顔を上げる。パストは優しい瞳でシュテルを見つめて

いた。シュテルは安堵のため息をつき、もう一度頭を下げる。

「ありがとうございます」

「はいはい。じゃあさっさと帰れ。駆体の方もサービスしてやるから」

ひらひらと手を振ってくる。どこか名残惜しそうにも見えるその仕草に、シュテルは少しだけ首を傾げた。そしてふと疑問に思うことがある。

パストがギフトッドを造ったという。ならば、その理由は何なのだろう。と。理由もなく造るとは思えないものだ。そのシュテルの思考を察したのか、パストはシュテルからそっぽを向いて、しかし教えてくれる。

「あたしには子供がいたんだ。でもまだ赤ん坊の時に、殺されちゃった」

当時は戦争中だったから仕方がないけど、と笑うパストは、しかしとても悲しそうに表情を歪めていた。黙って聞いているシュテルへと、パストは続けて教えてくれる。

「ギフトッドを造った理由は単純なものだよ。子供を蘇らせたかったんだ。幸い、あたしの世界では魂の保存なんてことができたからね。ギフトッドを造り、魂を与え、願いによって人の姿を取ってもらった。願いを叶える、ていうのは付随効果に過ぎないんだよ」

ギフトッドがああ夫婦の願いを叶えたかったのは、その最初の願いの影響だろうねと寂しげに言った。

話は終わりだ、とパストが腕を振る。その瞬間、白い部屋が崩れ去った。同時にシュテルの幻の体も消え、魔力とデータだけの存在になる。パストだけが暗い闇に残され、こちらを優しげに見つめている。やがて、わずかな浮遊感とともにパストがゆっくりと遠ざかっていく。

「それじゃあね。あんたと話ができ良かったよ。私のかわいいギフトッドを……。私の息子をよろしくね」

息子、と聞いてシュテルは少し驚く。だがすぐに、なるほどと得心した。ギフトッドの意思はパストの息子のものであり、その意思が今

の西崎秀一なら、パストの息子ともいえるものなのだろう。だからこそ、息子を利用されたくないがために、魔力を拒絶していたのかもされない。それが封印される理由になるうとも。悪意の願いによって重い十字架を背負わされる前に。

不器用な人だ、と思うと同時に、シュテルは意識を失った。

S i d e : P a s t

パストはシュテルを見送り、満足そうに微笑んだ。あの子になら息子を任せられる、と判断した。その自分の判断に間違いはないという自信もある。もっとも、ここまでくる度胸がなければ、任せる気にはなれなかったが。

パストは、過去の亡霊は思い出す。ギフテッドが叶えた最初の願いと結末を。

願いは叶えられ、確かに息子は蘇った。だが願いを叶える魔導具を、戦争中の国が欲しがらないわけがない。結果、自分たち親子は味方であるはずの国そのものに裏切られ、自宅を襲撃され、二人とも命を落とした。

そしてその時にパストが願ったこと。願ってしまったこと。

ことなくそつたれな世界、消えてしまえばいいのに。

その時は、ギフテッドには大量の魔力が蓄えられていた。それ故に、その願いは叶えられた。叶えられてしまった。次元震など生やさしいものではない。世界がゆっくりと消滅していく。崩壊していく。多くの人々に恐怖と絶望を与えながら、老若男女問わず、善悪問わず、全ての人間を巻き込んで世界は消滅した。後に残されたのは、暗い無の世界。

その時になって、パストは自分が造りだしたものの危険性を理解した。だが理解した時にはすでに自分の体は失われていた。

ギフテッド。あなたに最後の命令だ。

だからパストはギフテッドに、親として命令を下す。これからのために。

これからみんなの願いを叶えにいく。小さな願いを叶えに

いこう。二度とこんなことが起こらないように。あんたはあたしの命令によって願いを叶え続けていくんだ。

だから。

だからこれは、お前のせいじゃないよ。

さあおいで、とギフトッドを次なる世界へと導く。世界のあった場所を名残惜しそうに見つめながらも、次の世界へと旅立っていく。

振り返らずに。さあ、おいで。あたしのかわいいギフトッド。

やがて次の世界に着く頃には、パストはギフトッドの中で眠りについていた。

はるか昔の出来事。一人の科学者と魔導具の、終わりと始まりの、誰にも知られることのなかった世界の話。

Side:Stern

シュテルが目を開けると、最初に見たものはシュウの心配そうな顔だった。その周囲にはディアーチェやユーリ、レヴィがいる。

「おかえり、シュテル。ちゃんと帰ってきてくれてよかったよ」

泣き笑いのような表情でシュウが言う。シュテルはそんなシュウの手を静かに握った。困惑するシュウをよそに、シュテルは自分の魔力を分け与える。魔力光が揺らめき、シュウの中へと、ギフトッドへと取り込まれていく。その光景に、その場にいる全員が啞然とした。

「シュウ……。貴方の母親にお会いしてきましたよ……」

シュウが首を傾げる。だがシュテルはそれに気づかず、用件のみを伝えていく。

「魔力をもらっていただけるように、話をつけてきました……。ただ、一つ、勝手に約束したこともあります……」

「約束？」

「はい。私以外の魔力は、受け付けるつもりがないそうです……。そのため、貴方は私と共にいなければなりません。勝手なことをしてしまつてすみませんが、それしか方法がなく……」

声がどんどんと弱々しくなっていく。激しい睡魔が襲ってくる。今までろくに眠りもしていなかったのが今になって、安心したためが

響いてきているらしい。シュテルの言葉を聞いたシュウは驚きを露わにしつつも、やがて満面の笑顔を浮かべた。

「シュテルと一緒にいればいいんだよね。僕は別にいいよ。……シュテルのこと、好きだから」

ぼつりと、そんなことを言う。ディアーチェが驚き、ユーリが顔を赤くし、レヴィがおーと意味のなさない声を発している。

「シュテルは……良かったの？」

シュウの声に朦朧とした意識を向ける。薄く微笑んで、言った。

「ええ、私も構いません……。私も貴方のことは好きですから……」

シュウが完全に硬直する。おいしっかりしろとディアーチェがシュウの肩を揺らす。シュウはフリーズしたままだ。その光景にシュテルは満足そうに一度笑つと、眠りへと落ちていった。

Side: Hero

シュテルから魔力をもらった翌日。管理局からは監視付きではあるが自由を許された。監視の担当になったのは、本人からの申し出から高町なのはだ。彼女が海鳴市にいる間は、彼女が自分たちのことを報告することになる。やがて管理局に正式に入局した後は、また別の誰かが監視に来るのだろう。

だがシュウにとって、そんなことはどうでもいいことだった。これからもシュテルたちと一緒にいられる、それがとても素晴らしい。

そしてシュウは、引っ越しをした。諸々の費用を負担したのは両親だ。一緒に生活するつもりはないとはっきりと言つと、これぐらいはさせてほしいと引っ越しすることになった。そして引っ越した先は、

「おっじゃましますー」

お隣さんからの客人の、レヴィの声が部屋に響く。

シュウが引っ越してきたのは、シュテルたちの隣の部屋だ。ただ貧乏性が染みついてしまったせいか、広すぎるこのマンションはシュウには合わず、リビングとキッチン以外は扉すら開けていない。

「お邪魔します」

シュテルがリビングへと入ってくる。シュウは顔を真っ赤にして

うつむいてしまおうが、シュテルはいたっていつも通りだ。この間のやり取りを覚えていないのか、それとも好きの意味を友人として取ったのか、シュウには分からない。怖くて聞くこともできず、そのままになっている。

「何もないな。家具も買つべきだと思うが」

ディアーチェの言葉にシュウは苦笑。現在、リビングは前の部屋の家具をそのまま移してきただけの状態だ。テレビすらもないので、かなり広々としている。

「でもこれはこれでいいと思いますよ」

ユーリの明るい声。同じ構造だろうに、珍しそうに周囲をきよるきよると見回している。

「ではシュウ。手を」

唐突なシュテルの言葉。シュウは顔を赤くしながらも手を差し出し、シュテルがその手を優しく握る。暖かな魔力がシュウを満たしてくれる。やがてシュテルが手を離す。

「ありがとう、シュテル」

「いえ。この程度なら」

シュウは、お茶を入れてくるねとキッチンへ向かう。その背にシュテルの小さな言葉。

「さすがに少し照れますね……」

え、とシュウが振り返るが、シュテルはいつも通りの無表情だ。シュウが首を傾げると、何でもありませんよと首を振った。

「これからよろしくお願いします、シュウ」

「あ、うん……。」「ちら」そよろしく、シュテル」

笑顔と談笑が溢れる部屋に、今日も朝焼けの光が降り注ぐ。

その光を受ける者は、幸せそうな笑顔を浮かべていた。

第一話 殲滅者

終わりのない人の夢。

それは人に活力を与えるもの。

人ならざる闇の夢は、少女に何を与えるのだろう。

『殲滅者』

自分は、夢を見ているのだろうか。

思わずシユウはそんなことを思ってしまった。

本屋から家への帰宅途中、近道をしようと思った裏道。

そこに、一人の少女が横たわって苦しそうに喘いでいた。

茶色のショートヘアに、黒衣をまとった少女。

顔は、少年の友人、高町なのはと通り二つ。

「……………なのは？」

シユウは無意識に携帯電話を取り出すと、自然となのはに電話をかけていた。

数回のコールの後、

『はい、なのはです』

なのはが電話に出た。

「あ、なのは……………？ 今、どこにいるの？」

『え？ はやてちゃんの家にいるよ』

「……………側に誰がいる？」

『シユウー、聞こえるか？』

答えの代わりに、ヴィータの声が返ってきた。

シユウは苦笑して、聞こえてるよと返事をする。

「じゅめんね、何でもないんだ。切るね」

『え？ ちょっと待って……………』

呼び止められたが、それを無視して電話を切った。

なのはははやての家に行った。

では、この少女は誰だろう。

「えっと……。生きてる？」

恐る恐る近付いて、少女の肩を揺する。

少女の目がわずかに開かれた。

「じい、は……？」

少女の口から漏れた声は、弱々しく震えていた。

「海鳴市。詳しい場所は……ちょっと説明できないかな」

「……そっ、ですか」

少女が再び目を閉じようとする。

それに気づいて、シュウは慌てて制止した。

「ちょ、ちょっと待ってー！ 君は誰!？」

「……私は……」

何か答えようとしたが、途端に苦しそうにうめいた。

シュウはわずかな逡巡の後、少女の体を背負った。

「なに、を……？」

「見捨てるわけにもいかないからね。病院もまずそっだし……」

少女の手元を一瞥する。

なのはと同じ、だが色の違う杖がしっかりと握られていた。

「とりあえず、僕の家に行こう。そこで休むといいよ」

少女の返答はない。

それを都合の良いように解釈し、シュウは自宅への道を急いでい

く。

「物好きな、方ですね……」

とても弱々しい声で、そんな言葉が紡がれた。

自宅にたどり着いてすぐ、シュウは部屋に布団を敷いた。

少女をそこに寝かせ、額に手を触れる。

驚くほど熱かった。

シュウは小さな流し台へと行き、タオルを冷たい水で冷やす。

しっかりと絞って、少女の額に載せてあげた。

「ん……」

先ほどまで苦悶の表情だったが、幾分か和らいだようだ。それを見て胸を撫で下ろし、シユウはその場にあぐらをかいて座った。

少女の静かな寝息をのんびりと聞きながら。

シユウはいつの間にか、眠ってしまっていた。

目が覚めた時、日はとつぷりと沈んでいた。

少女は今も静かな寝息を立てている。

シユウは新しいタオルを取り出すと、再び冷水でぬらして絞った。

それを少女の額のタオルと交換して、

「……め」

少女の瞳と目が合った。

澄んだきれいな青色をしていた。

「えっと……。おはよう」

シユウがどこかぎこちなくそう言つと、

「……おはようございます」

少女もしっかりとした声で返事を返した。

「ここはどこですか？」

「僕の家。路地裏で倒れてたんだけど、覚えてない？」

「……いえ、覚えていません」

少女は一瞬だけ目を閉じると、そつと体を起こした。

頭痛がするのかわずかに顔を曇らせるが、すぐにシユウへと視線を

向けた。

「ありがとうございます」

そつ言つて、頭を下げる少女。

それを見て、シユウは激しく狼狽した。

「いや、えっと……！ 当然のことと言つか何と言つか……！」

「っ、お聞きしてよろしいですか？」

「あ、はい…… ぎんぎん」

「私は、なぜここにいるのでしょうか」

シユウの表情が怪訝そつに歪んだ。

対する少女は、わずかに首を傾げている。

「えっと……。覚えてない？」

「……。すみません、私の質問が悪かったですね」

少女は言葉を探すように顔を伏せた。

急かすことはせず、じっと少女の言葉を待つ。

やがて、少女が顔を上げた。

「少し前の会話から察するに、貴方は魔法のことを御存知なのですね？」

「ああ、うん。知ってるよ」

「では、高町なのはという方は御存知ですか？」

「……うん、知ってる」

「では……。闇の書のこととは？」

シユウはわずかに顔を曇らせた。

聞いてはいるが、そこまで詳しいわけではない。

そう説明すると、少女は十分ですとうなずいた。

「私は、闇の書の残滓です」

「へ……。？」

少女が説明を続けていく。シユウはそれを自分なりに解釈していった。

闇の書の防衛プログラムが破壊された後、その細かい残滓が残された。

それはやがて集まっていき、魔力を集め始める。

そうして生まれた闇の欠片が、関わった人間の記憶を写し、様々な形を取った。

闇の書の闇を再生させてしまう闇の欠片。

それらは少し前に、管理局の魔導士に全て処理されたそうだ。

「そんなことがあったんだ。全然知らなかったな……」

「どのような関係かは存じませんが、必要ないと判断されたのでしょ
う」

闇の欠片の中で、独自の自我を持ち、目的を持っていた存在がいた。
マテリアルと呼ばれる存在。

それらも、他の欠片と同様に処理された。

「……そのマテリアルも、誰かの姿を投影していたの？」

「はっ」

「……じゃあ、もしかして……」

少女の顔を見ると、一度だけ小さくうなずいた。

「私とその、マテリアルの一人です。星光の殲滅者と呼ばれていました」

「………………。じゃあ、管理局の、敵？」

「そうなりますね」

うなずく少女は無表情で、何を考えているのかは読み取れない。

シユウは腕を組み、じっと考え込んだ。

これは、みんなに伝えた方がいいのかな。

「お任せします」

「えっ？」

不意にかけられた言葉に、シユウは驚いて顔を上げた。

「私を通報するかどうかで悩んでいるのでしょっ。」

「自由にしてください。」

私自身、なぜ今もこうして存在しているのか分からないのです。

貴方に助けられたのですし、貴方にお任せします」

少女の言葉に、シユウはため息をついた。

「っ言われると、正直管理局には言いづらい。」

「どうまで記憶があるの？」

「……………オリジナルに敗れるまで、ですね」

「どうしては、なのはと戦ったのか……………」

この対応次第で、管理局との関係が悪くなるような気がする。

だが、この少女を見捨てる気にもなれなかった。

以前の、ひとりぼっちだった時の自分の境遇と重なっているのだろうか。

「どうして、なのはと戦ったの？」

「私の中から、声がしていました。全てを壊せと……………」

それを止めるために、なのはは「の少女と戦ったのだらっ。」

自分と同じ姿の、「この少女と。」

「今も……そんな想いがあるっ。」

「……なぜでしょうね。もう、何かをしたいとは思わなくなっています」

「そっか……」

少女の言を信じるなら、危険性はないだろう。

だが、それを言っても、他と同じように処理されてしまう気がする。

「……君は、消えたいと思ってるっ。」

「……分かりません。自分がどう思っているのかも……」

少女はうつむいて、黙り込んだ。

どこか困惑しているような表情。

今にも消えてしまいそうなほど、儚げに見える。

その様子を見て、シュウは心を決めた。

「じゃあ、どうしたいか決まるまで、「ここにいる」といいます」

「え……？」

「僕は管理局に通報したりしない。「ここ」で休んでいくといいよ」

ただし、と前置きして続ける。

「勝手に外に出歩かないでね。」

管理局の人達に見つかったらやっかいだから

それだけ言い終えると、シュウはよいしょと立ち上がった。

「何か作るね。まあゆっくりしてて」

そっ言って流し台へと歩いていく。

少女はしばらく呆けたようにその後ろ姿を眺めていたが、

「ありがとうございます」

そっ言って、頭を下げた。

第二話 道

本音を言えば、のんびりと暮らしていきたく思っている。
でも、なぜだろう。
君を見ていたら、別にいいかと思えるんだ。

『道』

「これ、買ってきたよ」

そう言っつて、シユウは目の前に座る少女に大きな袋を渡した。

目の前の少女、星光の殲滅者と呼ばれているらしい少女は、それを
受け取っつて首を傾げた。

「これは、何ですか？」

「服。さすがにそのままじゃまずいでしょ？」

少女の衣服は、黒いバリアジャケットのままだった。

このまま出歩かれると、管理局に見つけてくださいと言っているよ
うなものだ。

少女は得心したようにうなずき、袋の中をのぞき込んだ。

「女の子が着るような服が分からないから、適当に選んできたんだけ
ど……」

中に入っていたのは、白いシャツと黒を基調としたパーカー、それ
に黒色のスカートだった。

シユウは何かを言い訳するように、言葉を探しながら言い続ける。

「その、僕自身あまりファッションとか気にしたことなくて、それで、
えっと……」

言いながら少女の方を見ると、シユウを見つめる少女の目と目が
合った。

少女は無表情のまま、小さく頭を下げる。

「ありがとうございます」

少女にとっつても、最近生まれたばかりなのだからファッションなど

知るはずもなく。

それ故に単純に買ってきてもらったことに対するお礼だと分かっているのだが、

その言葉でシュウの気持ちは少し軽くなっていた。

「ずっと家についても仕方ないだろうし、着替えたら外に行ってみよう」

「はい」

素直にうなずく少女。

そしておもむろに服を脱ぎ始めた。

「なああああ!?!」

慌てて首をそらし、玄関の方へと視線を向ける。

少女が首を傾げた気配が伝わってきたが、シュウは何も言えなかった。

恥ずかしいとかそういうのは、ないのかな……。

なのはの記憶が少しあるようだが、感情は伴っていないらしい。

シュウは真っ赤になりながら、少女が着替え終わるのを待った。

しばらくして衣擦れの音が途切れたので振り返ってみると、

シュウが買ってきた服を着た少女が自分の姿を不思議そうに見ていた。

「えっと……。それじゃあ、ちょっと外に行こうか」

「はい」

少女はシュウの方へと顔を向け、小さくうなずいた。

特に目的地などはないので、シュウはとりあえずいつもの本屋へ行ってみることにした。

少女を連れて、本屋までの道を歩いていく。

少女は民家やコンビニ、公園などを見かけるたびに、興味深そうに視線を向けていた。

「どうしたの?」

「いえ、知識としてはありますが、実際に見たことはないのです……」

そこで言葉が途切れた。

見ると、公園でサッカーをしている子供達へと視線を向けている。

その横顔はどこか寂しそうに見えた。

だが、シユウに見られていることに気づくと、すぐにいつもの無表情に戻ってしまった。

「君にも友達はいたの？」

「友達……ではなく、仲間はいました。」

今はもう、消えてしまっているでしようが、
わずかに少女の表情がかけら。

何を聞いているんだ、僕は。

仲間がいたとしても、すでに処理されているだろうことは容易に想像がつく。

それなのに無神経なことを聞いてしまった。

「しゅん……」

「……なぜ謝るのですっ？」

対する少女は、小さく首を傾げているだけだった。

「いや、気にしないで……。」

ところで、君のことは何て呼べばいいかな？」

「お好きなように」

「……それが困るんだけどね……」

少女に名前がないことは分かっているが、それだと何と呼べばいいのか困る。

星光の殲滅者と毎回呼ぶわけにもいかない。

本屋へと歩きだしながら、シユウは手をあぐに当てて考えていた。

その後ろを、少女は黙ってついていく。

「……本当に何でもいいの？」

「はい。構いません」

「……じゃあ、星光って呼ぶね」

シユウがそう提案して振り返ると、少女は相変わらずの無表情でシユウを見ていた。

小さく吐息し、言う。

「ズンズン」

「うわー！　なんか冷たいよ！　すい〜く〜」

その後も何かいい案はないかと考え続けていたが、結局思い浮かぶことはなかった。

「……ネーミングセンス皆無で、ごめん」

それを聞いた少女の顔は、どこか苦笑めいたものを浮かべていた。

本屋で軽く立ち読みをして、店員に挨拶をして店を出る。

立ち読みの間、少女もシュウの隣で適当な本を選んで読んでいた。

シュウが驚くほど集中して読んでいて、シュウの声にもほとんど反応しないほどだった。

「本、好きなの？」

気になってたずねてみる。

「嫌いではないですね。……買っていたら、ありがとうございます」

少女の手には、本屋の紙袋がある。

シュウが店を出る際に買ったもので、少女がずっと立ち読みをしていた本だ。

せっかく興味のある本があったのにこのまま帰るというのも悪い気がしたので、

遠慮する少女を無視して購入した。

現在二人が歩いているのは、近くの公園の道だ。

道の左右は木々が生い茂り、側には小さな池もある。

シュウのお気に入りの公園だった。

「きれいな場所ですね」

「そう？ そう言ってもらえると、嬉しいかな」

少し照れくさそうに頬をかく。

ふと前方を見ると、アイスクリーム屋の屋台あった。

まだ肌寒い季節だというのに、買う人はいるのだろうか。

少女がその屋台を指差して聞く。

「あれは何ですか？」

「アイスクリーム屋。アイスクリームは……知ってる？」

「いえ……。知りません」

そっか、とシュウはうなずくと、少女をその場で待たせ屋台へと走っていった。

少女が怪訝そうな表情で待つこと数分。

アイスを二つ持ったシュウが、小走りで戻ってきた。

「はい」

「え……？ いいのですか？」

「うん」

シュウからアイスを受け取り、しばらくそれを眺めていた。

シュウがアイスを口に含むのを見て、少女も同じように口に含む。

その冷たさにわずかに驚き、その甘さに頬がゆるんだ。

「おいしい？」

シュウが笑顔で聞いて、少女が一度だけうなずく。

「はい。とてもおいしいです」

「そっか。それは良かった」

「でも……。この季節に食べるものではありませんね」

「……まあ、そうだね」

シュウは苦笑して歩きます。

アイスを頬張りながら、少女もその後ろを歩いていった。

公園の道を、のんびりとだが黙々と歩く。

その間、少女はずっと少年の後ろ姿を見つめていた。

なぜ、この少年は私を助けてくれるのでしょうか。

少年に何かメリットがあるとは思えない。

最初、このまま管理局に引き渡されるかとも思ったが、どっちらそれれもなさそうだった。

ならば、なぜ自分を助けてくれるのだろうか。

「……………どうしてですか？」

「気づけば、口に出していた。」

「へ？ 何が？」

「私を助けても、貴方にいいことなんてないでしょ？」

それなのに、なぜ私を助けてくれるのですか？」

その問いを聞いて、少年は天を仰いだ。

言おうか言つまいか悩むように、その体勢のままうなっている。やがて、どこか照れた笑みを浮かべながら少女を見た。

「僕と似ているような気がして」

「似ている？ 私が、貴方に？」

「うん、そう」

言つて、シュウは歩き始める。

少女はその後ろ姿を追い、少年の言葉の続きを待つ。

「僕は、少し前まで一人だった。」

悩みをうち明けられるような友達もいなくて、ずっと孤独だと思つていたんだ」

まっすぐな道を二人は歩く。

木々の間の道を、歩き続ける。

「でも、いろんな人達と出会つて、いろんなことがあつて……。」

今は、僕は一人じゃない。いろんな友達がいて、助け合うことができる」

シュウが振り返つた。屈託のない、満面の笑顔。

「みんなが僕を助けてくれたように、僕も君を助けたいんだ。」

一人で抱え込むより、二人で助け合った方がいいと思わない？」

そつと、シュウは手を差し伸べた。

目の前に出された手に、少女はわずかに戸惑つた。

この手を取つていいのだろうか。

この少年に迷惑をかけてしまうことになるのに。

「ねえ、星光」

呼ばれ、少女は顔を上げた。

優しく微笑む少年の顔を見た。

「僕と、友達になろうよ」

その言葉で、この少年がどんな人か、分かつたような気がした。

きつと、自分が拒んでも、この少年は自分に関わろうつとしてくるだろつ。

だから少女は、薄く微笑んだ。

生まれて初めて、笑顔を浮かべた。

その自覚もないままにそっと握った少年の手は、とても温かかった。

「……はい。よろしくお願いします」

それを聞いた少年の表情は、どこか嬉しそうだった。

再び道を歩きだす。太陽に照らされた明るい道を。

だが。

少女は知っている。

自分の道は、決して明るくはない。

自分は人間でないどころか、闇の書の闇を復活させようとしていた存在だ。

今後、その意志がよみがえらないとも限らない。

それでも……。

今は、この少年の側にいたい。

この温もりに触れていたい。

シユウの手を握りながら。

星光の殲滅者は、そう強く願っていた。

第二話 意思

何事もなく平穩に。

そんなことは不可能だと分かっている。

ただ、それでも、願うだけなら……。

『意志』

暗い夢の中に少女はいた。

暗黒に閉ざされ、右も左も上も下も、一切の判別がつかない。

分かるのは、自分がそこにいるという感覚だけ。

ただ、不思議な声だけは聞こえ続けていた。

少女に命令する声。

受け入れたくはない、声。

壊せ。

たった三つの音から成るその言葉。

だがその音からは、声の暗い意志が伝わってくる。

壊せ。

他に言うことはないのか、と思うが、少女にはそれだけで十分だった。

故に少女は、ゆっくりと手を上げる。

いつの間にか持っていた杖で。

魔法の光を放つ。

その光の先にいるのは……。

「……………」

黒衣の少女は、目を開けるなり跳び起きた。

荒い息をつき、状況確認のために周囲に視線を飛ばす。

見慣れたシュウの部屋と、少し離れた位置で眠るシュウの姿。

そして自分が先ほどまで被っていた布団を見て、安堵のため息をついた。

ただの夢……。

シュウを起こさないように立ち上がり、流し台へと向かう。そっと蛇口をひねり、冷たい水をコップに注いだ。

ゆっくりと時間をかけて飲み干し、大きくため息をつく。

「……星光？」

呼ばれて、少女は振り返った。

シュウが半身を起こし、まぶたをこすりながら少女を見ている。どこか心配そうな目だった。

「どうかしたの？」

「いえ……。何でもありません」

そう答えたが、シュウはまだ何かを言いたげに少女を見ていた。

だが、言葉が見つからなかったのだらう、やがて首を振った。

「何かあったら、言ってみてね？」

「はい」

しっかりとうなずいてみせると、シュウは苦笑を浮かべた。

再び布団の中へともぐり込んでいく。

少女はその様子を静かに眺めていたが、ふと自分の布団の側へと視線を向けた。

少女の黒い杖が、そこにある。

それを見て、先ほどの夢を思い出してしまった。

あれは……間違いなく……。

目を閉じ、夢の光景を思い出す。

放った光の先にいたのは、シュウ。

その表情は恐怖に怯えることもなく、ただ悲しげに少女を見つめていた。

もしも本当に同じことが起これば、この少年は同じ反応をするのだろうか。

……何を考えているのでしょうかね。

自分の考えに自嘲し、もう一度眠るために布団に入ろうとする。

そこで服がじつとりと湿っていることに気づいて苦笑し、いつの間にか杖を握っていた自分に対して絶句した。

「……………」
少女は杖を流し台の方へと放り投げると、布団を頭まで被った。そのまま強く目をつむり、結局朝日が昇るまで、眠ることはできなかった。

「顔色悪いけど、大丈夫？」

心配そうなシュウの声に、少女は顔を上げた。

朝日に照らされた部屋にちゃぶ台が一つ。

それを挟むように二人は座っていた。

ちゃぶ台には湯気の立つご飯とみそ汁。

先ほどまで、少女がじつと視線を落としていたものだ。

「はい。大丈夫です」

うなずき、みそ汁のお椀を手取る。

だが、どうしても食べる気にはなれず、そこで動作が止まってしま
う。

そのまま小さくため息をつくとき、シュウの困惑した表情が視界に入
った。

「何かあったら、言ってね…………？」

「はい。分かっています」

言えるわけではない。

シュウを殺してしまう夢を見たなどと。

言えば、どんな顔をされるのか…………。想像もしたくない。

「三日前からその調子だよ？ 何かあるんじゃない？」

「……………」

少女は何も言えず、うつむいて黙り込んだ。

シュウの世話になり始めてから、もう一週間が過ぎている。

この夢は、三日前から見始めたものだ。

最初は声が聞こえるだけで、シュウが夢に出てきたのは昨夜が初
め
て
だ
っ
た
が。

「大丈夫です。……大丈夫、です」

うつむいたまま、自分に言い聞かせるように言う。

シュウはその様子を、何かを探るようにじっと見ていたが、やがて小さくため息をついた。

「分かった」

空になった食器を持ってシュウが立ち上がる。

流し台へと歩いていくシュウの背中へは、どこか寂しげだった。

それを見ているだけで、少女は胸が締め付けられるようだった。

日課となっているシュウとの散歩の間も、少女はうつむいて黙り込んでいた。

少女は黒い衣服に、これも真つ黒なキャップを被っている。

先日、通りすがりの人になのはと間違えられたためだ。

あの時は適当にごまかして逃げるようにしてその場を離れたが、

あの人はなのは本人と会った時に何を言うだろうか。

黒いキャップは同じ事が起こらないようにするために、シュウが買ってきたものだった。

以来、外を出歩く時は必ずこのキャップを被っている。

「とっころでさ、そろそろ何をしたいか決まった？」

シュウに声をかけられ、少女ははっと我に返った。

気づけば公園の池まで来ていた。

池の側のいすにシュウは腰かけ、その隣を軽く叩く。

座って、ということらしい。

わずかに躊躇したが、シュウの隣に腰を下ろした。

「で、で、どうなの？」

「……まだ、決まっていますせん」

というより、ほとんど考えていなかった。

最初はそれなりに考えていたが、いつの間にか考えることを忘れていた。

思っていた以上に、シュウと共に過ごす時間が心地よかったから。

「そろそろ決めた方がいいでしょっね」

「のんびりでいいよ。急いで仕事をし損じる……だっけ？」

シュウが笑顔で言って、少女が申し訳なさそうに顔を伏せる。

あまり迷惑をかけたくないと思っっているので、長居するつもりはなかった。

だが、いつの間にかもう一週間だ。そろそろ考えなければならぬ。

「……ちょっと曇ってきてるね」

シュウの言葉で天を仰ぐと、どんよりとした雲が空を支配しようとしていた。

いつ雨が降り出してもおかしくはない。

「帰ろっか」

シュウがそう提案するが、どうしても帰る気が起きなかった。

返事もせずにつつむくと、かすかに苦笑する気配が伝わってきた。

隣にまたシュウが座り、それから二人とも無言。

少女は目を閉じ、思索の闇へと潜った。

微笑むシュウの胸からは血が流れ、

杖を持つ自分は青ざめた顔で硬直し、

ただ無情に時だけが流れていく。

そんな、夢。

「……」

少女は勢いよく目を開いた。

いつの間に眠ったのだろう、闇色の雲は空を完全に覆い尽くしている。

ただ、相変わらず隣にはシュウがいて、そして新たな客もいた。

「……」

「……」

膝の上に、子猫が座っていた。

甘えた鳴き声で少女にすり寄ってくる。

シュウを見れば、笑いをかみ殺しているように肩を震わせていた。

「……私は、どれぐらいの間眠っていましたか？」

「二十分ほどかな。さっきは小鳥が頭に乗ってたよ、全く気づかなかった。」

そのことに少なくない衝撃を覚え、少し反省する。

気を緩めすぎですね。

自分一人だけならまだしも、今はシュウがいる。

管理局の人間に見られれば、シュウの立ち位置も危つくなるだろう。

「……」

膝の上の子猫が再び甘え声を出した。

少女は視線を下げると、相変わらざる無表情ながらも、そっと子猫の喉元に手を触れる。

優しく撫でてやると、気持ちよさそうに「コロコロ」と鳴いた。

「動物に好かれてるね」

「……私のことなんて、知りもしないでしょうから」

「そんなことないと思うけどな」

「貴方が私の何を知っているんですか」

思わず硬い声を出してしまった。

シュウは少し驚いているようで、少女の方をまじまじと見つめている。

少女は何も言わず、立ち上がって池の方へと歩いた。

その時に猫が転げ落ちたが、気にも留めない。

ただ、子猫が寂しそうに一鳴きした時は、少し胸が痛んだ。

「……どうしたの？」

池の側で悄然とうつむく少女に、シュウがそっと近寄ってくる。

シュウを一瞥し、

「夢を、見るんです」

そっ切り出した。

そして、今までの夢のことを全て話した。

夢の声、少女の魔法、その先にいる少年……。

話している間に雨が降り始め、二人を容赦なく叩きつける。

だが、それでも少女は話し続けた。

「私は、結局は、闇の書の残滓なんですよ……」

消え入りそうな声でそう締めくくり、目を閉じた。

これで、全てを話した。

どんな罵倒の言葉でも甘んじて受けよう。

そう思っていた。

だが、シュウから出てきた言葉は、予想とは違っていた。

「……くだらない」

「え……？」

「所詮は夢じゃないか。くだらないよ」

少年は吐き捨てるように言った。そして続ける。

「君は確かに闇の書の残滓なのかもしれない。

でも、だからなに？ 君は君じゃないか。

僕が見てきた君は、ちょっと無愛想だけど、とても優しい子だよ。

側で見えてきた僕が、保証する」

シュウの言葉が、胸に温かく広がった。

少女はそっと胸に手を置き、その温もりに身を浸す。

しかし、すぐに首を振ってそれを拒絶した。

「それでも私は、本質的には闇です」

「違うね」

シュウが即答。

シュウの視線は、少女の足下に向いていた。

少女もその視線を追って、

「……」

いつの間にか足下に来ていた子猫が、甘えた鳴き声で少女の足にすり寄ってきた。

その子猫をそっと抱きかかえると、再び小さく一鳴きした。

「知ってる？ 動物はね、人の本質を見るんだよ」

シュウに視線を戻すと、優しい微笑を浮かべていた。

「動物達は、君の本質を見て、君に懐いているんだ」

「……」

少女はしばらく子猫を見つめ、子猫も少女を見つめてくる。
少女は嘆息すると、子猫を地面に下ろした。

子猫が名残惜しそうに少女を見つめてくるが、少女はすでに子猫を意識から閉め出していた。

それを感じ取ったのだろう、子猫もわがママを言わずに、木々の間へと姿を消した。

「シユウ……」

子猫を見ていたシユウが少女を見る。

少女は相変わらずの無表情で、しかし悲しげな声で、

「私は、正夢にならないかと不安なんです。

ですから、シユウ。私はもう一人で……」

直後。

少女は言葉を発せなくなっていた。

自分の唇が、少年の唇にふさがれていたから。

再び声を出せるようになって、茫然自失の体となっていた。

「僕はね」

顔を赤くしたシユウが言う。

「君のことが好きだ。だから側にいてほしい」

それだけ言うと、池の方へと視線をやってしまった。

その様子を見て、少女はやっと思考を再開する。

しばらくシユウを見つめ、そして……。

わずかに優しく微笑み、

薄く頬を朱に染めて、

少女は一滴の涙を流した。

「物好きな方ですね」

「……ほっといて」

照れ隠しのように、少年は空を見て言った。

いつの間にか雨はやみ、雲の切れ間から太陽がのぞいていた。

第四話 残滓

少女の意志に関わらず、
運命の齒車は回り続ける。
その行く先は光か闇か。

『残滓』

「こんにちは」

「……………」

それはあまりに突然だった。

日課となった立ち読みの最中、シュウに話しかけてきたのは、なのはだ。

どこか照れたような笑顔で、シュウのことを見つめている。

その笑顔を受け止めたシュウの心臓が跳ね馬のように暴れ出す。

さっと視線を動かし、連れの姿を探した。

通路の最奥、本棚の影に黒衣の少女の姿があった。

少女もなのはに気づいたのだろう、本を持ったまま啞然としてい
る。

だが、シュウと視線が合うとすぐに平静を取り戻し、キャップを目
深に被った。

そのまま本棚の影へと消えていく。

とりあえず安堵のため息をつく、シュウはなのはへと向き直っ
た。

「じ、こんにちは、なのは」

「……………シュウ君、どうでした？」

「え、いやー！ 何でもないよー！」

我ながら挙動不審すぎるとは思いが、なのはに言うわけにもいかな
い。

あるいはなのはなら大丈夫かとも思うが、少しでも可能性があるなら潰しておきたい。

だが、そんなシュウの思惑は、無駄に終わった。悪い意味で、それもあまりに突然だった。

「私と、会わなかった?」

何言ってるの? どういうこと? そう返すべきだった。

何も知らなければ、そんな反応になったはずだ。

だが、シュウは言葉に詰まってしまった。

なのはに問われ、頭が真っ白になってしまった。

それが明確な答えになっているというのに。

「やっぱり……。近所の人が、私と歩いてるシュウ君を見かけたって言ってたから」

「いや、それはその……」

言い訳を続けようとしたシュウだったが、それも続かなかった。

黒衣の少女が、静かになのはの真後ろに立ち、

ゆっくりと人差し指をなのはの首に突きつけた。

「どなたかをお探ですか?」

「……やっぱり、いたんだね」

少女の声に、なのは苦笑。

シュウの目の前で、二人は完全に沈黙したまま突っ立っていた。

どうするべきかと悩んでみるが、シュウにできることはない。

二人の様子を固唾を呑んで見守っていると、やがて少女が指を下ろした。

「お久しぶりですね、高町なのは。私のベースとなった方」

「うん、久しぶり、だね。喜んで良いのかは分からないけど」

なのはが笑顔で振り返る。

黒衣の少女の表情は、冷たい仮面に覆われていた。

公園の池の側で、シュウは立ち尽くしていた。

目の前には、向かい合うようになのはと黒衣の少女が立っている。

あれからとりあえず場所を移動してみたが、状況はいいとは言えな

い。

むしろ最悪とも言える。

なのはに見つかっているのなら、管理局にも知られている可能性が高い。

「私のことは、もう管理局に報告済みですか？」

少女も気になっていたのでさう、開口一番そう聞いた。

なのははその問いに、小さく首を振る。

「まだ、言ってないよ。ちゃんと確認したわけでもなかったし……」

「念話などは？」

「してない。大丈夫、まだ私以外は、誰も知らないよ」

それを聞いて、シユウは大きく息を吐いた。

だが少女の方はその答えでは満足していないらしい。

今まで以上の警戒心をあらわにして、なのはを睨みつけている。

「なぜ、報告しないんですか？ あなたは管理局側の人間でしょう」

「それは……その……」

なのはは言葉を探すように、少女から視線をそらした。

指をあぐに当てて、しばらく考える。

「今も、最初に会った時みたいな破壊衝動というか……。そういうの

はあるの？」

「いえ……。それは、ありませんが……」

「だったら、いいの」

嬉しそうな満面の笑顔を浮かべるなのは。

思わずどきりとしてしまった。

「クロノ君やリンディさんには黙ってるって約束する。

だから……。友達に、なるうよ」

そう言って、そつと手を差し出した。

「……いいのですか？」

「うん」

「……」

少女はゆっくりとなのはに近づき、その手を握った。

満面の笑顔のなのはと、相変わらずの無表情のなのはと同じ顔。

シユウはその様子を見つめ、嬉しそうに笑っていた。

「よかったね」

自宅に帰ってきて、すぐにそう言った。

スーパリーの袋を二つ持ったまま、少女は意味が分からないようにできよんとしていた。

それからすぐに言葉の意味を察したらしい。

帰り際に寄ったスーパリーの袋を床に置いて、少女は一度だけうなずいた。

「はい。まだ管理局には伝わっていないようで、よかったです」

「いや、そうじゃなくて……」

シユウが苦笑すると、少女は怪訝そうに眉をひそめた。

どうやら本当に分かっていないらしい。

「なのはと仲直りできて、だよ」

「……………」

少女の表情が、笑顔になった。

だがそれは本当に一瞬で、次の瞬間にはいつもの無表情。見間違えたのかと思ってしまっただ。

「よかったのかは分かりませんが……」

また敵対することにならなくてよかったとは思いますが

「そっか」

それ以上は何も言わず、シユウは静かに微笑んだ。

管理局とも、なのはと同じように和解できたらしいのに。

どうにかすれば可能なのではないだろうか。

そんな淡い期待を胸に抱いた。

だが、それは結局は儚い願望だった。

なのはと出会って一週間後。

夕暮れの淡い光が室内を照らしていた。

シユウと少女は、自宅でのんびりと読書をしている。

ふと、少女が顔を上げた。

「……闇が……」

「<……?」

シュウも顔を上げ、今まで見せたことのない少女の表情を見て驚いた。

こめかみにしわを寄せ、険のある顔をしている。

不機嫌そう、というのではなく、何かに強く警戒しているようだ。

「シュウ……。最初に言っておきます」

少女がそつと立ち上がって杖を持った。

その仕草に思わずシュウの体が固くなる。

そんなシュウの反応も今の少女にとってはどうでもいいようで、言葉が続ける。

「なのはが口外したわけではありません」

「え？ それってどういう……」

「この街に、闇の断片が再び現れ始めました。」

今はまだ意志を持たない小さなものですが、管理局はその掃討を始めています。

今回こそ漏れのないように徹底的に索敵して……」

ノブを回す小さな音がして、シュウは驚いて跳び上がった。

シュウはとまどいの目で、少女は睨みつけるように、ドアを見る。

ゆっくりと開かれていく。

そこにいたのは、クロノ・ハラオウンだった。

「故に、自然と見つかってしまいました」

淡々と、少女は締めくくった。

どこかで雷が鳴った。

そんな、気がした。

第五話 星光

太陽は朝を照らしだし、
月光は夜を照らし出し、
そして星は世界を彩る。

『星光』

アースラの一室。

何もない部屋に、六人の人間がいた。

静かに目を閉じ、何かを考えているリンディ。

その隣である人物にずっと警戒しているクロノ。

壁際で今にも泣きそうな表情のなのは。

その隣で心配半分、戸惑い半分のフェイト。

管理局のメンバーに対する敵意を隠そうともしていないシュウ。

そして、相変わらずの無表情で目を閉じる星光の殲滅者。

この部屋にシュウと黒衣の少女が連れられてきて十分。

その間、誰も一言も喋っていない。

重苦しい沈黙に包まれていた。

やがて、リンディが小さくため息をついて、口を開いた。

「シュウ君……。できれば、その子のことは教えておいてほしかったわね」

「どうしてですか？」

「その子のことは、知っているのかしら？」

シュウはちらりと少女の方へと視線をやった。

無表情の仮面からは何も読み取ることができない。

「聞いています。でも、もう星光には破壊の意志とかなくて……」

「残念ながら、そんなことは関係ないんだ」

クロノの声に、シュウが不愉快そうに眉をひそめた。

言い返そうとして、だが先にクロノが続ける。

「その子の存在に気づいた後になのはから話は聞いた。」

それから察するに、確かに破壊の意志などはないみたいだ」

「だったら……」

「問題はそこじゃないんだ。存在していることに問題があるんだよ」

「……はっ」

意味が分からずに、間の抜けた声を出してしまった。

存在していることが問題とはどういうことか。

それはつまり、消えるということなのか。

そう考えると怒りで思考が危うくなってきた。

拳を握りしめ、奥歯をかむ。

怒りに我を忘れそうになる。

だから、少女がどこか悲しげにシュウを見ていたことに、気づかなかった。

「今回発生した闇の欠片……」

唐突に少女が口を開いた。

シュウだけでなく、その場にいた全員が驚いたように少女を見る。

今まで無表情に黙り込んでいた少女が突然口を開けたのだから、当

然と言えば当然か。

全員の視線を受けた少女は、その一つ、リンディの視線をしっかりと受け止めていた。

「新しい闇の欠片が発生した地域の中心は、シュウの家ですね？」

「ええ……。もしかして、あなた……」

「これでも一応、マテリアルですから」

一度だけうなずき、少女はシュウへと視線を向けた。

表情は変わらずだが、その目はシュウのことを案じている。

少なくとも、シュウにはそう感じられた。

「シュウ。こんかいの闇の欠片ですが……。おそらく、原因は私です」

「え……？ いや、どうして……」

「私のちょっとした感情の変化……。いえ、それは関係ないかもしれませんがね。」

私から漏れ出ている少しの力が集まって、闇の欠片になっているん

です」

少女がため息をついて目を閉じた。

まるでシユウから視線をそらすかのように。

「私は……消えなければ、いけません」

「……………」

その言葉の意味を理解するのに、たつぷり十秒かかった。理解しても、その結果を想像するのにもまた十秒。

さらに混乱しそうになる思考を落ち着けるのに十秒。

その頃には、シユウの表情は顔面蒼白になっていた。

「そ、そんな……。消える必要なんか……………」

助けを求めるように周囲に視線を飛ばす。

なのはとフェイトはその視線から逃げるようにうつむき、リンディとクロノは小さく首を振っただけだった。

「……そん、な……………」

呆然とその場に立ち尽くすシユウ。

気がついた時には、振り返って走っていた。

部屋を出て、廊下を走り抜けていく。

自分でも何がしたいのかは、分からない。

逃げれば何かが変わる。そう、思ったのかもしれない。

「管理局の方々。お願いがあります」

シユウが走り去った部屋で、少女は抑揚のない声で言った。

「一週間だけ、時間をいただけませんか？」

「それは構わないけど……。一週間だけでいいの？」

「はい。それが、抑えられる限界です」

少女の言葉の意味が分からなかったようで、リンディはわずかに首を傾げた。

隣のクロノも眉をひそめていたが、やがて得心がいったように一度うなずいた。

「なるほど。今まで闇の欠片が発生しなかったのは、君が抑えていた

からか」

「はい。ただ、もうそれも限界のようです」

いつから闇を抑えていたのか、いつ自分が抑えていることに気がついたのか。

そういつたことを、少女は覚えていない。

だが、自分が抑えている感覚を持っていることだけは確かだった。今回闇の欠片が現れたのは、それが限界に近いという証だろう。

「今後も闇の欠片が発生するかもしれませんが……」。

一週間だけ、処理をお願いしてよろしいでしょうか？」

「ああ、分かった。引き受けよう」

「私も協力する！」

クロノと、そしてなのはの力強い言葉に、少女はわずかに微笑んだ。

悪くは、ないですね……。

シユウ以外の人に頼ることになるなど予想もできなかったが、悪くはないものだ。

「こちらでも、可能な限り解決策を模索してみるわね」

「はい。ありがとうございます」

少女はその場で一礼すると、静かに退室した。

池の側のベンチに座り、シユウは天を仰いでいた。

空は真っ黒な分厚い雲に覆われている。

その黒い雲は、まるで自分の心のようだ。

情けない。

そう思う。

本当なら自分は少女を支えないといけない立場だ。

それなのに、自分は逃げてしまった。

目の前の現実から、逃げてしまった。

「星光に……合わせる顔がないな……」

目を閉じ、黒衣の少女のことを想う。

逃げてしまった自分のことをどう思っているだろうか。

やはり落胆しているかもしれない。

「……消えてしまいたい」

ため息混じりに「じぶやくと」

「それは困りますね」

「……」

背後からの声に、シュウは勢いよく振り向いた。

そこにいたのは、いつもの無表情で立つ、思考にいた少女。

「貴方が消えてしまうと、私は少し寂しいです」

少女はそれだけ言うのと、シュウの方へと歩いてきた。

目を丸くして固まっているシュウの隣に、静かに腰を下ろす。

そこで小さく、ため息をついた。

「……突然走って行ってしまったので、驚きました」

「……「じゅん」」

「別に構いませんよ」

いつもの表情で素っ気なく答える少女。

いつもなら無表情の中のかな変化や声の調子などで何となく察することができる少女の気持ちが、今は全く分からなくなっている。

自分が動揺しているのか、それとも少女が隠しているのか。

今はそれすらも分からない。

「……情けないよね」

「そうですね。情けないです」

即答し、断言する少女。

シュウは申し訳なさを小さくなるばかりだ。

「落胆、した？」

「……していないと言えば、嘘になりますね」

「これにはわずかに躊躇ったのか、答えるのに少しだけ間があった。

「これから……どうなるの？」

「一週間だけ時間をもらいました。」

管理局側はその間に解決策を探してくれるそうです」

その答えに、シュウの気持ちは少しだけ軽くなった。

なぜだろうか、クロノ達なら見つけてくれるような気がする。

それに、まだあと一週間の時間がある。
だが……。

「もし……見つからなかったら？」
「……………」

その沈黙が、明確な答えだった。

シュウは目を伏せ、言葉を探すが見つからない。

少女も何も言わず、ただじっと座っていた。

ゆっくりと雲が流れていく。

黒い雲は途切れることなく続く。

どれほどの時間が経っただろうか。

流れる雲に、小さな切れ間ができた。

「……………星光」

「はい」

シュウが顔を上げると、少女はうつすらと微笑んでいた。

……………そう見えたが、気のせいだったのかいつもの表情に戻っている。

「一週間後、どうなるかは分からないけどさ……………」

「はい……………」

「少なくともそれまでは、一緒にいられるんだよね？」

しっかりとうなずく少女。それを見て、シュウは微笑んだ。

「じゃあ……………」

シュウは立ち上がると、少女に手を差し出した。

「家に帰ろう」

その言葉に少女がわずかに目を瞠る。

しばらく唾然としていたが、やがてどこか嬉しそうな笑顔を浮かべた。

それは気のせいでも何でもなく。

笑顔をシュウに向けていた。

「はい。帰りましょう、シュウ」

一週間。

幸福な時間ほど、時は早く流れていく。
気づけばもう明日。

それだけ今という時間が満たされていたということだろう。
そんなことを最後の夜に話すと、

照れたような笑顔を浮かべて同意してくれた。

「結局、管理局から連絡はなかったね……」

最後の朝。シュウは気落ちした声でそうつぶやいた。

少女の方は小さく首を振って、

「まだ分かりませんよ。行けば、何か解決策が見つかったりいるかもしれません」

まるで、自分に言い聞かせるような声だった。

何を言ってるんだ、僕は。

なぜ、わざわざ少女を不安にさせるようなことを言ったのか。

そんな自分に自己嫌悪し、心の中で叱咤する。

どんな結果になろうとも、最後までこの少女を支えよう。

そう、心に決めて。

アースラの、リンディ達が待つ部屋。

その部屋の空気にどこか重たいものを感じた。

それだけで、察することができた。

解決策はない、と。

部屋の扉を見つめたまま、シュウは開けられずにただ立ち尽くしていた。

少女も急かすことはせず、静かにうつむいているだけだ。

相変わらぬ無表情。

だが、今ではその無表情の中から感情を読み取ることができる。

今は……。

「シュウ、行きましょっ」

不意に少女が顔を上げた。

しっかりとシュウを見つめる瞳は、不思議な光をたたえていた。

「星光……。でも……」

「いいのです。いずれ……」うつなるとは分かっていた

寂しげな声音に、シュウは奥歯を噛みしめた。

自分では、どうすることもできない。

そんなことは分かっているはずなのに、自分の無力さに泣いてしま
いそうだ。

「……失礼します」

シュウは小さな声でそう言つと、ゆっくりと部屋の扉を開いた。

部屋の中にいたのは、五人。

机で手を組み、悲しげに微笑むリンディ。

その隣で静かに目を閉じているクロノ。

部屋の壁側で泣きそうな表情をしているのは。

そのなのはを心配そうに見るフェイト。

そして、目を伏せ表情を読み取ることができない、はやて。

はやてがいることに、背後の少女がわずかに息を呑む心配が伝
わってきた。

「星光……？」

「いえ……」

少女がはやてを見ていると、はやても顔を上げた。

しばらく無言で見つめ合っていたが、やがて少女が頭を下げた。

何も言わず、ただ静かに。

それを見たはやては、再び目を伏せただけだった。

「待っていたわ、星光さん」

リンディが笑顔を作るうとして、しかし作れずに諦めた。

「……お待たせして申し訳ありません」

「そういう意味じゃなかったんだけど……」

「十二時にお願ひします」

その言葉に、部屋にいる全員が思わず少女を見た。

少女はリンディの目をまっすぐに見つめている。

シュウは少女の瞳を盗み見て、強い光が宿っていることに微苦笑を
浮かべた。

「やっぱり……察しはついていたみたいね」

「これほど重たい空気なら、誰でも分かると思いますよ」

「それもそうね……。ごめんなさい」

そう言って、頭を下げた。

「できる限りのことはしてみただけど……。分からなかったわ」

「でしょっね……」

部屋に入る前から分かってはいたが、やはり改めて聞くとショックを隠しきれない。

もう、どうしようもないのか……。

ふと少女を見ると、同じように自分を見ている少女と目が合った。

その目を見ただけで、彼女が自分を気遣っているのだと分かる。

今も気を遣わせてしまっていることに、シユウは情けなさと悔しさで泣きそうになった。

「では十三時に、よろしくお願いします」

「ええ……。本当に、ごめんなさい」

「……………」

少女が初めて見せる表情を作った。

苦笑。

何を思い、何を伝えようとそんな表情をしたのか。

それを知ろうにも、その表情は一瞬で消えてしまい、もう知ることができない。

「場所も指定させていただいてよろしいですか？」

「ええ、それぐらいはもちろん」

その後に指定した場所を聞いて、シユウは無性に泣きたくなったのを何とか堪えた。

十三時までにはまだ時間がある。

その空いた時間を使って、シユウは少女と散歩することにした。

こつとして散歩をするのも、会話をするのもこれで最後。

そう思うと、今にも涙が溢れそうになる。

目的地があるわけでもなく、ただただ歩く。

シユウが何も言わないように、少女も一言も発しなかった。
少女は今、何を思っているのだろうか。

「シユウー」

そんなことを考えていると、背後からの声に跳び上がりそうなほど驚いた。

振り返り、声の主を確認する。

黒衣の少女も振り返り、そしてまた息を呑んだ。

はやてが、そこにいた。

「はやて？ どうかした？」

「あ、えっと……。ちょっと言いたいことがあって……」

そう言って、少女へと視線を向ける。

黒衣の少女は、ただ黙って見つめ返していた。

「……」「めんな」

「はっ」

思わず間抜け声を出してしまう少女。

その意表をつかれた呆けた顔は、少し新鮮だった。

「……何がですか？」

「あたしが……。あたしが闇の書を覚醒させてしまったから、こんな

「ジュン」……」

「……後悔しているのですか？」

「……ジュン、それはしてないけど……」

黒衣の少女は、どこか満足そうに微笑んだ。

一度だけつなずき、

「だったら、いいのです。」

闇の書……夜天の書が覚醒したからこそ、今の貴方がいて、今の私

がいます

「ジュン……。でも、もっとどうにかしたら、こんなことは……」

「選択の時は去りました」

少女が天を仰いだ。

気持ちのいい青空が広がる天空。

少女はまぶしそうに、そしてどこか悲しげに目を細めた。

「今は今の最善を尽くしましょう」

歌うようにそう言って、踵を返した。

シュウとはやてを置いて、すたすたと歩いていく。

「……うん。そやね……」

うつむいてつぶやくはやて。

シュウは逡巡した後、黒衣の背中を追った。

その後、二人はシュウの家へと一度戻り、昼食をとった。

食欲があるわけではない。

ただ、せめて最後まではいつも通りの生活を送りたいと思ったただけだ。

「シュウ」

少女の呼ぶ声。

シュウはお箸を動かすのを止め、顔を上げた。

「どっしたの？」

「……いえ、何でもありません」

少女は小さく首を振ると、食事を再開した。

十二時。

いつもの公園の、いつもの池の側。

二人で一番多く来た場所。

そこが、星光の殲滅者が指定した場所だった。

二人は特にすることもなかったので、自然と足がここに向いていた。

側のベンチに二人並んで腰を下ろし、流れていく雲を眺める。

あと一時間の後には隣には誰もいないなど、想像すらできない。

しかし、それは紛れもなく刻一刻と迫ってきている事実だ。

「ねえ、星光」

「何でしょつか？」

シュウは少女の顔を見ない。

少女もやはり、シュウの顔を見ない。

「逃げたいって言うてくれたら、ぼくは全力を尽くす」

「言いません。……分かっているのでしょうか？」

「うん……」

それきり、また黙ってしまふ。

そのまま流れていく時に身を任せ、

しかしシュウは少女の手を握り、離さなかった。

やがて、十三時になった。

いつの間にか周囲に人影はなくなっている。

何かしらの魔法でそうしたのだろうか。

星光はすつと立ち上がると、シュウの手を離れた。

「心残りは、ない？」

何もない場所からの声。

やがて目の前にリンディが現れた。

その背後には、杖を持ったなのはとフェイトがいる。

「はい、ありません」

少女が淀みなく答えると、なのはが泣きそうな表情になった。

そのなのはに向けて、少女がうなずく。

なのはは目を閉じると、うなずきを返した。

「始めましょう」

少女が迷わずにそう言う。

それは、自分の迷いを振り切るかのような。

なのはとフェイトが左右に移動して、杖を構える。

すると、青い魔法陣が大地に描かれた。

「では、シュウ」

少女が振り返る。

シュウをまっすぐと見つめ、シュウもその視線を受け止める。

止めることはしない。

いや、できない。

「お世話になりました」

少女は頭を下げると、その魔法陣の中に入っていった。

その中央で、もう一度振り返り、シュウを見る。
そして、目を閉じた。

消える……。

シュウはその光景を漠然と眺めながら、

……いやだ！

勢いよく立ち上がった。

驚いてなのはとフェイトがシュウを見て、黒衣の少女も顔を上げる。

シュウは魔法陣まで走っていき、

「だめだ！」

いつの間にいたのか、直前でクロノに倒された。

うつ伏せになりながらも、シュウは必死になって少女の手を伸ばす。

「星光……！ いやだ、消えないで……！」

涙を流し、訴える。

なのはとフェイトは顔を伏せ、静かに涙を落とした。

少女は、

「シュウ……」

悲しげに、微笑んでいた。

「今までありがとうございます。本当に、感謝しています」

「そんなのいいよ！ だから、まだ……！」

「いいえ、だめなんです」

少女はシュウの所まで歩くと、身をかがめた。

そしてその手に、何かを握らせる。

それは、小さな黒い石だった。

「私の欠片です。心配せずとも、それが闇の欠片を発生させることはありません」

「そんな、形見みたいに……」

「形見ですよ」

「こともなげにそんなことを言ってるのける。」

シュウが言葉に詰まっている間に、少女は再び田の中心へ。

「星光！」

シュウが叫ぶ。少女が振り返る。

「ぼくは、ぼくは……！」

君のことを忘れない！ 絶対に、ずっとだ！」

少女がわずかに目を瞞った。

そしてどこか嬉しそうに目を細める。

「はい……。ありがとうございます。」

でも、時が来たら忘れてくださいな

「無理！」

「ふふ……」

楽しそうに星光は笑った。

そして、天を仰ぐ。

「お願いします。なのは。フェイト」

魔法の光が強くなっていく。

少女の姿が見えなくなっていく。

「星光……！」

シュウがつぶやくのと同時に、

「貴方に出会えて良かった……」。

私の、本当の気持ちですよ……」

そんな声がかすかに聞こえて。

そして、星光の殲滅者はいなくなった。

本来の日常が戻ってきた。

黒い少女のいない日常が。

シュウは布団から出ると、しばらくぼうつとした後、

「朝ご飯、作らないと……」

つぶやき、動き始める。

そして机に、トーストの載ったお皿を置いた。

二枚。

「……何やってるんだ、ぼくは」

あの少女はもういない。

そのことを実感して、目頭が熱くなってくる。

「……………星光……………」

ポケットから小さな黒い石を取り出した。

あの少女が残していった欠片。

あれが夢ではないと証明する、たった一つのものだ。

もう……………あの子はいない……………。

シユウは黒い石を胸に抱くと、そのままじっと動かなくなる。

その瞳から、涙が一筋流れ落ちた。

そして、シユウは顔を上げる。

「よし、学校に行こう。」

黒い石に紐をくくりつけ、首から提げる。

しっかりと固定されていることを確認して満足そうにならずいた。

二枚のトーストを手早く平らげ、家を出る。

扉をしめようとして、

「……………ちよなら、星光……………」

最後に、小さな声でそうつぶやいた。

宿題

『お願い！ 手伝って！』

夏休み終わり間近。シユウはそんな電話を受けて目を覚ました。現在いる場所は引越した先のマンションのリビングだ。布団を敷いてそこで寝ている。他にも部屋はあるのだが、掃除が面倒ということもあり、リビングとキッチンのみで生活していた。

朝九時頃、携帯電話が鳴って目を覚ました。うたた寝から起きて目をこすりながら電話に出ると、なのはからの助けを求める電話だった。魔法関係のものではなく学校のことでの。つまりは夏休みの宿題。

「まだやってなかったの？」

欠伸をかみ殺しながら言うと、電話の向こうから、うんとどんよりとした空気が伝わってきた。思わず苦笑して、シユウは部屋の隅に置いてあるかばんを漁る。学校の荷物はほとんどがここに入れてある。もちろん宿題もだ。

「ちゃんと計画的にやらないと」

「うん……。分かってはいたんだけど、ちょっと忙しくて……」

そうだろうなと思う。なのはたちは管理局で働いている。嘱託魔導師としてなので毎日仕事というわけではないようだが、それでも仕事があった日は丸一日潰れているようだ。その上、宿題そのものもかなり多い。さすがは私立というべきか。

「まあ、うん。暇だし手伝うよ。ただ見せることはしないよ。分からないところを教えてあげるだけだからね」

『本当に？ ありがとうー』

嬉しそうなのはの声。その後は集合時間を決め、高町家に集まることになった。どうやらフェイトとはやても追い詰められているそう、三人で集まる予定らしい。アリサとすずかは別件の用事だとか。さすがに自分一人では心許ないので、シユテルたちにも声をかける許可をもらっておいた。

電話の後は早速シュテルたちの部屋へと向かう。現在はお隣なのですぐに会うことができる。自宅を出て隣のインターホンを押すと、すぐにシュテルの声が聞こえてきた。

『はい』

「僕だよ」

返事はなく、すぐに扉が開かれる。シュテルが顔をのぞかせ、どうぞと招き入れてくれる。

「どうかしましたか？」

「うん。ちょっと手伝ってほしいことがあって……」

リビングに向かいながら苦笑しつつ言う。珍しいですね、とシュテルは少し驚いているようだった。相変わらず表情に変化がほとんどないが、今では何となく分かるようになっていた。

リビングではディアーチェ、レヴィ、ユーリが勢揃いしていた。どうやら今日は全員休みらしい。のんびりと寛いでいるようだった。

「あ……。邪魔しちゃったかな？」

たまには家族水入らずで、と思いそう聞くと、ディアーチェがシュウを軽く睨む。

「もう家族も同然だと言ったであろうが」

「……そうだったね。ありがとう」

「…………ふん」

顔を背けるディアーチェ。シュウは薄く笑むと、いつもの自分の席に座った。シュテルがジュースを出してくれる。シュウはお礼を言いながら、それを少しだけ飲んだ。

「シュウ。手伝いというのは？」

「ああ、うん……。実はね……」

シュテルからの切り出しに、シュウは苦笑気味に電話でのやり取りを話した。シュウが話している間、シュテルは黙って静かに聞いていてくれる。全て聞き終えて、シュテルはどこか呆れたようなため息をついた。

「なるほど、事情は理解しました。私で良ければ協力しましょう」

「本当に？ 助かるよ」

「ふむ。では私も行くか」

そう言ってきたのはディアーチェだ。それを聞いたレヴィとユーリも早速出かける準備を始める。どうやら結局全員で行くことになりそうだ。

「時間だけど……」

「知らん。今から行くぞ」

「え……」

さすがにシュウが頬を引きつらせるが、すでにレヴィとユーリによって支度が終わってしまっている。助け船を求めてシュテルの方を見ると、こちらは戸締まりの確認をしていた。シュウの視線に気づいて、首を傾げてくる。

あ、だめだこれ。

この場にいる四人は今から行くつもりなのだろう。シュウだけが異論を唱えても受け入れられるとは思えない。シュウは小さくため息をつく、まあいいかと苦笑した。

「わー！ シュウ君、早いね！ シュテルたちも、いらっしやいー！」

約束の時間よりかなり早く高町家に来てしまったが、幸いなのは笑顔で歓迎してくれた。なのはの案内のもと、リビングに向かう。リビングのテーブルには宿題が広がっており、フェイトとはやてが頭を抱えていた。学校ではあまり見ることでできない、珍しい光景だ。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。シュウ君たちが来てくれたよ」

なのはの声にフェイトとはやてが顔を上げる。そして少し目を見開いた。おそらくディアーチェたちもいたことに少なからず驚いたのだろう。二人が啞然としている間に、ディアーチェが静かにはやての側へ行き、問題集を取り上げる。我に返ったはやては大慌てだ。

「あ、待って王様！ それはまだ途中で……！」

「……」

「え、うそ」

ディアーチェの指摘にはやての表情が固まる。問題集を返してもらったはやては一瞬の思考のち、がくりと項垂れてしまった。

「あかん、やり直しや……」

陰鬱な声でつぶやくはやて。さすがにディアーチェもその様子に言葉を失っている。なにやらしばらく内心で葛藤していたようだったが、やがてディアーチェははやての隣に座った。

「ええい、辛気くさい顔をするな！ 調子が狂う！ 見せてみる！」

「え、あ、うん……。はい」

「くっ……。なぜこういう時ばかり素直なのだ……！」

文句を言いつつも問題の解説を始めるあたり、やはりディアーチェは優しいなと思う。

その真向かい、フェイトの方にはいつの間にかレヴィがいた。同じように解説などしている。

レヴィが。

あのレヴィが……

「レヴィって賢いのっ？」

思わず声を上げるシュウ。それを聞きとがめたレヴィがあからさまに不機嫌そうな表情をする。

「ぶー。君はボクをなんだと思ってるんだ。ボクはマテリアルだぞ、賢いんだぞ……」

「……普段の言動があれだから……」

「むむ……」

二人のやり取りにフェイトがくすくすと忍び笑いを漏らす。優しげに微笑みながら、フェイトが言う。

「やっぱり仲がいいね。レヴィもシュウのこと好きそうだし」

「うん。好きだぞ。あとオリジナル、その解釈間違ってる」

「え……」

レヴィの指摘に一瞬固まり、フェイトはため息をついた。

そう言えば、とシュウは思い出す。シュテルに聞いた話だが、レヴィは精神こそ幼いがマテリアルの一基としてしっかりと知識は持っているらしい。そのため勉強などに関しては問題ないそうだが、もっとも、自分の興味の向かないことは長続きしないので勉強をするとなると話は別だそうだが。

「シュウ。なのはの方はお任せします」

シュテルに言われ、シュウとなのはが首を傾げる。シュテルが教えるものと思っていたが、どうやら違つらしい。

「昼食の用意でもしておきます。それまでがんばってください」

そう言つて、冷蔵庫の中のを少し使いますよ、と断りを入れてからシュテルはキッチンへと向かつていった。

「……それじゃあ、よろうか。なのは」

「うん。よろしくね、シュウ君」

顔を見合わせて、微苦笑した。

昼食を終えた後も宿題は続く。本当に量が多いためいつ終わるのかも分からない。昼食後は、なのはにはシュテル、フェイトにはレヴィ、はやてにはディアーチェが教えていた。シュウは三人でも分からない部分、つまりはこの世界独特のものを教えていく。ユーリはシュテルたち三人が休憩を取る時などのサポートだ。なのはたち三人は休憩せずにひたすら宿題に取りかかっている。

日が傾くまで続け、なのはの家族も帰ってくる。勉強をしているところを見て、皆が苦笑していた。

日が暮れ、終わりの見えなかつた宿題はようやくと残りわずかとなった。あとは読書感想文など、教えることができないものだけだ。

「私たちができることはここまでですね」

そう言つてシュテルが立ち上がる。他の二人も同じところまで終わったのか、ディアーチェが小さくため息をつき、レヴィがテーブルに突つ伏した。どうやら全員それなりに疲れたらしい。

「みんな、「」飯食べていくわね？」

桃子の言葉にシュテルたちは少し悩んだようだが、せつかなのでとお言葉に甘えることになった。シュテルが桃子を手伝つたためにキッチンへ向かう。

「まったく、少しは計画性を持て。たわけめ」

「うう……。おっしゃると通りですう……」

テーブルに突つ伏すはやてとなのはとフェイトも疲れたようにう

つるな表情で一言も発さない。管理局の仕事はそこまで忙しいのだろつかと思ってしまう。

でもやめないってことは、本人たちはそれが好きなんだろうなあ……。

羨ましいと思う。将来がしつかりと定まっているということだ。それに対して、自分はどうだろうか。この先、自分はどうすればいいのか。シュウには分からない。将来のことを考えると不安で胸が苦しくなってくる。

「お待たせしました。夕食にしましょう」

シュテルの声。運ばれてくる料理。そして集まってくる高町家の面々。

大人数での夕食が始まる。楽しげな会話が交わされていく。シュウも時折話を振られては笑顔で返す。家族の団らんというのはこういうものなのだろう。

今はいいか。

将来のことを今考えても仕方がない。とりあえず今は、目の前の夕食を楽しむことにした。

今日も夜は更けていく。高町家からは普段よりもずっと騒がしい、けれど楽しげな笑い声が聞こえてきていた。

第一話

それは願いを叶えた。そしてそれは今までの記憶と経験を放棄した。それは後のことを不安に思っていたのだが、きつと中のものごとうにかするだろう、そう判断していた。事実、残された魔力、本来は緊急用のものだが、それさえあれば人の一生程度は体を維持できるはずだった。

それが新たな意識を持ち、一年が経った。二人はまだ何かを願っていた。

そしてそれは、無意識のうちに願いを叶えた。

始業式。校長先生を始めとする先生方の話を聞いた後、生徒たちはそれぞれの教室へと戻っていく。もちろんシュウも今は自分の教室にいて、自分の席でぼんやりとしていた。この後はホームルームの後に下校ということになっている。

今日は何しようか。今はそればかり考えていた。明日からは授業がある。自然とシュテルたちと会う時間も減ることになる。今日のうちにできるだけ遊んでおきたいなど、そんなことを考えていた。

「ちよっつ、聞いてるっ。」

隣からの声にシュウは我に返った。視線を投げると、アリサと目が合う。少々不機嫌そうだが、何かあったのだろうか。

「ちよっつから何度も呼んでるのに……。」

「……ちよめん、全然気づかなかった。」

気づかなかったとはいえ、アリサを無視してしまったらしい。申し訳なく思い素直に謝罪をすると、アリサはまあいいけど、とそっぽを向いてしまう。

「ホームルームの後にみんなで翠屋に行くんだけど、あんたもどっつ？」
「へえ。でもどっつして僕を誘うの？」

魔法を知った日以来、時折話をするにはある。だが仲がいいかと

聞かれれば、どちらでもないと答える程度の間柄だ。それなのになぜ自分を誘うのだろうとシユウは首を傾げる。アリサが少し考える素振りを見せ、すぐに答えてくれた。

「ちょっと話をしたいだけよ。だめ？」

なるほど、とシユウはうなずきを一つ、アリサをよく観察する。シユウと視線が合うと、どうにも気まずそうな表情を浮かべ、すぐにそっぽを向いてしまう。次に、この会話を聞いているであろうなのは視線を向けると、困ったように眉尻を下げた笑みを浮かべていた。それらを見て、シユウは内心でうなずいた。聞いたのかな、と。ならば自分の口からしっかりと説明した方がいいようにも思う。ただ、それは今日でなくてもいいだろう。

「悪いけど、ちょっと別の用事が……」

「シユテルがケーキを焼いてくれるらしいわよ」

「行きます」

断る理由はなくなった。シユテルのケーキと聞いただけでよだれが出てくる。アリサはシユウの即答に啞然としていたが、やがて嘔き出すように笑い出した。

「じゃあまた、ホームルームの後で。ちゃんと待ってなさいよ」

「了解です」

シユウの返事に、アリサも満足そうにうなずいた。

翠屋の隅の席でシユウたちは陣取っていた。ホームルームの後はまっすぐにここに来ている。途中でシユテルと合流するのだろうかと思っただが、結局ここまで来る間では会っていない。なのはたちの話では、後から来るとのことだった。

「お待たせ」

なのはがカウンターの方からこちらへと歩いてくる。その手にはお盆があり、人数分のケーキとジュースが載せられていた。

「言ってくれたら手伝ったのに」

重そうに運んできたのはにシユウが言つと、なのははこれぐらいなら、と首を振る。そして並べられるケーキ。無難にショートケーキ

だ。

「じめんね、シュウ君。シュテルはもうちょっとかかるみたいだから、とりあえずはこれで我慢してほしいな」

なのはの申し訳なさそうな言葉に、気を遣わなくていいのにと思いつながらシュウは苦笑でうなずく。なのはが席に着いたところで、皆で手を合わせてフォークを持った。ケーキを切り取って、口に運ぶ。しっかりと味わって、シュウは思わず笑顔になった。

「うん。おいしい。さすがシュテル」

シュウ以外の全員がぎょっとしたように目を剥く。何をそこまで驚くのかと怪訝に思うが、今は目の前のケーキをもっと味わいたい。二口、三口と食べ進めていく。

「よく分かったね、シュウ」

フェイトの言葉にシュウは不思議そうに首を傾げた。どういう意味かが分からない、といった様子で。それを見た面々が呆れたような、しかしどこか羨ましそうな表情になる。

「お口に合ったようで何よりです」

カウンターから出てきたのはシュテルだ。桃子に会釈をしてからこちらへと歩いてくる。空いている席、シュウの隣に座った。

「どうして分かったの？」

興味深そうに聞いてきたのはさすがだ。シュウはどうしてと聞かれても、少し困惑してしまふ。だが言われてみれば確かに微妙な違いではあるので、分かりづらいものでもあるのだらう。

「味がちょっと違うから」

シュウがそう答えると、なのは以外の全員が首を傾げた。

「いつもの翠屋のケーキやと思うんやけど、ちやうどの？」

「うん。ちょっと甘さを控えめ。僕好みの甘さ」

皆が一斉にケーキを口に運び、なるほどとうなずいた。

「言われてみれば確かに……。でもこれ、言われないと分からないわ
「よ

「僕がシュテルのケーキの味を間違つても？」

「……あ、そう」

一瞬言葉を失い、すぐにやれやれとアリサが首を振る。見れば他の面々もシュウの言葉に苦笑していた。理由が分からず助けを求めてシュテルの方を見ると、いつもの無表情でお茶を飲んでいた。一連の会話には最初から興味がなかったらしい。

ふと気づく。シュテルの前にはお茶のコップがあるだけで、ケーキはない。

「シュテル。ケーキは？」

「お気になさらずに」

「……………。じゃあ、はい」

シュウは最後の一口になっていたケーキをフォークで刺してシュテルの目の前へと持っていく。あまりに自然な行動に啞然としていたのはたちだったが、「こちらも自然とそのケーキを食べたシュテルを見て完全に絶句してしまった。

「……………。ふむ。まだまだ改善の余地がありますね。桃子さんに教えを仰ぎましょう」

「相変わらず自分に厳しいなあ……………。おいしいと思うけど」

「光荣です」

そんなやり取りが交わされる。二人そろって飲み物を飲み、そろって一息つく。それを見ていたなのはたちは、顔を真っ赤にして黙々とケーキを食べ始めた。

「結局この間のことを聞けてないし！ 直接ちゃんと聞こうと思ってたの……」

翠屋から出たアリサが叫ぶ。まあまあ、とすずかが宥め、なのはとフェイト、はやては苦笑していた。

「この間のことって、封印関係だね。なのはたちから聞いてないの？」

「まるで他人事ね……………。一応聞いてはいるけど、詳しくは本人からって」

シュウは内心で得心した。どうやらなのはたちは自分に気を遣ってくれたらしい。あまり勝手に話していいものではないと判断して

くれたのだろう。心の中で感謝しつつも、別にいいのにも思っ
てしまふ。シユウはどう説明しようかなと考えるが、

「……うん。別に気にしないから、なのはかフェイトかはやて。よろ
しく」

「シユウ君がそれでいいなら……。じゃあ、アリサちゃん、さすがちゃ
ん。あとでまた教えるね」

なのはの言葉にすずかは素直にうなずいたが、アリサはどこか納得
のいかない表情をしていた。だがシユウ自身、あまり自分で語りたい
ことでもないのは確かだ。アリサもそんなシユウの心情を察したの
か、それ以上は何も言ってこなかった。

その後は他愛ない話をしながらのんびりと歩く。この後は、なのは
たちは一度解散して各自で昼食を取り、また集まる予定らしい。シユ
ウもそれに呼ばれたのだが、さすがにそれは辞退した。女の子たちの
中に男一人だけというのは、これでも結構恥ずかしいものがある。

楽しげに会話をしながら歩いて行く。シユウもそれに時折加わる。
シユテルの方は無言だったが、なのはたちの会話はしっかりと聞いて
いるようだった。

普通の学校生活。普通の登下校と友達との会話。今はそれが何よ
りも嬉しい。ここにおいて良かったと実感できる。自分に関しては少
し普通ではない部分もあったが、シユテルがいれば普段通りの生活が
できる。それがとても嬉しい。

ずっとこの生活が続けばいいのに。

幸福感に包まれながらそんなことを思った時だった。

「あれ、見ない子だね」

「ほんまやな。車椅子で大変そつやな」

「いやそれはやてもだから……」

「そつやつた」

反対側からこちらへと来る子を見てそんな会話が交わされる。そ
の会話を、シユウは一切聞いていなかった。視線はその車椅子の子に
釘付けになっている。シユウは大きく目を見開き、顔を青ざめさせ、
立ち止まって凍り付いていた。

「シユウ君？」

シユウの異常に気づいたのだろう、さすがが振り返って首を傾げてくる。だがシユウにはそんな声すら届いていない。ただただ車椅子の子を見つめるばかりだ。

シユテルも険しい表情をして車椅子の子を見ていた。真剣みを帯びたその表情に、遅れてシユウたちに気づいたのはたちは首を傾げるしかない。一体どうしたのか、と。そしてその答えは、すぐに出されることになる。

「やっと見つけたよ。ちゃんと家にいてくれないと、困るじゃない」

いつの間にか車椅子の子が目の前まで来ていた。誰かの知り合いかとなのはたちはお互いを見るが、誰もが首を振るばかり。ただ二人、シユウとシユテルを除いて。

「久しぶりだね、お兄ちゃん」

その言葉に、なのはたちが一斉にシユウを見る。その瞳の色は様々だったが、ほとんどが困惑と心配によるものだった。シユウは車椅子の子、妹の言葉で我に返る。頬を引きつらせながら、妹をしつかりと見る。

「……ああ、久しぶり、文花」

文花と呼ばれた少女がゆっくりと笑顔を浮かべる。その笑顔を見て、なのはたちですら一步を引いて凍り付いてしまった。

Side: Stern

西崎文花。西崎ケインと西崎さくらの実の子である。魔力資質を持つてはいるが、両親の意向により魔法の存在は徹底的に伏せられている。

以前、シユウの両親を調べた時に彼の妹についても記載があった。だがその時は関係がなかった上に、魔法との関わりも持っていなかったようなので一切気にしていなかった。シユウの実家で顔を合わせた時はさすがに驚いたものだが。

せめてもう少し、シユウの両親から話を聞いておけばよかったと今になって後悔する。これほどの表情を見せられるとは思ってもみな

かった。

親愛。憎悪。殺意。様々な感情がない交ぜになった少女の笑顔は、とても凄絶なものだった。ただの人間にこのような表情ができるとは思ってもいなかった。それだけ、この少女が持つシュウへの感情は強いものなのだろう。

良くも悪くも。

「友達と一緒に帰っておしゃべりだなんて、気楽だね」

笑う。嗤う。凄絶に嗤う。

「お兄ちゃんと話をしに来たよ。……逃げないよね？」

少女の言葉に、シュウはゆっくりと、とても長いため息をついた。シュテルはそんなシュウの手を、誰にも気づかれぬようにそっと握った。

おはぎ

ある日の日曜日。シュウは朝日が昇る前に目を覚ました。近所迷惑にならないように静かに布団を片付け、そして空いたスペースの床に正座する。目を閉じ、黙祷。思っているのは、実家に住んでいた頃に隣に住んでいた青年のこと。自分のせいで亡くなったしまった青年のことだ。本来ならお墓へと挨拶に行きたいところではあるが、彼の家族と鉢合わせしたくはなかったし、それ以前にまず場所を知らないというもある。

古い記憶を呼び起こしながら、シュウは黙祷を続けた。彼岸の期間のうち、日曜日はいつもこの黙祷から始まる。こんなことは偽善にもならない自己満足なのだろうが、いつの間にか習慣のようなものになっていた。

長い時間黙祷を続け、やがてシュウは目を開けた。窓から外を見ると、少しずつ空が明るくなっていく。シュウは立ち上がると、毎週日曜の恒例である部屋の掃除を始めた。

日曜日は七時頃にシュテルたちの部屋に行くことになっている。約束をしているわけではないが、いつの間にか暗黙の了解になっており、行かなければ心配された上で迎えに来られる。今日もシュウは七時前に部屋を出て、シュテルたちの部屋へと向かう。歩いて十秒足らず。とても楽だ。

リビングに向かうと、すでにレヴィとユーリがテレビの前で待機している。七時からの特撮番組を見るための毎週の光景だ。もう一人、ディアーチェは読書。ディアーチェがここにいるということは、シュテルが朝食の当番なのだろう。

「おはよう」

そう言うと、二人がそれぞれ反応を返してくれる。レヴィとユーリは振り返って笑顔で、ディアーチェはちらりと一瞥してくるだけだ

が、挨拶はしっかり返してくれた。

「おはようございます、シュウ。もうすぐできますよ」

キッチンの方からエプロン姿のシュテルが顔を出した。

テーブルに並べられていく朝食は、ご飯と焼き魚、お味噌汁といったもの。皆で手を合わせ、食べ始める。レヴィとユーリは行儀悪くテレビを見ながら食べているのだが、これに関してシュテルとディアーチエが怒ることはない。ディアーチエ曰く、むしろ静かに食べられるからもっと見ておけ、とのことだった。

朝食を終えての片付けはシュウとレヴィ、ユーリの担当だ。その間にシュテルとディアーチエは部屋の掃除や洗濯など、家事全般をこなしていく。洗い物が終わった三人は、シュテルとディアーチエの手伝いだ。

「さて、では今日の予定だが」

家事が終わればディアーチエが今日の予定を告げる。囑託魔導師としての仕事があればこの時に誰が行くか決めるそうだが、日曜日は彼女たちも休みと決めているらしく、今日も仕事に関しての話はなかった。

「予定はない。せっかくの休日だ、好きに過ごせ」

そう告げるだけ告げて、ディアーチエは席に座って読書を始めてしまう。出かける予定がなければ、これもいつものことだ。レヴィとユーリはどうやら外に遊びに行くらしく、出かける準備を始めていた。

さて、どうしようか。

シュウも当然ながら予定などはない。シュテルはどうするのかなと姿を探してみると、キッチンで何かの準備を始めているようだった。しばらくその様子を眺めていると、視線に気づいたのかシュテルが振り返る。思わずシュウが照れ笑いを浮かべると、

「シュウ。お暇なのでしたら手伝っていただけますか？」

シュテルからそんな申し出があった。

シュテルと一緒に家を出て、近くのスーパーへ向かう。おやつに何

かを作るらしいが、何をかまでは聞いていない。材料で分かると思います、とのことだった。おやつは材料にさほど詳しくないのだが、それでも分かるのだろうか。

シュテルと一緒にスーパーの中を歩く。買い物かごを持つのはシュウの役目だ。ついでに夕食の買い物も済ませるつもりらしく、野菜や精肉コーナーも見て回る。豚肉にジャガイモ、人参……。カレーの材料ばかりなのでカレーかと思ったが、肝心のルウを入れていない。それに三日ほど前に食べたところなので、さすがに違っだろう。

「……肉じゃが？」

カレーと共通する材料で連想してそう聞いてみると、シュテルはシュウをちらりと見て、一度だけうなずいた。正解です、と。

「……あれ？ おやつは？」

「これから買いますよ」

そう言ってシュテルが買い物かごに入れたのは、餅米と小豆、きなこだ。少し首を傾げたシュウだったが、今日が何の日だったかを思い出し、手を叩いた。

「おはぎか……」

「はい。作るのは初めてなのでうまく作れるかは分かりませんが……」

「僕もできるだけ手伝うよ。……作り方知らないけど」

「図書館で作り方の本を借りておきました。私は覚えてありますので、そちらはシュウが見てください」

このためだけに覚えたのか、とシュウは驚くが、シュテルのことだ。覚えようとして覚えたのではなく、興味を持って読んだら覚えてしまっただけだろう。シュテルの足を引っ張らないように、帰ったら自分も覚えようと思う。

「では帰りましょうか」

シュテルはシュウからかごを受け取ると、レジへと向かっていった。

帰宅後、昼食を済ませ、シュウは料理の本を借りておはぎのページ

を熟読する。それほど難しくはないようだが、万が一にも手順が抜けて迷惑をかけるということにはなりたくないのです、しっかりと頭にたたき込んだ。

覚えてからキッチンに立ち、シュテルと一緒に作業へと入る。シュウは餅米を洗って炊くまで、シュテルはあんこを作るまでだ。シュウの方が簡単すぎる気がするが、シュテルの指示に従っておく。

やがて餅米が炊き終え、あんこも出来上がった。二人で並んで成形していく。シュウは餅米をあんこで包み、シュテルはその逆でさらにきなこをまぶしていく。きなこには砂糖を入れていないようだったが、砂糖を入れると水分が出てしまつからだそうだ。

途中で交代して、今度はシュウがきなこをまぶしていく。一個一個丁寧に。そしてさらにしばらくしてまた交代。その繰り返し。

「……ちょっと待って。多すぎない？」

「なのはにも頼まれましたので。あとはアースラの方たちにも」

アースラはともかく、なのはは少し意外だった。桃子が作っているようなものだが。

夕方になる頃にようやく全ての成形が終わった。お疲れ様でした、とシュテルが言って、シュウもお疲れ様と笑顔で返す。シュテルはあんこのおはぎを手に取ると、シュウに差し出してきた。

「味見しましょっか」

「ああ、そう言えば食べてなかったね」

シュテルからおはぎを受け取り、半分かじる。甘過ぎないあんこでシュウの好きな味だ。さすがシュテル、と思っていると、残りの半分にシュテルが横からぱくりと食べてしまった。

「へ？ しゅー、る……っ？」

「なるほど……。それなりの出来、としておきましょっか。機会があればもう一度作りたいですね」

シュテルは何も気にしていないのか、今度はきなこの方を手に取った。それを半分食べ、一人うなずいている。シュウは固まったままだ。そのシュウの目の前へと、半分になったきなこのおはぎが差し出される。

「どござ、とシュテルが言う。すぐに意図を察して、しかしシュウは動けずにいた。頭が真っ白になっている。なんだろう、この状況は。」

「シュウ？」

シュテルが首を傾げる。シュウはシュテルに見つめられるのが恥ずかしくなり、そのきなきのおはぎをシュテルの手から食べた。何度も租借する。ほどよい甘さ……なのだろうが、先ほどより味が分からない。もう何も考えられない。

「どうですか？」

シュテルの問いに、シュウは何とか笑顔を浮かべて答える。

「うん。美味しい、よ。」

「そうですか。では私はなのはたちへ持って行ってきます。シュウはゆっくりしててください。」

そう言ってシュテルはパックへおはぎを詰めていく。そして一礼してキッチンを出て行く。シュウは呆然としたままその後ろ姿を見送った。

「……なんだこれは」

リビングで読書をしていたディアーチェが呆れていることに、シュウは気づいていない。

シュテルが戻ってくる頃にレヴィとユーリも帰ってきた。テーブルに並べられたおはぎを見て、レヴィが目を輝かせる。先に手を洗ってこい、というディアーチェの言葉に従い、流しへと走って行った。

「急がなくても消えはしないというの。」

「あはは……」

ディアーチェのため息交じりの言葉にシュウは苦笑。シュテルと共にお茶とジュースを用意する。シュウとシュテル、ディアーチェは熱いお茶、レヴィとユーリはオレンジジュースだ。それをテーブルに置いて、レヴィとユーリが戻ってきたところで手を合わせた。

「やわらかくておいしー……」

レヴィが次々に食べていく。その様子を見てみると、作った方としてはとても嬉しくなる。最も難しいだろうつあんこを作ったのはシュ

テルだが、それでも嬉しいものだ。

「ねえシュテル、青色はないの？」

「ありません」

「ぶー」

レヴィが口をとがらせる。シュウは何を使えば青色のおはぎが作れるだろうと考えるが、答えは出なかった。というよりも、青色のおはぎを想像したところで気持ち悪くなってやめた。

「ふむ。なかなかよくできておるな。さすがはシュテルだ」

「ですね！ とっても美味しいです！」

「光荣です」

ディアーチェとユーリの言葉に、シュテルが小さくうなずいた。ですが、とシュテルが続ける。

「シュウにも手伝ってもらいました」

「シュウにも？ なるほど、共同作業、ですね！」

「げふっ！」

ユーリの無邪気な言葉に思わずむせてしまう。もちろんユーリに他意はないのだろうが、シュウはずっと味見のことを忘れずにいた。自分が食べたものをシュテルが食べ、シュテルが食べたものを自分も食べ……。思い出すだけで顔が赤くなってくる。何度もせきをしていると、目の前のお茶が差し出されてきた。

「大丈夫ですか？」

シュテルの言葉。シュウは礼を言って受け取り、何口か飲む。そして気づいた。

あれ、僕のコップ、別にあるよね……。

視線をシュテルの前へ。コップがない。他の皆の前にはしっかりとコップがある。つまりは。

シュテルのコップ。

これって……間接……。

さらにシュウの顔が赤くなる。心配そうに顔をのぞき込んでくるシュテルへとコップを返し、顔を隠すようにうつむいておはぎを食べる。

そしてふと見ると、シュテルが首を傾げながらお茶を飲む。返されたコップで。

「これは……あれかな。意識されてないってことなのかな」

ちびちびとおはぎをかじりながら、シユウはそんな言葉を小さくこぼす。それを聞いた、聞いてしまったディアーチェは、やれやれといった様子で首を振った。

Side:Stern

夕食後。おはぎはまだまだ余っていたので、それらをパックに入れて自宅へと戻るシユウに持たせた。一緒におはぎを作った後、どうも自分と視線を合わせようとしてくれない。おはぎを渡した後は逃げのように帰ってしまった。テーブルに食べかけのおはぎを残してしまっただけ。

何か気に障ることをしてしまったのでしょうか。

そう考え記憶を探るが、心当たりがない。王に聞いてみても、知らんとそっぽを向かれてしまった。

明日、聞いてみましょうか。

シュテルはテーブルにある余りのおはぎをパックに入れていく。冷蔵庫に入れておけば明日でも食べられるだろう。捨ててしまうのはもったいない。だが、シユウが残していつてしまったおはぎの処理には少し困ってしまう。食べかけのものをパックに入れてしまうのは気が引けた。

仕方がないですね、とシュテルは独りごち、そのおはぎを手を取った。しばらく動きを止め、そして口に入れる。なぜだろうか、妙に甘く感じてしまう。しっかりと味わってから嚙下し、そしてすぐに片付けを再開した。

ディアーチェはそのシュテルの頬がわずかに朱に染まっていることに気づいてはいたが、あえて何も言わない。ただ本日何回目か分からないため息をつき、そして薄く笑っただけだった。

第二話

マンションのシュウの部屋、そのリビングにシュウと文花は机を挟んで、向かい合って座っていた。文花の前にはオレンジジュースとお菓子が置かれているのだが、手を着けようとはしていない。それがとても寂しいのだが、仕方がないことだとも思う。

隣のキッチンにはシュテルとなのはたちもいる。自分のことを心配してくれており、「ここまで来てくれている。さすがに同じ部屋にいてもらうことなどできないが、それでも隣にいると思うだけで心強い。」

「お兄ちゃん」

文花の言葉。無表情に見つめてくる文花の瞳を見つめ返す。文花の目が不愉快そうに少し細められた。

「お父さんとお母さんから、いろいろと聞いたよ。魔法のこと。ロス・トロギアのこと。……お兄ちゃんのこと」

そうだろうとは思っていた。今まで会いに来ようとはしなかった文花が突然ここまで来たのだ。考えられる理由としては、父と母が妹に全てを話したことぐらいだ。ただそれでも、わざわざ会いに来るとは思えないので、他にも理由か、もしくは目的があるのだろうか。

シュウは一言も返さずに、じっと文花の言葉を待つ。逆に文花はシュウの言葉を待っていたようだったが、シュウが何も言わないことを察して言葉を続けた。

「お兄ちゃんのせいだね」

何が、とは言わない。言われなくても分かる。シュウは文花の足を見る。二度と動かない足。両親の魔法ですら治せなかった足。その原因。シュウは静かに目を伏せると、重々しくうつなずいた。

「ああ、そうだね。あの時の事故は僕がいたから引き起こされたものだ。だから、文花が歩けなくなったのは僕のせいだ」

否定はしない。言い訳もしない。そして謝罪もしない。文花がそ

れを望んでいないことは分かっている。この妹が自分に望むのは謝罪ではなく贖罪だ。文花が望むのなら、自分のできることなら叶えてやりたいと思う。

だが、文花はそれ以上の言葉を続けなかった。リビングをゆっくりと見回し、鼻を鳴らす。

「お兄ちゃんって、今は幸せ？」

予想していなかった問いかけ。シュウは怪訝そうに眉をひそめながらも、一度うなずく。その瞬間、文花が嗤った。

「ひどいね。私の足を奪ってにおいて。私を不幸ににおいて。お兄ちゃんは幸せなんだ」

お兄ちゃんばかりずるい。文花の言葉に、シュウはわずかに目を見開き、うつむいた。もちろんシュウもここに来て、この土地に来て苦労しているのだが、それでも自由はあった。だが、文花はどうだろうか。一人で歩くことすらできず、日常生活もままならないだろう。その苦しみがどれほどのものか、シュウには分からない。

「お兄ちゃんのせいなんだから、ちゃんと、聞いてくれるよね」

シュウが顔を上げると、文花が優しくに微笑んだ。自分へと手を伸ばし、手のひらを出す。自分の方へと誘うかのように。

「帰ってきこよ」

短い言葉。まるで赦しを与えるかのような言葉。すぐりつきたくなる言葉だが、その言葉に隠されている意図をシュウは正確にくみ取った。それと同時に、思わず苦笑を漏らしてしまう。文花が不愉快そうに目を細め、差し出していた手を引っ込めた。

「そんな反応、するんだ？」

冷たい無表情になった文花に言われ、シュウは肩をすくめた。

「文花が言いたいのはつまり……。一生、自分のために尽くさせてこじゃないの？」

「ふふ。さすがお兄ちゃん」

シュウの察しの良さに文花がまた嗤う。背筋が冷たくなる笑みをシュウは真正面から受け止め、内心でどろしたものと困惑する。自分の妹はとんでもない性格になってしまっているものだ。

「私の言葉に従って、私のために働いて、私のために生き続けてよ」

「……奴隷になれってことかな」

「そうともいうね。でも、人の人生を奪った対価としては安いものでしょっつ？」

文花の言葉に、シユウは神妙な面持ちでうなずいた。他の人が聞けば安くないと言うだろうが、自分にとっては破格もいいところだ。妹の足が治るならこの命を捧げてもいいとすら思っていたこともあったのだから。だが、それは自分一人だけの問題ならの話だ。

シユウはシユテルたちに助けられ、多くの人に見守られながら今を生きている。そんな自分が妹のためだからと人生を捧げることはできない。だからシユウは首を横に振った。

「悪いけど、それはできないよ。文花」

「……どうしてっ？」

「僕はいろんな人にお世話になったんだ。いや、今もお世話になっている。それなのに、その恩を全て捨てて文花のために生きることができない」

「なにそれ。結局、私のことはどうだっていいってことじゃないの？自分の不幸を私に押しつけて、あとは知らんぷり。そういうことでしょっつ？」

違う。そうじゃない。そう言っても文花は納得しないだろう。しようとしないうだろう。

そして、その理由もシユウは何となくだが察することができた。

だからこそシユウは、うなずいた。

「ああ、そうだよ。文花の人生なんてどうでもいい。僕は今の生活を守る」

恨むといい。憎むといい。そのために自分は存在し続けよう。

文花は目を見開いてしばらく固まっていたが、やがて冷たくシユウを睨み付けた。そして何も言わずに部屋を出て行くこととする。シユウも何も言わず、部屋の扉を開けてやった。

「……お兄ちゃんだけが幸せになるなんて、認めない。許さない。絶対に」

文花の小さな言葉。シユウは静かにそれを受け止めた。

Side::Stern

隣の部屋でそれを聞いていた一同は、それぞれ異なった表情をしていた。

アリサが苛立ちを露わにしながら小声で言う。

「なにあれ。逆恨みもいいところじゃない。シユウが望んで引き起こしたわけじゃないんでしょ？」

「そうだね。ちよつとひどすぎると思う」

さすがが悲しげに目を伏せる。あんな恨み辛みの言葉を真正面から受けて、シユウは大丈夫なのかと。

「こんなことはあまり聞きたくないんだけど……。はやて。その……」

フェイトの遠慮がちな言葉。はやてはその言葉の続きを理解して苦笑する。気を遣わなくていいのこと。

「まあ、確かにかなり不便ではあるよ。世の中を恨むのも分からんでもない。でもなあ、あれは行き過ぎや。特に不幸かどうかの話なんて本人次第やろ」

あたしは今は幸せやし、とはやてが締めくくる。はやての事情も特殊なものだが、それでも理解はできる。少なくとも、先ほどの文花の言葉よりは。

「最後の方、シユウ君は文花ちゃんを怒らせるような言い方をしたね……。どうしてかな」

なのはが気になったのはその点だった。謝罪も言い訳もせず、むしろ自分に怒りの矛先を向けるようにしていたと感じた。シユテルへと視線を投げると、シユテルは少し難しい顔をしていたが、なのはの視線に気がついて口を開いた。

「おそらくですが。実際にシユウは、矛先が自分に向くようにしていたのだと思います」

「やっほっ」

「はい。私の印象ですが、フミカという方は理解力がある聡い人だと

感じました。それでもシュウを憎み続けているのは、その感情故でしょう。そしてシュウに非はないと理解してしまえば、その感情はどこに向けられるのか」

シュテルが部屋を出て行く。なのはたちが驚きながらもそれに続いてくる。シュテルの視線は、扉の前で立ち尽くすシュウだ。その背中では寂しげで、小さく見える。

「納得のいかない感情の矛先は、次は別の何かに向けられます。両親かもしれないけれど、世の中そのものにかもしれませんね。そうならば、本当にやり直しがきかなくなるでしょう。シュウは、それなら自分を憎み続けてくれた方がいい、とそう判断したのでしょう」

シュテルの声が聞こえたのだろう、シュウが振り返った。シュテルと目が合い、力なく笑う。とても悲しげな笑みだった。

「せめて、もう少し精神的に余裕を持てれば良かったのでしょね。感情も納得させることができるくらいには」

フミカはまだ幼すぎる。頭で理解はしていても、感情が納得できない。それ故にその原因となったシュウを憎み続ける。例えシュウに非がなかったとしても、憎まなければ自分を見失ってしまうから。自分の存在意義のためにシュウを憎み続けているようなものだ。

シュウは、間違っていないよと肯定するかのように静かにつなずいた。

「僕の選択は……間違っていたかな？」

泣きそうなほどに震える言葉。なのはたちはそれに答えることはできない。シュテルはしばらく考えた後、分かりません、と首を振った。

「正しくはないのでしょう。けれど、間違っているとも言えません。

これは貴方たち兄妹の問題ですから」

シュテルの言葉に、そうだねとシュウはつなずいた。

Side: Hero

なのはたちの帰宅後、シュウはシュテルをリビングへと通す。手の着けられていないジューズとお菓子があるままだ。新しいものを用

意するためにキッチンへと向かおうとしたが、シュテルは構いません、とオレンジジュースに口をつけた。

「ごめんね、シュテル。嫌な思いをさせちゃって」

自分と文花の問題にシュテルたちを巻き込み、きつと嫌な気分になさせてしまったことだろう。頭を下げると、しかしシュテルは首を振った。

「一人で抱え込む必要はありません。貴方たちの問題に私が手を出すことはできませんが、支えることぐらいはさせてください」

シュウは目を睨り、すぐに悲しげに微笑んだ。ありがとう、と短く答える。シュテルがいてくれて良かったと心から思えた。

「一つだけ……お願いしてもいいかな？」

「何なりと」

「手……繋いでいい？」

シュテルが首を傾げ、しかしすぐに手を差し出してくる。シュウは照れくさそうにながらも、その手を握らせてもらう。

ああ……。温かいな……。

「シュウ……。どうして泣いているのですか？」

言われて初めて、シュウは自分が泣いていることに気がついた。顔に手をあて、不思議そうに呆然とする。自分でも理由が分からない。なぜ涙が出てきたのか。

……いや……。

文花との和解が叶いそうにない。それどころか、このままいけば一生文花に恨まれ続けるだろう。そのことを考えると、胸が締め付けられるように苦しい。そこまで考えて、気づいた。自分は文花に許されなかったのかもしれない、と。

「……丸くおさまってめでたしめでたし……とはいかないね……」

シュウのつぶやきにシュテルの手を握る力が少しだけ強くなったような気がする。顔を上げると、真剣な表情のシュテルと目が合った。

「……には私しかいません。だから、我慢しなくてもいいですよ」

シュウが顔をゆがませる。涙が止めどなく溢れてくる。小さく嗚

咽を漏らし始めたシュウの頭を、シュテルが優しく撫でてくれる。その温もりに身を任せながらも、シュウは嗚咽を漏らし続けた。

妹が正しく生きるためには、自分を恨み続ける歪みが必要だ。ならば妹を守る兄として、自分はその矛を受け続けよう。それが自分の贖罪だ。

結局シュウは、その結論にしか至れなかった。

ユウノ

ある日の昼下がり。シュウはシュテルと一緒に高町家に向かっていた。シュテルと並び、のんびりと歩いて行く。

数日前、なのはからシュテルに念話での連絡があったらしい。曰く、ケーキを焼いてみたいので作り方を教えてほしい、とのことだ。母に聞けばいいのではと思ったが、仕事で忙しいだろうからと話してすらいらないとのことだった。

特に予定もなかったそうでした。シュテルは引き受けたそうだが、その時の条件として、なぜかシュウの同行の許可を求めたそうだが、理由は分からない。

高町家に到着すると、すぐになのはが出迎えてくれた。笑顔でいらっしやい、と言ってくれる。

「ごめんね、シュテル。こんなこと頼んじゃって構いません。この程度ならいつでも引き受けられます」

二人がそんな会話を交わしながら廊下を歩く。シュウはその少し後について行く。やはり自分が来た意味が分からなくなる。自分がいない方がいいのではないだろうか。

リビングに入ると、すでに先客がいた。見たことのない男の子だ。こちらに気がつくのと、笑顔で手を上げてくる。

「師匠も来ていたのですか」

シュテルの言葉にシュウが目を見開いた。男の子をもう一度見る。年は自分と同じぐらいに見えるし、とても大人しそうだ。この子がシュテルの先生なのか。

「いや違うから！ いい加減それやめないかな！」

「なのはの師匠なら私の師匠でもありません」

「何度も言ってるけどその理屈が分からない……」

なるほど、とシュウは納得した。シュテルの表情をよくよく観察すると、どこか楽しげな印象を受ける。本気で言っているのかまでは分

からないが、どうやらいつものやり取りらしい。

「シュウ君。紹介するね。こちらユーノ君。私に魔法を教えてください」

なのはがユーノの隣に立ってそう言って、次にシュウへと手を向ける。

「ユーノ君。こちらが秀一君。シュテルが助けた子」

「ああ、そうか。君が……」

ユーノが少し驚いて、すぐに笑った。立ち上がって、シュウへと歩いてくる。手を差し出して、

「初めまして。ユーノ・スクライアです」

「あ、ご丁寧にどうも。西崎秀一です。親しい人からはシュウと呼ばれています」

差し出された手をシュウもしっかりと握り返す。

「では僕もシュウと呼ばせてもらってもいいですか？」

「もちろん。あ、あと敬語もなしで。疲れてきた」

「あはは。了解」

二人で笑い合う。ユーノとは気が合いそうだと感じた。その二人を見てシュテルとなのはがどこか満足そうにしていたのだが、そんなことに二人は気がつかなかった。

シュテルとなのはがキッチンへ向かってからは、シュウはユーノとの談笑を続けていた。どうやらユーノはなのはから自分のことをそれなりに詳しく聞いているらしく、シュウも気兼ねなく話すことができた。

「無限書庫だっけ。たくさん本があるんだね。どれくらいあるの？」

「さあ……。まだまだ整理が追いついてなくて、把握できてないんだ」

へえ、とシュウはどんな場所なのだろうかとイメージする。大きな図書館のようなものをイメージしているのだが、ユーノの話からすると違うのだろうか。どれほどの量の本があるか分からないが、とても興味がある。

「いつか行ってみたいな。他の世界の本とかすごく魅力的だし」

「そつだね……。もしも来る時が決まったら案内するから、その時は連絡して。僕も休みを取るから」

ユーノの言葉にシュウは顔を綻ばせた。そんな機会があるのかすら今はまだ分からないが、いつかきつと行くことは思う。

「ユーノも次にこっちに来る時は連絡してよ。他の世界の話とか、いろいろ聞きたい。アースラの人たちはいつも忙しそうだから、そういった話ができないから」

「分かった。僕もシュウと話をするのは楽しいから、ちゃんと時間を作ってまた連絡するよ」

何となくだが、ユーノとはやはり気が合うようだ。ユーノもそう思ってくれているらしく、快く約束をしてくれる。同じ男相手ということもあり、気兼ねなくいろいろと話ができそうだと思う。今日は残念ながらあまり時間がないようだが、いずれもっとゆっくりと話したいものだ。

「お待たせ」

キッチンからなのはが戻ってきた。その手にはホールケーキ。テーブルに置くと、それを丁寧に四等分する。シュテルもすぐに出てきて、こちらはジュースを用意していた。

「どうぞ、ユーノ君」

なのはがユーノへとケーキとジュースを差し出す。シュテルの方は無言だが、いつものように自分に差し出してくれる。二人は笑顔で礼を言っ受取り、なのはとシュテルの準備が終わるのを待つ。

「感想聞きたいから食べてほしいかな」

なのはのその言葉に、シュウとユーノはケーキを口に運んだ。しっかりと味わう。シュウにとってのいつものケーキの味に近いが、少しだけ違いがあるのはなのはがいるからだろう。いつもより甘さがほんの少しだけ強い。もちろんこれはこれで美味しいが。

「うん。美味しい」

シュウとユーノが同じ感想を口にすると、なのはが嬉しそうな笑顔になった。良かった、と胸をなで下ろしているようだ。

「どうぞ、どうして急にケーキをっ」

着席したなのはに聞いてみると、なのはは照れくさそうに、

「ユーノ君が遊びに来ることになったから、せっかくだからと思って……」

それを聞いたユーノが少し驚いたように目を開き、なのはを見るが、

「大切なお友達だから」

なのはの言葉に肩を落としていた。それを見てシュウは何となくユーノの気持ちは察する。どうやらなのはは自分に向けられる好意にはかなり鈍感なようだ。

「ユーノ。がんばれ」

小声でそう言っていると、ユーノは小さくため息をつきながらうなずいた。

「シュウもね」

ユーノがちらりとシュテルを見る。黙々とケーキを食べ続け、いつからそうしていたのか、手元に置いたメモ用紙に何かを書き連ねていた。内容から察するに改善点だろうか。その間、シュテルはこちらを一度たりとも見ていない。

シュウとユーノは視線を合わせると、お互いに長いため息をついた。

帰宅後。シュウはシュテルに頼まれ、自分の部屋に彼女を招き入っていた。自室といってもリビングだが。そこでシュテルは小さなケーキを取り出し、シュウへと差し出してきた。

「いつものものですが」

「おお。ありがとうー」

嬉しそうにシュテルのケーキを食べ始めるシュウ。こちらはシュウの好みの味だ。幸せそうな表情で、シュウはケーキを食べ進める。

「さすがシュテル。すごく美味しいー」

「光荣です」

シュテルもシュウの隣でケーキを食べ始める。二人だけでのんびり。

シュテルは自分のことをどう思っているのだろうか。本人からしっかりと聞いたことはないので気になるところではあるが、聞く勇気もシュウにはない。ただ、それでもこつとしてよく一緒にいることが多いのはユーノの立場と違ふところだろう。そう考えると、ユーノと違つて自分はきつと恵まれてる方だろう。

好きな人と一緒にいられるのだ。十分すぎるほどに幸せだ。

「機嫌がよさそうですね。どうかしましたか？」

シュテルが首を傾げながら聞いてくる。シュウは笑顔のまま首を振った。

「何でも無いよ。気にしないで」

「そうですね」

今日もシュテルと一緒にいられる。今日は新しい友達ができた。今日もとてもいい日だ。

そしてシュテルのケーキを味わいながら、シュウは新しい友人へと心の中でエールを送る。

がんばれ、と。

そう思つると同時に、自分もがんばらないとなと思わず苦笑してしまった。

第二話

文花と部屋で話をした翌日。今日も当然ながら学校がある。起床したシユウは文花との会話を思い出し、陰鬱な気分になってしまつ。今は考えるのをやめようと首を振り、顔を洗って制服に着替える。準備を終えたところで、シユウはシユテルたちの部屋へと向かう。

自分の部屋の鍵をしっかりとかけて、次は別の鍵でシユテルたちの部屋の扉を開ける。リビングに向かうと、すでに朝食が並んでいた。バターの塗られたトーストにコーンスープ。珍しく洋食だ。

「起きたか、シユウ」

いすに座っていたディアーチェがシユウに気づき、顔を上げる。ディアーチェの声でレヴィとユーリも振り返り、笑顔で挨拶をしてくれる。

「おはよう。待たせちゃったかな？」

「いや、今用意を終えたところだ。シユテルは飲み物を用意している」

ディアーチェの言葉を聞きながらシユテルの姿を探すと、すかさずディアーチェがそう言ってきた。シユウは恥ずかしそうに頭をかくと、自分の席に座った。

平日の朝食は六時半だ。引越しをしてから毎日朝食に呼ばれているのだが、おかげで早起きの習慣がついた。

「シユウ。おはようございます」

シユテルの声に振り返ると、キッチンからシユテルが出てくるところだった。手には人数分のコップ。注がれているのはミルクだろうか。それらをシユテルは並べると、席についた。

「ではいただきます」

皆で手を合わせ、いただきますと食べ始める。少し焦げ目のあるパンは焼きたてのようで、かりかりしていてとても美味しい。

「そう言えば、いつもお米なのに今日はパンなんだね」

シユウがそう言つと、ディアーチェは渋い顔をしてレヴィを睨む。

う」と短い声を上げて、レヴィは視線を逸らした。

「「やつが炊飯器のタイマーを入れ忘れたのだ。すまぬな、シユウ」なるほど」とシユウはうなずく。最初はいつも通りの和食の予定だったらしい。

「いや、僕はどちらかと言えば和食だけで、パンも好きだから」

頬張りながら、頬を緩ませるシユウ。それを見たディアーチェは、そうかと短く答えただけだった。その表情がどこか安堵したようなものになっていることをシユウは見逃さない。

「もしかして、いつも僕のために？」「ごめんね」

「む……。自惚れるでない。たまたまだ」

ディアーチェは頬を赤らめ、顔を逸らす。素直ではないがディアーチェは分かりやすい。

「ありがとう、ディアーチェ」

「…………ふん」

ディアーチェが鼻を鳴らして食事を再開する。シユウもそれに倣って手早く食べていく。やっぱりディアーチェは優しいなど、そんなことを思いながら。

朝食後はシユテルと一緒に食器を片付け、そして学校に向かう準備をする。シユテルたち四人はこれから今日の予定を話し合っはずだ。休日はシユウも一緒に聞くのだが、平日は仕事の話も多いだろうと思いつつも早めに学校へと向かう。

「それじゃあ、行ってきます」

支度を終えてリビングに集まっている四人に言っと、四人がそれぞれ挨拶を返してくれる。挨拶をすれば挨拶を返してくれる、その当たり前のことがとても嬉しくて、シユウはそれだけで笑顔になれた。

毎朝の学校での日課。それは二度寝。シユウが登校する時間ではまだほとんどのクラスメイトが登校していないので話し相手もおらず、いつも自分の席で寝息を立てている。シユウの後に登校してきたクラスメイトたちも、朝だけはシユウをゆっくり寝かせてやろうと決

めているのか声をかけてくることはない。

ただ、今日だけは例外だった。まだチャイムが鳴っていないというのに肩を揺すられ、シユウは億劫そうに顔を上げる。そして少し驚いたように目を見開き、すぐに表情を和らげた。

「おはよう、なのは。どつしたの？」

そこにいたのはなのはだ。なのはの仲の良いメンバーが側にいないが、きつと聞き耳を立てているのだろう。

「おはよう、シユウ君。えっと……。昨日のことなんだけど……」

なのはが言いづらそうに話し、シユウはああ、と苦笑する。

「文花のことは忘れていいよ。あれは僕と妹の問題だから、なのはたちが気にすることじゃない」

「うん……。でも！ 私たちで良ければ、いつでもお話は聞くから……！ だから、元気出してね」

優しいなと思う反面、この子は将来苦労しそうだなとも思う。文花のことは本当にこちらの兄妹の問題だ。そんなことまで気にする必要はないだろう。ただ、これがなのはたちの良いところでもあるのだろう。

「ありがとう、なのは。みんなにもそう言っておいて」

「うん……」

なのはがうなずき、自分の席へと戻っていく。そこにはやはり、こちらの様子をうかがっているいつものメンバーがいた。シユウが小さく手を振ると、全員そろって微笑を浮かべる。我ながら良い友人に恵まれたものだなとつっすらと自嘲した。自分のような人間にと。

ホームルームが終わり、授業が始まり、そして終わっていく。気がつけば昼休みだ。まだ誰かと食べる気分にはなれないので、シユウは自分の席で一人で弁当を広げる。シユテル手作りのもので、家を出る時に渡されたものだ。最近の学校での一番の楽しみがこの弁当になっっているような気がする。

その弁当に舌鼓を打っていると、聞き慣れた、聞きたくない声がか

すかに聞こえてきた。

「すみません、西崎先輩はいらっしやいますか？」

シュウの頬が引きつる。なぜここに、と思いながら教室の出入り口を見る。クラスメイトが先ほどの言葉の主である少女を連れてくる。少女の車椅子を押しながら。シュウの側まで来ると、少女が小さく頭を下げた。

「……………」

思わずそんな声が出る。少女は、文花は楽しそうに嗤った。

「そんな」と言わないでよ、お兄ちゃん。せっかく遊びに来たんだから」

文花の言葉を聞いて、周囲のクラスメイトが目丸くする。妹がいたのか、という言葉もかすかに聞こえてくる。シュウはそんな周囲の反応に戸惑いつつも、文花の服装を見て驚いていた。この学校の制服だ。

「転校してきたんだよ。お兄ちゃんに会いたかったから」

おお、という周囲の反応。いつの間にか、教室中のクラスメイトたちがシュウと文花の会話に耳を澄ませている。

「そっか、よく転校できたね。編入試験だった？ あれは？」

「これでも成績は良い方だから。あの程度なら簡単だよ」

その言葉にクラスメイトたちの笑顔が固まる。簡単か、とシュウも苦笑せずにいられない。結構難しいと聞いたことがあるのだが。

「だってこの足だからね。勉強しかすることがないし」

墓穴を掘った、とすぐに悟った。シュウは、そうだね、と答えることしかできない。それ以上の言葉を続けることができない。

「父さんと母さんは？」

「ほとんどお仕事。でも私が家にいる時は必ずどちらかがいてくれるよ。お兄ちゃんと違って」

にっこりと笑顔になって言うてくる。容赦なく責めてくることに少しだけ安堵する。それでいい、と。ただ、できれば。

「お兄ちゃんは、本当に何もしてくれないね。私から足を奪った張本人のくせに」

「ごういったことをここで、しかもわざわざ音量を上げてまで言わなくてもいいだろうに。」

案の定、周囲からは驚愕と困惑、軽蔑の視線が突き刺さった。シユウは疲れたようにため息をついて、小さく首を振る。自分が選んだ道とはいえ、まさか学校にまで来るとは思わなかった。

だが、それでもいい。「この妹が正しく生きるためなら、自分は喜んで学校生活を捨ててしまおう。いくらでも悪役になってやる。そう決意し、シユウは嘲笑を浮かべた。

「それで？ そんなくだらないことを言いに来たのかな？」

文花が目を瞠る。クラスメイトたちもシユウらしからぬ発言に驚き、困惑しているのがよく分かる。しかしシユウは言葉を止めない。それでクラスメイトが敵になったとしても、友達が一人もいなくなつたとしても、それで構わない。

「文花の人生は僕に関係ない。がんばれ、ぐらいは言っておくけど、気が済んだらさっさと帰るんだよ」

シユウは文花から視線を逸らすと、昼食を再開した。その様に文花が嫌悪と憤怒の入り交じった眼差しを向けてくるが、シユウは気にもとめない。すでにそこにいないかのように、文花を無視して食事を続ける。やがて文花は何も言わずに、出入り口へと戻っていく。

シユウを見る周囲の視線が軽蔑と嫌悪のものになっているが、シユウは甘んじてそれを受け入れる。横目で文花を見ると、文花の友達だろうか、下級生が迎えに来ていた。言葉を交わす文花の表情は、先ほどと違って自然なもので、とても柔らかい。優しい笑顔だ。

うん。これでいい。

一人満足して、シユウは薄く微笑んだ。

Side: Nannoha

なのはたちが屋上で昼食を取り、教室に戻ってくると、雰囲気が出る前とがらりと変わっていた。張り詰めるような緊張感が漂っている。同じことを感じ取ったのか、誰もが目を丸くしていた。

「何かあったの？」

フエイトが側の男子生徒に聞くと、先ほど起こったこと、シユウと文花の会話を詳しく教えてもらった。それを聞いて、なのはは悲しい気持ちになった。シユウはたった一人のために、生活の半分以上を占める学校で孤独になる道を選んだ。どれほど辛い選択だっただろうか、想像すらできない。

説明を聞いたアリサがすぐにシユウのもとへと走る。シユウの机の前に立つと、シユウは少しだけ顔を上げ、首を傾げた。

「どうしたの？　アリサ」

「どうしたのじゃないわよ！　あんだ、ね……」

アリサの声が尻すぼみになり、やがて消えた。シユウの視線に気圧されたと言っべきか。黙り込んだアリサに満足して、次にシユウはこちらを見てくる。しっかりとシユウと目が合い、そしてシユウの視線から意思を感じた。

何も言っな、と。

どうして、とは言わない。あまりにも悲しい選択だとは思っが、シユウの瞳からは断固とした決意を感じる。ここで自分たちが何か言っことは、シユウの気持ちを踏みにじることと同じだ。アリサもそう考えたのか、結局それ以上何も言わず、自分たちのところへと戻ってきた。

「シユウ君……」

周囲からの視線を受けるシユウは、しかしいつも通りの笑顔を見せる。欠伸をすると、机に突っ伏して昼寝を始めてしまった。

このことで自分にできることは何もない。そう思ったなのはは、せめてシユテルに連絡だけはしておこうと念話を送った。

Side::Stern

『わざわざありがとうございます、なのは。助かりました』

シユテルはなのはとの念話をその言葉で終えた。どうしたものかと考えるが、学校のことでは自分ができることは何もない。学校にすら行っことがないのだから。

せめて、夕食はシユウの好きなものを用意しよう。

シュテルはそう決めると、買い物に行くために立ち上がった。

夕方、帰宅したシュウがいつものように自宅での風呂を終えてこちらの部屋へと入ってくる。シュテルもいつものようにシュウを招き入れると、夕食の準備を始めた。

リビングでのいつもの夕食。いつも通りの夜。レヴィが騒ぎ、ディアーチエが怒り、ユーリが笑う。本当にいつも通りだ。その光景を、シュウはいつも以上に楽しそうに眺めていた。

「シュウ。大丈夫ですか？」

思わずそんな言葉が出ていた。シュウは一瞬怪訝そうに眉をひそめたが、すぐに納得したのか何度かうなずく。

「なのはから聞いたの？」

「はい。昼頃に念話を受けました」

「そっか。うん、大丈夫だよ。気にしないで」

そう言うシュウの笑顔はいつも通りのもののようにも見える。だがその笑顔が作られたものだとすぐに気がついた。しっかりと見てみれば、今にも泣き出しそうな気配がある。かなり無理をしているのだらう。

「シュウ……」

声を掛けると、シュウは苦笑した。鋭いなあ、と。

「帰ってきたらみんながいる。今の僕には帰る場所がある。それだけで……十分だよ」

それ以上はシュウは何も言わなかった。食事を再開し、家族との会話を花を咲かせる。その横顔はとても幸せそうだ。

よくない傾向だとは思う。シュウは妹を優先するあまり、自分のことを蔑ろにしすぎている。例えば妹がそれで正しく生きていけたとしても、シュウの心が壊れかねない。それは、嫌だ。心の底からそう思う。

だがシュテルが手を出すことはできない。魔法のことならともかく、文花はこの世界で生まれ、この世界で生きている一般人だ。魔力を持っているとはいえ、自分が関わることはできないだらう。そのこ

とをとても悔しく思う。自分は無力だと思ってしまふ。せめてシュウの隣にいよう、そう考え、シュウの手を握る。

そんなシュウテルの心情を知ってか知らずか、シュウはわずかに驚きつつも、どこか照れくさそうに微笑んだ。

台風

平日の朝、シユウはいつもより少し早く目を覚ました。窓からの明かりはなく、部屋は暗いままだ。なぜこんな時間に起きてしまったのだろうと首を傾げ、すぐに気がつく。窓の外から風と雨の音がうるさく聞こえていた。立ち上がって見てみると、強い雨が窓を叩いている。まさに暴風雨だ。

シユウはその様子をしばらく眺め、なるほどと納得してまた布団に潜った。ただの台風だと。

いつもの時間に起きたシユウは、いつも通りに学校の準備をする。相変わらず雨が窓を強く叩いていた。暴風を含むいくつかの警報が出ていそうだが、とりあえず準備だけは済ませておく。準備を終えて、シユテルたちの部屋に向かうために玄関へ。扉に手をかけ、

「……………」

開けるのを躊躇した。廊下は雨も風も入ってくる構造だ。当然ここを開ければ、とてつもない暴風がシユウを待っていることだろう。そう考えるともう部屋で寝てしまおうかと思っただが、そうなるとシユテルたちが迎えに来る。シユテルたちが濡れるくらいなら自分が濡れよう、と判断して扉を開けて、シユウはすぐに眉をひそめた。

風も雨もない。通路にガラスがあるわけでもないのに、なぜか通路に入ってくるはずの雨は途中で弾かれてしまっている。よく見ると、その現象が起っているのは自分とシユテルたちの部屋を繋ぐ廊下だけで、それ以外はやはり容赦なく暴風に襲われている。

「……………あぁ、結果か」

どのような結果なのかは知らないが、雨よけ程度の簡単なものを張っているのだろう。気合いを入れた自分を馬鹿らしく思いながら、シユウはシユテルたちの部屋へと向かった。

リビングのテーブルにはすでに朝食が並んでいた。全員がそれぞれ

れの席に座り、テレビを、ニュースを見ている。

「おはよう」

シュウが声をかけると、それぞれが挨拶を返してくれる。シュウは嬉しそうに笑いながら、自分の席に座る。シュテルが入れてくれたお茶をありがたく受け取った。

「今日はずっとこんな天気だったぞ」

レヴィの残念そうな声。なぜみんなニュースをと思っていたが、どうやら天気を気にしていたらしい。

「警報は出てる？」

シュウの問いに答えてくれるのはユーリだ。

「はい。大雨、洪水、暴風、波浪の四つの警報が出てましたよ」

「うわ、そんなに……。学校は休みかな」

「そうなんですか？」

「うん。暴風警報が出たら休み。後で一応電話して確認するけど」

へえ、とその場にいるシュウ以外が驚いていた。どうやらこういったことは知らないらしい。学校に行かないのなら無理もないことだとは思いが。

「とりあえずは先に朝食だ。冷めるぞ」

「ああ、そうだね。いただきます」

ディアーチェの言葉に全員が手を合わせ、食べ始めた。

食事後、学校に電話をして確認してみると、やはり今日は休みという事になった。安全のために出歩かないように、という注意も受けたが、言われるまでもなくこんな嵐の日に出歩く物好きはいないだろう。

「よし……じゃあ出かけてくる……」

前言撤回。目の前にいた。レヴィが元気よく立ち上がり部屋を出て行くところと待て、とディアーチェが声をかける。レヴィが不満げな表情で振り返ってきた。

「どこに行くつもりだ？」

「遊び」

「この嵐の中で外に遊びに行く奴があるか！ 大人しくしている！」
ディアーチェの雷が落ちて、レヴィは渋々といった様子で席に戻る。レヴィにとって外の天気は関係ないらしい。

洗い物を終えて全員がリビングに集合する。ここから先は今日の予定の話し合いだ。さすがに自分は邪魔だろうと席を立とうとしたが、それを見たシュテルがシュウを見て首を振る。

「構いません。聞かれて困るものでもありませんから」

「……いいの？」

「何を令更」

シュテルの言葉にシュウは苦笑。いすに座り直すと、それを見計らっていたのかディアーチェが改めて咳払いをする。全員の視線がディアーチェに集中して、その一つ一つをしっかりと見ていく。やがてディアーチェから出た言葉は、

「今日は予定がない。休みだ。好きに過ごせ」

という簡単なものだった。え、と驚いて啞然としているシュウを置いて、他の面々はそれぞれが行動を始める。シュテルとディアーチェは二人で何かを話し合い、レヴィとユーリはテレビをつけておもしろい番組がないか探し始める。シュウは一人、やるべきこともなくぼつんと座ったままだった。

話し合いが終わったのか、シュテルとディアーチェが本を広げる。そこまで待つてから、もういいかな、とシュウはシュテルに声を掛けた。

「今日は本当に、みんな休みなんだね」

シュテルが顔を上げ、シュウを見る、いつもの無表情でうなずく。「はい。全員で掃除をしよう、ということにはなっていたのですが、この雨だと空気の入れ換えもできませんし」

そう言いながら窓の外に視線を移すシュテル。シュウも同じように見て、そうだね、とうなずいた。未だに雨が窓を強く叩いている。「そのため、今日は洗い物など最低限の家事だけになりました。せつかなので私は本でも読ませていただきます」

「ん。じゃあ僕は……。寝よう」

シュテルが呆れたようにため息をつく。そして席を立ってどこかへと行ってしまった。何か怒らせるようなことを言っちゃったかな、と勝手に深く座りながら考えるが、いつも通りの会話しかしていないはずだ。

背もたれに体を預け目を閉じると、すぐに眠気が襲ってきた。その睡魔に身を任せようとしたところで、何か柔らかいものが自分の体を覆う。少し目を開けると、毛布がかかけられていた。

「……シュテル？」

「風邪をひきますよ」

そう言いながら本を開くシュテル。シュウは少し嬉しそうに微笑むと、ありがと、と短く礼を言っておく。

「おやすみ」

「はい、おやすみなさい。良い夢を」

シュテルの言葉を聞きながら、シュウは眠りに落ちた。

次に目を覚ました時は正午だった。ぐっと伸びをして、周囲を確認する。部屋には誰もいないが、隣のキッチンから話し声が聞こえてくる。そちらへと視線を向けると、シュテルが入ってきた。

「おはようございます、シュウ。もうすぐ昼食です」

「……」
「うめん。何も手伝ってないね」

「お気になさらずに」

シュテルがテーブルの中央に置いた大きな皿にはドライカレーが山盛りになっていた。自分たちの席にはそれよりも小さな皿を置いていく。その後すぐにディナーチェたちが戻ってきた。

「む、起きたかシュウ。ちょうど今から昼食だ」

「うん。うめん、手伝わなくて」

気にするな、とディナーチェが手を振り、それぞれが席についていく。皆で手を合わせ、食事を始めた。自分の好みの量を大きな皿から移していく。シュウは控えめ、レヴィは大盛りだ。

「シュウ、それだけでいいの？」

せっかくのドライカレーなのに、とレヴィが不思議そうに首を傾げ

る。本当にカレーが好きだなと思いつつ、シュウは一度だけうなずいた。

「さすがに寝起きたからね……。ちょっとつらい」

「そうでしょっね。おそろく少し残ると思いますので、後ほどまた食べてください」

シュテルがちらりとレヴィを見て、レヴィがうなずく。それをしっかりと見てしまったシュウは、二人に心の中で感謝する。どうやら気を遣わせてしまったらしい。こんなことならもう少し早く起きていれば良かったとも思う。

全員が食べ終わっても、まだお皿一杯分のドライカレーが残った。シュテルはそれを新しい皿に移し替え、ラップをかけて冷蔵庫へと持って行く。とても慣れた手つきだ。

「さて、シュウ。」二で問題が発生しているのだが」

唐突なディアーチェの言葉にシュウが首を傾げる。ディアーチェはシュウをまっすぐに見て、そしてすぐに視線を逸らした。言いにくそうにしていたが、やがて声を漏らす。

「夕食の食材が足りない」

「……ああ……」

窓を見る。相変わらずの嵐。いつになればやむのか、見当もつかない。

「とりあえず適当なくじでも作る。買い出しと、残る側は風呂の用意だ」

「くじはいいよ。僕が行く」

立ち上がりながら言つと、ディアーチェが少し驚いたように目を丸くした。すぐに手を振り、ディアーチェも立ち上がる。

「いやだめだ。風邪をひくかもしれないだろっ」

「誰でもいいから、あとで僕の部屋のお風呂も沸かしておいて。何を買ってくればいいのか」

「聞け……」

ディアーチェが苛立ちながら叫び、シュウはディアーチェに向き直る。シュウに見つめられ、ディアーチェが気まずそうに視線を逸らし

た。

「まだ何もやってないから、僕が買い物に行く。いいよね？」

いつもと変わらない口調と表情。それなのに、有無を言わさぬ雰囲気がある。ディアーチェはやれやれと首を振ると、財布をシュウに放り投げた。慌てながら受け取るシュウに、ディアーチェが告げる。

「必要なものは財布の中にあるメモに書いてある。すまぬが任せた」

「うん。了解」

シュウはうなずいて玄関へ。靴を履いている間にシュテルが見送りに来てくれる。何となく嬉しくなって振り返ると、シュテルの手には二着の雨合羽があった。

「……えっと……？」

シュウが戸惑っている、シュテルが雨合羽を差し出してくる。シュウがそれを受け取ると、シュテルもその場で雨合羽を着用した。そして一言。

「私も行きます」

「え、いやでも……」

「シュウ一人では心配ですから」

そこまで信用がないのか、と内心で苦笑いする。断る理由もないのでシュテルの言葉に甘えることにした。シュウも雨合羽を着て、一緒に外に出る。

すでに結界は解除していたのか、扉から出ただけで暴風に晒された。雨が容赦なく体を打ち付けてくる。部屋に雨が入らないように、シュウはシュテルが出たことを確認するとすぐに扉を閉めた。

「ちあー… がんばって行こうー」

風と雨の音で周囲の音が聞こえづらい。シュテルに聞こえるようにと大声でそう言つと、シュテルは黙ってうなずいた。

風の中、シュウとシュテルはスーパーまでの道のりをゆっくりと歩いて行く。豪雨のため視界も悪く、時折側を通る車に肝を冷やしてしまう。シュテルは大丈夫かと振り返ると、涼しい顔をしていた。それでも一応、声をかけてみる。

「シュテル！ 大丈夫？」

「はい、特に問題なく」

平然としたいつもの声。大声ではないのに風雨の音に負けずにしっかりと聞こえるのは何かしらの魔法を使っているのか。ならいいや、と笑顔で言っつて、シュウはまたゆっくりと歩き始める。

このままのペースでは帰りはとても遅くなりそうだとは思っつが、急ぐこともできない。しっかりと一歩ずつ歩いて、スーパーへと向かった。

時間をかけて買い物済ませ、自宅への帰り道。当然ながら帰りも嵐の中だ。買い物袋を何重にもして破れないようにして、しっかりと持っつて帰路を歩く。まだまだ家は遠い。歩くことそのものが嫌になっつてくるが、家に帰らなければ休むこともできない。しっかりと歩みを進めていく。

「……あ」

シュテルの漏らした声にシュウはその歩みを止めた。振り返ると、シュテルの視線は側の公園へと向けられている。そちらを見ると、子猫が数匹、木の下で小さくなっつていた。

「……連れて帰る？」

「いえ。親猫がいっつづれ迎えに来るでしゅっ」

そう言いつつ、シュテルは子猫たちへと近づく。シュウもその少し後ろについて行く。シュテルは雨合羽を脱ぐと、側に落ちている木の枝なども使っつて簡単ながら雨よけを作った。

「……ここで大人しくしててくださいね」

子猫の頭を撫で、シュテルが優しく言い聞かせる。子猫たちがかわいらしい鳴き声を上げた。ただ、少し大きさが足りずに数匹まだ雨にかかっつていたが。

「……シュテル。……」

シュウも雨合羽を脱いでシュテルに差し出す。シュテルは逡巡したが、しかしすぐに、ありがとっつございませと受け取った。脱いだ瞬間にずぶ濡れになっつている。今更遠慮しても意味がないと分かつたのだらう。

もう一組の雨よけを作り、子猫全てがしっかりと中に入れたことを確認して、二人は今度こそ家路についた。

「戻ったか……。なぜそれほど濡れておる！ さつさと風呂に入ってください！」

帰宅したシュウとシュテルを見たディアーチェの第一声がそれだった。言われるままにシュテルは風呂場へと向かい、シュウは自分の部屋の方へと向かう。当然ながら一緒に入るなどといった発想はない。

「ディアーチェ、ここに置いておくれ」

玄関に今なお水が垂れている買物袋を置くと、ディアーチェはすぐにそれを回収した。

「うむ。助かった。そちらの部屋もユーリが沸かしておいてくれる。さつさと入ってください」

「うん。そうするよ」

手を振り、自室へと戻る。着替えを用意してまっすぐに風呂場へ。浴槽にはお湯が満たされ、手をつけてみると少し熱めの温度になっていた。手早く服を脱ぎ、軽く体を洗ってから湯船に浸かる。雨で冷え切っていたので熱めのお湯が気持ちいい。

ゆっくりと長く息を吐いて口元まで湯船に浸かる。無事に家に帰り着いて安心してしまったのか、眠気が襲ってきた。いつそのこと寝てしまおうかと考えてしまう。

「でもみんなが心配しそうだしねえ……。早めに上がらないとねえ……」

ぼんやりと天井を眺めながらそんなことをつぶやき、うつらうつらと船をこぐ。

そして、いつの間にか意識は夢の中へと潜ってしまった。

Side::Stern

風呂から上がり、リビングを見回す。シュウの姿がないことに首を傾げ王に聞いてみるが、風呂に入りに行ったきりだとのことだった。

「遅いですね……。少し見てきます」

「うむ。シュウの部屋までなら結界を張っておる。濡れる心配はないぞ」

「ありがとうございます」

一礼してシュウの部屋へと向かう。鍵は開いていたので一声かけてから中に入り、自分たちの部屋と同じ構造なのでまっすぐに風呂場へと向かう。電気がつけられ、シュウの着替えもそこにあった。

「シュウ。いますか？」

呼びかけてみるが返事はない。そっと扉を開けて中をのぞき、シュテルは大きなため息をついた。

湯船に浸かったまま、シュウはとても気持ちよさそうに眠っていた。これがリビングでなら放っておくのだが、風呂だとさすがにそういうわけにもいかない。シュテルは中に入り、シュウの肩を揺する。

「シュウ。起きてください。シュウ」

しばらく揺るとシュウが目を開け、シュテルの姿を確認する。そして、

「……………」

声にならない悲鳴を上げた。

「情けない……情けなさすぎていつそ死にたい……」

リビングでシュウはずっとそんなことをつぶやいていた。風呂場でのやり取りを聞いてからは、レヴィとユーリ、ディアーチェまでが笑いを堪えている。

「まあ、なんだ。見られて減るものではないだろう」

「それはそうなんだけど、叫びそうになった方も含めてもっ……………」

「これはだめだな、とディアーチェが苦笑して夕食の準備を始める。

シュテルは意気消沈したままのシュウの隣で、どうしたものかと考え続けていた。だがいい考えも思い浮かばないので、仕方なくシュウの手を握る。シュウが顔を上げて、うつろな瞳で自分を見てくる。目に涙が溜まっているのを見て、もっ少し他の起こし方を考えれば良かったかと後悔した。

「シュウ。すみませんでした」

「いや、寝ちゃった僕が悪いから。気にしないでね」

「そう、ですか。……では、ありがとうございます」

シュウが、何が？ と首を傾げる。

「子猫のことです。シュウまで濡れる必要はなかったのですから。ありがとうございます」

それを聞いたシュウは、しばらくシュテルと視線を交わした後、少し顔を赤くしてシュテルから視線を逸らす。照れくさそうに頬をかきながら、気にしないで、と笑った。

その笑顔を見て、シュテルは一先ず安心する。とりあえずは大丈夫だろう、と。そう思ってシュテルもつつすらと笑顔を浮かべた。

雨はまだまだ降り続け、風も強いままだ。だがたまにはこんな日もいいだろう、と考え、そんな思いがあることにシュテル自身が少し驚いていた。

第四話

文花が転校してきてから一週間が過ぎた。文花は毎日のようにシユウのクラスに顔を出す、というふうなこともなく、あの一件以後は平穩に過ごしている。だがそれでも、シユウはクラスで孤立していた。あの日以来、シユウに話しかけてくる者はかなり少なくなっている。事情を知っているのはたちと、友人が一人。ただシユウ自身がほとんど会話に応じようとしないので、なのはたちもそれを察してか積極的に話しかけてくることはない。

今日も特に何かがあるわけでもなく、普段通りに授業を終えた。

放課後はいつも通りに自宅へど戻り、いつも通りにシユテルたちと食事を取る。普段と変わらない日常だ。嵐の前の静けさ、とも取れるが、それでもシユウは満足だった。

ある日の放課後。ホームルームを終えて、シユウはすぐに帰り支度を済ませる。さあ帰ろう、と席を立ったところで、

「お兄ちゃん。遊びに来たよ」

来たか、とシユウの表情は自然と冷たくなった。振り返ると、文花が笑顔で自分を見上げていた。小さくため息をついて、いすに座り直す。気がつけば、いつの間にか教室が静まりかえっていた。やれやれと小さく首を振りながら、文花を見る。

「なにしに来たのかな？」

シユウの言葉に、文花は笑顔を崩さない。

「お兄ちゃんとお話をしに来ることは、いけないこと？」

「……問題ないね。うん。何の話かな」

わざと明るい声を出す。文花もどことなく嬉しそうだ。

「そろそろお兄ちゃんに帰ってきてほしいなって。だめ？」

「だめ」

「せっぴっぴっ」

くすくすと楽しそうに嗤う。自分の答えが変わるわけがないと分

かっているだろうに、なぜこの妹は何度も聞きに来るのだろうか。そう考えていると、不意に文花の笑い声が止まった。じつとこちらを無表情に見つめてくる。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「シュウ！ 一緒に帰ろうぜー！」

唐突な大きな声。シュウが驚いて目を見開き、文花はびっくりと体を震わせる。シュウが教室のドアを見ると、そこにいたのは別のクラスの人だった。茶色の髪の少年で、カバンを肩に担いでいる。へらへらとした締まりのない笑顔が特徴の、シュウの海鳴市での最初の友人。

「あれ？ なんやこの空気。俺、タイミング間違った？」

友人は教室を見回して困ったような声を漏らす。笑みは変わらない。まいったなー、とやはり笑い続ける。

「まあどうでもええわ。帰るで、シュウ」

友人がシュウの席まで歩いてくる。そしてシュウのカバンを掴むと、さっさと歩いて行ってしまふ。シュウは慌ててその背を追おうとして、

「……じめん」

文花に小さな声で言う。聞こえてはいないだろう。最後に少しだけ見えた文花の表情は、感情のない無表情だった。

友人に追いついて、二人で並んで廊下を歩く。途中で友人にカバンを返してもらい、ありがと、と礼を言っておく。友人はやはり笑顔だった。

「ちっきのが噂のシュウの妹やな？」

友人の問いかけに、シュウは神妙な面持ちでうなずいた。この友人は文花のことをどう見たのだろうか。できれば、あまり悪い印象を持ってほしくはないのだが、そんなシュウの心情など知らずに友人が言う。

「いやあ、可愛い子やったな！ なあ、シュウ。紹介してくれへん？」

「……君はいつも通りだね。安心するよ」

「あっはっは。俺はみんなの癒やしやからな！」

自分で言うなよ、と笑い合う。学校では孤立しつつあるシュウだが、この友人は変わらぬ態度で接してくれる。シュウの事情など一切知らないというのに、それがとてもありがたく、嬉しかった。

校門まで来て、友人が手を振る。また明日、と。シュウも手を振って、友人と別れた。

自宅で荷物を置いてシュテルたちの部屋に向かう。今日は全員がリビングにいた。台所からはカレーのいい匂いが漂ってくる。食欲がそそられる。

「シュテルん、ちょっとだけ……」

「だめです。夕食の時間まで我慢してください」

「ぶー」

会話の内容から、レヴィがカレーのつまみ食いをお願いしているのだろう。相変わらずだなと思いつつ、シュウは自分の席に座った。

「おかえりなさい、シュウ」

「ただいま、シュテル」

挨拶を交わした後、シュテルがお茶を入れてくれる。礼を言って受け取り、のどを潤す。冷たくて美味しい。

「ねえ、シュテルん」

「だめです」

「っー……」

シュウから見て二度目のやり取り。レヴィは何度もキッチンの方を見てうずうずとしている。だが何度頼んでも無理だと悟ったのか、レヴィは唐突に立ち上がると部屋を出て行くしゅする。

「レヴィ、どこに行くの？」

シュウが聞いて、レヴィが答える。

「遊びに行ってくるー！ お腹を空かせてくるー！」

そう言って玄関へと向かってしまった。シュウは座ったままそれを見送り、苦笑してしまふ。

「まったく、あやつは……」

ディアーチェの声が聞こえ、

「でもレヴィらしくですよ」

そんなユーリの言葉。二人とも表情は柔らかい。今日に限らず、何度もあった会話でもある。今更驚くようなことでもない。ただ、少し思っている。

「少しぐらい味見させてあげればいいのに」

そうつぶやく。シュテルは少し顔を上げて、肩をすくめた。

「そうですね。帰ってきたら、小皿で少しだけ出してあげましょう」

そうしてあげて、とシュウが言うと、シュテルは静かにうなずいた。

Side: Levi

公園の子供たちとひとしきり遊び、皆が帰るのを見届けてレヴィも家路につく。そろそろ夕食の時間でもある。今日はカレーなのでとても楽しみだ。自然と足が軽くなり、スキップしてしまう。不思議な音程の鼻歌を歌いながら家へと急ぐ。

「待つて」

背後からの声に、レヴィは足を止めた。振り返ると、そこにいたのは車椅子の少女だ。シュウに写真を見せてもらったので、この少女が誰なのかはすぐに分かった。

「シュウの妹、だよな。ボクに何か用？」

シュウとの関係は聞いているが、自分との繋がりはないはずだ。首を傾げて問いかけるが、文花は何も答えずにレヴィを見つめ続ける。意図も目的も分からないので、レヴィはどうしたものかと反応に困ってしまう。

「何も用がないなら、ボクは行くけど……」

そこまで言ったところで、自分の頬を何かがかすめていった。レヴィの頬に傷が生まれる。レヴィはしばらく黙り、文花をじっと見る。

文花の手に握られているのは黒いカード。それを起点として魔力が渦巻いている。おそらくはデバイスか。シュウの両親が魔導師なら、その娘が魔力を持っていても不思議ではない。デバイスを持っている理由も、自分を襲う理由も分からないが。

「貴方たちが、お兄ちゃんを惑わしているんでしょっ？」

文花の声。レヴィは首を傾げる。惑わすとはどういことか。

「貴方たちさえいなくなれば、お兄ちゃんを縛るものはなくなる。私に従ってくれる。違っ？」

何を言っているのかいまいよく分からない。だが自分が何を言おうとも、この少女は納得しないだろうことは何となく分かる。レヴィはデバイスを展開すると、瞬時に結界を張った。得手としている魔法ではないため規模はそれなり程度だが、二人だけの戦いなら十分だろう。

「うん。少しだけ遊んであげる」

朗らかにそう言い、バルニフィカスを構える。文花の表情が一瞬怯えたような表情になるが、すぐに引き締まったものになりデバイスとバリアジャケットを展開させていく。そうして展開されたデバイスの形状は、鎌。バリアジャケットは黒いローブ。展開が終わると同時に、文花の体がゆっくりと浮く。

「おお。すごいー！ かっこいいー！」

「あ、ありがとう……」

少しだけ照れたような表情を浮かべ、すぐにはっとしたように表情を引き締める。あの一瞬の照れ笑いが素の性格なのだろう。

「借り物のデバイスなんだけどね」

「あれ？ そうなの？ まあどっちでもいいけど」

お互いにデバイスを構える。張り詰めたような緊張感が場を支配する。この緊張感が、レヴィにとっては心地いい。さて、どう戦おうかと考えを巡らしたところで。

家族の顔を思い出した。シュウの顔を思い出した。シュウの悲しげな表情を思い浮かべてしまった。

……そう、だよな。

家族とは大切なものだ。レヴィもシュテルやディアーチェたち、家族を傷つけられると悲しいし当然怒る。なら、今ここで文花と戦ったとすればどうだろうか。

シュウの悲しげな表情を連想する。もしかすると嫌われるかもし

れない。それだけは、嫌だった。

だから、文花がこちらへと向かってくると分かっても、レヴィはデバイスを下ろした。自分らしくない、と思いつつも、文花の魔力が込められた一撃を、抵抗せずに受け止めた。

新しい家族に、シュウに嫌われないようにするために。

ただ、気づくべきだったのは、シュウにとってレヴィもまた大切な家族だったということか。

地に伏したレヴィを見下ろす文花は、蒼白になっていた。なんで、どうして、と中身のない疑問ばかりを口に出している。やがて文花は自分のデバイスに向けて叫んだ。

「非殺傷設定っていうのがあるんじゃないのー！」

次に聞こえてくるのは少し低めの女の声。それがデバイスの音声なのだろう。

「はい。非殺傷設定はあります」

「じゃあどうして……！この人、今にも……！」

「設定していません。非殺傷設定があるとは言いましたが、設定しろとは言われておりません」

「なに、それ……」

愕然とした文花の声。なるほど、とレヴィは理解する。文花の目的は自分たちを脅してシュウから遠ざける、というものだったのだろう。殺傷設定だったのは偶然ということか。

「どうしよう、私、私が、殺し……」

どうやら文花は自分たちの事情も知らないらしい。

まだ生きてるんだけど。ちょっと駆体の維持は難しいけど。

心の中で苦笑して、しかし声には出さない。レヴィは自分の家族へと念話を送る。内容は単純、駆体の再起動をするからご飯はいらないよ。

「おめでとーじやいませ」

デバイスの声が再び聞こえる。レヴィはそちらへと意識を向ける。

「何が！」

「これでお兄様と同じですね。同じ人殺しです。おめでとうございませす」

「これがデバイスの言うことか。主人を責める発言をして。だが、そう言えば文花は借り物のデバイスだと言っていた。なら主人と思われていなくても当然かもしれない。

「人殺し……。私、が……？」

「ええ、そうですとも」

文花はしばらく何かをぶつぶつとつぶやいていたようだが、やがて狂ったように笑い出した。笑い声は周囲の空気を振るわせる。狂ったような哄笑。

「あはは、あははははー！」

文花がきびすを返す。レヴィに背を向けて歩き始める。

「殺しちゃった！ 私が、殺した！ あははははー！」

笑いながら文花は歩いて行く。心が壊れた少女はそのまま歩き去って行く。レヴィは黙ってそれを聞いている。

後悔と悲しみの哄笑を最後まで聞いていた。

Side:Stern

レヴィの念話を受け取った時、シュテルはシュウとともに、帰りの遅いレヴィを迎えに外に出たところだった。レヴィにどういうことかと念話を返すが、返事がない。何があったのかと不安が心を支配する。

唐突にシュウが足を止めた。遅れてシュテルも足を止めて、そしてそれを見た。

倒れて動かない、大きな傷を負ったレヴィを。

「レヴィー」

シュウとシュテルが駆け出し、すぐにレヴィのもとにたどり着く。二人がレヴィの顔をのぞき込むと、レヴィがゆっくりと目を開いた。

「やつほ、シュウ。べっしたの？ なんて泣いてるの？」

レヴィの声はいつも通りだ。だがその体は全く動かない。

「ど、どつしよう！ 病院？ 救急車？ アースラに連絡した方が……！」

混乱するシュウをシュテルは手で制し、レヴィをしつかりと見る。レヴィもシュテルをまっすぐに見つめ返してきた。

「駆体の再起動、とのことでしたね。大丈夫ですか？」

「うん。平気。あ、でも早く帰りたいから手伝ってほしいかも」

「分かりました。私から王とユーリにも伝えておきます」

よろしくー、とレヴィが笑う。こんなことになってもこの子はいつも通りだ。

「それで、レヴィ。何があったのですか？」

「別に？ ちょっと文花って子と遊んだだけだよ」

そうですか、とシュテルは目を伏せた。シュウは大きく目を見開き、絶句している。シュテルはレヴィの頭を撫でると、優しい声音で言った。

「後ほど、念話で構いませんので詳しいことを教えてください」

「うん。それじゃあそろそろ、行くね」

「はい。行ってらっしゃい、レヴィ」

レヴィが笑い、ゆっくりと体が溶けていく。そしてあっという間に光の粒子となり、消えてしまった。シュテルは小さくため息をつき、そしてシュウはレヴィが消えてしまった場所をいつまでも見続けている。

シュテルはそんなシュウへと声をかける。

「心配しないでください、シュウ。レヴィは駆体の再起動をするだけです。すぐに戻ってきますよ」

「……そっか」

シュウが静かに立ち上がる。それにシュテルも続き、こっそりと深呼吸した。いくらシュテルでも、家族に手を出されて怒らないわけがない。内心では激しい怒りを感じているが、今ここで自分が動けばレヴィの行動の意味がなくなる。だからこそ、ひとまずは王とユーリに相談しよう。

帰りましょう、とシュウを見て、シュテルは息を呑んだ。

「ちょっと用事ができた」

そう言うツシュウの表情は、何も無い。完全な無表情。喜怒哀楽のどれもが感じられない、人形めいた表情になっている。だが、なぜかその表情を見ているだけで背筋が冷たくなってくる。

今更ながら、シュテルは気づく。シュウは感情をはつきりと見せてくれるが、怒りだけは今の今まで見たことがなかったと。そして、これこそがシュウの怒りの表情なのだ。

完璧なまでに感情を廃した表情のまま、シュウはシュテルにきびすを返した。そのまま歩き去って行く。

「シュウー！ 待ってくださいー！」

呼ぶが、シュウは止まらない。歩いて行ってしまふ。シュテルはわずかに迷ったが、一先ずシュウを追いつつ声をかけ続ける。返事を一切返してくれないことが、とても悲しく感じられる。

今のシュウに何を言っても無駄だろうことを悟り、シュテルはディアーチェとリンディに念話を送った。

静かに、されど激しく憤怒と憎悪の炎を燃やし、シュウは愚昧の元へと向かう。その体の中で、心の中で、誰かがため息をついていたことを、シュウには知る由もない。

月見

シュテル宅のキッチンにて。てきぱきと作業を進めていく者が三人いる。シュテルとディアーチエ、それにシュウだ。三人はそれぞれ作業を分担してあるものを作っていた。残りの二人、ユーリは足りなくなった材料の買い出しや家事などをこなし、レヴィはそんなユーリの手伝いだ。

「このペースなら間に合つかない？」

手を動かしながら口を開くシュウ。それにうなずくのはシュテルだ。

「こちらの団子は大丈夫ですね。王、そちらはどうでしょう？」

「問題ない。予定の一時前には仕上がるぞ」

「さすがです。シュウ、こちらも急ぎましょう」

作業のスピードが早くなり、シュウも慌ててそれに倣う。二人が作っているのは団子だ。白と黄色の二色で、ほとんどが白の団子。昼過ぎから二人で大量生産をしている。ディアーチエは月を模した料理だ。子鴉を唸らせてくれる、と張り切っていた。

今日は十五夜で月見だ。なのはたちから誘われたのをきっかけに、知人友人を多数誘っての大きなものとなっている。高町家の庭で皆で集まる予定だ。月見団子はなのはたちに誘われた時に作って持つて行く、とシュテルが申し出て、今現在作成中というわけだ。

「むづ……。たまに変な形になる……」

シュウが丸めた団子を見て唸る。ほとんどが綺麗な円形で作れるのだが、なぜか時折歪な形になってしまふ。やり方を変えているわけでもないのにとシュウが首を傾げていると、シュテルがシュウの手からそれを取ると、しばらく眺めた後、そのまま他のものと一緒に並べてしまった。

「いや、失敗作だよ？」

慌ててそう言つと、シュテルが首を振る。

「味が違つわけでもありません。もしも残れば私たちが食べればいい

「じやです」

「それはそうだろうけど、純粹に恥ずかしいなあ……」

苦笑いしつつ、次の団子を丸めていく。そして気づけばまた歪な形に。あ、とシュウが立ち尽くし、シュテルはやれやれと首を振った。

「がんばってください」

「……はい」

肩を落としながらも、シュウは団子作りを続けた。

太陽が西へと沈み始めた頃に、シュウたちは高町家へと出発した。全員の両手に荷物があり、それら全てが団子や料理などだ。購入した材料が多かったために、団子は少し作りすぎたかもしれない。

高町家に到着した頃にはすっかり日が沈んでいた。インターホンを押すと、すぐになのはが出迎えてくれる。いつもの、嬉しそうな笑顔だ。見ているこちらもつい笑顔になってしまう。

「いらっしゃい！ もうみんな集まってるよ」

なのはに案内されて庭へと向かう。以前の七夕と同じように、様々な料理が載せられたテーブルがいくつも並んでいる。シュウたちは空いていたテーブルに料理と団子を並べていく。それに気づいた皆がすぐに集まってきた。

「団子、すごい量だね。シュテルが作ったの？」

「シュウにも手伝ってもらいましたよ。やはり作りすぎましたか」

「どうだろう……？」

シュテルとなのはがそんな会話を交わす。その側ではディアーチェとはやてがお互いの料理を並べて唸っている。

「さすが王様や……。月見らしさを出しつつ、家族の好みにもしっかりと応えるなんて……」

「そう言う貴様」……。月というテーマで考え得る最高のものをつだな。少しばかり見直し……」

「そうやるー！ お姉ちゃんって呼んでくれてもいいんやでー！」

「なぜそうなるー！ 調子に乗るな子鴉！」

二人で漫才のようなものを始めていた。シュウは微笑ましくそれ

を見つめながら、月見団子を一個手に取り、口に入れる。満足そうにうなずいた。

レヴィとユーリは夜空の満月を見て楽しそうにはしゃいでいる。それを見守るのはフェイトとリインフォースだ。時折会話を挟みつつ、月を見ている。どこか感慨深そうに。そっとしておこっ、とシユウは視線を逸らした。

「……………何やってんのよ」

声を掛けられて振り向くと、アリサが呆れたような表情で自分を見ていた。その手に持った紙皿にはディアーチェの料理。何口か食べて、うん美味しい、と言ってくれる。自分の料理ではないが、その言葉にとっても嬉しくなった。

「シユウ君は食べないの？」

そう聞いてくるのはさすがだ。いくつかの料理が載った皿を差し出してくる。シユウは礼を言いながら受け取り、それを口に入れる。ディアーチェが作ったものではないので、誰かが持ち込んだものだろうか。

「美味しいね」

「でしょ？ さすがは桃子さんよね」

ああ、桃子さんが作ったのか、とその姿を探す。縁側で夫と二人並んで座っていた。邪魔してはいけなйдらうと思ひ、アリサたちへと視線を戻す。同じように桃子たちを見ていたアリサもシユウへと視線を戻してきた。

「感想は次の機会に伝えるよ」

「それが無難ね」

三人で笑いながら料理に舌鼓を打つ。ディアーチェや桃子以外にも、はやてやリンディが持ち込んだものもあるらしい。テーブルをよくよく見てみると、自分たちが作ったもの以外にも団子がある。アリサたちに聞いてみると、「こちらも桃子が作ったものだそうだ。

「あのだ、シユウ。聞きたいんだけど」

「んっ」

料理を食べて回っていると、アリサが突然そんなことを言ってき

た。シユウが振り返り、首を傾げる。アリサはしばらく言い淀んでいたようだったが、やがて意を決したかのようにシユウを見据えた。

「正直なところ、シユテルとどうなのよ」

「ぶふっ！」

盛大にむせた。苦しそうに何度も咳をしていると、誰かが背中をさすってくれる。差し出されたコップを受け取り相手を見ると、ずずかだった。礼を言いながらコップに注がれていたジューズを少し飲む。ふう、とため息をついた。

コップをテーブルに置き、アリサたちへと向き直る。満面の笑顔で言うてやる。

「意味が分からないね！」

「シユテルのこと、好きなんですよ？」

「アリサちゃん、ストレートすぎるよ……」

思わずずずかが苦笑する。シユウはそんな二人の様子をしばらく眺めながら、やがて困惑した表情を浮かべた。

「もしかして僕って分かりやすい？」

「……隠してるつもりだったの？」

そう聞いてきたのはずずかだ。シユウの引きつった笑みを見て、アリサとずずかはそろってため息をついた。呆れ果てたかのようなため息だ。

「まあ……がんばりなさい。あたしたちが言いたいのはそれだけよ」

「応援、してるから」

アリサとずずかの言葉に、シユウはどこか複雑そうな表情をしながらも、ありがとつと言葉を返した。

シユウは時折こちらに来る人と会話をしながら、庭の隅でぼんやりと月を見ていた。他の皆はまだ食事や会話を続けているが、シユウはいつものごとくあまり混じろうとは思えない。魔法関係の話になるとほとんど分からないのはいつものことだ。

「また一人ですか、シユウ」

声をかけられ、そちらを見る。シユテルがそこについて、コップを二

つ持っていた。そのうちの一つを差し出してきたので受け取り、少し飲む。グレープジュースだ。

「何をしていたのですか？」

「……月見？」

「……皮肉にも聞こえますよ。ですが貴方の場合はそのままの意味なのでしょーね」

どうせなら一緒に見ましよう、とシュテルがシュウの隣に立つ。二人で月を眺める。普段は意識して見ないが、改めて見ると綺麗だなと思う。月の周りには幾つもの星が寄り添うように輝いていた。シュウはシュテルを一瞥して、すぐに月へと視線を戻す。

シュテルは自分をどのように思っているのだろう。好きか嫌いかではなく、足を引っ張っていないかどうかだ。あの時、シュウと共になければならぬことをシュテルは構わないと言ってくれていたが、それでもやはりいつも気になってしまう。自分という存在が、シュテルを、シュテルたちを縛る鎖になっていないか。

そんなことを心の内で悶々と考え続けていると、不意に手に温かいものが触れた。シュテルの手だ。シュテルを見ると、真剣な眼差しでこちらを見つめている。

「シュテル……？」

シュテルはしばらくシュウを見て、そして言う。

「余計なことは考えなくて構いません」

「え……？」

「私がしたいからそうしただけです。貴方は鎖になどなっていませんよ」

シュウが目を丸くする。どうして、とつぶやくと、シュテルはどこか呆れたようにため息をついた。声に出ていましたよ、と短く告げられ、シュウの顔面が蒼白になっていく。その様子を見て、シュテルは薄く苦笑を漏らした。

「貴方は貴方の思うように生きてください。私も四六時中貴方と共にいなければならぬわけではありませんし、私たちもやりたいようにやりますよ」

魔力は届けに来ますので、とシュテルがシュウの手を包み込むように握る。温かいものがシュウの中へと流れ込んでくる。シュウはそれに身を任せ、微笑んだ。

「ありがとう、シュテル」

それを聞いたシュテルは、いつもの無表情で、ただどこか柔らかい雰囲気です。お気になさらずに、とうなずいた。

夜も遅くなってきたところで未成年者は解散となった。皆と挨拶を交わして、シュウたちは家路につく。シュウたちの両手には来た時と同じように荷物があり、余り物の料理などだ。それぞれの家庭がそれなりの量を作ってしまったため、各自好きなものをパックに詰めて持って帰ることになった。

「帰った後は風呂の用意だな。あとは……まあ今日は早めに休むとしてよ」

ディアーチェがこの後の予定を組み立て、すぐにレヴィが異を唱える。

「えー！ せっかく食べ物もあるんだし、家でもお月見したい！」

「む……。気持ちは分かるが、しかしだな……」

「いい考えだと思えます！ ディアーチェ、お願いします！」

「よし分かった。帰ったら二次会だ」

レヴィとユーリが歓声を上げる。シュウはその様子を一步離れて見守っていた。明日も学校があるため早めに休みたいというのが本音ではある。だがたまには夜更かしもいいだろう。

「シュウ。休む時は遠慮なく」

シュウの考えを察したのか、シュテルがそう言ってくれる。シュウは大丈夫だと応えつつも礼は言った。

帰宅後は順番に風呂に入り、その後料理を温め直してベランダに持って行く。シュテルとディアーチェがどこからか小さなテーブルを持って来て、そこに料理を並べた。五人で並んで座り、月を眺めながら料理を食べ始める。

「今日は晴れて良かったですね」

ユーリの言葉に全員がうなずく。曇りなら月など見られないし、雨ならまず中止だった。

のんびりと話を続けながら料理を食べていく。どれほどそうしていたかは分からないが、いつの間にかレヴィとユーリは眠っていた。最初に気づいたのはディアーチェで、困ったやつらだと言いつつもユーリを背負って室内へど入っていく。シュテルもレヴィを背負い、室内へど姿を消した。

残されたシュウは団子を食べながらぼんやりと待つ。すぐに二人が戻ってきた。

「我は中に戻るが、どうする？」

「私は……シュウに任せます」

二人の視線が自分に注がれる。シュウはそれを感じながら、団子をまた口に入れる。

「もう少しだけ、ここにいていいかな」

「構わん。空いている皿は下げておくぞ」

ディアーチェがいくつかの皿を持って室内へど戻った。

Side::Stern

ディアーチェの姿が消えてから、シュテルはシュウの隣に腰を下ろした。団子をつまみ、口に入れる。我ながらなかなかうまく作れたと思う。ただ桃子が作ったものを食べた後では、まだ改善の余地があると理解できる。

隣のシュウを見ると、何を見るでもなくぼんやりと夜空を眺めている。思い出したかのように手が動き、団子をつまんでは口に入れていく。何を考えているのかまでは分からない。

静かな時間がゆっくりと流れていく。高町家での月見も良かったが、静かなところで落ち着いて月を見るのもいいものだ。なにより今は、隣に……。

「シュテル」

唐突に呼ばれ、シュテルは内心で驚いた。それを隠しながらシュウへと視線を向ける。

「今頃になるんだけどね」

「はい」

「お団子、おいしいよ」

「……………。光荣です」

今になって、しかも突然言われるとは思わなかった。シュテルはシュウから視線を逸らし、夜空へと向ける。顔が熱いのは何故だろうか。

満月の見下ろす夜の静寂の中、シュテルとシュウの二人は、ディアーチエが呼びに来るまでずっと月を眺め続けていた。

第五話

アースラの部屋の一つに、リンディ、ケインとさくらが向かい合って座っていた。三人の間にあるテーブルにはコーヒーマグが湯気を立てている。ケインとさくらは先ほど突然の呼び出しを受け、シユウに何かあったのかと慌てて駆けつけたところだ。

「突然お呼び出ししてしまい、申し訳ありません。少しお聞きしたいことがあります」

「私たちに答えられるものでしたら」

ケインの言葉にリンディがうなずき、写真を一枚取り出した。ケインとさくらがそれを見る。娘の、文花の写真だ。なぜこれが、と二人そろって首を傾げる。

「一応言っておきますが、管理局に入局させるつもりはありませんよ」
動揺を抑えながら、釘を刺すつもりでそう言う。だがリンディは首を振った。

「文花さんがシユウ君に取っている態度をご存じですか？」

ケインとさくらが怪訝そうに眉をひそめる。文花から学校の話や聞くことはあるが、特に問題があるようには思えなかった。それも、あの子があえて話していないだけか。

「詳しく教えてもらっても？」

ケインの言葉に、リンディがうなずいて教えてくれる。なのはたちなど、見た人から聞いたただけだがという前置きはあったが、内容は思ってもみないものだった。さくらは目を見開いて絶句し、ケインは愕然としている。

「家ではお兄ちゃんに会えて嬉しい、としか……」

「まさかそんな……。そんなことになっていたとは……」

動揺を隠しきれず、狼狽える二人に、しかしリンディは続ける。

「文花さんが、レヴィさんを襲いました」

「な……！」

「シユテルさんがシユウ君とともに文花さんのもとへ向かってくれて

います。……それを踏まえて、聞いておかなければならないことがあります。文花さんは鎌の形状になるデバイスを持つていたそうですが、デバイスの詳細を教えてくださいませんか？」

我が子に与えるデバイスだ。ただのデバイスであるわけがない。何か特殊な能力を付加させているだろう。そう考えての質問だったのだが、しかしケインとさくらの反応は違うものだった。デバイスと聞いて、啞然としていた。

その表情を見た瞬間に嫌な予感がする。思わず頬が引きつってしまっ。

「私たちはあの子にデバイスなど渡していません」
さくらの言葉に、今度はリンディが絶句した。

Side: Humika

まだ自分が今よりももっと小さかった頃、男の子たちにいじめられていたことがある。どうすればいいか分からないでいる間にいじめはひどくなり、ある日小さな怪我を負った。低い段差で突き飛ばされたもので、腕を少し切っただけのものだ。

些細な怪我。足下に気をつけるように、で終わるはずの小さなもの。だが兄はすぐに何かを察したのか、自分を問い詰めてきた。そしていじめのことを知った兄から表情が消える。喜怒哀楽が完全に廃された無表情。

兄はすぐにその男の子たちのもとへと向かった。問い詰める兄に対して男の子たちは無視。それどころか、しつこい兄に対して明確な暴力行為に出る。ただ、それでも兄は自分からは一切手を出さず、ただただ無表情で何度も起き上がり、じっと相手を見据えていく。やがて気味が悪くなったのか、男の子たちは謝罪をすると逃げるように走り去った。

自分が兄を慕っていた一番の理由。その出来事。妹を守ってくれる兄。自分だけのヒーロー。

だが、その無表情は、今は文花に向けられていた。

夜の闇の中、砂浜に座り込む一つの影。黒い海を無言で見つめるその背中とは、とても小さく見えてしまう。シュウはその背中を見つけると、やはり無言で砂浜に立ち、歩いて行く。

「よく」だと分かりましたね……」

シュテルのそんな声が聞こえる。シュウ自身にも分からなかったが、なぜかここにいるという確信があった。兄妹で繋がる何かがあるのか。今となってはどうでもいいことだが。

少しずつ歩いて行くと、座り込む影が、文花が振り返った。シュウの姿を認め、嬉しそうに嗤う。背筋が冷たくなる笑顔だ。

「来てくれると思っていたよ、お兄ちゃん」

文花の言葉。しかしシュウは何も応えない。ただ静かに文花を見据えるだけだ。

「何しに来たの？ お説教？ 説得？ それとも……私と一緒に来てくれる気になった？」

そこまで聞き終えて、シュウが小さくため息をつく。首を振って、言う。

「違う。どれでもない」

「じゃあなに？」

怪訝そうに眉をひそめる文花。対するシュウはやはり無表情。

「叱りに来た」

「……は？」

「僕のせいで文花が傷ついた。今回の文花の行動も僕が原因の一つだと思っ。だから、僕は偉そうなことを言っつもりはない」

しかしそれでも。

「文花のしたことは悪いことだ。だから、文花のお兄ちゃんとして、文花を叱りに来た」

そして一步を踏み出す。そこからは早い。どんどんと文花へと歩いて行く。文花はそれに驚き、すぐにカードのようなものを取り出した。すぐに光り始め、形状が変化、鎌へと変わる。文花は黒いローブ姿になっていた。

「来ないでー」

文花の叫び声。同時に射出される魔法。それはシュウの足下に着弾して、シュウは足を止めた。少し振り返り、シュテルを見る。シュテルもデバイスを取り出していた。そのシュテルをじっと見つめる。

「……………」

意図を察したのか、シュテルが一度だけうなずいてくれる。

『危なくなったら手を出します。それまでは好きにしてください』

シュテルの声が頭の中に響く。これが念話というものなのだろう。どうして急に聞こえるようになったのかとも思ったが、シュテルの魔力をもらっている影響かもしれない。シュウはうなずくと、再び文花に向き直った。

「あ、あはは……………。その人に助けを求めるの？」

文花の嗤い声。だがその声はかすかにだが震えている。そしてシュウは、また一步を踏み出した。その直後に足下から土煙が上がったが、シュウは気にしない。今度はわずかにも止まることなく、歩いて行く。

驚いた文花が何度も魔法を放ってくる。その全てがあらぬ方向へと飛んでいき、シュウには当たらない。威嚇射撃だとわかりきっている。だからこそ、恐れる必要がない。

文花はまだ恐れている。人を傷つけるということ。レヴィから念話を受けたシュテルの話では、最後はずっと笑い続けていたらしいが、相当無理をしていることは見れば分かる。

それでもやはり壊れかけていることには違いないのだろう。このまま放っておいたら、おそらく二度と取り返しのつかないことになる。だからこそ、文花の兄として、妹の間違いを正さなければならぬ。それが、妹と向き合わなかった自分の責だ。

一歩一歩、しっかりと近づいていく。右手に力を込めていく。愚昧の文花を叱るために。

「じ、来ないで……………。来ないでよー」

文花の叫び声。同時に右腕に激痛が走る。血が流れ、砂浜に落ちて吸い込まれていく。

シュウはすぐに振り返った。シュテルに、まだ大丈夫だという意味を示し、また文花に向き直る。シュテルの表情がわずかに怒りのものとなっていたが、今は文花が先だ。

魔法が当たったことが文花にとっても予想外だったのか、文花の顔面が蒼白になっていた。おそらく、レヴィを襲った時もこんな表情をしたに違いない。激しい後悔に彩られた表情に。

シュウが文花へと歩く。もう魔法は飛んでこなかった。文花は蒼白になりながら、啞然とした様子でシュウを見つめている。やがて文花の前までたどり着く。狼狽える文花に、シュウは、

「っ」

「あっ」

拳骨を落とした。頭を押さえてうずくまる文花と、手を揺らすシュウ。殴った時に右腕の傷に激痛が走ったのだが、人を殴る代償だと考えれば安いものだろう。シュウはその場にかがみ込むと、うずくまる文花をしっかりと見た。

「文花」

シュウと呼ばれ、びくりと体を震わせる。おそろおそろ顔を上げる文花にシュウは言う。

「文花のやったことは、間違いだ。どんな理由であれ、関係のない人を巻き込んだらいけない」

「そんなの………！ お兄ちゃんが………！」

「分かってるよ。文花と向き合わずに逃げ続けた。僕が文花を追い詰めてしまったんだと思う。でも、それなら僕を襲えばいいじゃないか」

「……っ」

文花が言葉を詰まらせる。シュウはその様子を見て、やがて薄く微笑んだ。まだ大丈夫だと。自分の行いに悔いているなら、二度と同じ過ちは犯さないだろう。

「文花。僕を恨め。僕を憎め。それで文花の心が安定するなら、僕はいくらでも文花の矛を受け止めてあげる。その代わり、他の人を巻き込まないで」

「え……？」

文花が顔を上げる。間の抜けた表情でとシュウを見つめてくる。シュウは、余計なことを言ったかと少し後悔したが、言った以上は取り消すことはできない。さて、と言って立ち上がる。

「お兄ちゃん、もしかして最初から……？」

「ちて、何のことかな？」

いつものように笑うシュウ。言いたいことを言えて、ようやく自分の気持ちも落ち着いてきた。あとはアースラに行くだけだ。

「文花、今回のことは犯罪だからね。アースラに行こう。一緒に行つてあげるから」

シュウが差し出した手を、文花は躊躇しながらも、その手を取った。

「人に迷惑をかけた者同士、行くとしようか」

「……一緒じゃないよ。お兄ちゃんと違って、私は自分の意思で人を殺したんだから、もう後戻りはできないよ……」

「ああ……。それだけ……」

本当にレヴィが死んでいたら、こんな簡単な話で済むはずがない。ディアーチェたちがどうあっても許さないだろうし、何より自分も妹相手であるうと怒り狂う自信がある。思えば強く依存してしまったものだ。罪は罪だが、少しでも安心させようと口を開こうとして、

「……え……？」

自分の腹から突き出た刃を見て、絶句した。

S i d e : : H u m i k a

「それでは困りますね、文花様」

デバイスの声。自分の握る鎌からの声。鎌の刃は兄の体に突き刺さっている。

「……え……？」

シュウと同時に、シュウと同じ声を漏らす。自分は、何をしているのだろうか。

「シュウー」

奥から聞こえてくる声。兄と一緒に来た人の声だ。文花は呆然と

したまま兄を見る。兄は振り返ると、戸惑いの表情を浮かべていたが、やがてすぐに微笑み……。

どしゃりと、地面に倒れた。その腹部からは大量の血が流れ出していく。

「あ……ああ……」

かすれた声を漏らし、文花は後退る。こんなことをするつもりではなかった。こんなはずではなかった。そう心が叫ぶ。

「何を今更。どんなことをしてでもお兄様を奪い取ると、言っていたではありませんか」

デバイスの声。震える瞳で鎌を見る。鎌は静かに明滅している。

「貴方ができないのなら、私が手伝ってあげましょう」

直後に、文花は体の自由を失った。勝手に手が、足が動き、魔法を展開し、空へと浮かぶ。鎌は激しい光を放ち、次の魔法の展開を始める。

「さあ、まずはお兄様にとどめを。そうすればどんな願いでも叶うはずですから。あとはとりあえず、邪魔な者たちも一掃しなければなりませんね」

文花の口からそんな言葉が漏れ始める。違う。そんなことはしたくない。心が叫ぶが、文花の意思ではもう何もできない。

いやだ……！ お兄ちゃん、助けて……！

心で叫ぶ。通じるはずがないと分かっているのに。

だが、その直後、シユウが目を開き、立ち上がった。腹部から流れ出る血は止まらない。駆け寄った少女が治癒魔法を施しているが、そう簡単に治る傷でもないだろう。

「文花……」

兄の声。じっとこちらを見据えてくる兄の姿。何を言われるのかと怯えるが、しかしいつもの笑顔を浮かべてくれる。

「大丈夫……」

そつつぶやきながら。

「シュテル。お願いがある」

シュウに治癒魔法を施していると、そんな声が降ってきた。何を、とは聞かない。言いたいことは分かる。だが、今魔法を止めてしまえば、シュウの命が危ない。

「大丈夫。僕なら大丈夫だから。だから、文花を止めてあげて」

「シュウ……」

シュテルはしばらくシュウの顔を見つめ、やがて小さくうなずいた。すぐに念話を飛ばし、なのはや王、リンディに助けを求める。一方的に助けを求め、シュテルは念話を打ち切った。

「すぐに助けが来ます。動かないように」

「うん。了解」

シュウが力なく笑い、シュテルは一つつなずいた。ルシフェリオンとバリアジャケットを展開し、空にいる文花と対峙する。

「邪魔をするのですか？ いいでしょう、相手になりましょう」

文花が嗤う。狂気に満ちた嗤い声。

「貴方の目的も本来の主も私には分かりませんが……」

言いながら、ルシフェリオンを突きつける。魔力の収束を始めていく。

「シュウにその子のことを頼まりました。容赦はしません。灰も残さず……消え果てなさい」

そして、シュテルの収束砲撃の第一射が放たれた。

S i d e : : N a n n o h a

「シュウ君……」

最初に駆けつけたのはなのはだ。そのすぐ後からディーアーチェたち、リンディたちが続く。はやてに連絡を回してくれたのか、リンディとともにはやてとシャマルも来ていた。

「ひどい傷……。シャマルさん……」

「は……」

リンディの声にシャマルがすぐに魔法を展開。治癒にあたる。

なのはは上空を見る。シュテルと文花が戦闘をしている。文花の

接近しての攻撃をかわしながら、シュテルは牽制を織り交ぜつつ攻撃を続けていく。押しているのは、シュテルだ。

「まさか本当に……文花が……」

遅れてきたのはケインとさくらだ。呆然とした様子で戦闘を見ている。リンディから少しだけ聞いたが、どうやら本当に何も知らなかったらしい。

「こんなことって……」

シャマルがそんな声を漏らす。全員が驚き、そちらを見る。シャマルの魔法は正常に機能しているのだが、シュウの顔色は一向に良くならない。むしろ悪化しているような気さえする。

「おい、どうしたのだー！」

ディアーチエの焦ったような声。シャマルが分からないと首を振る。

「魔法が届かないの……！　まるで、何かに拒絶されてるような……」

「……なに？」

ディアーチエが目を見開く。なのはもすぐに思い当たった。シュテルから聞いた話では、シュウはシュテルの魔力しか受け付けられない。だがまさか治癒魔法なども拒絶してしまうとは。

「シュテルに加勢してきます！　シュテルの魔法なら……！」

ユーリがその言葉を放つと同時に、何か空から降ってきた。それは自分たちの側に突き刺さる。黒い鎌の刃だ。

「お待たせしました」

シュテルがゆっくりと降りてくる。その背には、ぐったりとした文花の体。いつの間にか決着がついていたらしい。シュテルはすぐに周囲の様子に気がつき、眉をひそめた。

「何かありましたか？」

Side:Stern

魔法を受け付けないと聞き、さすがにシュテルも驚いた。しかしよく考えれば、その可能性も考慮しておくべきだった。自分の短慮に後悔しつつも、シュテルはすぐに行動に移る。シュウへと駆け寄り、治

癒魔法を施そうとして、

「……………」

すぐに理解する。間に合わない、と。なのはたちが来た時に戦闘を代わっていれば、と後悔するが、今は後悔しても仕方がない。ならば最終手段だ。

シュテルは治癒魔法を放棄、ありったけの魔力をシュウへと注ぎ込む。周囲が何を、と困惑しているが、口を挟む者はいない。

「頼るべきではないと分かっています。ですが、どうか一度だけ……………。その力を貸してください。お願いします……………」

パスト。シュテルがそう締めくくる。反応はない。それでも魔力を注ぎ続ける。

やがて、全員に対する念話で、シュテルしか知らない声が聞こえてきた。

仕方ないね、と。

『シュテル。君はあたしに、ギフトッドを利用しない、と言っていないかったっけ？』

パストの声。周囲が驚きで困惑している中、シュテルは苦笑した。

「すみません。私でどうにかできれば良かったのですが……………。しかしそれを言うなら、貴方も治癒魔法ぐらいは受け取ってくれても良かったのでは？」

『悪いね。そんな細かい設定はめんど……………あ、いや、できないんだ』

シュテルの目がわずかに細められる。ばつが悪そうにパストは咳払いをすると、分かったよと承諾した。

『魔力ももらったしね。まあこの子を治すだけなら、やってやるよ。ただ、追加で約束しておくね』

「何なりと」

『この子と、その文花って子。あまりケンカしすぎないように見えてくれ。正直、情けなさ過ぎるんだよ』

どういふことかと文花が首を傾げる。パストは文花が聞いていると気づいていないのか、それとも知っていてあえて言っているのか。言葉を続ける。

『同じ魔力を分けた兄妹でケンカするなっということさ。ギフテッドの祝福を受けて生まれたんだからね』

なるほど、とシュテルがうなずく。さすが理解が早いねとパストが楽しそうに笑う。そして唐突にパストの声は聞こえなくなり、それと同時にシュウの顔色が良くなっていく。体の傷も、腕も含めて消えていく。やがて、シュウの体から傷が消え去り、整った寝息を立て始めた。

「ありがとうございます、パスト。……おやすみなさい、シュウ」

Side: Hero

ギフテッドは願いを叶えるロストロギアだ。その効果は絶大で、魔力さえあれば何かを生み出すことでない限り、どのような願いも叶えてしまう。

西崎秀一の場合はどうだろうか。ギフテッドそのものが人の形を取ることにより願いは叶えられた。ただしその代償として魔力を必要とし、足りなくなれば外部から魔力を帯びたもの呼び寄せる。だが、少し待つてほしい。

これは願いを叶えたと言えるのか。何かを呼び寄せるなど、ただの人間ができるはずもない。人外と言わざるを得ない体質。最初からその予定だったとは思えない。本来、魔力は十分に足りていた。だが、ギフテッドはもう一つ願いを叶え、魔力が不足したのではないか。それが文花だ。ケインとさくらはシュウに愛情を注ぐ一方で、実子も望んだのだろう。それを聞いたギフテッドが、自身を維持する魔力を使ってまで叶えてしまった。今回は、少しばかり父親と母親の体に干渉し、子を宿させるというやり方で。その時に、おそらくギフテッドの魔力がその子、文花にも宿ったのだと思われる。

文花の魔力のランクは、AA相当。なのはたちと比べるとどうしても劣っているように思えるが、両親のランクはCだそうだ。純粹な魔力量なら管理局でも随一で、これはギフテッドから与えられたものだろう。

アースラの一室で目覚めたシュウにそう説明してくれたのはシュテルだ。本人に聞いたわけではないので仮説ですが、という前置きはあったが、何となくそれで正しいと分かる。

「お兄ちゃんー」

話を終えた頃、部屋の扉が開き文花が入ってきた。車椅子を押しているのはリンディだ。

「お兄ちゃん、良かった……。ごめんなさい、ごめんなさい……！」

何度も謝り続ける文花。シュウはどうしたものかと苦笑してしまふ。

「大丈夫だから。それより、今後の話をしよう」

リンディさんもいることだし、と続けると、文花の表情が硬くなった。何の話をするのか理解できたらしい。文花もリンディへと向き直る。

「リンディさん。文花の罪のことなんですけど」

「ええ」

「全て、とは言えませんが、半分ぐらいは僕が負うことはできますか？」

これに驚いたのはリンディはもちろん、文花もだ。シュテルは一人、予想していたのか表情を変えずに嘆息しただけだった。

「お兄ちゃん……」

「僕の責任でもあるって言ったよね。だから、半分は僕が負うよ」

どのような罪になるかは分からないが。リンディへと視線を向けると、困ったような笑顔を浮かべていた。

「そうね。文花さんの罪のことだけど……」

「はい」

「何もないわよ」

「……はい？」

リンディ曰く、今回文花が起こした事件はレヴィに対する傷害事件と、海での暴走。後者に関してはデバイスの暴走ということと落ち着いているし、前者に関しては被害者であるレヴィが、そんなことはなかったと言い張っているらしい。

「レヴィ、レヴィ……？」

戸惑う文花。シユウも怪訝そうに眉をひそめる。

「本人に聞いてみればいいんじゃないかしら？ 私としても、何もしていない一般人を拘束するわけにはいかないから」

そう言いながらもリンディは文花を見る。監視だけは付けさせてもらっけど、と付け足した。

シユウは文花を伴って、自宅のマンションへと帰ってきた。そのまま荷物を置いてシュテルたちへの部屋へと向かう。話を聞いていたのか、全員がリビングで待っていた。

「レヴィ、レヴィ……？」

開口一番、シユウが言う。今朝に戻ってきたというレヴィはカレーを幸せそうに食べながら、何が？ と首を傾げる。

「文花のことだよ」

「あ、それが。いやだって、痛かったけどそれだけだし。生きてるし」「でも！ 私がレヴィさんを襲ったのは事実ですし……！」

シユウの後ろから文花が言う。レヴィはカレーをもう一口食べて、それはそうだけど、とうなずいた。

「だからボクからお願いがあるんだ」

「お願い？」

「うん。ボクは文花に対して怒らない。許してあげる。だから文花も、シユウのことを許してあげてよ」

シユウと文花が目丸くし、レヴィはまたカレーを食べ始める。文花はしばらく呆然としていたが、やがてすっかりとうなずいた。分かりました、と。

「え？ 文花……？」

「そういうことだから。私はもうお兄ちゃんを恨まないし憎まない。今までごめんなさい」

そう言って頭を下げる。そして顔を上げた時には、明るい笑顔があった。

「……ああ……。ありがとう……」

シュウは、そう言うことしかできなかった。

しばらくして。

文花もシュウと同じ学校に通い続けることになった。だがやはり思うところがあるのか、シュウと一緒に暮らそうとは思えなかったらしい。今までと同様、両親が交代で文花の様子を見に来る生活をしているそうだ。

その文花は、時折シュウの部屋へと遊びに来る。目的は、

「シュテルお姉ちゃん！ 魔法、教えて！」

シュテルだ。ディアーチェたちに対してはさん付けで呼んでいるのだが、なぜかシュテルに対してだけお姉ちゃんと呼んでいる。理由を聞いてみると、戦う姿がかっこよかったから、らしい。

「それにお兄ちゃんと結婚したら本当のお姉ちゃんだし！」

「ん？ 何か言った？」

「何でもないよ！」

屈託なく笑う。そんな笑顔をまた見ることができて、シュウも自然と頬が緩む。

シュウはシュテルと話す文香の笑顔を見ながら、幸福感に浸っていた。

だから、文花のデバイスのことなど忘れてしまっていた。

ハロウィン

シュウは自分の部屋で、この日のために用意した服に着替えていた。この日のために、シュテルたちと一緒に買い物に行き、選んでもらったものだ。着替え終わったシュウの服装は、東洋の貴族のような服装に黒いマント、ついでに口には牙のようなものもつけている。

シュウは鏡の前に立ち、一つうなずいて言った。

「誰」れ」

今日はハロウィン。なぜかこの地域ではハロウィンは盛大に行われている。街中にハロウィン関係の飾り付けが施され、仮装をした子供たちが家々を訪問している。今も耳を澄ませば、どこからかトリックオアトリート、という声が。

「シュウ！ トリックオアトリート！」

「あ、レヴィか」

ドアを開けて入ってくるレヴィ。仮装はしている、と言えるのだろうか。バリアジャケットの衣装だった。

「レヴィはそれ？」

「うん。どっ？」

「いや……。時折見てるから何とも……」

シュテルたちのバリアジャケットは見たことがある。だから今更驚きはしない。ただ少し残念だったのが、レヴィは口を尖らせた。

「あはは、「うめんね。はい、お菓子」

シュウがカップケーキを差し出すと、すぐにレヴィの顔が輝いた。受け取ってすぐに口の中へ。しばらく租借して、笑顔になった。

「うん！ 美味しい！」

「そう？ なら良かった」

シュウはビニール袋にカップケーキを丁寧に入れていく。数は二十個ほど。少し作りすぎたかもしれないが、残れば朝食にでもすれば

いい。用意を済ませ、シュウはレヴィに言った。

「お待たせ。行こうか」

「うんー」

レヴィと共に部屋を出て、鍵を掛ける。そして隣のシュテルたちの部屋へ。リビングではすでに準備を終えたシュテルたちが、思い思いに過ごしていた。

ユーリは黒い服に同色の三角帽子。魔女だろうか。ディアアーチェは甲冑めいた衣装に黒色のマント。魔人、だそうだ。そしてシュテルは、猫耳。シンプルだ。

「おー……。ハロウィンって感じがしてきたね」

「それなりにな」

ディアアーチェがうなずく。ただ少し恥ずかしいのか、まともに顔を見ようとはしてくれない。ユーリも帽子を目深にかぶってしまった。シュテルだけが普段通りに本を読んでいた。

「シュテルは猫、なんだね。……えっと……」

うまく言葉が出てこない。こういった時はどんなことを言えばいいのかと悩んでしまう。シュテルは本を閉じると、さて、と立ち上がった。

「王。そろそろ向かいますか？」

「ん？ ああ、そうか……。そうだな」

シュテルの言葉にディアアーチェがうなずき、それを聞いていたユーリも立ち上がった。それぞれお菓子の入ったビニール袋を手取る。それら全てに、シュテルとディアアーチェの二人が作ったお菓子が詰められていた。

これから向かうのは八神家だ。先日、ハロウィンパーティをする、という連絡が本人からあり、こうして準備を整えていたのだ。仮装もしてきてな、ということでの今の格好となっている。

「では行くか」

ディアアーチェが言って、部屋を出て行く。シュウはしばらく呆然としていたが、やがて慌てて四人を追った。

かわいい、て言いたかったんだけどね……。

なかなか言葉に出すのは難しいな、とシュウは小さくため息をついた。

八神家に到着したのは昼を少し過ぎてからだ。インターホンを押すと、シャマルが笑顔で出迎えてくれる。いらっしゃい、と招き入れてくれた。

リビングにはすでに参加者が揃っていた。八神家一同、そしてなのは、フェイト、アリサとすずかだ。テーブルにはすでにお菓子が並べられている。そしてやはりと言つべきか、全員が仮装をしていた。

アリサとすずかは童話に出てくるような騎士の衣装。はやては顔に控えめなメイクをしている。フランケンシュタイン、といったところか。フェイトは黒いローブの魔女姿。なのはは控えめで、そしてシュウの隣と被っていた。

「ナノハも猫ですか」

「うん。おそろいだね」

そうですね、とシュテルがうなずく。無表情ながらもどこか柔らかい印象を受ける。なのはもそれを分かっているのか、嬉しそうに笑っていた。

ちなみにヴォルケンリッターの面々は仮装していない。曰く、買い出し担当だからだとか。だがここに来るまでの間にも仮装している人が大勢出歩いていた。それを指摘すると、一瞬言葉に詰まり、大人の姿だと恥ずかしいんだ、としどろもどろになる。

「うん。大人も仮装してたよ？」

「ぐっ……。」

「うん。まあ無理にしろとは言わないし言えないから、これ以上はやめとくよ」

そう言っただけでシグナムから視線を逸らす直前、シグナムが安堵のため息をついていたのを見逃さなかった。追求はしなかったが。

「とくろでシュウのそれは……。吸血鬼？」

問うてきたのはフェイトだ。いつの間にかディアーチェたちが持ってきたお菓子などをテーブルに並べている。シュウもすぐに手

伝いながらつなずく。

「うん。仮装なんて初めてだからちょっと恥ずかしいね。変じゃない？」

「そんなことないよ、似合ってる」

フェイトの笑顔にシュウの頬が緩む。事前にこの姿を見ていたのはシュテルたちだけだったので、正直不安にも思っていた。

「それを選んだのはやっぱりシュテル？」

そう聞いてきたのはアリサだ。シュウはそうだよとつなずく。選ぶ時に希望を聞かれ、特にないけどあまり派手じゃないもの、と告げるとこれを選んでくれた。その時は派手だと思ったものだが、周辺の仮装を見ると十分控えめだった。

「準備完了やー。じゃあ始めよかー」

はやての言葉で皆がお菓子を食べ始める。それぞれ菓子を選び、会話を弾ませていく。

お菓子があるだけで普段と変わらないような。

そう思ったが、口には出さずに心の中にしまった。

「これが今日の自信作！ 王様、勝負やー！」

はやての声。その向かい側のディアーチェが鼻を鳴らす。

「来ると思っていたぞ。我はこれだー！」

ディアーチェモテーブルには出さずに取っておいたお菓子を出した。二人が同時に新たなお菓子をテーブルに出し、全員の注目を集める。見守られる中で、はやてとディアーチェの二人はお互いのお菓子をまず観察した。そして次に、お互いに一口ずつ頬張る。

「ふむ。なるほどな。見た目はただのケーキだが、カボチャの風味がしっかりと効いている。カボチャのほのかな甘みがなかなか……」「王様のは見た目からすごいなあ。カボチャの皮を器にしてるんやね。中に入ってるのもカボチャをしっかりと使った……」

ある意味二人の世界だ。この会話についていけない一同は苦笑しつつ少し距離を取る。

「あれは少し時間かかりそうだね……。今のうちにちょっと買い物に

行ってくるよ」

シュウがそう言って玄関へと向かう。それを聞いたシグナムたちが自分たちが行くこう、と言ってくれるが、シュウは困ったように首を振った。

「気分転換もしたいんだ。……あとちょっと察してほしいかな」

実は結構居心地が悪かったりする。これははやてたちが悪いなどというわけではなく、単純にシュウの問題だ。理由は単純。女の子ばかりに囲まれて、男は自分一人だからだ。友人が聞けばきつと羨ましがらるだろうが、実際にこの場に立つと居心地の悪さが際立ってしまう。

シュウの気持ちを察したのはザフィーラだ。シグナムたちがそれ以上何かを言う前に、気をつけて行くといい、と言ってくれる。ザフィーラが了承したのでシグナムたちもそれ以上は言えなくなる。

玄関で靴を履いたところで、

「私も行きましょっ」

いつの間にか、シュテルがそこに立っていた。

八神家を出てのんびりと歩く。出かける前にテーブルを見た時、お菓子はまだまだ残っていたが飲み物が残り少なかったはずだ。それらを買えばいいだろうとスーパーへと向かう。

「それにしても、毎年思っけど海鳴市はすごいね」

シュウがそう言っと、隣のシュテルが、そうなのですかと首を傾げてくる。

「うん。僕が生まれたところだと、ハロウィンなんて誰も気にしてなかったよ。だからちょっと新鮮だね」

何か行事があれば街ぐるみで楽しもうとしているような気がする。一人だった時は煩わしく思えたものだが、今はしっかりと楽しむことができる。

周囲を見ると仮装した人が大勢いる。ほとんどは子供たちで、シュウのように吸血鬼だろう男の子や魔法の女の子、童話に出てくる騎士の子、様々だ。辺りを見ているだけでも飽きることがない。

「一度聞いておじつと思っていたのですが」

シュテルの言葉にシュウが振り返る。笑顔で首を傾げるシュウに、その衣服で良かったのですか？」

問われたシュウは質問の意味が分からず、言葉を返せない。シュテルが続ける。

「地味なもの、と頼まりましたから。……それはそこまで派手とは思いませんが、地味かと聞かれると否定しなければいけません」

ああ、とシュウは納得した。派手ではないが地味というわけでもない。どうやらシュテルも少し気になっていたらしい。

「シュテルはどうしてこれを選んでくれたの？」

「単純に、貴方に似合うだろうと思ったためです」

真顔でそんな返事。そんなことを言われるとは思わなかったため、そうかな、とシュウは照れくさそうに笑う。少しだけ顔が赤くなっていくのを自覚する。

「えっと……。実際、どうかな？ 僕の格好。変じゃない？」

今更聞くことでもないとは思いが、シュテルに選んでもらったものだ。やはりシュテルから感想を聞いてみたいという思いはあった。ただ、鏡を見た自分の感想が、誰これ、だったので聞くのは少し怖かったりもするのだが。

シュテルが改めてシュウを見る。しばらくして、小さくうなずいた。

「とても似合っていると思いますよ」

「本当にっ」

「じんなとじらで嘘などつきません」

シュウの疑いの声にシュテルはため息をついた。シュウは嬉しそうに笑い、ありがと、と言っておく。シュテルが似合っていると喜んでくれたなら、自分にとってはそれでももう満足だ。自然と頬が緩む。

スーパリーの側まで行くと、人通りが増えてきた。自分たちと同じく買い出しの人だろうか。はぐれないようにとシュテルに手を差し出すと、すぐに手を握ってくれた。それが嬉しくもあり、やはり少し恥ずかしい。

赤くなつた顔を見られないようにシュウは前を向いて歩いて行く。そして、ふと思ひ出したように言つ。

「シュテルも似合つてる」

「は？」

「猫耳。すごくかわいいよ」

やつと言えた、とシュウは勝手に満足する。シュテルからの返事がないのできつと呆れられているのだろうが、今更だと気にもとめない。

だから、後ろを歩くシュテルの頬が朱に染まっていることにも、シュテルが小声で、不意打ちは卑怯です、とつぶやいたことにも、全く気がつかなかつた。

Side:Stern

「楽しかったー!」

我が家に帰り着いてのレヴィの第一声。ディアーチェに促され、レヴィが風呂の準備に行く。

「シュウはどうした？」

「疲れたから早めに寝る、と自宅の方へ」

「ああ……。まあそつだらうな」

シュウとシュテルが買い出しから戻ってきた後、近所の家々を周りに行った。はやと面識のある家にしか行っていないのだがシュウにとっては初対面だ。それなりに気も遣つただろう。歩いた距離もそれなりだったので、体力的にも疲れているはずだ。

あとで甘い物でも差し入れしよう、と考えながら洗い物を始めようとするシュテルへと、

「シュテル」

ディアーチェが声をかける。シュテルが振り返つた。

「何でしょうっか？」

「何かいいことでもあったのか？ 機嫌がよさそうだが」

シュテルはしばらくきょとんとしていたが、やがて薄く笑みを漏らした。とても自然な笑みだ。

「そうですね。少しだけですが、ありました」

「ふむ。そうか。ならば良い」

ディアーチェが満足そうにうなずいてリビングへと向かう。王がどこまで察しているか分からないが、それでも、さすがは王、と思っ
てしまう。

シュテルは買い出しのことを少し思い出し、少し頬を染めながらも、少しだけ嬉しそうに微笑んでいた。

第一話

運動会。学校に通う子供たちの一大イベント。もちろんシュウの通う学校にもあり、今日の日曜がその日になっている。ただシュウはあまり乗り気ではない。本来なら日曜はシュテルたちとのんびりと過ごせる日だからだ。明日の日曜は振替休日になるが、シュテルたちのうち誰かが仕事に行く可能性が高いのでやはり日曜にのんびりしたい。

シュウは目の前の校庭で行われている高学年の組み体操を見ながら、長いため息をついた。すごいと思うが、やはり興味そのものはない。

「あかんで、シュウ。先輩らががんばってるんやから」

隣からそんな声がかげられる。シュウはそちらを一瞥して、分かっているよ、とうなずいた。そうして返事をしてすぐに、何か違和感を覚える。今、誰が自分に話しかけた？

「……………何してるの、コウ」

いつの間にか隣にいたのは、別のクラスの友人だ。名を東江幸司。シュウはコウと呼んでいる。学校の中では親友と呼べる唯一の友人だ。

今は運動会の真っ最中。シュウたちはクラスごとに別れて集まり、応援している。クラスの違うコウは当然別のグループのはずなのだが、なぜか今、シュウの隣にいる。シュウが怪訝そうにコウを見てみると、コウは目を逸らした。

「みんなまじめすぎて暇やもん……………」

「だからって……………。いや、もついい……………」

コウは良くも悪くも自由奔放だ。好きなこと、楽しそうなことは喜んでやるのだが、嫌いなこと、つまらないことは逃げてくる。今回もその類いだらう。コウはシュウの返事を聞くと、満面の笑顔を見せた。

「さすがシユウ！ 話が分かるな！」

「でも呼ばれたら帰るんだよ？」

「分かってるって……」

シユウの肩を何度も叩き、コウは楽しそうに笑う。友人のその笑顔を見て、シユウも釣られて微笑んだ。

競技に出ていない間ははっきり言って暇だ。応援をしなければと思うが、あまりしようとも思えない。とりあえずはコウと話をしながら自分の競技を待つ。

コウと話し始めて少しして気づいたのだが、いつの間にかクラスごとのグループはかなり散らばっていた。周りを見れば他のクラスの子がいるし、逆に自分のクラスメイトの姿が見えないこともある。教師の目をかいくぐり、うまく立ち回っているらしい。

「お兄ちゃん、見つけたー！」

その声にシユウは少し驚きながらも振り返る。笑顔の文花がそこにいた。

「どうしたの？ 文花」

仲直りしてからというもの、文花はよくこうしてシユウの元を訪れる。シユウとしても文花は大切な妹なので、訪ねてくるのは大歓迎だ。仲直りをした数日後に、文花はシユウに対しての誤解をとくためにがんばってくれもした。余計に頭が上がらない。

それを言うと、文花は、私が巻いたことだから、ごめんなさい、と謝られた。

文花がシユウの隣に来て、すぐにコウと目が合う。一瞬驚いた後、小さく会釈をする。

「ああ、確かシユウの妹さんやったっけ？ 可愛いなあ」

「あ、ありがとう……」
どう返事をしていいのか分からないのか、微苦笑で礼を言っている。文花はすぐにシユウへと視線を戻した。

「文花はこの後は？」

何の競技に出るのか、などそんなことは聞かない。文花は今も車椅

子だ。競技そのものに出ることはできない。文花は校庭の反対側のテントを指さした。そこは教師や何かしらの役職についている保護者の待機場所となっている。

「あとで私が放送するんだ」

「へえ……。がんばってね」

「うんー」

文花は笑顔でうなずくと、そろそろ行くねと去って行く。その背を見送っていると、コウがぽつりと漏らした。

「うん。可愛いな」

「……手を出したら怒るよ」

「お義兄さんって呼んでええかな」

「……」

「……冗談です。怖いからその無表情はやめてくれ……」

シュウの視線から逃れるようにコウが顔を逸らす。シュウは小さくため息をついて、すぐに笑みを漏らした。

さらに時間が経ち、昼休憩となる。午前の部でシュウは一度だけ競技に出た。クラス全員参加の玉入れだが。

昼休憩の予定はない。シュウは自分のクラスの待機場所に戻り、午後の部まで寝ようと目を閉じる。昼食は忘れてきたので、ない。

「……んっ」

瞼を閉じたところで、誰かに肩を叩かれた。誰だろうと振り返り、すぐにシュウは驚きに目を瞪る。そこにいたのは、シュテルだった。黒いキャップを目深にかぶり、他から顔が見られないようにしている。

「な、何してるの？」

シュウが戸惑いながら聞くと、シュテルは何も言わずにシュウの手を取った。シュウを立ち上げらせ、歩き始める。未だにどこに行こうとしているのかが分からない。

「……シュテル？」

無言のシュテルに従い、少し歩く。そうしてたどり着いたのは、校

舎の一つ。どっしてここに、と思いながら校舎の中に入り、そしてすく気がついた。

「……」

「ここまで来れば大丈夫ですね」

シュテルがキャップを取り、シュウを見る。側の教室を指さして続ける。

「王たちもお待ちです。昼食にしましょう」

わざわざ結果まで張らなくても。

先導するシュテルを追いかけながら苦笑するが、しかしシュテルたちの気持ちは素直に嬉しかった。

案内された教室では、机といすが部屋の隅に片付けられ、中央にビニールシートが敷かれていた。ビニールシートに座るのは三人。ディアーチェとレヴィ、ユーリだ。シートには弁当箱がいくつも並べられている。

シュテルに促され、シュウがシートに向かうと、レヴィが手を上げた。

「やっほー！ がんばってる？」

「あー……。うん。一応」

どうしても歯切れの悪い返事になってしまふ。がんばったと言っても、参加した競技は玉入れだけだ。後は応援しかできない。それでもシュウの返事に満足したのか、レヴィは、ならよし、と笑っていた。

「まあ座れ。話はそれからいいだろう」

ディアーチェの声に従い、シュウもシートの上に腰を下ろした。隣にシュテルが座る。

「では、いただきます」

シュテルたちが持ってきた弁当を食べ終え、シュテルから差し出されたお茶を飲んでシュウは一息ついた。外で食べるというのも、たまにはいいものだと思う。教室の中はあるが。

「シュウはどの競技に出るんですか？」

「ユーリがどこから持ってきたのか、運動会のしおりを眺めながら聞いてくる。」

「最後の方。クラス対抗リレーだよ。ちなみにアンカー」

「アンカーって、最後に走る人でしたよね？　すごいです！」

「ユーリが瞳を輝かせる。それがとてもまぶしくて、シユウは思わず目を逸らしてしまった。頬をかきながら、表情を引きつらせながら正直に話す。」

「いや、単純に余り物……。いつの間にかそこしか空いてなくて、組み込まれてました……」

「…………えっと……。がんばってくださいー！」

「ユーリが言葉に詰まりながらもそう言ってくれる。下手なフォロよりはいいのだが、これはこれで心に堪えるものがある。もとはと言えば、競技を決める時間に最後まで手を上げなかった自分が悪いのではあるが。」

「でもま、シユウなら大丈夫だよ。がんばれ！　応援するぞー！」

「よもや、無様に負けるつもりはあるまいな？」

「いつの間にかハードルが上がっている気がするのは何故だろう。走ることは嫌いではないが、得意というわけではない。負けようとは思わないが、他のクラスにはまじめに勝ちにきたメンバー構成もある。そんな中でシユウがどれほどがんばること……。」

「シユウ。がんばってください」

「シユテルの声に、シユウは思考を中断。頷くことをためらったが、それでも最後にはしっかりと頷いた。」

「がんばるよ」

「結果的には、シユウは、シユウのクラスは三位だった。バトンを受けた時は四位だったので、順位を一つ上げるに止まったことになる。無論、手は抜かなかった。どこかでシユテルたちが見ていると考えると、そんなことをできるはずもない。格好悪いところは見せられないと、一位になるつもりで全力で走った。」

「だが、シユウは、走るのが遅いわけではないが早いわけでもない。」

体力がないわけではないがあるわけでもない。下ではないが上ではない。体力も力も平均より少し上程度だ。そんなシュウがいくら必死になっても、努力を続けてきた子に勝てるわけもなく。そんな結果になった。

運動会が終わり、片付けも終え、生徒たちは帰路につく。リレーの後、シュウは意気消沈していた。クラスメイトたちは、順位が一つ上がっただけでもすごい、と言ってくれているが、それでも自分にとっては不満の残る結果だった。

こんなことなら、練習すれば良かったかな……。

そんなことを考えながらため息をつき、校門を出る。そして、

「お疲れ様でした」

その声に顔を上げた。

待っていてくれたのは、シュテルたちだ。全員が帽子やキャップを目深に被っている。さて何を言われるだろう、と言葉を待っている、と、

「すごいじゃん、シュウ！ 一人追い抜かした！」

「とても格好良かったです！」

「まああれなら十分だろう」

レヴィとユーリ、ディアーチエがそう言ってくれる。情けない、もっとがんばれば、そんな言葉を予想していたのでシュウは返事を忘れ、しばし啞然としてしまった。だが、よくよく考えればそんなことを言うはずがないと分かるはずだった。

シュウは力なく微笑むと、

「できれば勝ちたかったんだけどね」

「あれには走ることに努力してきた者もいるのでしよう。ならばシュウの結果は十分ですよ。お疲れ様でした」

シュテルがそう言って労ってくれる。それを聞いて、ようやくシュウは胸をなで下ろした。

五人で帰路につく。同じマンションへ同じペースで歩き始める。五人でこの道を歩くのは初めてだ。それがとても新鮮に思える。

シュテルたちの会話を聞きながら歩き、それ故に背後からの声に気がつかなかった

「シュウー」

真後ろからの声。シュウが驚きながら勢いよく振り返り、シュテルたちは言葉を止める。そこにいたのはコウだった。朗らかな笑顔でシュウを見ている。

「帰るの早すぎやでー。ちょっとぐらい俺とも話しようや」

「あ、うん。ごめんね」

「まあええけどな。前と違ってちゃんと元気そうやし」

コウの言葉に、シュウは息を呑んだ。コウが言っているのは、まだ文花との関係が悪かった時のことだろう。やはりこの友人にも心配をかけてしまったと反省する。

「うん、その子はっ」

反省の気持ちは一瞬で吹き飛んだ。代わりに焦燥感に支配される。全員が帽子がキャップを被っているのでそう簡単に分かるものではないと思つが。

「高町さんと八神さん、テストロッサさん、やでな？」

そんなことはなく、シュテルたちの顔を確認していたらしい。

「あれ？でも三人ともまだ学校にいたような……」

やばいまずいどうしよう。そんな気持ちはかりが空回りして、うまく考えがまとまらない。どうにかしてこの場を切り抜けなければならぬのに、頭の中は真っ白だ。そんなシュウの目の前に、シュテルが立った。

「初めまして。シュウのご学友の方ですね」

「そうやけど」

落ち着いたシュテルの声に、コウがわずかに眉をひそめる。シュテルが続ける。

「私はシュテルです。なのはとは友人ではありませんが、それだけです」
「よ」

「我も同じく。ディアーチエだ」

「レヴィー」

「ユーリ・エーベルヴァインです」

シュテルに続いてディアーチェとレヴィ、ユーリが簡単な自己紹介をする。それで納得する者がどれだけいるのかと不安になるが、しかしコウはその数少ない者だったらいい。そうかそうかと何度も頷いて笑顔になった。

「世の中には似た人が三人居るってゆうもんな！ 東江幸司です！

コウって呼んでな」

屈託なく笑うコウに、それでいいのかとシュウは思わず苦笑してしまった。シュテルもまさかこれで通るとは思っていなかったのだから、少々戸惑っているようだ。

「それにしても、シュテルさんか……」

「何でしょうか？」

コウはしばらくシュテルを見つめる。シュテルもわずかに首を傾げながらも視線は逸らさない。やがてコウが破顔した。

「クールで格好いいな！」

「はあ……。ありがとうございます」

シュテルの戸惑いが強くなる。シュウたちも突然なんだと訝しげに眉をひそめる。そしてコウが、言った。

「一目惚れしました。付き合ってください」

「……はい？」

シュテルが珍しく間の抜けた声を漏らし、ディアーチェたちが絶句する。

そしてシュウは。

「……え？」

予想もしていなかった親友の言葉に、何一つ反応できずにいた。

クリスマス（特別編）

自室のこたつで暖を取りながら、シュウは時計を何度も確認していた。現在は昼の一時前。もうすぐ一時だ。準備は済ませているのだが、どうしても不安になってきてしまう。シュウの向かい側にはシュテルが座っており、こちらはみかんの皮をむいている。

「ムンヤ」

むき終わったみかんをシュテルが差し出してくれる。ありがとう、とそれを受け取り、半分に割ってシュテルに返す。二人でみかんを口に入れ、しっかりと味わう。そのみかんを食べ終えた頃、シュテルがさて、と口を開いた。

「そろそろ時間ですね」

「あ、うん……。えっと……。行こうか？」

「はい」

シュウが立ち上がり、シュテルがそれに続く。シュウが戸締まりを確認し、その間にシュテルが電気類を切っていく。そうして二人同時に最後の準備を終えて、玄関に向かう。もちろん寒さ対策も忘れないう。シュウはグレーのマフラー、シュテルは赤いマフラーを着用している。

「それじゃあ……。いってきます」

「誰に言っているのですか」

シュテルがわずかに苦笑しつつ、二人は扉をくぐる。そして手を繋いで、歩き出した。

クリスマスの飾り付けがされている街を、シュウとシュテルは二人で歩いて行く。お互いの手をしっかりと握り、目的地へ向かって歩いて行く。大人たちであれば、映画館などで恋愛映画など見たりするのだろうか、シュウにそんな趣味はなく、シュテルも恋愛映画はあまり見ない。なので二人が最初に向かうのは、書店だった。

二人が最初に会った書店。そこでいつものように立ち読みを始める。せつかくのクリスマスだというのに普段と変わらないが、これが二人の関係でもある。

「やる気があるのかあいつは……」

店主が情けないと首を振っていることにシユウは気づかない。シユテルと一緒に、しばらくは本を読み続けた。

二時間ほどの読書を終え、二人は店主に挨拶をして書店を後にする。次に向かうのはデパートだ。特に何かを買う目的があるわけではない。ケーキなどはディーアーチェが作っているし、それ以前に、今日は何も気にするなとディーアーチェから言われている。気にせず遊べ、と。

それでも普段の生活の習慣が、二人は一階の食品売場に来ていた。試食などを少し食べつつ、ぐるりと一周する。だが何か必要なものがあつたわけではないので、商品は手に取らなかった。

その後もデパートの各種売場を巡り、そして結局何も買わずに外に出る。自分はここに何をしにきたのだらう、と思ってしまうが気にしても仕方のないことだ。

辺りが赤く染まり始めた頃、シユウとシユテルは公園のベンチで一息ついていた。予定のコースを回り終え、マンションに帰る前に少し休憩しようとしてここに立ち寄っている。結局、今日はいつもより多くの店を回っただけの日だった。それが少し、シユテルに申し訳なく思う。

クリスマスにシユテルを誘ったのは、シユウだ。忙しい時期でもあるので断られるかもしれないと思っていたのだが、快諾されてしまった。誘ったのはいいものの計画などなく、慌てて親友に相談しているいるとアドバイスをもらったのだが、結果はこの有様だ。

あまりにも情けなくて項垂れていると、シユテルの声が降ってきた。

「どっかしましたか？」

問われて、シユウは答えに窮する。正直に答えられるものではない

い。ただ、だからといって何も言わないわけにもいかない。シュウが選んだ言葉は、

「ごめんね」

その一言だった。だがシュテルにはその一言で通じてしまったらしく、わずかに苦笑するのが分かった。

「私は十分に楽しかったですよ。ですので、お気になさらずに」
「でも……」

納得できずに言葉を続けようとする。だが、不意に手を握られ、シュウの言葉は最後まで出なかった。シュテルがいつもの無表情で、しかし柔らかい声で言う。

「貴方と一緒に回れるだけで楽しいものですよ、シュウ」

「……………」

シュウの頬が朱に染まる。それを知ってか知らずか、シュテルは視線を前方へと移していた。シュウの表情を見ないように。

「あまり遅くならないうちに帰らないといけませんね」

シュテルの言葉にシュウは頷く。夕食は七時からと言っていたので、それまでには帰らなければならぬ。まだ時間はかなりあるが、今の時間が続けばいいのにも思ってしまう。

手から伝わるシュテルの温もりを感じながら、シュテルの横顔を見る。正面を見るシュテルはいつもの無表情だ。

「あ……………」

シュテルの声。シュウがシュテルの視線を追うと、子猫が一匹、二人のことを見つめていた。どこか切なげな鳴き声で、にゃあと鳴く。周囲を見ても親猫の姿はない。エサでも探しに行っているのだろうか。

シュテルが手を差し出すと、子猫がおそるおそるといった様子で近づいてきた。目の前まで来て、少し躊躇した後、シュテルの膝の上へと飛び乗る。そしてまた、にゃあと鳴いた。

「猫によく好かれるよね」

「何故でしょうね……………」

子猫ののどを撫でてやりながら、シュテルが首を傾げる。慣れた手

つきだ。

「寒そうだね」

シュウはすぐに自分のマフラーを取った。適当に丸めてくぼみを作り、子猫を入れてやる。子猫はすぐにその場で丸くなった。その様子に、シュウの頬も自然と緩む。何ともかわいらしい姿だ。

「シュウ、寒くないのですか？」

「これぐらいなら大丈夫だよ」

子猫の相手をしながら答える。本音を言えばマフラーを外しただけでかなり寒く感じているのだが、だからといって今更子猫からマフラーを取り上げるわけにもいかない。気を遣わせたくもないので、平気な振りをする。

だがやはり体は正直なもので、答えてしばらくした後、シュウは大きなくしゃみをした。鼻をすすり、隣から感じる白い視線を見ないようにする。やがてシュテルが小さくため息をつくとき、自分のマフラーを外した。

「シュテル？」

シュテルはマフラーの端の方を自分の首に巻き、もう片方をシュウの首へ。長めのマフラーであったため長さは足りたが、それでも本来の用途ではないため少し短くなり、シュテルが足りない分を補うために体を寄せてきた。

シュテルの体が密着し、温もりが直に感じられるようになる。シュウの顔が恥ずかしさのあまり赤く染まっていく。

「シュテル……」

「何も言わないでください」

見ると、シュテルの頬も朱に染まっていた。シュテルにとってもやはり恥ずかしいらしい。それでもシュウのためにマフラーの片側を譲ってくれた。それだけで、シュウの心が温かくなっていく。

「ありがとう」

シュウが礼を言うと、シュテルはそっぽを向いてしまった。その様子がおかしくて、シュウから笑みがこぼれる。

シュテルの温もりを感じながら、時折子猫の相手をしつつ、時の流

れに身を任せる。

どれほどそうしていただろうか。別の猫の鳴き声が聞こえてきた。シュテルと共にそちらを見ると、少し大きい猫がこちらを見ていた。親猫、だろっか。

子猫がにゃあ、と一鳴きして、二人から飛び降りる。一度だけこちらに振り返りもう一度鳴くと、親猫の元へと走って行ってしまった。

「行っちゃったね」

「そうですね」

そこで二人は黙り込む。シュウは自分のマフラーを回収して、膝の上で丸めた。

「シュウ。マフラーは……」

「もう少しこのまま、とか……。だめ？」

「……仕方のない方ですね」

シュテルがわずかに苦笑を浮かべるが、しかし拒否はしなかった。シュテルに甘えて、もう少しこのままここで過ごすことにする。

寒さから逃れるように、二人はお互いに身を寄せ合う。お互いの温もりがとても心地いい。

やがて太陽が沈み、辺りが暗くなっていく。そろそろ時間かなとシュウは時計を見て、肩を叩かれてシュテルを見た。シュテルは空の何かを見ているようだ。同じように空へと視線を移し、すぐにそれに気がついた。

雪がゆっくりと落ちてくる。真っ白な雪の粒が空から落ちてくる。

「ホワイトクリスマス、だね」

ただの雪だ。クリスマスまでにも何度か降っている。そう思っている、やはり今この時に降っていると何かが違うような気もする。人の心とはいい加減なものだ。二人でしばらく雪を眺めていたが、やがてシュテルが薄く微笑んだ。

「いい物が見れました。さて、そろそろ帰りましょっか」

「うん」

返事はするが、立ち上がらない。シュテルは怪訝そうに眉をひそめながらも、何も言わないようにしてくれた。雪をしばらく眺め続け、

やがてシュウはシュテルに向き直る。

「シュテル」

「はい？」

同じように雪を見ていたシュテルがシュウを見る。シュウはその眼をまっすぐに見て、行った。

「シュテル。大好きだよ」

「……………。以前にも聞きました」

頬を染め、シュウから視線を外すシュテル。シュウは笑いながら、続ける。

「何度でも言っ。好きだよ」

シュテルが小さくため息をついた。シュウの方へと向き直り、視線が合う。身を寄せ合っていたため当然なのだが、顔が近い。

「私も好きですよ、シュウ」

いつもは見せない、優しい微笑。

そして、目を閉じる。

その少女の唇に、シュウはそつと唇を落とす。少しして、すぐに離す。かなり短い時間のソフトキスだが、二人にとっては十分以上だ。次の瞬間にはお互いに視線を逸らし、気まずそうになってしまう。まだまだ片手の指で数えられる程度しかしていないとはいえ、慣れたいなとも思う。

それに、せつかくのクリスマスだ。

シュウが視線をシュテルへと戻す。シュテルの頬はまだ赤い。自分だけが見ることのできる表情。そのシュテルの体を、シュウは抱きしめた。

「あ…………。シュウ…………？」

シュテルが戸惑いの声を上げ、シュウを見る。だが抵抗はしない。自分に身を預けてくれる。

「シュテル」

「はい」

「シュテルを守れるように、がんばるから」

せめて自分の一番大切なものを守るように。守ってもらおうので

はなく、自分が守れるように。そんな意思を込めてつぶやいた言葉を、しかしシュテルは苦笑で流した。

「人には得手不得手があります。貴方は貴方の道を歩いてください。それに……」

シュテルが左手をシュウの背中へと回し、右手でシュウの頬に触れる。しっかりとシュウの顔を見つめてくる。

「あの時から……。シュウは私にとって、ヒーローですよ」

シュテルの言葉にシュウは一瞬呆けたように呆然として、そしてすくなく照れくさそうに笑う。シュテルも自分で言っただけで恥ずかしくなったのか、頬をさらに染めてしまう。

やがて二人は、もう一度だけ、お互いの唇を重ねた。

静かな、暗い公園の中。

ゆっくりと落ちてゆく雪の中。

一つの影を作る二人の姿を、星の光が優しく見守っていた。

第二話

「ええい、押すな！ 見つかるだろうが！」

ディアーチェの押し殺した声が聞こえてくる。それに反論するのはレヴィだ。

「だって見えないし！ 王様ばかりずるい！」

「遊びではないと何度言えば……！」

「二人とも、落ち着いてください……！」

小声で言い合う二人を仲裁するのはユーリだ。何とも複雑そうな表情をしている。そんな三人を眺めながら、シユウは小さくため息をついた。三人の向こう側、建物に隠れて見えにくいのが、二つの人影がある。

シユテルと、そしてコウだ。

どうしてこうなったのだろう。思い返してみても、答えは出なかった。

コウがシユテルに唐突な告白をした直後、その時こそ戸惑いや驚きで呆けてしまっていた五人だったが、シユウをのぞく四人は回復が早かった。シユテルがどうしたものかと考え込み、ディアーチェが不愉快そうに眉をひそめる。レヴィとユーリはコウのことを興味深そうに観察していた。

その時のシユテルが考えていたことは、何となくだが理解できる。シユテルはシユウとコウの関係を考えていたのだろう。下手な対応をして、シユウとコウの関係が悪くなることを避けたいと考えたのだろう。だからといって、その後のシユテルの言葉には納得できなかったが。

「付き合う、の意味合いを分かりかねますが……。買い物程度でしたら、時折でよければお付き合いします」

この言葉に驚いたのはディアーチェたちも同じだ。シユテルの言

葉を聞いた瞬間、三人とも驚きで目を丸くしていた。まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかったのだろう、告白した本人であるコウも啞然としていた。

「え……？　ほんまに？」

「時折では不満ですか？」

「い、いやー！　そついうわけやないけどー！」

コウが慌てたように首を振る。シュテルがならば良いのですが、とうなずきを一つ、自身の携帯電話を取り出す。その意図を察したのか、コウもすぐに自分の携帯電話を取り出した。そして手早く連絡先の交換を済ませてしまふ。

「じゃ、じゃあ……。また連絡しますー！」

「はい。分かりました」

コウがおそろおそろといった様子で手を振り、そして走り去っていく。シュテルはその背中を無表情に見送り、そしてシュウはその一部始終を、口を挟むこともなくただ呆然と見ることでしかできなかった。

そして現在。シュウたちは遊園地の中にいる。いつの間にかコウと約束をしていたらしく、シュテルはコウと二人でここに来ている。シュウやディアーチェに相談は一度もなかった。そのことに少なからず衝撃を受けたものだ。

「あの二人、何をしてるのかな」

レヴィの疑問に正確に答えられる者はいない。むしろそれを知るためにここに来ている。

今朝、シュテルが珍しく一人で出かけるということだった。時折あることではあるので気にするべきではなかったのだが、なぜか妙な胸騒ぎを覚えて、シュウは隠れて追いかけてきてしまった。シュウの直感に思うところがあるのか、それについてきたのがディアーチェたちだ。

シュテルとコウが何かしらの話をしながら、移動を始める。それに合わせてシュウたちも少し距離を置いて、後を追いかける。

やがて二人がたどり着いたのは観覧車だった。二人で観覧車に乗

り込んでしまっ。

「……入っちゃいましたね」

ユーリのつぶやき。ディアーチエが自分を気遣うような視線を投げてくる。シュウはそれに応える余裕もなく、ただただ呆然と観覧車を見上げていた。

Side:Stern

シュテルは観覧車のいすに座る。特別な造りなどない普通の観覧車だ。シュテルの向かい側にはコウが座る。コウは満面の笑顔だ。

「一応聞いておきますが、何のつもりですか？」

シュテルの目がわずかに細められる。そこからシュテルの不機嫌を感じ取ったであろうコウは、しかし肩をすくめただけだった。

「いや、だってデートに誘っても来うへんことは分かってるしなあ。まあ少しぐらいええやろ？」

「……」で最後ですよ

「おっ」

コウの明るい返事に、シュテルは小さくため息をついた。

今朝方、コウから電話があった。少し買い物に付き合っしてほしい、というものだ。先日の会話もあり、一度ぐらいならいいだろうと了承し、買い物程度ならすぐに終わるだろうと誰にも言わずに待ち合わせ場所にまで来た。そしてコウから聞いたのは、遊びに行こう、という言葉。

当然シュテルはそれならと断ろうとしたが、切り出そうとした瞬間、コウが捨てられた子犬のような目をしたので、結局少しだけならと一緒に来てしまっている。せめて王ぐらいには連絡するべきだったと思うが、今更連絡しても意味はないだろう。

目の前のコウを見る。コウはシュテルと一緒に行くと言ってから、ずっと笑顔だ。今はその笑顔のまま、景色を、というよりは真下の風景を眺めている。

「狙い通り、やな」

そんなコウのつぶやきが聞こえてきたが、意味は分からなかった。

観覧車からコウと共に下りる。あ後は特に会話らしい会話もなかった。ただ、コウが何かを楽しみにしているかのように、下りるのが待ちきれないといった様子だったのは覚えている。その時は意味が分からなかったが、たった今理解した。

「シューウ……」

目の前に、シューウがいた。自分を見つめてくるその表情は、困惑、戸惑いに彩られている。それを見ただけで、罪悪感に心が締め付けられた。してはいけないことをしてしまった、とすぐに分かった。

「おっす、シューウ！ 奇遇やなー」

コウの元気な声。その声が今はとても恨めしい。何が奇遇だ、こうなることを知っていたのではないのか。シュテルが不愉快そうにコウを睨み付けると、しかしコウはそれに気づかないようでシューウに手を振っている。いや、気がつかない振り、だろうか。

「えっと……。ごめんね、邪魔をするつもりはなかったんだけど……」
シューウが困ったように苦笑する。不本意な誤解をされているとは分かるが、どう説明すればいいのか咄嗟には出てこない。自分自身さほど自覚はなかったが、どうやらこれでも慌てているらしい。不思議なことがあるものだ、とどこか他人事のように思えてしまう。

「えっと……。じゅっくっ」

シューウはそんな言葉を残すと、きびすを返して走り去ってしまった。シュテルはそれを追おうかと思ったが、コウに腕を掴まれる。無表情でコウを見ると、悪戯が成功した子供のような表情をしていた。

「……貴方は何を考えているのですか」
いつもの無表情ながら、シュテルの声色は低い。しかしコウは臆することもなく、別に、と答えてくる。

「最初会った時にすぐに分かった。俺が立ち入る隙がない」
シュテルがわずかに眉をひそめる。いまいち意味が理解できない。構わずにコウが続ける。

「だから、まずは俺が立ち入る場所を作らなあかん。シュテルさんが俺と一緒にここに来てたら、それぐらいはできるやろっ」

予想以上の効果やったけど、とコウは苦笑した。

コウはシュウがここに来ることを見越していたらしい。その上で、自分と二人きりで見せるところを見せた、と。そういうことだろう。何故、と疑問には思うが、シュウの表情や自分の罪悪感など、おそらくコウの目的は果たせているのだろう。それだけは何となく理解できた。

「シュウは鋭いからなあ。来るだろうと信じてたけど、まさか本当におるなんてな」

コウはくつくつと楽しげに笑うと、改めてシュテルに向き直った。無邪気な笑顔をシュテルに向けてくる。今までのことが全てなかったかのようだ。

「シュテルさん。今日はありがとな。楽しかったで」
「……………」

シュテルは無言。自分のこの感情をどのような言葉にすればいいのか、分らない。こんなことは初めてだ。

「それじゃあ。また遊ばな」

屈託なく笑うと、コウは手を振ってその場を後にして歩いて行ってしまった。

Side: Hero

シュウは、気づけば自宅のドアの前にたどり着いていた。どこをどのようにして帰ってきたのか覚えていない。帰り際、ディアーチェたちに呼び止められたような気もしたが、それすらつる覚えだ。ディアーチェたちに悪いことをしたとは思っているが、それを反省する余裕は今のシュウにはない。

自宅のドアを開け、シュウはすぐに鍵を閉めた。唯一使っている部屋、リビングに向かい、床に倒れ込む。なぜかとても疲れていた。今日はこのまま眠ってしまいたい。そう考えて、実際に目を閉じて間もなく、インターホンが鳴らされた。起き上がるのも億劫なので無視していると、今度はドアが強く叩かれる。

「シュウー」

ディアーチェの声。しかしシュウは何も言わない。やがてドアを叩く音がなくなり、すぐに人の気配もなくなった。そのことに安堵しつつ、シュウは今度こそ目を閉じた。

Side::Stern

「戻ったか、シュテル」

自宅のリビングに入ったところで、王の低い声が聞こえてきた。シュテルは王を見て、次に居心地悪そうにしているレヴィとユーリを見る。二人には悪いことをしてしまったと思ってしまう。

「経緯を話せ」

王の命令に、シュテルは頷いて説明する。全てを聞き終えたディアーチェは、呆れたように天を仰いだ。

「せめて我に念話でも送っていれば、あらかじめ説明しておけたものを……」

「そうですね。そうするべきでした」

その点は素直に反省している。すぐに済むだろうと思っていた自分が恨めしい。そのせいでシュウに余計な誤解を与えてしまった。

そこでふと疑問に思う。なぜそのことをこんなにも気にしているのだろうか。

不思議そうに考え始めるシュテルに、ディアーチェはやれやれと首を振った。

「先ほどシュウの部屋に行ったが、出てきてくれなかった。鍵は預かっているが、今勝手に入るのはまずがる。あとで行くといい」「そう言っって王が鍵を投げてくる。シュテルはそれを受け取ると、しっかりと頷いた。

だが、結局その日、シュウが部屋から出てくることはなかった。

Side::Hero

明朝。シュウは太陽が昇るよりも前に目を覚ました。これほど早くに目を覚ましたことに自分でも驚いてしまう。立ち上がって伸び

をして、そして腹の音が大きく鳴った。そう言えば昨日は朝食しか食べていない。同時に、あの後シュテルたちとは一切会っていないという事にさらに驚いた。

一晩寝て、一応落ち着きはした。シュテルとコウが二人きりで遊園地にいたことには少なからず驚いたが、だから何だとも思う。その程度で困惑するなど自分の器はどれだけ小さいのかと。

だが、朝にいきなり会つというのも何故かとても気まずい。学校でもう少し気持ちを落ち着かせてからにしようと、シュウは静かに着替えて学校に向かった。

まだ暗い道を黙々と歩き、学校にたどり着く。学校の警備員にかなり驚かれたが、早くに起きてしまったので、と説明すると、とても複雑そうな表情をしていた。シュウの教室まで一緒に来てもらい、中に入れてもらう。途中でお腹の虫を鳴らすと、苦笑した警備員がおにぎりをくれた。とてもいい人だ、と思う自分は安いのだろうか。

おにぎりを食べ終え、シュウは自分の席でぼつと過ごす。空がだんだんと白み始め、クラスメイトたちが登校してくる。その間も、シュウは心ここに在らずといった様子で呆けていた。一応シュテルとどんな話をしようか、などと考えてはいるのだが、それを知らないクラスメイトたちはとても怪訝そうにしていた。

しばらくして、一人の女の子がシュウの目の前に立つ。それに気がついてシュウが顔を上げる。女の子はシュウと目が合つと、顔を真っ赤にした。

何だこれ。

シュウが不思議そうに首を傾げる。女の子はしばらくもじもじとしていたが、

「これ…読んでください………」

そう言つて、かわいらしい封筒を机に置いた。そしてこの様子を見守っていた女の子グループに向かって走って行く。シュウは首を傾げながら封筒を開け、中の便箋へと視線を落とす。

「……はっ」

シュウが間の抜けた声を発し、そして顔が真っ赤になる。まさか、

と思い、どうして自分が、とも思う。

それは、俗に言うラブレターだった。

日なたぼっこ

ある晴れの日の昼下がりに。シュウとシュテルは自宅の側の公園に来ていた。いつものベンチに腰掛けて、二人揃って本を読んでいる。特に目的などはない。強いて上げるなら、散歩に近いものだろうか。今朝方、せつかくいい天気なのだからどこかに行かないかとシュテルたちを誘ってみたのだが、全員がとても複雑そうな表情をしていた。ディアーチェから聞いた話では、大きな仕事が入りこれから全員出かけるとのことだった。

その後、ディアーチェの、少し待て、という言葉に従い、四人が出かけた後にリビングで待機する。すぐに終わる仕事なのだろうかとぼんやりと待っていると、程なくしてシュテルが戻ってきた。その時に聞いた話では、シュテルの担当を別の人に依頼してきたらしい。

「そんな無理しなくても……。良かったの？」
「構いません。物量が多いだけで、危険な仕事というわけでもありませんし」

そんな会話の後に、シュテルはキッチンへと向かった。何かを作り始めたようなので、そのまま大人しく待つ。そして戻ってきたシュテルの手には、二つの弁当箱があった。

そして今、ベンチに座る二人の側にはその弁当箱がある。

シュウ自身、出かけようと言ったものの何か計画があったわけではない。申し訳なく思いながらもそれを告げると、ではいつもの場所へ、ということでのこの公園に来ていというわけだ。

シュウは読みかけの本を閉じた。欠伸をしつつ天を仰ぐ。太陽の光が降り注ぐ。もう肌寒い季節だが、太陽の光のおかげが少し温かく感じる。それがとても心地よく、強い睡魔に襲われてしまう。

少しぐらい寝てもいいかな、と誘惑に負けそうになった時、不意に肩に重みを感じた。一瞬何が起こったのか分からずに首を傾げ、隣を見る。本気で我が目を疑った。

シュウの肩にシュテルの頭がある。静かに目を閉じ、整った寝息を立てていた。本当に、本当に珍しいことがあるものだ。あまりの衝撃に、シュウの眠気は一気に吹き飛んでしまっていた。そして心の中で決める。シュテルが起きるまでは動かない、と。

そう考えてから十分ほどが経過し、早くもシュウは再度眠気に襲われていた。太陽の温かさに加え、隣で気持ちよさそうに眠っている人がいるとなぜか自分も眠たくなってくる。何度も欠伸をしながらも、必死になって意識をつなぎ止める。

ちらりとシュテルの表情を見る。変わらず眠る少女。出会ってから半年は経っているが、シュテルが眠る姿などほとんど見たことがない。もちろん毎晩自宅で寝ているのは分かっているのだが、シュウの目の前で眠ることが少ないので、とても新鮮な感じがする。

この機会にシュテルの寝顔をもっと見ようかなと漠然と思ったところで、シュウもついに意識を手放し、眠りに落ちた。

目を覚ましたのは二人同時だった。お互いに体重を預けていた二人は同時に顔を上げ、シュウはゆっくり伸びをして欠伸をする。シュテルは、起きてすぐに唾然としていた。おそらく、自分でもうたた寝をしてしまったことが信じられないのだろう。

「おはよう、シュテル」

その様子が少しおかしくて笑いながら声をかけると、シュテルはシュウへと向き直る、そして小さく頭を下げた。そのことに少し驚くシュウ。

「すみません、迷惑をかけてしまいました」

「いやいや、迷惑じゃないから！ 珍しいなって思ったくらいだよ！」

慌ててそう告げる。本当に迷惑など思っていない。驚きはしたが、それだけだ。ただ、それでも気になることはあるが。

「疲れているの？ もう少し寝ていてもいいと思っしょ？」

純粹に心配してしまう。シュテルがあんな無防備に眠ることなどほとんどない。だからこそ、シュウが知らないだけでシュテルには疲れが溜まっているのではないかと。告げられたシュテルは、少し考え

る素振りを見せてから首を振る。

「確かに忙しい」とも多いですが、疲れが溜まるほどではないと思います。それに、単純に気持ち良かっただけです」

シュテルが顔を上げる。シュウも同じように顔を上げて、光を放ち続ける太陽を見る。ぽかぽかと気持ちが良く、またしても眠気が襲ってくる。シュテルに言う前に、自分が眠ってしまいそうだ。

「シュウ。少し遅くなりましたが、昼食にしましょうか」

昼食、と聞いてシュウは眠気を頭から追い出す。シュテルから渡された弁当箱を受け取り、ふたを開ける。唐揚げやハンバーグ、おにぎりなどが詰まっていた。

「急だったので有り合わせの材料で作ったものですが……」

「十分だと思っけど」

唐揚げをつまみ、口に入れる。いつもの味だ。満足そうに頷いて、シュテルに笑顔を向ける。

「うん。おいしいよ」

「そうですね」

シュテルの返事は短かったが、どこか安堵のような雰囲気を感じられた。

弁当を食べ終えた二人は、そのまま読書を続けていた。時折会話を交わしつつ、のんびりとした時を過ごす。シュウにとっては、こういった時間はとても好きなものでもある。それに今は、暖かな光の中にいる。それがとても気持ちがいい。昼食直後のためか、先ほどよりも強い睡魔に襲われてしまうほどだ。

思わず大きな欠伸をして、シュテルがこちらをじっと見つめていることに気がついた。シュウが驚いて少し慌てる中、シュテルはわずかに目を細めた。不機嫌そう、というわけではなく、どこかおかしそうな、優しさすら感じられる。

シュテルはおもむろにデバイスを取り出すと、次の瞬間、周囲に境界が張られた。

「私も少し疲れました」

シュテルの声。シュウが怪訝そうに眉をひそめる。

「せっかくの良い天気です。少し休ませていただきます」

シュテルが本を閉じてシュウを見る。そして問うてくる。貴方はどうしますか、と。シュウは、気を遣わせてしまったかなと少し反省しつつも、シュテルの申し出をありがたく受けることにした。

「じゃあ、僕もちょっとお昼寝させてもらおうかな」

本を閉じて伸びをする。そのままベンチに深く腰掛けると、シュウは日差しの中を感じながら目を閉じる。それだけで、眠気が一気に強くなり、シュウはまた欠伸をしてしまった。眠たい、と感じている時に寝られるというのは気持ちがいいものだ。

横目でシュテルの方を見てみると、シュテルも同じようにベンチに深く腰掛け目を閉じていた。だがまだ眠ってはいないようだ。不意にシュテルの目が開き、シュウと視線が合った。

「どうかしましたか？」

「え？ えっと……」

唐突な問いかけに思わず言葉に詰まる。一言だけ言いたいことがあるが、必ず言わなければならぬというわけでもない。このまま言わずにいようとも思っていたが、シュテルがじつとこちらの言葉を待っているの、仕方なくシュウは口を開いた。

「じゅめんね。誘うならもっと何か計画しておくべきだったね」

仕事の予定まで変更させてしまったのに、この有様では本当に申し訳ないと思ってしまう。そして、自分がこう言った後にシュテルがどう返答するか、そこまで予想できている。

「気にしないでください。十分楽しめていますから」

予想通りの返答に、シュウは笑みをこぼす。お世辞にも聞こえそうだが、シュテルが嘘をついていないことぐらいは分かる、シュウはシュテルの言葉に、一先ず胸をなで下ろした。

「せっかくなのです。休みましょう、シュウ」

「うん。そうだね」

シュテルの言葉にシュウは頷いて、また目を閉じる。

今度こそ、二人揃って眠りに落ちた。

「で、結局寝て過ぐした、と」

シュテルたちの部屋のリビングで。夜、ディアーチェがため息とともにそう言った。それを聞いたシュウは、乾いた笑いを浮かべながら頭をかく。

「もつ少し何かできたであろうに……。まあ、それで良いのなら我は何も言わぬが」

「あはは……。なんだか、ごめんね？」

かまわん、とディアーチェがおもしろくなさそうにしながら手を振る。

夕方、目を覚ましたシュウとシュテルは、買い物を済ませて帰宅した。そこにはすでにディアーチェたちが仕事から戻ってきており、早速今日のことを報告すると命じられていたところだ。シュウの話の間に、シュテルはキッチンへと夕食を作りに行っている。

ディアーチェは何かを期待していたようだったが、どうやらそれに応えることはできなかつたらしい。一先ず謝罪を口にするると、ディアーチェは呆れたような目でこちらを見た後、やれやれと首を振っていた。

「まあ、それがシュウらしいとも言えるか……」

「どういふこと？」

「こちらの話だ」

気にするな、とディアーチェが手を振る。シュウは怪訝そうに眉をひそめていたが、すぐに、まあいいかと話を終えた。

その日もいつものように一日が過ぎる。代わり映えのしないいつもの一日。シュテルが料理を並べていくところを眺めながら、シュテルの寝顔を思い出してしまふ。シュテルのあの顔もかわいいなと、ついそんなことを思ってしまう。

「シュウ。何か妙なことを考えていませんか？」

「か、考えてないよ……」

ならばいいのですが、とシュテルが隣に座る。内心で驚きながら

も、シユウは安堵のため息をつく。

ゆっくりと一日が過ぎる。いつも通りの時間。シユテルたちとの時間。

そのことに確かな幸せを感じながら、また誘いたいなと一人でそんなことを考えていた。

第二話

昼休み。シユウは誰もいない教室、視聴覚室に来ていた。普段は鍵のかかっているはずの扉は、なぜか今だけは開いていた。あの子が開けたのだろうかと考えながら、シユウは中ではばらく待つ。その手には、朝に受け取った手紙がある。

手紙の内容は、簡単な告白の文章だった。そして最後に、昼休みにここに来てほしい、というもの。ここで返事を聞かせてほしい、ということだろうか。

どうやって断ろうかと考え始め、しばらくして。教室のドアが開かれた。入ってきたのは、朝の少女、ただ一人だ。少女はシユウをみつけると、花が咲いたような満面の笑顔を見せてくれる。

「良かったー！ちゃんと来てくれたんだね」

少女がこちらへと歩いてくる。

少女の姿を改めて見て、そう言えばこんな子いたな、というのがシユウの本音だった。黒いロングヘアに黒い瞳、顔にはそばかすがある。何度か姿を見たことは当然あるが、それほど記憶に残っているわけでもない。もっとも、シユウ自身クラスメイト全員を覚えているわけではないが。それでもこの少女は、見かけるたびに笑顔を浮かべているほど明るいイメージのある少女だ。今まで自分と接点などなかったはずなのだが。

そこまで考えたところで、少女が目の前に立った。少しだけ恥ずかしそうにしながら問うてくる。

「手紙、読んでくれた、よね？」

そうだった。その返事のために来たのだ。シユウはしっかりと頷いて、一言謝罪を口にしようとして、しかし目の前の少女の、待って、という一言に口を閉じた。

「西崎君は私のこと、よく知らないよね？」

名前すら覚えていません、とは口が裂けても言えない。シユウが引

きつった笑みでどうにか頷くと、それじゃあ、と少女が言葉を続ける。「放課後、一緒に遊びに行こう？」 私のことを知ってほしいから。返事はそれから聞かせて」

たった一日の付き合いで考えが変わることはないと思うが、一日だけなら、とシュウは了承した。「ここで首を振って断ってしまうのは簡単だが、それだと勇気を出して想いを告げてくれた少女に失礼だろう。

告白というものがどれほど勇気が必要か、それだけはよく分かっているつもりだ。シュウも、シュテルへとしっかりと想いを告げられずにいるのだから。それができただけでも、この少女は尊敬に値すると思っっている。

「それじゃあ放課後！ 帰らずに待っててね！ 約束、だよ！」

少女は元気よくそう言つと、すぐにきびすを返して走り去ってしまった。

なんだか……妙なことになっちゃったな……。

心の中で苦笑しつつ、シュウもその教室を後にした。

そして放課後。シュウは少女と共に街を歩いていた。少女が、是非とも一緒に行きたいところがある、というので先導するのは少女だ。シュウはその後ろをのんびりといつて行く。少女の方は何度もシュウへと振り返り、時折シュウと目が合うと顔を赤くして視線を戻していた。

少女に失礼だとは思いつつも、シュウはシュテルがこの反応を取る様子を想像してみる。

うん。あり得ない。

きつと可愛いだろうなとは思うが、シュテルのイメージではない。そんなことを考えながら一人で微笑している、目の前の少女が首を傾げていた。慌てて、何でも無いよと言つと、少女はまた前を向いて歩き始める。

とりあえず今はこの少女のために時間を使おう。一先ずシュウはそう決めて、思考を中断した。

悪いことは続くものだ。それもとびきりの内容で。最初の方から、まさかとは思っていた。途中から、たまたま同じ通り道なのだろう、と思っていた。だがここまで来れば間違いない。断っておけば良かったとシュウは頬を引きつらせた。

少女に案内されてたどり着いたのは、翠屋だ。ピーク時ではないためか、席は空いているようではある。できれば埋まっていてほしかった。

悪いことはさらに続く。店内に入ると、いらっしやいませと元気な声で出迎えてくれたのはなのはだった。少女と、そして共にいるシュウを見て、目を大きく開いて唖然としている。

「シュウ君……？ どうして音奈ちゃんと一緒に……？」

音奈と呼ばれた少女が、シュウよりも先に答えてしまう。

「デートだよ。だめ？」

「ふえ……？ デート……？」

少しして意味を理解したのか、なのはが顔を真っ赤にする。同時にシュウへと向けられる、非難の混じった眼差し。なのはがこんな目を向けてくることは意外だったが、それも仕方ないことだろうとは思ふ。なのはに案内されて音奈と共にテーブル席につき、

「……………」

カウンターの奥の人影と目が合った。厨房にいたのであろうその人影は、すぐに奥へとまた姿を消す。

最悪だ……。

思わず頭を抱えてしまう。なのはが怒るのも当然だ。よりもよってこんなタイミングで来てしまうとは。先ほどの人影は、シュテルだった。手伝いに来ていたのか料理を教わりに来ていたのかは分からないが、間違いない。自分がシュテルを見間違えるはずがない。

「西崎君。どれにする？」

シュウの心境を知ってか知らずか、音奈は楽しげにメニューを見ていた。

S i d e : S t e r n

珍しくシュテルは動揺していた。厨房に戻って手伝いを再開するが、先ほど見たシュウが気になって仕方がない。一緒にいた少女は誰だろうか。初めて見る顔ではあった。無論、シュウの交友関係に口を挟むつもりなどないのだが、なぜか気になってしまふのだ。

「大丈夫？」

動きが悪くなったシュテルを心配したのか、桃子が声をかけてくる。シュテルは今までの思考を無理矢理頭から追い出すと、大丈夫ですと頷いた。

S i d e : H e r o

翠屋での軽食を終え、シュウは音奈と夕焼けの道を歩いていた。あ後は音奈の趣味や家の話など、いろいろと教えてもらっていた。楽しげに、気持ちの良い笑顔を浮かべる音奈は魅力的な女の子なのだろうとは思ふ。もしもシュテルと出会う前なら、この少女と常に一緒に行動するようになっていたかもしれない。

ただしそれは仮定の話だ。シュウにとってやはり一番はシュテルであり、今もシュテルにどう話そうかと考えて続けている。音奈の話は半分近く聞き流してしまっていた。

やがて音奈が足を止めた。シュウへと振り返り、とても悲しげな笑顔を向けてくる。今にも涙が落ちそうな、泣き笑いに近い顔。それを見て、さすがにシュウも反省した。

「いめん……」

素直に謝ると、音奈が苦笑しつつも首を振る。別にいいよ、と。

「やっぱり、シュウ君の心にはもう誰かがいたんだね」

「うん……。最初に、言うておくべきだった」

「気にしないでいいよ。それに……」

音奈が一步後ろに下がる。そうして見せてくるのは花が咲いたような満面の笑顔。シュウが驚いている中、音奈が続ける。

「まだ、諦めてないから。いつかきくと、振り向かせてみせるよ！」

「あ、あはは……」

これにはシュウも苦笑するしかない。素直に諦めてほしいところだが、そうもいかないようだ。

「ところで西崎君。好きな人って、もしかしてなのはちゃん？」

シュウが目を睨り、違つと首を振る。

「どうしてそう思ったの？」

「なのはちゃんと会ってすぐ戸惑っていたみたいだから」

なるほどそう見えるのか、と妙に納得してしまった。確かになのはに見られたことにも焦ったのだが、シュテルに伝わってしまうという理由のためだ。たださすがに説明まではじづらいので、違つよ、という否定の言葉だけ伝えておく。

「ぶっん……。じゃあ、そういつことしておくね」

どうやら音奈の中ではシュウの好きな人はなのはということになったらしい。ただこれ以上の説明も難しいので曖昧に笑って流すことにした。

「じゃあ、西崎君！ また学校でね！」

音奈が大きく手を振り、シュウも小さく振り返す。それでも満足したのか、音奈はきびすを返すと走り出した。まるで何かを振り切るかのように。シュウは音奈の背が見えなくなるまで見送って、悪いことをしたかなと頂垂れた。もう少し、何かやり方があったのかもしれないのこと。

「シュウ」

背後からの声。シュウが振り返ると、無表情のシュテルがいた。目が合い、お互いに黙り込む。しばらくして、先に口を開いたのはシュテルだった。

「先ほどの方は？」

「クラスメイト……だよ。ちょっといろいろあって」

「そうですか」

再び黙り込む。気まずい沈黙が場を支配する。お互いに、何を言えればいいのか計りかねている状態だ。やがてシュテルがきびすを返した。黙って歩き始めてしまつ。

「あ、シュテル……！」

「すみません、まだ手伝いの途中なので」

「そっか。うん、ごめん……」

振り返らずに言ったシュテルの言葉に、シュウは頷いた。歩き去って行くシュテルを、シュウは黙って見送ることしかできなかった。

Side:Stern

シュテルは翠屋に戻るまでの間、自身の感情が理解できずにいた。シュウが見知らぬ少女と翠屋に来てから、どうにも気分が悪い。説明のできない感情にずっと悩み続けている。シュウと一緒にいるのが他の家族やなのはなど面識のある者ならこんなことにはならないのに、なぜか知らない少女だと焦燥感に似た何かを感じる。

私は……どうしたのでしょうか……。

足を止め、振り返る。すでにシュウの姿はない。そのことに寂しいと感じてしまう自分に驚いてしまう。自分は、何をどうしたいのだろう。

「……シュウ……」

目を閉じ、もう一度自身の感情と向き合う。しかしやはり何の感情なのか、理解ができない。シュテルは小さくため息をつくとき、そこで気持ちを切り替えて翠屋の中へと入っていった。

紅葉狩り

「紅葉狩りに行きませんか！」

ある日の朝。ユーリが本を手にそんなことを提案した。本は何かの雑誌らしく、表紙には秋の特集のようなことが書かれている。それに影響を受けたのだろう。

「紅葉狩りか……。我は構わんが……」

ディアチェが視線をシュテル、レヴィ、そしてシュウへと向ける。どうする、という問いかけた。この場合はユーリに同行するか否か。もしも三人とも断れば、ユーリとディアチェが二人で行くことになる。

シュウとシュテルは顔を見合わせしばらく考えていたが、すぐに返答する者がいた。当然、レヴィだ。手を上げて、元気よく言う。

「行きたい！」

そして、レヴィが行くならとシュテルも参加を表明し、シュテルが行くならとシュウも同行することになる。

「うむ。では昼から向かうか」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

ユーリが満面の笑顔で言う。その笑顔を見られるだけでも十分だった。

少し早めの昼食の後、五人は隣町の公園へと向かった。この辺りでは紅葉が一番きれいに見れると聞いた場所だ。その話は正確で、公園の道は紅葉の木のトンネルとなっており、とても幻想的に思える。わあ、とユーリが瞳を輝かせた。

ユーリとディアチェに先頭を歩いてもらい、シュウはシュテルと最後尾を歩く。赤と黄色のトンネルは、時折太陽の光で輝いて見えたりもする。綺麗なところだな、と素直に思えた。

「ねえ、シュウテるさ」

ディアーチェたちと一緒に歩いているはずのレヴィが戻ってきた。頭上に疑問符を浮かべ、何かを考えているようだ。シュテルが、何でしようかと先を促す。

「いつ紅葉をかるの？」

「……………」

シュテルが小さくため息をつき、シュウは苦笑する。どうやらレヴィは紅葉狩りの意味を理解できていなかったらしい。ある意味レヴィらしいとも言えるが。

「紅葉狩りは、簡単に言えば紅葉を見て楽しむことだよ」

シュウの言葉にレヴィが驚いて目を丸くした。

「どこかの地域では実際に紅葉の天ぷらなどがあるそうですが、ここにはありません」

レヴィが残念そうに肩を落とした。どうやら珍しいものを食べられる、といったイメージがあったらしい。最初に言っておくべきだったか、と少し反省する。

「レヴィ。帰りに紅葉まんじゅうとかでも買おう。ね？」

「紅葉まんじゅう？」

「うん。紅葉の形をしたおまんじゅう」

おまんじゅう！ とレヴィの顔が輝く。現金なもので、すぐに上機嫌になり鼻歌などを歌い始める。シュウはその様子を見て、安堵のため息をついた。

前を歩くディアーチェたちに合わせ、シュウとシュテルものんびりと歩く。平日の昼間のためか、他の人は少ない。周囲を気にせず散策できるというのはいいものだ。

「ふむ…………。弁当でも用意すればよかったか」

不意にディアーチェが足を止め、道の脇にあるベンチを見る。スーツの男がそこでおにぎりを頬張っていた。仕事の合間の軽食、だろうか。その男の隣に置かれた包みを見て、シュウは少し驚いた。白い紙にお菓子のようなものが置かれている。

「……で休憩しない？」

突然のシュウの言葉にディアーチェが怪訝そうに眉をひそめるが、

すぐに頷いてくれた。来た道にもベンチがあったはず、ということと五人で少し戻る。誰も座っていないベンチがあったので、そこで休憩することになった。

「近くに売店でもあればいいのですが」

シュテルが周囲を確認して、すぐに肩をすくめた。仕方がない、とディアーチェが苦笑する。

「シュテル。ちょっと一緒に来てくれない？」

「何でしようか？」

ちよつと離れる、とディアーチェに告げると、ディアーチェは二人を一瞥しただけで軽く手を振った。礼を言いつつ、シュテルの手を取って道の先へと行く。まだいればいいのだが。

「シュウ、どこに行くつもりですか」

「ちよつと待ってね……」

道を少し進み、すぐに目的の人物を見つける。おにぎりを食べ終えたところなのか、水筒のお茶を飲んで一服していた。その男へと近づくと、シュウたちに気づいた男が首を傾げてこちらを見てくる。

「何か用かな？」

シュウが口を開くよりも先に男が言った。シュウが頷いて聞く。

「それ、「この近くで買ったんですか？」」

「ん？ ああ、「これか」

男が傍らの紙袋に視線を落とす。そこに入っていたものはすでになく、何かのお菓子でも入っていたのか、小さな欠片だけが残されている。男はその紙袋を丸めて小さくしながら、道の先を指さした。

「もう少し行ったところで小さな屋台が出ているよ。行ってみるといい」

「ありがとうございます」

シュウが頭を下げ、シュテルも意味が分からないままとりあえずは頭を下げる。

再びシュテルを伴って、少し早足で道の先へ向かう。もうシュテルも何も言っていない。何かを買おうとしている、というのは伝わっているのだろう。

やがて、ちょっとした広場になっているところで小さな屋台を見つけた。何かを油で揚げるような香ばしい匂いが漂ってくる。シュウは嬉しそうに顔を綻ばせると、その屋台へと向かった。

Side: Dearrche

遅いな……。

ユーリとレヴィの会話を聞きながら、ディアーチェは首をひねっていた。待っているのは、当然ながらシュテルとシュウだ。どういった目的で離れるかを聞いておけば良かったかと少し後悔する。先に出発していいのかすら分からない。

念話でも送るか、と何度か思ったが、二人の邪魔をすることにならないかと結局送れずにいる。気にしすぎだとは思っているのだが。

どうしたものか、と腕を組んで考えていると、道の先から走ってくる二人分の足音が聞こえてきて、ディアーチェは顔を上げた。シュテルとシュウだ。シュウの手には紙袋が抱えられている。

「お待たせー」

文句の一つでも言うべきかと迷っていたが、満面の笑顔で言われると何も言えなくなる。ディアーチェは、仕方ない奴らだ、と苦笑する。そのすぐ後に鼻を動かす、シュウの抱えている紙袋を見た。

「それは何だ？」

ディアーチェの問いかけに、シュウが悪戯っぽく笑う。そして紙袋から取り出したものは、お菓子のようなもの。いつの間にかレヴィとユーリの視線もそれへと釘付けになっている。

「紅葉の天ぷら。屋台が出たから買って来た」

「ほう、これが……」

話には聞いたことはあったが、見るのは初めてだ。ディアーチェはそれを一つつまむと、口へと入れる。ほのかに甘く、かりんとうが連想される。

「お菓子みたいー おいしいー」

いつの間に取り取っていたのか、レヴィとユーリも頬張っていた。ぱりぱりと舌で咀嚼する。

「いれまじゅう」

そう言ってさらに差し出されるのは、紅葉の形をしたまんじゅうだ。レヴィとユーリが顔を輝かせる。

「うむ。とりあえず落ち着こうか」

収拾がつかなくなりそうなので、ディアーチェは苦笑と共にそう言った。

紅葉の天ぷらと紅葉まんじゅうを全員に配り終え、シュウが満足そうに一息つく。

現在、ベンチに座っているのはユーリとシュテル、レヴィだ。三人とも、初めて見て食べる紅葉の天ぷらというものに興味深そうにしている。

ディアーチェは、その側で一仕事終えたとばかりに満足そうに笑っているシュウの隣に立った。

「わざわざすまぬな」

一言、その声をかける。するとシュウは少し驚いたように目を瞪り、すぐに首を振った。

「せっかくだから、ね。ちゃんと喜んでもらえて何よりだよ」

「しかし、気にしなくて良かったぞ？ わざわざ探さなくても……」

「ただの気まぐれだから。それに、喜んでもえていたら十分だよ」

シュウが優しく目に細め、ユーリを見る。ディアーチェもそちらを見ると、楽しげに談笑しているユーリたちの姿がある。ユーリはディアーチェたちに気がつくくと、手を振ってきた。それに少し躊躇しながらも振り返すと、シュウが薄く笑う。

「うん。満足だ」

……かなわぬな。

シュテルの気持ち少しは分かる気もする。ディアーチェは小さくため息をつきながらも、その頬は緩んでいた。

第四話

「お兄ちゃん？」

文花の声でシュウは我に返った。

自宅のリビング。休日の朝から、シュウはいすに座ってずっとぼうつと惚けていた。特に何かをするわけでもなく、考えるわけでもなく、茫然自失としていた。時計を見ると、すでに昼前だ。文花に声をかけられるまで、時間の感覚すらなくなっていた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

文花の声に、シュウは大丈夫だよと答える。無用な心配をかけてしまったことに少し反省した。

「文花はどうしたの？」

「妹がお兄ちゃんの家遊びに来るのがそんなにおかしい？」

口をとがらせてそんなことを言う。思わずシュウは苦笑した。確かに何も変なことはない。

「シュテルお姉ちゃんは？」

「今日はまだ来てないよ」

「え？」

文花が驚きに目を丸くする。シュウ自身、シュテルがまだ来ていないことに今更ながら驚いていた。いつも朝食は一緒に食べているので、シュウが来なければ様子を見に来てくれるのに。そのことに少なからず衝撃を受け、落ち込んでしまっ。だが、

「あれ？ 来てみたいだよ？」

いつの間にかキッチンに行っていた文花がお皿を持って戻ってくる。そのお皿にはおにぎりが三個載っていた。メモ用紙のような紙片も一緒にあったそうで、そこには、声をかけても気づかないようなのでおにぎりを置いていきます、とあった。

文花の目が細くなり、冷たい眼差しがシュウへと向けられる。シュウは目を逸らして頬をかいた。まさか来てくれていたとは思わな

かった。気づかなかったことに自分でも驚いた。

「何かあったよね。話して」

先ほどの疑問系ではなく、今回は何かがあったことを確信しての言葉だった。疑問も何もない、発言を促すための言葉。シユウは文花を巻き込みたくはないという思いから発言を躊躇していたが、文花の強い眼差しを受け、小さくため息をついた。

友人の告白。その友人とシユテルの不思議な関係。自分自身もクルスメイトに告白され、一度だけ一緒に出かけたこと。そして翠屋での出来事。それらを全て話し終えると、すでに昼の時間はすっかりと過ぎてしまっていた。

「お兄ちゃん」

「な、何かな？」

「バカでしょ」

「う……」

「考えなし」

「う……」

「死ねばいいと思うよー」

「ひどくないかなー」

罵倒がどんどんとエスカレートしていく。思わずシユウが抗議すると、しかし文花は鼻を鳴らして、シユウを睨み付けてきた。

「まだ言い足りないくらいだよ」

今日の文花はかなり辛辣だ。ただ正論だとも思うのでそれらの言葉を甘んじて受けることしかできない。何とも情けない、とも思う。「シユテルお姉ちゃんがその人とお出かけた時に、どうしてちゃんと話をしなかったの？」

「それは……気が動転して……」

「シユテルお姉ちゃんって人がいるのに、どうして他の人とデートしたの？」

「いや、だって告白されたから……。勇気を出してくれたんだから、無下に断るのはさすがに失礼だと思って、一度だけなら……」

一度だけ一緒に過ごして判断してほしい、と言われたのだ。その一度ぐらいならと思ったのだが、文花に言われずとも愚策だったと後悔している。

「シユテルお姉ちゃんに失礼だと思っな！」

「じもつともです……」

あまりに正論すぎて反論する余地がない。

「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

腕を組んで睨み付けてくる文花に、シユウは言葉を詰まらせる。何かをしようとは思っていなかった。時間が解決してくれる問題ではないと分かってはいても、どうすればいいのかわからない。それを察したのか、文花は苛々とした様子で舌打ちをした。正直、怖い。以前よりも遙かに怖い。

「確かにシユテルお姉ちゃんにも悪いところはあったと思うよ。シユテルお姉ちゃんもちゃんと説明するべきだと思うし。でも、お兄ちゃんも悪いよね？」

「うん……」

「じゃあちゃんとシユテルお姉ちゃんと話し合わないと！ ほら、行きなさい……」

文花の怒声。シユウは勢いよく立ち上がったものの、まだ行動を渋っていた。顔を合わせづらい。

「い、今から……？」

「……」

「行ってきます……」

きびすを返して全力逃走。怖くて文花を振り返ることはできない。だから文花が、世話の焼けるお兄ちゃんだな、と笑っていたことには気づかなかった。

数分後。

「お仕事なのか誰もいませんでした……」

「……」

文花は重く長いため息をゆっくりと吐き出した。

S i d e : D e a r c h e

「見つけたぞ」

マンシヨンの近くの公園で、ディアーチエは探していた少年を発見した。少年もディアーチエを認めると、どこか楽しげな笑顔を浮かべる。

「いやあ、奇遇やな。ディアーチエさん。こんなところで、どうしたん？」

「どうしたもどうしたもあるか。洗いざらい話してもらおうぞ」

ディアーチエの鋭い視線を受け、少年、コウは肩をすくめてみせた。シュテルたちが仕事へと行く前に、ディアーチエはシュテルへとある依頼をした。コウへとこの公園へ来てほしい、という内容のものだ。その後すぐにシュテルたちは仕事へと向かったので、ディアーチエはずっとこの公園の側で待っていた。

二人はとりあえず近くのベンチに向かい、腰掛ける。コウは相変わらずへらへらと笑ったままだ。

「それで、何の話かな？」

笑顔で問いかけてくるコウ。ディアーチエは単刀直入にその問いを口にした。

「貴様、目的は何だ？」

「何が？」

「とぼけるな。シュテルに一目惚れをしたとか言っておるが、本当にそうか？ 外見に関しては近しい者がシュウのクラスにいるのだぞ？」

「なのはさんのことやな。そりゃまあ、雰囲気……」

「シュテルと遊園地に行った後、一切連絡を入れていないのはなぜだ？」

「あー……」

コウがどこか間の抜けたような声を出す。少し考えて、だがすぐに諦めたのか首を振った。そして次に見せた表情は、どこか照れくさそうな笑みだった。

「あの二人の様子をちょっと見て気づいたんやけど」

突然の話題転換。しかしディアーチェは何も言わず、無言で頷く。

「あれ、いつからや？」

何がだ、とは聞かない。何を聞かれているのかは察しがつく。故に

ディアーチェは端的に答える。それなりに長い、と。

「そつやろな、そんな気がしてたわ」

何度も頷くコウ。そのまま続ける。

「シユウはそつち方面の勇氣はからつきしやからな。何か危機感を与えたら変わるかもしれんやろ？ そつ思つて、シユテルさんをデートに誘つたわけや。お前が安心してゐる関係は、結構脆いものやと伝えるために」

今のところは計画通り、というわけだろう。過剰に与えずぎだろうとは思つが、そつまで言つつもりもない。そつか、と頷いてゐるコウがさらに続ける。

「でも意外やったのが、シユテルさんも自分の気持ちをいまいち理解してなかつたことやな」

「ああ……。そつ、だな」

思わずディアーチェが苦笑する。赤の他人にまで悟られるとは、と。

「だからそつちにも手を打たせてもろたわ」

「なに？」

「以前からシユウに想いを寄せてる子がおつてな。その子をけしかけた。もちろん、ちゃんと事情は説明したで。本人も、告白せずに終わるぐらいならと受けてくれたからな」

「あれは責様が仕組んだことか」

シユテルから翠屋での手伝いのことは聞いている。あの時はシユウに対して少し腹を立てたものだが、まさかこれもコウの差し金だったとは思わなかつた。確かにタイミングが良すぎると思つていたが。

「あともつ一押ししてところやな。邪魔せんといてな？」

悪戯っぽくコウが笑う。今度はディアーチェが肩をすくめ、頷い

た。

「いいだろう。いや、我に協力できることがあれば言え。あの二人を見守るのもいささか疲れてきたからな」

ずっとどうにかできないものかと思っていたことだ。この少年がどうにかする策を持っているなら、それに乗るのも悪くはない。ただ、あまりいい気分だとは言えないが、仕方ないだろう。

「しかし、やはりいささかやり過ぎな気はするぞ？」

「まあ、そうやるつな」

「コウが苦笑する。そして、

「一目惚れはほんまやし」

そんな言葉が続けた。驚きで絶句しているディアーチェに、コウが続ける。

「だから、全部が演技じゃないで。ただ、自分の恋路より友達との恋路を優先しただけや。今回の策であかんかったら、その時はほんまにシュテルさんにアプローチするで」

楽しげに笑いながらコウが立ち上がる。携帯電話を差し出してきたので、一先ず連絡先を交換。コウは満足そうに頷くと、それじゃ、と手を振って去って行った。

「……食べぬやつだ」

その後ろ姿へと、ディアーチェは苦笑を送っていた。

Side: Stern

その日の仕事はとて遅くまで時間がかかってしまった。自宅に帰り着いた時間は夜の九時だ。レヴィとユーリはすぐに風呂へと入り、夕食を済ませてベッドに向かっていた。

シュテルも風呂を済ませリビングに向かうと、まだ王が読書をしていることに驚いた。何をしているのだろうと首を傾げていると、

「六時頃にシュウが来たぞ」

王の言葉にシュテルがびくりと身を震わせる。王へいつもの無表情を向けると、王は薄く微笑んだ。

「そんな怯えた目を向けるな。一緒に夕食を食べただけだ」

そうですか、とシュテルは胸をなで下ろした。そこで疑問に思ってしまう。自分は何を不安に思っているのだろうか。シュテルが自分の感情に戸惑っている、王はやれやれと首を振っていた。変わらん、と。

「それで、シュテルよ。どうするつもりだ？」

「どう、とは？」

「シユウとこのままでいいのか？」

シュテルが言葉を詰まらせ、視線を逸らしてしまう。シュテルにしては珍しい反応に王は興味深そうにしていた。こんな反応もするか、といったように。

「最初に説明をしておけば。シユウが説明をすれば。我から見て、今の貴様らは見えていて滑稽だぞ？」

「……でしよっね」

シュテルがそれだけを短くつぶやく。ディアーチェは小さくため息をついた。

「あまり口出しをするつもりはないが、早めにどうにかしなければ手遅れになるぞ」

「……はっ……」

シュテルは頷くと、一礼して自室へと向かう。その背後ではディアーチェが、困ったものだと思わずに微笑を浮かべていた。

スキー

見渡す限りの白い景色。雪の積もった山を滑っていく大勢の人々。その中にはクラスメイトの姿があり、家族の姿もちろんある。

冬休み、シユウたちは高町家や八神家に誘われてスキー場に来ていた。海鳴市から離れ、日本の北の地方まで来ている。シユウもここまでの遠出は初めてだ。当然シュテルたちも初めてで、レヴィやユーリはここに来るまでの間にかなり騒いでいた。

シユウはスキー場の隅にある小さな喫茶店でのんびりとホットココアを飲んでいる。そのシユウの目の前で、シュテルとなのはが何かしらの話をしている。少しして、リフトへと向かっていく二人。

レヴィはフェイトと一緒にだった。最初は何度も転んでいたレヴィだったが、いつの間にかコツを掴んだらしい。滑り降りてくるたびに楽しそうな笑顔を見せてくれている。

ディアーチェとユーリは、ユーリの希望によりスキー場の隅にあるフリースペースで、雪だるまを作っていた。はやてやヴォルケンリツターも参加していて、和気藹々とした様子で作っている。楽しそうだな、と思っていると、

「ええい、子鴉！ 邪魔をするな！」

「手伝ってるだけやで？ そや、せっかくやからおっきな雪だるま作らへんか？」

「何をわけのわからんことを……」

「おっきな雪だるま！ 作りたいです！」

「うぐ……！ ええい、分かった！ 作るからにはこだわろぞ！ 不

本意だが手を貸せ、子鴉！」

「もっちろんや！」

やっぱり楽しそうだな、とシユウは一人で頷いた。そしてすでに冷めてしまっているココアを一気に飲み干す。さて、と席を立った。

「どこに遊びに行こうかな？」

フリースペースで作っている雪だるまはなかなかの大きさになっていた。大の大人が手を伸ばしても雪だるまの頭には手が届かない。我ながら、よくこんなものを作ったものだと思う。ただ、ユーリの嬉しそうな笑顔を見られたので価値はあった。

全員がやり遂げたような満足そうな表情をして、雪だるまを眺める。おっきいなあ、とはやてが言っていて、がんばりましたね、とシャマルが笑う。

「おお、本当に大きな雪だるまになってる」

その声に振り返ると、シュウがいた。雪だるまを感心した様子で眺めている。

「見ておったのなら手伝っても良いだろうに」

「いやあ、邪魔したら悪いかなって」

妙な気の遣い方をするな、とディアーチェが呆れ果て、シュウが困ったように苦笑する。ディアーチェは自分の荷物からインスタントカメラを取り出すと、それをシュウへと放り投げてきた。

「記念撮影だ」

「うん。撮るのはいいけど、カメラなんて持ってたんだね」

「我のではない。たくさん撮れと渡されただけだ」

なるほど、とシュウが頷いた。誰からとはあえて言わなかったが、察しはついているのだろう。このカメラは桃子に渡されたもので、せっかくだから一つのアルバムを作ろうという計画ができていらしい。それを聞いたユーリの希望により、カメラを持ち歩いている。

「よし、じゃあ並んで。撮るよ」

「あー！ シュウ君、王様たちの後でええからこっちもー」

「了解、ちよっと待ってね」

ディアーチェとユーリが並び、シュウがシャッターを切る。その後、八神家も同じように撮影し、そして最後に全員で。なぜ貴様らと、と不満を口にしたがはやてやユーリの笑顔に押し切られた。

全員での撮影も完了し、一息つく。次は何をしようかと相談しようかと思っただが、

「かまくらを作ってみたいです!」

次の要望があった。ディアーチェは苦笑しつつも、よし分かったと早速準備を始める。

「シュウ。ここに居るのだ、次は手伝え」

「うん。分かった」

今度はシュウも加わり、さらに人数が増えての作業となった。

Side:Yuri

程なくしてかまくらが完成した。自分たちを見ていた他の人たちもなぜか参加し始めて、フリースペースは雪だるまとかまくらで占領されつつある。いろいろな雪だるまを見るのがとてもおもしろく、ユーリは目を輝かせていた。

「ユーリ、入らないの?」

背後からの声。他の人の雪だるまから視線を移して自分たちのかまくらを見る。大人数で作ったためなかなか大きなサイズで、中は五人はゆっくりとくつろげるほどには広い。

「入ります! 入りたいです!」

シュウに手招きされて中に入る。空洞をぐるりと回るように雪のいすがり、すでにディアーチェたちが座っていた。ディアーチェとシュウの間が空いていたのでその間に座る。

「なんだか神秘的ですね。それほど寒くもないですし」

「ああ。作った甲斐があったというものだ」

ディアーチェも満足そうに頷いている。今度はシュウの感想を聞くべく振り返り、

「……あれ?」

いつの間にかいなくなっていた。かまくらにはユーリとディアーチェの二人きりだ。

「あやつなら先ほど子鴉に呼ばれて出て行ったが」

全く気づかなかったことに衝撃を受け、何も言われなかったことに悲しくなってしまう。そうして少し落ち込んでいると、ディアーチェが苦笑した。

「じきに戻ってくる」

「え？」

どういうことですか、と聞く前に足音が聞こえてくる。そしてかまくらに入ってきたのは、盆を持ったシュウだった。盆には湯気の立つお椀が三つ。シュウがそれを自分とディアーチェに順番に渡してくる。

「あ、ありがとうございます？」

「どうして疑問系なの？」

笑いながら先ほどと同じ場所に腰掛け、シュウが手を合わせた。

渡されたお椀を見る。中に満たされていたのは豚汁だった。お椀から伝わってくる温もりが心地いい。ゆっくりと飲み、ふう、と息を吐く。美味しい。

「暖まります……」

「喜んでもらったなら何より。ちなみにその喫茶店で急遽作ったらいいよ」

シュウ曰く、かまくらが大量生産され始めた頃から作り始められていたらしい。販売チャンスだ、と。

「その店主には感謝だな」

「ですね！ とても美味しいです」

ゆっくりと食べ進めていく三人。そして最初に食べ終わったのはシュウで、すぐに席を立った。

「さて。それじゃあ、他の二人も見えてくるね」

「うむ。気をつけて行ってこい」

ディアーチェが頷き、インスタントカメラをシュウへと放る。受け取ったシュウは一瞬戸惑いを浮かべたが、すぐに笑顔になった。

「いっぱい撮ってくるよ」

「ああ。任せただぞ」

かまくらを出ていくシュウを見送り、静かになる。

「さて、他にしたいことはあるか？」

ディアーチェの問いかけに、シュウが出て行った方向を見つめていたユーリが我に返り、そうですねと考え始めた。

S i d e : L e v i

「あー シュウだー!」

フェイトと滑り降りていく際、リフトへと向かうシュウを見つけた。レヴィはすぐにフェイトへと目配せし、フェイトが苦笑しつつも頷くのを確認してからシュウへと方向転換。まっすぐにシュウへと向かう。

「ん?」

シュウの方はレヴィのことを見つけられていないのか、周囲を見回している。そしてほどなくしてレヴィを見つけ、すぐに表情が凍り付いた。

「ちよ、レヴィー! 危ない!」

「だいたいしょぶー!」

シュウの手前で急制動、計画通りにシュウの目の前で停止した。シュウはその場に立ち尽くし、顔を青ざめさせている。

「えつと……。シュウ?」

「……。怖かった。本気で怖かった」

「じゅめんね?」

どつやら予想以上に驚かせてしまったらしい。レヴィが素直に謝ると、シュウは、もついいよと言ってくれる。その頬はまだ引きつってはいたが。

すぐにフェイトもレヴィの隣に到着する。フェイトがシュウへと笑いかけ、シュウも笑顔を返す。

「ずっと一緒に滑ってるの?」

「うん。シユテルに頼まれて……」

シュウが首を傾げ、レヴィを見る。その視線の意図を察して答える。

「慣れてきたから一人で滑ろうと思ったんだけど、シユテルんにだめって言われちゃった。オリジナルと一緒にいるように、て」

「なるほど、リフトロール係だね」

「そ、そっなるのかな……?」

シュウのつぶやきにフェイトが困ったように眉尻を下げた。同じ言葉をレヴィも聞いていたのだが、いまいち意味は分からない。

「ま、いいか… シュウは滑らないの？」

言葉の意味などどうでもいいと判断して、シュウを誘うために聞いてみる。シュウは少し考えた後、少し答えにくそうに視線を逸らした。それだけで何を聞きたいのかは理解できる。

「シュテルんならもう少しで下りてくるよ」

「そ、そう？　じゃあもう少し待つよ」

「うんうん。そうした方がいいよー」

レヴィはそれだけ言つと、すぐにリフトへと向かう。フェイトもすぐにその後を追ってきた。

「レヴィ。いいの？」

「ん？　何がさ？」

「シュウと滑りたかったんじゃない？」

リフトの順番を待ちながら、レヴィは楽しげに笑った。オリジナルは分かってないね、と前置きして、

「こつこつ場合はお邪魔になるんだよー」

「そ、そうなんだ……。ところで、誰かに言われた？」

あまりに当然なことを聞かれて、レヴィは首を傾げる。それを見てフェイトは、やっぱり、と得心した表情をする。

「王様から聞いたけど」

「うん。……来たよ、今度はどつ滑る？」

「えつとね……」

フェイトと話をしながら、レヴィはリフトに乗った。

Side…Stern

シュテルはなのとは一緒に滑っていた。スキーというものに最初こそ戸惑いはしたが、今ではすっかり慣れて頂上付近から滑ってきている。一緒に滑っているのはを氣遣つことも忘れない。

「ナノハ、大丈夫ですか」

「う、うん……。シュテルはすごいね……。こんなに早く覚えちゃう

なんて……」

そうでしょうか、とシュテルは首を傾げた。それほど特別なことをしているつもりはもちろんない。だがそれを聞いたなのは、それがすごいんだよ、と笑っていた。

短い休憩を挟みながら、滑り降りていく。やがてリフトが見えるようになり、シュテルが目を細めた。見知った人影がある。

「シュウですね」

「え？ 本当に？ どう？」

「リフトの側です。誰かを探しているようですね。……私がシュウを見間違えるとても？」

なのはの頬が一瞬染まり、そうだよな、と目を逸らしていた。どうしたのかと首を傾げるが、なのはは何でもないよと笑っただけだ。無理に答えてもらう必要もないと考え、すぐにシュウへと視線を戻す。

「先に行きます」

「うん。私もすぐに行くから」

最後に短い会話を交わし、残りの距離を一気に滑り降りていく。やがてシュウもこちらに気づいたのが、シュテルをしっかりと見たシュウが小さく手を振っていた。シュテルはシュウの目の前で停止する。

「さすが、すごいね。もう慣れたんだ」

「まあ、「じれづらしいは」

シュウに褒められるのは悪い気はしない。素直にその言葉を受け取る。シュウはその反応に少し驚きつつも、照れくさそうに笑った。

「シュウは滑らないのですか？」

「いや、スキーはちょっと苦手で……」

視線を逸らすシュウ。そう言えば皆でスキー板を借りに行く時も、シュウだけは断固として借りようとしなかったことを思い出す。何か嫌な思い出でもあるのだろうか。無理に話してもらおうとは思わないが……。

「あ、別に嫌な思い出とかじゃなくて、どれだけ練習しても滑れなかっただけだよ」

「そうですね」

心を読まれたかのようで、思わずシュテルは薄く苦笑する。それならば、と続ける。

「私で良ければ、教えましようか。せつかくのスキー場ですし」「う……。すごく魅力的な提案……」

無理強いはいしませんよ、とシュウの返答を待つ。シュウはしばらく考え込んでいたようだったが、一分以上も熟考した後、無言でスキー板をレンタルしに行った。

「では、ナノハ。また後ほど」「うん。またね」

シュウへと滑り方を教えるため、なのはとはリフト前で別れた。後ほどまた一緒に滑ろうという約束をするのも忘れない。その後、なのはしばらくどうしようか考えていたようだったが、フリースペースにみんなで作ったかまくらがあると聞いてそちらへと向かっていった。

なのはを見送った後は、リフトではなく徒歩で山を少しだけ登る。五十メートルほどの距離だ。そこまではスキー板を担いで運び、到着後に準備をする。

「では始めましようか」「お手柔らかに……」

一時間後。シュテルの指導のおかげか、シュウは少しだけ滑れるようになったようだ。ただそれでも、ゆっくりと、スピードが出ないように、という状態だったが。

「シュウはスポーツが苦手、というわけではありませんよね？」

「そのはずなだけどね……。普通を自負してる」

「ではこれももう少し練習してコツを掴めばとは思いますが……」

考えながら、シュテルは隣のシュウを見る。ゆっくりと滑るシュウの表情は、必死そのものだ。もしかすると、技術面ではなく何かしらの恐怖心からくるのかもしれない、と思ったとこの目で、

「じっわっ」

シュウの短い悲鳴。直後に何か倒れる音。見れば、シュウが尻餅をついて嘆息していた。単純に、シュウには合っていないだけ、という可能性もある。

「大丈夫ですか？」

そう言っって手を差し出す。シュウはその手をしばらく見つめ、

「……情けないなあ……」

「は？」

「いや、何でも」

シュウがシュテルの手を取る。少し力を入れてシュウを立ち上げらせ、また滑り始める。

「シュウ」

「ん？」

再び必死の表情なり滑り始めたシュウへ、シュテルは短く告げた。

「これが終わったら休憩にしましょう。かまくら、があるのですよね？ 私も見たいです」

「ん……。そうしようか……。わあー」

再び尻餅。シュウの表情がどこか悲しげな、泣きそうなものへと変わっていき、シュテルはどつにも声が掛けづらくなってしまふ。無言で手を差し出し、再び引っ張り起す。

「って、シュテル勢いよすぎ……っわっ」

「は……？ きゃっ」

勢いよく引っ張り上げすぎ、シュウがシュテルを押し倒す形になって再び倒れた。シュテルのすぐ目の前に、シュウの顔。しばらくそのまま無言で見つめ合ってしまう。

「……シュウ。離れてください」

「あ、っ、っめん……」

慌ててシュウが飛び起きる。シュテルも立ち上がり、服についた雪をはらいながらシュウから顔を背けた。一瞬前のことが脳裏によぎり、顔が赤くなっていく。

なんて情けない声を……。

シュウに聞こえていなければいいのだが、と思いつながら振り返る。

シュウも服の雪を払い終え、また滑る準備を終えていた。そのシュウと視線が合う。

「ん？ どうしたの、シュテル」

「いえ……。何でもありません」

どうやら聞かれてはいなかったらしい。そのことに安堵のため息をつきつつも、二人は再び滑っていく。

「シュテルもあんな声を出すんだなあ……」

そんなシュウの声は、シュテルには届かなかった。

Side: Hero

数日後。学校でなのはから渡されたアルバムを大事に持ち帰り、シュテルたちと一緒に見る。そこには、

「ほう」

「へえ」

「わあ」

ディアーチェ、レヴィ、ユーリの驚きの入り交じった吐息。そして、
「い、いつの間……」

「……………」

シュウが慌て、シュテルの表情が凍り付いている。

ちょうどシュウがシュテルを押し倒す形となった時の写真が収められていた。

「……………夕食の準備をします」

シュテルはそれだけ言って、キッチンへと消える。残されたシュウは捨てられた子犬の心境となりつつも、シュテルの表情に驚いていた。頬に赤みの差した表情に。

少しでも照れてくれていたら……。それはそれで嬉しいかも？

そんなことを思いながら、この写真を撮った誰かに少しでも感謝した。

第五話

ある日の昼休み。昼食を終えてシュウウが自分の机に突っ伏していると、誰かが自分の側に立つ気配がした。顔を上げると、そこにいたのはコウだ。いつもの笑顔ではなく、まじめな表情でシュウウを見つめてくる。

「……「ウ……」

シュテルと一緒にいたのを見かけた日以来、コウと会話はしていない。そのコウが、今自分の目の前に立っている。じっとシュウウを見つめている。

「シュウ。先に一応、言つとこつかなって」

「な、何を……？」

コウの真剣みを帯びた声に思わず身構えてしまう。とても嫌な予感がする。そして、嫌な予感というものは多くの場合、的中してしまうものだ。

「今日の放課後、ちょっと告白してくるな」

「じ、告白？ 誰に？」

「シュテルさんに決まってるやろ。わざわざ言わせんなよ」

シュウの表情が凍り付く。頭が真っ白になってしまう。ただただ無言で、コウと見つめ合っってしまう。

シュテルがコウの告白を受けるはずがない。そう思いはするが、それは自分の願望もいいところだ。本人の口から聞いたわけではないのだから。もしも受けてしまったらと思うと、それだけで胸が締め付けられるように苦しい。

「まあ、そういうことやから。一応シュウには言つとかんとあかんと思つて」

そう言つて、コウが笑う。照れくさそうな、けれど楽しそうな笑顔だ。コウが手を振り、教室の外へと向かう。シュウはその背中を呼び止めることができず、教室から出るまで見送ってしまった。

残されたシュウは、未だに鈍いままの思考を必死になって働かせ

る。どうすれば阻止できるか、どうすればいいのか、と。しかしそんな都合の良い答えがでるはずもなく、シュウは次の授業が始まるまで呆然としたままだった。

Side:Stern

夕方。シュテルは初めて編み物というものに挑戦していた。肌寒くなってきたので、人数分のマフラーを編んでいる最中だ。初めてのはずが、すでに動きが様になっているのはさすがというべきか。ディアーチェは読書をしながらも、シュテルの様子を何度もぞき見ている。そわそわと少し落ち着きがない様子だ。何度も時計を見ていたりもする。予定があるとは聞いていないのだが。

「シュテル。少し聞きたいのだが」

王の声にシュテルは手を止めて顔を上げた。何でしょう、と先を促し、ディアーチェが一つ頷く。

「それはいつ作り終えるのだ？」

シュテルは一瞬考え、すぐに今自分が作っているものことだろうと察しがついた。足下に置いたいくつかの紙袋を見て、中身を確認して、すぐにディアーチェへと向き直る。

「終わっていますよ」

「なに？」

「材料が余ってしまっているので、もう一枚作っています」

言い終えて、シュテルは作業を再開する。ディアーチェは安心したように、そつかと安堵のため息をついた。何をそこまで気にしているのだろうか。

不意に携帯電話が鳴り、シュテルは怪訝そうに眉をひそめた。ちょうど追加の一枚を作り終えたところだ。携帯電話に表示されている名前を見て、眉間のしわを深くした。

コウ。シュウの友人である、自分にとっては顔見知り程度の相手。それでも、以前の遊園地のこととは忘れられないのだが。シュテルは王に頭を下げると、携帯電話の受話ボタンを押した。

「はい、シュテルですが」

『おおー 繋がってよかったわー!』

相変わらずテンションが高いな、と苦笑してしまう。

『この後、ちょっとだけ時間あるかな? 一時間だけでもええから』
シュテルはわずかに目を細めた。先日、この少年の誘いを受けたことを後悔したばかりだ。正直あまり良いイメージがない。故に断ろうとしたところだ、

『大事な話があるから。一時間だけでええから』

その言葉に少し悩んでしまう。どこまで信用できるかが分からないが、ここまで言うならもう一度ぐらいは信用してもいいかもしれない。シュテルは小さくため息をつく、分かりましたと返事をした。

『おおきにー じゃあ、待ち合わせ場所やけど……』

そしてコウが指定してきた場所にシュテルは目を見開いた。

指定された場所は、目と鼻の先にある小さな公園だ。シュウとよく一緒に行く公園。知っていて指定したのか、知らなかったのか。考えても仕方がないので、今から向かいます、と通話を切った。携帯電話をしまい、王へと向き直る。王は興味深そうにシュテルを観察していた。

「出かけるのか?」

シュテルが口を開くよりも先に王が言った。少し驚きつつも答える。

「はい。さほど時間はかからないかと思えます」

「うむ。気をつけて行ってくるといい」

シュテルはその場で一礼すると、玄関へと向かった

Side:Hero

シュウはリビングで頭を抱えていた。思い出すのは学校でのこと。コウの話だ。コウが本気なら、今すでに告白をしているのかもしれない。自分はどうすればいいのだろうかとずっとここで悩み続けている。ただ、純粋にコウがすごいとも思う。自分の想いを告げるなど相当の勇気があることだ。その勇気が自分にはなく、それが原因で今の事態を招いたとも言える。

「お兄ちゃん、何してるの？」

いつの間に来ていたのか、文花がリビングの入り口でシュウを見つめていた。その視線は冷たいわけでもなく、ただ不思議そうにしていた。

「ちょっと聞いたんだけど、お兄ちゃんのお友達、シユテルお姉ちゃんに告白するんだよね」

どこからそれを、と聞くうとして、しかしすぐに首を振った。シュウはともかく、「ウは声を抑えようとはしていなかった。どこからか伝わっていてもおかしくはない。例えば、なのはたちからとか。彼女たちに限ってないと思うが。」

「それで、お兄ちゃんはこんなところで何をしてるの？」

声が冷たくなってきた。シュウの頬が引きつる。文花がゆっくりとシュウのところまで来る。

「ちゃんとお話したの？」

「い、いや……。まだ……」

「じゃあ行かないと。今すぐ。でないと、シユテルお姉ちゃんがいなくなっちゃうよっ」

いなくなる、と聞いてシュウが目を見開いた。顔を伏せ、小さく頷く。分かってはいることだが、改めて言われると辛いものがある。

「でも、場所が……」

「側の公園」

え、とシュウが間の抜けた表情をする。文花は顔を逸らし、視線が合わないようにしている。何故そこまで知っているのかと聞きたくなるが、今はこうしている場合でもない。

「文花……。ありがとう、行ってくる」

立ち上がり、玄関へと向かう。

「がんばってね」

背後から妹の間延びした声を聞き、シュウは思わず頬を緩めた。

Side・Humika

兄を見送り、文花は一息つく。お茶でも飲もうとキッチンへと向か

おつとして、

「シュウは行ったのか？」

その声に動きを止め、入り口に立つ声の主を見る。ディアーチェだ。

「はい。今行きましたよ。多分間に合います」

そう答えている間にディアーチェがキッチンへと入り、文花の分もお茶を入れてくれる。差し出されたコップを礼を言いながら受け取り、ゆっくりと飲んでいく。

「まさか貴様も共犯だとは思わなかったぞ」

「私だってディアーチェさんが共犯だとは思いませんでした」

言葉を交わし、しばらく黙り込む。やがて二人同時に、反論を口にする。

「我が知ったのはつい先日だ。それまでは本当に知らなかった」

「私が知ったのは数日前だから、共犯じゃないです」

二人で顔を見合わせ、同時に嘔き出した。文花が楽しげに笑い、ディアーチェは忍び笑いをする。

「まんまと踊らされた形になったが……。まあ、悪くはない」

「ですね。あとは任せちゃいましょう」

がんばれ、お兄ちゃん。

お茶を飲みながら、文花は心の中で兄へと激励を送った。

Side::Stern

マンションの近くの公園、その池の側にコウはいた。シュテルが近づくと振り返り、嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「シュテルさん！来てくれてありがとっな！」

コウの言葉にシュテルはいえ、と小さく首を振る。コウから少し距離を置いて立ち止まった。相手の表情を観察しながら、次の言葉を待つ。しかし、しばらく待っても何も言わず、笑顔のままこちらを見つめてくるだけだった。

「大事な話があったのでは？」

痺れを切らしたシュテルが問うと、コウは眉尻を下げて、あー、と

も、うー、ともつかない曖昧な声を漏らす。困ったように頭をかいて、もう少し待ってほしいと告げてくる。

「もう少しだけなら構いませんが……」

「ごめんな、多分もうすぐ……」

コウの言葉、そして動きがぴたりと止まる。シュテルが怪訝そうに眉をひそめている前で、コウはポケットから携帯電話を取り出し、操作する。そしてすぐに、意地の悪い笑顔を浮かべた。やっとか、という声も聞こえてくる。

「あの……？」

何があったのかと聞こうとして、しかしコウは手を振った。気にしなくていい、と。

「それじゃあ、大事な話をするので！」

普段よりも大きな声でコウが言う。シュテルは少し驚きながらも、どうぞ、と先を促した。

「俺はシュテルさんのことが……」

半ば叫ぶような声だ。何をしたいのか理解できないが、とりあえず言葉を待つ。

「好きだ！」

「コウがそう言い終わると同時に、

「待って！」

後方からの第三者の声。シュテルがわずかに驚き、コウが笑みを深くする。シュテルが振り向いたそこには、シュウがいた。

Side: Hero

シュテルを探して走り回っていると、突然コウの声が聞こえてきた。慌ててそちらへと全力疾走。聞こえてくる内容は、これから告白するだろう内容そのものだ。必死になって走り、そして、

「好きだ！」

「待って！」

そのコウの声に自分の声をかぶせた。シュテルが驚いて振り返り、コウは自分を見てなぜか不敵に笑っている。

「シユウ。ぶひつてにじじい。」

シュテルが首を傾げながら聞いてくる。シユウは、ちょっと用事があって、と言葉を濁しながらコウを見る。にやにやと意地の悪い笑みだ。

「あかんなあ、シユウ。今は俺が大事な話をしてるんやけど？」

「ちょっと待って……。お願いだから」

コウが笑顔のまま首を振る。そして次の瞬間には、シユウのことを睨み付けてきた。

「シユウにはまだ勇気がないんやろ？　なら俺が先に言ってもいいよな？」

「……言う。ちゃんと、言う。だから待ってほしい」

ほづ、とコウがあからさまな驚きを見せる。少しわざとらしく見えるが、今は気にしてられない。

「じゃあ、俺のは後でええわ」

「え？」

「シユウの後でいいって。さっさとやればいい。当たって砕ける！」

「砕けたくないよ……」

コウの予想外の言葉にシユウが驚き、次には軽口が交わされる。いつものコウだ、と思ってもするが、簡単に身を引いたことに内心で首を傾げる。だが、今はそれよりも、今の決心がついている間に言ってしまうなければならないことがある。

勇気を出せる間に、勇気がなくなってしまう前に。

「シュテル」

シユウが改めてシュテルへと向き直る。二人のやり取りを不思議そうに眺めていたシュテルがシユウへと視線を移し、何でしようか、といったもの調子で訪ねてくる。

「僕も、大事な話があるんだ」

「シユウもですか？　……まあ、聞きますが」

やはりいつもの調子だ。そのことにシユウは少し安堵しつつ、ゆっくりと深呼吸した。そして、

「しゅー。」

勢いよく頭を下げた。

「はっ」

シュテルが呆気にとられ、少し離れたところではコウが間抜けな声を漏らしている。

「変な態度を取ってて、ごめん。いろいろと考えていたら、変な気持ちになっちゃって……。だから、ごめん。許してくれるなら、まだ友達でいてほしい」

シュテルの表情がわずかに和らいだ。どこか苦笑しているようにも見える。そして、言う。

「私の方こそ、すみませんでした。私も自分のことが分からなくなったりと色々あったもので……。こちらこそ、私でよければ友人でいてください」

シュテルと顔を見合わせ、自然と笑みがこぼれる。やっといつもの関係に戻れた気がする。

「コウが、落胆を露わにしたため息をついた。そして、

「なあ、シュウ……」

「コウが呼ぶのと同時に、

「ここからも、大事な話」

シュウが言葉を続ける。そしてすぐにコウに呼ばれたことに気づき、視線をつつした。

「なにっ？」

「あ、いや……。続けて続けて」

危ない危ない、とコウの頬が引きつっている。シュウはどうしたのだろうと思いつつも、シュテルへと視線を戻した。

「シュテル」

「はい」

いつもの無表情で首を傾げるシュテル。そのシュテルへと、シュウは。

なけなしの勇気を振り絞り、言った。

「僕はシュテルのことが好きだ。友達としてもだけど、女の子として。だから……。これから先もずっと、シュテルの側にいさせてほしい」

シュウの言葉に、シュテルは大きく目を見開いた。そのまま言葉を失ってしまう。コウからは、おお、という声が聞こえてきた。

しばらく無言のシュテルを見つめ続ける。やがてシュテルの頬が少し赤くなった。珍しいなと思いながら言葉を待つ。

「……いいのですか？」

それが第一声だった。何が？ とシュウが聞き返す。

「私は人ではありません。私と一緒にいても、貴方はきつと後悔すると思います」

「そんなことないよ。僕はシュテルのことが好きなんだ。それに、それを言ってしまうえば、僕だってかなり怪しいものだし」

シュウも今は人の姿だが、もともとはギフテッドというロストロギアだ。自分ですら、いつこの姿が終わりになるのかも分からない。それを聞いたシュテルは、ため息をついた。だが口角が上がり、少しだけ笑顔をこぼしている。

「物好きな方ですね……」

「そうでもないと思うけど」

物好きですよ、とシュテルが呆れたように言う。そんなことないよと同じ反論を繰り返す。やがて、シュテルがそつと手を前に差し出した。

「私のこの感情がどういったものかは、正直よく分かりません。ですが、私も貴方と一緒にいると、不思議と心が安らぎます」
だから。

「私などでよろしければ……。一緒にしましょう」

シュテルが優しい笑顔を浮かべた。今までも表情の変化は小さいものは見たことがあったが、はっきりとした満面の笑顔だ。それにシュウは驚き、すぐに照れくさそうにシュウも笑った。

「うん。よろしくね、シュテル」

そつとシュテルの手を握る。お互いに見つめ合い、そして、

「あー、はいはい。うちそつとね」

「コウのそんな声。シュウがびくりと体を震わせ、そちらを見る。コウは微笑を浮かべていた。」

「これで万事解決、やな。いまいちよく分からん話もあったけど、まあ俺には関係のない話やな」

その言葉にシュウははっとした。先ほどの会話にはとんでもない内容が含まれていた、と。シュテルもすぐにそれに気づいたのか、難しい表情をしている。シュテルの左手が胸元のルシフェリオンへと……。

「二人とも家庭事情が複雑やからな。そういうことやろ？」

シュウが安堵のため息をつき、頷く。シュテルも左手を静かに下ろした。

「それじゃあ、帰るわ。あとはごゆっくり」

「大事な話はいいのですか？」

「コウがばつの悪そうな表情になる。二人から視線を逸らし、頭をかいた。

「シュテルさんって意外と天然なところがあるんやな……。俺の話はもう解決したから。じゃあ、改めて。ごゆっくり」

手を振ってきびすを返すコウ。その背中へと、シュウが声を放つ。

「コウ。もしかして、今までのことって……」

「ん？ さあ、何の話かな？」

にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる。それが全てを物語っていて、シュウは苦笑してしまった。いい友人に恵まれたと素直に思える。

「でも、シュテルさんに一目惚れしたのは事実やからな？ ケンカな

んかして手放した日には、ねらうんで？」

「あはは……。肝に銘じておくよ」

乾いた笑い声を出すシュウ。コウは満足そうに頷くと、今度こそその場を後にした。

「何だったのしょうか？」

「うん……。僕がコウにお世話になっただけのことだよ」

「そうですか」

よく分かりませぬね、とシュテルが言って、そうだろうとシュウがつぶやいた。

「では、そろそろ帰りましょうか」

シュテルが言って、しかしシュウは首を振る。

「もう少しだけこのままで、いいかな？」

「はい。大丈夫です」

手を握ったまま、シュウがだらしない笑顔を浮かべる。シュテルはその様子を見て呆れたようなため息をつきかけたが、すぐに自分も笑顔になっていることに気づいた。

しばらくそのまま手を握り合い、やがて満足してシュウが一度頷く。

「これからよろしくね、シュテル」

その言葉に、シュテルは、

「はい、「うちら」そよろしくお願いします、シュウ」
優しい笑みでそう返してくれた。

Side: Kouji

手を繋ぎ合っていた二人がマンションへと歩いて行く。コウはそれを静かに見守っていた。

先ほどは帰った振りをして、実は隠れて様子をうかがっていた。親友の一世一代の告白だ。最後まで見届けたいと思ったためだ。明るい道へと帰って行く二人を静かに見送りながら、コウは満足そうに頷いた。

それにしても、と思う。自分の前でもんでもない会話を交わしていたものだ。人でないとか、どういってもりだと思っ。

自分でなければ頭のおかしいやつだと思っところだ。

そのコウの動きが、止まる。視線だけがゆっくりと動き、ポケットから携帯電話を取り出す。画面に表示されている名前を見て、コウの表情が引きつった。

「まさか、もっ、か……？」

嫌な予感を覚えながらもコウは電話に出る。親友たちに気づかないように静かに立ち上がり、きびすを返す。

「はい」

電話に出て、コウはすぐに顔をしかめた。何度か頷きながら、言葉を交わしていく。

「はい。はい。大丈夫です。特に変わりはありません」

普段とは違う言葉遣い。それを指摘する者は、この場にはいない。

「ああ、そうですね。分かりました」

コウの表情が安堵に染まる。どうやらもう少し、今の生活を続けられるらしい。

コウは立ち止まり、振り返る。二人の姿がかすかに見える。光の中へと歩いて行く姿を。対するコウは、その光景を悲しげに見つめ、すぐにきびすを返した。暗い夜闇の中へと歩を進めていく。まっすぐに、しかしおぼつかない足取りで。

そしてコウは、相手に告げた。

「了解しました。西崎秀一の……。ギフトットの監視を続行します」

どこか苦しげにも聞こえるコウの声。しかしコウは、振り返りもしなければ、立ち止まることすらせず、闇の中へと姿を消した。

二 元旦

大晦日。シュウはシュテルたちの部屋で一緒にこたつに入っていた。机の上には天ぷらそばがあり、今は皆でそれを食べている。テレビに流れているのはこの日特有の歌番組。まさに年越しといった様子だ。

「ぷはー。おいしかったー」「ちそうさまー！」

真つ先に食べ終えたのはレヴィだ。しっかりとだし汁まで飲み干し、そしてすぐに机の中央、みかんに手を伸ばす。他の皆も順番に食べ終え、すぐにシュテルが食器を流しへと持って行き、戻ってくる。

「ユーリ。ほれ」

「わー。ありがとうございます、ディアーチェー！」

いつの間にかディアーチェもみかんに手にとっており、むき終えたみかんにユーリに手渡していた。それを見ていたレヴィが少しだけ口を尖らせる。

「王様！ ボクにも！」

「先ほど自分で食べていただろうが。……ええい、そんな顔をするな！ 待っている！」

レヴィが悲しげに眉を下げた瞬間、ディアーチェが次のみかんに手を伸ばす。面倒な、と言いつつも丁寧にむいてやるのはさすがと言える。その様子をシュウが微笑ましく思いながら眺めていると、自分の目の前にも皮のむかれたみかかんが置かれた。

「どうぞ」

「ありがとう、シュテル」

いえ、とシュテルは首を振りながら、またみかんにむき始める。シュウはむいてもらったみかんに頬張りながらテレビを見ていたが、すぐに何かを思いついたような表情をした。みかんの一粒を持って、シュテルへと向く。

「シュテル。はい」

シュテルへとみかんを差し出す。すぐにシュウの意図を察したのだろう、シュテルはわずかに躊躇いを見せたが、すぐに小さく口を開けた。そこへみかんを入れてやる。わずかにシュテルの頬に赤みが差す。

「……………んっ、ディアーチェ、どじしたのっ」

じっと見られていることに気づいてシュウが首を傾げる。ディアーチェは首を振ると、気にするなと苦笑していた。どこか満足そうにも見える笑みだった。

数日前。シュテルに想いを告げた日。その後の二人だが、実は特に変わったことがない。今まで通りの生活で、今まで通りの日常だ。ただもちろん変わったこともある。お互いに対して正直になったことだろう。

例えば、食事の時もテレビを見る時も、二人はいつも並んで座るのだが、以前よりも近くなっている。時折視線を交わし、シュウが照れたような笑みを見せることもある。そんな些細な変化に気づいたのは家族だけだが、しかし三人とも何も言わず、ただ見守ってくれていた。

もともと、二人きりの時はどうかはディアーチェたちには知る由もない。

テレビから鐘の音が流れ始める。除夜の鐘だ。ついに一年が終わろうとしている。

「一年も終わりかあ……………。今年はいろいろあった」

シュウがそんなことをぼつりと漏らし、シュテルたちはどう反応すればいいのか困っていた。いろいろの大部分が魔法に、シュテルたちに関係するものだから困るのも当然だろう。それを知ってか知らずか、シュウはしばらく遠いものを見つめるように目を細めていたが、やがて頬を緩ませた。

「楽しい一年だった」

それを聞いた四人が一齐に安堵のため息をついた。

さらに時間が流れ、時計の針が十二時を指した。

「明けましておめでとごいづいます」

シユウがその場で頭を下げ、それに皆が続く。

「今年も……よろしくね」

そう付け加えると、シユテルたちはしっかりと頷いてくれた。

その後は皆で少し仮眠を取る。シユウとシユテル、ディアーチェは二時間ほどの仮眠で起床した。時計の短針は三を指している。

「レヴィとユーリは……。まだ寝てるね」

数時間程度の仮眠だからとこたつで寝ていたのだが、レヴィとユーリはぐっすりと熟睡しているようだ。気持ちよさそうに眠っているので起こしにくい。どうしようかと考えていると、出かける準備を終えたディアーチェが戻ってきてそのままこたつに入ってしまった。

「まだ急ぐ時間でもあるまい。後ほど追いかける。うぬら二人で行つて」

シユウとシユテルが顔を見合わせ、ディアーチェへと視線を戻す。さっさと行けと手を振るディアーチェにシユウは苦笑して、小さくありがと、と告げる。

「じゃあ、先に行くね。追いついたら連絡して」

「うむ。気をつけて行って」

「はい。では行ってきます」

レヴィとユーリを起こさないように、シユウとシユテルは静かにリビングを後にした。

目的地の神社は少し遠いところにある。最初は最寄りの神社に行こうということになっていたのだが、なのはたちも初詣に行くとき、彼女たちが行く神社に合わせる事になった。後ほど高町家でおせちとお雑煮をご馳走してもらつて予定になっている。

目的の神社にたどり着く。すでに初詣に来た人々が大勢いた。まだ朝日も昇っていないのに、と思ったが、自分たちにも同じことが言えることにすぐに気づいた。

「シュテル。行くつか」

シュウがはぐれないようにと手を差し出す。シュテルは今度は躊躇いもせずとその手をしっかりと握った。

「はい。行きましょっ」

この神社の土地は他よりも少しだけ高いこともあり、初日の出を見る場所として有名だそうだ。シュウとシュテルは夜食代わりに屋台で買い食いをして、敷地の奥へと進んでいく。人混みにもまれながらも歩き続け、やがて拝殿へとたどり着いた。大勢の人が賽銭箱にお金を入れ、手を合わせている。

シュウとシュテルも賽銭箱へとお金を入れる。二人並んで手を合わせ、願い事をする。

この生活が続きますように。シュテルと一緒にいられますように。

願い事を終えた二人は、次の人の邪魔にならないように素早くその場を後にした。

拝殿を後にした後。日の出まではまだ時間がある。それまではすることもなく、はつきり言ってしまえば暇だ。何かを買うわけでもなく屋台を見て回っていたが、やがてシュテルが足を止めた。それに気づいたシュウもすぐに立ち止まり、シュテルが見ているものへと視線を移す。

そこにあつたのは、ちょっとした広場だ。そこに多くの鍋が並べられ、鍋の側にいる人が中のものをお椀に入れ、並んでいる人に配っている。お椀をもらった人は多量に並べられたいすに座り、食べているようだった。

「シュウ。あれを」

シュテルに促され見ると、その広場の入り口に看板があった。豚汁無料サービス、と。

「せっかくだし、行くつか」

「そうですね」

二人そろって広場に入り、近くの列に並ぶ。すると、

「おお、まだ子供なのに偉いねえ。寒かったらささ、前にお行き」
目の前の人が順番を譲ってくれ、さらにその次の人も譲ってくれ
る。もちろん一度は断ろうとしたが、遠慮しなくていいんだよ、と言
われて大人しく引き下がった。そのまま流されること数十秒、いつの
間にか最前列にまでやってきていた。

「どうぞ」

若い女性が豚汁で満たされたお椀を差し出してくれる。シユウは
それを礼を言いながら受け取り、その女性の顔を見る。笑いを堪えて
いるような表情だった。

シユテルと一緒に今度は空いている席を探す。なかなかの盛況ぶ
りで混雑しているので見つからないだろうとも思っていたが、

「あー、シユテルー」

知り合いの声。そちらを見ると、なのはとフェイトが手を振ってい
た。

「ナノハ。明けましておめでとございます」

シユテルが丁寧に頭を下げる。それを見たなのはとフェイトも慌
てて同じように頭を下げた。

「今年もよろしくね、シユテル」

「はい、「こちらこそ。……今年も勝ち越しますよ」

「じゃあは。負けないよっ」

楽しげになのはが笑い、シユテルもわずかに笑みを漏らしていた。
この二人はよく模擬戦をしていると聞いているので、おそらくはその関
連の話だろう。シユウが黙って二人の会話を聞いていると、

「じめん、シユウ。邪魔したかな」

隣からの声。フェイトが自分を申し訳なさそうに見ていた。シユ
ウは苦笑して首を振る。

「日の出までどうしようかって言ってたぐらいだし、気にしなくてい
いよ。僕としてはシユテルが楽しそうならそれで十分だし」

「あ、うん……。そっか」

フェイトが少し顔を赤くして戸惑いを見せる。どうかしたのかと
シユウが首を傾げるが、フェイトは何でも無いよと手を振った。

なのはたちと一緒に話をしながら日の出の時間を待つ。はやてたちはどうしたのかと聞くと、「こちらはヴォルケンリッターたちと屋台を巡っているとのことだった。そんな会話を交わしているうちに、やがてシュテルが入り口へと振り返る。見ると、ディアーチェたちが豚汁を持ってやってくる場所だった。

「……なぜ貴様らまでいる」

ディアーチェが不機嫌を隠さずに、なのはとフェイトを睨み付ける。すぐにシュウがその間へと割って入った。

「たまたま会っただけだよ。暇になったからちよつと話をね」

「そうか。……うぬが良いなら、いいが」

ため息をつきながら、ディアーチェが空いている席に座る。一緒に来ていたレヴィとユーリもディアーチェの隣に座った。

「ディアーチェたちも何か願い事したの？」

「一応な。内容を言っつもりはないが」

「シュウは何か願い事したの？」

そう聞いてきたのはレヴィだ。シュウが頷いて答える。

「欲張って二つほど。この生活が続きますように」

ディアーチェが一瞬だけ目を見開き、表情を少し和らげた。レヴィとユーリは嬉しそうに、どこかくすぐったそうな笑顔になる。

「ちなみにもう一つは？」

そう聞いてきたのはなのはだ。シュウは少しだけ困ったような表情になり、言おうかどうか少し迷う。そのわずかな沈黙を拒否と取ったのだろう、なのはがすぐに手を振った。

「別に無理して言わなくて大丈夫だから！」

「別にそういうわけでもないけど……。まあ、言わなくていいなら、そっちの方がいいかな」

言うてもいいのだが、内容が内容だけに人前で言うのは恥ずかしいものがある。この流れに便乗して黙秘を通すことにした。

「じゃあシュテルんの願い事は？」

豚汁をすすりながらのレヴィの言葉。シュテルはレヴィを一瞥するよ、すぐに答える。

「私も二つほど。王を始め、私たちの安寧が続きますように」
「む……。そ、そうか……」

ディアーチェの頬が引きつっている。悪い意味ではなく、笑顔になりそうになるのを堪えているものだ。

「もう二つも聞いていいですか？」

ユーリが聞いて、シュテルが、構いませんとうなずく。先ほどのシュウの時と同じような流れというのが少々気にかかる。シュウはシュテルの表情をつかがい見ながら、言葉を待った。

「シュウと一緒にいられますように」と

その言葉を聞いた瞬間、それを聞いた全員が顔を赤くした。特にシュウは完全に絶句して、固まってしまっている。ディアーチェが、平然と言いおって、と呆れたように微苦笑している。言った本人はそれらの反応に首を傾げていた。

「何か？」

「う、ううん。何でもないよ」

なのはが照れ笑いを浮かべ、目を逸らした。

「……先に言われた」

ぼつりとシュウが漏らす。ディアーチェがそれをしっかりと聞き取り、シュウへと視線を向けた。

「まさか貴様の二つ目の願い事は……」

「シュテルと一緒にいられますように」

「貴様もか……」

天を仰ぎ、手で目を覆つディアーチェ。シュウも自分のことではなければ同じ反応をしたかもしれないが、当事者となっては何も言えない。

「えっと……。あ、ほら！ 初日の出だよ！」

何とも言えない妙な空気の中、いつの間にかゆっくりと日が昇ってきていた。

Side: Stern

この場で話をしすぎていたために、場所を移動するタイミングを逸

してしまっていた。シュテルは日の出に気がつくとすぐに行動を開始する。

「シュウ。行きましょう」

「ん？ え、どこに？」

戸惑うシュウの腕を取って歩き始める。王やなのはに、少し出てきます、と頭を下げてその場を後にする。

「気をつけてな」

「また後でね」

王となのはの言葉に見送られながら、シュテルはシュウを伴って少し移動、すぐに横道に逸れた。そのまま人の視線がなくなる場所へと向かう。

「シュテル？」

シュウの戸惑いの声。人の視線を感じなくなったところで立ち止まり、シュテルは簡易的な結界を展開した。驚くシュウの両手を取って、空へと飛ぶ。

「うわわー」

驚き慌てるシュウ。暴れないでください、と告げるとすぐに大人しくなった。そのままゆっくりと上昇し、空高く昇る。しばらくして、

「わあ……」

シュウのそんな声。目の前には昇りつつある太陽と朝日に照らし出された街並みが広がる。幻想的な光景だ。

「きれいだね」

「そうですね」

二人きりで日の出を見つめる。とても静かな時間の中、シュウの声が届く。重くないかな、と。シュテルは苦笑を漏らし、全く、と答えた。

「ねえ、シュテル」

シュウの声。シュテルが視線をシュウへと向ける。

「何でしょっ？」

「何でもない。呼んでみただけ」

「……おかしな人ですね」

言いながら、薄く笑う。シュウも楽しげに笑っている。

「じゃあ、これだけ。ありがと。いいものが見れたよ」

「これぐらいでよければ、いつでも」

静かな会話を交わしていく。少しずつ日の光が強くなっていき、二人を優しく包み込んでいく。しばらくの間二人はそのまま日の出を見守っていたが、やがて太陽の光を受けながら、大地へと帰って行った。

Side: Nannoha

なのははフェイトと一緒に日の出を見守りながら、何度か視線を上空へと投げていた。そこから簡易結界の魔力が感じられている。きつと今頃、二人はそこにいるのだろう。自分たちも空で見たいと思うが、今は二人に譲ろうと思う。

今頃どんな話をしているのだろうか。そんなことに思いをはせながら、なのはは優しげに目を細めていた。

節分

「こんなところ、かな？」

マンシヨンの最寄りのスーパーで、シュウは買い物をしていて。左手に買い物かごを持ち、右手には買う物のリストが書かれたメモ用紙。すでにかごには、あるものの材料が収まっている。卵やいくら、大きめの海苔などだ。

今日は節分。豆まきの準備は終わっているのだが、一つ準備を忘れていた。恵方巻きだ。かごに入っている材料は恵方巻きのもので、帰宅した後はシュテルと作るようになっていて。ただ、詳しい具材は分かっていなかったためその辺りは適当に選んでいたりもするが。

そろそろレジに行こうかな、と足の向きを変えたところで、

「あー シュウ見つけたー！」

後ろからの元気な声。どうしてここに、と思いながらも振り返る。

「レヴィ。どうしたの？」

レヴィがいつもの笑顔で立っていた。その表情のまま、言う。

「王様が、荷物が多くなってるだろうから手伝ってこいって」

「そうなんだ。気にしなくても良かったけどね」

確かに量が量なのでかなり重たく感じてはいるが、持てないことはない。むしろ女の子に荷物を持たせるといっ方が申し訳ない気持ちになる。それでも男としてのプライドがあるのだ。すでにほとんど打ち砕かれているものだが。

「とりあえず持つね」

言うが早いのか、レヴィはシュウから買い物かごを奪い取ってしまった。それを見て、シュウは頬を引きつらせた。かごを持ったレヴィの反応は、いつもと大差ない。つまりはシュウが重いと感じていたかごに対して何とも思っていない。自分の中で何かがまた砕けた気もするが、今更気にしても仕方ないことでもある。

シュウは少し肩を落としながらも、レジへと向かう。レヴィがそれ

に着いてくる。やがてレジの列へとたどり着いたところで、シュウは気づいた。いつの間にかレヴィがいないことに。思わず苦笑して、シュウは来た道を戻る。レヴィはすぐに見つかった。

「何を見てるの？」

「あ、シュウ。な、なんでもないよ？」

レヴィが素早く棚へと商品を戻す。シュウはその商品を見て、薄く微笑んだ。ファミリーパックのチョコレートだ。有名なメーカーのもので、小袋に入ったチョコレートが二十個ほど入っている商品。シュウはそれを手に取ると、黙ってかごに入れた。

「え？ いろいろ？」

不安そうな表情をしながら聞いてくるレヴィに、シュウは頷いて言う。

「うん。小さいやつならともかく、これなら皆で食べられるしね。じゃあ、今度こそ行こう」

再びシュウがレジへと向かう。レヴィはそんなシュウの後ろ姿をしばらく見つめ、花が咲いたような笑顔を浮かべた。

Side: Levi

買い物袋を持ってレヴィはシュウの後を歩く。シュウの手にも買い物袋がある。自分が両方とも持つと言ったのだが、シュウはそれを断固として聞き入れなかった。せめて半分は持つ、と。

変なところで頑固だよな。

シュウなりに気を遣ってくれているのだろうことは分かる。でなければお駄賃代わりのチョコレートなど買わないだろう。レジの時、シュウは他の商品とチョコレートの会計を分けていた。チョコレートのシュウの財布からだ。それを見ていたのがレジの奥だったこともあり、レヴィには止めることができなかった。

家族なんだから気を遣わなくてもいいのに、と思う一方で、それがシュウのいいところかな、とも思う。レヴィは買い物袋からチョコレートを一つ取り出す。実はこっそりと小さな板チョコもかごに入っていた。それを見たシュウは苦笑していたが、シュウが買うなら入

れなかったのに、とは思っ。

レヴィは板チョコの包装紙をはがすと、それを適当なサイズに割る。

「はい、シュウ」

「ん？ ああ、ありがとう」

差し出されたチョコの欠片を受け取って、シュウが口に放り込む。ゆっくりと食べるシュウの横顔を見つめながら、レヴィも板チョコを口に入れる。ほどよい甘さが口に広がる。その甘さに頬を緩めながら、レヴィは目の前を歩く背中を見つめた。

シュウの背中では決して大きなものではない。シュウと喧嘩などしたことはないが、したとしても間違いない自分が勝ってしまうだろう。ただ、それでもいいとは思っている。レヴィはシュウのことが好きだし、他の家族も同様に思っているはずだ。いつの間にかシュウがいて当たり前前の生活になっているのだから。仕事以外で暴れられる機会は少ないが、それでもレヴィは今の生活が気に入っていた。

不意にシュウが振り返る。レヴィを見て、笑顔を向けてくれる。レヴィに元気を与えてくれる笑顔だ。

「レヴィ、どうしたの？」

笑顔に笑顔を返すレヴィ。何でもない、と前置きして、

「ご飯が楽しみだなんて思ってただけだよ。さ、早く帰ろう！」

レヴィが走り出す。すぐにシュウを追い抜く。背後からシュウの慌てたような声。

うん。これでいい。これがいい。

レヴィは心の底から楽しげな笑い声を上げながら、シュウと走って行った。

Side: Hero

「っ、疲れた……」

何故か途中から走り始めたレヴィを追って、シュウも全力で走った。マンションにたどり着いた頃にはシュウは荒い息をしていたのだが、レヴィは平然としていたものだ。もっと体力つけた方がいい

よ、と悪戯っぽく言われ、まじめに取り組むべきか、とも思っている。「お帰りなさい。……何かあったのですか？」

疲れ果てた様子で玄関にたどり着いたシュウを見たシュテルが怪訝そうに眉をひそめる。そしてリビングへと視線を移す。先にかがったレヴィへと何かしらの疑惑を向けているのかもしれない。シュウは何でもないと手を振った。

「ちよつと体力不足を痛感しただけ。それだけだよ」

「ならばいいのですが……」

シュテルは未だ納得のいつていない表情だったが、これ以上詮索するつもりもないのだろう。シュウとレヴィが持ち帰った買い物袋を両手に持つと、運んでおきますと告げてキッチンへと向かってしまった。平然とした足取りで、だ。

「……体力と、力もか。先は長いなあ……」

シュウは小さくため息をつくくと、シュテルを追ってキッチンへと向かった。

キッチンではすでに酢飯の準備が終えられていた。大きなボウル二つに良い匂いのするご飯がたっぷり入っている。シュテルへと視線を移すと、具材の準備を始めていた。手際よく魚をさばっている。器用なものだ。

「シュウ。具材を巻くのは任せる。今は少し休んでいる」

キッチンの奥で卵焼きを焼いているディアアーチェが言ってくる。シュウは少し考えた後、そうするよ、とリビングへと向かった。

リビングのテーブルにはすでに先ほど購入したチョコレートが広げられていた。レヴィとユーリがそれに手を伸ばしている。

「シュウ。お帰りなさい」

ユーリにたたいま、と返事をしてシュウは自分の席へ。こたつに入って一息つく。

「二人とも。ちゃんとシュテルとディアアーチェの分をおいておきなよ」

「一応そう言っておくと、すぐに二人が頷いた。

「もちろんだよ」

「大丈夫です。ちゃんと先に分けています」

よく見れば、チョコレートの小袋は五等分されていた。ならいいかと、シューもチョコレートに手を伸ばした。

しばらくして、ディアーチェがリビングに入ってくる。その手にはカップが三つあり、そのうち二つをユーリとレヴィに配る。シューへはカップの代わりに視線が送られてきた。

「具材の準備は終わったぞ。巻きは任せた」

そう言って、ディアーチェはカップを傾けながらチョコレートに手を伸ばす。シューは小さく頷くと、キッチンへと向かった。

キッチンではシュテルが具材を並べているところだった。テーブルに酢飯のボウルがあり、その側に大きな海苔と七種類の具材が用意されている。シュテルはシューを見ると、「こちらへ」と隣を示す。

「では始めましょうか」

シュテルの隣に立ったシューは、シュテルと一緒に巻き寿司を巻き始めた。

作る数は五つだ。さほど難しいわけでもないので時間もかからない。数分ほどでその作業も終わった。シュテルが最初に一つだけ一緒に作り、残り四つは全てシューが巻いた。

「大丈夫かな？ 変じゃないかな？」

巻き終わったものを何度も見直し、見比べながらシューが不安そうに聞く。シュテルはシューの横から同じように見比べ、やがてすぐに頷いた。大丈夫です、と。

「それにしても、巻くのはやりたいとのことでしたが、何かあったのですか？」

実は今回の恵方巻きは、手作りなら自分が巻きたいとシュテルとディアーチェに頼んでいた。だが特に理由があったわけではない。ただ、少しでも関わっておきたかった、それだけの理由だ。さすがにそんな説明はできないので、シューは笑って誤魔化した。

「鬼は外！」

「福は内！」

レヴィとユーリの元気な声が響く。シュウたち三人はその姿を見守りながら、二人の後をついて行く。恵方巻きを作り終えた後は、この豆まきとなっていた。レヴィとユーリはすぐに豆を準備し、リビングからまき始めている。二人の声が大きいため近所迷惑にならないかと不安に思ったが、ディアーチェ曰く念のため簡易的な結界を展開しているとのことだった。

全ての部屋へと豆をまき終わり、次にシュウの部屋へと向かう。シュウは別にいいよと断ったが、レヴィとユーリが残念そうな表情をしたのでお願いすることにした。

今度はシュウの部屋で元気な声が響く。だがそれもすぐに終わる。リビングとキッチンで豆まきが終わってしまったためだ。他にもいくつか部屋はあるのだが、使わないし掃除が面倒だからと物置としてすら使っておらず、扉は常に閉ざされている。

豆まきを終えた後は年の数だけ豆を食べる。豆まきで余った豆をテーブルの中央に置き、それぞれの目の前に小皿を並べる。すぐにレヴィが手を伸ばし、しかし一粒も取らずに手を止めた。

「ボクたちって何粒食べればいいの？」

レヴィの当然の疑問。無論シュウに答えられるはずもなく、隣のシュテルへと視線をやると、シュテルは黙って首を振っただけだった。シュテルもやはり分からないらしい。

「気にする必要はないだろう。シュウと同じ数でいい」

そう言ったのはディアーチェだ。そのディアーチェの意見に従い、シュテルたちはシュウの年の数だけ豆を食べた。

豆の後は恵方巻きだ。シュウたちは恵方巻きを、今年の恵方へと体を向けて黙って食べていく。ゆったりと流れる静かな時間。それぞれが食べる音しか聞こえない。

うん。おいしい。

シュウは一人、満足していた。さすがはシュテルとディアーチェだ、と。シュウたちの恵方巻きに使われた具材は七種類。卵焼きにい

くら、サーモン、穴子、かんぴょう、きゅつり、桜でんぶだ。

ゆつくりと味わい、食べ終わる。ふと周囲を見ると、どうやらシュウが一番最後のようだった。他の四人は食べ終わった後もシュウのために静かに待っていてくれたらしい。シュウが申し訳なさそうに頬をかく。

「おいしかった！ これなら毎日でも食べたいかも！」

レヴィが幸せそうな笑顔で言っ、そうだなとディアーチエが頷く。

「だがな、レヴィ。毎日となると、カレーを食べられなくなるがそれでも良いか？」

「ごめん今のはなしたまにだから美味しいよね！」

「撤回が早いです」

三人のやり取りを聞きながら、シュウも自然と笑みをこぼした。

「シュウ。どうでしたか？」

シュテルの声。隣を見ると、シュテルがお茶を飲みながらシュウを横目で見ている。シュウはしっかりと頷いて答える。

「うん。美味しかったよ、本当に」

「そうですか。ならば良いのです。……私が巻いたものをお渡ししたので、少し気になっただけです」

「……………」

それは初耳だった。シュテルと一緒に巻いたのだが、巻いた後はシュテルに任せていたのでそこまでは知らなかったのだ。五つとも混ぜて適当に配ったと思っていたので、シュテルの言葉にシュウは目を丸くした。

「そっか、シュテルが巻いてくれたやつだったんだ……………」

ちょっと嬉しい。シュウが照れくさそうに笑いながら小声でつぶやく。シュテルはそれをしっかりと聞き取ったのか、ほのかに頬を赤くしてそっばを向いていた。

Side: Levi

デザート代わりに残りの豆をつまみながら、レヴィはシュテルと

シュウの様子を見ていた。今までも二人は仲が良かったが、最近はその仲が良くなったと感じている。レヴィにとっては大好きなシュテルを取られたと思う部分もあるが、シュウも大切な家族だ。この二人が仲良く幸せそうにしているなら文句などない。

レヴィが締まりの無い笑顔を浮かべると、ユーリが怪訝そうに眉をひそめていた。首を傾げて聞いてくる。

「レヴィ。どうかしました？」

「え？ えへへ、何でもないよ？」

シュテルとシュウの様子を眺めながら、レヴィはさらにもう一粒、豆を口に入れてしっかりと噛みしめた。

バレンタイン

「シュウ！　お願いがあります！」

ある日の休日。朝食を終えて自分の部屋に戻っていたシュウを、ユーリが訪ねてきた。そして発された言葉がこれである。シュウはしばらくユーリを見つめ、やがて言った。

「ひん。いいよ」

「私と一緒に……。って、え？　内容聞かないんですか？」

まさか内容を言う前に頷かれるとは思っていなかったのだろう、訪ねてきたユーリが困惑していた。シュウはそんなユーリへと笑顔を向ける。

「ユーリなら無理難題は言ってこないだろうから。それで、何を？」

「えっとですね……」

恥ずかしそうにしながらも説明を始めるユーリ。シュウはそれを聞きながら手早くお茶の用意をしてユーリに出してやる。それに気づいたユーリが、礼を言いながらお茶を受け取った。そしてまた話の再開。

ユーリ曰く、チョコレートを使ったお菓子を作りたいとのことだった。理由は家族皆に配るためだそうだ。シュテルかディーアーチェの方が適任じゃないかな、と言うと、ユーリは二人には頼めません、と首を振った。

「どうして？」

「二人もお菓子を作る準備があるでしょうから……」

はて、とシュウは首を傾げる。どうして三人は突然お菓子を作ろうとしているのかと。そう言えばレヴィも今日は大人しく大きめの本を読んでいた。思い出してみれば、お菓子が何かの本だった気がする。ということとは四人全員、ということか。

なんだか自分だけ仲間はずれみたいだな、と寂しげに眉尻を下げると、ユーリが慌てて手を振った。

「ち、違いますよー！ シュウに隠れて、とかそんなんじゃないですから！」

「そっ？… ならいいけど、でもどうして……」

問いかけて、ユーリが頬を染めてそっぽを向いた。シュウがさらに首を傾げ、何か行事でもあったかなとカレンダーを見る。今は二月。そう言えばクラスの皆は十四日のことで色々と話をしていた。

二月十四日。さすがのシュウもすぐに思い当たる。バレンタインだ。シュウは大きく目を見開き、顔を背けた。道理で四人とも突然お菓子作りなどするわけだ。

「ま、まあ事情は大体分かったよ。……ところでユーリの贈る相手は？」

バレンタインにお菓子を作るのだ。当然上げたい相手がいるのだろう。どこかで仲良くなった男の子でもいるのかと思ったが、ユーリはきょとんとしていた。何を聞いているのかと言いたげに。

「家族皆にですよ？ もちろんシュウの分もですー！」

「あ、うん。ありがと。……そっちか」

好きな人上げる、ではなく親しい人やお世話になった人上げるためのものらしい。シュウは納得したように頷いて、それと同時に何故か安堵した。

「僕はシュテルやディアーチェほど料理が上手なわけじゃないんだけど……。それでもよければ、手伝うよ」

「はいー… お願いしますー！」

ユーリが真剣な表情で、しっかりと頭を下げた。

Side: Yuri

まずは二人で簡単な話し合いを行い、作るお菓子の方向性を決める。料理が得意でないユーリのために、簡単に作れて見栄えのいいもの、ということになった。そこからさらに具体的な案をシュウが出してくれる。

「これなら簡単でかわいいと思っけぞ」

シュウが菓子作りの本からあるページを指し示す。そこに映って

いる写真には、小さなカップにコーンフレークが少量盛られ、それをチョココレートで固めたものが映っている。

「これをお願いします」

「うん。じゃあ買い出しに行こう」

シュウと共にマンションを出て最寄りのスーパーへと向かう。シュウがかごを持って、ユーリは必要な材料を選んでいく。シュウは最低限必要なもの以外は口出しせず、自分に任せてくれていた。それが少しだけ嬉しい。

かごに入れたものはコーンフレークと溶かすための大きなチョココレート、それにお弁当によく使う小さな銀カップだ。シュウから指定されていないが、チューブ入りの練乳とカラー砂糖というのも入れておいた。

「あ、忘れるところでした。三人とも今日は用事があるらしく家を空けるそうです。お昼ご飯はどうしましょう?」

「急だね……。ここでお弁当でも買っていいかな」

総菜コーナーへと向かい、二人で弁当を選ぶ。ユーリがハンバーグの入った弁当を選ぶと、シュウも同じもので、とのことだったので二つ入れた。三人がいつ帰ってくるかは分からないので、おやつ用にお菓子もいくつか入れていく。

レジで会計を済ませ、二人はまっすぐにマンションへと戻った。すぐにお菓子作りを始める。といっても作業は単純で、小さな鍋でチョココレートを溶かすだけだ。シュウが見守る中、ユーリはチョココレートを溶かしながら銀カップにコーンフレークを少量入れていく。一先ずは六個ほど。チョココレートがしっかり溶けたところでその銀カップにチョココレートを流し入れる。

「終わりました!」

「うん。大丈夫そうだね」

「じゃあ残りも作っちゃいますね」

「え? あ、うん。もう作るの? まだ先だよ?」

「十四日までの日曜日は今日で終わりですから……。日曜日でないとしゅーと一緒に作れませんか」

これぐらいなら一人で作れると思うけど、とシュウは苦笑したが、分かったと頷いてくれた。再びシュウに見守ってもらいながら作業を再開する。そして出来上がった数は三十個だ。思った以上に量が多くなってしまったことに二人で苦笑いしつつ、チョコレートを冷ましている間に昼食を済ませてしまっことにした。

昼食後に冷えたチョコレートをさらに冷蔵庫に入れ、固まるまで待つ。あとはトッピングをするだけだ。

「ありがとうございます、シュウ」

「いや、まあ本当に簡単なものになっちゃったけどね……」

シュウが申し訳なさそうに苦笑する。十分です、とユーリは笑った。

夕方になっても三人はまだ帰ってこなかった。シュウと一緒にリビングでクッキーを食べる。テレビをつけてはいるが、それ以外はとも静かな時間だ。

ユーリはぼんやりとテレビを見ているシュウを見る。時折欠伸をしながら眠たそうにしている。

最近シュテルと親密になっていることを考え、ユーリは微笑んだ。シュテルに笑顔が増えてきたことは一緒に暮らしていればよく分かる。基本的には無表情なのは変わらないが、表情の変化が少し分かりやすくなったと思う。きっとシュウの影響だろう。

今となつてはシュウは家族であり、シュウのいない生活は考えられない。シュウは自分が戦えないことを気にしている節があるが、それでいいと思う。自分たちの帰る場所でいてほしいと。もっとも、そんなことを言っても本人は納得しないだろうが。

視線を感じたのか、シュウがユーリを見る。いつもの優しい笑顔でユーリへとほほえみかけてくれる。それに安心感を覚え、思わずユーリも笑みをこぼした。

「ユーリ。全部食べちゃっつよ？」

「え？ あ、待ってください！ ひびくひぶー」

シュウとお菓子の取り合いを始めながら、ユーリはこんな生活がい

つまでも続けばいいのに、と願っていた。

Side: Stern

少し時を遡り。朝食を済ませたシュテルは家族に帰りが遅くなることを告げた後、高町家を訪ねていた。今はキッチンの前に、なのはと並んで立っている。二人ともエプロン姿だ。

「ではよろしく願います、なのは

「うん。私の方こそよろしくね」

バレンタインのためのお菓子作り。なのはにキッチンを借りたいと相談したところ、桃子にも伝えてくれたようで二人そろって快諾してくれた。ついでということもあり、お互いにお菓子作りを手伝おう、という事になっている。

「シュテルは誰に上げるの？ やっぱり……シュウ君？」

チョコレートを溶かしながらなのはが聞いてくる。シュテルはなのはを一瞥して頷く。

「もちろん全員分作りますが。ナノハもやはり家族や友人に、ですか？」

「うん。そんなところ」

そうですか、とシュテルが頷いて会話が終わってしまふ。ただお互いに目の前の菓자에集中しているため自然と終わったただけでもある。しばらくの間は、協力しながらのお菓子作りが続いた。

夕方。シュテルは冷蔵庫から銀色のトレイを取り出す。それをテーブルに置くと、なのはが歓声を上げた。

「シュテル、すごいー」

トレイの中にあるのはチョコレート。ただししっかりと成形されて、二匹の子猫がじゃれついたものになっている。シュテルは一つを手にとってしばらく眺め、出来映えを確認してまた頷く。悪くない仕上がりだ。

隣を見ると、なのはも自分のものを作り終えたようだ。小さなチョコレートケーキが一つだけ。今回はお試しということらしく、本番は前日に桃子と作るらしい。

「美味しそうにできていますね」

「そう？　ありがとうございます」

なのはが嬉しそうに嗤いながら、丁寧に箱に入れてさらにラッピングまでしていく。そのことを不思議に思いながらも、シュテルも自分のチョココレートを丁寧に箱に詰め、綺麗な紙で包んだ。

「ナノハ。今日はありがとうございます」

なのはに向き直り、頭を下げる。なのはは慌てたように手を振った。

「気にしないでいいよ！　私もいろいろ手伝ってもらえたし」

あとこれ、となのはがラッピングした箱を手渡してきた。シュテルが首を傾げると、なのはが少し恥ずかしそうにしつつ言う。

「バレンタインまではもう学校だから、会えるか分からないと思って……。ちょっと早いけど」

今のうちに、ということらしい。シュテルは少し驚きつつも、箱をしっかりと受け取り、本当にいいのですか、と念のため聞いておく。なのはは苦笑しつつ頷いてくれた。

「うん。もちろんだよ！　ただできれば……。あとで感想を教えてくださいかな？」

「ええ、もちろんです。お約束します。……では私からも」

先ほど包んだばかりのチョココレートの箱をなのはに差し出す。なのは少し驚いたようだった。

「い、いいの……？　みんなに渡す分だよね？」

「大丈夫です。もともと貴方にも渡すつもりだったので」

シュテルがそう言うと、なのはが少し頬を赤くした。戸惑いながらもシュテルから箱を受け取り、照れくさそうに笑う。

「ありがとうございます。大事に食べるね」

「はい。お口に合えばいいのですが」

ではこれで、とシュテルが頭を下げてキッチンを出て行く。もちろんケーキの箱も忘れない。家から出る前に玄関まで来てくれたなのはにもう一度頭を下げ、シュテルは帰路についた。

もう一個、こつそりと作っていたチョコレートに気づかれていたようでもあるが、それを見たのはが楽しげに笑っていたようだが、きつと気にする必要はないのだろう。

Side: Hero

十四日。シュウは自分の目の前の光景を他人事のように眺めていた。テーブルには様々な種類のチョコレートが並べられ、なかなかの量になっている。ユーリがシュウと共に作ったコーンフレークのチョコ、ディアーチェははやての案を取り入れたチョコレートケーキ、レヴィはフェイトと一緒に作ったというチョコクッキー、そしてシュテルの猫の形のチョコレート。

「……晩ご飯だね……」

思わずシュウが苦笑を漏らすと、他の四人も苦笑いしていた。予想しておくべきだったと。

たまにはいいだろう、というディアーチェの許可が下りてその日の晩ご飯代わりに皆でチョコレートを食べる。このチョコは、あのチョコはと皆がとても楽しそうだ。シュウは皆の笑顔を見ながら、猫のチョコレートを口に入れた。

夕食を終え、自室に戻る。普段はこの後は一人で読書でもしてあとは寝るだけなのだが、今日はシュテルも一緒に来ていた。どうかしたのと聞いても曖昧な返事が返ってくるだけだ。不思議に思いながらもリビングにたどり着いたところで、

「シュウ。最後にこれを」

手渡されたのは小さな赤い箱。開けていいのかと視線で問いかけ、シュテルが頷くのを確認してから箱を開ける。中に入っていたのは、先ほどとは違う形の猫のチョコレートだ。じゃれ合っている姿ではなく、二匹が寄り添って眠っているチョコレート。

「……」

思わずそんなことを聞いてしまう。シュテルはもちろんですと頷いた。シュウのために用意しましたから、と。

「それでは、私はこれで」

「これを渡すためにここまで来たのだろう。シュテルはそう言って頭を下げると、部屋を出て行くこととする。思わず、シュウはその手を取っていた。

「シュウ？」

「あ、えっと……。せつかくだし、ゆっくりしていいよ」

「この誘い方はないな、と自分でも思う。ただ混乱している頭ではこれが精一杯だ。頭の中では、シュテルからのチョコ、僕のために、その言葉がずっと渦巻いている。思考が働かない。シュテルはそんなシュウを少し訝しげに見つめていたが、やがて薄く微笑んだ。

「分かりました。一緒にしましょう」

それを聞いたシュウは、安堵のため息をつき、次いで顔を赤くしながらも笑顔になった。

Side: Yurri

ユーリはディアーチェと共に片付けをしながら玄関の方へと何度か振り返っていた。先ほど、シュウとシュテルが一緒に出て行ったところだ。ディアーチェはそんなユーリを見て、困ったように苦笑する。

「気になるか？」

「少しだけ……」

正直にそう答えると、我もだ、とディアーチェが頷いた。

「まあ今の二人なら心配あるまい。うまくやっているだろう」

ディアーチェの言葉にユーリは同意して頷いた。その点はもちろん心配していない。ただ、今頃何をしているのかと少し気になっているだけだ。

あの二人が仲良くしている間は、シュウは自分たちの家族でいてくれるだろう。ユーリは二人のことを気に掛けながら、これからも続くであろう平穏な日々を思いを馳せていた。

雛祭り

「大きな荷物だな」

三月のある日。シュウの部屋を訪れていたディアーチェの言葉だ。ディアーチェが見ているものは、リビングに置かれている大きな段ボール箱。先日、両親から送られてきたものだ。必要なければ着払いで送り返しなさい、という手紙もあった。

「何が入っているのだ？」

「雛人形。分かる？」

「うむ。しかし、なぜだ？ シュウは男であるが」

女の子が暮らす家ならまだ分かるが、シュウは男だ。なぜシュウの家へと送ってきたのか分からない。ディアーチェが眉をひそめると、シュウは苦笑して言う。

「それはまあ……。多分、みんなと一緒にいることが多いからじゃないかな」

「む……」

シュウが多くの時間をディアーチェたちと過ごしていることは両親も知っている。だからこそ、両親は使わなくなった雛人形を送ってきたのかもしれない。あの家の女の子、つまりはシュウの妹も今はこちらに住んでいるため、実家ではまず飾らないのだろう。なら妹宛に送ればいいのには思うが、妹もよくシュウの家を訪ねてくるためシュウの方が都合がいいと判断したのだろう。

だが、シュウの方も送られてきても邪魔なだけだ。スペースを多く取るため、飾るうとも思えない。それ以前に飾り方を知らないというのもあるのだが。

「なるほどな、雛人形か」

誰も興味など持たないだろう、そう思っていたのだが、ディアーチェは興味深く箱を見ている。予想外の反応にシュウは少し驚きつつも、笑顔で問いかけた。

「興味あるの？ 見たい？」

「いや……。だがユーリが喜びそうではあるな」

なるほど、とシュウは頷く。確かに飾っていれば、ユーリは特に喜ぶかもしれない。なら飾ってみるのも悪くはないだろう。

「ディアーチエ。手伝って」

「うむ、分かった」

さすがにリビングで飾るのは邪魔なため、シュウは空室を使うことにし、まずは段ボール箱を使っていない部屋へと運ぶことから始まった。

Side:Dearche

シュテルとレヴィが仕事に向かうのを見届けてから、ディアーチエはシュウの部屋を訪れていた。ちなみにユーリはうたた寝をしている。あれはしばらく起きないだろう。シュウの部屋で見つけたのが雛人形で、今はそれらの飾り付けを行っていた。

「これが説明書、だね。えっと……」

二人で説明書を見ながら少しずつ組み立てていく。ディアーチエにとっては実物を初めて見るものなのでなかなか難しい。頼りになるはずのシュウも組み立ては初めてなのか、何度も説明書を読み返しては唸っていた。

これは時間がかかりそうだな。

自宅で昼寝をしているユーリのが気にかかったが、念のためここに来ている旨の書き置きはしてある。一先ず目の前の作業に集中することにした。

どれほど時間が過ぎただろうか。ようやく組み立てと飾り付けが終わった頃、空腹感に驚いた。作業に集中するあまり昼食時を逃してしまっていたらしい。時計を確認してみると、短針が二を指している。ユーリはまだ起きていないのだろうか。

「完成、で良いな？」

「うん。大丈夫だと思う」

「では少し遅くなってしまったが昼食にしよう。ユーリを呼んでく

る」

今からではあまり凝ったものは作れない。冷凍庫に何かあったか
と考えながらディアーチェは部屋を出ようとして、すぐに振り返っ
た。

「シュウ。昼食は……」

どこで食べる、と聞こうとしたが、すぐにディアーチェは口を閉じ
た。シュウは組み立てられた雛人形たちを見て、懐かしいものを見る
かのように目を細めている。昔のことを思い出しているのかもしれない。邪魔をするのも無粋だろうと考え、ディアーチェは静かに部屋
の扉を閉じた。

自宅のリビングに戻ると、ユーリはまだ眠っていた。机に突っ伏し
て整った寝息を立てている。その様子に苦笑しながらディアーチェ
はユーリの肩を揺らした。

「ユーリ。遅くなったが昼食にするぞ」

ユーリがゆっくりと目を開け、ディアーチェを認めると柔らかな笑
顔を浮かべる。ディアーチェは苦笑を漏らしながらキッチンへ。冷
凍庫から袋詰めされたピラフを三袋取り出す。少し考えて、冷凍ハン
バーグも出すことにした。

電子レンジで解凍しながら、ディアーチェはシュウのことを思い出
す。遠いものを見るように目を細めていたシュウを。

どのような理由があるとしても、シュウの最近までの暮らしは決し
て恵まれていたものではなかった。それ故に、時折まだ平和だったの
だろう昔を思い出している節がある。シュウの心より所なのかも
しれない。

ユーリやレヴィ、特にシュテルはシュウのことを気に入っているよ
うだ。もちろん自分もシュウのことは良く思っている。シュウも庇
護すべき家族だと思っている。それ故に、支えてやりたいとも。

「まあ……。我は手助けしかできんか」

シュウはシュテルと一緒にいる時が一番安らいだ表情を見せる。
ならば自分はこの二人を支えることに徹することが最善だろう。
ディアーチェは温まったピラフを皿に移しながら、小さく頷いた。

未だ船をこいでいるユーリを連れて、シュウのリビングへ。シュウがいなかったのでユーリを先に座らせ、ピラフの皿を置いておく。雛人形の部屋をのぞき見ると、シュウはまだそれを見つめていた。

「シュウ」

呼びかけると、すぐに反応があった。振り返り、笑顔を見せる。

「なに？」

「用意ができた。さっさと食べてしまえ」

「用意って……。ああ、そっか。お昼ご飯」

気づいていなかったのか、ディアーチェは呆れたようにため息をついた。シュウへと短く告げる。冷めるぞ、と。

「うん。今行く」

シュウが立ち上がったのを確認して、ディアーチェは満足げに頷いた。

Side: Hero

昼食後。シュウはディアーチェとユーリと共に買い物を買ったものは今日の夕食と、そして雛あられ。雛あられを見たユーリが、何ですかそれと不思議そうに首を傾げていたが、あとのお楽しみ、と笑顔を送る。

やがてシュテルとレヴィが帰ってきた。二人ともに怪我がないよううで―先ず安心する。

「王様！ 今日の晩ご飯は？」

「まあ待て、レヴィ。それよりもうぬらに見せたいものがある」

ディアーチェが楽しげな笑みを浮かべ、シュウへと目配せしてくる。シュウも笑みを返し、二人を自宅のあの部屋へと案内する。シュテル、レヴィ、ユーリの三人は怪訝そうにしながらもシュウの後に続いてくれた。

そして部屋に入った三人は、驚きで目を丸くした。

「これは……雛人形、ですか？」

「うん。実家から送られてきたんだ。どっつ」

「なんかすごいー」

瞳を輝かせるレヴィ。なんかって何だろうとシユウは思わず苦笑してしまふ。

「すごいですー。いつの間に作ったんですか？」

聞いてくるのはユーリだ。シユウがディアーチェへと視線を送り、言う。

「ユーリが寝ている間に、ね。ディアーチェが、ユーリが喜びそうだって手伝ってくれたよ」

「なー シユウー」

話を振られると思っていなかったのだろう、ディアーチェが慌てる。そんなディアーチェへユーリが嬉しそうに、

「ありがとうございます、ディアーチェ！」

「う、うむ……」

ディアーチェは顔を背け、小さな返事をした。顔が赤くなっているのだが、それは何も言わないでおく。

「じゃあ見るものも見だし、ディアーチェ、晩ご飯にしようよ」

「ああ……そうだな」

ディアーチェが夕食の準備のために退室する。シユテルが手伝うためにそれを追い、シユウもそれに続くようとして、

「せっかくだから二人で食べようよー」

レヴィの声にシユウはぴたりと動き止めた。

雛人形が飾られた部屋に大きめのちゃぶ台が運び込まれる。夕食はディアーチェが作ったちらし寿司だ。ちゃぶ台の中央に大きな皿に山盛りにされ、それぞれ自分たちの皿に好きな量を移していく。

「うん。さすがディアーチェ。美味しい」

「そうか」

シユウに言われたディアーチェの返事は短い、その表情はどこか嬉しそうでもあった。

ちらし寿司の後は、雛あられを大きな皿に入れ、皆でつまみながら雑談に花を咲かせる。今日の仕事の話や雛人形の準備の話など。部

屋は違うがいつも通りの夕食後の風景だ。皆が話を続ける中、シユウはそれには加わらずぼんやりと雛人形を眺めていた。

それは片付けの時になっても変わらない。皆が食器等を片付けている間も片付け終わってからも、シユウはずっと考え事を続けていた。思い出すのはまた実家にいた頃のことだ。何も知らずに平和に暮らしていた頃だ。

「シユウ。どうかしましたか？」

背後から声を掛けられ、シユウは驚いて振り向いた。シユテルがわずかに眉尻を下げてシユウを見つめている。シユウは少し言葉に詰まったが、やがて力なく微笑んだ。

「何でも無いよ。ちょっと昔を思い出しただけ」

「そうですか」

それ以上シユテルは何も言わない。シユウが話したくないことを聞こうとしないでいてくれる。それがとてもありがたい。シユテルは何も言わず、シユウの隣に座った。湯気の立つココアのカップを差し出してくれる。

「ああ、ありがとう」

受け取り、それに口を付ける。体が暖まる。

「この雛人形は、文花のものなんだ」

シユウの言葉をシユテルは黙って聞く。シユウも返事を求めているわけではないので、淡々と話を続ける。

「文花が両親におねだりして買ってもらったものなだけどね。イメージと違ったらしくて、雛人形が怖いって泣き出して……。結局一度飾っただけで、押し入れの奥深くにしまわれたよ」

さすがにあの両親もショックだったろうなと思う。わがままな妹だな、と。もっとも、その妹の泣き声にもらい泣きした自分が言えるものではないが。雛人形を見て泣き始めた兄妹にさぞかし慌てたことだろうと思う。

今となってはもう、この雛人形の前でそんな光景が広がることはないだろう。そのことを少しだけ寂しく思う。

「この雛人形も、もうちょっとちゃんと飾ってあげられたら良かった

のいね」

そんなことをつぶやくと、シュテルがそうですねと頷いた。

「ならこれから毎年飾りましょう」

「へ？」

「準備が面倒なのでしたら、手伝いますよ」

シュテルの言葉に、シュウはしばらく唾然としていたが、やがて顔を真っ赤にした。そうだね、とシュテルから顔を背けて言う。この子は自分が言っている言葉の意味を考えているのだろうか。

「どうかしましたか？」

「い、いやー。何でもないよー」

慌ててそう言いながら、雛人形に視線を戻した。

これから毎年。ずっとシュテルたちと一緒にいられば、それも叶うのかもしれない。

ずっと一緒にいられば。

「毎年使うなら、ちゃんと丁寧にしまわないとね」

「そうですね。私も覚えておきたいので教えていただけますか？」

「うん。もちろん」

隣のシュテルの体温を感じながら、シュウは静かに微笑んだ。

Side: Dearche

部屋の扉にもたれかかり、ディアーチェは一人ため息をついた。扉から背を離し、自宅へと戻る。もうしばらく戻らないだろうし、先に風呂を済ませておくか、と。

「我にできることは、まあ……。手助け程度だな」

家臣の安寧を守るのも王の務めだ、とディアーチェは笑う。自分たちは、あの二人はこれでいい、と。滅多に見せない優しい笑みを浮かべながら、ディアーチェは静かにその場を後にした。

ホワイトデー

「」教授お願いします」

八神家のリビング。現在そこにいるのは四人の子供。なのはにフェイト、はやて、そしてシュウだ。少女三人がソファに並んで座り、その向かい側で少年がたった一人で深々と頭を下げている。その光景は少々情けないものがある。

「そ、そんなに頭を下げないですよ！　そこまでしなくても、協力するつもりだったから！」

慌てたように言うのはなのはだ。フェイトも勢いよく頷いている。「そうだよ。私たちでよければ手伝うから」

「そうやで。だからそんな申し訳なさそうな顔せんといてや。な？」
最後にはやてがそう言うと、シュウがようやく頭を上げた。安心したような表情をして、良かった、と和らげる。自分一人ではどうしようかと思っていた。

「じゃあ、早速」

なのはが笑顔で言って立ち上がる。それにフェイトが続き、はやての車椅子を押す。

「始めよう」

三月十四日。ホワイトデー。チョコのお返しをする日だ。シュウもシュテルたちにお返しをしないといけないとは思っていたのだが、良い案が出ずにこの日を迎えてしまった。店売りで済ますのはまずいと考え、なのはたちに頼み込んだというわけだ。事情を聞いたなのはは快諾してくれ、さらにはフェイトやはやてにも声をかけてくれた。その結果として、八神家に呼び出されて今に至る。

結論としては、シュウがある程度の料理はできると聞いて、何かしらお菓子を作るうということになった。

「一心希望を聞いとこか」

キッチンまで来たところではやてが振り向いて聞いてくる。シュ

ウは少し考え、答えた。

「美味しいもの？」

「曖昧すぎるよ。もう少し具体的に」

「えっと……。ある程度簡単なもの、かな。数が作れるように」

なるほど、と女の子二人が相談を始める。当事者のはずのシユウは蚊帳の外だ。助けを求めた時点で当然ではあるのだが。

「あ、それともう一つ」

シユウが思い出したかのように口を開くと、なのはたちがシユウを見てくる。シユウは三対の視線から逃れるように視線を逸らし、言う。

「一つは少しがんばりたい。できればで」

「一つ？ 誰に上げるの？」

一つだけ、と聞いてなのはが眉をひそめた。シユウが苦笑する。今更それを聞くのか、と。声には出さなかったが伝わったのだろう、なのははすぐに顔を赤くすると、「ごめん、と顔を背けた。

「それじゃあ、始めよか」

はやてに促され、シユウもキッチンに立った。

Side:Nannoha

なのはたちが見守る前で、シユウは調理を続けていた。簡単に作れるものはすでに調理を終えている。今は、少し手の込んだもの、だ。作り方だけを教え、あとは間違ったことをしないか見守るだけだ。

「シユウはうまくやってるみたいだね」

ジュースを飲みながらフェイトがつぶやく。それにはやても頷いた。

「たまに王様に聞くけど、みんなと仲良くやってるらしいで。ユーリも懐いてるとか」

「そうなんだ。レヴィはあまり他の子のことを話してくれないから」

正確に言えば、レヴィは雑談よりも体を動かす方が好きならしく、たまに会ってもそういったことを聞く前に疲れるまで遊ぶことにならう。聞かれれば答えてくれるのだろうが、楽しそうな笑顔を見

るとそれを中断させてまで聞くことはできない、とのことだった。

逆にディアーチェはたまにはやてを訪ねているらしいが、ほとんどが雑談や料理といったことで終わるらしい。それ故にはやてが彼女たちの事情に一番詳しいと言える。

「シュテルからは何か聞いてる？」

問いかけてきたフェイトに、なのはは一度だけ頷いた。

「うん。ただシュテルも自分から話してくれることって少ないから……。でも、シュウ君といると落ち着く、とは聞いてるよ」

なのはを訪ねてくるのはシュテルだ。ただなのはとシュテルの合は、頻繁に模擬戦を行っている。その前後や合間に少し聞くだけだ。だが、その短い会話からでもシュテルがシュウのことを気に入っていることはよく分かる。シュウのことを話すシュテルの表情は、いつもの無表情ながら柔らかい雰囲気をもとつためだ。

補足をおけば、もちろんシュテルと一日雑談に花を咲かせることもあれば、一緒にお菓子作りをしたりなどもしている。だがやはり模擬戦の割合の方が高いのだが。

それにしても、とはやてが言っ、なのはは親友へと顔を向ける。はやてが照れたように頬をかきながら言った。

「想いを告げたようだったって聞いた時は、驚いたなあ……」

なのはとフェイトが神秘的な面持ちで同意して頷いた。なのはとフェイトはディアーチェから聞いたはやてに教えてもらったのだが、本当に驚いたものだ。それと同時に嬉しくも思ったが。

「今の生活が続くといいんだけど……」

そう思っが、シュウやシュテルたちはどう思っているのだろう。この先はどうするつもりなのだろうか。今はまだ、先ことは分からないままだ。

調理をしているシュウへと視線を戻す。レシピを見ながら調理を進めている。そのシュウを見つめながら、なのはは心の中でつぶやいた。

みんなを……。シュテルをよろしくね、シュウ君。

八神家で作ったものを丁寧にビニール袋に入れ、三人に何度も礼を言いながら帰路に着いた。その時にこの三人にもお返しを渡しておくのも忘れない。バレンタインの日にシュテルたちを経由してもらっていたためだ。

自宅にたどり着いたシュウは一先ず自分の部屋に向かい、ビニール袋をリビングに置く。ビニール袋の底に入れていた小さな箱を取り出すと、それを冷蔵庫に入れてシュテルたちの部屋へと向かった。

「あ、シュウ。お帰りなさい」

リビングに入ると、ユーリが笑顔で出迎えてくれる。リビングにはユーリー一人きりだった。

「ただいま。ディアーチェは？」

シュテルとレヴィは仕事が入っていたはずだが、ディアーチェは違ったはずだ。ディアーチェの姿を探してキッチンの方を見るが、キッチンの明かりは消されていた。買い物かな、と首を傾げていると、

「シュウ。入れんのだが」

背後からの声。驚いて振り返ると、ディアーチェがスーパーの袋を提げて立っていた。やはり買い物に行っていたらしい。ユーリがいるのに一人で買い物なんて珍しい、と思っていると、シュウの表情からそれを読み取ったのだろう、ディアーチェは苦笑した。

「つぬがいつ帰ってくるか分からなかったからな。ユーリには留守番を頼んでおいた。ユーリ、ほれ」

ディアーチェが小袋サイズのグミを手渡す。目を輝かせてそれを受け取るユーリ。留守番してもらったお礼、といったところか。

「シュテルから念話があった。あと一時間もせずに帰るそうだ」

「そっか。じゃあのんびり待ってようかな」

そうしておれ、とディアーチェはキッチンへと向かう。夕食の準備でもするのだろう。シュウはそれを見送ってから自分の席に座った。

それからしばらくして、シュテルとレヴィが帰ってきた。シュテル

は平然とした様子で夕食の準備を手伝い始めるのだが、レヴィは疲れ切ったようにリビングのテーブルに突っ伏した。実際に声でも、疲れた、とこぼしている。

「今日は大変だったの？」

「……書類嫌い……」

「……ああ……」

その一言で理解した。何かしらの事務処理を手伝っていたのだろう。確かにシュテルなら黙々と処理するイメージがあるが、レヴィには向いていないように思う。

「お疲れ様」

ねぎらいをこめてそう言つと、レヴィの頬がわずかに緩んだ。

「……夕食にするが、いいか？」

キッチンから顔を出したディアーチェがそう聞いてくる。それを聞いた瞬間、レヴィは勢いよく体を起こした。

「うん」

「……良さそうだな」

呆れたようなため息をつきながらも、ディアーチェは笑っていた。リビングのテーブルに夕食が並ぶ。ミートソースのドリアだった。ディアーチェ曰く、昨日のうちには仕込んで置いたらしい。五人でそれを全て平らげる。いつもより少し少なめの量だ。

全員の皿が空になったところで、ディアーチェが立ち上がった。

「さて。デザートの時間だ」

そう言つてディアーチェがキッチンから持ってきたのはジャムを使ったクッキーだ。いちごやブルーベリーなど様々なジャムが使われているようで、色鮮やかになっている。

「ちなみにジャムを作ったのはユーリだ」

「私たち二人から、ですー！」

早速シュウが一口に入れ、続いてシュテルとレヴィも頬張る。しっかりと味わって、素直に感想を告げる。美味しい、と。それを聞いたユーリは嬉しそうに破顔した。

「さすが王様！ ユーリもすごい！ あれだね、共同作業だね！」

「妙な言い方をするなたわけー」

ディアーチェが顔を真っ赤にして叫び、どうして怒られるの、とレヴィは困惑してしまう。その様子がおかしくて、シュウは思わず嘔き出してしまった。我に返ったディアーチェが咳払いして、シュテルとレヴィへと目配せする。

「私からは「ちら」を」

シュテルが用意したものは湯気の立つカップだ。それぞれの目の前に一つずつ差し出されたそれには、温かいマシュマロの入ったミルク。ほう、とディアーチェが感心したような声を漏らした。

「なるほど。見た目も素晴らしい」

「光荣です」

「ボクはこれー」

シュテルが礼をした横で、レヴィが箱を差し出してくる。中に入っているのは大量のあめだ。よく見れば、一つ一つ形が違う。どれもが歪な形をしていた。

「もしかして、手作り？」

「うん。オリジナルと一緒に作ってみたんだ。失敗しちゃったけどね」

後半はどこか悲しげな表情になってしまっていた。シュウたちはそれを一口含む。味付けはシンプルで、自然な甘さが口に広がる。見た目とは違い、なかなか美味しい。

「初めてでこれなら大したものだ。菓子作りの中でも難しいものだぞ」

「ええ、本当に。がんばりましたね、レヴィ」

ディアーチェとシュテルに続けて褒められ、レヴィは一瞬ばかりと呆けた後、すぐに嬉しそうに頬を綻ばせた。そうかな、と照れたように顔を赤くしている。あまり見ない表情でとても新鮮だ。

「次があれば、今度は一緒に作りましょうか」

「うんー」

シュテルの誘いにレヴィは嬉しそうに頷いた。

「それじゃ、最後に僕だね」

一番最後というのは避けたかったが、仕方がないと諦めつつシユウも持参したものを差し出した。袋に入っているのはカップに入ったマシユマロでチョコレートがかかっている。

わずかに驚きを見せる四人。気にしなくとも良かったのだが、とディアーチェは苦笑している。そして、誰も手を着けない。もしかして見た目からだめかな、とシユウが不安に思い始めていると、ディアーチェがため息をついた。

「シユテル。はよ食べる。我らが食べられん」

「そつだよ、シユテルん。早く早く」

レヴィにも急かされ、シユテルはどうしてかと首を傾げていた。シユテルとしては、王が食べてから、とでも思っていたのだろう。その王であるディアーチェに促されたので、シユテルが最初に口に入れた。

「なるほど。シンプルですが、それ故に美味しいですね」

「そつ？ それなら良かった」

安堵のため息をつくシユウ。ディアーチェが満足そうに頷いて、全員が食べ始めた。

食事後。ユーリはリビングで、食べ過ぎましたと横になっており、レヴィは幸せそうな表情をしながらテーブルに突っ伏している。ディアーチェは片付けのためにキッチンに行っていた。その直前に、あとの家事は引き受ける、とシユテルに言っていたのを聞いている。

シユテルは不思議そうにしながらも、ではお言葉に甘えますと頷いていた。今はシユウの隣で本を読んでいる。

「あのだ、シユテル」

声をかけると、シユテルが顔を上げた。何でしょうか、と首を傾げてくる。

「ちよっと一緒に来てもらってもいい？」

「構いませんが……。どうかしましたか？」

いいから、とシユテルの手を引いてシユウは自分の部屋へと向かう。シユテルは怪訝そうにしながらも着いてきてくれた。

シュウの部屋のリビングにたどり着き、シュウはシュテルを座らせる。ちよつと待つて、と言い残してキッチンへ。冷蔵庫に入れていた小さな箱を取り出して、ついではかりにパックのジュースも持つて戻る。それは？ と聞いてくるシュテルに返事をせず、今度は小皿とフォークを二組用意して、シュテルと自分の前に置いた。それからようやく、小箱を開けて中身を取り出した。

小箱に入れていたのは、小さめのガトーショコラだ。それを見たシュテルが目を丸くし、その反応にシュウは嬉しそうに微笑んだ。あらかじめ半分に分けておいたガトーショコラをシュテルの皿に載せる。

「はい。シュテルの分」

シュテルはそれをまじまじと見つめている。形悪いよね、と自嘲気味に笑うと、シュテルはそんなことはありませんと首を振った。

「シュテルからも別でチョコをもらったからね。それのお返し、といひようよ」

「なるほど……。気にしなくても良かったのですが」

「細かいことは気にせず、食べてみてよ」

シュウに促され、シュテルはフォークを手を取った。シュウが見守る中、シュテルが一口目を食べる。ゆっくりと咀嚼して、呑み込んだ。

「じ、どうかな……？」

緊張しながら聞く。シュテルはシュウを見て、

「手作り、なのですか？」

「うん。なのはたちに教えてもらいながら、だったけど……」

口に合わなかったのかな、と内心で落胆しかけていると、シュテルがゆっくりと優しい微笑んだ。

「とても美味しいですよ。ありがとうございます、シュウ」

その笑顔を見て、シュウは内心で安堵する。シュウも笑顔を返して、良かった、と言いながら自分の分を食べ始めた。

ももとのサイズが小さかったこともあり、二人ともすぐに食べ終わった。ジュースを飲みながら、二人きりでのんびりと過ごす。静かな、時間。

「シュウ」

呼ばれて、シュウはシュテルを見る。シュテルとしっかりと目が合う。

「ありがとうございます」

シュウは目を丸くして、すぐに苦笑する。律儀だな、と。

「でもまだまだ下手だからさ……。今度、一緒に作るからね」

「はい。是非とも」

そしてまた無言。お互いが飲み物を飲む音だけが静かに響く。心地の良い静かな時間だ。その時間の中で、二人はそつと体を寄せ合った。どちらからともなく、自然と。二人同時に顔を見合わせ、照れたような笑みを交換する。わずかに頬を赤くしたシュテルを見て、かわいいいな、と思ってしまった。

この時間が続きますように。そんなことを心から望みながら、シュウはそつとシュテルに口づけした。

その日のキスは、とても甘い味がした。

第一話

「久しぶりに来たけど、やっぱりすごいなあ」

周囲の光景を見て、シュウはぼつりとつぶやいた。現在、シュウがいるのはアースラのブリッジだ。今は緊急時でもなければ航行しているわけでもないの、数人の職員が働いているだけとなっている。なぜシュウがここを訪れたかという点、それは今日の前にいる人物に会ったためだった。

「よつこそ。お久しぶりね」

リンディが笑顔でシュウを出迎えてくれていた。

リンディの部屋、和室のような部屋にシュウは案内された。シュウとリンディの二人だけで、他には誰も居ない。

リンディへの連絡、アースラへの送迎をしてくれたシュテルも別件の仕事へと向かっている。リンディとの話の後はシュテルを待つてから帰る予定だ。

「私に話があるそうだけど、何かしら」

そう言いながらお茶菓子を出してくれる。シュウは礼を言うが、今はまだそれには手を着けなかった。

「えっと……。他の人に聞いてもいいことなんでしょうけど、一番信頼できるのはやっぱりリンディさんかなと思って。ちょっとだけ相談です」

「あら、ありがとつ。それで？」

「シュテルたちと一緒にいるためには、どうすればいいですか？」

リンディが一瞬目を丸くし、そしてすぐに困惑の色を示す。質問の意図が分からない、といった様子だ。それをすぐに察して、シュウは慌てて言い直した。

「えっと……。シュテルたちは魔導師で、これからも魔法を使い続けると思いますが。でも、僕が側にいたら、僕の存在で彼女たちを縛っちゃつような気がして……。僕は魔法が使えない一般人ですから」

妙なものが体にありますけど、とシュウが苦笑する。そのシュウの目の前で、リンディはなるほど、と一つ頷いた。シュウの言いたいことを理解してくれたらしい。リンディはシュウの目を見て、言う。

「一緒にいるなら魔導師であるシュテルさんたちの力になりたい、そういうことかしら」

「はい。そうです」

シュウは魔法のことに關しては無知に等しい。シュテルたちの役に立ちたいとは思っても、自分に何ができるかすら分からない。シュテルたちに聞いても、自分たちのことは気にしないようにと言われるだけだ。実際にシュテルに言ってみたことがあったのだが、やはり氣にするなど言われただけだった。

それなら、とシュウは思う。シュテルたちに知られないように自分にできることを探そう、と。それを示せば、彼女たちの隣、とまではいかなくても少し後ろぐらいなら歩けるかもしれない。

リンディは、なるほどねと考え始める。それを見て、やはりこの人に相談して良かったと思った。魔法と少し関わっただけのシュウのために真剣に考えてくれている。

「シュテルさんと一緒に生活できないといけないわけだから、オペレーターとかはだめね……。あとは……。デバイスマスター、とか？」

「えっと……。何ですかそれ？」

「デバイスを設計したりメンテナンスしたり、まあデバイス全般に關わる仕事、と思っても良かったらいいと思うわ」

デバイス、と聞いてシュウはシュテルの杖やレヴィの鎌を思い出す。確かあれらがデバイスと呼ばれるものだったはずだ。あれらにメンテナンスが必要だとは知らなかった。確かにそれができれば、彼女たちの役に立てるかもしれない。

「興味があれば資料を持ってきてあげるけど」

「是非！ お願いしますー！」

「ふふ。それだけやる気があれば大丈夫かしらね。じゃあ手配しておくから」

この後も仕事があるから、とリンディとはそこで別れた。それが昼前のことだ。シュテルが戻ってくるまでは暇なのでシュウは食堂でのんびりと過ごすことにした。休憩の職員と話をしたり、昼寝をしたが、とても難しい資格だと聞くことができた。

夕方になり、シュテルが戻ってくる。食堂まで迎えに来てくれたのだが、リンディも一緒だった。

「では帰りましょつか、シュウ」
「うん」

シュテルに促され、シュウは立ち上がる。そのまま食堂を出ようと
つら、

「はい、うん」

シュテルから見えないようにリンディから封筒を差し出された。困惑しながら受け取り、中身を確認する。何冊かの本と資格についての資料。シュウが驚きに目を瞪ると、リンディはどこか楽しげに笑っていた。

「本格的に勉強をするつもりがあるのなら、協力するから。いつでも言いなさい」

それじゃあ、またね。リンディがそう言ってシュウの肩を叩き、休憩室の奥へと向かっていく。シュウはその背中を、呆然としたまま見送っていた。

夕食を終え、自宅に戻ったシュウは早速リンディから受け取った封筒の中身を取り出した。中に入っているのはバイスマスターが実際に行う業務内容を網羅した本や、その資格のための問題集。さらには資格の概要についての資料など。昼前に話したところだというのに、これほど早く用意してもらえるととは思っていなかった。改めて礼を言う必要がある。

とりあえずシュウは、それらのもの全てに目を通すことにした。

翌日。朝食の時間になってもシユウは現れなかった。寝坊でもしたのだろうと王が笑い、シユテルへと様子を見に行くようにと告げる。断る理由もないので、すぐにシユウの部屋を訪ねる。シユウから預かっている合鍵で扉を開け、リビングへと向かう。

「……………何をしているのですか？」

そこにいたのは、テーブルに突っ伏しているシユウ。彼の体の下には何かの本がある。まるで慌てて隠したように、シユウは引きつった笑みでシユテルを見ていた。

「べ、別に何でもないよ？ シユテルこそどうしたの？」

「朝食に呼びに来ました」

「へ……………」

シユウが間抜けな表情を見せ、時計を見る。そして目を大きく見開いた。どうやら本当に気がついていなかったらしい。手元の本にでも熱中していたのだろうか。

「そんなにおもしろい本なのですか？ よければ私にも……………」

「いや！ そういった本じゃないから！ 教材だから！ 気にしないで！」

慌てふためくシユウに、シユテルは訝しげに眉をひそめる。誰がどう見ても怪しいと思える態度だが、シユテルは詮索せずのため息をつくだけに留めた。シユウも人の子だ。隠したいことの二つや二つはあるだろう。少々寂しくも感じるが、それは仕方がない。

「では王たちが待っていますので、急いでくださいね」

「うん。すぐに行くよ」

シユテルはでは、ときびすを返すと、後ろ髪を引かれる思いをしながらもその場を後にした。

「おもしろいけど難しすぎるよ……………」

シユウのその声は聞こえないことにして。

Slide…Hero

「なのは。ちょっといいかな？」

朝のホームルームの前。シユウはなのはたちの集まりへと声をか

けた。なのはたち全員が驚いたような反応を見せる。それもそのはずで、シュウから彼女たちに積極的に声をかけることはしてこなかったためだ。

「珍しいね。どうしたの？」

なのはが笑顔で聞いてくる。シュウは周囲を見て、なのはたち以外に誰も会話を聞いていないことを確認して言った。

「あとでアースラに連れて行ってもらえないかな？ リンディさんに会いたいんだ」

「私は構わないけど……。シュテルは？」

シュテルと一緒に行けばいいのでは、と考えたのだろう、なのはがかわいらしく首を傾げて聞いてくる。「この皆には言っておいてもいいかなと判断して、シュウは簡単な経緯を説明した。なのはたちだけでなく、話を聞いていたアリスとすずかも驚いていた。

「デバイスマスターの勉強……。そっか、シュウはその道を選んだんだね」

そう口を開いたのはフェイトだ。感心したように何度か頷いている。

「なんや難しいってよく聞くなあ……。がんばってな、シュウ君。応援するで」

「うん。ありがとう」

それじゃあまた放課後に、そう言い残してシュウは自分の席へと戻っていった。

授業が終わり、放課後。シュウは一度だけ自宅に戻り、シュテルたちの部屋へと向かう。今日はリビングに全員揃っていた。

「ちよっと友達と遊んでくるね」

そう言つと全員が驚き、そのことにシュウは思わず笑みが引きつった。そんなに意外なのかと思うのと同時に、確かにこんな言葉は初めて言ったな、と気づいてしまう。自分の交友関係の少なさに気持ちが悪入りそうになるが、今は関係のないことなので一先ず忘れることにした。

驚きから最初に立ち直ったのはシュテルだ。珍しいですね、とつぶやき、続ける。

「お気を付けて。いつ頃戻りますか？」

「ちよっとお話してくるだけだから、二時間ぐらいかな？」

「分かりました。では夕食もそれぐらいの時間に出発上がるようにしておきます」

ありがとう、と礼を言いつつ、シュテルは黙って首を振った。気にしなくていい、よ。

「それじゃあ行ってきます」

そう言いつつ、部屋を後にする。そのシュウの背中へと、

「お気を付けて。リンディ艦長によくお伝えください」

「……………」

敵わないな、とシュウは心の中だけで苦笑した。

Side…Kouji

「なるほどなあ……………」

真夜中の学校の屋上。コウはフェンスにもたれかかり、目の前のモノから話を聞いていた。

それは、小さな黒い玉だった。特定の形を持たず、周囲の景色と同化して姿を隠す。コウは詳しく知らないが、魔法の一種らしい。サーチャーに近いものだと言ったことはあるが、興味もないので聞いていない。

これは、ずっとシュウの部屋にいる。ここに本体がいる今も、これの欠片がほとんどの時間をシュウと共に過ごしている。もっとも、魔力に精通した者、夜天の守護騎士やマテリアルたちに見つかればさすがに気づかれる可能性もあるが、そこはうまく隠れているようだ。

今、これの報告によりシュウが何をしようとしているかの見当がついた。デバイスマスターを目指している、と。がんばるな、と他人事のように思ってしまう。彼の親友を名乗る者として、応援したいものだ。

だが、彼の上に立つ者は良しとしないだろう。彼が魔法の世界に出

てくることを望まない。それ故に、このことを知れば実力行使に及ぶ可能性がある。

「「苦勞さん。戻ってええで」

黒い玉がひらひらと揺れて、そして姿を消した。シュウの部屋へと戻ったのだろう。それを見送ったコウは、疲れたようにため息をついた。どうしたものか、と。

「まあ、今回も特に変わりなし、でええやろ」

つぶやき、笑う。全て教える必要はないだろう。

自分の上は、まだシュウが孤独な生活を送っているものだと思っている。毎日を適当に過ごしていると思っただろう。そんなシュウを彼らは必要としていない。シュウに弱みができることを望んでいる。シュウが自発的にその力を使うために。

だからこそ、コウは口を閉ざす。自分の存在意義を自己否定することになったとしても。たった一人の親友のために。

「だからがんばれ、親友」

コウは笑いながらそう言っ、その場を後にした。

そしてそれを無感情に見つめる一人の人間。その人間も黒い玉から報告を聞き、そして言う。少女特有の高い声で、たった一言。

裏切り者め。

第二話

アースラの休憩室。シユウはその隅の席を借りて、リンディに用意してもらった教材を開いていた。デバイスマスターの資格のための教材、ではない。無論そのための教材であることに違いはないのだが。

シユウは魔法の知識が根本的に足りていない。そんなシユウがいきなりデバイスマスターの資格の勉強などできるはずもなく、そのための教材を開いても書いてある語句の意味すら理解できなかった。故に今は、基礎中の基礎から学んでいる。

基礎といっても簡単なものでもない。この教材の全てを理解できるようになるだけでも一年はかかりそうだ。シュテルたちの力になれるのはいつになることか、見当もつかない。だが、それでも途中で投げ出すことはないだろう、とは思っている。明確な目的があるのだから。

「ふっ……。疲れた……」

シユウは教材から目を離し、ぐっくと伸びをする。ここに来てからすでに三時間が経っている。そろそろ帰らなければシュテルたちが不審がるかも知れない。

今日は休日だ。シュテルたちには友達と遊びに行くと言って出かけている。実際のところはここで勉強をしているのだが、送迎はなのはやフェイト、はやての誰かにしてもらっているのだから、送迎はいうわけでもないだろう。ただ、それでも嘘をつくことに後ろめたさはあるが。

そろそろ帰ろうかな、とシユウは荷物を片付ける。携帯電話を取りだして一緒に来たのはに連絡を取ろうとして、

「あれ？ お兄ちゃん」

その声にシユウはわずかに目を見開いた。どうしてここに、と思いつつながら声のした方向、背後へと振り返る。妹の文花がそこにいた。

「お兄ちゃんがいるなんて珍しいね。どっついたの？」

「ちょっと勉強をね。シュテルたちには知られたくないからここで……」

「へえ……。何の勉強？」

文花が興味深そうに、机の上に広がっている教材を見る。一つ一つ確認していき、やがて文花が得心したように頷いた。

「デバイスマスターになりたいの？」

「その通りだけど……。よく分かったね」

「実家にある教材も多いから、何となく」

へえ、とシュウは頷いた。実家に同じものがあるのなら、そこから答えが導き出されるのも頷ける。それでもよく覚えてるなあ、と感心していたところで、

「ちょっと待て。」

聞き捨てならないことを聞いた。

「え？ 家に……実家に同じものがあるの？」

「あるけど……。それがどうしたの？」

文花は、何を今更と首を傾げている。シュウの啞然とした表情をしばらく見つめ、文花はため息をついた。

「お父さんとお母さんは研究者だよ」

「ひん」

「お母さんはデバイス関係の方に特化してるの。もちろんデバイスマスターの資格もある。だから教材ももちろんあるよ」

初耳だった。シュウが両親の魔法関係のことで知っているのは、ロストロギアについて調べていたことぐらいだ。デバイスの方面にも詳しいとは知らなかった。

「お母さんに教えてもらったら？ きつと喜ぶよ」

文花のそんな言葉。シュウは苦虫を噛み潰したような表情になる。両親とは今でもあまり連絡を取っていない。今までが今までだけに、簡単に許すことはできないためだ。そんなシュウの心情を理解しているのだろう、文花は小さく肩をすくめただけだった。

「まあ私も人のこと言えないから、お兄ちゃんにも何も言わない。でも、利用できるものは利用した方がいいと思うよ」

文花の笑顔。何か悪いことを考えているような表情だ。文花は、じゃあ行くねと手を上げるときびすを返した。シュウが慌てて呼び止める。

「ちよっと待って、文花」

「なに？」

文花がすぐに振り返る。その文花へと言う。

「文花はどつしてここに？」

「ちよっと呼び出しを受けて……。そ、それじゃあ！」

この話題になった途端、文花はかなり慌て始めた。聞かれたくなかった、見られたくなかった、そんな表情と慌て方だった。急いで立ち去っていく文花を、シュウは怪訝そうに眉をひそめながらも黙って見送る。どうかしたのかな、とは思うがシュウに手伝えることはおそらくないだろう。

シュウは携帯電話を取り出すと、番号の入力を始めた。

Side: Humika

シュウと別れた後、文花はアースラの小部屋にたどり着いた。ノックをして中に入る。そこにいたのは、リンディとクロノだ。文花はしっかりと一礼してから中に入り、二人の対面に座る。

「急に呼び出してごめんなさいね、文花さん」

「いえ。大丈夫です」

今朝方、リンディたちから連絡があり、アースラに来てほしいと呼び出しを受けた。内容は単純で、依頼されていたことが終わったからだ、と。

文花がリンディとクロノに依頼したこと。それはデバイスの解析だ。自分が使っていた鎌のデバイス。その詳細な情報を調べてもらっていた。文花の依頼ではあるが、リンディとクロノにも調べさせてほしいと頼まれていたこともある。

文花が使っていた鎌のデバイスは、文花の両親が用意したものではない。ある日突然、文花の机にあったものだ。そのデバイスと一緒に置かれていたメモ用紙には、たった一言、これで目的を果たすといい、

という簡潔な言葉だけが残されていた。最初は当然不審に思っていたものだが、そのデバイスを手にとると不思議とその感情は消え失せてしまった。

デバイスが暴走した一件以降、そのデバイスは管理局に、というよりはリンディ個人に預けられている。そこから、口の硬い技術者に解析を依頼してもらっていたのだ。

「それで、どうでしたか？」

文花がおそろおそろといった様子で聞く。リンディは少しの間だけ文花の目を見た後、やがて口を開いた。

「必要な情報だけを伝えるわね。あのデバイスはインテリジェントデバイスで間違いないのだけど、設定されてある人工知能は異常なものでした」

「異常？」

「簡単に言ってしまうえば、主を乗っ取る意思があり、実際に体のコントロールを奪うような術式も組み込まれていたんだ。覚えがあるだろう」

クロノの言葉に文花は頷く。実際に文花は体のコントロールを奪われた。自分一人ではどうにもできなくなったのだ。あの場に兄やシュテルがいなければ、どうなっていたか分からない。

「もう一つ、なぜか本来の所有者の名前も記録されていたわ。ただ、まるで見つけてくださいと言っているように記録されていたのだけ……」

リンディがクロノへと視線を投げかけ、クロノは頷いて一枚の紙を取り出した。解析結果でも書かれているのだろう、文字や数値が書かれているのが透けて見える。やがてクロノが口を開いた。

「本来の所有者は東江幸司。心当たりは？」

その名前を聞いた瞬間、文花は目を大きく見開き絶句してしまった。

Side::Stern

シュウがどこかへと出かけた後、シュテルは王に許可を取り、翠屋

に来ていた。目的は桃子から料理の技術を習うことだ。ここ最近、仕事もなくシユウも自宅にいない時は、翠屋で勉強をさせてもらっている。

「どうでしゅうか」

シユテルが桃子へと試作したケーキを差し出す。桃子はそれを一口食べ、感嘆のため息を漏らした。

「ほとんど完璧。すごいわ、シユテルちゃん」

「光荣です」

丁寧に頭を下げるシユテル。それを見た桃子が苦笑して、でも、と続ける。

「まだ改善するべきところもあるかな。例えば……」

桃子の指導を受け、またケーキを試作し、そしてまた指導を受ける。その繰り返しだ。ここに来るたびにそのやり取りを何度も繰り返している。

ちなみに、桃子は試作のケーキを一口しか食べない。残りは捨てる、というわけではなく、

「シユテルちゃんの試作ですか！ 食べたいですー！」

最近よく来るためか、こここの従業員と少し話すようにはなっている。誰もがシユテルを歓迎してくれている。さらにシユテルがケーキを試作していると聞いてからは、小さなケーキを皆で取り合っているほどだ。

今回のケーキもいつの間にか従業員の人が持って行ってしまっていた。

「もう一度、お願いできますか」

シユテルが聞いて、桃子は笑顔で頷いた。

「もちろん」

シユテルたち四人は、現在ある計画を立て、それぞれが行動を起こし、準備をしている。シユテルのケーキ作りもその一つであり、他の三人もそれぞれ動いていた。計画の目的は単純、これからの生活のためだ。魔法に頼らない生活、それが目的である。もちろん魔法を捨て

るようなことはしないが、どこかの誰かに自分を追い詰めるような思考をさせないためでもある。

シュテルは次のケーキを焼きながら、王たちとの会話を思い出す。シュテルからの相談に二人とも驚きながらも協力してくれている。そのことをとても嬉しく思う。だからこそ、発端である自分ももっとがんばらなければならない。

そこまで考えたところで、人影が隣に立った。見ると、ディアーチエがそこにいた。

「どうだっ。」

王の短い問いかけ。シュテルは黙って頷く。

「概ね順調です。」

「うむ。では我も見てもらおうとするか。」

そう言いながら、王もケーキ作りを始める。王も桃子からの指導を受けている一人だ。少しでも近づけるように。そんなことを考えながら、二人はケーキ作りに没頭した。

Side::Kouji

「みんながんばるなあ。」

夜。学校の屋上でコウは欠伸をかみ殺しながらつぶやいた。黒い塊から今日の監視データを受け取っているところだ。それらを見て、コウは楽しそうに笑う。

「シュウとシュテルさんはお互いに一言言ってみればいいと思うんやけど……。まあ、俺には関係ないことか。」

二人は行動こそ違うが、その目的は単純でほぼ一致していた。それがとてもおかしく思う。代わりに教えてやるうとも思えないが。続けてコウは最後のデータも見て、そして凍り付いた。慌てたようにまた視線を上げ、ゆっくりとデータを確認する。間違いない、と。

「なんで……。どうではれた……。？」

そのデータには、アースラの一部職員が自分を探していることが書かれていた。確か文花を担当しているモノからのデータだ。ということは、文花からの何らかの情報だろうか。文花にも分かるようなこ

とはしていないはずなのだが。

「ん……？ デバイス？」

そう言えば、と思い出す。文花のデバイスのことを。暴走してしまったデバイスのことを。

あのデバイスは、何だったのだろうか。

少なくとも自分は知らないものだ。いずれ調べておく必要があるだろう。そう考え、一先ず身を隠すために一度ここを離れようと立ち上がったところで、誰かの冷静な声が届いてきた。

「悪いけど、貴方は用済み」

誰かの声。コウの目の前で、黒い塊がその声のもとへと帰って行く。コウが驚いて声の主を見て、

「な……っ……」

驚きで固まってしまう。どうして、いつから、という疑問が頭の中で渦を巻く。しかし声の主はそれを待つことはせずに、黒い塊へと指しを飛ばした。

「やりなさい」

黒い塊が形状を変え、小さな槍となる。そしてその槍は、呆然としているコウの体へと突き刺さった。苦悶のうめき声をもらし、その場に倒れるコウ。声の主はすぐにきびすを返すと、その場から姿を消した。

後に残されたコウから、声が漏れ出る。なぜ、どうして、と。

「なんで……音奈が……？」

やがて、コウはその瞼を閉じて、意識を手放した。

第二話

「これで全部、かな」

シュウの部屋に段ボール箱が三箱運び込まれた。持ってきたのは男女二人組。シュウの両親だ。シュウは封を開けて中を見て、頼んでおいた教材であることを確認する。両親へと顔を向けて、言った。

「うん。ありがとう。助かったよ」

教材のことを忙しいであるつりんディに頼むのは申し訳ないと思っていたところだ。その点、両親なら遠慮無く頼むことができる。無論思うところはあがあるが、背に腹は代えられない。

「分からないことがあるらいつでも答えるから」

母親の言葉に、シュウは曖昧な笑顔を返すだけだった。

両親が帰った後、シュウは荷物を空き部屋に運び入れた。普段使っていない部屋だったそこも、今では魔法の教材や資料などが詰め込まれ、シュウの勉強部屋として機能するようになっていた。実際にここで勉強することも多いため、小さなちゃぶ台まで用意したほどだ。

ここの模様替え、といっても教材の段ボールを詰め込んだだけだが、それは数日前から一気に行われたものだ。そのため、まだまだ整理もできておらずシュウ自身何がどこにあるのか理解できていない。今日もシュウは目的の教材を探して段ボールを漁ろうとして、

「……………」

それが、視界に入った。ただの錯覚、または見間違いかゴミだろうと考え作業に戻ろうとするが、どうしても気にしなってしまう。シュウは手を止めると、先ほど視界に入ったものを見ようと部屋の隅を見る。そしてそれは、すぐに見つかった。

影の中にあるので分かりにくくはあったが、それは黒いボールのよくなものだった。持ち込んだ覚えのないそれが、部屋の隅に無造作に置かれている。

「……なにあれ」

レヴィがユーリ、もしかしたら文花が持ち込んだのか、一瞬その考えもあったが、即座に自分で否定した。ここはつい最近まで一切使用されていなかった部屋で、鍵がかけられたままだった。わざわざあの三人が入ろうとするとは思えない。

首を傾げながらも、シユウはそれへと手を伸ばす。その途端、黒い玉はシユウの目の前で浮かび上がった。ぎょっとして後退るシユウの目の前で、黒い玉がゆっくりと透け始める。直感で捕まえないといけないと感じてシユウが手を伸ばすが、間に合わないことはすぐに分かった。

そうシユウが諦めかけた時、頭に聞こえてくる声があった。

『いい加減目障りだね』

女の声だ。その声の直後、黒い玉は突然光の鎖に縛られた。シユテルたちが使ったものを見たことがあるが、バインド、というものだったはずだ。誰が、と周囲を見渡しても誰かがいるはずもなく、シユウは自分の右手を見つめた。小さく首を振って、黒い玉へと近づく。今度は消えることはなかった。

黒い玉を両手で包み込むように持ったまま、シユウは考える。これからどうしよう、と。魔法に詳しくない自分に名案が浮かぶわけもない。少し間途方に暮れ、隣人を頼ろうかなと考える。だが不意に思い出したことがあった。以前、クロノから緊急の時は連絡するようにと電話番号らしきものを受け取っていたのだ。これは緊急だと言えるだろう。この程度だと怒られるかもしれないが。

シユウは早速携帯電話の電話帳機能を開く。登録件数は二十もないのですぐに見つかった。とりあえず電話をかける。忙しいとは思いますが、すぐに出ないかもしれない、と思っていたが、わずかにコールで繋がった。

『シユウかー！ どうしたー！』

かなり切羽詰まった声だ。電話をかけたシユウが逆に驚いてしまう。まさかここまでの反応を示されるとも思っていなかった。

「え、えっと……。ちょっと聞きたいことがあって……」

『え？ あ、そうか……。いや、すまない。気にしないでくれ』
クロノが苦笑する気配が伝わってくる。シュウはそのことを不思議に思うが、とりあえずは気にしないことにした。

それでどうした、と言うクロノに、シュウは簡単な状況説明を行った。全てを聞き終えたクロノの反応は、無し。しばらく無言の時間が流れ、シュウがおそろおそろといった様子で名前を呼ぶ。

「クロノ……？」

それで我に返ったのか、相手が驚く気配が伝わってきた。

『すまない。すぐに迎えに行く。それを見せてもらってもいいか？』

「あ、うん。もちろん。むしろ僕から頼みたいぐらいだし」

では後ほど、と通話が終わる。シュウは携帯電話をしまつと、何か様子がおかしかったなとしきりに首を傾げていた。

しばらくして自宅にやってきたクロノに案内され、シュウはアースラの休憩室に来ていた。休憩室の隅の席に座り、対面に座る人物を見る。リンディとクロノが神妙な面持ちで座っており、もう一人、なぜか文花もこの場にいた。心配そうな瞳をしきりにシュウへと送ってくる。

「えっと……。どうして文花がここに？」

「お兄ちゃんから緊急の連絡がきたって聞いて、つい……」

文花が眉尻を下げて、申し訳なさそうに言った。心配してくれるのは嬉しいが、文花まで来るとは思っていなかったのでシュウは内心でかなり驚いていた。そしてすぐに何となくだが察することもできた。自分の知らないところでまた何か起っているのか、と。

「貴方から預かった黒い玉は、今調べてもらっているところです」

そう切り出したのはリンディだ。そちらを見ると、今までにないほど真剣な表情で自分を見つめていた。リンディが続ける。

「その結果が出るまでに、伝えておかなければいけないことがあります」

そう前置きして聞かされたことは、文花が持っていたデバイスのことだった。デバイスの意思、体に乗っ取る術式などは、まあそれぐら

いあるだろうとは思っていたことではある。誰が何の目的で、かは分からないまでも。だが、その後に聞いたことは全く予想していないものだった。

「デバイスに記録されていた所有者の名前は東江幸司。知っているわね？」

リンディの言葉にシュウは大きく目を見開いた。なぜここで親友の名前が出てくるのか。シュウが絶句したまま固まっていると、それを見かねたのかクロノが補足してくれる。

「この登録情報だが、まるで調べた人間に見つけてくださいと言わんばかりに分かりやすく明記されていたらしい。だから東江幸司が本当の持ち主なのかは実際には分からない。ただ、それでも」

魔法の関係者であることは間違いないはずだ。

クロノの言葉に、シュウは黙ってうつむいた。誰かが一般人であるコウの名前を使ったのでは、と言おうともしたが、それはないと思う。シュウと文花を狙った誰かが、たまたまただの生徒の名前を使った、などとは考えられない。シュウと親しい人を選んだとしても、シュウは交友関係は少ないながらも他にも友人はいる。たまたまコウが選ばれた、とは考えにくい。もちろんその可能性もあるのだが、コウが魔法の関係者と思った方がシュウにとってもしっくりくるものがある。

こればかりは推測をいくらしても仕方がない。そう判断して、シュウは携帯電話を取りだした。怪訝そうな表情を見せる三人に言う。

「じゃあ確かめよう。コウに電話してみるよ」

「な……！」

待て、と止める間もなくシュウが短縮番号を押して電話をかけてしまった。呆然と凍り付く三人をぼんやりと眺めながら、シュウはコウの明るい声が届くのを待つ。しかし、いつまで待ってもコール音が続くだけだった。

なんだ……？

もちろん、本来なら不思議に思うことでもない。ただ用事があった、それだけのはずだ。しかしどうしてか、シュウの心を焦燥感が支

配する。今すぐ彼の無事を確認するべきだと、シユウの心が叫んでい
るようだった。

シユウは一度電話を切ると、出ない、と短く報告した。安堵する三
人の前で、シユウは今度は学校に電話をかける。再び驚く三人を無視
して相手を待つと、すぐに電話が繋がった。相手はシユウの担任だ。
コウに電話が繋がらない、何か知らないかと口早に聞く。本来なら気
にしすぎだと一蹴されるところなのだろうが、担任はわずかに驚いた
気配を伝えてきた。そして、

「……………」

担任から聞いた言葉にシユウが絶句して目を見開いた。その反応
に目の前の三人が眉をひそめるが、シユウは気にしていられない。礼
を言つて電話を切ると、クロノに叫ぶように言った。

「クロノ！ 病院に送って！ あとシャマルさんを貸して！」

「え？ あ、ああ…………。連絡してみよう」

シユウの剣幕に押され、クロノは頷くしかなかった。

担任から聞いた話を簡単に纏めると、早朝、コウが学校の屋上で倒
れているのが発見された。コウは腹部から血を流し、己の血だまりの
中にいたそうだ。当然救急車が呼ばれ運ばれたが、現在も意識は戻っ
ていない。曰く、未だに生きているのが不思議な状態、とのことだっ
た。

「まるで狙ったかのような展開ね……………」

シユウからその報告を聞いて、リンディは顔をしかめていた。そし
てすぐに心の中で否定する。これは自分たちの責任だろう、と。どう
いった方法が取られていたかは分からないが、相手側には自分たちの
動きが筒抜けだったのだろう。秘密裏にコウの搜索を始めたのだが、
どうやらそれが相手に伝わり、コウを始末しようとした、と考えるべ
きか。

「一体これは、どういふ状況なの……………」

推測するにはあまりに情報が少なすぎる。シユウを狙っているこ
とは間違いないのだろうが、一体いつから、誰が、どんな手段を用い

ているのか、全てが分からない。リンディは小さくため息をつく、ブリッジのいすにもたれかかった。とりあえずはシュウに同行したクロノからの報告を待とう、と。

病院の一室。固く閉ざされた白い部屋、そのベッドにコウが横たわっていた。医者のお話を盗み聞いた話では、手を尽くした、もうできることはない、とのことだった。

現在、この部屋の周囲に人はいない。というより、この空間に人がいない。クロノがコウごと結界を張ったためだ。当然人の目がある場所だからとクロノはさすがに渋っていたが、シュウがしつこく食い下がるに嘆息しながらも結界を張ってくれた。

はやてに連絡をして、そして急遽ここに来たシャマルが治癒魔法を展開している。シャマルの額からは汗が浮かび、その表情は悲壮一色。それだけで治癒魔法ですらどうしようもないと察しがつく。

「お兄ちゃん……」

文花の心配そうな声。シュウは瞼を閉じると、小さくため息をついた。

なんて無力なんだ。

この親友は自分のために色々と動いてくれていた。どこまでが演技だったかは分からないが、そんなことはシュウには関係ない。コウには、直接言うことはないが、多大な恩を受けているを感じている。いつか恩返しをしたい、と。だが自分にはその親友を救うことすらできない。

いや。

すぐにシュウは首を振った。あるじゃないか、と。今、ここに、自分がいるではないか。

シュウはその場に座り込み、コウの手を強く握った。目を閉じ、強く念じる。相手はもちろんコウではなく、シュテルから聞いたことのある存在、自分の中、ギフテッドに宿る魂だ。

お願いだ……。コウを助けて……。

誰も何も言わない。静かな静寂がその場を支配している。それで

も、同じことを繰り返し何度も念じ、願っていると、誰かが小さくため息をつく気配が、周囲からではなく自分の心から聞こえてきた。

『生きているなら、まあ治療するぐらいはできるさ。でもね、自分で何をしようとしているか分かっているのかい？』

シユウにとっては初めて聞く声。しかも自分の中から聞こえてくる声に不思議な感覚を覚えてしまう。だが不快なものではなく、むしろ安心感すら覚えるものだった。その声に応えるために、シユウは再び心の中で言っ。

もう普通の生活には戻れない。コウのこともある。分かっている。それでも僕は、友達を見捨てることなんてできない。

『嫌になるほどまっすぐだね。誰に似たんだか……。まあ、今回はあたしらが引き起こしたことだ。手を貸してあげるよ。ただもう一つだけ忠告だ』

そこで声は一泊間を置いて、『この願いを叶えたら、シユウの魔力がほとんど失われる。また、何かを引き寄せるよ』

気をつける。シュテルにちゃんと、言っ。

シユウの答えに、声は忍び笑いを漏らした。じゃあやるか、と柔らかい声音で言ってくれる。そして、自分の中から温かいものがあふれ出てきた。

『まあ、問題はすぐに会えるかどうか、だけどね』

その声は、シユウには届かなかった。

重体の患者が消えたことで大騒ぎになっている病院を後にして、シユウたちはアースラに戻っていた。医務室ではコウが眠っている。念のため精密検査をすることになっていた。

「自分でギフテッドを制御できるようになったのか？」

コウの顔を見つめるシユウの背後、クロノがそう問ってくる。シユウは振り返ると、小さく首を振った。

「まさか。たまたま、応えてくれたただだよ」

「そうか」

それきり無言。静寂がその場を支配する。シュウが気まずく感じてコウへと視線を戻す。

「コウと目が合った。」

「あ……。目が覚めた？」

シュウが微笑んで聞くと、コウはしばらくシュウを見つめた後、おもむろに右手を腹部へと押し当てる。おそらく傷の有無を確認したのだろう、傷が消えていることを確認すると、コウは大きく目を見開いた。

「傷は、治したよ。それでコウ、聞きたいことがあるんだ」

「……………あとや」

コウの掠れた声が耳に届く。シュウが首を傾げると、コウは突然体を起こすとシュウの胸ぐらを掴んだ。驚いたクロノが止めに入ろうとするが、シュウがそれを手で制する。

「シュウ。シュテルさんはどこや」

「えっと……。お仕事のはずだけど」

「今すぐ呼び戻せ！ 今すぐやー！」

やはり魔法のことを知っている、と思うと同時に、何をこんなに慌てているのだろうとも思う。慌て方が尋常ではない。傷が治っているといっても、体力まで戻っていないはずなのに。シュウがコウの剣幕に戸惑っていると、医務室のドアが開いた。そして駆け込んできたのは、ユーリだ。

「シュウー… 大変ですー！」

シュウが振り返りユーリを見る。その表情は、今までにないほど慌て、怯え、恐怖しているもの。初めて見るその表情に、シュウは嫌な予感を覚えてしまう。

そして、嫌な予感というものは良くも悪くも裏切らない。

「シュテルが……捕まっちゃいました……」

そのユーリの報告に、クロノが驚きで目を瞪り、コウが遅かったかと肩を落とし、そしてシュウは言葉の意味が理解できず呆然と立ち尽くした。

第四話

アースラのブリッジ。そこにシュウの知る魔法の関係者が全員集まっていた。マテリアルの皆はもちろん、なのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッターもいる。シュテルのことを聞いて駆けつけてくれたようだ。

そしてもう一人、コウがいすに座らされてぼんやりとしていた。特に何かをするわけでもなく、集まっている面々を興味深そうに眺めている。シュウがそんなコウの様子を観察していると、リンディが口を開いた。

「初めまして、東江幸司君。私のことは知っていたりするのかしら」

「アースラ艦長、リンディ・ハラオウンやる。もちろん知ってるよ。すらすらと応えるコウ。リンディは真剣な表情で頷き、続ける。

「まず君のことを聞きたいところなんだけど、他に問題ができたわ。貴方はどこまで知っているの？」

シュテル救出に向かう前に得られる情報があれば、と思っただろう。コウもその意図を正しく察して、しかし首を横に振った。そして短く、知らない、と口にする。教えない、ではなく知らない、だ。コウが嘘をついている様子もないので、今回の件については本当に知らないのだろう。

残念そうな表情を見せるリンディに、しかしコウは続けて言った。「でもまあ、これだけは分かる。今行っても無駄やで」

Side:Stern

シュテルは薄暗い部屋に監禁されていた。監禁といっても縄で縛られたりなど動きを封じることとはされていない。ただ単純に、この部屋に閉じ込められているだけだ。だが自力で脱出することはできないだろう。

この部屋には誰の魔法かは分からないが、初めて見る類いの魔法が

かけられている。この部屋を結界が囲んでいるのだが、その結界が通常のものとは違うのだ。結界は二層構造となっており、層の間には魔法を無力化する空間があるらしい。一度砲撃魔法を撃ってみたが、一層目は破壊できても二層目にたどり着くことができなかった。

せめて貫通できれば……。

そんなことを考えたが、シュテルはすぐに首を振った。自分の力で貫通できるものなら、相手はまずデバイスを置いていたりはしないだろう。デバイスを置いていったのは、シュテルの魔法ではどうすることもできないと理解させるためか。

シュテルは小さくため息をついて、その場に座り込んだ。無論諦めるつもりはない。現在の手札で脱出する術を考える。思考の海に沈もうとしたところで、シュテルは外からの足音に顔を上げた。部屋の扉が開かれ、人が入ってくる。見覚えのある顔に、シュテルはわずかに目を瞠った。そこにいたのは、以前シュウと共に翠屋を訪れた少女だ。確か、音奈といった名前だったか。なぜここに、と思っていると、音奈が薄く嗤う。

「こんにちは、シュテルさん。私のこと、覚えてる？」

音奈からの問いに、シュテルは静かに頷いた。忘れたくても忘れられない。

「以前、シュウと一緒に翠屋に来ていましたね。まさか魔法の関係者とは思いませんでした」

「ふふ。無事に隠し通せたみたいで良かったよ」

音奈は楽しげに微笑むと、ゆっくりとシュテルへと近づいてくる。シュテルがデバイスを向けると、音奈はすぐに立ち止まった。

「私を捕まえてどうするつもりですか？」

デバイスを下げてシュテルが聞く。その行動に音奈が少し驚きながらも、質問には答えてくれる。

「貴方には、紫天の書には用はないよ。私に必要なのは、ギフトだけ」

そう前置きして、音奈は教えてくれた。管理局の上層の人間がギフトを欲していること。願いを叶えてもらうためにはシュウに自

発的に叶えてもらわなければならない。それ故に、シュウの弱みとなり得るシュテルたちに目を付けた、言うなれば、捕らえられたシュテルはシュウを動かすための鍵のようなものだろう。

「だから大人しくしてね。大丈夫、悪いようにはしないから」
音奈はそう言って微笑むと、きびすを返した。そのまま部屋を後にする。シュテルはその背へと今一度デバイスを向けるが、

「……………」
一瞬シュウの悲しげな表情が頭をよぎり、力なくデバイスを下ろした。

Side: Hero

「二層の結界に、層の間は魔法の無効化、か」

ディアーチェのつぶやきに、コウが頷いた。

「そや。ただ完全な無効化やなくて、魔法を急速に消してしまう空間、やな」

それは厄介だな、とディアーチェは難しい表情をする。シュウも何となくだが理解することができ、魔導師が攻めたとしてもシュテルを助けることは難しく、一般人ではそもそも魔導師の相手にすらならない。

「ユーリの力ならどうだい」

レヴィが聞いて、しかしディアーチェは首を振った。

「確かにユーリなら、とは思いますが、逆に出力が大きすぎる。助けるべき相手も巻き込むだろう」

そっか、とレヴィが頂垂れる。そのレヴィへとさらに言っ。

「それ以前に、まず我々は敵がどこにいるのかも分からないのだが」

「あ……………」

シュウは彼女たちの話し合いを黙って聞いている。

現在、ブリッジのメンバーは二つに別れていた。一つは、シュテル救出のためのメンバーだ。そしてもう一つは、リンディとコウのグループ。コウの素性や相手の目的を知るために、コウへと質問が続けられていた。

「つまり黒幕は管理局の上層部の人間、と？」

「そう。俺らはその人が雇っている人間に、さらに雇われている人間、やな。だから俺や音奈をいくら尋問してもその人にはたどり着かれへん」

そんなコウを見ながら、シュウは器用だなと思う。コウはリンディからの質問に答えつつ、ディアーチェたちの質問にもしっかりと答えていた。両方の話を聞いているということだろう。シュウはディアーチェたちの方へと意識を向けながら、コウの話も軽く聞くように努めるのが精一杯だ。ただ、どちらの話にもシュウが加わることができないので、双方を理解するだけなら何とかかなりそうではある。

コウ曰く。黒幕が雇っている科学者が、シュウの両親がギフトドについて調べていることを知り、その身辺を調べてシュウに目星をつけたそう。そしてシュウの転校先に先回りしてコウを送り込んだ。そして何らかの魔法による黒い玉を預かり、ずっとシュウを監視していたらしい。シュウに生きる目的ができ、弱みが出てくるまで。

「……じゃあどうして報告しなかったの？ 僕がシュテルと知り合ったのって、一年近くも前だけど」

コウがそこまで話したところで、シュウが声をかけた。コウはシュウと視線を合わせると、気まずそうに目を逸らす。

「情が移った、は変かもしれんけど……。俺はシュウを友達やと思ってる。友達を売ることなんてでけへん。せやから、俺一人が胸の内です黙っておけばいいと思ってたんや」

それすらあちらさんはお見通しやったみたいやけど、とコウが苦笑する。シュウは、そっか、と淡く微笑んだ。

「僕もコウのことは大切な友達だと思ってるよ。今までも、もちろんこれからも」

「……はは。ありがとな」

コウが顔を伏せ、シュウはコウから視線を逸らした。あまり見られてほしくないだろう、と思っただためだ。見てしまえば、シュウも反応に困ってしまうからだ。……涙など。

コウが落ち着いたところで質問が再開される。コウの身元に関し

てだった。聞くところによると、コウは孤児で、雇い主である科学者に拾われたそうだ。そこで様々なことを仕込まれていたらしい。そんなこともしてるんだ、と思わず漏らすと、もちろん禁止事項に決まっているだろう、とクロノがため息をついていた。

「俺と同じ人に拾われてるなら、音奈も似たり寄ったりの境遇やろうな。俺は音奈を見たことがなかったけど。いや、俺が覚えてないだけかな」

俺が話せるところはこの程度、とコウが言い終わる。シユウはそこで意識をディアーチェたちに戻した。こちらの問題点は単純だが、難しい。

二層の結界をどうするか。救出そのものの方法は。それ以前に場所は。と、なかなか多い。

「場所に関してはいざれ分かるだろうな」

そうディアーチェが漏らすと、どういこと？ とはやてが首を傾げる。

「目的がシユウの力であり、弱みを握ることなら、いざれ向こうから連絡を入れてくるだろう、だが、それを待っていては手遅れになるやもしれん」

「一度駆体を放棄するというのは？」

「あれは我らの負担も大きい。それに脱出そのものはできんだろう」

どうして？ とシユウが首を傾げると、ディアーチェがコウへと指を指す。コウがわずかに驚いて身をすくませる。

「「じゃつ」の話を信じるなら、結界の層の間では魔法が、魔力が消えてしまつらしい。駆体を放棄して脱出しようとしても、消滅の危険性がある」

「じゃあやっぱり、私たちが助けないといけないんだね」

なのはの言葉に、ディアーチェは重々しく頷いた。しかし方法が、と話が戻ってしまう。

シユウはしばらくそれを聞いていたが、どうやら解決方法は簡単には出ないらしい。躊躇いを覚えたが、今回ぐらいは助けてもらおうと再び心の中で念じた。

『あたしに何を期待してるんだい？ 今回は助けられないよ』

すぐに返答があった。自分の中から聞こえる声に苦笑して、シュウは言う。

そんなこと言わずに。協力してください。

『今回解決して、次はどうするんだい？ 黒幕を捕まえることはできないんだろう？ 捕まえられたとしても、あんたがいる限りあの娘たちは確実に巻き込まれるよ』

巻き込まれる、と聞いてシュウは胸が苦しくなった。

今回のことは、全て自分が原因だ。シュテルは自分と親しくしていたからこそ巻き込まれた。自分が一人で生き続けていれば、こんなことにはならなかったはずだ。そこまで考えて、シュウは首を振った。

選択の時は過去のことだ。今は今の最善を尽くす。

『いい心がけだ。でも繰り返されるって言うてるんだよ』

心の中の声が苛立ちを隠さずに、静かに告げる。だからこそシュウは、言った。自分の計画を。

『……本気がいい？』

最終手段、だけど。

『まったく……。仕方のない子だね』

楽しげに笑う心の中の声。どうやら納得してもらえたらしい。シュウは小さく、「ごめん」とだけ告げた。

『何を謝っているのやら。じゃあ早速済ませてしまおうかね。始めようか』

声は楽しくてたまらないといった様子だ。シュウも思わず笑みをこぼし、始めよう、とつぶやいた。

『シュウ……？』

目を開けたシュウを、レヴィが戸惑いながら呼ぶ。シュウはレヴィを見ると、どろついたの？ と首を傾げた。よく見ると、レヴィの周りにはいる皆が驚きからか目を丸くしている。

『それは……なに？』

フェイトの声だ。何のことかと首を傾げて、自分の体を見て、すぐに得心がいった。

淡い光がシュウを包み込んでいた。そして同時に流れ込んでくる膨大な知識。管理局が有する技術力すら超えた、滅びた世界の知識だ。シュウはそれに思考を傾けながら、悲しげに目を伏せた。

最初の願い。それは、デバイスの知識、そしてカートリッジの知識が欲しいというものだ。シュウが望んだものが、望んだ以上のものが流れ込んでくる。情報量を考えると一度に覚えられるはずのないものだが、不思議と最初から知っていたような、そんな感覚を覚える。

本来なら……自分の力で覚えたかったことなんだけど……。

今はもう、そんなことは言っていられない。自分の欲などどうでもいい。シュテルを助けることが最優先だ。

やがて光が収まり、知識の吸収も終わった。あまりに膨大な知識にシュウは思わずため息をこぼす。これが終わったら、可能な限り忘れてしまおうべきものだろう。

「シュウ、大丈夫か？」

「説明してほしいところやけど……。無理したらあかんぞ？」

ディアーチェとはやての言葉に、シュウは笑顔で頷いた。

さあ、始めよう。

「ユーリ。ちょっといいかな」

シュウが呼ぶと、ユーリが困惑しながらも頷いて自分の方にやってくる。ありがとつ、と礼を言っつて、次はディアーチェとレヴィも呼んだ。やはり二人とも困惑しながらも来てくれる。それだけ信頼してくれているのだろう。今はそれが、純粹に嬉しい。

「シュウ。何をするんですか？」

ユーリがかわいらしく小首を傾げる。シュウはそんなユーリへと不敵な笑みを浮かべた。

「シュテルを助ける。そのための道具を作る。手伝っつて」

それを聞いた三人が、その場にいた全員が、ぽかんと口を開けていた。

Side:Humika

貸し与えられた一室で、シュウは作業を進めていた。手伝うのはレ

ヴィにディアーチエ、ユーリだ。文花はそれを、部屋の隅で見守っていた。リンディとクロノ、なのは、フェイト、はやても静かに見守っている。全員が驚愕に目を見開いていた。

シュウは迷いなく手を動かし、一つのカートリッジを作っている。そのカートリッジはリンディやクロノですら知らない技術で作っているようで、曰く現在のカートリッジよりも膨大な魔力を込めることができるらしい。そんなことを聞いたが、その方面に明るくない文花にはよく分からなかった。

カートリッジに込められるのは手伝っている三人の魔力だ。ゆっくりと、かつ膨大な量の魔力を込めていつている。

「すごい魔力ね……。一体何発分のカートリッジになるのかしら」

「想像もできませんね……」

リンディとクロノがつぶやく。それほどなのか、と文花は感心するばかりだ。

やがて作業が終わったのか、シュウたち四人が動きを止めた。そしてシュウが、作り終えたカートリッジをつまみ、手のひらに載せる。文花たちの視線に気がつく、シュウが無邪気な笑みを浮かべて自慢げにそれを見せてくれた。

赤い色の弾丸だった。シンプルな弾丸で、文字などは刻まれていない。先ほどまで見ていたものが間違いないのなら、この小さな弾丸にあの三人の魔力が込められているということだろう。あまりに強力で、あまりに危険なカートリッジだ。

「それをどうで使うの？」

なのはが聞いて、シュウは悪戯っぽく笑う。そして、弾丸を自身のポケットに入れた。それを見て怪訝な表情を見せる面々にシュウは告げる。

「ちょっとシュテルに会ってくるよ」

とびきりの笑顔で、まるで遊びに行くかのような気楽なものだった。

第五話

それじゃあお願い。

『ああ』

皆が呆然としている前で、シュウが静かに目を閉じる。そして、何の前触れもなく、忽然とシュウの姿が消失した。

Side: Stern

油断をしていたわけではない。ただ、まさかこんな大規模なことをされるとは思っていたはいなかった。

今回受けた仕事は、ある無人世界の調査だ。そこには誰も住んでおらず、動物すらほとんどいないとされている世界。それなのに、最近になって魔力が検出されるようになったそうだ。そのためシュテルを含む魔導師数名で調査をすることになった。

五人一組で調査を進めた結果は、特に異常なし。検出された魔力というものが何なのかも分からなかったが、一先ず報告に戻ろう、という頃になって、それは突然起こった。

唐突に、一人が撃墜された。体を打ち抜かれ、墜ちていく仲間。慌ててそれを別の誰かが助けようとして、その人間も撃たれた。どこから撃たれたかも分からない狙撃に、場が混乱してしまう。だがシュテルは冷静に弾の軌道を分析し、そちらへと杖を向けた。何も見えないが、何かしらのステルスの可能性を考慮して砲撃魔法を撃とうとしたところだ、

「お前がシュテルだな？」

背後からの声。ゆっくりと浮かび上がる大勢の魔導師。その全員が、シュテルへと杖を向けていた。

「共に来てもらおう」

抵抗しても無駄だと悟り、シュテルはため息をついて手を上げた。

捕まった時のことを思い出し、シュテルは考える。やはりあれは待ち伏せされていたと見るべきだろう。自分があの世界に行くことを知っていた誰かによって。

違いますね。

そもそもこの依頼が仕込まれていたのかもしれない。この依頼は全てのメンバーが名指しで指名されていたらしい。ならば、この依頼を出すことのできる人物、ということか。そこまで考えたところで、シュテルは小さく首を振った。今考えるべきことはそれではない、と。

シュテルは正面の壁を見る。小さくない穴があいた壁。シュテルの砲撃魔法によるものだ。物は試しとカートリッジを一つ消費して砲撃魔法を撃つたのだが、壁に穴を空けることはできても結果は一切破壊できなかった。結果が損傷した形跡もないので、今のシュテルの魔法では脱出は難しいだろう。

やはり犯人グループとの交渉か、とも思うが、音奈が訪れたきりここには誰も来ていない。交渉をする機会すら与えられなかった。あちらもシュテルの意図など把握しているのだろう。独力での脱出は難しいと見るべきだ。

シュテルは肩を落とすと、その場に座り込んだ。今頃王たちはどうしているだろうかと考える。自分の現状はすでに把握されているはずだ。助けようとしてくれているだろうか。

家族の顔を思い浮かべようとして、真っ先に思い浮かんだのはシュウの笑顔だった。そのことに内心で驚き、思わず苦笑してしまう。その記憶に寄り添い、シュテルは小さく声を漏らす。

「シュウ……」

会いたい。帰りたい。そう強く思う。だが、自分ではどうすることもできない。彼に心配をかけるわけにはいかないと思って、今となってはどうしようもない。

「シュウ……」

もう一度、名前を呼ぶ。大切な名前を、呼びかけるように。助けを求めるかのよう。だが返事があることなど当然期待していない。

だから。

「呼んだ？」

頭上からその声が降ってきた時は、自分の正気を真っ先に疑ってしまった。

Side: Hero

転移した場所は狭い部屋だった。コンクリートのようなもので四方を固められた部屋で、何もない殺風景な部屋だ。テーブルもなければいすもない。家具の一つもない部屋。目につくのは、背後の扉と壁に空いた穴ぐらいか。

だからこそ、視線を少し巡らせばすぐに探している少女を見つけることができた。床にうずくまり、うつむいてしまっている少女。初めて見る弱々しい姿に、シユウは心の底から驚いた。すぐにシユテルへと駆け寄り、

「シユウ……」

シユテルの声。自分を呼ぶ、弱々しい声。シユウはシユテルの前で立ち止まると、柔らかく微笑んだ。

「呼んだ？」

その声をかけた瞬間、シユテルが勢いよく顔を上げる。シユウを見て、ただただ啞然としていた。

「シユテル。無事で良かった」

そう言って、身をかがめる。未だに呆然としているシユテルを、そっと抱きしめた。

「会いたかったよ、シユテル」

「……シユウ……」

シユテルのか細い声。シユテルの手が、シユウの背に回される。シユテルの体温をしっかりと感じている間に、シユテルが言った。

「シユウ。どうしてここに？」

「え、立ち直り早いよ。もうちょっとこう、感動の再会、とか」

引きつった笑みを浮かべるシユウに、シユテルは首を傾げた。何を言っているのか、と。

「貴方に会えて嬉しくは思いますが、まずは脱出しなければ」

「……はい、正論です。その通りです」

もっと熱い抱擁とか、そんなものを期待していたシュウは一人で肩を落とす。心の中で誰かが無遠慮に爆笑している気配が伝わってくるが、それは無視してもいいだろう。

「シュウはどつちやってどこに来たのですか？」

そのシュテルの問いに、シュウは今までの経緯を簡単に説明した。「ウウのこと、音奈のこと、そしてギフトッドに願ったことなど。シュテルは黙って全てを聞き終え、なるほどと頷いた。

「貴方が願ったことは、つまり……」

「うん。シュテルのところに行きたい。ただそれだけ」

「そんな単純な願いで、結界すら無視してここに来れたわけですか……」

自分でも本当にこんな側まで転移できるとは思っていなかったの
で、内心ではかなり驚いている。危険視されるのも無理からぬ話だ、
と。

「脱出もお願いできるのでしょっか？」

シュテルが聞いて、シュウは悲しげに首を振った。

「ごめん。さすがにもう無理だって。転移の魔力なんて残ってないら
しい」

「そう、ですか」

シュテルは肩を落とす。そんなシュテルを見て、シュウはシュテル
の手を取った。シュテルの手に、持参したカートリッジを渡す。シュ
テルが握らされた赤い弾丸を見て、怪訝そうに眉をひそめた。

「これは……？」

「うん。ディアーチェとレヴィ、それにユーリの魔力をありったけ詰
め込んだカートリッジ。ギフトッド特製カートリッジだ！」

胸を張って自信満々に言う。これを一番見てもらいたかったのは、
実はシュテルだ。嬉しそうに言ったシュウに、シュテルはしかし戸惑
いを見せた。

「普通のカートリッジ、ではありませんね。どつちやってこれを？」

「うん。デバイスとカートリッジの知識をもらって、それで作ったんだよ」

結構難しかった、とシュウが頬をかきながら言う。シュテルは受け取った弾丸をしばらく見つめ、赤いですね、と短い感想を漏らす。シュウは目を逸らし、

「色はなんでもよかったんだけど……。せつかくだから、シュテルのイメージで作ってみた」

「……そうですか」

それきりお互いに黙り込む。妙な沈黙で、シュウは気恥ずかしさすら覚えていた。しばらくそんな空気を味わったところで、耐えかねたシュウが口を開く。

「そ、それじゃあ！ それなら多分この結界も破壊できると思うから……！」

「そうですね。試してみましよう」

シュテルの声はいつも通りだったが、どこか安堵のようなものを感じた。シュテルがルシフェリオンへ赤い弾丸を装填、ロードし、同時に魔法も展開する。

「……っ！」

シュテルが大きく目を見開いた。その反応に不安を覚えるシュウだが、シュテルに腕を掴まれ引つ張り寄せられる。戸惑うシュウへと、短く一言。

「側にいてください。おそろくですが、かなり危険なことになると思っています」

「了解……」

照れも何もなく真顔で言われると、さすがにシュウも本当に危ないのかと察しがついた。シュテルの背後に回り、その体を支えるように寄り添う。

「集え明星。全てを焼き消す焰となれ……」

目の前で魔法陣が展開される。赤色だった魔法陣は、すぐに様々な色が混ざり始めた。魔法陣の前に巨大な光の球が形成され、それも赤や青、紫、黒など変色を続けている。感嘆のため息をつきながらそれ

を見ていたが、ふとシュテルを見ると、真剣な表情で汗を一筋垂らしていた。

「シュテル。大丈夫？」

シュテルが無言で頷く。シュウは少し考え、シュテルを支えるためにシュテルと一緒に杖を掴んだ。驚くシュテルに、短く告げる。

「一緒にいるから。少しだけでも、手伝っから」

シュテルが目を細め、ありがとうございませす、と口を動かした。

その時だった。部屋の扉が勢いよく開き、少女が駆け込んでくる。シュウの知っている顔だ。

「一体何を……！ 西崎君、あなたいつの間……」

音奈がシュウに気づき、驚愕に目を見開く。シュウはそんな音奈に、悪戯っぽく笑いかけた。

「今さっき。あと音奈さん、これだけ言っておくよ」「」

「なに……」

「ぞまあみる」

その言葉の直後、音奈の叫び声やシュテルの苦笑をかき消して、閃光が爆発した。

「これはまた……派手にやったわね……」

眼前に広がるのは瓦礫の山。アースラ所属の魔導師たちが瓦礫の山の下敷きになっている人を救助、拘束していく。シュウとシュテルはその様子を、瓦礫の真ん中で眺めていた。いつの間にかリンディが側まで来ていて、先の一言はリンディのものだ。

「貴方たちは、無事？」

リンディが心配そうに聞いてくれる。シュウは頷いて言う。

「死にかけました」

「でしようね……」

苦笑して、リンディが手を振り始めた。何事かとリンディの見る方向を見やれば、ディアーチェたちがこちらへと走ってきていた。

「無事か！ シュテル！ シュウ！」

ディアーチェの第一声がそれだった。シュウとシュテルは顔を見

合わせ、二人で笑う。怪訝な表情をするディアーチエに、シュテルが言った。

「無事ですよ、ディアーチエ。ご心配をおかけしました」

「そ、そうか……。いや、心配などしれおらんがな。うむ、無事ならば、いい」

わずかに顔を赤くしながらディアーチエがそっぽを向く。素直やないなあ、と後ろのはやてがからかい始め、ディアーチエがはやてへと怒鳴り始める。

すぐにレヴィやユーリたちも来て、シュテルとの再会を喜び始めた。

そして、

「……………」

全員が一斉に反応し、防護魔法を展開する。結果として何重にもかけられたプロテクションによって、突如飛来した黒い槍は弾かれた。全員が同じ方向へ杖を構え、相手を見据える。そこにいたのは、音奈だった。自身の周囲に黒い球体をいくつも従え、シュウを静かに睨み付けている。

シュウも見覚えがある黒い球。シュウの部屋にあった黒い球は、どうやら音奈の魔法だったらしい。

「諦めないよ……。絶対に、諦めない……………」

音奈の言葉。全員が音奈の言動を警戒している中、シュウはただ一人眉をひそめていた。何をこんなに焦っているのだろう。ここで向かってくるよりも一度逃げた方がいいのでは、と。

「音奈」

音奈のさらに向こうからの声。コウがのんびりとした足取りで歩いてくる。音奈はコウの姿を認めると幽霊でも見たかのような表情をしたが、すぐに何かを理解したのかまたシュウを睨み付けてきた。

そんな音奈の様子にコウは笑う。やっぱりか、と。

「音奈、お前、報告したな？ あのマッドに」

「……………」

「……あのマッドのことだから、条件が揃っているならさっさと奪

え、今すぐだ、とかそんな無茶なことを言ったんやろうな」

音奈が顔を伏せ、小さく頷いた。それを見てコウがやれやれと首を振る。未だに状況が飲み込めない一同へと、コウが口を開いた。

「俺らの雇い主はちょっとあれな人でな。有能な人間以外はいらんって考える人や。失敗した人間を面倒見るなんて、あいつはせえへん」
俺も殺されかけたやろ？ とコウが笑い、シュウは反応に困って曖昧に頷いただけだった。

「だからまあ、失敗は許されへん。だから音奈は、今ここでギフトを手に入れる必要がある。自分の命のためにも、な」

そっか、とシュウは納得する。どうにも計画がその場の勢いであったよな気がしたが、事実主犯である音奈が焦っていたらしい。さすがにかわいそうだと思ってしまうが、

「シュウ。気にする必要はない。あちらの事情であって、君が身を投げ出す必要はないぞ」

そう言ったのはクロノだ。音奈へと向き直り、言う。

「捜査に強力してくれるなら、君たちの身の安全は保証しよう。さすがに無罪放免とはいかないが、善処はする。だから……」

「無駄やな」

「無駄ね」

クロノの言葉を遮って、コウと音奈が同時に言った。クロノが顔をしかめるが、二人ともそんなことは一切気にしていないようだ。

「言ったやろ？ 俺らの雇い主の雇い主は管理局の上層部やて」

「理由をつけられて引き渡されるのが目に見えるね」

音奈が言つと、そうやでな、とコウが笑う。音奈もつつすらと微笑を浮かべた。ただそれは、全てを諦めた者の表情だ。

「まあ、もう……。負けたことは分かっている。投降します」

音奈が黒い球体を消して手を上げる。クロノが、念のためだと言ってバインドをかけようとして、

「だめだ」

シュウの一言がそれを止めた。訝しげに眉をひそめ、クロノがシュウを見る。シュウは静かにコウと音奈を見据えていた。二人が困惑

の色を見せる。

「やっぱり僕の……。ギフテッドのせい、なんだよね」

シュウの一言にコウと音奈が言葉を詰まらせる。目を逸らしはするが、否定はしてこない。シュウは、そっだよねと一人で何度も頷いていた。

「シュウっ」

シュテルの気遣うような声に、シュウは言った。

「やっぱり、ギフテッドは消える必要がある。だから、やっぱり消しちゃおう」

その一言に、その場にいる全員が息を呑んだ。

付近一帯から人の気配がなくなる。無人世界に残されたのは、シュウとシュテル、レヴィ、ディアーチェ、ユーリのみだ。他の人にはこれからすることを伝え、アースラへと一時的に戻ってもらっている。もしこの世界を超えて被害が出るようなら、それを処理してもらわなければならない。

シュテルたちはシュウを囲むようにして立っている。それぞれがデバイスを持ち、臨戦態勢となっていた。ただ、相手は人ではないのだが。

「シュウ。本当にやるのですね？」

シュテルが聞いて、シュウが頷く。

「うん。もちろん」

「分かりました。貴方の意思に従いましょう」

「ありがとう」

礼を言つと、シュテルが小さく手を振ってくる。周囲を見ると、他の三人も手を振っていた。いい出会いに恵まれたことに感謝しつつ、シュウは目を閉じる。始めるよ、と四人に告げて、心の中で念じる。

じゃあ、お願いします。

『はいはい。任せておきな。あんたらもそっちはがんばりなよ』

声が面倒くさそうに言った直後、シュウが、ギフテッドが魔力の吸収を始める。最後の願いを叶えるために。必要な魔力はあまりにも

多く、そしてやはりこの世界へと魔力の塊が飛来し始めた。

それを見たシュテルたちが行動を開始、飛来してくるものが魔力を帯びただけのただの物体ならシュウへの軌道から少し逸らし、ロストロギアなら魔力の吸収が済んだところで即座に封印する。これを繰り返すだけだ。ただし、いつ終わるのかが分からないが。シュウはその間何もできず、四人の奮闘を見守ることしかできない。

シュウが願ったことは、単純なものだ。

『全ての世界からギフトッドに関する記録の抹消』

『全ての世界の人々から、ギフトッドに関する記憶の抹消。ただし親しい人は除く』

『コウと音奈の経歴の抹消。地球での生まれとする』

この三つだ。三つ目はともかく、前者二つが世界規模であるため要する魔力も膨大になる。故に必要な魔力の吸収のためにこうした方法を取っている。

シュウは四人の行動をぼんやりと眺めながら、心の中で言う。

色々が無茶を言っでごめんなさい。本当にありがと。

それを聞くと、声は呆れたようなため息をついた。なら初めから頼むな、と。

『まあ、気にする必要はないさ。でも今回は最初で最後だからね』

うん。分かってる。

『あたしも、この願いを見届けたらちょっとばかり眠るよ』

だから起こすなよ、と言われ、シュウは苦笑しながら頷いた。約束する、と答えると、声は満足そうに頷いたようだった。気配でしか分からないが。

さらに時間が流れる。時計がないので時間の感覚はないが、かなりの時間が経過したはずだ。時折、シュテルたちはなのはたちと交代して休憩しつつ、シュウの護衛を続けてくれている。シュテルたちの何回目かの休憩が終わったところで、声が届いた。

『いんなもんで十分だ』

その言葉を最後に、突然周囲が静かになった。見ると、もうこの近辺に飛来するものがなくなっているようだ。シュテルたちが戸惑い

を見せながらこちらへと振り返っている。

『じゃあ、始めるよ。いいねっ。』

うん。お願いします。

『はいよ』

シュウの体から、魔力のようなものがふわりと広がり始めた。不可視のものなので感じることもしかできないが、それは一気にこの世界を覆い、そして別の世界へと広がっていく。これが終わる頃には、シュウの願いは叶えられているのだろう。

まだ、起きてる？

シュウが問いかけると、声が返答する。ただ、どこか眠たげな声だ。

『ああ、起きてるよ……』

シュテルから聞いたんだけど、精神世界、みたいなものがあるんだよね。デバイスのこと、直接教わりたかったよ。……母さん。

声が息を呑む気配が伝わってきた。しばらく沈黙が流れ、やがて声が忍び笑いを漏らす。眠たげで楽しげな、そんな笑い声だ。

『あんたにはもう十分教えたさ。やり方は不本意極まりないが、まあ仕方ない。あとはがんばんなよ』

うん。ありがとう。

『気にするな。あと、あんたの今の両親を大切にしなね』

それを聞いたシュウが、善処するよ、と答える。だがもう、声は返ってこなかった。そのことに寂しさを覚えながらも、シュウは顔を上げる。

「シュウ。終わりましたか？」

いつの間にか目の前にいたシュテルに、シュウは頷いた。

「うん。終わったよ」

もうギフトッドを知る者は、シュウと親しい者を除いて誰もいない。知る術もない。それでいい、と思う。本来なら、もっと早くにこつするべきだったのだから。

「では、シュウ。手を」

シュテルに促され、シュウは手を差し出す。握られた手から魔力を受け取り、シュウは薄く微笑んだ。

「ありがとう。じゃあ、帰るっか」

「はい。そうですね」

シユウはシュテルたちと、破壊の爪痕が生々しく残る無人世界を後にした。

その日を境に、様々な世界のいくつかの書物から空白のページが生まれた。そのページに何が記載されていたのか思い出せる者はなく、知識として知っていた者も突然生まれ変わった記憶の空白に混乱してしまふ。だが、数日もすれば、なぜか自然とそれはそういったものだった、と認識され、忘れ去られていった。

Side: Past

パストはゆつたりと闇の中を漂っていた。心地よい微睡みの中、息子たちの様子を見守る。いつものように起床して、学校へ行き、そして帰ってシュテルたちとの夕食を楽しむ。そんな日々を、パストは穏やかな笑みを持って見守り続ける。

「さて、それじゃあ……眠るとしよう」

パストはつぶやき、深い眠りへと落ちていく。あの子の平穩のために、ギフトテッドの力を封じる楔となる。いつかまた、新たな願いが届けられるまで。願わくば、それまであの子たちが平和に、平穩に、ただただ静かに暮らせますように。

だからおやすみ、私のかわいいギフトテッド。

エピソード

桜が舞い散る季節。そこはちょっとしたお祭りだった。大きな桜の木の下に、これもまた大きなビニールシートを広げ、知り合いたちが騒いでいる。誰もが笑顔で、とても楽しそうだ。ここはシュウのマンションの側にある公園だ。皆で花見をすることになり、ここに集まっている。

「シュウ、どないしたん？」

声をかけてきたのは、コウだ。少し離れたところには音奈もいて、こちらの様子をつかがっていた。

「いや、楽しそうだなって。コウたちは今の生活には慣れた？」

「ああ。シュウのおかげでな」

現在、コウと音奈は西崎家の養子となっている。シュウの両親は二人を喜んで迎え入れていた。我が親ながら心が広すぎると思う。もう少し、自分に対してでもそれができなかつたのかと思うほどには。

そんなことを思っているシュウも、今は両親と少し歩み寄っている。パストの言葉があったためでもあるが、きっとパストは、今の両親と不仲のままなのを心配していたのだと思う。

「お兄ちゃん、何してるの？」

「コウの奥、文花が怪訝そうに眉をひそめる。そんな文花に、音奈が言う。」

「邪魔しちゃだめだよ」

「何が……。あ、はい。分かりました」

音奈の言葉に首を傾げた文花だったが、シュウの背後を見て得心したように頷いた。コウもすぐに、じゃあまたな、ときびすを返してしまふ。シュウ一人わけが分からないはまだ。

文花は現在、シュテルと、さらになのはからも魔法を教わっている。管理局に入局するつもりはないらしいが、囑託魔導師としてなら悪くないかも、とのことだった。文花にとって自由に動き回れるのは魔法を使っている時だけなので、魔法を使えるようなどころで働きたいの

だろう。シユウは文花の足を見て、静かに顔を伏せた。

「シユウ。ここにいましたか」

背後からの声。振り返ると、シユテルがそこにいた。

「こちらにも準備が整いましたよ」

そう言っただけで歩き始めるシユテルに従い、シユウも歩く。そしてたどり着くのは、小さな桜の木の下だ。小さなビニールシートが敷かれ、そこにはディアーチェとレヴィ、ユーリがいた。

「遅いよ、シユウー」

「ごめんごめん、と笑いながらシユウはシートに上がった。いつもの夕食と同じような順番で座る。五人の中央には、様々な弁当箱が並んでいた。

「今回は上手に焼けました！」

そう言っただけでユーリが弁当箱を差し出してくる。その中には、こんがりとした美味しそうに焼けているハンバーグがあった。たっぷりとケチャップもかけられている。シユウはそれを一切れもらい、口に入れた。

「うん。すごく美味しい。がんばったね、ユーリ」

「はい……がんばりました！」

褒められて嬉しそうにユーリ。その笑顔を見ると、こちらにも幸福感に包まれる。

次はボクだ、とレヴィが差し出してくるのはカレーだ。弁当箱に、と思いつながら一口耐え、シユウは目を丸くした。

「冷めても美味しいものだね……」

「でしょ！ もっと食べてもっと食べて！」

興奮してスプーンを突き出すレヴィを苦笑しつつ宥める。いつものことながら、やはりレヴィは今日も元気だ。

「さて、私の番だ」

そんなレヴィを無視してディアーチェが言う。そして差し出された弁当箱には、オムライス。まだ温かく、どうやら先ほど作ってきたところらしい。冷めぬうちに食せ、と促され、シユウはオムライスにスプーンを入れる。半熟卵がとろりとご飯にかかって、とても美味し

そつだ。

「うん……。すごく美味しい。いや本当に。さすがディアーチェ」

「まあ、これぐらいは当然だ」

そつ言いながらも、ディアーチェは顔を赤くしてそつぽを向いた。どこか胸をなで下ろしているようにも見える。

「では最後に私ですね」

シュテルが差し出してきたのは、ホールのショートケーキだ。それを五等分に切り分け、全員に配る。レヴィとユーリが歓声を上げ、その反応にディアーチェが呆れてしまっている。

どうぞ、とシュテルに促され、シュウは一口食べてみる。桃子に習っているだけあり翠屋に近い味となっているが、シュテル独自の工夫もあるのかしつかりと区別のできる味だ。

「うん……。全く問題ないね。さすがシュテル。ところでおかわりは？」

「いや待てシュウ。さすがにないだろう」

「「こちらに」」

「あるのかー！」

ディアーチェがシュウへと苦言を呈し、シュテルが平然と二ホール目を取り出してディアーチェが今度は驚く。その様子がおかしくて、シュウも柔らかに笑っていた。

「じゃあ、僕だ」

シュウがシュテル、ディアーチェ、レヴィにあるものを渡す。それは、預かっていたデバイスだ。三人はそれを簡単に調べ、満足そうに頷いた。

「これ以上ないほどに素晴らしい仕上げです。問題ありませんね」

シュテルの言葉に、シュウは静かに頷いた。

シュウは願いによって与えられた知識のうち、管理局の技術を超えない程度を使っている。明らかにオーバーテクノロジーの知識は可能な限り忘れるようにしていた。無論完全に忘れることなどできず、たまにそれを見たりインディとクロノに注意されている。

「では、計画に関しては技術面では大丈夫だな」

ディアーチエの言葉に、その場にいる全員が頷いた。シュテルが引き継いで続ける。

「ではあとは、シュウの卒業を待つだけです」

「あはは……。がんばるよ」

飛び級のような制度はないのでしっかりと勉強を続けるしかないが、どうせなら後味よく卒業したい。その気持ちを込めて言うと、四人はがんばれ、と応援してくれた。

「ではあちら側に戻りますか」

シュテルが大きいシートの方を見る。相変わらずの騒ぎ方だ。

「あ、その前に」

立ち上がるうとした四人をシュウが引き留め、四人が首を傾げる。シュウは小さな箱を取り出すと、それをシートの中央に置いた。箱を開け、中身を取り出す。ペンダントが四つだ。

「これ、お守り代わりに」

それらのペンダントを四人に渡す。ディアーチエには月、レヴィには雷、ユーリには太陽、そしてシュテルには星がそれぞれ象られた宝石が装飾されている。四人はそれに少し驚き、そして互いに顔を見合わせた。

「これはっ」

代表してシュテルが聞いてくる。シュウは照れくさそうにしながらも答えた。

「まあ、プレゼント、みたいなものだよ。半年以上前に両親に頼んで、作ってもらったんだ」

本当はもっと早く渡すつもりだったが、出来上がったのがつい先日だった。だが、この場で渡せて良かったとも思える。

「ありがとうございます、シュウ。大切にしますね」

シュテルの柔らかい微笑みを見て、渡して良かったと心から思えた。

そして五人は大きな桜の木へ向かう。シュウたちに気づいたなのはたちが、大きく手を振ってくれていた。その温かい輪の中へと、

シユウたちは遠慮がちに入っていた。

そして月日は流れ。

ミッドチルダの郊外に、知る人ぞ知る喫茶店がある。その喫茶店は表通りに面しておらず、入り組んだ道を通らなければたどり着けないので立地条件はとても悪い。だがそれでも、その喫茶店の味を求めてやってくる人は多い。

その喫茶店の建物は周囲と違い、地球という世界の建物を模して造られている。落ち着いた外観で、客からの評判も上々とのことだ。そしてその喫茶店の前には立て看板があり、他の喫茶店ではあり得ない張り紙がされていた。

『魔法のお仕事、請け負います。お気軽に店員までお声かけください』
『デバイスの修理及びメンテナンスを請け負います。ご用の肩は店主まで』

その二枚の張り紙の下には、それぞれの予定も書き込まれている。喫茶店の中に入ると、最初に出迎えてくれるのは二人の少女だ。

「いらっしゃいませー！」

「い、いらっしゃいませー！」

明るく元気な青い髪の少女と、少し恥ずかしそうにしながらもがんばっていることがよく分かる金髪の少女。二人に案内されて席に着くと、そこからは厨房を見ることもできた。中で調理をしているのは、銀髪の少女だ。手際よく料理を作っている。本来ならもう一人いるのだが、どうやら今は厨房を離れているようだ。

店の奥、隅の席を見ると、黒髪の少年がなにやら雑多な道具を広げて座っていた。初めてここに来る人は、この少年が店主だとは思えないだろう。そしてその少年の隣には、もう一人の料理人、茶髪の少女。休憩中なのか、少年の隣で静かにコーヒーを飲んでいた。

「レヴィ、次の注文はー！」

厨房から声が響く。レヴィと呼ばれた青い髪の少女が答える。

「えっと……。なんだっけ、コーヒー」

「注文待ち、です。ディアーチェ、少しゆっくりしておいてください」

ユーリと呼ばれた金髪の少女が言って、ディアーチエと呼ばれた銀髪の少女が、そうかと声を返していた。

「よし、できたー」

店の奥から少年の明るい声。デバイスだろうものを持ち、とても嬉しそうにしている。

「お疲れ様です、シュウ」

「うん。ありがとう、シュテル」

シュウと呼ばれた少年が、シュテルと呼ばれた茶髪の少女からコーヒーを受け取って飲む。少女が使っていたカップなのだが何も気にしていない二人を見ると、こちらが恥ずかしくなってしまいそうだ。

少年少女五人だけで経営される小さな喫茶店。訪れた人は皆口をそろえる。味も良く、雰囲気も良く、居心地の良い店だ、と。

その店の名称は、表の立て看板に控えめながらもしっかりと書かれている。

喫茶店翠屋ミッドチルダ支店『ギフトッド』

邂逅（前編）

「スバル、現在位置は？」

「……ごめん……」

「……はあ……」

表の通りから外れた入り組んだ道。二人の少女がそこで呆然と立ち尽くしていた。一人はスバル・ナカジマ。時空管理局機動六課に所属している魔導師だ。もう一人はティアナ・ランスター。こちらもスバルと同じく、時空管理局機動六課所属の魔導師である。

二人は休日を利用してドライブに出かけていたのだが、スバルが郊外の裏路地に興味を示し、たまにはいいかとティアナもそれに付き合った。二人で少し歩いて分かったことは、あまりにも複雑な地形でたやすく迷える構造になっていたということだ。

早い話が、迷子である。

「どうしようティアナ……」

「落ち着きなさい。とりあえずは来た道を戻れば……」

「……どこから来たっけ？」

スバルがぼつりとつぶやいて、ティアナが絶句した。周囲を見回してみる。今自分たちがいる場所は狭い十字路だ。どこから来たかなどすぐに分かる。

と、思っていたのだが。

「……どうしてどこを見ても同じ景色なのよ……」

小さな違いは確かにあれど、周囲の建物はほとんど同じ構造だ。少し見ただけでは、どの道がどこに繋がっているのか皆目見当もつかない。来た道を戻る、という選択肢も早々に潰されてしまった。

打つ手がなくなり、茫然自失とする二人。そんな二人へと、掛けられる声があった。

「どうかしましたか？」

平坦ながらも女性の声だ。二人は嬉しそうに声の主を見て、次の瞬間にぽかんと口を開けてしまった。二人に見つめられた声の主は、怪

訝そつに眉をひそめている。

「なのはさん？ どうして「ナノ」……。あれ、でも髪型が……」

「え？ あれ？ どうして？」

二人が混乱していると、自分たちの隊長によく似た目の前の女性は、二人の言葉で何事かを察したのか、なるほどと小さく頷いた。二人へと会釈をしてくる。

「初めまして、と申しておきましょう。私はシュテルです。ナノ八とは知り合いではありませんが、別人ですよ」

その言葉に二人は驚くとともに納得もする。世の中にはよく似た顔の人が三人いるとどこかの世界で聞いたこともある。こういったこともあるのだろう、と。少し無理矢理だが、実際に目の前にいるのだから仕方がない。

「それで、どうしましたか？」

シュテルと名乗った女性に簡単な経緯を説明する。するとシュテルはわずかに呆れたようなため息をつき、

「事情は理解しました。表の通りまででよろしければ、ご案内しましょう」

そう言つて、シュテルはきびすを返して歩き始めた。スバルとティアナは顔を見合わせたが、すぐにその背中を追った。

そして気づけば、二人は表の通りまで戻ってきていた。安堵して胸をなで下ろす二人に、シュテルの声が届く。

「確かに送り届けましたよ。では、さうばです」

その声に慌てて二人が振り返ると、シュテルはもう裏路地の奥へと歩いて行くところだった。

「あの一… ありがとうございましたー」

スバルが慌ててお礼を言つて、ティアナがしっかりと頭を下げる。その言葉を受けて振り返つたシュテルは、いえ、と小さく首を振つた。「困った時はお互い様です。……ああ、あと。ナノ八によるしくお伝えください」

そう言つて、今度こそ振り返らずにシュテルは裏路地の闇の中へと姿を消した。

翌日。朝の訓練の前、朝食の席で、スバルとティアナは昨日のことを幼い同僚に聞かせていた。同じ席に座るその同僚は二人、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ。スバルたちと同じ、機動六課所属の魔導師である。

「そんなにそっくりだったんですか？」

エリオの言葉にスバルがすぐに頷いた。

「髪型とか雰囲気とかは違ったけど、本当によく似てた！　ね、ティアナ！」

「ええ。一見しただけじゃ分からないくらいに」

へえ、と反応したのはキャロだ。そんなこともあるんですね、と驚いた様子を見せている。

「別れ際になのはさんによるしくって言っていたから、知り合いみたいではあるんだけど……」

「私がどうかした？」

「いえ、ですから……。って、ええー！」

スバルが振り返ると、優しく微笑むのがそこにいた。すでに朝食を食べ終わっているのだろう、その手には何も持っていない。なのはの両隣には、フェイトとはやてもいる。

「お、おはようございますー！」

四人が慌てて立ち上がり、挨拶をする。おはよう、と自分たちの隊長は朗らかに返してくれた。

「話を盗み聞きするつもりはなかったんだけど……。二人はなのは隊長によく似た子と会ったんだね？」

そう聞くのはフェイトだ。緊張した面持ちで、はい、と頷く。

「そっか。シュテルは元気そうだった？」

「はい、道に迷っていたところを案内していただいて……。って、え？」

あまりに自然に、フェイトの口からシュテルの名前が出てきた。そのことにスバルたち四人が驚いている前で、隊長三人は楽しげに会話を進めていく。

「そっか。最近は忙しくて顔を出せてないから、そろそろまた行きたいね」

「うん。レヴィはどうしてるかな？」

「王様やユーリもちゃんと元気にしてるやるか」

シュテルの名前の他に、知らない名前や王様という仰々しいものまで出てきている。一体どんな人たちでどういった関係なのだろうと四人が困惑していると、なのはがそっか、と手を叩いた。とても楽しげな、どこか悪戯っぽく笑う珍しい笑顔だ。

「いい機会だから、みんなにも紹介しておこうかな。デバイスのことでも頼りになるし」

「あ、そっだね。それがいいかも」

「ええなあ。それじゃあ休みを調整するな。ちょっとここが空いてまうけど、シグナムたちに任せておけば大丈夫やる」

どんと話が進んでいる。急展開に話に割っては入れないが、どうやらシュテルという人を正式に紹介してくれることになったらしい。啞然としたままの四人へと、はやてが笑顔を向けた。

「四人とも、ちょっと悪いんやけど、この日は空けといてな」

そう言われて指定された日を四人が覚えたところで、じゃあそろそろ行くつか、というフェイトの言葉で話は半ば強制的に終わることになった。今ここで詳しく教えてくれるつもりはないらしい。いずれ分かることかと四人は一先ず諦め、先導する隊長たちのあとについて行った。

一週間後。隊長三人を交えた七人は、隊長たちの案内のもとスバルとティアナが道に迷った裏道にたどり着いていた。昼前だということに不気味なほど薄暗い通りへと、なのはたちは気にせず歩いて行ってしまう。スバルとティアナも、顔を引きつらせているエリオとキャロを促して、裏道へと入っていった。

何度も曲がり、方向感覚がすっかり分からなくなり、それでもまだまだ歩き……。やがてたどり着いたのは、周囲の建物とは違った雰囲気を持つ建物だった。見覚えがある気がして四人が首を傾げている

と、隊長たちの言葉ですぐに思い出すことができた。

「やっぱりここに来るとちょっと落ち着くね」

「なのはは特にだろうね。地球の翠屋と似通った建物だし」

「味も翠屋そのものが多いしなあ」

なるほど、と四人は納得した。以前地球を訪問した時に訪れた翠屋という喫茶店の建物だ。なのはの実家が経営する喫茶店なのだが、こんなところで見るとはさすがに思わなかった。気になって看板を見て、すぐに目を丸くした。

喫茶店翠屋ミッドチルダ支店『ギフトッド』

地球にではなく、なぜミッドチルダに支店があるのか。困惑している四人へと、なのはが振り返って笑顔で言う。

「それじゃあ、入ろうか」

隊長たちに促され、四人は先にその喫茶店に入れられた。からんからんと鳴る鈴の音と、その直後の、

「いらっしやいませー！」

元気な女性の声。その声を聞いて、四人は思わず振り返ってフェイトの顔を見た。

「……私じゃないよ？」

どこか笑いを堪えているような表情だ。珍しいものを見たと思いつつも声の主を探して正面へと向き直り、

「え……。ええええー！」

思わず声を上げて驚いた。

「うわー…びっくりしたー！なに？ どうしたの？」

そこにいたのは、エプロン姿のフェイトだ。ただし髪の色や雰囲気があるで違つ。

「ふえ、フェイトさんが……二人……？」

きょとんと目の前の女性が首を傾げ、そしてすぐに四人の背後にいる隊長たちに気がつき、表情を輝かせた。手を上げて、挨拶。

「おいつすー！ 久しぶりだね、オリジナルー！」

「うん。ほんとには、レヴィ。相変わらず元気そうだね」

「なにになに？ 今日はどうしたの？ この子たち誰？ もしかしてこ

の前言つてた教え子ってこの子たち？」

矢継ぎ早に繰り出されるレヴィと呼ばれた女性の質問にフェイトが思わず苦笑いする。そうだよ、とフェイトが返事をする、レヴィはへえ、とスバルたちに視線を向けた。

「ほら、みんな。挨拶」

フェイトに促されて、呆けていた四人ははっと我に返った。姿勢を正し、

「時空か……」

「あ、役職とか階級とかいらないよ」

レヴィに言葉を遮られ言葉に詰まるスバル。すぐに意味を理解し、名前だけを告げる。ティアナたちも同様に名前だけを告げると、レヴィは満足そうに頷いた。

「ボクはレヴィ。強くてすぐくてかっこいい、レヴィ・ザ・スラッシュァーとはボクのことだ！」

レヴィの自己紹介に戸惑う四人。後ろの隊長たちから苦笑する気配が伝わってくる。いつものことなのだろうか。

「あの……。聞いても、いいですか？」

キャラの遠慮がちな声に、レヴィはにこやかに、いいよ、と応じる。

「レヴィさんとフェイトさんって……」

だが、最後まで言葉を出すことはできなかった。途中で店の奥から誰かが駆けてくる音が聞こえてきたためだ。一同がそちらへと視線を向けると、出てきたのは二人だった。

「やかましいぞレヴィ！ 静かにせんか！」

「……………」

声を出した方、はやてによく似た女性を見て、四人は内心で驚きつつも声には出さなかった。なのは、フェイトときたのだからはやてのそっくりさんもいるのでは、とある程度の予想がついていたためでもある。

「苦労してそうだね、ディアーチェ……………」

「王様も元氣そうやな」

ディアーチェと呼ばれた女性が怪訝そうに眉をひそめ、自分たちを

見てくる。最後にはやてへと目をとめ、視線を逸らして大きな舌打ちをした。

「子鴉か。何しに来た」

「ひどいわあ、王様。そんなに冷たいとあたし、泣いてまうぞ?」

「黙れ子鴉。貴様のそんな言葉に騙されは……」

「……………」

「ま、待て! 本当に泣きそうになるやつがあるか! ええい、やりにくい奴だ……!」

横柄な態度から一転、慌て始めるディアーチェと、どこか悪戯が成功したような表情を見せるはやて。ディアーチェの態度から仲が悪いのかと思っただが、どうやらその逆らしい。はやての表情に気づいたのだらう、ディアーチェはすぐに顔を大きくしかめてみせた。

「お久しぶりです。その子たちが皆さんの教え子さんですか?」

その声はディアーチェの隣、優しげに微笑む少女からだ。レヴィやディアーチェよりも体格が少し小さい。この少女は自分たちが知っている誰とも似ていない。

「そうだよ、ユーリ。紹介はシュテルが揃ってからと思ってるんだけど……」

なのはからユーリと呼ばれた少女は、興味深そうにスバルたちを観察する。スバルたちと目が合うと、顔を赤らめながら一礼した。

「ユーリ・エーベルヴァインです。えっと、なのはさん。シュテルならそこにいますよ」

ユーリが指し示す先、店の奥へと視線を向ける。最奥のテーブル席には何か工具のようなものが大量に置かれ、そしてその席に二人分の人影があった。一人は本へと視線を落とすシュテルで、もう一人は隊長たちと同じ年ぐらいの男性だ。全員の視線に気づいて、シュテルが顔を上げた。

シュテルと視線が合い、なのはが声をかけようと口を開く。だがすぐにシュテルが人差し指を口の前に立てたので口を閉じた。シュテルは一度頷き、隣の男を一瞥して、席を立つ。こちらへと歩いてきてから、ようやく口を開いた。

「お久しぶりですね、ナノハ。お元気そうで何よりです」

「うん、久しぶり。シュテルも元気そうで良かった。……取り込み中だったかな？」

なのはが男の方を見て言うと、シュテルは小さく首を振った。じきに終わります、とシュテルが言った直後、

「できたー」

男の方から小さな歓声上がる。その声を聞いたシュテルはすぐに振り向き、男へと声を掛けた。

「終わりましたか？ シュウ」

シュウと呼ばれた男が満面の笑顔を向けてくる。頷いて、そしてすぐに自分たちに気がついた。

「あ、ごめん。お客様が来てるんだね。すぐに片付けるよ」

「落ち着いてください、シュウ。ナノハたちですよ」

「へ？ ……ああ、ほんとだ」

シュウは席を立ち、テーブルの上の道具を片付けていく。側に置いてあった大きめの木箱に丁寧にに入れていき、片付け終えてからこちらへと歩いてきた。久しぶり、となのはたちに言ってから。すぐに自分たちにも視線を向けてくる。

「初めまして、だね。僕は西崎秀一。シュウ、と呼ばれてるよ」

よければそう呼んでね、とシュウが屈託のない笑顔を見せてくれる。

「それじゃあ、改めて紹介するね。この子たちは私たちの部隊に所属してる……」

「スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

四人が名乗り、次いで目の前の体長たちに似た人たちが自己紹介してくれる。

「ディアーチエだ」

「さっきも言ったけど、レヴィだよー」

「ユーリです。私も先ほど名乗っちゃっていますけど」

三人が名乗り、そして空白。全員の視線が残り二人に注がれる。シュテルはいつもの無表情だが、シュウの方は少し困惑しているようだった。

「え、あれ？ シュテルは名乗らないの？」

「ここは先に店長から、と思いましたが……。まあいいでしょう。シュテルです」

シュテルが名乗ったのを聞いて、シュウは安堵のため息をついた。

「ちっさも言ったけど、シュウでいいからね」

そう言っつて、シュウはおもむろに出入り口のドアへと向かった。どうしたのかとその動きを追えば、外へと出て行ってしまふ。突然何が、と驚いていると、すぐにシュウが戻ってきた。

「とりあえず臨時休業ということにしておいたから」

「ええー！ さすがにそれはまずいんじゃない？」

そう声を上げたのはなのはだ。だがシュウは、別にいいよと笑い飛ばす。今日は君たちの貸し切りだ、と。

「店長がそう言っていますので、お気になさらずに。さて、ご注文をどうぞ」

いつの間にか持ってきたのか、シュテルとディアーチェエがエプロンを着用していた。どうやらこの二人は厨房担当らしい。じゃあお言葉に甘えて、となのはたちは側のテーブルからメニュー表を取ってきて開く。スバルたちはその様子を啞然として見ていたが、フェイトに、見ないの？ と声を掛けられて我に返った。

「あ、あのー聞きたいことが……」

スバルのその言葉に、しかしシュテルは首を振った。

「私たちのことを、ですね。少々長い話になりますので、先に昼食の用意をさせていただきます」

「そういつことだ。さっさと選べ」

腕を組み、自分たちを睨み付けながらもメニュー表を差し出してくるディアーチェエ。ティアナが恐縮しながらもそれを受け取った。

「シュテルんー！ ボクはカレーがいいー！」

「あ、じゃあ私はハンバーグで！」

「分かっています。ハンバーグカレーを用意しましょう」

そう言って厨房へと消えていく。すでに隊長たちも注文を決めたようで、ディアーチェに何かを伝えていた。これは早く決めなければならぬだろう。四人が慌ててメニュー表に視線を落とし、ページを捲っていく。

「今日も平和で何より」

そんな光景を眺めながらのシュウの一言は、なぜかとても感慨に満ちていた。

邂逅（後編）

シュウたちが経営する喫茶店のテーブルのいくつかは正方形をしている。正方形のテーブルは簡単に移動させることができ、今のよう
にいくつか並べて大きなテーブルとして使うこともできる。

正方形のテーブルを四つ並べ、片側にシュウたちが座り、もう片側
になのはたちが座る。なのは誰かを迎えに行くとか出かけてしまっ
ているので、向かい側に座るのはなのはを除いた管理局のメンバ
ーだ。

シュテルとディアーチェが作った昼食を皆で食べながら、シュテル
は自分たちのことを語っていた。シュウに気を遣ってか、ギフトッド
に関することにはまだ触れていない。

「砕けえぬ闇事件、ですか。そんな事件があったんですね」

スバルがそんな感想を漏らし、どこか納得したような表情をしてい
るティアナが頷いた。

「それで隊長たちと似通った姿なんですね。皆さんも魔導師なんです
か？」

「はい。囑託魔導師として時折活動しています」

「まあほとんどはここにいるがな。そちらで働くためには店を閉めな
ければならんからな」

シュテルとディアーチェは厨房担当だ。どちらか一人でも欠けると料理の提供が遅れてしまう。接客担当のレヴィとユーリが欠けた
場合でも、今度はそちらの仕事に遅れが出てしまう。そのため、囑託
魔導師として活動する時は休業にしている。

「シュウさんも……えっと、魔導師なんですか？」

そう問いかけてきたのはキャロだ。シュテルたちの表情が硬くな
り、シュウは困ったような笑みを浮かべてしまう。どこまで答えるべ
きか、と。

「僕は魔導師じゃないよ。デバイスマスター。裏方でみんなのサポー
トをするだけ」

当たり前障りのない答えを返し、そして、すぐに真剣な表情になった。「フェイト。はやて。」の子たちは、口は堅い？」

スバルたちが首を傾げる横で、フェイトとはやてはしっかりと頷いた。フェイトも真剣な表情になり、言っ。

「そうでないよ、ここには連れて来ないよ。この子たちは大丈夫」

分かった、とシュウが頷いて、改めてスバルたちへと向き直る。困惑の表情を見せる四人へと、シュウは静かに告げる。

「ここからは、絶対に他言無用だよ」

そうしてシュウが語るのは、自分の出自。記録から抹消されたロス・トロギア、ギフテッドのことだ。シュウの話を聞きながら、四人は驚きで目を瞞っていた。

実はこうして自分のことを話すのは、ミッドチルダに移住して初めてのことだ。というのも、自分の存在を隠すなら相手が誰であろうと言うべきことではないと考えている。知る人が増えれば、その分だけ悪意を持つ誰かに伝わってしまう可能性がある。それ故に、ここに来るからは一度たりとも触れていなかったことだ。

だが、なのはたちが連れてきたということは、この四人は口が堅いと信じていいのだろう。少なくとも、他人の秘密を他で言ったりはしないはず。それならば、話してもいいだろう。最も、今回が特例であり今後もやはり誰かに言う予定はない。

全てを聞き終えた四人は、一言も発せず黙り込んでいた。その四人の視線を受けながら、シュウは小さくため息をつく。久しぶりに長話をしたので疲れてしまった。

「シュウ。お茶をどうぞ」

「うん。ありがとう」

シュテルから冷たいお茶で満たされたコップを受け取り、乾いたのどを潤す。そうしている間に、最初に口を開いたのはティアナだった。

「ギフテッド……。そんなロス・トロギアがあったんですね。驚きました」

「うん。まあ知らなくて当然だよ。記録からも記憶からも抹消された

からね。なのはやりンディさんたちが他言していなければ、知ってる人は本当に限られるよ」

無論、誰かが他言しているなどとは思っていない。なのはたちもリンディたちも、信用に値する人物だ。だからこそ、なのはたちが信用している教え子たちも信用することができる。

「まあ、別にだから何だって話なんだけどね。何かに関わることもでもないし、忘れていいよ」

そんなシュウの言葉に、スバルたちは苦笑を漏らしたただけだった。

「戻ったよ」

なのはが喫茶店に戻ってきた時には、すでに一通りの話を終えた後だった。皆で雑談に花を咲かせている。シュテルから念話での連絡が回っているのか、なのははシュウをちらりと見ただけでそれ以上は何も言ってこなかった。ただ、優しく笑っただけだ。

シュウもなのはに笑顔を返し、そしてすぐに気がついた。なのはの傍らにいる少女に。明るい金髪に左右で違う瞳の色。シュウが視線でなのはに問いかけると、頷いて紹介してくれる。

「この子がヴィヴィオ。シュテルから聞いてないかな？」

なるほど、とシュウは納得する。視線をシュテルへと向けると、シュテルも興味深そうにヴィヴィオのことを見つめていた。対するヴィヴィオも、目を丸くしてシュテルのことを見つめている。

「なのはママと同じお顔……？」

ヴィヴィオのそんなつぶやきが聞こえてくる。それを聞いたシュテルは無表情に席を立つと、ゆっくりとヴィヴィオへと近づいている。ヴィヴィオが驚いて身をすくませるが、なのはに背中を押されてシュテルと向かい合うことになっていた。

「あ、あの……」

「初めまして、ですね。貴方のことはナノハから聞いています」

シュテルが身をかがめ、ヴィヴィオへと視線を合わせる。柔らかない
声音で、言っ。

「私はシュテルです。貴方のママとは、そうですね……。友人、です

ね」

それを聞いたなのはが一瞬だけ驚きを見せ、すぐに嬉しそうな表情になった。それが分かるのだろう、シュテルはなのはと視線を合わせようとはしない。少し恥ずかしかったのかもしれない。

「なのはママのお友達？」

「はい。そうです。よろしくお願いします、ヴィヴィオ」

シュテルがそっと手を差し出すと、ヴィヴィオはおずおずといった様子でその手を握った。

少し前にあった大きな事件。自分たちは関わらなかったが、その事件の経緯とその後についてはなのはたちから聞いていた。なのはがヴィヴィオという少女を養子として引き取ったことも。その報告を受けたシュテルは、珍しく渋面を浮かべていたそうだ。

そのしばらく後に、あの子の将来が心配です、と小声で漏らしていたのだが、シュウは聞こえていないことにした。

ヴィヴィオを交えて、雑談は続く。レヴィとティアーチェを見た時もヴィヴィオはとても驚いていた。

さらに時間が流れ、日が少し傾き始めた頃。喫茶店のドアが勢いよく開かれた。大きな音を立てて開かれたドアには一人の少女。車椅子に乗った少女は、何事かを叫ぼうとして口を開き、そしてそのままの姿勢で動きを止めた。なのはたちを視認して、驚きで固まってしまっている。

「あれ？ 文花ちゃん？」

なのはの声で我に返ったのか、文花ははっとするとその場で姿勢を正した。

「お久しぶりです、なのはさん！」

「うん。久しぶりだね。元気そうで良かったよ」

「なのはさんも」

突然の闖入者と親しげに話す隊長を見て、スバルたちの四人は不思議そうにしていた。いや、一人だけ別の表情を浮かべている。ティア

ナだけは、何かを思い出そうとしているようだ。そしてすぐに、あ、と短い声を漏らした。

「もしかして、西崎文花さん……？ 囑託魔導師の……」
「うん、そうだけど……。どちら様？」

ティアナの小声を文花はしっかりと聞き取った。声の主のティアナを見て、わずかにだが警戒の色を浮かべている。それに気づいたなのはが苦笑して、

「そんなに警戒しないで、文花ちゃん。この子たちは私の部隊の子たちだから」

「機動六課、でしたっけ？ なのはさんの教え子さんですね。失礼しました」

その場で頭を下げる文花。ティアナが慌てて手を振って、こちらこそ「ごめんなさい、とお互いに謝っている。

「文花のこと、知ってるんだね」

シュウが漏らした言葉に、隣のシュテルが少し呆れたようにため息をついた。

「何度か雑誌をお渡ししたでしょう。囑託魔導師では最も有名な一人になっていきますよ」

「有名？ なんて？」

「最近何かと話題のナノハの一番弟子、ですから」

「そんなこと名乗った覚えはないんだけどね……」

「……原因は私だよね……」

なのはの言葉に文花は言葉を濁した。どっつやら事実らしい。

後ほど聞いた話では、取材の一つでたまたま文花の話題が出たらしい。その時に余計なことを言ってしまったそうだった。私が魔法を教えた最初の子ですね、と。それ以来、文花にも取材の依頼が入るようになってしまったそうだった。

「でもどっつって文花さんがここに？ なのはさんに呼ばれたんですか？」

そう聞いたのはスバルだ。その表情はどこか嬉しそうにも見える。問われた文花は、シュウを指さして言った。

「妹が兄の家に来たらだめ？」

「え……。あ、そう言えば西崎って……」

スバルたち四人の視線がシュウへと注がれる。シュウは複雑そうにしながら頷くだけで肯定とした。

「ところでお兄ちゃん。デバイス届けてくれるって言ってなかった？」

「……あ」

シュウは背後の、奥のテーブルへと振り返る。なのはたちが来るまで作業していたテーブルだ。そこに無造作に置かれているデバイスがある。文花もその視線に気づき、すぐにデバイスに気づいて、大きなため息をついた。

「う、うめん……」

「まあ、いいよ。メンテナンスを依頼した私が入りに来るのが本来は正しいし」

最初はもともと文花が入りに来る予定だったのだが、車椅子だと不便だろうということとシュウが持って行くと申し出ていたのだ。シュウはデバイスを回収すると、それを文花に渡した。

「メンテナンスついでに調整もしておいたから。次の仕事の前に確認してね」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

にこやかに言う文花。その笑顔を見て、シュウの頬も自然と緩む。「それじゃあ私はこれで。皆さんごゆっくり」

車椅子を反転させて、文花はさっさと店を出て行ってしまった。他の皆に挨拶する暇も与えない。スバルが残念そうな声を漏らし、ティアナが首を傾げた。

「どうしたのよ、スバル」

「もうちょっと話してみたかったなって……」

「じゃあ今度文花ちゃんと訓練する時はスバルたちも呼ぶね」

なのはの言葉に、スバルが瞳を輝かせた。いいんですか、と興奮して聞いてくるスバルに、なのはは笑いをかみ殺しながら頷いた。

街が夕焼けで赤く染まり始めた頃。もうこんな時間やね、とはやてが切り出して、談笑していた皆がはやてを見る。はやては全員を順番に見て、最後になのはへと頷きかける。それを受けたなのはシュテルへと視線を送り、そしてシュテルは自分のデバイスを取り出すことで返事とした。

シュテルの行動の意味を察して、ディアーチェは呆れながら、レヴィは嬉しそうにやはりデバイスを取り出した。きよとんとしているスバルたちへと、なのはが言う。

「デバイスは持ってきてるかな？」

「あ、はい。もちろんです」

「うん。それじゃあ、シュテルたちの胸を借りようね」

悪戯っぽく笑うなのはに、スバルたちの表情が引きつった。その表情を見れば分かる、とても嫌な予感を覚えているのだらう、と。そしてその予感的中することになる。

「模擬戦、しようか」

近場の施設の訓練室。相対するのはシュテルたちマテリアルズの三人と、スバルたちの四人だ。それを少し離れて見守るのはシュウやなのはたち。ヴィヴィオも同席しており、喫茶店を出る時におやつ代わりです、とシュテルから渡されていた小さなホットケーキを幸せそうに食べている。

「美味しいですか？」

遠くから聞いてきたシュテルに、元気よく、美味しい、と返事をするヴィヴィオ。それを聞いたシュテルは、いつもの無表情だが口の端が少しだけ持ち上がった。いた。

ユーリも観戦組で、こちらは少し不満そうだ。

「さすがにユーリまで一緒に参加したらあの子たちがかわいそうだから。ねっ」

シュウがそう言いながらユーリのご機嫌を取る。こちらを心配そうに見る三人へと、大丈夫だから、と手を振った。

「しむ……。では始めるとするか」

ディアーチェの言葉に、緊張した面持ちの四人が、よろしく願います、と頭を下げた。

隊長たちに似ているからといって実力も近いということはないだろう。そんなことを心の片隅で少しだけ期待していた四人は、その考えを開始数分で激しく後悔していた。隊長たちに負けず劣らず強く、その上この三人、遠慮も手加減も何もない。一時間もすれば、四人は地に伏して荒い息ははいていた。

もう終わり？ と残念そうに言うレヴィに四人の表情が思わず強ばる。黙って見守っていたなのはが苦笑しながら声をかけてくれたのはその時だ。

「はい、みんなお疲れ様。今日の反省点は次の訓練から活かしていくから、そのつもりでね」

よろよると立ち上がりながらスバルたちが頷く。なのはも満足そうに頷くと、シュテルたちへと向き直った。

「シュテル。ディアーチェ。レヴィ。今日はありがとう。本当に……」

「終わっていませんよ」

「えっ？」

なのはが言葉を遮られ、きょとんと間の抜けた表情を見せる。シュテルはそんななのはへと、まっすぐに杖を向けた。

「せっかくなのです。一戦、交えましょう」

シュテルの声は、どこか楽しげですらある。そんなシュテルを見てしまつと、なのはも断ることができないのだろう、困ったような笑みを浮かべながらもレイジングハートを展開する。

「シュテルんばっかりずるい！ ボクももつとやりたい！」

「じゃあシューマンセルでどうかな」

フェイトの言葉に、さすがオリジナル、とレヴィは嬉しそうだ。それに待ったをかけるのがディアーチェ。

「よさぬか、レヴィ。せっかくの機会だ、シュテルに譲ってやれ」

「王様はやらへんの？ ならあたしの不戦勝やね」

「……なんだと？」

ディアーチェの瞳に闘志の炎が燃え上がる。そしていつの間にか出来上がったスリーマンセルだが、なのはたち三人とも参加すると、最後の一人も当然納得ができない。

「私だって参加したいです！」

「まあそうなるな。当然ユーリはこちら側だ」

ディアーチェがユーリを手招きすると、ユーリは子供ののように喜んでディアーチェの隣へと走って行った。

「いやちょっと待って！ 人数が合わない以前に、戦力バランスが悪いと思うんやけどー！」

「ではその雛鳥どもももう一度参加だ。そちらの方が人数が多くなるが、構わんぞ」

「人数の問題じゃなくてやな……！」

はやてが言葉を連ねるが、ディアーチェは全ての言葉を無視で一蹴した。やがて諦めたのか、はやてがため息をつく。仕方ないかと、

「あの……。ユーリさんって、そんなにすごいんですか？」

ティアナが小声でなのはに問いかけると、なのははティアナたちを順番に見て、そして最後に視線を逸らした。

「……がんばろうね」

「……え？」

隊長たちが滅多に見せない態度の意味を、四人はすぐに知ることになる。

「上には上がいる、なんてものじゃないよあれは……」

「ちよっと……トラウマになりそう……」

喫茶店で、スバルとティアナはテーブルに突っ伏していた。隣のテーブルではエリオとキャロも同じように疲れ果ててダウンしている。

ユーリの力は圧倒的だった。理不尽とも思える力。昔の話とは言え、暴走していたユーリを止めたというのだから、隊長たちはやはりすごいと思う。隊長たちは、皆で協力してやっとだった、と笑っていたが。

後から聞いた話では、ユーリの力を、自分たちが束になっても敵わない、とヴォルケンリッターの誰かが評したこともあるそうだ。規格外とはこのことだろう。

「みんな、お待たせ！」

喫茶店の奥、厨房から出てくるのはエプロン姿のなのはを初めとする隊長たちと、シュテルたちだ。その手に持ったお盆には、できたての料理の数々。

模擬戦の後、シュテルたちに喫茶店の客としてではなく、友人として改めて招かれていた。夕食をご馳走します、と。そういうことなら隊長たちも手伝うことになり、今に至る。スバルたちも当初は手伝おうとしたのだが、招かれた側は大人しくしているとお達しにより待機させられていた。

夕食を食べ終えた頃にはすでに太陽はすっかりと沈んでしまっていた。帰り支度をするスバルたちへ声がかけられる。

「これ、あげる」

シュウだった。渡されたのは小さなカード。黒いカードで、墨に小さく店名が書かれている。

「わ、ありがとうございます！ 会員カード、ですか？」

「この喫茶店にもあるのかと感心していたが、シュウは首を振って否定した。

「まあそれに近いけど。僕個人用。ちゃんと本人がそのカードを持ってきてくれたら、デバイスのメンテナンス、無料で引き受けるから」
曰く、先ほどの模擬戦のさいに魔力データを收拾したらしい。その魔力データとカードのデータを照合させて本人確認を行うのだとか。
「まあ、管理局に所属している君たちにはあまり必要ないかもしれないけれど……。機会があれば、というところで」

「分かりました……。ありがとうございます」
スバルたちがすっかりと頷くと、シュウは満足そうに微笑んだ。

「ではまたいずれ」

「みんな、まったねー！」

「気をつけて帰るのだぞ」

「またのご来店、お待ちしております！」

「また来てね、おやすみ」

シュテル、レヴィ、ディアーチェ、ユーリ、そしてシュウが入り口で手を振る。スバルたちもそれに手を振って、それぞれの家路についていった。

全員の姿が見えなくなるまで見送って、五人はゆっくりと息を吐いた。店内へと戻り、扉を閉める。そして全員の表情が真剣なものとなった。

「うぬら、分かっておるな？」

ディアーチェの声に全員が頷く。これから始まるのは先の模擬戦の反省会……ではない。それはまた時間の空いた時だ。ディアーチェも最後に頷き、そしてシュウへと視線を向けた。

「では、店長。ここからはうぬの仕事だ」

「そのままディアーチェが仕切ればいいのに……」

妙なところで律儀だな、と苦笑しつつも、すぐに表情を引き締めた。

「ディアーチェとシュテルは明日の料理の仕込み。レヴィとユーリは食材もろもろの買い出しだ。僕もまだ引き受けてるデバイスのメンテナンスが残ってるから、それを先に終わらせる。それぞれ終わり次第、お店の片付けと掃除」

「はい。分かりました」

「うむ。心得た」

「りょうかーい！」

「がんばりますー！」

四人それぞれの返事を聞いて、シュウは頷きを一つ、そして最後に言う。

「じゃあ、よろしくね。がんばらう！」

そしてそれぞれが自分の仕事へと向かう。明日の日常のために、今日の日常の最後の仕上げへと。その表情は、引き締められたものだったが、誰もが生き生きとしていた。

出立（前編）

マンションの自室、書斎。書斎といっても周囲が本棚、中央にテーブルがあるだけの部屋。その部屋はいつも様々な機械や工具が散乱している。その部屋の中央、テーブルにはシュウがいて、テーブルに突っ伏して眠っていた。

シュウの服装は学生服だ。自身の学校のもので、一週間後には卒業式が控えている。シュウが抱えるロストロギア、ギフトッドの小さな騒動から時は流れ、もうすぐ中学校を卒業することになる。

シュウが眠る書斎の扉がゆっくりと開かれる。そこから顔をのぞかせるのはシュテルだ。シュウの姿を認め、部屋の惨状を見て、ため息をついた。部屋の中に入り、シュウを起こさないようにそっと扉を閉める。散らばった機具を静かに片付け始めた。平時なら二、三日で元に戻るのでもわざわざ片付けたりはしないのだが、今日は特別である。

十分ほど続けたところで、シュウの体がわずかに身じろいだ。シュテルが動きを止め、そちらを見やる。シュテルが見守る中、シュウが体を起こし、ぼんやりとする。少しして目が覚めてきたのか、シュテルを見つけると、気の緩んだ笑顔を見せた。

「おはよう、シュテル」

「おはようございます、シュウ」

シュテルが挨拶を返すと、シュウはまだ寝ぼけ眼だったがどこか嬉しそうに微笑んだ。ゆっくりと伸びをして、そして大きな欠伸をする。そんなシュウへと、シュテルは少し呆れながらも告げた。

「昨日も遅かったのですか？」

「ん……。まあ、ちょっとだけ」

少し目を逸らしながら答えるシュウ。シュテルは目を細めながら、しかしそれ以上は追求しなかった。

テーブルで寝てしまっている場合の多くは、深夜遅くまで起きている時だ。シュテルを初め、家族全員がそのことは知っているのだが、

自分たちに心配かけさせまいとしてくれているシュウの意を汲み、何も言わないことにしている。ただそれでも、心配はしてしまうのだが。

「はい。シュテル」

「ありがとうございます」

シュウが差し出してきたものをシュテルは受け取る。渡されたのはルシフェリオンだ。シュウが夜遅くまで起きている原因が自分たちのデバイスのメンテナンスということも、あまり強く言えない理由の一つでもある。

「いつも本当にありがたいのですが、無理だけはしないでください」

「うん。大丈夫。僕も好きでやってることだからね」

くあ、と欠伸をしつつ答える。そんなシュウを心配そうに見ていたが、シュテルはすぐに用件を思い出した。「ここに来た一番の理由だ。」

「ところでシュウ」

「ん？」

「時間は大丈夫なのですか？」

この部屋に窓はない。本来はあるのだが、念のためということとで本棚で塞いでしまっている。そのため、この部屋で時間を知るためには日の光は使えず、時計だけとなる。この部屋の時計は、入り口の扉の真上にあり、シュウの視線がそれを捉えた。シュウの表情が引きつっていく。

「シュウ。着替えはリビングに用意してあります。朝食もバターのトーストを用意しておきました」

シュテルの言葉を聞くや否や、シュウは書斎を飛び出した。シュウの足音はまっすぐリビングへと消えていく。

現在の時刻は午前八時。そして今日は平日であり、当然学校もある。

「懲りない方ですね」

そう言いつつも、シュテルはどこかおかしそうに、少しだけ微笑んでいた。

シュテルがリビングに戻ると、ちょうどシュウが着替え終わったと

ころだった。トーストをかじりながら玄関に向かうので、シュテルもそちらへと向かう。靴を履くシュウを黙って見守っていると、シュウがシュテルへと視線を向けてきた。

「ありがとう、シュテル。行ってくるね」

「いってらっしゃい、シュウ。お気を付けて」

シュテルがそう言っていると、シュウは嬉しそうに笑う。そしてすぐに部屋を出て行った。

シュウを見送った後、シュテルはディアーチェへと念話を送る。終わりまりました、と。ディアーチェからの返答は、少し待て、というものだった。シュテルは了解の意を送ると、リビングの掃除でもしようかと足を向けた。

シュウの通う学校は大学までのエスカレーター式だ。そのため、世間の受験シーズンなどとは違い、平常通りに授業がある。しかしながら、そのエスカレーターから外れる者もいる。別の高校へ受験する者や、諸々の事情などで就職する者など、理由は様々だ。そしてシュウもその外れる者で、シュウの場合は就職になる。

シュウの進路は就職で決まっているため、担任の教師が色々と便宜を図ってくれていた。ホームルームまでは自分のクラスにいるが、その後はシュウは経済、経営の勉強など一部の教師に教わっていたりしている。それ故にある程度時間も自分で決めさせてもらっている。建前上は就職先の研修のため、と。実際はその時々によって違うのだが。

その日もシュウは昼休みを待たずに下校する予定だ。今日は少々特別な日でもあり、それが今から待ち遠しい。経済に詳しい教師から授業を受けながら、シュウは顔がにやつくのを止められなかった。

「すまぬ、待たせたな」

そう言っリビングに入ってくるのは、王であるディアーチェだ。バリアジャケットを身にまとっているところから、どつやら囑託魔導師としての仕事を終えてまっすぐに来てくれたらしい。

「いえ。すみません、ディアーチェ。わざわざ迎えに来ていただいて、
そう言いながら立ち上がり、コーヒーでも淹れますね、とキッチン
へと向かう。戸棚にあるのは残りわずかとなったインスタントコー
ヒーだ。あることの準備のためにミッドチルダにすることが多く
なったため、もうこの部屋には最低限のものしか置いていない。」

コーヒーを淹れてリビングに戻り、ディアーチェに差し出す。ディ
アーチェは黙って受け取り、それを一口飲んだ。すぐに苦笑を漏ら
し、言う。

「仕方がないとは分かっているが、インスタントではこの程度になる
か」

「もう少し物を置いておくべきでしたね」

「一週間程度で引越すのだ。ちよつどいいと思うべきだろう」

そんな会話を交わしながら二人でコーヒーを飲みつつ、一息つく。
ゆっくりと時間をかけて飲み干し、時間が流れるのを待つ。

「ところでシュテルよ。掃除はどこまで済んでおる？」

「ほぼ終わっています。あとは、この部屋は私たちの私物を片付ける
だけです、シュウの部屋も書斎を残すのみです」

もっともその書斎が問題ですが、とシュテルが目を伏せ、そうであ
ろうなとディアーチェも顔をしかめた。

近日中にシュテルたちはミッドチルダへと引越すことになって
いる。シュテルの魔力を受け取らなければならないシュウもだ。そ
のためそれぞれ部屋の掃除と片付けを行っているのだが、どうしても
シュウの仕事場となっている書斎だけは手つかずのままになってい
た。

「引き払う前日にも一気にやってしまうのがいいだろうな……。そ
の時はユーリとレヴィも連れてこよう」

「そうですね。お願いします」

その言葉でこの話題を終えたところで、ドアが開かれる音がした。
二人でリビングの入り口へと振り返る。顔を出したのは、シュウだ。
走ってきたのだろう、息を切らしている。

「ただいまー」
「めん、待たせたかな」

「いや、大丈夫だ。気にするな」

飲み終えたカップをテーブルに置き、シュテルとディーアーチェが立ち上がる。では行くか、とディーアーチェが手を差し出し、シュテルがそれを取る。もう片方の手で、シュウへと手を差し出した。

「では、参りましょう。シュウ」

シュウが笑顔で、シュテルの手を取った。

五人が選んだ道。それは喫茶店の経営だ。ただあまり目立ちたくない五人は、表通りから外れてあまり人目につかない土地を購入した。そこから新築で、翠屋と同じ外観の建物を建てている。翠屋の看板を借りるということでもうしたので、太郎と桃子は気にしなくて良かったのと苦笑を隠しきれずにいた。ちなみに、土地代や建築代などは以前より積み立ててきた貯蓄で支払い終えている。

シュウはミッドチルダには未だにほとんど来たことがない。土地を決める時と建物の建築中に一度、その二回だけだ。休日を利用して訪れたのだが、一回とも土地の周辺を見て回ったりなどしただけなので、都市部の中心などには足を踏み入れていなかった。

シュテルたちに案内され、シュウは表通りから外れた裏路地へと入る。入り組んだ道を通り抜け、やがてその場所にたどり着いた。

建物と建物の間に、他とは違った造りの、翠屋と同じ外観の建物。シュウたちが経営することになる喫茶店だ。その喫茶店は周囲の建物とは違い、入り口の前に少し広めのスペースがある。今はまだ何もないスペースだが、いずれはここにテーブルなども用意しよう、という事になっている。

「おお……。なんだか感慨深いね」

「ええ。そうですね」

シュウのつぶやきに、シュテルも頷いた。早くしろ、とディーアーチェに促され、二人は店内へと入る。店内の一階も翠屋とほぼ同じ造りで、カウンターの奥、厨房のさらに奥に二階に上がる階段があるらしい。一階部分にはすでにテーブルやいすなどが運び込まれ、準備さえ整えればいつでも営業を開始できる。

「いらっしゃいませー！」

そう元気な声で三人を出迎えるのは、翠屋のエプロンを着たレヴィだ。その隣には、恥ずかしそうにしているユーリもいる。シュウは、へえ、と吐息を漏らした。

「久しぶり、レヴィ、ユーリ。似合ってるよ」

「ほんとに？ ちょっと嬉しいかも」

「ありがとうございます、シュウ」

レヴィが笑顔で言っ、ユーリははにかみながらもそう言っ。

「一階はあとでゆっくり見るといいだろう。先に二階と三階を見て、部屋決めをするぞ」

ディアーチェの言葉に、シュウとシュテルは頷いた。

二階と三階は五人の居住スペースだ。一階の奥の階段を上がるとまっすぐに延びる廊下があり、その左右に個室が四部屋ずつ、合計八部屋用意されている。そのうち三つが風呂場や客間などで利用され、空いているのは五部屋。そのどれを誰が使うか決めるのが今回の目的だ。

ちなみに三階は共用スペースで、大きな部屋が二つ用意されている。皆でゆっくりくつろぐための部屋だ。地下室も二部屋あり、そこは物置などになる予定だ。

「シュウは希望とがあります？」

ユーリがそう聞いてきて、シュウが頷いて言った。

「シュテルの隣がいいかな」

「……………」

シュテル以外の三人が、複雑そうな、苦笑と微笑が入り交じった表情を見せる。シュテルはいつも以上に無表情だ。

「つねら二人は同じ部屋でいいのではないか…………？」

思わずディアーチェがそう聞いて、

「私物が多くなると僕がすごく申し訳なくなる」

「そ、そうか……………」

ディアーチェはそれきり黙り込み、しばらく沈黙が支配する。しばらくして、シュテルの、そろそろ決めましょうという言葉に促され、部

屋決めが始まった。

夜。調理器具などを試すことも兼ね、シュテルとディアーチェが一階の調理場で料理をしている。シュウとレヴィ、ユーリはテーブルで雑談をしていた。二人から聞くのは、ここでの生活についてだ。今のところは特に変わりはない、という内容だった。

「お待たせしました」

シュウとディアーチェが厨房から出てくる。運ばれてきたのはそれぞれ違う料理で、レヴィにはカレーライス、ユーリにはハンバーグ、シュウには唐揚げだった。シュテルとディアーチェは、それぞれエビフライとオムライスだ。

「デザートもありますよ」

そう言うシュテルが持つてくるのは、ショートケーキとモンブランだ。

「厨房はどうだったの？」

「とても使いやすい内装でした。中の機器類なども良いものです。さすがはディアーチェ」

「厳選したからな。まあ、その分費用はかかったが、問題のない範囲だ」

腕を組んで自慢げに言うディアーチェ。故に、と続ける。

「申請も終わっておるからな。明日からでも営業できるぞ？ ……引っ越しが終わっていない以上、やらぬがな」

「つまりは僕待ち、だね」

どうやら四人ともシュウの引っ越しが終わるまでは営業開始を待ってくれるらしい。それもそのはずで、日常生活の私物こそ少ないが、書齋に詰め込まれているデバイス関係の工具、機器類は結構な量だ。営業中にそれらを持ち込むことはできないだろう。

いや、それ以前に。

「……部屋に入りきるかな……」

シュウの部屋の書齋はこの部屋よりも広い。その書齋で物があふれかえりつつあるのだ。新しい部屋に入りきらなければ、いくつか

処分も考えなければならぬだろう。

もったいないけど仕方ないか。そう考え、頭の中で不用なものを選び始めたのだが、シュテルの大丈夫ですよ、という言葉で思考を止めた。

「地下室が二部屋あることは言いましたね」

「うん。倉庫だよ。保存できる材料とか雑貨類とか、収納するためのものだった」

「一部屋はその通りだが、もう一部屋は違う」

そう引き継いだのはディアーチェだ。

「もう一部屋はうめの作業場だ。好きに使え」

「え……？ いいの？」

「必要ないと言われても部屋が余るだけです。遠慮しないでください」

「そうそうー！ シュウにはデバイスのことではいっばいお世話になっているしね。だから遠慮しなくていいのー」

レヴィが笑顔で締めくくり、他の三人もその通りだと頷いてくれる。シュウは申し訳ないと思ながらも、四人の厚意に甘えることにした。彼女たちのデバイスは常に最良に保とう、心の中で誓いながら。

その日は人数分用意されていた寝袋で、三階にて就寝することになった。

レヴィとユーリは今日も準備や片付けなどで忙しかったらしく、寝袋に潜ってすぐに整った寝息を立て始めた。シュテルとディアーチェはシュウの卒業式の日程を考慮して、今後の予定を相談している。シュウも一応それに参加はしているが、ほとんど聞いているだけとなっていた。

「うめの希望はないのか？ 両親に挨拶などもせぬつもりか？」

ディアーチェにそう聞かれ、シュウは少し考える。未だにほとんど会わないのだが、今まで世話になっているのだ、やはり挨拶ぐらいは必要だろう。

「じゃあ、卒業式のあと、二日ほど欲しいかな。文花とも少し話をしておきたいし」

「うむ。了解した」

「シュテルたちは、誰かと会ったりしないの？　なのはとかはやてとか」

予定表を修正していたシュテルが顔を上げる。何かを考える素振りを見せ、そして首を傾げた。

「ナノハたちもいずれミッドチルダへと引っ越してくる予定ですが」

「……ああ、そうでした」

なのはたちは管理局で働くらしいので頻繁に会うということではできないだろうが、会おうと思えばいつでも会えるだろう。わざわざ別れを言う必要もない。しかし何も言わずに行くというのも、シュテルと仲の良いのがかわいそうだろうと思っっていると、

「ですが、そうですね。あなたがご両親と会っている間に、私もナノハや桃子さんたちに会っておきましょう」

シュテルがそう言ったのを聞いて、シュウは自然と笑顔になった。きつとなのはたちも喜ぶだろう、と。

「ではシュウの卒業式の翌日は各々好きに過ごすことにするか。我も……不本意ではあるが、子鴉どもに挨拶ぐらいしてやる」

ディアーチェの言葉を聞いて、シュウは思わず苦笑していた。口ではこう言うディアーチェだが、はやてのことを気に掛けていることはよく知っている。最後まで素直じゃないな、と思ってしまう。

「では、明日に備えて休みましょう」

「そうだな。では明かりを消すぞ」

「うん。おやすみ、シュテル。ディアーチェ」

三人がそれぞれ寝袋に潜り込んでいく。

開店前の喫茶店。窓から漏れ出るわずかな光が消えて一日が終わる。明日の朝日を待つて、五人の住人は眠りに落ちた。

出立（シュテル）

シュテルは、珍しくどこか緊張した面持ちで立ち、目の前の人の言葉を待っていた。シュテルの目の前にいるのは、いすに座った高町桃子だ。八等分にされたケーキの一つを、桃子はゆっくりと口に運ぶ。「いかがでしょうか」

シュテルの言葉に、桃子は笑顔を浮かべた。

「ええ、すごく美味しいわ。十分合格点」

その言葉に、シュテルは安堵の吐息を漏らした。切り分けた残りのケーキが、店のケースへと並べられていく。本日限り、数量限定と書かれたポップ広告もつけられた。

「定期的に帰ってくるの？」

シュテルと共に食器を片付けながら桃子が聞く。

「はい。一ヶ月に一度は帰ってくるつもりではありません。まだまだ教わっていないことも多いので」

「もう十分教えたつもりなのだけれど……。でも、そうね。お互いに教え会って切磋琢磨しましょうか」

桃子の申し出に、よろしくお願ひしますとシュテルは頭を下げた。

開店した翠屋を後にして、シュテルは町中を歩く。桃子には手伝いますと申し出たのだが、他のところにも挨拶してきなさい、と半ば追い出されるように送り出されてしまった。慣れ親しんだ海鳴の街を歩きながら、シュテルはどうしようかと考える。

商店街やご近所など、軽い付き合い程度の場所へはすでに家族総出で挨拶を済ませている。シュテルたちが引越して遠くへ行くと聞くと、多くの人が驚き、別れを惜しんでくれていた。ずいぶんこの町とも深い付き合いをしていたものだ、と思う

「ああ、そう言えばあそこがまだでしたね」

行き先を決めて、シュテルはそちらへと足を向けた。

しばらく歩き、そしてたどり着いたのは小さな書店。ここだけはまだ挨拶を済ませていなかった。

「失礼します」

そう言っただけに入る。初めて来た時から、品揃えを除いて何一つ変わらない書店。温もりすら感じる店内に、シュテルはわずかに頬を緩めた。並べられた本を見ながら、シュテルは奥へと進んでいく。

懐かしいですね……。

ここはシュウと初めて会った書店だ。もし自分があの時、この書店に立ち寄っていなければシュウと出会うこともなく、それ以前に本を探していなければまずここに立ち寄る機会すらなかっただろう。もしそうならいけば、シュウの中のロストロギアを自分たちが封印していたかもしれない。

「事実は小説よりも奇なり、とはよく言ったものだ」

その声へと顔を向ければ、笑う初老の男と目が合った。この店主で、シュテルのことをにこやかに見つめている。

「いらっしやい。商店街の連中から聞いているよ。挨拶に来てくれないかと思っていた」

「すみません。遅くなってしまって……」

「いやいや、来てくれただけで十分だよ。今更話し込むこともないしね」

男はそう言いながら、カウンターの下、おそらく棚になっているであろう場所から本を一冊取り出した。古い本のようにだが、丁寧に扱われているようで状態は良い。それをシュテルへと差し出してきた。

「もう本を勧めるのも最後になりそうだからね。とっておきだ」

「ありがとうございます。……とても古い本のようにですね」

受け取って中身に軽く目を通す。どうやら日本を舞台にしたファンタジー小説のようだ。

平凡な少年が魔女と出会い、魔法の世界へと旅立っていく、という内容だった。

シュテルは大きく目を見開くと、男を見る。男はただ笑うに笑うだけで。

「君たちと会えて良かったよ。この街に立ち寄ることがあればまた顔を出してくれ」

そう言う男の表情からは、何も読み取れなかった。

その日の晩は自宅のマンションに戻った。このマンションで寝起きするのは、シュテルはこれが最後だ。そう思うと感慨深いものがある。だからといって特別なことをするわけでもなく、普段通りに過ごしてはいるが。違うことと言えば、夕食の席にシュウがいないことぐらいだ。

シュウは現在、アパートの方に戻っている。シュウにも思うところがあるのだろう、四人で相談して邪魔をしないことにしていた。

翌朝。シュテルはディアーチェと共に朝食の準備をして、ラップをかけて食卓に並べておく。二人で満足そうに頷く。

「では王。私は先に」

「うむ。我はユーリとレヴィと出るとする。気にせず行ってこい」

王の言葉に、シュテルはありがとございます、と頭を下げた。食卓をもう一度見て、少し名残惜しく感じている自分の感情に内心で驚く。今までの生活を思い出すと、自然と笑みがこぼれた。

隣から笑いを堪える声が聞こえ、シュテルはディアーチェへと振り返る。どうかしましたか、と。

「いや、なに。ずいぶんと変わったものだと思ったただけだ」

「変わった……ですか？」

「うむ。最近のうぬは以前よりも笑顔が多くなった」

もつとも、常の無表情と見分けがつきにくい笑顔の方が多いが、とディアーチェが付け加える。そうでしょうか、と首を傾げながらも、そうかもしれないとすぐに頷いた。

「ですがそれは王も同じでしょう。よく笑っています」

「そうか？ ……そうかもしれないな」

二人揃って食卓を見やり、同時に笑みをこぼした。目覚めた頃からでは考えられないことだ。

「それでは」

「うむ。気をつけてな」

ディアーチェの見送りを受け、シュテルは自宅を後にした。

向かった先は、高町家だ。今日一日はなのはと過ごすことになっている。

インターホンを押すと、すぐになのはが顔を出した。シュテルの姿を認め、満面の笑顔を浮かべてくる。おはよう、と嬉しそうに告げてくるのはに、シュテルもおはようございます、と返しておいた。

「早く来すぎましたか」

「そんなことはないよ。大丈夫」

ちよっと待ってね、となのはが室内へと戻っていき、そしてすぐに出てきた。シュテルの隣に並び、言う。

「じゃあまずは、せっかくなので」

「模擬戦といきましょうか」

二人は顔を見合わせ、なのはは照れくさそうに笑い、シュテルも淡く微笑んだ。

模擬戦を終えた頃には、昼を少し過ぎていた。海鳴市のデパートで昼食代わりにデザートを食べ歩きをして、その後はショッピングを楽しむ。声を出しての会話では「このお店の服がかわいい、あそこのデザートが美味しい、といった女の子らしいものだったが、それと同時に進行される念話では、

『やはりあの場面、フェイントよりも真正面から撃つべきでしたね』

『うん。でもフェイントもびっくりしたよ。あんな方法もあるんだね』

先の模擬戦での反省会だ。模擬戦は三回行い、一勝一敗一分けという結果に終わっている。お互いに忙しくなる前に明確な決着を、と密かに思っていたのだが、それは叶わなかった。だが、それでもいいとも思う。いずれまた戦えばいい、と。

ショッピングの後は最近話題の映画を見て、それが終わると夕日が沈もうとしている時間になっていた。今日は高町家で一泊すること

になっているので、二人で帰路につく。

「あれ？ シュウ君だ」

帰路の途中、公園のブランコへと視線を向けるのは。シュテルもその姿を確認して、思わず眉をひそめていた。

ブランコに腰掛けるシュウは、両手で顔を覆い、天を仰いで静止していた。微動だにしないので少々怖くなってくる。

「すみません、なのは。少しだけ」

「うん。大丈夫」

行ってらっしゃい、となのはに見送られ、シュテルはシュウの元へと走った。

側まで来て気づいたが、シュウは何事かをつぶやいていた。あまりに小さな声で聞き取ることができなかったが、どうにも少し危ない人に見えてしまう。

「シュウ」

名前を呼んでみるが、反応はない。小さくため息をついて、シュウの肩を軽く叩く。そうしてやっと、シュウが反応を示した。顔を覆っていた手に隙間ができ、そこからシュテルの顔を確認して、

「うひゃあー」

奇声を発しながら後ろに倒れてしまった。あまりにも突然の反応だったので、シュテルは何もできずに呆然としてしまっていた。

「……………シュウ？」

倒れたシュウに歩み寄ると、シュウが短く一言。

「……………恥ずかしくすぎて死にたいです……………」

「落ち着いてください。どうかしたのですか」

シュテルが手を差し出すと、シュウはその手をしばし見て、その手を取らずに視線を明後日の方向へ投げた。シュテルが首を傾げると、

「……………聞いている？ 聞いえた？」

「何の話かが分かりませんので、聞いていないと思います。独り言のことなら聞こえていません」

そう正直に答えると、シュウはゆっくりと息を吐き出した。ほっと安堵するかのようだ。

「うん。何でもないんだ。忘れて」

そう言いながら、シュウはシュテルの手を取った。ありがと、とシュウが立ち上がる。

「こんなところで一人でどうかしましたか？ フミカと一緒にだったのでは？」

「文花は晩飯の支度中。邪魔になりそうだから散歩してるところだよ」

「なるほど……。ようこそ」

シュウがここに来た経緯は理解した。だが、次はそれ以上に気になることができている。シュテルはシュウの横顔を観察しながら、問うた。

「なぜ目を合わせないのですか？」

う、とシュウの声が漏れ聞こえる。無言でシュウの返答を待っていると、やがてシュウはおそろおそろといった様子でシュテルの方へと顔を向けた。一つのことを除いて、いつも通りのシュウの顔だ。

その一つというのが、顔が真っ赤になっていること。

「シュウ……。大丈夫ですか？ 体調が悪いのなら家に……」

「いや大丈夫何でも無いただちょっといろいろ考えちゃっただけです！」

そこまで息継ぎなしで、慌てたように答えてくる。シュテルが、何を？ と更に問いかけると、シュウは気まずそうにまた視線を逸らした。

「いや、本当にちょっと……。いろいろ聞いてね。今はレヴィに言われたことが……」

シュテルが片眉を持ち上げる。ふむ、と少し考えるように視線を下げ、分かりましたと頷いた。

「レヴィはあとできつく叱っておきます」

「いや違うよー。嫌なことを言われたわけじゃなくてね！ ただその……。結婚とか……」

最後は声が小さすぎて聞き取れなかった。やがてシュウが首を振る。何でも無い、と。

「気にしすぎはよくないね……。ごめんね、シュテル。心配かけて」「いえ……。何かありましたらいつでもどうぞ」

「うん……。ありがとう」

照れくさそうに笑うシュウを見て、シュテルは満足そうに頷いて。そして、

「お気になさらずに。貴方に元気がないと、私も調子が狂いますので」「そう言いながら、淡く微笑んだ。

「もついいの？」

シュテルがなのは元に戻ると、なのはが心配そうに聞いてきた。シュテルは「っ頷き、大丈夫ですと答える。念のため振り返ってみたが、シュウはすでに帰宅したようだった。

「私たちも行きましようか、ナノハ」

「うん。そうだね」

そうして二人も、高町家への帰路についた。

高町家では、豪華な夕食をこ馳走してもらった。桃子曰く、シュテルの門出を祝って、だそうだ。それほどのことでもないだろうとは思いつつも、シュテルは桃子の料理に舌鼓を打った。

「ミッドチルダだっけ？ そこに引越すんだよね」

夕食中、そう聞いてきたのはなのはの姉、美由希だ。そうです、とシュテルが頷くと、美由希がしみじみとした様子で言う。

「そっかあ……。寂しくなるね。妹が増えたみたいで嬉しかったのに」

「はは、そうだな。こうして食べる夕食も最後かもしれないと思うと、それだけで寂しいと思えるよ」

「全くだ。最初は驚いたものだが、今となっては可愛い娘の一人だからなあ……」

恭也、士郎と続く。士郎の言葉は尻すぼみに、やがて目頭を押さえつつむいてしまった。

「本当に……寂しく……」

「あなた……」

桃子が士郎の背を撫でる。恭也と美由希が思わず苦笑している。それを見て、いつの間にか自分は高町家の一員として認められていたのかと驚きながらも、胸が温かくなるのを感じていた。

夕食後、なのはと共に風呂に入り、なのはの部屋で思い出話に花を咲かせた。出会った頃のことや、数多くやってきた模擬戦、共に挑んできた事件のことなど。

「貴方が墜ちたと聞いた時は、さすがに肝を冷やしたものです」

「じゃはは……。あの時のことも、すっごく感謝してるよ？ ずっとリハビリに付き合ってくれたし……」

「さて、何の話でしょうか。覚えていませんね」

とぼけるシュテルに、なのははまたまた、と笑顔を浮かべる。

数年前、なのはは異世界での任務からの帰還中に襲撃にあい、大けがを負った。二度と空を飛べないだろう、と言われたほどだったが、必死のリハビリにより魔導師として復帰できた。シュテルはそのリハビリに、ほぼ毎日付き合っていた。

「シュテルがいなかったら、途中で挫折しちゃってたかも……。だから、本当に感謝してるんだよ」

「あのような形で好敵手を失ってしまうことが不本意だっただけです。それだけですよ」

それが本当でも、私にとってはやっぱり恩人なんだよ。なのはのつぶやきのようなささやき声を、シュテルはあえて聞こえていないふりをした。

思い出話も終わったところで、就寝することになった。なのはの強い希望により、なのはと同じベッドにで眠ることになっている。

「仕方のない方ですね」

「じゃはは。ごめんね？」

「謝るなら戻っていいですか？」

「それはだーめ」

ベッドから出ようとしたシュテルの腕をなのはが捕まえる。シュ

テルはやれやれと首を振って、ベッドの中へと戻った。

「シュテルはあったかいねえ……」

「そうですか」

寄り添ってくるなのは小さくため息を漏らしながらも、シュテルはなのはの頭を撫でてやる。なのはは驚いたようにびくりと体を震わせたが、すぐに幸せそうな笑顔を浮かべ、その身を預けてくる。警戒が一切ない姿。さほど悪い気はしないので、シュテルはなのはが眠るまで彼女の頭を撫で続けた。

翌日。朝食を終えてリビングでしばらく寛いだ後、シュテルは高町家の玄関に立った。今日は休日の最後の日で、シュウと約束がある。シュウが以前暮らしていたアパートでの待ち合わせで、そろそろ出発しなければならぬ。

身支度を調べて靴を履く。見送りに来たのはと一緒に玄関を、高町家を出る。なのは以外の皆は仕事や学校、訓練などで家を空けていた。

「それではナノハ、お世話になりました」

「うん……」

なのはの表情は浮かない。今朝からずっとこの調子だ。気晴らしと一緒に朝食を作ったりもしたが、結局いつもの調子に戻ることはなかった。

「どうかしましたか、ナノハ」

「何でも……ないよ……？」

「……」

せめてもう少し隠す努力をするべきだ、と思うが、その言葉は小さな吐息として無音で吐き出した。

「もう二度と会えなくなるわけではありません。ナノハもいずれはミッドチルダで暮らすでしょう」

「……うん。そのつもりではあるんだけど……。ちゃんとまた、会えるかなって……」

「」の言葉にシュテルはわずかに驚いた。なのはが言おうとしてい

ることは分かる。管理局は決して安全な職場ではない。むしろなのはが選んだ道は常に危険が伴うものであり、シュテル自身も囑託魔導師として働く時は安全な任務ばかりではない。いつ、どこで、誰がいなくなっても、不思議ではない世界だ。

つまりは、弱音。なのはがここまでではっきりと弱音を口にするのは本当に珍しい。無表情が常のシュテルが目丸くするほど驚く程度には。

「貴方らしくもない」

シュテルが小さく首を振る。そうだよ、と眉尻を下げてそのまま笑うのはに、シュテルはそっと手を差し出した。彼女の頬に触れて、告げる。

「貴方なら大丈夫ですよ。あなたの力量は私が保証します。だから自信を持ってください」

「うん……。ありがとう、シュテル」

よつやくなのはが薄く微笑む。いつもの笑顔ではなかったが、さすがにそこまで求めるのも酷だろう。シュテルは小さく頷くと、なのはから距離を取った。

「次はミッドチルダでお会いしましょう。その時は、そうですね。サービスしますよ」

「え？ 奢ってくれないの？」

「……ふむ。考えておきましょう」

「冗談だよ、と笑うのはと、分かっていますと無表情に答えるシュテル。なのはが楽しげに、シュテルは薄く笑う。

「ではナノハ。次にお会いする時まで、貴方の道が勝利に彩られますように」

なのはが目を見つめるのを見て、シュテルは満足そうに頷き、きびすを返した。

今の言葉は、なのはと最初に出会った時、別れ際に送った言葉だ。なのはが覚えているかどうかは分からなかったが、今の反応から察するに覚えていたのだろう。少しだけ気恥ずかしさを覚えてしまっが、それを心地よく感じる。

「シユテル！ 元気でね！ 絶対に会いに行くから！」

「期待しないで待っておきます。無理はしないように」

それでは、さらばです。

そう言い残し、シユテルは足早にその場を立ち去る。これ以上ここに留まると、自分まで辛くなってしまう。そう、感じてしまっている。

なのはが自分たちの店に来られる時間はしばらくは作れないだろう。頻繁に顔を合わせていただけに、それが少しだけ寂しく思う。そう感じてしまっている自分に驚きもする。

「またいずれ……。その時は私の自信作をご馳走しましょう」

小さな声でつぶやいて、その時のことを思い描く。

高町家を後にして、思い人の元へと向かいながら、シユテルはどこか楽しげに笑っていた。

出立（レヴィ）

『子供を人質に取るとは！ ゆるさん！』

『ふはは！ 何とでも言っ方がいいわ！』

デパートの屋上、大きめのステージで今話題の特撮ヒーローと悪の怪人が向かい合っていた。小さな男の子が怪人に捕まっており、男の子は涙目でヒーローを見つめている。あまりに純粋な瞳に、ヒーローと怪人の中の人が心の中でごめんよと謝っていることは誰も知らない。

レヴィはそれを集団の最後列で見ている。隣にはユーリもいて、二人で瞳を輝かせている。ヒーローと怪人が変わっても展開はほとんど同じなのでこの後の話も予想がつくのだが、それでもヒーローが活躍する様はとても格好いい。二人はそのショーを、飽きることなく最後まで見続けていた。

ショーの後、レヴィとユーリはメモを片手に食品売場に来ていた。メモはディアーチェから渡されているもので、そこには買い出しの内容が書かれている。売場の位置まで丁寧に説明されているので、迷わずに食品売場を歩いて行く。それほど時間もかからずに買い物は終わり、二人はまっすぐに自宅のマンションへと戻った。

「やっぱりかっこいいね！ また見たい！」

リビングでレヴィが弾んだ声で言う。レヴィはまっすぐにテレビへと向かうと、電源をつけて目的のチャンネルに合わせた。画面に映るのは、先ほどショーで見たヒーローが主演の特撮だ。オープニングテーマが流れ初め、二人揃って歌う。

「でももう見られないのが残念ですね」

オープニングが終わり、ユーリが沈んだ声でそう漏らす。レヴィはそのことを忘れていたのか、一瞬ばかんと間の抜けた表情をした後、ほんとだ、とつつむいてしまった。途端に重たくなった空気に、隣のキッチンで料理をしていたディアーチェが苦笑した。

「あちらにも同じような特撮ぐらいいはあるだろう。だからそう気を落とすな」

「違うんだよ王様！ このヒーローだからかつこいいんだよ！」

「そうです！ ディアーチェは何も分かっています！」

二人の反論にディアーチェは苦笑を濃くする。それを何度言うつもりだ、と。

ずっと放映し続ける特撮などほとんど存在しない。一つの番組が終わり新しいものが始まるたびに、レヴィとユーリは一時的に落ち込み、そして次のヒーローに夢中になる。そのため今の落ち込みも一時的なものだろう、とディアーチェは心配していない。

「ところ今日の夕食だが、ハンバーグカレーでいいな？」

「カレー！ もちろんだよ王様！」

「ハンバーグですか！ 大好きですディアーチェ！」

夕食のメニューだけで先の落ち込みが嘘のようだ。その二人の様子に笑みをこぼし、ディアーチェは料理に取りかかった。

食卓にディアーチェ特製のハンバーグカレーが並べられる。その頃になって翠屋に出かけていたシュテルが戻ってきた。その手には一冊の本が抱えられている。

「あれ、シュテルん。新しい本も買ってきたの？」

「いえ、もらい物ですよ。夕食後にも読もうかと」

シュテルは本を部屋の隅に置く。そこには引越先へと持って行く荷物が纏められている。量は少なく、大きめのかばんが一つあれば十分収まる量だ。シュテルはキッチンに向かうと、ディアーチェに料理を手伝えなかったことを詫言っていた。

二人も食卓につき、揃って手を合わせる。そしてすぐに一口頬張った。

「うん！ やっぱり王様のカレーが一番だよ！」

「む……。そうか」

ディアーチェがそう言ってそっぽを向く。いつもまっすぐに言いおって、とディアーチェはつぶやいていたのだが、レヴィはカレーに

夢中で聞き取れず、それを聞いたシュテルとユーリが苦笑していた。夕食後はいつも通りにテレビを見て過ごし、少し早めに就寝した。

翌朝。レヴィとユーリが起きた時、すでにシュテルは出かけた後だった。なのはと共に過ごしやすい。食卓にはシュテルが用意してくれている朝食が並んでいた。おにぎりとお味噌汁だ。

「レヴィ。いつ行くのだ？」

味噌汁をすすりながらディアアーチェが聞いてくる。レヴィは味噌汁とご飯を混ぜながら、少し考える。シュテルがなのはと約束しているように、レヴィもオリジナルであるフェイトと約束をしている。ただそう言えば時間を決めてはいなかった。

でも……。なんだか楽しそうにしてたなあ……。

フェイトの顔を思い出す。フェイトの誘いを受けた時の嬉しそうな笑顔。それを見てみると、どうしてか自分も嬉しくなった。

「ご飯食べたら、でもいい？」

「我に聞くな。好きにするといひ」

ありがと、とレヴィはねこまんまを急いで食べ始めた。

朝食を食べ終え、ディアアーチェとユーリに手を振って自宅を後にする。フェイトの家に遊びに行くといつもカレーが出てくるので、それがとても楽しみだ。レヴィ好みの味を覚えたのか、フェイトの作るカレーはディアアーチェのそれに匹敵するほどだと思っている。昨晚もカレーだったが、カレーなら毎日食べられる。

鼻歌を歌いながらフェイトの家へと向かう。行き交う人がレヴィを見て微笑ましいと笑顔を浮かべるが、レヴィはそれには気づかない。もつとも、気づいたところでやめることもないのだろうが。

しばらく歩いて、ようやくフェイトに家にたどり着いた。インターホンを押すと、すぐにフェイトが出てくる。

「おいっすー オリジナルー」

「うん。いらっしゃい、レヴィ」

レヴィの元気な挨拶に、フェイトが柔らかな笑顔を浮かべた。

「うん！ 美味しい！ さすがオリジナル！」

「あはは。ありがとう」

リビングでレヴィイがカレーに舌鼓を打つ。レヴィイの向かい側にフェイトは座り、その様子を微笑みながら見守っていた。フェイトの隣に座るアルフは苦笑するだけだ。

「いつも思うけど、本当に子供だねえ。フェイトとは大違いだ」

「私もまだまだ子供だよ？」

「いや、少なくともこいつほどじゃないと思うけどね」

そうかな、とフェイトが首を傾げる。あまり意識したことがない。

「レヴィイ。晩ご飯は何がいい？」

今日は、シユテルはなのはの家で泊まると聞いている。レヴィイもここに泊まる予定だ。好きなものを作ってあげようと思って問いかけると、

「カレーー！」

「ま、また？ 他にはないの？ 何でもいいよ？」

さすがに二食連続はどうだろうかと思い、聞き直してみる。むっ、とレヴィイは少し考えると、じゃあ、と前置きして、

「ご飯じゃなくてナンのカレーー！」

「……カレーからは離れないんだね」

フェイトは苦笑しつつも、買い物物の計画を組み立て始めた。その隣ではアルフが呆れたような表情をしていた。

昼過ぎ。レヴィイはフェイトに連れられて最寄りのスーパーを訪れた。フェイトと共にカレーの材料を選んでいく。

「ねえねえオリジナル！ これとか美味しそう！」

「だめだよレヴィイ。お菓子は一つまで」

「ぶー」

レヴィイが頬を膨らませ、フェイトが仕方ないなあ、と困ったように笑う。レヴィイが持っていたお菓子をその手に取ると、そのまま買い物かごに入れた。レヴィイが驚いて目を丸くする。

「あれ？ いいの？」

「うん。今日は特別だよ」

「わあい！ さすがオリジナル！ ありがとう！」

甘やかせすぎかな、と思いきもするが、こうして一緒に買い物をするのは、少なくとも海鳴市では最後だろう。少しぐらいの我が儘なら聞いてあげようとも思える。

スーパーをゆっくり回っていると、目の前から見知った二人組がこちらへとやって来ていた。レヴィもすぐに気がつき、嬉しそうな表情をする。相手の二人もこちらに気づいて、意外そうな表情をした。

「こんなところで会うとは思わなかったよ。こんにちは、フェイト」
笑顔でそう言うのは、シュウ。シュウが押す車椅子に座る文花も、こんにちはと頭を下げる。

「シュウ、ボクには？」
「いつも会ってるからいいかなと思ったんだけど。こんにちは、レヴィ」

そうやってシュウがレヴィの頭を撫でると、レヴィが嬉しそうに相好を崩した。

「二人も晩ご飯のお買い物？」

フェイトが聞いて、文花が頷いて答える。

「はい。せっかくだからお兄ちゃん好きなものを作ろうと思ったんですけど……」

最後に言葉を濁し、背後のシュウを睨むように振り返る。フェイトが困惑していると、レヴィが得心したように手を叩いた。首を傾げるフェイトにレヴィが説明する。

「シュウには好きなものがないんだ！」

「ちょっとレヴィ、それだと僕がとても嫌な奴に聞こえるんだけど」
きょとんとするレヴィにシュウがため息をついた。その一連の流れでフェイトは理解する。つまりシュウは、レヴィにとってのカレーのような、一番好きな料理、というものがないのだろう。

「作る側にとっては何でもいいが一番困るんです……」

「あ、あはは……」

文花の、シュウに負けず劣らずのため息には苦笑を漏らすしかな

い。レヴィの好物が分かりやすくて良かったと少し思ってしまった。

「とじろでレヴィ。さっきディアーチェと会ったよ」

「王様に？」

レヴィが目を丸くする。王様は今日は何をするんだっけ、と腕を組んで考え始めた。すぐに思い出したのだから、手を叩き、

「ユーリと一緒に出かけだった！」

「うん。はやてと一緒にいたよ。ちょっと喫茶店のごとで聞いていないことをいきなり言われて、すごく驚いた……」

「……何があるの？」

複雑そうなシユウの表情が気になり、フェイトがレヴィに問いかける。だがレヴィも首を傾げ、知らない、と首を振る。レヴィに知らされていないのか、単純にそれと気づいていないのか、どちらかは分からないが。

「王様が聞きにくいことがあるって言ってたけど、それは違うような気もするし……」

「え？ なに？ その言い方、すごく気になるんだけど」

途端にシユウが不安げに聞いてくる。レヴィは一度頷いて、真顔で言った。

「シユウってシユテるんといっ結婚するの？」

レヴィのその一言でもたらされた反応は、三者三様、そして劇的だった。

シユウが一瞬唖然とした後、見る見るうちに顔を赤くし、いやそれはちょっとなんというか、とじろもどろになっている。文花はそんな兄の様子を興味深そうに、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて観察し、フェイトは顔を真っ赤にして、しかしやはり興味があるのかシユウの反応をじっと見ていた。

「とじろで結婚って何するの？」

「あ、知らないのか！ いや何だろうね！ 分からないなあ！」

ちょっと外に出るよ、とシユウが慌てたようにその場を走り去る。

逃げたな、とフェイトと文花は笑っていた。

「文花。車椅子は私が押すから、一緒に買い物する？」

「あ、はい。じゃあお願いします」

文花の車椅子の後ろに回り、押し始める。レヴィは、どうしたんだろう、とずつと首を傾げていた。

悪気が一切ないってというのが、レヴィの怖いところかな……。

レヴィを手招きしながら、フェイトは苦笑していた。

夕食後。レヴィはフェイトお手製のナンを大喜びで食べてくれた。焼きすぎたかな、と思えた量だったが、レヴィはそれを苦も無く平らげてしまっている。むしろお代わりを要求されたほどだ。さすがに材料がなかったためにパックのご飯で我慢してもらったが。

「ごちそうさまでした、と手を合わせ、二人で片付けを始める。洗い物をしながら、フェイトはレヴィの家族の話はずっと聞いていた。レヴィが家族の話をする時は、とても楽しそうに、自慢げに話してくれる。皆のことが好きだということがよく分かる。

「そう言えばオリジナルの家族の話聞いたことがないような……。せっかくだから教えてよ」

そうレヴィにせがまれて、フェイトは少し考える。フェイトにとつて、レヴィは妹のような存在だと言える。話しても問題ないだろう。他言無用だと言えば、レヴィはきつと守ってくれるはずだ。

「そつだね。じゃあ長くなるから、寝る時にもいいかな?」

「いいよー。じゃあお風呂だー!」

「え、レヴィ、ちょっと待ってー!」

早く話が聞きたいのか、レヴィがバスルームへと駆けていく。フェイトも慌ててそれを追った。

「……………ほんと、ガキンチョだね」

アルフは一人、リビングでテレビを見ながらそんなことをつぶやいた。少しだけ、フェイトに構ってもらえないことを寂しく思いながら。

フェイトの部屋のベッドに、フェイトとレヴィは一緒に横になって

いる。最初はフェイトがベッドを譲ろうとしていたのだが、

「ええ！ オリジナルも一緒に寝ようよー！」

レヴィのその一言により今の状態になった。そして今は、フェイトの家族のことを話し終えたところだ。

「ふうん……。オリジナルにも色々あったんだね」

「あはは……」

ジュエルシードを巡っての事件を説明したが、その一言で片付けられてしまった。レヴィにとっては資料などで知っていることが多かったため当然なのかもしれないが。

「じゃあオリジナルのお姉ちゃんとは会えないのか。残念」

「うん……。私も会って見たかったんだけど、ね」

フェイトはアリシアのことは記憶でしか知らない。実際に会ったことなど一度もない。一度ぐらいは会って話をして見たかったと思うが、アリシアが死ななければ自分は生まれなかっただろう。そう思うと、複雑な心境になってしまう。

「よおし、オリジナル！ 今日はボクがお姉ちゃんだ！ 好きなだけ甘えてもいいぞー！」

レヴィのそんな言葉にフェイトは目を見開き、次いで微笑んだ。レヴィの頭を撫でる。

「ありがとう、レヴィ」

「えへへー、もっと撫でて……って、違うよ！ 甘えてって言うてるんだよー！ でももっと撫でてー！」

「うん。なでなで」

えへへ、とだらしなく相好を崩すレヴィ。やっぱり姉というよりは妹かな、とフェイトは思いながら、レヴィの嬉しそうな笑顔を飽きずに見つめ続けていた。

翌日。

フェイトはレヴィを見送るために玄関まで来ていた。ちなみに朝食が昨日の残りのカレーだったことは言うまでもないだろう。

「それじゃ、元気でね、オリジナル」

レヴィが元気よく手を振る。彼女はこれから自分たちの部屋の片付けの仕上げをするそうだ。手伝おうかとも思っていたが、レヴィにそれはだめ、と拒否されてしまっている。家族の大事なものもあるから、だそうだ。

「レヴィも元気だね。こっちも落ち着いたらお店に行くから」

「うん！ その時はボクの手料理をこ馳走してあげよう！」

「……料理できたの？」

「……次に会う時までにはがんばる」

「えっと……。た、楽しみにしてるね？」

顔を逸らして答えるレヴィにフェイトは反応に困ってしまう。レヴィは一度しっかりと頷くと、

「だからオリジナル、ちゃんと店に来るんだぞ！ 待ってるからな！」

「……っ。うん。絶対に行くから……」

レヴィなりの激励なのだろう。フェイトは嬉しそうに微笑み、そして、

「じゃ、またね！ フェイト！」

レヴィの最後の言葉に、フェイトが目を丸くして絶句した。その間にレヴィは走り去ってしまう。ようやく立ち直った時には、すでにレヴィの姿は見えなくなっていた。

「……名前……呼んでくれた……」

そのことが嬉しくて、フェイトの頬は自然と緩んでいた。

「わてとー！ 今日も一日がんばらう！」

楽しげに鼻歌を歌いながら、レヴィは歩く。ふと振り返り、フェイトの住まいを見て、

「元気だね、フェイト」

とびきりの笑顔でそう言った。

出立（ディアーチェ）

シュテルとレヴィがなのはとフェイトの家へと向かってから。ディアーチェとユーリは二人だけで洗い物をしていた。それほど多くのものがあるわけではないので、それもすぐに終わる。洗い物を終えて、それらの食器を新聞紙で包んで段ボール箱に入れる。しっかりと封をして、部屋の隅に置いた。

一段落して、ディアーチェはキッチンとリビングをゆっくりと見回す。ユーリも同じように部屋を見て、寂しくなりましたね、と小さくつぶやいた。

「うむ。もうすぐ引き払う故に当然なのだが、少し寂しくも感じるな」「はい。たくさん思い出が詰まっていますから……」

できることなら、ここも手放したくはない。ユーリはそう思っているのだろう。ディアーチェも未練がないと言えば嘘になるが、残しておいても意味がないのもまた事実だ。使わないもののために維持費を払い続けるわけにもいかない。金銭面ではまだ余裕はあるが、この先がどうなるかわからないのだから。

ユーリもそれが分かっているのだろう、寂しそうにしてはいるが、残しておきたいとは口にしない。ユーリが言えば、ディアーチェがどうにかしようとする可能性が高いためだ。ただ、せめて、と思うことはある。手放す前に、綺麗にしていこう、と。

ユーリのその提案にディアーチェが賛同し、昨日は午前中は部屋の掃除をして過ごした。それでもまだ少し時間が余ったので、残りは図書館で静かに読書をしていた。掃除以外はいつもと変わらない一日だったが、それでも充実していたと自信を持って言える。

「さて、では我々も行くとしようか」「はー」

シュテルやレヴィと同じく、ディアーチェもはやてに招待されている。ただディアーチェはあまり乗り気ではなかったが、断るうとして

いるディアーチェを見たはやてが、とても悲しげに自分を見つめてきていた。それ故にどうにも断れなくなり、ユーリも同行していいのならと行くことになっている。

「まったく、なぜ我がわざわざ出向かねばならんだ……」

文句を言いながら靴を履くディアーチェ。そんなディアーチェを見て、ユーリは忍び笑いを漏らした。どうした、と聞くと、ユーリが笑顔で答える。

「ディアーチェは口では色々言いますが、はやてさんととても仲が良いですよね」

「は………？ いや待て、なぜそうなる……」

「でももっと素直にならないと、はやてさんの方が嫌っちゃいますよ」

そんなことを言いながら、靴を掃き終えたユーリがディアーチェの横を通り過ぎる。だから違うと言っているだろうに、とディアーチェも慌てながらそれを追った。

はやての家へと向かいながら、ディアーチェは途中の公園の時計で時間を確認する。十一時過ぎ。お昼ご飯までに来て欲しいと言われていたが、十分間に合うだろう。

「あ、王様……」

そう思っていたのだが、聞こえてきた声にディアーチェはため息をついた。進行方向から聞こえてくる声で、そちらへと視線を向けるとはやてが手を振っていた。なぜここに、と思うが、すぐにその答えを予想する。おそらくは、

「お昼ご飯ができたからなあ。迎えに来たで」

「ああ、そうであるかな……」

ディアーチェがやれやれと首を振る。こんなことならもう少し早く出れば良かった、と。

「なぜ道中まで貴様と行動を共にしなければならんだ」

「ええ、ひどいわ、王様。あたしは王様と会えるのが楽しみやったのに」

「我は会いたく……。ええい、そんな顔をするな！」

悲しげに顔を伏せるはやてにディアーチェが叫ぶ。いつものやり取りなので当然はやての意図にも気づいているのだが、なぜか演技と分かっていても見たくはないと思ってしまう。

「王様はあまあまですねえ」

「ですねえ」

背後からの声が一つ増えていた。頭を抱えなくなる衝動を堪えながら振り返ると、ユーリの隣にはいつの間にか小さな人影が増えている。リインフォースの名を受け継いだはやてのユニゾンデバイスだ。

「外に出るな、リイン。何も知らぬ者に見られるだろう」

そう苦言を呈すると、リインと呼ばれた子は残念です、と気落ちしながら返事をして、はやての元へと戻っていく。彼女の服の中へとその姿を隠した。

「もう少し注意させろ、子鴉」

「あはは、ごめんな？ でもリインも久しぶりに王様たちに会えて嬉しいんやと思うよ？」

それは何となくだが理解できる。特にユーリはリインと仲が良い。ディアーチェが仕事などで出かけユーリが留守番をする時など、よく八神家へ、リインに会いに行っていると聞いている。もっとも、同じようにリインも家にいれば、の時だけだが。

ただ、最近は引越しなどの準備で会いに行けていないとも聞いていた。それ故に久しぶりに会えてお互いに嬉しいのだろう。邪魔をするのは無粋だと思うが、せめて誰にも見られない家まで我慢してほしいと思う。

ただ単純に、あまりおもしろくない、と感じてしまったためかもしれないが。

「じゃあ、行」か

はやてがそう言うのと、もう一つの声が届くのは同時だった。

「あれ？ ディアーチェにユーリ。はやても一緒だなんて珍しいね」

声の主を求めて公園へと視線を投げる。公園の入り口にシユウが立っていた。

「シュウか。どうしたのだ？」

ディアーチェが聞いて、シュウが答える。

「散歩、だよ。文花の邪魔にならないように。ちなみにお昼ご飯作ってくれます」

「ふむ。そうか」

昼食の予定がないなら作りに行くのも悪くない、と思ったのだが、どうやら心配する必要はなかったらしい。早めに戻って一緒にいてやれ、と言つと、シュウは少し考える素振りを見せ、やがてしっかりと頷いた。

「次はいつ二人で過ごせるかは分からないしね。じゃあ戻るよ」

そう言つて、きびすを返すシュウ。その背中へと、ディアーチェは思い出したかのように口を開いた。

「ああ、そつだ。事後承諾になるが、言っておくことがある」
「ん？」

「事業開始の書類だがな、店の責任者、つまりは店長にはうめの名前を書いておいた」

シュウの動きがぴたりと止まる。はやても初耳だったのだろう、目を丸くして驚いていた。

「な、なんで僕が店長？ ディアーチェじゃないの？」

シュウのその問いにディアーチェが首を振った。薄く苦笑の色をにじませ、言つ。

「我は料理を作らなければならんのでな。それに、うめは経営の勉強をしていると言つていたであらう。適任だ」

それはそうかもしれないけど、とシュウの笑みが引きつっていく。ディアーチェはそんなシュウから視線を逸らし、はやてを促して歩き始める。

「よろしく頼むぞ、店長」

ディアーチェが悪戯っぽく笑いながら言つと、シュウは目を睨り、やがて、まあいいかと頷いていた。

「シュウ君が店長さんかあ」

八神家のキッチンにて、はやてが昼食を作りながらそう口を開いた。ディアーチェはリビングで本を読みながらそれを聞く。返事はしない。

一方的に世話になるのは不本意だからとディアーチェは手伝おうとしたのだが、はやてがそれを拒否した。晩ご飯の時にお願いします、と。

「シユウが経営……でしたっけ。それを勉強してるって聞いた時から実は決まっていた」

はやてに答えるのは、ディアーチェの隣に座るユーリだ。ユーリの目の前にはラインがいて、こちらも一人で本を読んでいた。

「へえ……。じゃあ早めに教えてあげたら良かったのに。ミッドチルダと日本やとやっぱり細かいところで違っやろっし」

「それは考えたが、シユテルと相談して学校が終わってからと決めたのだ。こちらの勉強にまで時間を使って学生生活に悔いを残してもらうては困るのでな」

「なるほどなあ。さすが王様、優しいな！ そんな王様にご褒美のあめ玉やー」

「いるか阿呆ー」

「あ、私は欲しいです」

「む……。よこせ子鴉」

はやてに怒鳴っていたディアーチェだったが、ユーリの言葉ですぐに表情を改めた。はやてが笑い出しそうになるのを堪えながら、あめが入ったかごをディアーチェに渡す。それを受け取り、目の前のテーブルに置いた。

ユーリが瞳を輝かせ、ディアーチェとはやてを交互に見る。はやてが、遠慮せんといてな、と言い、ディアーチェが頷くのを見て、ユーリは嬉しそうに飴へと手を伸ばした。

「でももつすくっすちも出来上がるから、あまり食べ過ぎんようにな」
「？」

「はいー。もちろんですー」

ユーリの笑顔を見て、はやてが目を細める。遠くを見るような、懐

かしい思い出を思い出すかのようだ。ディアーチェはそのはやての表情を見て、何も言わずに本へと視線を落とした。

リンフォース。リンの先代は数年前に旅立った。そのリンフォースともユーリは仲が良かったようで、やはり八神家へとよく遊びに行っていたそうだ。ユーリの笑顔は、リンフォースのことを思い出させるのかもしれない。

「子鴉」

ディアーチェが呼ぶと、はやてがはっと我に返った。照れくさそうに苦笑してキッチンへと戻っていく。

そんなはやての背中をディアーチェが少しだけ気遣わしげに見ていたのだが、そのことには誰も気づかなかった。

「ただいまー！」

玄関から元気な声が届く。駆けてくる足音に続いて顔を覗かせた相手に、ユーリは笑顔で言う。

「おかえりなさい」

「ただいま！ そっか、今日はユーリが来る日か」

声の主、ヴィータが得心したように頷く。彼女に続いて、シグナムとシャマル、ザフィーラもリビングへと入ってきた。ザフィーラは狼の姿だ。三人とも挨拶を交わす。

「ユーリちゃん、はやてちゃんは？」

シャマルが聞いて、ユーリがキッチンへと視線を向けた。

「ディアーチェとご飯を作っていますよ」

「え……。あの二人が？ 一緒に？」

信じられない、といった様子のヴィータに、ユーリは思わず苦笑してしまった。ヴィータの反応は正しく、一緒に料理を作ることとは今までにほとんどなかったはずだ。

「一緒にといっても、二人で分担しているだけみたいで……」

「貴様！ それは作りすぎだろうが！ 何を考えているのだ何を！」

「あはははははー！」

「笑い事かあー！」

突然響き渡るディアーチェの怒声とはやての笑い声。ユーリとリインが顔を見合わせて笑い合い、ヴィータが驚きで目を丸くする。シグナムはやれやれと首を振り、シャマルは困ったような笑顔を見せる。ザフィーラは、ため息。

「でもまあ、いつも通りだよな」

ヴィータが言って、シグナムもそうだな、と頷いた。

「でもこのままじゃ心配ね。ちょっと手伝ってくるわ」

「いやそれはいいと思うー」

「そうだシャマル！ 疲れているだろう、まあ座って休め！」

キッチンへと向かおうとしたシャマルを慌てて止める守護騎士たち。ザフィーラまでがシャマルの通り道を塞ぐほどだ。息の合ったコンビネーションである。

「この光景もいつも通りですよ」

「あはは、そうですね」

ユーリとリインはそう言って笑い合った。

食卓に豪華な料理が並ぶ。テーブルの中央に並ぶ五枚の大皿には五種類のおかずがそれぞれ盛られているのだが、中でも目を引くのは中央の大皿。唐揚げがこれでもかというほどに盛られ、ちよっとした山になっていた。どうやらこれが、ディアーチェが作りすぎだと怒っていたものらしい。

「喜べ。ギガウマの唐揚げが山になっているぞ？」

ディアーチェが発する珍しい皮肉にヴィータの表情が引きつる。ディアーチェの隣、はやては楽しそうな笑顔でヴィータを見つめている。シグナムたちは誰も視線を合わせようとはせずに食器の準備を黙々とこなしていた。

「たくさん食べられますねー」

「食べられますねー」

ユーリとリインが柔らかい笑顔で嬉しそうに言う。その二人に毒気を抜かれたのか、ディアーチェは力なくため息をついた。食器の準備を終えて全員が食卓についてから、

「これだけ人数がいれば……何とかなるだろう……」
小さな声でそうつぶやいた。

なぜこうなる？

心の中でディアーチェは自問する。答えは決まっている。自分に甘さが残っているからだ。

夕食はいつも通りはやてと料理の批評を交わし合った。はやては料理の腕に関しては確かだ。お互いに学べるところがあると思っ
ている。口には出さないが、それに関してははやてを信頼していた。

夕食までいい。ディアーチェは思う。問題はなぜ自分がここに
いるかだ、と。

「よし、準備完了や！ さて、寝よか？」

ディアーチェへと笑顔を向けてくるはやて。ディアーチェはそれ
を一瞥して、不愉快そうにそっぽを向く。それでもはやては楽しそう
に笑ってくる。

夕食後。ディアーチェとユーリは八神家の空き室に泊まること
になっており、いざその部屋に向かうところではやてが言い出した。

「王様……せっかくやし一緒に寝よ？」

無論その言葉に対する返答は、断るといふ短いものだ。ユーリを
一人にするわけにもいかない、という思いもあったのだが、

「じゃありん。今日は私と一緒に寝ませんか？」

「はい、もちろんですよー！」

さらりと決まったユーリとリンの就寝。ディアーチェが言葉を
失い、はやては笑みを深くする。

「王様。一緒に寝よ？」

「だ、誰が貴様となど寝るか！ 我は一人で寝る！」

「ええ！ そんなさみしいこと言わんと！ なあ、お願いやから、ね
？」

「誰が！ 貴様となど！ 一緒に！ 寝るか！」

一語ずつ言葉を匂切り、はつきりと言ってやる。そしてあてがわれ
た部屋に向かおうとしたディアーチェの背へと、はやての悲しげな声

が届けられた。

「最後の機会やるつから、と思ってたんやけどなあ……。やっぱり、あかんか……」

びたり、とディアーチェの動きが止まる。ふっとディアーチェが笑みをこぼす。何度も使われた手だ。未だ騙されるほど自分は馬鹿ではない。

「もうその手には乗るか。大人しく一人で……」

振り返りながらのディアーチェの言葉は、途中で途切れてしまった。はやてを見て、動きを完全に停止、思考も止まっている。

いつもの雰囲気はなく、悲しげに顔を伏せたまま、無理強いはあるか、とつぶやいてきびすを返すはやて。いつもの元気さはなく、とぼとぼと一人で歩いて行く。泣きそう、とは言わないが、それでも本当に悲しげな姿。

久しく見るその姿に、ディアーチェは絶句する。このようなはやての姿を見たのは、ただの一度だけ。リインフォースが旅立った日だけだ。

ディアーチェはとても長いため息をつくと、寝室へと足を向ける。

そして、

「早くしろ」

「え……？」

「我らも明日はやることがある。早めに休みたい。だから早くしろと言った」

ぶつきらぼつにそう告げて、はやてを追い抜いて彼女の寝室へ。はやては一瞬呆けた後、満面の笑顔を浮かべた。とても嬉しそうに、自分の寝室へと向かう。

「やっぱり王様、大好きやー！」

「ええい、抱きつくな阿呆！」

ディアーチェの叫びは空しく部屋に響いただけだった。

「優しいですねー。ユーリさんがちょっと羨ましいです」

二人が消えていき、未だに騒がしい寝室の扉を見つめながらリイン

が笑う。ユーリもその扉を優しくな笑みで見つめながら、頷いた。「私たちの自慢の、優しい王様ですから」

まったく、なぜ我がこやつとなど……。

ベッドの中で、ディアーチェは心の中でため息をついた。隣でははやてが整った寝息を立てている。それを見て、かつて一度だけ見た姿を思い出し、最後ぐらいは良いかと考えを改めた。

ディアーチェは思い出す。リインが生まれる前。リインフォースが旅立つ日のことを。笑顔で見送って欲しいというリインフォースの言葉を受け、はやては彼女が消えるその時まで、ずっと笑顔だった。もつとも、最後は泣き笑いに近いものになっていたが。

消えた後、少し一人にしてほしいとはやては一人で自宅へと戻った。何となく一人にするのは愚策だと思い、ディアーチェは黙ってその後を追う。そして見たのは、リビングで泣き続ける、見たこともない姿だった。

かける言葉が見つからないディアーチェは、黙ってキッチンに入り、ホットココアを一人分入れてから戻る。テーブルに突っ伏して嗚咽をもらすはやてに、置いておくぞと一言言って、そして彼女の隣に座った。

そこから先は何もしていないし、何も言っていない。それが正解だったのかは今でも分からない。ただ、長い時間泣き続けたはやてがようやく顔を上げた時、とても照れくさそうな笑みを浮かべていて安堵したものだ。

「ありがとな、王様。隣にいてくれて」

「貴様のためではない。ここに用事があったただけだ」

少しでも心配したなどは絶対に言えない。ディアーチェはそう答えると、はやてから視線を逸らした。はやては、それでもありがとな、とやはり笑っていた。

「なあ、王様。起きよる？」

記憶を辿っていたディアーチェは、隣からの声で我に返った。そち

らへと顔を向けると、自分を見るはやてと目が合った。

「なあ、王様。聞きたいんやけどな？」

「何だ」

「やっぱり管理局に入るつもりはないんやでな？」

ディアーチェは小さくため息をつく。はやてから何度も聞かれたことであり、それに対して自分は同じことを答えている。つまりは、

「阿呆か責様は。管理局に入って我らに何の利点が……」

「隣に王様がいてくれたら、安心やから」

ディアーチェが目を睨り、口を閉ざした。何を言っているのだ、とはやては真剣な表情で続ける。

「あたしはまだまだ世間知らずや。だから、一人やと不安で……」

「騎士共がいるだろう」

「うん。でもみんな、王様ほどはつきりとは言ってくれへんからな……。王様なら、間違ってたら無理矢理にでも引き戻してくれるやろ？」

「だから、一緒に来てくれへんか？」

はやてのその言葉を真正面から受け止め、ディアーチェは小さく嘆息した。どうやらはやてはずっとこれを言いたかったらしい。

「もちろん、マテリアルのみんなそろって来てくれてもええよ？」

まるで引き抜きだな、とディアーチェは内心で苦笑する。そして、言った。

「管理局と関わる気はない。我らは誰にも縛られたくはないのでな。我らを縛っていいのは、我らだけだ」

「ん……。そっか。そっやでな」

変なこと言っでごめん、とはやては照れくさそうに笑う。じゃあおやすみ、と今度こそはやては瞳を閉じた。程なくしてから隣から整った寝息が聞こえ始める。

ディアーチェははやての寝顔を一瞥すると、自分も瞼を閉じた。

もう少し、言い方があったか……？

心の中でそんなことを考えながら。

翌日。朝食を済ませ、ディアーチェとユーリは八神家を出る。見送りにはやてとリインだ。騎士たちは管理局での仕事のためにすでに家を出ている。はやてもこの後すぐに行かなければならぬらしい。

「無理に見送りなどせんでも良いだろう」と

「あはは。そんな寂しいこと言わんといてや」

ディアーチェの言葉を聞いてはやてが笑う。その二人の側では、

「絶対に来てくださいな。約束、ですよ？」

「はい！ もちろん行きますよー！」

ユーリとリインが手を取り合って仲よさそうに話をしていた。それを微笑ましく思いながらも、ディアーチェはユーリを促す。行くか、と。

「はい。行きましよう、ディアーチェ」

名残惜しそうにしながらもユーリがディアーチェの側へ。手を振るはやてとリインに見送られながら、ディアーチェたちは八神家を後にする。

「……ああ、そつだ。子鴉」

途中でディアーチェが振り返り、はやてが首を傾げた。

「昨日のことだな……」

「え……？ あ、ああ！ 忘れてええよ！ むしろ忘れてー！」

慌てたように手を振るはやてに、なら言つなという言葉は心の中で留めた。その代わりに、一晩考えた末の言葉をはやてに告げる。

「我らは管理局に関わるつもりはない。だが、まあ……」

そこまで言いかけて、少し気恥ずかしく感じてディアーチェはそっぽを向いた。その先にユーリの笑顔があつて、赤くなりつつある顔を見られないようにさらに顔を背ける。

「貴様らの頼みなら、少しぐらいなら手を貸してやらんでも、ない」

「え……。王様、それって……」

啞然とした様子でつぶやくはやてへ、ディアーチェは顔だけ振り返り、

「だからたまには顔を出すといい。はやて」

そつ言い終えると、足早に歩き出す。今までのことがあるだけにと

ても恥ずかしい。はやての顔を見ないようにして急いでその場を離れていく。そのすぐ後ろを歩くユーリは、嬉しそうに微笑んでいた。

「あはは……。どうせやったら、もっとはっきりに言ってくれたらええのになあ」

ディーアーチエたちが見えなくなるまで見送ってから、はやては家の中へと戻る。そろそろ準備をしなければならぬだろう。そのはやての背中を追ってくるのは、ラインだ。

「はやてちゃん。泣いているのですか？」

おずおずといった様子で問いかけてくるラインに振り返り。

「大丈夫や、ライン。嬉しかったただけやから……」

泣き笑いの表情を浮かべながら、そう答えた。

出立（後編）

「それじゃあ皆、高校生になってもがんばるんだぞ。もちろん就職する子たちもだ」

担任教師は笑顔でそう言うと、いつもの終礼の挨拶をして教室を出て行った。シュウは自分の席でその教師を見送り、彼が出て行く直前に頭を下げた。

今、シュウがいるのは自分のクラスの教室だ。先ほど卒業式が終わったところで、学校生活最後のホームルームもたった今終わった。この学校に通うほとんどの学生はこのまま高校にエスカレーター式に上がるので、よくある涙の卒業式とはなっていない。シュウを含むごく一部の生徒は高校には行かずに就職するので、数少ない例外には感慨深いものはあるが。

シュウは今までの学校生活の思い出を振り返り、目を閉じて懐かしい記憶に浸る。しばらくそうしていると、誰かがシュウの肩を叩いた。我に返ったシュウが振り返ると、そこにいたのは同じクラスの友人だ。優しく明るい少年で、クラス委員長も務める人気者。ただし少々お節介な面もある。それでもそれを含めて、シュウはこの友人が好きだったりもする。

「シュウ。これからみんなでカラオケに行くけど、来るかい？」

「ごめん、ちょっと用事が……」

「そうなのかい？ 君の送別会も兼ねようと思っていたから、是非とも来てほしかったんだけど……」

それを聞いたシュウは申し訳ない気持ちになってしまった。普段、彼が率先してカラオケなど外の遊びを主催することは少ない。もしかすると、シュウのためにと計画してくれていたのかもしれない。そう思うと行くべきかとも思うが、用事があるのも事実だ。今日と明日は文花と兄妹水入らずで過ごす決めている。

「あかん、あかんで委員長……」

委員長の肩を掴んで誰かが叫ぶ。シュウは彼を認識した瞬間、困っ

たよつに微苦笑する。

コウが意地悪そうな笑みを浮かべて、そこにいた。その笑みを見て確信する。余計なことを言うたろうな、と。そしてその予感は的中した。

「シユウはなー！　これから愛しい彼女とデートなんやー！」

委員長が驚きで目を丸くし、その会話を聞いていた周囲の生徒が息を呑む。それらの視線が一斉にシユウを捉え、シユウは困ったように頬をかいた。

「シユウ！　どういふことだー！」

「彼女、だと……？　裏切りものめー！」

「西崎……。信じていたのに……」

その騒ぎからクラス中の視線を浴び、シユウの彼女のことが瞬く間にクラス中に広まり、非難の言葉が浴びせられる。もちろん、純粋な悪意の言葉はさすがにないが。

なんだこれ。

そう思わずにはいられない。誰か收拾を付けてくれないかなとも思うが、こういう時に頼りになる親友は、逆にこの騒ぎのきっかけを作った張本人だ。当てにならない。委員長もどうしたものかと困り果てている。

引きつった笑みを浮かべながら、シユウはすぐに解決策を思いついた。簡単なことだ、仕返しすればいい。

「彼女、かどつかは分からないけど、親しい女の子がいるー！」

シユウの清々しいまでの開き直りに、クラス中から戸惑いの声がかかる。羨ましそうな声も多数含まれているが。

「言い訳はしないけどね。でも、コウにだけは言われたくないな」

シユウがゆっくりと笑顔を浮かべた。目の前のコウが首を傾げ、そしてすぐに、やばい、と顔面蒼白になる。クラス中の視線が、今度はコウに突き刺さった。

「ねえ、コウ。……人の妹に手を出しておいて、どの口が言うのかな？」

東江幸司、ただいま西崎文花と交際中。

「ちょ、シュウ！ それはさすがに……！」

「まさかコウ、シュウの妹さんに手を出したのかい……？」

委員長の、信じられない、と驚愕の視線を向けられ、たじろぐコウ。そして非難の声はコウへと向けられる。

「お前、よりにもよってクラスメイトの妹とか！」

「それはない！ それだけはない！」

「この獣め！ テメエは地獄に落ちろ……！」

「そこまで言うかつ？」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ続けるクラスメイトたち。無論、本当に怒っているものなど一人もいない。誰もがそれを理解している。シュウはその騒ぎを見ながら目を細め、このクラスで良かった、と心の底から思った。カラオケに行けば本当に楽しいのだから、文花との約束は破りたくはない。

「委員長。デートとかはコウの冗談だけど、文花と約束してるんだ。就職で遠くに住むことになってなかなか会えなくなるから、今日と明日は文花と過ごすって」

「ああ、なるほど……。それは邪魔できないね」

委員長は朗らかに笑うと、シュウの背を叩いた。

「元気でね、シュウ。文花ちゃんによろしく」

「うん。元気でね、委員長。楽しかったよ」

シュウは笑顔でそう言って手を振ると、教室を後にした。

お世話になった学校を後にして、シュウが向かった先は、以前住んでいたアパートだ。未だに契約されたままの自分の部屋に入る。もうほとんどここには戻ってきていないというのに、掃除はしっかりとされていた。

「お帰り、お兄ちゃん」

その部屋の中央で、文花が笑顔でシュウを出迎えた。

「ただいま、文花」

シュウも笑顔を浮かべ、部屋の中に入る。部屋の中に荷物はほとんどなく、今では中央にテーブルと座布団があるだけだ。他のものは撤

去、または処分済みである。

「文花、今日の予定は？」

今日と明日は文花に付き合う。その時に何をするかは文花に任せ
るつもりだった。文花は指をあげて、少し考えるような仕草をし
た後、答える。

「今日は特にない、かな？ のんびりしようよ」

文花の返答に、シュウは苦笑する。それでいいの？ と。文花も照
れくさそうにしながらも、いいの、と頷いた。

「じゃあ夜までのんびりとお喋りしようか」

「うん。」

文花の嬉しそうな表情に、シュウも頬を綻ばせた。

結局、その日は本当に夜まで他愛ない話をして、一日を終わらせて
しまった。

翌日。その日も文花の希望は普段通りの一日だった。

「本当にそんなのでいいの？ 買い物でも映画でも、何でも付き合う
よ。」

「いいの。今日一日お兄ちゃんを独り占めできるだけで満足だから」

「そう……？ なら、いいんだけど」

いまいち文花の考えが分からない。ただ、それでも。文花がそれで
いいと言つのなら、自分はそれに付き合つまでだ。今日ぐらいは普通
の兄妹らしく過ごそうと心に誓った。

夕食の買い物や散歩には出かけたが、やはり一日文花と話をしてい
ることの方が多かった。今までの思い出話に始まり、今後の予定の話
などをする。夜はそれに加えて、今日シュテルたちと会って言われた
ことも語った。

「へえ、お兄ちゃんが店長さん……」

「うん。いつの間にかそうなつてたみたい」

「……お店、潰しちゃだめだよ？」

「僕を何だと思ってるんだ」

シュウが無然とした態度でそう言つと、文花は忍び笑いを漏らす。

まったく、とつぶやきながらも、シュウはすぐに笑顔に戻った。

「レヴィさんが言っていたこと、私も気になるかな」

唐突な話題転換。シュウが怪訝そうに眉をひそめ、何だっけ、と首を傾げる。

「シュテルお姉ちゃんといっ結婚するの？」

「……………」

シュウの動きが止まった。表情すら眉一つ動かさない。まさか、文花からも聞かれるとは思わなかった。

「お兄ちゃん？」

「いや、うん……。結婚、か……………」

正直なところ、考えたこともなかった。いつも一緒にいることが普通過ぎて、それ以上を求めようとも思っていないかった。ただ、隣にいてくれるだけでシュウは幸せな気持ちになれる。だが、それはあくまでシュウの感情だ。

シュテルはどう思っているのだろうか。そう考え始めたことを察したのか、文花が肩をすくめて言う。

「シュテルお姉ちゃんがどう思ってるか、でしょ。多分お兄ちゃんと同じじゃないかな」

それを聞いたシュウは、それなら嬉しいなどだらしく笑う。文花が呆れたようにため息をついて、

「二人がそれでいいなら、私も何も言わないけど」

その口調はどこか不満そうにも聞こえた気がした。

夜。シュウは文花の希望で同じ布団に入っていた。最後に、昔みたいに一緒に寝たい、と。最後に一緒に寝たのは海鳴市に来る前なので、まさか覚えているとは思わなかった。

「文花は明日どうするの？」

小声でそう問ってみる。答えがなければ、つまりもう眠っていれば明日聞けばいいかと思っていたのだが、文花は体を動かすとシュウの目を見て、答えた。

「明日はディアーチェさんたちを手伝って、部屋の片付け。その後時

間が余れば、なのはさんに指導をしてもらおうかなって」

「部屋の片付け、か……。」「めん、終わってなくて」

「気にしなくていいよ。あ、でもその代わり、デバイスのメンテナンス
またしてね」

「もちろん、いつでも」

そこまで会話を交わして、言葉が途切れる。今日一日のほとんどを
会話に当てていたので布団の中でまで話すことなどあるわけもなく。
それでも少し名残惜しく感じながらも、シュウは目を閉じた。

そしてしばらくして、片手が握られる。シュウが目を開けると、こ
ちらをじっと見てくる文花と目が合った。

「えっと……。文花？」

戸惑いながら名前を呼ぶ。文花は何も言わずシュウを見つめ続け
ていたが、やがて笑顔になって、何でも無いよと布団に潜り込んだ。

翌日。シュウは自室で一人きりでぼんやりとしていた。文花は、邪
魔したくないからと朝早くに出て行ってしまった。がんばってね、と
いう去り際の言葉がまだ耳に残っている。最後の最後まで、自分は妹
に心配をかけているらしい。

「べつにも、うまくいかないものだなあ……」

ため息交じりにそうつぶさやくと、

「何かありましたか？」

そんな声が真後ろから掛けられ、シュウは跳び上がるほど驚いた。
慌てて振り返ると、シュテルが無表情にこちらを見つめていた。その
手にはコンビニの袋がある。

「えっと……。最後まで妹に迷惑かけっぱなしで情けないな、て思っ
てたというか……」

誤魔化せばいいのに思わず本当のことが口から出てしまう。それ
を聞いたシュテルは、どこか不思議そうに首を傾げて、何を今更、と
短く返事をしてくれる。

「しん。まあ……。今更、だよな」

それもそうだ、とシュウは苦笑。シュテルとのかつことを始め、再会し

てから今まで文花には心配ばかりかけている。シュテルの言う通り、今更気になることではないだろう。

「でも最後ぐらい、もう少し頼られたかったけどね」

シュウが寂しげにそうつぶやくと、シュテルは呆れたようなため息をついた。

「十分頼られているように見えていましたが……」

気づかないのも今更ですね、とシュテルがコンビニの袋を差し出ししてきた。

シュテルがコンビニで買ってきたおにぎりを食べて簡単な朝食を済ませ、二人はシュテルの転移魔法である場所へと転移する。転移した場所は、薄暗い部屋だ。小さな部屋で、家具もなければ窓すらもない。万が一にも誰かに見られないようにしているような部屋で、事実そのための部屋でもある。

「何年ぶりの実家かな」

シュウが複雑そうな表情でそうつぶやいた。

ここはシュウの実家、西崎家。この部屋は両親がミッドチルダ等に向かう際に転移魔法を使う部屋だ。それ以外の用途はないため、必要最低限のスペースしかなく、地球の人に見られるわけにもいかないために窓すらもない、というわけだ。

シュウが部屋に唯一ある木製の簡素な扉を開けると、真っ直ぐな廊下に出た。シュテルが部屋から出たところでシュウは扉を閉める。ちなみに扉には、物置、と書かれていた。

「おかえり、シュウ。いらっしやい、シュテルさん」

声が出て、シュウは正面へと向き直る。そこに立っていたのは、シュウの母親であるさくらだ。エプロン姿のさくらは、柔らかな笑顔を浮かべている。

「お父さんならリビングにいるわ。案内は、必要？」

「いらない。それぐらいは覚えてるよ」

あらそう、とさくらは少しだけ残念そうな表情を浮かべ、それじゃあまた後で、と行ってしまった。あの方向はキッチンだ。何かを作っ

ているのだろうか。

「シュウ。大丈夫ですか？」

隣からの声。シュウは何が、と聞こつとして、すぐにそれに気がついた。手が抑えようもなく震えていることに。実感はないが、心の奥底でまだこの家に対する恐怖心が残っているのかもしれない。情けない、とため息をつく、と、震えている手を温かいものが包み込んだ。シュテルの、手だ。

シュウは一瞬だけ驚き、すぐにその温もりに身を委ねる。しばらくそうしてから、よし、とシュウは頷いた。

「もう大丈夫。行こう」

「はい。行きましよう」

シュウは頷くと、リビングを指して歩き始めた。

中央にテーブルとソファ、隅にテレビと小さな本棚。それがこの家のリビングだ。シュウの父親、ケインはソファに座り、つまらなさそうな表情でバラエティ番組を見ていた。シュウが部屋に入るとすぐに気づき、ぎこちないながらも笑顔になる。

「よく来たね、シュウ。シュテルさんも、いらっしやい」

まあ座りなさい、という父の言葉に従い、シュウはケインの対面に座った。シュテルはその隣だ。ケインは満足そうに頷くと、リモコンでテレビを消した。

さて、とケインがシュウに向き直り、シュウは思わず居住まいを正した。心に染みついた恐怖心はなかなか取れないものだ。それを理解しているケインは、どこか悲しげに微笑んだ。

「……「うめん」

シュウが謝り、ケインは首を振る。

「私たちの傲慢さが招いた自業自得、だ。シュウが気にすることじゃないよ」

それを聞いたシュウは、それでもと頭を下げた。

両親に対する遺恨が消えたわけではない。だがそれでも、両親から受けた恩もやはり大きい。特にミッドチルダへの引っ越しや店の準

備など、シュウたちができないことのかなり多くを両親が負担してくれていた。二人とも少しでも罪滅ぼしになるならと笑っていたが、やはりその点に関しては感謝している。

「まあそれはともかく……。明日発つんだね？」

あからさまな話題転換に思わず苦笑してしまう。ただシュウとしてもあの話の続けることは避けたかったため、それに乗ることにした。

「うん。今はディアーチエたちが最後の片付けをしてくれているところ」

「そうか。じゃあ早めに帰らないといけないね」

晩ご飯を食べたら帰るよ、とシュウが肯定すると、ケインはあからさまに残念そうな表情を浮かべた。

「無理を言っちゃだめよ、ケイン」

さくらがリビングに入ってきて、手に持った盆のコップをテーブルに置いていく。シュウとシュテルにはオレンジジュース、両親二人はブラックコーヒーだ。シュウとシュテルは礼を言って、コップに口を付けた。

「ここに来てくれただけでも喜ばない」と

「ああ、それは分かっているんだけどね……」

頂垂れるケインをさくらが慰める。それを見ていると、少しだけ罪悪感を覚えてしまう。そのシュウの気持ち察したのだろう、さくらが気にしないように、と微苦笑して手を振っていた。

「部屋の場所は覚えてる？」

さくらの問いかけに、シュウは、多分と頷いた。今日ここに来た目的は両親に挨拶をすることの他にもう一つある。かつての自分の部屋の整理だ。この家を出た頃は魔法のことなど何一つ知らなかったので大したものは持っていなかったのだが、念のために確認しておきたい。

未だに目頭を押さえている父に苦笑しつつ、シュウは席を立った。シュテルと共に二階に向かう。この家の二階は三部屋しかなく、一つが物置、一つが妹、文花の部屋、そしてもう一つがシュウの部屋だ。子

供二人が家を出て、もうほとんど使われていなかったはずだ。

コウと音奈も、一階で生活してるらしいからなあ……。

西崎家の養子となっっているコウと音奈は、両親に遠慮してか自分の部屋を持つととしていない。二人の寝室はあるらしいが、それも同じ部屋にベッドを二つ並べているだけの、本当に寝るためだけの部屋だそう。

シユウが自分の部屋を片付けようと思ったのは、この部屋が開けば二人が一部屋ずつ使えるようになるかもしれない、とやってのこともある。

シユウは部屋の扉を開け、思わず苦笑してしまった。シユウの背後からのぞき見たシユテルも、反応に困ったかのように言葉を失っている。

部屋には、子供用の勉強机と小さな本棚、そしてベッドしかなかった。あって当たり前のはずのおもちゃなどは一個たりと見つからない。どうやらシユウは、幼少の時からさほど変わっていないらしい。

「誰かが片付けた、などは？」

シユテルが聞いて、シユウが首を振った。

「僕が出て行った後は、何かを捨てたりとかはしてないらしいよ。それに……」。そう言えば、おもちゃとかで遊んだ覚えはあまりない気がする。

そう答えながら、シユウは勉強机に近づいた。引き出しを開け、中に入っているノートを見る。学校の授業で使っていたノートで、ひらがなでさんすう、と書かれていた。懐かしくなってしまう。別頭が熱くなる。シユウはノートを引き出しにしまい、別の引き出しを見る。

につき、があった。

「……ああ……。そう言えば、あったなあ……」

遠いものを見るかのように目を細め、緩慢とした動作でにつきを開く。そして、すぐに閉じた。幼少の日記なので詳しく覚えていないのだが、あまり気分の良い内容ではなかったはずだ。特に、後半は。

あとでシユテルと一緒に見ようかな、と思いつながら他の引き出しも漁る。勉強関連のノートやちょっとした小さなおもちゃ、ルービック

キューブといったもの、以外は何もなかった。

もういいか、と扉へと振り返ると、扉の前で立ったままのシュテルがこちらを静かに見つめていた。シュウが首を傾げ、言う。

「どうしたの？」

「いえ。人の部屋なので私ができることがないだけです」

今更気にしなくていいのに、と苦笑しながらシュウは部屋を出た。

両親との夕食は、さくらの手料理だった。肉じゃがと味噌汁という和風なもので、これらの調理の間、さくらとシュテルは共に台所に立っていた。仕方なく、待っている間は父親と二人きりになる。

「コウと音奈は？」

「文花のところで一泊するらしいよ」

それを聞いたシュウが思わず頬を引きつらせた。コウはいい。コウは口ではいろいろ言うが、間違いを犯すような男ではない。だが、音奈はどうだろうか。

付き合っている二人の間に放り込まれた音奈の心中やいかに。

「……がんばれ、音奈……」

きつと音奈は気を遣ったのだろう。それ故に、心の底から申し訳なく思うが。

しばらくして、食卓に白ご飯、肉じゃが、味噌汁が並ぶ。さらにはなぜかクリームシチュー。和洋が統一されていない。

「うん。美味しい」

シュウが素直に感想を述べると、さくらは嬉しそうに微笑んだ。

「また食べなくなったらシュテルさんに言っのよ」

どうして、と隣のシュテルを見ると、シュテルはこちらを一瞥して答えてくれる。

「作り方を教わりました。西崎家に代々伝わる味付け、だとか」

「そ、そうなんだ……」

それでシュテルを台所に連れて行ったのか、と妙に納得してしまっ

夕食後、両親に別れを告げて、シュウとシュテルはマンションに戻ってきた。ケインが妙に名残惜しそうにしていたのが印象的だ。また顔を出す、と言うとそれだけで喜んでいた。

近くのコンビニで二人分の弁当を買い、マンションのシュウの部屋へ。シュウの私物はすでになく、元々あった備品などが残されているのみだ。ディアーチェの気遣いだろう、寝袋が一つだけ残されていた。

ディアーチェたちは一足先に店の方に移っている。シュウたちも明日の早朝にここを発ち、さらに翌日にシュウの両親とリンディが解約の手続きをすることになっている。

「ここで寝るのも最後だね」

「ええ……。そうですね」

コンビニで温めてもらった弁当を床に置き、二人は言葉少なく食べていく。二人が食べる音だけが聞こえる、静かな時間。やがて二人とも食べ終わったところで、シュテルがコンビニの袋からペットボトルのお茶を取り出した。紙コップに注いで、シュウへと渡してくる。

「ありがとう」

「いえ」

二人そろってお茶を飲み、一息つく。もう何もすることがない。

「ああ、そう言えば……。持ち帰ってきたのは、ノート一冊ですか」

シュテルが思い出したように聞いて、シュウは頷いた。につきを取り出して、ぱらぱらとページを捲る。

「海鳴に来る前に書いてた日記だね。例の事故までは書いてたんだ。その後は、いつの間にか書かなくなってた」

読む？ とシュウが差し出すと、シュテルは小さく首を振った。そんな無礼なことはいけません、と。気にしなくていいのに、とシュウは肩をすくめながら、ノートを開いて読んでいく。読んでいくと当時のことが思い出され、少し懐かしい。

前半は日々のことを拙い文字で綴るだけの微笑ましいものだ。だが、後半になると。

今日も化け物と言われた。

れんくんとけんかした。

みよちゃんに気持ち悪いと言われた。

暗い内容が増えていく。シユウの周囲で異変が起き始めた頃、だろ
う。心の奥底に閉まった記憶があふれ出してくる。よせばいいのに、
読むことをやめられない。

一人、また一人とシユウの周囲から人が離れていく。その恐怖は、
幼い心には耐えられないものだった。当時は味方してくれていた家
族がいなければ、自分とはとくに壊れていたかもしれない。

その家族も、演技とはいえ自分から離れたわけだが。思えばあの
時、自分は一度壊れているのかもしれない。でなければ、幼い子供が
一人暮らするなど耐えられるはずがないだろう。その時のことを思い
出し、気持ちが暗くなっていく。体の全身が冷たくなっていく。

不意に、手に温かいものが触れた。見ると、シユテルが真剣な眼差
しでシユウを見つめていた。

「シユウ。大丈夫ですか？」

シユテルが聞いて、シユウは目を細め、しっかりと頷いた。

「そうですね」

いつの間に離れていたのだろう、床に落ちたたにつきをシユテルが拾
い上げ、開いていたページに視線が落とされる。するとシユテルは眉
を寄せ、すぐにつきを閉じた。

「シユウ」

シユウが虚ろな目をシユテルに向ける。

「この先何があるとも、私たちは貴方から離れません。だから、泣か
ないでください」

シユテルの言葉に、シユウがわずかに驚いて目元を拭う。本当に涙
が流れていたことに再度驚き、恥ずかしくて顔を真っ赤にしてしま
う。

「この先何があるとも、私たちは貴方の味方です。私は、ずっと貴方
の側にいますよ」

シユテルの言葉の温もりに、シユウは目を閉じて身を委ねる。自分

は一人じゃないと実感できる。そう思うと、自然と頬が緩んでしまっ
た。

「そろそろ休みましようか。明日からは店の準備がありますし」
「うん。そうだね」

何かを誤魔化すように、シュテルが顔を逸らして寝袋を広げ始め
た。その顔は、ほんの少しだけだが赤くなっていたような気がする。
自分の妄想からくる錯覚かもしれないが。

「ねえ、シュテル」

「はい」

「一緒に寝ても、いい？」

シュテルの動きがぴたりと止まる。ゆっくりとシュウへと向き直
り、シュウの顔をまじまじと見つめてくる。シュウがシュテルの言葉
を静かに待つと、やがてシュテルが小さくため息をついた。分かりま
した、と。

二人で同じ寝袋に潜り、身を寄せ合って目を閉じる。シュテルの温
もりが感じられ、顔が熱くなってしまふ。

目を開け、シュテルを見る。すでに目を閉じ、整った寝息を立てて
いるようだ。

「もう寝てる、よねっ」

返事はない。シュウも目を閉じ、微睡みに身を委ねる。

「シュテル……」

シュウが小さな声を出す。聞こえていなくてもいい、言っておきた
い。

「僕の隣に、ちゃんといてね……」

そしてシュウは、眠りへと落ちた。

シュウが眠りに落ちてしばらくして、シュテルが目を開ける。シュウ
の寝顔を至近距離で見て、妙な気恥ずかしさを覚えてしまふ。自分ら
しくないと思いつつも、悪い気はしない。

「貴方がそれを望むのなら」

シュテルが答える。歌うように。

「私はずっと貴方の隣に。貴方と一緒に歩みます」
そしてシュテルは、淡く微笑み、自身も心地よい微睡みに身を任せ
た。

翌日早朝。

シュウとシュテルは少ない私物を持って部屋を後にする。部屋を
出て、ドアを閉めようとして、

「……………」
二人は思い出の詰まった部屋をしばらく眺め、どちらともなくつぶ
やいた。

「お世話になりました。今まで、ありがとう」
そしてドアが閉じられる。

誰もいなくなった部屋で、朝焼けの光だけが部屋を包む。朝の光は
二人がいた部屋を、優しく温めていた。

銭湯

シュウたちが住まうマンション。自分たちの部屋の浴室に五人は集まっていた。それぞれが浮かべる表情は、困惑や苦笑など、あまりいいものではない。その理由は単純なものだ。

「お湯、出ませんね……」

ユーリがつぶやいた言葉に、出ないねー、とレヴィが脳天気な声で返す。その反応にディアーチェは冷やかな視線を向けるが、レヴィは気づいていない。

「シュウ。そちらはどうでしたか？」

シュテルがそう問う。シュウの部屋の風呂のことだろう。そちらが無事ならまだ良かったのだが、しかしシュウは申し訳なさそうに首を振った。そうか、とディアーチェがため息をつく。

「仕方がありませんね」

シュテルはそう言つと、一人その場を後にした。ディアーチェがすぐに何かを察したようで、仕方がないな、とディアーチェも浴室を出て行く。残されたシュウはどうしようかと思はらく困惑していたが、自分と同じようにきょとんとしているレヴィとユーリを残そうとも思えず、その場で待っていることにした。

そして、さほど時間を置かずに戻ってきたシュテルとディアーチェの手には、着替えなどを含めたお風呂セット。なるほど、確かに仕方がないね、とシュウも得心して、着替えを取りに自分の部屋へと向かう。

「シュテル。ちなみにどうの？」

「最寄りですね。修理がいつ終わるか分かりませんが、数日通う可能性もあります。近場の方が良いでしょう」

未だによく分かっていないらしいレヴィとユーリに、ディアーチェが告げる。銭湯へ行くぞ、と。それを聞いた途端、二人が嬉しそうな歓声を上げた。

準備を終えて、すぐに銭湯に向かう、ということには残念ながらもなかった。実際には、修理の手続きなどで少し時間を取られてしまっている。後ほど聞いた話では、シュウたちの部屋だけでなく、その階の全室でトラブルが起きていたらしい。

その詳細に関して五人ともそれほど興味がなかったため、修理を依頼した後は気にせず銭湯に向かった。

シュウたちのマンションから最寄りの銭湯までは、歩いて二十分ほど。遠いとは言わないが、自宅の風呂が使えればわざわざ来ようとも思えない、そんな距離だ。故にここに来るのは初めてだったりする。大きくはないが小さいとも言えない、そんな規模の銭湯だ。

入り口から入ってすぐに広めに造られたホールに出る。その奥にカウンターがあり、何人かの店員が利用者と会話をしている。周囲を見てみると、利用者はそれなりに多いようだ。

カウンターで利用料を支払い、シュウとシュテルたちはその場で別れることになる。

「それでは、シュウ。またここに集合でよろしいですね？」

「うん。もちろん」

風呂の後の集合場所を決めて、シュウは風呂へと向かった。

脱衣所で衣服を脱ぎ、浴室に向かう。親子連れの利用者が多いのか、親子らしき組み合わせが何人もいた。その様子を見て、シュウはまぶしいものを見るかのように目を細め、わずかに表情を曇らせる。少しだけ、羨ましい、という感情が芽生えてしまう。もっとも、今となっては両親を拒絶しているのはシュウ自身だ。羨ましい、と思うのは何か違う気がする。

言えば、一緒に来てくれるのかな。

父親の顔を思い出し、シュウは苦笑した。今更イメージできないな、と。

体を洗って、浴槽へと向かう。子供一人というのが珍しいのか何度か視線を感じたが、特に声を掛けられることはなかった。浴槽の隅に

浸かり、ゆっくりと息を吐き出す。少し熱めのお湯だが、とても気持ちがいい。

油断していると寝てしまいそうだと、思いながら、シユウは軽く首を振った。本当に寝てしまうとシユテルたちを長時間待たせてしまうことになる。適度に切り上げてさっさと上がるつ、と心に決めて、

「……あ」

それが、視界に入った。浴槽の側、出入り口とは反対側にある小さな扉。その脇には、露天風呂、と書かれた張り紙がある。せつかくだし見ていこう、とシユウは露天風呂へと向かった。

露天風呂には他の利用客がいなかった。ほとんどシユウの貸し切りだ。そのことを不思議に思いながら、シユウは湯船に浸かる。上方へと視線をやると、明るい月といくつかの星を確認できた。山の旅館などで見る夜空とは違いあまり星は見えないが、それでも湯船に浸かりながら夜空を見られるというのは、なかなかいいものだと思う。

露天風呂の周囲は高い柵で囲まれていて、外部から露天風呂がのぞけないように工夫がされている。ただそれでも、ここは街の中だ。もしかすると、他の利用客は誰かに見られるかもしれないという可能性を嫌ってあまり来ないのかもしれない。

そんなことを考えていると、扉を開く音が聞こえてきた。誰か来たのかと思うと同時に、疑問も出てくる。音のした方向が、自分が入ってきた方向より少しずれているような……。

「あー シユウだー」

自分の名を呼ぶ声にシユウが目を大きく見開く。つい先ほどまで聞いていた声で、表情を引きつらせながらそちらを見やる。案の定、そこにいたのは、家族とも言える四人だった。

「な、なんで……？」

シユウが何とかそれだけ言葉を紡ぐ。その意味が分からずに、ディアーチェとレヴィ、ユーリが首を傾げる。だがシユテルはその意味を正確にくみ取ったらしく、短い答えを口にした。

「混浴ですよ、」

今度こそシュウの表情が凍り付いた。そんな注意書きがあっただろつか。

そんなシュウを放置して、四人が湯船に浸かってくる。全員、混浴という点を配慮したのか、体にタオルをしつかりと巻いている。

レヴィが空を見て、あまり見えないね、とつぶやくと、残念ですとシュテルがつぶやいた。

「まあ、仕方あるまい」

ディアーチェはそう言うと、ゆっくりと息を吐いてリラックスする。その横で、シュテルも一息ついていた。シュウとは少し距離を取っている。本人たちはあまり気にしないはずだが、どうやらシュウに気を遣ってくれたらしい。そのことに少し申し訳なさを感じていると、背中から誰かに抱きつかれた。

「シュウ、捕獲！」

レヴィだ。いつの間に背後に回り込んでいたのか、全く気がつかなかった。レヴィの体温が直に感じられ、顔が赤くなってくる。

「ね、レヴィー！ ちょっと離れて……」

シュウがそう言っても、いやだ、とレヴィは楽しそうに拒否してしまふ。シュウはすぐに言葉を続ける。

「い、いやでも、体が密着してて、その、なんといいかね……」

恥ずかしそうなシュウの言葉。レヴィは少し考え、そしてぽんと手を叩いた。

「シュウ！ あれだよあれ！」

「な、なにっ？」

「……当たってんのよ」

レヴィの言葉を聞いた四人が示した反応は、少しずつ違うものだった。ユーリはよく意味が分からなかったのか首を傾げ、ディアーチェはどこで覚えたのだ、と呆れながら立ち上がる。シュテルもディアーチェと同じようにため息をついて、そしてやはり立ち上がった。

シュウはどう反応を返していいのか分からず、苦笑い。

「えっ？……。レヴィ。どうで覚えたの？」

「んっ？ お昼のテレビでやってた……えっ？……。ドラマってやつ

「？」

なるほど、とシュウは頷いた。おそらく先の言葉ははっきりと意味を理解して言ったものではないのだろう。レヴィらしいとも言える。

「レヴィ」

いつの間にかディアーチェもすぐ側まで来ていた。正確にはレヴィの隣だ。そのレヴィの腕を掴んで、立ち上がらせる。戸惑うレヴィへと、ディアーチェは無表情に告げた。

「来い」

短い、王の一言。だがそれだけでレヴィはディアーチェを怒らせてしまっていることを察したらしい。素直に、はい、と頷いた。

「ではな、シュウ。我らのことは気にせず、ゆっくり温まるのだぞ」

そう言っつて、ディアーチェとレヴィが女湯の方の扉へと歩いて行く。ユーリも慌ててそれを追っついていく。

「お騒がせしました。また後ほど」

シュテルが最後にそう言っつて、シュウへと小さく頭を下げた。そしてそのままきびすを返し、歩いて行くこととする。そのシュテルの腕を、シュウが掴んだ。

「シュウ？　どうかしましたか？」

わずかに戸惑いの色を混ぜて、シュテルが問っつてくる。シュウ自身無意識の行動だったので、特に用事があったわけでもない。シュウはしばらく悩んだ末に、

「その……。せっかくだから、もう少し一緒に、とか……」

最後の方は尻すばみになり、自分ですらあまり聞き取れなかった。おそろおそろとシュテルの顔をうかがい見る。シュテルはいつもの無表情でシュウを見つめていたが、気のせいか、少しだけ頬が赤くなっているような気もする。

やがてシュテルは、少しだけなら、と頷いてくれた。

浴槽の隅で、シュウとシュテルは並んで座っていた。並んて言っつても、二人の間にはわずかに距離がある。さすがに少し恥ずかしいという思いからだ。

二人は無言で、静かに夜空を眺めていた。やはりあまり星は見えないが、それでも飽きることなく二人の視線は夜空に向いている。聞こえてくるのは水の音だけで、とても静かな夜だ。

「誰も来ないね」

シュウがちらりと男湯と女湯へと続く扉を見る。ディアーチェたちが出て行ってからは、一度も開いていない。貸し切り状態となっているため、少しだけ気分が良い。

「やっぱり僕は、静かにのんびり入る方がいいな……」

シュウにとって、風呂は一人で入るものだ。それは今も変わらない。そのためこういった大衆浴場はあまり好きではない、というのが本音だ。それを聞いたシュテルがどこか寂しそうな、気遣うような表情をするが、シュウはそれには気づかない。頬をだらしなく緩めて、続ける。

「でも、たまにはこういうのも悪くないよね……。今度は友達も誘って来てみたいかな」

シュテルがかすかに安堵の吐息を漏らす。それには気づいたシュウが首を傾げると、シュテルは何でもありません、と首を振った。

「シュテルと一緒にいることなんて滅多にないから、そういう意味でもまた来たいかな」

そんなことをシュウがつぶやく。するとシュテルはわずかに目を開き、やがてそっぽを向いた。そのまま立ち上がり、浴槽を出て行く。「シュウ。そろそろ出ましよう。ディアーチェたちを待たせてしまいます」

「あ、うん。そうだね」

余計なことを言ったか、と少しだけ反省しつつ、シュウも男湯へと続く扉へと向かう。

もう一方の扉の前で、シュテルがかすかに頬を染めてうつむいていることに、最後まで気づかなかった。

「二本！ 二本買いたい！ お願い王様！」

「今回だけ！ 今回だけですから！」

「だめだ！ 絶対に、だめだ！」

売店の前で騒ぐ三人。三人の側には牛乳が冷やされた冷蔵ケース。「だって、決められないよ！ コーヒー牛乳とフルーツ牛乳どっちかなんて！」

「そうですね、ディアーチェ！ せっかくここまで来たんですから！」
「むう……。だが、だめだ！ そもそも今日は財布を持っているのはシュテルだ！」

どつやらレヴィとユーリが、ディアーチェに牛乳を買ってもらおうと強請っているらしい。シュウがその様子を遠目から微笑ましく見つめていると、少し遅れてシュテルも更衣室から出てきて、シュウの隣に並んだ。同じ光景を見て、少しだけ呆れたようにため息をつく。「公衆の面前で何をやっているのですか」

そう言いながら、シュテルが三人へと歩いて行く。それに気づいたレヴィが、

「シュテル！ 牛乳買って！ コーヒーとフルーツ！」

早くもおねだりを始め、ユーリも期待のこもった眼差しで見つめてくる。どうしたものかとディアーチェへと視線を向けると、任せる、と口の動きだけで伝えてきた。

「シュウ」

唐突に呼ばれ、少しだけ驚きながらも返事をする。

「飲みますか？」

シュテルの短い問い。なるほど、とすぐにその問いの意図を察して、シュウは頷いた。

「うん。ちょっとのぼせちゃったから、二本飲みたいんだけど、だめかな」

果たしてシュテルの望んだ答えだったのだろうか、どこか満足そうに頷くと、シュテルはレヴィとユーリに向き直った。

「では一人一本まで許可します。それ以上は、買いません」

レヴィとユーリはぱっと顔を輝かせると、嬉しそうに牛乳を冷蔵ケースから取る。ディアーチェは、やれやれと首を振りながらも、口元は笑っていた。普通の牛乳を一本だけ取る。

シユウとシユテルは、それぞれコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を取った。そのまま会計に向かおうとして、シユテルが足を止めてシユウを見る。

「シユウ。よろしいのですか？」

結局一本しか取っていないことを言っているのだろう。シユウは肩をすくめて、答えた。

「二本はちょっと量が多いから。その代わりに、あとでシユテルの牛乳もちよつとだけ欲しいかな？」

「分かりました。では私も、貴方のものから少し頂きます」

平然とした様子でそんな会話を交わす二人。

その様子を見守っていたディアーチェは、顔を耳まで真っ赤にして、少しだけ呆れを含ませながらも満足そうに微笑んでいた。

誕生日

ある冬の日。昼食後ののんびりとした時間。五人はリビングで、思い思いにその時間を過ごしていた。

ディアーチェはホットコーヒーを飲みながら読書をしている。表紙やそのタイトルから察するに、ミステリー小説のようだ。時折本から視線を外し、家族の様子を確認しているのは流石といったところか。

シュテルは図書館で借りてきた本を側に置き、編み物をしていた。数日前から始めているもので、時間があれば少しずつ進めている。先日、何を作っているのかシュウが聞いたところ、秘密です、という言葉が返ってきた。

シュウはレヴィとユーリと一緒に、テレビのバラエティ番組を見ていた。番組では、今日の誕生日さんを祝おう、というありきたり企画物をしているところだ。今日が誕生日の一般人のもとへ、有名芸能人が特大のケーキとプレゼントを持って行く、というもの。単純だが、それ故に分かりやすい。

「誕生日って、生まれた日のことだよな。みんなお祝いするの？」

そんなことを聞いてきたのはレヴィだ。シュウが頷いて答える。

「みんな、とは限らないけど、お祝いする人が多いと思うよ。誕生日会、なんてことをしたりもするし」

「へえ！ どんなの？」

「みんなでケーキを食べたり、誕生日の人にプレゼントを渡したり、かな？」

この辺りはシュウの経験談ではなく、人から聞いた話や本などで得た知識だ。シュウ自身、誕生日会というものに参加したことはない。クラスメイトの誕生日会に誘われたこともあるが、プレゼントを用意することができないので、いつも遠慮していた。

「いいなあ、楽しそうー」

レヴィの表情が輝き、隣で聞いていたユーリも、おもしろそうですね、と無邪気な笑顔を浮かべる。こんな顔を見ると、いつかやっつけてあげたいなと思ってしまう。

「ねえ、ディアーチェ。みんなの誕生日って、いつ？」

「知らん」

「あ、うん……。」「めんね」

ディアーチェの短い言葉に、シュウは申し訳なさそうに頭を下げた。どうやら聞いてはいけないことだったらしい。するとディアーチェがわずかに驚き、慌てたように言う。

「いや、待て！ 誤解されているようだから言うておくが、本当に知らないのだ！ 我らはもともとこのことは違う世界での生まれであり、さらには正確な日付など全く覚えていないのだ。別に怒っているわけではないからな？」

それを聞いたシュウは、安堵のため息をついた。嫌われなくて良かった、と。それを見ていたディアーチェも、小さく吐息する。

「じゃあ、何か記念日を作って、そこで誕生日会をしようか」

「おー！ 楽しみー！」

レヴィが屈託無く笑い、ユーリもいつにしようか、と楽しげに話す。二人での会話を始めたことで、シュウはテレビに視線を戻し、ディアーチェも読書へと戻った。

だが、その次の瞬間には全員が動きを止めることになる。

そう言えば、といった様子でユーリがシュウへと視線を向けた。

「ところでシュウの誕生日っていつですか？」

「ん？ 明日だよ」

え、と聞いた本人であるユーリが固まり、へ、と珍しくレヴィも動きを止めた。ディアーチェは驚愕のあまり彼女にしては珍しく口を半開きにし、シュテルもやはり彼女にしては珍しく、完全に動きを止めて目を見開いていた。もっとも、シュテルの様子はシュウからは見えていないのだが。

「あ……」

ディアーチェが言葉を絞り出す。首を傾げるシュウへと、ディアー

チエの叫び声が降り注いだ。

「阿呆か貴様！」

「うわー！ びっくりしたー！」

あまりの大声にシュウが身をのけぞらせる。そんなことはお構いなしにとディアーチエが言葉を続ける。

「なぜだ！ なぜもっと早く言わなかった！」

「え、いや……。聞かれなかったから……」

「ああ、そうだな、確かに聞かなかった！ だが、それでも言ってくれても良いだろう！」

シュウが困ったような苦笑を浮かべ、少しだけ言いにくそうに音を出さずに口を動かしていたが、やがて、無理だよと首を振った。怪訝な表情を浮かべるディアーチエに、告げる。

「だって、聞かれるまで忘れていたから」
「……………」

ディアーチエは完全に沈黙すると、やがてソファへと深く体を沈めた。天を仰ぎ、手で目を覆って深々とため息をつく。疲れ果てたような、そんなため息だ。

「ああ、そうだな……。うぬらしい……………」

つい最近まではシュウ自身が誕生日とは無縁の生活を送っていたのだ。祝いも何もしない誕生日なら、忘れてしまっても仕方がないのかもしれない。

「少し出かけてくる。夕食までには戻る」

ディアーチエはそう言って立ち上がると、足早に部屋を出て行ってしまった。後に残された四人のうち、シュウが困惑したような表情を浮かべる。もしかして怒らせてしまったかな、と。

「シュウが気にすることではありません。私が気がつくべきでした」

シュテルの声に振り返ると、シュテルも編み物を中断して立ち上がり、外出の準備をしていた。いつの間にか、レヴィとユーリも準備を終えている。

「シュウ。貴方も外出するなら、戸締まりをお願いします」

「うん……。予定はないけど……………」

「ではゆっくり寛いでください。部屋の中は自由に使っていただいて構いませんので」

それでは、行ってきます。

シュテルが小さく頭を下げて、部屋を出て行く。レヴィとユーリもそれに続き、シュウだけが一人取り残されてしまった。

「何が何やら……」

シュウは不思議そうにつぶやきながら、再びテレビへと視線を戻す。いつの間にか、今日の占いへとコーナーが変わっていた。

Side:Dearche

ディアーチェは家を出ると、真っ直ぐにある場所へと向かっていた。あまり気乗りはしないが、こういった時は役に立つ。それぐらいの評価はしているつもりだ。そうしてディアーチェがたどり着いたのは、八神家だった。

門の前で足を止め、しばらくその建物を睨み続ける。やがて小さく深呼吸すると、八神家の扉を開けた。

「子鴉！ 邪魔するぞー！」

大声でそう告げる。すると、リビングの方からはやてが顔を出した。ディアーチェの姿を認めて、嬉しそうに破顔する。

「いらっしやい、王様！ 突然やね？」

「問題があるか？」

「うん。ないよ」

柔和な笑みを浮かべながら、はやてはディアーチェをリビングへと通した。今日は八神家の面々も休みだったのか、ヴォルケンリッターも全員がリビングに集まっている。ディアーチェを見ると、それぞれが挨拶を送ってきた。ディアーチェは手を上げることで返事をして、はやてへと向き直った。

「子鴉。話がある」

「うん？ 料理勝負か？ いつでも受けて立つで」

楽しそうなはやてへと、しかしディアーチェは首を振った。今回は全く別の用事だ。

「頼みがある」

その短い言葉に、はやての瞳が驚愕で見開かれ、はやての家族たちも絶句する。実は何かあるのではと思わず訝しんでしまっているはやてへと、ディアーチェは続ける。

「明日、シュウの誕生日だそつだ。そのことを先ほど知ったところだな、何の準備もしていない」

「え……。知らなかった……」

「ああ……。本人に聞いたが、誕生日会、だったか？ そついったものにもほとんど参加したことがないそつだ。だから、できれば……」

「うんうん。シュウ君のために誕生日会をしてあげたい、てことやね」「はつきり言うな！　だが、まあ、そつだ。だが我らはいまいち誕生日会というものが分からん。だからこそ貴様に手伝ってほしいのだ」

頼む。ディアーチェが頭を下げ、はやてがさらに衝撃を受けたように言葉を失ってしまう。

あのディアーチェが、自分に対して頭を下げている。これは、初めてのことだった。それだけディアーチェは真剣なのだろう。はやてはしっかりと頷いた。

「任せて、王様。最高の誕生日会をしよう！」

はやての力強い言葉に、ディアーチェは頷き、そしてとても小さな声で、ありがとう、とつぶやいた。はやてだけはその声を聞き取ることができたが、あえて聞こえないふりをした。

Side:Levi

レヴィとユーリはアースラを訪れていた。真っ直ぐにブリッジへと向かい、目的の人物を探す。レヴィはフェイト、ユーリはリンディだ。ブリッジをぐるりと見回すと、艦長席で何かを話しているフェイトとリンディを見つけることができた。

「いた！　オリジナル！」

「え？　レヴィ？」

フェイトが驚いて振り返り、隣にいたリンディも眉をひそめる。地球の拠点に遊びにくることはあるが、アースラまでフェイトを訪ねて

きたことは初めてだ。

「どうしたの？」

レヴィが側まで来るのを待ってから、フェイトが優しく問いかける。リンディと仕事上の話をしていたのだが、わざわざアースラまで自分を探しに来るほどだ。何か事情があるのだろう。リンディもそう思ったのか、何も言わずにレヴィの言葉を待っていた。

「えっとねー。明日シュウウの誕生日らしいんだけど実は何も知らなくて用意してなくても何かしてあげたいけど何も思い浮かばなくてそれでオリジナルに聞こうと思ってー」

「と、とりあえず落ち着こう？ はい、深呼吸」

フェイトに促されてレヴィが深呼吸する。その間に、

「明日、シュウウの誕生日なんです。それで何かしてあげたいんですけど、そうだった日に何をするのか分からなくて……。何をすればシュウは喜ぶでしょうっ？」

ユーリの説明。レヴィのものより分かりやすい。なるほど、とフェイトとリンディが頷いた。

「シュウ、明日誕生日なんだ。言ってくれば良かったのに……」

「でもあの子らしいわね。この世界の誕生日のお祝いの仕方はあまり詳しくないのだけど……」

そう言いながらフェイトとリンディが少し考える。誕生日会の準備そのものはシュテルやディアーチェがするだろう。レヴィたちも手伝うだろうが、それとは別に何かをしたいらしい。

先に案を思いついたのは、フェイトだった。

「少し前に行った友達誕生日会のものだけど、歌とか、どうかな？」

「歌？ どんな？」

「誕生日の歌。それぐらいなら教えてあげられるけど……」

言いながら、フェイトはリンディの顔色をうかがう。そのリンディは少し困ったような苦笑を浮かべていた。今はまだ、仕事の途中だ。ここで放り出すことはできない。それでもリンディも思うところがあるのか、仕方がないわね、と頷いた。

「レヴィさん。ユーリさん。フェイトはまだ仕事の途中なの。だから

今すぐに教えてあげることができないわ」

「ええ……。どうしても？」

残念そうなレヴィの声に、しかしリンディは微笑んで言う。

「レヴィさんとユーリさんがフェイトの仕事を手伝ってくれたら、その分早く終わるわね？」

その言葉の意図をすぐに察し、レヴィとユーリが勢いよく手を上げた。

「よしオリジナル！ 手伝ってあげよう！ だから早く教えて！」

「がんばります！ 急ぎまじょう！」

二人のその勢いに、フェイトは驚きつつもどこか嬉しそうに頷いた。

Side::Stern

「飾り付けはこんなところだけど、参考になった？」

「はい、とても。ありがとうございます！」

シュテルは翠屋のキッチンにて、桃子と厨房に立っていた。二人の目の前にはホールケーキ。誕生日用に仕上げられたもので、桃子がわざわざ作ってくれたものだ。

数時間前、マンションを出たシュテルは真っ直ぐに翠屋を訪ねていた。店を手伝っていたなのはと挨拶を交わし、シュテルから事情を聞いたのはがすぐに桃子に繋いでくれた。昼食時を過ぎて店も落ち着いていたために、こっそり桃子から誕生日ケーキの作り方を直接教わっている。

「すみません、実際に作っていただいて」

作られたケーキを丁寧に箱に詰める桃子にシュテルが言うと、桃子は、気にしなくていいわよ、と笑顔で応じる。ケーキの箱を冷蔵庫に入れながら、

「いつもお手伝いしてもらっているわけだし。そつだ、よければ明日、誕生日ケーキを作ってあげるけど、どう？ もちろんこつちもお金とか気にしなくてもいいわよ」

桃子のその申し出はとてもありがたいものだ。内心で感謝しつつ、

しかしシュテルは首を振った。

「いえ、自分で作りたいと思います」

「ふふ、そうね。私もその方がいいと思っわ」

桃子もシュテルの返答を予想していたのだろう、それ以上何も言うことはなかった。

「今日はありがとうございました。また手が必要な時はいつでもお呼びください。最優先で予定に入れます」

「そうね。その時はお願いするわね」

桃子が小さな袋にてきはきといろいろな物を詰めていく。そしてそれをシュテルへと差し出した。怪訝そうに眉をひそめながらもシュテルが受け取ると、桃子が続ける。

「誕生日用の飾り付け一式。少し多めに入れておいたけど、もっと必要ならいつでも言ってね。それと、私の予定よりも、貴方の大切な人の予定を優先するように」

桃子が悪戯っぽく笑うと、シュテルはわずかに目を見開き、次いで口元を少しだけ緩めた。そうします、と短く答える。

「ありがたく頂きます。では、失礼します」

桃子に丁寧な頭を下げて、その場を後にした。

翠屋を出て少し歩いたところで、後方から誰かが走ってくる音が聞こえてきた。すぐに誰かを察して、立ち止まって振り返る。なのはが息を切らして走ってくる場所だった。

「良かったー 追いついた……！」

なのはの言葉にシュテルが首を傾げる。何か用事ですか、と。それを聞いたなのはが少しだけ頬を膨らませた。

「用事はないけど、友達と一緒に歩きたいと思ったら、だめ？」

「いえ……。そうですね。」一緒に歩きましょうか

なのはの言葉に、シュテルは無表情に頷いた。それを聞いたなのはが嬉しそうにシュテルの隣を歩く。

「明日、シュウ君の誕生日なんだね」

「はい。そのようです。私たちも先ほど知ったところですが」

「もっと早く言ってくれば良かったのにね……。でもシユウ君のことだから、自分でも忘れてたんだろっなあ……」

「そうだと思います。シユウですから」

二人は顔を見合わせると、なのははおかしそうに笑い、シユテルもわずかにだが笑みを漏らした。

「誕生日プレゼントは決まってるの？」

「ちっ、どうでしょう」

シユテルの返答をどのように解釈したのか、なのはは、そっかと頷いた。続いて小さな声で、じゃあお買い物はしなくていいか、と聞かえてくる。おそらく、シユテルが何も用意できていなければ一緒に買っていくつもりだったのだろう。なのはの気遣いに内心で感謝する。そして思う。得がたい友人を持てたものだ、と。

「それじゃあ……」 私ははちやちやんの家に行くってくるから！

「はい。ありがとうございます、なのは」

「私は何もしてないけど……。何かあったら言ってね！ それじゃあ、また後で！」

そっ言い残し、なのはが走り去っていく。その後ろ姿を見送りながら、シユテルは小さく首を傾げた。

また後で？

Side: Hero

薄暗い部屋の中。シユウは心地よい微睡みに身を任せていた。シユテルたちが出かけた後、さすがに彼女たちの部屋に居続けるのもどうかと思い、自分の部屋に戻っている。することもないし昼寝でもしよう、とリビングの電気を消して、シユウはテーブルに突っ伏してうとうととしていた。

そのシユウを起こしたのは、物音だ。扉の鍵が開けられ、誰かが中に入ってくる。シユウが欠伸をしながら体を起こしたちょうどその時に、見慣れた少女が入ってきた。

「おかえり、シユテル」

シユウがどこか嬉しそうに笑って言うと、シユテルの表情が一瞬だ

けだが引きつったように見えた。どうしたのだろう、と首を傾げるシュウへと、シュテルが言う。

「すみません、シュウ。少し用事ができてしまいました……。明日の夕方まで、帰ることができなくなりました」

「ん……。長いね。大丈夫？」

「ええ、危険なことはありません。大丈夫ですよ」

シュテルはそう言いながら、シュウの隣に静かに座る。じっとシュウの瞳を見つめてくる。

「シュウ」

真剣な声。思わずシュウは居住まいを正した。

「ご飯は大丈夫ですか？」

真顔で聞いてくることがそれが、と内心で苦笑しつつ、心配されても仕方がないかとも思う。シュウは冷蔵庫と財布の中身を思い出し、しっかりと頷いた。

「うん。大丈夫」

「そうですね。それなら良いのです。では、そろそろ行きますね」

立ち上がるうとしたシュテルの手を、シュウが掴んだ。シュテルが少し驚きながらシュウを見る。そのシュテルの目を見て、シュウは眉尻を下げながらも微笑んだ。

「行ってらっしゃい、シュテル。気をつけてね」

その言葉に何を思ったのだろう。シュテルは何かを堪えるように目を閉じ、やがてしっかりと頷いた。

「はい。行ってきます、シュウ」

シュテルが出て行くのを見送って、シュウは再びテーブルに突っ伏した。シュテルたちがいないなら、もう少し、ご飯の準備までは寝ていよう。そう考え、目を閉じる。

でもやっぱり寂しいなあ。

そんなことを思いながら、再び微睡みに身を任せた。

故に気づかなかった。隣の部屋で、

「ええか？ 今回のミッションは時間との勝負や。大丈夫やな？」

「もちろんです、我が主」

「王様は料理に集中してええからな。しっかり美味しいもの、作ってあげてな」

「うむ。そちらは任せるぞ」

「レヴィとユーリは私と一緒に練習、だよ。結界を張るから屋上に行

こう」

「うん…」

「はい…」

「シュテル、それは間に合いそうなの？」

「間に合わせてみせます。……ですが、何かあれば、協力をお願いします」

「うん… それまでにはやてちゃんたちを手伝っておくね」

そんな会話が交わされて、何かしらの準備が大急ぎで進められていた。

翌日。シュウは朝食をコンビニのパンで済ませ、昼食を冷凍のピラフで済ませた。買い物に出かける際になぜか隣の部屋、シュテルたちの部屋が気になったが、とりあえずは気にしないことにして買い物済ませ、自宅でのんびりと過ごしている。

昼寝と読書で時間を潰し、気づけば太陽は西へと傾いていた。シュテルたちは未だに帰ってきていない、らしい。シュウはどこか寂しげに小さくため息をつくときつと疲れて帰ってくるであろう四人のために、腕によりをかけて夕食を作ろうと立ち上がる。何を作ろうかと考え始めたところで、勢いよく扉の開く音が響いた。

シュウが体を大きく震わせ、戸惑いがちに部屋の入り口へと振り返る。誰かが姿を見せる前に、

「静かに開けられんのか…」

「じめんなさい…」

聞き慣れた少女たちの声。ディアーチェとレヴィだ。シュウは苦笑しつつも、嬉しそうに玄関へと向かう。そこにいたのは、ディアーチェとレヴィ。それにシュテルとユーリもいた。

「おかえり。今から晩ご飯を作ろうと思っていたところだったよ」

それを聞いた少女たちがわずかに目を見開き、次いで安堵のため息をつく。シュウが困惑していると、シュテルが手を差し出してきた。

「間に合ったようで何よりです。シュウ、迎えに来ました」

「えっと……。迎えて、どこかに行くの？」

「来ていただければ分かりますよ」

少女たちが、どこか悪戯っぽく笑う。いつも無表情なシュテルですら、どこかうつすらと微笑んでいた。

いまいち事情が分からないながらも、シュウは四人に促されて部屋を出る。そして案内されたのは、隣のシュテルたちの部屋だ。シュウは首を傾げながらも、シュテルたちの後に続く。そしていつも通りリビングに通されて、

「シュウくん、誕生日おめでとうー」

突然の大勢の声に、シュウは目を丸くした。

リビングは様々な飾り付けがされており、部屋の中央のテーブルには大きなケーキと豪華な料理の数々。そのテーブルの周囲には、なのはやフェイト、はやてたち。皆が笑顔でシュウを見ていた。

「えっと……。なにこれ？」

未だに状況が掴めていないシュウに、なのはが言う。

「シュウ君、今日が誕生日なんだよね？」

「あ、うん。よく知ってるね」

「だからね。誕生日会だよ」

「へえ……。誰の？」

「もちろんシュウ君の」

シュウの動きが止まる。ゆっくりと振り返る先にはシュテルたちがいて、四人共が頷いた。

「そついつとです。お誕生日おめでとうございます、シュウ」

シュウはしばらく放心したままだったが、やがて、

「あ、ありが、とつ……。？」

べつにかそれだけの言葉を絞り出した。

その後は、シュウにとって全てが新鮮な体験だった。

ケーキのろうそくの火を吹き消したのは今よりももっと幼かった頃以来だし、まず大勢の友人が集まって祝福してくれることそのものが初めてだ。自分のために集まってくれたと聞いた時は、本当に泣きそうになってしまった。

シュテルたちは昨日からずっと準備をしていたらしい。ディアーチェは一日かけて今並んでいる豪華な料理の準備をし、はやてたちはこの部屋の飾り付けを家族総出で行っていたそうだ。レヴィとユーリ、フェイトは、歌の練習。その歌は、先ほど聞かせてもらった。よくある誕生日の歌だったのだが、一生懸命歌う二人に自然と笑みがこぼれてしまった。

なのはははやてたちの手伝いをしつつ、シュテルに頼まれればそちらの手伝い、だったらしい。ケーキ作りを手伝っただけだけど、と言っていたが。

そしてシュテルは、誕生日ケーキの作成。無論シュウ好みの味にしてくれている。そして、もう一つは……。

大勢で遊び、食べて、騒いで。気づけばとっぷりと日が暮れていた。どうやら全員、今日はここに泊まっていくらしい。食べ終わったお皿などは八神家が片付けている。最初は自分の家だからとディアーチェたちが片付けようとしていたが、はやて曰く、

「シュウの家族が側におらんとあかんやろ？ あたしたちでやっとくから、王様たちはのんびりしておけばええよ」

とのこと、シュウたちはリビングで余った料理をつつきながらのんびりと過ごしていた。隣のキッチンからは洗い物や、はやてたちの談笑の声が聞こえてくる。

「まったく、妙な気の遣い方をしおって……」

ディアーチェはそんなことを言いながらも、その表情は穏やかなものだった。

さらにしばらく過ごし、レヴィとユーリが眠気から船をこぎ始めた頃。ディアーチェは二人を連れて寝室に向かった。ついでに子鴉た

ちの様子を見てくる、と言い残して。すでに洗い物の音はしなくなっている、ディアーチェからあてがわれた部屋に集まっているのだらう。

つまり、リビングに残されたのはシュウとシュテルの二人だけだ。二人は同じソファに並んで座り、静かにのんびりとお茶を飲んでいった。しばらくそんな時間が流れたところで、シュテルが、今のうちです、と立ち上がる。首を傾げるシュウの目の前で、シュテルは部屋の隅に丁寧に置かれていた紙袋を取ると、それをシュウに差し出した。

「誕生日プレゼント、というものです」

シュウが驚きで目を丸くする。よく見れば、シュテルの頬はわずかながら朱に染まっていた。そんなシュテルの表情に感想を抱く余裕は、今のシュウにはない。シュテルから紙袋を受け取ると、おそろそろといった様子で口を開いた。

「開けても……いい？」

「はい」

許可を得たので紙袋に手を入れ、中のものを丁寧に取り出す。それは、マフラーだった。少し長めの、暖かそうなグレーのマフラーだ。

「わあ……。いいの？ もらっちゃっても」

「もちろんです。そのために作りましたし」

シュテルの後半の声は、少し小声になっていた。それでもしっかりと聞き取ったシュウは、最近シュテルが何をしていたのかを思い出す。編み物をしていた姿を。

「もしかして、「これ……。シュテルの、手作り？」

「そうなりますね。まだ慣れていないので少し歪なところもあります
が……」

「そんなことないよ！ すごくいいなあ……」

シュテルからの手作りのマフラー。そう考えただけで、自然と頬がにやけてしまう。シュウはそのマフラーをそっと抱くと、笑顔で言った。

「ありがとう。シュテル」

「いえ。喜んでもらえたのなら、作った甲斐があったというものです」
そう言ってそっぽを向くシュテルの頬は、彼女には珍しく真っ赤だった。そんなシュテルの反応が新鮮で、そしてとても魅力的で。再びシュウの隣に座ったシュテルの手をそっと握ると、驚いたように目を丸くするシュテルと目が合った。

「本当にありがとう」

「いえ、その……。どういたしまして」

シュテルが言葉に詰まるのもまた珍しい。シュウは楽しげに笑うと、そっとシュテルへと身を寄せる。シュテルはまた驚いたように体を震わせたが、しかし離れるようなことはせず、シュテルもシュウへと身を寄せてきた。

「うん……。僕は幸せ者だね。みんなに祝ってもらえて、好きな人からプレゼントまでもらって」

シュテルは無反応。ただ、頬を染めるだけ。

その後はしばらく静かな時間を楽しんでいたが、やがて二人は顔を見合わせると、揃って照れくさそうに笑い合った。

翌日。残りの片付けを終えて、なのはやフェイト、はやてたちは帰って行った。

シュウたちはそれを見送った後、いつも通りの一日を過ごし始める。リビングで皆でのんびりと過ごす一日を。今日もそうなることだろうと思っていたのだが、

「ああ、そつだ。渡すものがあつたのだ」

ディアーチエが読んでいた本を閉じ、リビングを出て行く。何事だろうと思いつつもしばらく待っていると、すぐにディアーチエが戻ってきた。その手には、小さな長方形の紙片が二枚。ディアーチエはそれを、シュウに手渡ししてきた。

「商店街の福引きで当たったのでな。我は興味がない。行ってくるといっ」

渡されたものは、商店街にある映画館の無料券だった。作品名は書かれていないので、どうやら何にでも使えるらしい。期限は、今日ま

でだ。

「ぎりぎりだね」

「ああ。さっさと行ってくるよいい」

言い終わると、ディアーチエは自分の席に座り。読書を再開する。レヴィとユーリに視線を向けると、彼女たちもテレビの特撮に夢中なようだった。

「シュテル。一緒に行かない？」

シュウが聞いて、シュテルが答える。

「はい。」「一緒にしましょう」

二人はそれぞれ身支度を調べると、玄関へと向かう。

シュウの首元に巻かれる温かそうなグレーのマフラー。それを見たディアーチエが満足そうに微笑んでいたのだが、シュウはそんなことには気づかない。

「それじゃあ、行くっか」

「はい」

シュウとシュテルはどちらからともなく手を繋ぐと、賑やかな街の中へと出かけていった。

模擬戦

リビングで朝食を取りながら、シュウはシュテルたちの会話に耳を傾けていた。今日の予定を相談するもので、どつやら今日は全員予定があるらしい。仕事ではなく、なのはたちと約束があるそうだ。

予定が決まっているのに何の相談を、と思うが、どつやらシュウをどうするか、ということらしい。

「一人でのんびり過すよっ。」

というシュウの意見は、相談の最初で却下となっている。シュテルとデイアーチエがその言葉を聞いた瞬間、無言でシュウを見てきたので、何でもないです、とそれ以降は発言していない。

気に掛けてくれるのは嬉しいんだけど、何だろう。情けない……。

内心で少し落ち込みながら、ジャムを塗ったトーストをかじるのんびりと待っていると、やがてシュテルが視線をこちらに向けてきた。

「シュウ」

呼ばれたシュウが小首を傾げる。シュテルが続ける。

「リンディ艦長から許可をいただきました。アースラに行きませんか？」

シュテルの提案に、シュウは内心で驚きながらも、二つ返事で了承した。

シュウの中には特殊なロストロギアが存在する。だがその記録は抹消しているため、管理局でもシュウは、巻き込まれたただの一般人、という扱いになっている。そのためにアースラに、予定もないのに訪れるのはあまり感心できないと思うのだが、そう考えているのはシュウだけのような気がするのは何故だろう。

シュテルたちと共にアースラを訪れたシュウは、そのままある部屋

へと案内された。とても広い部屋で、すでに先客が何人もいる。なのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッターの面々、など。今回は人が多いなど不思議に思っている、シユウたちに気づいたのはとフェイト、はやてがこちらへと駆け寄ってきた。

「みんなー！ こんにちはー！」

なのはが元気よく挨拶し、シユテルもいつもより柔らかい無表情で淡々と返事を返す。レヴィは元気よく、ユーリは丁寧に挨拶をする。ディアーチエはそっぽを向いたままだ。

「王様。無視はひどないか？」

「貴様と交わす言葉はない」

「……………」

「ぐっ…………。そんな目で見るな！ ええい、分かった！ こんにちはー！ これでいいかー！」

「やっぱり王様、大好きやー！」

「寄ってくるな阿呆！」

この二人はいつも通りだ。

「それで、シユテル。みんな揃ってるけど、何しに来たの？」

ディアーチエたちから視線を外してシユテルに問うと、なのはが少し驚いたような表情を見せた。シユウが首を傾げると、なのははシユテルを戸惑いがちに見る。

「言ってなかったんだね」

「遅れないことを優先しましたので。説明はここでもできるでしょう」

シユテルがシユウへと向き直る。改まったその態度にシユウが身を硬くするのを見て、シユテルはうつすらと苦笑を浮かべた。

「シユウ。貴方を参加させるつもりはありませんので、その点はお安心ください」

いきなり仲間はずれを宣言されてシユウが内心で落ち込む。それを知ってか知らずか、シユテルは続ける。

「模擬戦をします」

仲間はずれ万歳。思わず安堵のため息が漏れた。

お互いの技術向上を目的とした、集団線を想定した模擬戦闘訓練。これが本日のテーマらしい。そんなお題目が掲げられているが、ようは皆戦いたいだけだろう、と思ってしまう。皆がどう思っているか、本当のところは知らないが。

シユウはシユテルと共に、集団から少し離れた場所にいる。二人で静かに、今回のルールが決まっていってるところを眺めている。

「模擬戦かあ。見るのは初めてだ」

「個人戦などはよくしていますが、模擬戦の見学はシユウにとって得る物は少ないでしょう」

「だから呼ばなかったと。今回は誰もいなくなるから、かな？ 別に一人でも、大丈夫だよ」

そこまで自分は子供っぽいのか、それとも頼りないのか。そう思い少し気分を沈ませていると、違いますよとシユテルが首を振る。シユウの目を真っ直ぐに見つめ、

「単純に、私たちが不安なんです。貴方が何かに巻き込まれないか」

「ん……。そうそうないと思っけど。ギフトッドの情報はもうほとんどないんだし」

「私たちの方で、ですよ」

シユテルの言葉にシユウが首を傾げ、すぐにそっか、と得心したように頷いた。

シユテルたちは囑託魔導師として時折働いている。当然何度か荒事も経験しているらしく、それに関わっていた者の逆恨みにシユウが巻き込まれることを懸念しているのだろう。シユウは魔法の知識はそれなりに得ているが、戦闘となると無力に等しい。シユテルたちの心配は当然と言える。

「ありがとう、シユテル。あとで皆にも改めてお礼を言っよ」

「私たちが原因のことですから、お気になさらずに」

そんな言葉を交わしていると、ルールの相談をしていたのはがこちらへと手を振ってきた。どうやら終わったらしい。シユテルはなのはに頷きかけると、それでは、とシユウに言っ。

「観戦室への行き方は大丈夫ですね？」

「うん。もちろん」

データを収集、纏めるための部屋でもある。今はそこにリンディやエイミーもいるとのこと、この後はその部屋へと向かうことになっている。

「では行ってきます」

「うん。がんばってね、シュテル」

シュテルは小さく頷くと、皆が集まるところへと飛んでいく。シュウはそれを途中まで見送ってから、きびすを返した。出入り口へのんびりとした足取りで向かう。

ふと、シュウは足を止めた。どんな戦いをするのだろうかと少しだけ興味を持ち、振り返る。幾人かの人数に別れ、相対している友人たち。皆が特徴的な衣服に身を包んでいる。あれがバリアジャケット、というものだろう。

「へえ……。いいなあ。僕も魔法が使えたら良かったのに」

戦いたい、とは思わないが、魔法使いに興味がないと言えば嘘になる。それに、クロノが身にまとうバリアジャケットはなかなか格好いい。少しだけ羨ましく思う。

「まあ、無い物ねだりだよな。そろそろ行くっ」

苦笑して、きびすを返す。

こういった感想は、せめて観戦室で思っべきだったとシュウはすぐに後悔した。

『結果展開完了！ いつでもいいよー！』

どこから響くエイミーの声。そう言えばいつの間にか、周囲の色が少し変わっているような気がする。そして、すぐに気づいた。ここはずでに結界の中だと。

「じつやら僕は存在感が薄いらしいね。ふふ、新たな発見だよ」

出入り口の扉はびくともしない。安全性のために締め切られているのだろうか。そしてしばらくして、轟音が響き始めた。どうやら模擬戦が始まったらしい。

「あっはっは。じつじついいわ」

シュウは乾いた笑いをその顔に貼り付け、顔面蒼白になっていた。

その頃の観戦室。結界を張り終えて、エイミィはデータの収集を開始する。その後ろには、遅れてやって来たリンディが立つ。リンディは、間に合ったわね、と小さく安堵のため息を漏らし、そしてすぐに、え、と間抜けな声を漏らした。

「艦長、お疲れ様です。どうかしました？」

エイミィが不思議そうに聞いて、リンディが訓練室の一角を指さす。その先を見たエイミィもそれに気づき、見る見るうちに顔が青くなっていく。

「ちょっと待ってみんなー！ すと……」

慌ててエイミィが叫ぶが、すぐに戦闘が始まり、轟音で声がかき消されてしまった。

非殺傷設定。そうだ、これがあるから死にはしないだろう。そう自分に言い聞かせるシュウの真横を、魔力弾が打ち抜いていく。シュウの顔面、すぐ横を。そして背後の置物が粉碎され、その欠片がシュウの頬を薄く切った。わずかに流れる、血。

「あはは。見る。僕がゴミのようだ」

先日見たアニメ映画を思い出しながら、シュウは笑った。

「あはは」

笑った。

「あっはっはっはっはー！」

そして走った。笑いながら。そして泣きながら。

「わりと本気で誰か助けて切実に！」

そんなことを叫びながら。

それに気づいたのは偶然だった。

何の気なしに振り返った先。シュウはちゃんと観戦室に向かっているだろうかと振り返った先。それを見て、シュテルの表情が凍り付いた。シュテルには珍しいことに、表情を青くしていく。そしてすぐ

に、行動に移した。持ち場を離れ、全力で出入り口の側へと向かう。

『シュテル！ どうした！』

ディアーチェの念話。だが今はそれに返事をする時間すら惜しい。なぜなら、どこかの三人娘と自分たちの盟主が、強大な魔法の準備をしているのだから。

「シュウー」

シュテルが呼ぶと、必死に魔法の流れ弾から逃げているシュウが足を止めて振り返った。虚ろな目でシュテルを見つめてくる。内心で焦りを感じながらシュテルはシュウの側に下りると、すぐにプロテクションをかけてシュウを保護した。

「どうしよう、シュテル！」

シュウの声に、何かあったのかと不安に襲われる。

「遺書！ 書き忘れた！」

何かはあった。シュウの心が壊れた、そんな意味で。

「シュウ！ しっかりしてくださいー！」

大声で呼びかける。何度か続けると、シュウが何度か瞬きをして、瞳に光が戻ってくる。シュテルの顔を認識したのか、すぐに泣きそうな表情になった。

「シュテル……」

「はい」

「怖かった……。本当に本気で怖かった……。死ぬかと思った……」

「ごめんなさい。ごめんなさい、シュウ。もう大丈夫です」

瞳に涙をためるシュウをそっと抱きしめながら、シュテルは周囲を確認する。障害物として設置されている大きめの岩などが点在している場所だ。おそらく観戦室からはこれらの影響でシュウの姿を確認できなかったのだろう。せめて退室まで是一緒にいるべきだったと後悔するが、今は無事にシュウを連れ出すのが先だ。

そんなシュウは落ち着いたのか、シュテルから離れると、顔を真っ赤にしていた。

「シュウ。落ち着きましたか？」

「うん……。ごめん、シュテル……」

謝るべきは私たちです、と言おうとしたところで、大きな魔力反応を背後に感じた。シュウが表情を引きつらせ、シュテルもすぐに察しがつく。

「全力全開！」

なのはの勇ましいかけ声が、今はとても恨めしい。

「シュテル……」

シュウの不安げな声に、シュテルは大丈夫ですと頷きかける。

「全身全霊をとじて、守ります」

魔力反応へと体を向け、デバイスを構える。

「女の子に守ってもらって……。なんかもう、情けなくて泣きそうだけど、お願いします……」

シュウのその言葉の直後。光が爆発した。

「ごめんなさい……」

訓練室を出たすぐの廊下で、シュウは缶ジュースを飲んでいた。そのシュウの目の前には、頭を下げる友人知人。誰もが申し訳なさそうな表情をしている。特にクロノやエイミィは激しい自己嫌悪に襲われているらしく、とても苦しそうな表情をしていた。

その後、シュテルの結界はなのはたちの魔法に耐えきった。その後、シュテルが全員へと、シュテルには珍しい大声で念話を飛ばし、シュウが取り残されていることを連絡。慌てて模擬戦は中断され、今に至る。

ちなみにシュウが飲んでいるジュースはクロノが買ってきたものだ。

「ふふ。本気で死を覚悟したね。貴重な体験だったよ」

遠くを見るような目で言うシュウに、全員が言葉を失ってしまっ。何と声をかければいいのか分からない、といった様子だ。そんな中で、リンディが前へと進み出てきた。

「本当にごめんなさい、シュウ君。本来なら私たちが気づかないといけないかったのに……。とても怖い思いをさせてしまって、ごめんなさい」

そう深々と頭を下げてくる。艦長という立場の人から頭を下げられたことにシュウは戸惑いを覚え、やがて小さくため息をついた。居心地悪い、と。

「もういいですよ。ジューズももらっただし」

「いや、それでいいの……？ 詫びの品にもなっていないんだ。他に何かないのか？」

「じゃあ、美味しいご飯が食べたいです」

シュウがそう言つと、クロノは呆気にとられたように口を開けていたが、やがて小さく苦笑を浮かべた。しっかりと頷いて、言う。

「君らしいな……。分かった。できる限りの手配をしておくよ」

「期待してます」

クロノがもう一度謝罪を言つて、その場を後にする。他のメンバーもそれぞれしっかりとシュウに頭を下げて、その場を後にしていった。こんなことがあった直後だからだろうか、さすがにそのまま訓練室に戻る人はいないようだ。

やがてその場に残されたのは、シュウとシュテルたちだ。

「シュウ。すまなかった。我らがもう少し気を配っておけば……」

「ごめんね、シュウ……」

「ごめんなさい……」

ディアーチェ、レヴィ、ユーリがそれぞれその口にする。家族が意気消沈している姿をあまり見たくないシュウは、努めて笑顔で、

「本当に気にしなくていいから。それより、晩ご飯を楽しみにしようよ。クロノが奢ってくれるみたいだから」

気楽な調子のシュウに、ディアーチェたちが安堵のため息を漏らす。

そろそろ行くつと、シュウがジューズを飲み終えて、五人は移動を開始する。休憩室に全員が集まっているようなので、そちらに向かうことにした。

「シュウ」

歩きながら、シュテルが声をかけてくる。シュウが、どうしたの、と首を傾げると、

「本当にすみませんでした」

「気にしないでいいよ。それよりも、ありがとう。守ってくれて」

情けなくてごめん。シュウがそう口にするのと、シュテルは珍しく驚いたように目を睨った。何を言っているのですか、と首を振る。

「人には得手不得手があります。今回は私が得手とすることだっただけです。デバイスのメンテナンスはいつもお願いしているわけですし」

「うん……。そう、だね」

「ここで自己嫌悪しても仕方がないと考え、シュウは頷いて思考を放棄する。いつか自分も、シュテルを守れるようになりたい。そんなことを思いながら。」

「……そう言えば、シュテルのあんな声は初めて聞いたなあ。すごい慌てていたような……」

「忘れてください。今すぐに」

シュテルが顔を背ける。その顔は、心なしか少し赤い。シュウはその横顔を見ながら、たまにはこんな日もいいか、と微笑んでいた。

もちろん巻き込まれないことが前提、ではある。

妄想

ベッドに横たわる少年と少女。少年、シュウは緊張した面持ちで隣の少女を見やる。少女、シュテルはシュウと目が合つと、ほのかに頬を染めて、艶めかしい声でシュウの名を呼ぶ。その声に、シュウは思わず生唾を呑み込んだ。

シュウはシュテルをそつと抱き寄せ、その首元に……。

「うわあああ……」

シュウは大声を出して飛び起きた。荒い息をつきつつも、必死に周囲の状況を確認する。部屋は薄暗いが、見覚えのある部屋だ。

シュテルの、部屋だ。

先ほどまでの夢を瞬時に思い出し、現実と夢との区別が曖昧になる。激しく頭を振って、落ち着け、さっきのは夢だと何度も自分に言い聞かせる。

なんて夢を見たものだろうか。正に悪夢だ。

ん？ 悪夢か？

夢をゆっくり思い出す。夢の中のシュテルの姿。その姿を思い出し、思わず頬が緩みそうになり、

「シュウ。どうかしましたか？」

隣からのシュテルの声。ぎょつとしつつ隣を見れば、シュテルが自分を気遣わしそうに見つめている。そして再び夢をリフレイン。顔を真っ赤にしてしまう。

「シュウ？ 体調でも悪いのですか？」

そつと伸ばされてくるシュテルの手。シュウはそれを黙って見ていたが、自分に届きそうになったところではつと我に返り、

「うわあああ……」

思わずその場を逃げ出した。後に残されたシュテルは、状況が理解できずにただただ呆然としていた。

翌日。従業員の二名が囑託魔導師としての仕事に出ているため、喫茶店は臨時休業。休みとなった三人のうち、二人が閑散とした店内に残っている。普段は客が使うテーブルの一つを使い、向かい合って座っていた。

残るもう一人、ユーリは買い物に行っている。帰ってくるまでまだ一時間はあるはずだ。故に言うべきは、今。

「そんな夢を見たんだよ！ 僕はあれかな、変態かな！」

シユウがそんな言葉を吐き出す。その先にいるのは、

「その、なんだ……。それを我に言われても、な……」

顔を真っ赤にしたディアーチェがいた。

何が言いたいのだ、こやつは。それがディアーチェの率直な感想だ。仕事に向かうシユテルとレヴィ、そして買い物に向かったユーリを見送った後、ディアーチェは店内でのんびりと読書をしようとコーヒーを用意した。そのうちシユウも来るだろうと予想して、二人分。その予想通りにシユウが来たのだが、そのシユウから発せられた言葉は予想外のものだった。

曰く、相談がある、とのこと。そう言えば今朝方はシユテルと余所余所しくしていたが、それに関することだろうか。自分が解決できることなら相談に乗ってやるうと身構えたディアーチェに放たれた言葉は、シユウの夢の話だった。

何だそれは。のろけか。これがのろけというものなのか。

頬を引きつらせながらそう思っていた。二人は幼い頃から恋仲と呼べる関係になっていたのだから、今更実際にそんなことがあっても不思議ではない。さすがに言葉にされると恥ずかしいものはあるが。

だが、とディアーチェは思い直す。そう言えばこの二人に関して、テレビやドラマ、小説でよくある『そうだったこと』をしている気配がない。せいぜいが、二人で図書館や映画館に出かけていたり、買い物に行ったりなどちょっとしたデートをするぐらいだ。今も昔も、それ以上の話を聞いたことがない。

それ故に、シュウは夢の中であってもそういったものを見たのが衝撃だったのだろう。そして思ったのだろう、自分はシュテルをそんな目で見ている変態なのかと。

「シュウ。うぬは今年で幾つになる？」

「へ？ えつと……。二十歳だね」

「至って健全だ。むしろ遅いぐらいだ。気にするな」

話は以上だ、と言わんばかりにディアーチェは本を広げた。シュウは驚きで一瞬固まっていたが、すぐに慌てたように口を開く。

「いや、そんな適当なこと言わないでよ……！」

「と、言われてもな……」

このような取り乱し方をするシュウは滅多に見ない。珍しいこともあるものだと内心で苦笑しつつ、それならばとディアーチェが少し考えて、言う。

「我も男の悩みなど分からん。他の誰かを頼るべきだろう。例えば……。クロノ・ハラウンなどどうだ？」

言ったものの、これはないかとディアーチェはすぐに首を振った。彼は立場的に、自分の知人の中で最も多忙な人間の一人だ。そんなことはシュウも分かっているはずであり、それは無理だと言ってくると予想して、何か代わりの案をと再び考え始める。だが、

「分かった！ 行ってくる！」

次の瞬間には、シュウは喫茶店を飛び出していた。

「……は？」

後に残されたのは、呆然とするディアーチェだけだった。

友人からの突然の連絡。しかも、至急相談したいことがあると言われれば、クロノも流石に心配になってしまふ。部下たちに簡単に説明して、自分にしかできない仕事を急ぎで終わらせ、他の仕事は別の者に担当してもらふ。本来ならこんなことをすれば良い顔などされないもののだが、そこはクロノの人望か、部下たちは皆、たまには息抜きも必要ですと笑顔で引き受けてくれた。

そしてシュウの元へと駆けつけて、話を聞いて。

「帰っていいか？」

「ひどいー」

クロノは頭痛を堪えるようにこめかみを押さえ、大きなため息をついた。多くの仲間に迷惑をかけて駆けつけてみれば、相談内容はのろけ話に近いもの。部下たちに合わせる顔がない。

「シュウ。君のその夢はおかしなところはない。気にする必要はないと思う」

「むづ……。ディアーチエにも言われたけど、納得いかない……」

「いや待て。ちょっと待て。誰に相談しているんだ君は！」

クロノの狼狽した声に、シュウは不思議そうに首を傾げた。ディアーチエにだけど、と平然と答えるシュウに、クロノは頭が痛くなってくる思いだ。男同士ならともかく、女性にそんなことを相談するのは。

「とにかく、これ以上僕から言うことは何もない。納得できないなら、ユーノにでも聞いてみたらどうだ？」

「ん……。よし、そうしてみよう」

言つが早い、シュウは挨拶もそこそこに駆けだした。無限書庫へと向かったのだろう。クロノは小さくため息をつくと、空いた時間で何をしようかと考える。

「一応、様子を見に行くか」

クロノは一つ頷くと、その場を後にした。

ふと、歩きながら思う。

そう言えば、ユーノは今日、なのはと会つと言っていたような

……？

「かくかくしかじかでこうなんだけど、どうしようー！」

「わーわーー！ ーんなどこで言うことじゃないよ！ 落ち着いっ！」

「そ、そうだよシュウ君！ とりあえず落ち着いて！ ね！」

たまたま休みだったユーノに連絡を入れ、指定された飲食店へとシュウが向かうと、なぜかなのはもそこにいた。しかしそんなことを気にする余裕もなく、シュウはユーノに駆け寄ると、ことこのあらまし

を説明した。してしまつた。大声で。

ユーノとなのはが顔を真っ赤にしなが、とりあえずとシュウをいすに座らせる。自分たちの水をシュウに差し出して、少しでも落ち着いてもらおうとする。その意図を察したわけではないだろうが、シュウは水を二杯とも飲むと、ゆっくりと息を吐いた。

「ふう……。ありがとう」

「落ち着いた？」

「落ち着きました」

シュウは一度だけ頷き、店員を呼んでコーヒーを注文する。その様子を見ていたなのはとユーノが、どこか安堵したような表情を見せていた。二人もシュウの向かい側へと並んで座った。

「それにしても、びっくりしたよ。いきなりあんな……。えっと……」

「なのは、無理に言わなくてもいいと思うよ……」

「そ、そうだよな」

言葉にしにくそうにしているなのはへとユーノが言って、なのはは引きつった笑みで頷いた。二人はそろってため息をつく、と、シュウへと視線を投げてくる。シュウは店員が持ってきたコーヒーを一口飲み、一瞬だけ動きを止め、そして何も言わずに飲み続けている。

見られていることに気づいたシュウが首を傾げると、二人はまた大きなため息をついた。

「えっと……。シュウ。ちょっと言いにくいけど、はっきり言っておくよ」

ユーノの言葉に、シュウが緊張した面持ちになる。そんなシュウへと、ユーノは言った。

「気にしすぎだよ。それ以上は、正直言いようがないかな」

「クロノにも言われたけど、納得できないよ！ 初めてだよあんな夢！」

なおも言い募るシュウへと、どつしたものとユーノは困ったように苦笑する。ユーノがちらりとなのはを見れば、なのはの笑顔は困惑で引きつっていた。

「いつそのこと、シュテルに直接聞いてみたら？」

無論これは本心で言ったわけではない。きっと、そんなこと聞けるわけがない、と返すはずだと思つてのことだ。だがユーノのその予想は見事に外れてしまった。

「そっか、それが手っ取り早いか！」

そして直後に駆け出すシュウ。もちろんお金を置いていくことは忘れない。ぼかんと間の抜けた表情をした二人が取り残される。

「……って、ちょっと待ってシュウ！」

慌ててユーノが立ち上がり、続いてなのはも立ち上がる。

「ユーノ君、お会計は私がしておくから、シュウ君を追つて！」

「分かつた！」

そんな短い会話を交わして、ユーノは急いでシュウを追つた。

「ただいま戻りました」

シュテルは喫茶店に戻ると、少しばかり珍しい来客者にわずかに目を細めた。テーブルで向かい合つて座っているのは、ディアーチェとクロノだ。クロノはシュテルに気がつくくと、片手を上げて挨拶をしてくる。

「久しぶりだね」

「はい。お久しぶりですね。今日はどういったご用件で？」

「いや、その……」

クロノとディアーチェが視線を交わし、二人揃つて困つたような苦笑を見せる。何か問題でもあつたのだろうかと首を傾げていると、

「ただいま……」

背後からの声。シュテルが振り返ると、シュウが息を切らして立っていた。シュテルが少し驚き、そしてディアーチェとクロノがなぜか目を大きく見開いている。少しだけ焦りの感情が見えるのは気のせいだろうか。

「おかえりなさい、シュウ。出かけていたのですか？」

「うん、ちょっとね。それでね、シュテル。聞きたいことがあるんだ」

「はい、何でしょうか」

ディアーチェとクロノが席を立つ。身振り手振りでシュウによせ、

やめると指示を出す。だがシュウはそれには気づかず、言った。

昨夜の夢を。それに混乱している自分の心境を。全て、言ってしまった。

「ああ……」

「遅かった……」

店の外からはユーノとなのはの声。どうやらシュウを追いかけきてきたらしい。

そしてシュテルは、

「……………」

目を大きく見開き、そして頬を赤く染めていた。

どうにかして場を繕わなければ。シュウから相談を受けた四人が瞬時にそう考え、高速で頭を回転させる。どうすれば穩便に済ませられるかと。だが、最初に口を開いたのはシュテルだった。

「シュウ」

「うん」

「昨夜は眠れたのですか？」

「いや全く……」

「でしょうね」

シュテルが苦笑。どうやら一人で納得しているようだが、シュテル以外にも、シュウも含めて訳が分からない。首を傾げているシュウの耳元へとシュテルは顔を寄せ、

「おやすみなさい」

シュウにしか聞こえない声で、優しく告げた。

何かしらの魔力が込められていたのか、シュテルの声を聞いたシュウはその場で眠りに落ちた。力の抜けたシュウの体をシュテルが受け止め、慣れた様子で二階へと運んでいく。しばらく待つと、シュテルはすぐに戻ってきた。

「えっと……。シュテル。その、聞いても、いいかな……？」

なのはの遠慮がちな声にシュテルは頷いた。

「デバイス関連の仕事が立て込んでいまして、昨日まで一週間近くほ

とんど寝ていないようでした。今回のこれは、その影響でしょうね。寝不足で意識そのものが朦朧としていたのだと思います」

「つまりは、正気じゃなかった、と?」

そのクロノの言葉に、シュテルはまた頷いた。その場に居合わせた一人一人に視線を向け、そしてシュテルは頭を下げた。

「おそらく次起きた時は何も覚えていないと思いますので、シュウの代わりに謝罪します。」迷惑をおかけして、すみませんでした」

「迷惑だなんて思ってないよ。ただ、その……。びっくりはしたけど……」

なのはは苦笑しながらも、でも気にしてないから、と付け加えた。

一件落着、と見てよさそうだ。そう判断したディアーチェは、さて、と立ち上がり伸びをする。わざわざシュウの、家族のためにここまで来た三人に、

「詫び、というわけではないが……。せっかく来たのだ、何か食べていくといい。メニューから適当に選べ」

そう言うと、ディアーチェは厨房へと向かう。注文が決まればシュテルが伝えに来てくれるだろう。そう考えて、ディアーチェは先に調理の準備を始めていく。

「ディアーチェ」

不意にかけられる声。振り向いた先にはシュテルがいた。

「ありがとうございます」

シュテルのその言葉に、ディアーチェは気にするなと手を振った。

日も暮れて、夕食も終わり。

「おはよう、すっかり熟睡しちゃったよ。……あれ? みんな揃って何してるの?」

欠伸をしながらのシュウの言葉に、その場にいる全員が苦笑とともにため息をついた。

悪夢

ぼたり、と液体が落ちる音。次いで誰かが倒れる音がして、少年は振り返った。少年の目に映ったのは、親しい少女の姿、親しい少女の、血だまりに沈む姿。

「あ……」

少年はふらふらと少女に近づき、その手を取る。まだ温もりはあるが、おそろくすぐに失われてしまったらう。なぜ、と自問して、何が、と心の底から返答があった。

なぜ、こうなった。これは何だ。少年が心の中で問いかけ、そして奥底から返答がある。

お前がここにいたからだ。足を引つ張ったからだ。

ぴくり、と少女の体がわずかに動き、少女が少しだけ顔を上げる。少女の視線が少年を捉え、そして淡く、優しく微笑んだ。

無事、ですね。ああ、良かった……。

少女は言い終えると再び倒れ伏し、そして二度と動くことはなかった。

そして気づけば、少年は喫茶店の中にいた。

いつもの喫茶店。元気な少女が接客をして、リーダー格の少女が厨房で料理をしている。少し内気なもう一人の少女は、一生懸命に料理を運んでいるところだ。

いつもの光景。だがこの中に、もう一人、本来いるべきはずの少女がいない。

一人、いなくなった。

そして気づけば、シユウは荒野に立っていた。目の前で倒れているのは、先ほど元気よく働いていた少女。なぜこうなった、やはり自分がいたからだ。

そしてまた一人いなくなり、気づけばもう一人も失われ、最後の一人は待っていてください、必ず方法があるはずです、と少年の前から姿を消した。

そして少年は一人になった。薄暗く、静かな店内。ぽつんと一人残された、使えないロストロギアだけを抱えた少年。少年は長い間茫然自失としていたが、出入り口からの物音で我に返った。そしてそれを見る。

最後の一人の息絶えた姿。

「うわあああー!」

そこで、目が覚めた。荒い息をつきつつ、シユウは周囲を確認する。見慣れた、自分の部屋だ。だが安心できない。できるはずもない。この部屋に、シユウは一人だ。

ふらふらと立ち上がり、扉へと向かおうとしたところで、

その扉が開いた。

そして見るのは、血まみれの少女……ではなく。

「シユウ、どうかしましたか?」

心配そうにこちらを見つめるシユテルがそこにいた。

確かに、そこにいた。

「シユテル……」

「はっ」

シユウに呼ばれ、シユテルが首をかしげる。シユウはそんなシユテルへと覚束ない足取りで近寄り、そしてその体を抱きしめた。

「シユウ?」

戸惑いの声をかけてくるシユテル。それでもシユウは何も言わずに、シユテルの体を強く抱きしめる。

ああ、温かい……。

シユテルは首をかしげながらも、そっとシユウの背に腕を回し、頭を優しく撫でてくれた。

先日、なのはが重傷を負って入院したとフェイトとはやてから連絡が届いた。顔などを見られないようにして病院へと向かったシユウとシユテルは、それを見て絶句したものだ。

なのはが日頃の訓練を含め、無茶をしていたことは知っている。い

ずれしっぺ返しがあるだろうとシュテルなどはなのにはよく注意していたものだ。だがそれでも、生死の境をさまようような怪我を負うなど想像もしていなかった。

隣に立つシュテルは、だからあれほど言ったのです、とつぶやきながら、拳を握りしめていた。小さく震えるシュテルの手を、シュウは黙って握っていた。

シュウは。心配すると同時に、別のことを考えていた。

いずれシュテルもこのような怪我を負うのではないかと。

シュテルたちは囑託魔道士だ。その時の仕事によっては、当然ながら危険なものもある。シュテルたちはおくびにも出さないが、命のやりとりも何度かあったはずだ。いつ大怪我を負っても、いや、死んでしまってもおかしくはない。

なのはを見守りながら、シュウはそんなことを考えている自分に嫌悪感を抱く。友人が苦しんでいるというのに、自分は何を考えているのか。

「早く良くなるといいね……」

「そうですね……」

二人は言葉少なく、静かになのはを見守っていた。

「シュウ、落ち着きましたか？」

シュテルの声に、シュウは顔を上げた。心配そうにしているシュテルへと、シュウは力なく微笑んだ。

「うん。大丈夫。ごめんね、シュテル」

そう言って、シュウはシュテルから体を離す。さすがに少し恥ずかしい。そのまま距離を開けようとして、

「……っ」

病院のなのはの姿を思い出した。思い出してしまった。シュテルを見て、いけないとは思いつつも泣きそうな表情を浮かべてしまう。

「シュテル、ごめん、もうちょっとだけ……」

「構いませんが……」

もう一度シュテルの体を抱きしめる。シュテルの体温をしつかり

と感じることが出来る。大丈夫だ、間違いなく生きている。それでも離れることができずにしばらくそうしていると、やがてシュテルが口を開いた。

「間違っていたらすみません。病院のことを思い出しているのですか？」

図星をつかれたシュウが大きく体を震わし、対するシュテルは薄く苦笑を浮かべた。

それきり静かになる。シュウは何も言わず、シュテルも口を開かない。ただ、何度も優しく背を撫でてくれる。大丈夫だというように。それがとても心地よく、いつまでもそうしてほしいと思ってしまう。どれほどそうしていただろうか。やがて、そろそろ寝ましようかとシュテルが言って、シュウは頷いた。そっとシュテルから離れる。名残惜しいと思っっているのが伝わったのか、シュテルはしばらくシュウを見つめ、仕方ないですね、と嘆息した。

「一緒に寝ましようか」

え、とシュウが勢いよく顔を上げる。シュテルの顔をまじまじと見つめると、暗がりの中とはいえ、ほんのりと赤くなっているのが見て取れた。

「いえ、無理にとは言いません。むしろ忘れてください。では私は戻ります」

慌てたようにシュテルがきびすを返そうとして、そのシュテルの首を思わず掴んでいた。少し驚いたように振り返るシュテルへと、シュウが言っ。

「いっしょ……？」

シュテルがわずかに目を見開き、そして、淡く微笑んだ。

「はい。もちろんです」

シュウのベッドへと二人で潜り込む。シュテルの手を握りながら、シュウは目を閉じて、

今度は夢を思い出した。血に染まった夢を。

勢いよく体を起こすシュウ。自然と荒くなる息。どうかしました

か、と氣遣わしげに聞いてくるシュテルへと、シュウは逡巡しながらも、夢の内容を語った。

「ああ、なるほど。それで……」

得心したように頷くシュテル。シュウはそんなシュテルの顔をまともに見ることができない。たかが夢ごときと幻滅されてはいないだろうか、と不安になってしまふ。

「シュウ」

呼ばれてシュウが振り返る。シュテルはいつもの無表情で、ベッドをぼんぼんと叩いていた。

「とりあえずは横になりましょう。でないといつまでも眠れませんよ」

横になっても眠れないけど、と思いつながらも、シュウは大人しく寝転んだ。布団をかぶり、目を閉じる。そしてまた夢の光景が眼前に広がるうとしたところで。

シュテルがシュウを抱きしめた。

「シュテル……っ」

思わずシュウの声が震えてしまふ。シュテルはそれに答えずに、シュウの頭を優しく撫でる。

「確かに私たちは、たまにははいえ危険な場面に遭遇することもあります」

シュウが息を呑み、ですが、とシュテルは続ける。

「私たちが貴方を一人にすることはありません。誰も、貴方の前からいなくなりません。だから安心してください」

何の根拠もない言葉。先のことなど分からない上での、シュテルの言葉。それでも、シュウはシュテルの声を、言葉を聞いて、なぜかとても安心できた。シュウもシュテルの背に手を回し、小さく頷いた。

「ありがとう、シュテル……」

シュテルはもう何も言わない。ただ静かに優しく、シュウを撫でてくれる。それがとても心地よくて、いつしかシュウは温かい夢の中へと眠りに落ちていた。

翌日。朝食の席にて。

「ねえねえ、シユウ」

レヴィが元気よくシユウを呼ぶ。呼ばれたシユウは口の中の白米を嚙下してレヴィへと顔を向ける。

「なに?」

「昨夜はお楽しみだったの?」

「ぶぶっ!」

口の中のものを少しはき出して大きくむせたのはディアーチェだ。シユテルから差し出されたコップを受け取り、中の水を一気に飲み干す。コップを渡したシユテルの表情は、無。眉一つ動かされていないことが、余計に怖い。

シユウは口を半開きにして完全に硬直していた。残りの一人、ユーリは意味が分かっていないのかぼかんとしている。

最初に動いたのはディアーチェだ。水を飲み干して一息ついたディアーチェはおもむろに立ち上がると、レヴィの真後ろに立った。そしてレヴィの頭を掴み、締め上げる。

「いた! 痛い痛い! 痛いよ王様!」

「黙れ阿呆! どこでそんなことを覚えてきた! 来い!」

「なんで!」

そのままずると引きずられていくレヴィ。ディアーチェはユーリに目配せすると、そのまま部屋を後にした。ディアーチェの視線の意図を察したユーリが、ちょっと心配なので見てきます、と続いて出て行った。

後に残されたのは、無表情に食事続けるシユテルと、未だに硬直したままのシユウ。シユテルはそんなシユウを一瞥すると、小さな声で言った。

「冷めてしまいますよ」

「あ、うん。そうだね」

すぐに再起動。シユウも食事を再開する。数分ほど二人とも無言で食事が続けたところで、シユテルが口を開いた。

「まあ、確かに不注意が過ぎました」

「あ、うん……。そっだね」

「次は気をつけましょっ」

「あ、あはは……」

シュテルの淡々とした声に、シュウは乾いた笑みしか返せなかった。

Side: Stern

あまり認知されていないのか、立地条件が悪いのか、それとも両方が、あるいは別の理由か。ともかく、シュウたちの喫茶店を訪れる客は少ない。料理担当のシュテルかディアーチェ、接客担当のレヴィがユーリ、片方ずつ店にいれば十分に回せるほどだ。

故に、長い休憩時間が与えられることもある。

「シュテル。夜まではとりあえず大丈夫であろう。見舞いにも行ってくる」とい

ディアーチェが言って、シュテルは礼を言って喫茶店を出た。シュウを誘うと、少し悩んでいたようだがやはり一緒に来てくれた。

二人でなのはの見舞いに行く。少しだけ言葉を交わし、シュテルはそのままなのはのリハビリへとついて行く。もちろんシュウも同行。

リハビリは専用の大きな部屋があり、そこでは何人もの患者がリハビリをしていた。

「やっぱり大変、だよな？」

シュウが聞いて、なのはが苦笑する。

「うん。やっぱりすごく辛いよ」

「逃げたくない？」

「逃げたくないって言えば嘘になるだろうけど……。でも、諦めないから」

行ってきました、となのはは笑顔で言つと、担当の看護師の元へと向かった。二人はそれを見送って、一度部屋を後にする。ここからしばらくの間はなのははリハビリに専念することになる。ここにおいても邪魔にしなければならないだろう。

「少し出かけましょっか」

シュテルがそう提案すると、シュウは神妙な面持ちで、そうだねと頷いた。

病院を後にした二人は近くの喫茶店へと向かった。自分の店があるのには思わなくもないが、他店を見ておくのも悪くはない。

喫茶店へと向かう間、シュウはずっと何かを考え込んでいた。何を考えているのか少し気にはなるが、昨夜のような悲壮な表情はしていない。ならばわざわざ聞くことでもないだろう。そう判断して、シュテルは黙って歩いている。

何を考えているのか察しはつきませんが。

ちらりと背後を振り返ると、こちらを見つめるシュウと目が合った。

「あのさ、シュテル……」

おずおずといった様子でシュウが口を開く。そんなシュウへと、シュテルは首を振った。

「必要ありません」

「まだ何も言っていないよ？」

「聞かなくても分かります。ギフトッドの力を使ってナノハを治療できないか、では？」

シュウは一瞬目を見開き、次いで凶星だったのだろう、眉尻を下げた。

「ナノハならこの程度の試練は乗り越えられます。それに、この先同じようなことがないとも言いません。きりがありませんよ」

「うん……。でもやっぱり、友達が苦しんでいる姿は、あまり見たくないなって……」

「気にすぎですよ。それに、きっとあの子も望みません」

なのはもギフトッドのことは知っている。ギフトッドの存在を隠すために、その力を使わないようにしていることも。もしもシュウがその力を使えば、きっと余計に気に病むだろう。

最も、それ以前にパストが眠ったままなので自由に使えるものではないのだが。

「じゃあ……。なのはが退院したら、お祝いに僕たちのお店に招待しよう。それなら、どっ…」

「そうですね。そうしましょうか」

それならなのはも喜ぶだろう。フェイトやはやてに協力してもらうのも悪くない。まだリハビリは始まったところなので時間はある。なのはが喜ぶような計画を練るとしよう。

シュウとそんなこと会話しながら、シュテルたちは歩く。

それまでは。時間さえあれば元気づけに来てあげよう。そう決めた。

夜。昨日の今日で悪いかな、と思いつつもシュウはシュテルの部屋の前に立っていた。つい先ほど、就寝前にシュテルに言われている。

「今日も眠れなければ一緒に寝てあげます、と。」

その時は大丈夫だと言ったが、ベッドに入るとやはり昨夜の夢を思い出して眠れず、結局ここに訪れていた。だが本当に入ってもいいのかと不安になってしまい、入れずにいる。しばらくそこで行ったり来たりしていると、

「何をしているんですか……」

シュテルの部屋の扉が開き、呆れたような表情をしているシュテルが出てきた。驚きながらシュウが照れ笑いを浮かべると、

「どうぞ」

シュテルに促されて、シュウは彼女の部屋に入った。

シュテルのベッドに、本人と一緒に横になる。すぐにシュテルの手がシュウの頬に触れた。

「ではお休みなさい、シュウ」

シュテルの優しいげな声音に、シュウもおやすみ、と返す。目を閉じても、あの夢の光景は映らなかった。

今日はよく眠れそうだ。

サンタクロース

「明日は楽しいクリスマス！ イエイ！」

「イエイ！ です！」

リビングでレヴィとユーリの楽しそうな歌声が響く。ディアーチェがいるならやかましい、と怒ることだろう。ではそのディアーチェはいないのかということ。

「……………」

隣のキッチンで、難しい表情をしていた。その側にはシュテルがいて、こちらはいつもの無表情。だがその瞳はどこか自分たちの王を気遣うような色を帯びている。そして当然のようにシュウもいて、こちらはどうしたものかと苦笑い。

二人の歌声がさらに届く。

「クリスマスにはサンタクロース！」

「プレゼントですね！ 何がもらえるんでしょう？」

それを聞いたディアーチェが頭を抱え、シュテルが小さくため息をつき、シュウの笑みは引きつったものになった。

事の起こりは一時間前。

彼女たちにとってクリスマスは、少し豪華なケーキを食べて、普段は食べないご馳走を食べる、というイメージだった。そんな彼女たちは、テレビの子供向け番組を見た。その番組に取り上げられた題材が、サンタクロース。

サンタクロースについては、ディアーチェとシュテルは当然ながら知っている。この世界の、この国の大人たちは不思議なことをしているという程度の認識だった。だがそうは言ってられなくなってしまう。

「王様！ サンタクロースだって！ ボクたちのところにも来るかな！」

「来ますか？」

瞳を輝かせるレヴィとユーリがいた。期待の籠もったきらきらとした瞳。それを見たディアーチェは思わず頷いていた。もちろんだ、と。それがいけなかった。

「ユーリ！ サンタさん来るって！ サンタさん！」

「何がもらえるんでしょう！ 楽しみです！」

喜色満面。なるほど、とディアーチェは頷いた。この世界の大人たちの気持ちがよく分かった、と。そして思う。やってしまった、と。別段彼女たちの経済事情が悪いわけではもちろんない。理由は単純だ。

「明日が楽しみですね！」

ただただ時間がなかった。

現在夜八時。急げば何かしら買うことはできるだろう。だがしっかり選ぶことはできない。そんなものを渡したいとは思えず、しかし解決策が浮かぶわけでもなく、こつこつして意味の無い時間だけが流れていく。

「むっ……」

頭を抱えて唸るディアーチェと、いつの間にかチラシをかき集めてきて遅くまで営業している店を探しているシュテル。シュウはそんな二人の様子をしばらく見つめていたが、やがて仕方ないかと諦めた。今回の計画は白紙にしよう、と。

「ディアーチェ」

シュウに呼ばれて、ディアーチェが顔を上げる。

「一時間ほど待ってもらえる？ 僕がなんとかするよ」

「できるのか……？」

「まあ任せてよ」

にやりと不適に笑い、シュウはその場を後にした。

一時間後。サンタクロースは早く寝ないと来ない、とするテレビの影響か、レヴィとユーリはその時間にはベッドに入っていた。ディアーチェとシュテルはリビングに場所を移している。

「お待たせ」

シュウがリビングに入ってきた。勢いよく顔を上げるディアーチェが見たものは、普段とは違う格好をしたシュウだ。その姿は暖かそうな赤い服に帽子という、よくあるサンタクロースのものだった。そしてその手には、大きな白い袋。

「何だそれは？」

「サンタクロース。まずは二人に」

シュウが白い袋から綺麗に包装された紙箱を取り出し、それをディアーチェとシュテルに渡す。二人は驚いたような表情をしながらも、それを受け取った。

「本当なら二人も寝た後に行動したかったんだけどね」

シュウが笑いながらそう言ったのを聞いて、元々の計画を察することができた。どうやらシュウは全員が寝静まった後、それぞれの部屋へ忍び込んでプレゼントを置こうと思っていたらしい。

「というわけで、ディアーチェに預けるよ」

白い袋がディアーチェに渡される。それを受け取ったディアーチェは、少し困惑したような表情をしていた。シュウを見て、白い袋を見て、何度か視線を往復させて、やがてぼつりと言葉をこぼす。

「いいのか？」

「うん。問題ないよ」

そうか、とディアーチェは頷いて、頭を下げた。感謝の言葉を口にすると、シュウは笑って手を振っていた。

Side:Stern

プレゼントを持ったまま、シュテルはプレゼントに視線を落としていた。シュウへと視線を向けると、どこか楽しそうに笑う顔が映る。シュテルが口を開こうとして、

「中身はまだ見ないでね。明日、一芝居打ってほしいから」

すぐに閉じた。どうやらシュテルたちにもサンタクロースが来たということにしておきたいらしい。しかしシュテルはシュウへと怪訝そうな目を向ける。

「貴方だけが貰っていないとなると、レヴィとユーリが不審に思いませんか？」

「え？ ああ、確かに……。まあ、適当にごまかすよ」

「どうやら何も考えていなかったらしい。シュテルは小さくため息をつくとき、その場を少し離れる。自室に隠しているあるものを取り出して、リビングに戻ってそれをシュウに渡した。」

「どうぞ」

「え？ あ、ありがとうございます……？」

困惑しつつも受け取るシュウへと、シュテルが続ける。

「今晚、貴方の部屋に置きに行こうと思っていましたものです」

それを聞いてシュウも察したようだ。どうやら同じことを考えていたらしい。その事実にも、二人そろって小さく笑う。

「ありがとうございます、シュテル」

「いえ」

二人は並んで座り、ディアーチェが戻ってくるまで静かな時間を過ごす。ただディアーチェはなかなか戻ってこずに、結局そのまま二人とも眠ってしまった。

ようやく戻ってきたディアーチェは二人を見て、呆れたようにため息をつきながらも仕方がない奴らだと笑っていた。

Side:Dearche

翌日。ディアーチェが目を覚ますと、枕元に小さな箱があった。不思議に思っ、側のテーブルを見る。シュウからのプレゼントもそこに確かにある。怪訝そうに眉をひそめながらリビングに向かうと、リビングにいた二人が朝の挨拶をしてきた。その二人の目の前のテーブルには、見覚えのない小さな箱。

「ねえ、ディアーチェ。これ……」

「いや、我も知らん。同じものがあつた」

三人そろって首を傾げる。まさか、とまだ来ていない二人の可能性を考えるが、

「プレゼントが二個も来た！」

「来ましたー」

嬉しそうにリビングに飛び込んできた二人から、やはり違うらしいということが分かる。一体誰が、と三人で首を傾げたが、すぐにその日の準備に追われてそれは忘れてしまっことになった。

Side: Past

ゆらりゆらりと闇の中で揺れながら、パストは表の様子を見ながら満足そうに笑っていた。

この世界のクリスマススのことを知ったのは何年前だったか。当時は関係ないと思っていたが、今年はせっかくだからと我が子とその家族にプレゼントを贈ることにした。わざわざこのためだけに長い眠りから少しだけ起きて、シュテルからまじめに受け取っているのだから魔力を影響のない程度拝借して、己の力を使った。

自分の魔力の痕跡は消した。我が子たちは自分が今も眠っていると思っっている。きっと自分の仕業だとは気づかないだろう。ちょっとした完全犯罪をした気分になってにやにやと笑う。そうしていると、

『もしかしたらパストだったりして』

そんな我が子の声が聞こえ、笑みが凍り付いた。口調から冗談の類いだと分かるが、なぜか時折妙に鋭い時がある。怖い怖い、とパストは楽しそうに笑うと、一人で満足したパストは再び闇の中へと沈み、眠りに落ちた。

その後、シュテルとディアーチェ、シユウからその話を聞いたリンデイが、彼女たちの周辺を知る者がいるかもしれないと仮定して捜索が行われ、ちょっととした騒ぎになったりもしたのだが、パストにとっては至極どうでもいい話である。

体験入学（前編）

ある日の朝。シユウは学校で、いつも通り机に突っ伏して眠っていた。シユウが登校してからホームルームまではまだそれなりの時間がある。最近は夜更かしも増えているのでこの時間は貴重だ。無論熟睡しているわけではないので、担任が来るといつもすぐに起きられるようにはしている。

やがてチャイムが鳴り、担任が教室へと入ってくる。なぜかいつもより教室が静かなことに内心で首を傾げながら目を開け、あくびをしながらか前を見る。そして、凍り付いた。

担任の隣に並んで立つ三人の少女。シユウがよく知る三人で、顔立ちだけならクラスメイトたちもよく知っているだろう。その証拠に、クラスメイトたちは何度も目の前の三人となのはたちを見比べていた。

担任はどこがおかしそうに笑いながら、静かに、と手を上げる。そして言った。

「今日から一週間、新しいお友達がこの教室で皆さんと勉強することになりました。それでは、自己紹介をどうぞ」

担任のその言葉で三人の少女が一步前に出る。

「ディアーチェだ。よろしく頼む」

まずはディアーチェがそう言って、小さく頭を下げた。ディアーチェも頭を下げるんだなと少し場違いな感想をシユウが抱いている間に、次の少女へ。

「レヴィだよ！ よろしくー！」

元気よく手を上げる。どこに行ってもレヴィは変わらないなと思っていると、

「頭ぐらい下げんかー！」

ディアーチェが一喝して、レヴィが慌てて頭を下げる。その様子を見て、クラスメイトたちは呆気にとられていた。関係性が分からなければ当然だろうか。そして最後の一人。

「シュテルです。よろしく願います」

丁寧にしつかりと頭を下げるシュテル。そのシュテルと、目が合った。さすがにこの場で声を出して挨拶する、という選択肢は取れず、シュウは笑顔を見せることで挨拶とすると、シュテルもそれを察したのか微かに微笑んで見せた。

それにしても、どうして二人がこの学校にいるのだろうか。経緯を知らないシュウは、ずっと首を傾げていた。

数日前。シュテルたちはなのはたちとの模擬線を終え、アースラの食堂で軽食を取っていた。その場での雑談の一つで、学校の話題が上がった。

「帰ったら学校の宿題もしないと……」

「今週の宿題はちょっと量が多かったよね。私も帰ったらやらないと……」

フェイトとなのはの言葉に反応したのはレヴィだ。フォークをくわえたまま、

「宿題ってなに？」

「学校で出される課題ですよ、レヴィ」

「ふうん……。学校ってどんなところ？」

興味を引かれたらしいレヴィに、シュテルが学校の説明をする。もっともシュテルの説明は、この世界の文章などから得た知識によるもので、実際に体験したものではない。特になのはたちが通う学校は私立であり、公立とはまた少し違った所がある。シュテルの説明の合間に、なのはとフェイトがその辺りを補足した。

全てを聞き終えたレヴィは瞳を輝かせていた。こうなると、次の言葉は予想できる。

「楽しそうー！ 行ってみたいー！」

「だめだ」

ディアーチエが即答。ええ、と不満そうな声を出すレヴィへ、ディアーチエがため息交じりに言っ。

「この世界に我らの戸籍はない。当然ながら、学校に通うこともでき

ない」

「学校に通うくらいならどうにかなるわよ？」

まだ言葉を続けようとしていたディアーチェがわずかに目を見開き、怪訝そうに眉をひそめた。声の主、リンディへと視線を向ける。

「学校に通いたいなの？」

リンディの問いかけに、レヴィが期待に満ちた眼差しで勢いよく頷いた。リンディが頷きを返し、ディアーチェとシュテルへと視線を向ける。その視線の意味を察して、二人が口を開いた。

「ナノ八たちが学んでいる場所には少し興味があります」

「見聞を広めるという意味では、悪くはないな」

二人のその言葉に、リンディは満足そうに微笑んだ。

「もちろんユーリさんも行くわね？」

「はい！ 大丈夫ですか？」

「もちろん。それじゃあ、準備をしておくわね」

リンディが笑顔で言って、席を立てて部屋を出て行く。リンディが立ち去った後は、なのはたちの学校がどういったところなのかという話題になった。

「シュウ君にも教えてあげないといけないね」

ふとなのはがそう言って、シュテルも頷く。それに異を唱えたのは、レヴィだ。

「ええ！ せっかくだから内緒にしようよ！ びっくりさせよう！」

「おお、ええなあそれ！ あたしはレヴィに賛成や！」

はやてが嬉々として言う。なのはたちがシュテルの顔色をうかがうと、特に反対することもなかったのでシュウには内緒、ということになった。

そんな経緯を知らないシュウは、教室の前に立つ三人を見て、嬉しそうに、しかしどこか困惑しているような複雑な表情になっていた。それでも短い間とはいえ一緒に学校生活を送れるというのは魅力的である。シュウは三人の来訪を歓迎することにした。

授業まではシュテルたちへの質問を、ということになった。すぐに

クラスメイトたちが手を上げ、担任が無作為に一人を選ぶ。その一人が真っ先に聞いたことは、

「高町さんたちとつりつだけど、双子？ 家族？」

全員が気になっていたことだろう、皆が聞き漏らすまいと静かになる。シュテルたちは顔を見合わせると、シュテルが一步前に出た。どうやらシュテルが代表して答えるということになったらしい。

「友人ではありませんが、血は繋がっていません」

「ええ！ でも本当にすごく似てる……」

「似た顔の人が三人いるといいますし、ただの偶然ですよ」

シュウの知らないことではあるが、これはあらかじめシュテルたちとなのはたちの間で決められたことでもある。少々苦しいかもしれないが、一週間だけだ。これで押し通すことにした。それに、まるきり嘘というわけでもない。

質問した生徒は、そんなものなのかな、と無理矢理納得したらしい。それ以上は何も言わず、席に座った。

その後も何度か質問をされて、シュテルが無難な答えを出している。そして授業直前の時間になって、担任が手を叩いた。

「はい。ここまでにしておきましょう。他にも聞きたいことがある人は休み時間にね。それじゃあ、シュテルさんたちの席だけ……。三人とも、高町さんたちとはお友達なのよね？」

高町たち、というのはなのは、フェイト、はやてのことを言っているのだろう。シュテルたちが頷くと、それじゃあ、と担任が続ける。

「親しい子が隣にいた方が安心よね」

そして教室の後ろに置かれていた三組の机とさすが移動させられる。シュテルはなのは、レヴィはフェイト、ディーアーチエははやての隣の席となった。

いつの間にか机とか用意していたんだろう、と思うシュウだが、後から聞くと最初からあったらしい。そのため、転校生が来るのではないかと朝から期待されていたそうだ。

シュテルたちを迎えたなのはたちがそれぞれ嬉しそうな表情を浮かべていたが、対する三人のうちの一人、ディーアーチエだけはとても

渋い表情をしていた。

何事もなく授業が終わり、休憩時間。シュテルたちはクラスメイトたちに囲まれていた。先の時間では足りなかったようで、まだまだ質問責めにされている。シュウはそんな三人の様子を、自分の席からぼんやりと眺めていた。

もうそろそろ、我がクラスのリーダーが鶴の一声を発するはずだ。

「いい加減にしなさい！ 三人とも困っているでしょー！」

声の方を見ると、アリサが腰に手を当て眉尻を上げていた。予想通りの展開に、シュウは思わず苦笑する。アリサの指示の元、クラスメイトたちは一列に並び、今度は順番に質問を重ねていく。

ふとアリサと目が合った。シュウを見たアリサが真っ直ぐにこちらへと歩いてくる。シュウがきょとんと呆けていると、アリサが目の前で立ち止まった。

「シュウ」

「な、なにかな？」

心なしが、アリサの声に怒気はらんでいる気がする。

「ここはあんたが助ける場面でしょ。家族が助けなくてどうするのよ」

「ああ、うん……。アリサが言っかなくて」

「あんたね……」

「それに、アリサならともかく、僕が急に言っつとシュテルたちとの関係を聞かれるんじゃないかな？ できれば一緒に暮らしていることは内緒にしたいし」

一緒に暮らしていることを知られるとシュウはもちろん、シュテルたちにも迷惑がかかるだろう。血の繋がりのない赤の他人がほとんど一緒に暮らしている状態なのだ。妙な誤解を招く恐れがある。

言葉にしなかったその意図を察したのだろう、気にしすぎだと思っけど、と言いながらも、一応は納得したのかアリサがその場を立ち去ろうとする。だが、続いて聞こえてきた言葉に足を止めた。

「住んでる場所？ よくわかんない。シュウと一緒に住んでるから、

シユウなら分かるよ！」

レヴィの元気な声に、教室が静まりかえった。そして一斉に、クラスメイトたちがシユウへと振り返る。思わず頬が引きつってしまふ。

「シユウ……」

「な、なになかな？」

「がんばりなさい」

同情と憐憫を多分に含んだ視線を向けられ、シユウは力なく肩を落とした。

その後はシユウに対しての質問責めが始まる、というところになって、次の授業のチャイムが鳴った。助かった、と思いながらも、次の休み時間に先延ばしにされているだけだとすぐに思い至り、頭を抱えてしまふ。ちらりとレヴィの方を見ると、こちらを申し訳なさそうに見る視線と目が合った。一応反省はしているようなので、これ以上何かを言う必要はないだろう。

シユウはチャイムが鳴る直前に、シユテルとディアーチェが眼光鋭くレヴィを睨んでいたことに気づいている。おそらくあの短い時間の中に、念話が交わされていただろう。

後から聞いた話ではあるが、シユウの予想通りに念話は交わされており、シユテルとディアーチェからかなり怒られたらしい。さらにはなのはたちからも苦言を呈されたとか。

授業が終わり、休み時間。案の定、シユウはクラスメイトたちに囲まれた。

「シユウー！ どういうことだ！ 一緒に住んでるって！」

「何か事情があるのよねー！ ねえ、どんな？ 教えて！」

男子からは罵倒に近い詰問、女子かはこの状況をどこか楽しんでいようような質問。シユウはそれらにどう答えようかと必死に考えていると、

「私が説明します」

助け船を出したのは、シユテルだった。一斉にシユテルへと振り返

るクラスメイトたち。

「「こちらへと引越してきた際にシュウには近辺を案内してもらいました。その縁もありまして、私たちの親からシュウへと依頼されたのです」

「依頼？」

「はい。私たちの親は仕事上家にいないことが多いので、できれば様子を見にきてほしい、と頼んだそうです。私たちにとっては心外ですが」

最後の部分をあえて強調するシュテル。クラスメイトたちはシュテルの説明で、一先ずは納得したらしい。数人は訝しげな視線をしていたが、過半数が納得した以上、これ以上何も言うつもりはないようだった。

それでもレヴィは、という声はまだあったので、レヴィの言葉の綾です、と押し通していた。

そこで休み時間は終わってしまった。

次の休み時間もシュテルたちはクラスメイトたちに囲まれていた。今日一日は落ち着くことはないだろう。せっかくだから少し話をしておきたいと思っていたシュウだったが、帰ってからでいいかと自分を納得させた。

そして次の休み時間。昼休み。

一緒に食べようと誘われているシュテルたちを横目で確認して、シュウは弁当を取り出した。できれば一緒に、とは思ったが、どうやらそれも難しそうだ。だが、

「すみません、ナノハと約束をしているので」

シュテルの発言に、クラスメイトたちが残念そうな声を上げる。その間にシュウの隣に立つ一人の少女。

「シュウ君。お手紙、だよ」

見ると、さすがそこに立っていた。渡されたのはノートの切れ端で、そこにはシュテルの字があった。書かれている文章は短いもので、視聴覚教室で待っています、というもの。シュテルたちの方を振

り返ると、三人とそれぞれ視線が合い、三人ともに小さく頷いて教室を出て行った。

「私たちは屋上の方に行くから。もちろんなのはちゃんも」

どつやら気を遣ってくれたらしい。シュウはそれじゃあ、と手を振るすずかたちに心の中で頭を下げて、シュウも教室を後にした。

視聴覚教室に入ると、いつかの運動会の時と同様、結界の中に入っていた。そこで待っていたのはシュテルたちで、シュウの姿を認めた瞬間、レヴィが勢いよく頭を下げた。

「じめんなさいー」

休み時間の発言のことだろうとすぐに思い至り、苦笑しつつも、大丈夫だよと伝える。レヴィは安堵のため息をついた。

「でもびっくりしたよ。何も聞いてなかったから」

「うめの驚く顔を見てやろうと思ってな」

「一応、今までの経緯を話しておきましょうか」

お弁当を食べながら、ということになり、教室の机に弁当を広げてそれぞれ食べ始める。その間にシュテルたちからアースラでのことを聞いた。

「あれ？ それじゃあ、ユーリは……？」

「ユーリならもうすぐ来るよ」

え、とシュウが首を傾げていると、結界の中に一人入ってきた。三人の反応からそれに気づき、振り返ると、ユーリが側に立っていた。

「すみません、遅くなりましたー」

笑顔でそう言っ、ディアーチェの隣に座る。弁当箱を広げながら、シュウを見て首を傾げた。

「どっかしました？」

「あ、いや……。どっかにいたの？」

シュウの質問の意図が分からずきょんとしていたユーリだったが、すぐに理解して苦笑を浮かべた。

「私は別のクラスなんです。さすがに四人全員同じクラスとはいかないくて……」

「三人同じクラス、というだけでもかなり無理をしていたきました」
それはそうだろう、とは思う。同じタイミングで同じクラスに三人、とは本来なら考えられない。他のクラスにも振り分けられて当然だったはずだ。リンディがどういった方法を取ったのか、少し気になるところだ。

さらに聞けば、ユーリだけ別のクラスと聞いたディアーチェはユーリと同じクラスにしてももらえるように頼みに行ったらしい。すでに決められてしまっていたために変更はできなかつたらしいが。

「ユーリのクラスはどー？」

興味本位で聞いたシュウへと告げられたクラスに、シュウは納得して頷いた。意図的か偶然かは分からないが、意図的ならリンディあたりの配慮だろう。ユーリが入ったクラスは、シュウの友人、コウと音奈がいるクラスだ。あの二人ならユーリのフォローをしてくれるだろう。

「期間は一週間だけ？」

「はい。今の仕事を辞めるわけにはいきませんので」

シュテルの言う仕事は嘱託魔導師のことだろう。これからの目的を考えると、確かに辞めるわけにはいかない。シュウのとしては頼ってばかりで申し訳ないところではある。

だがとりあえずは一週間は学校に通うらしい。弁当を食べ終わったシュウは、四人に微笑み、

「それじゃあ一週間、よろしくお願いします」

シュウの言葉に、四人がそれぞれ頷いてくれる。

これから一週間、楽しくなりそうだ。

そう思い、これからの学校生活に思いを馳せた。

体験入学（中編）

午前五時。それがシュテルの起床時間だ。目覚ましが鳴る前に目を覚ましたシュテルは、念のためにセツトしてある目覚まし時計のスイッチを切る。ちなみにセツトされている時間は五時半。今のところこの目覚まし時計が仕事をしたことはない。

シュテルはベッドから出て、顔を洗う。朝食の準備のためにキッチンに向かうと、すでにディアーチェが材料を前に腕を組んで唸っていた。

「おはようございます、王」

「ん？ ああ。おはよう」

簡単に挨拶を交わし、ディアーチェはシュテルの隣を横切って部屋を出て行く。

シュテルとディアーチェの起床時間はほぼ同じだ。洗面台は一つしかないので、どちらかが顔を洗っている間に片方が朝食と弁当の献立を考える、という取り決めをした。この役割は一日ごとに交代している。

キッチンに並べられた材料の側には、今日の献立が書かれたメモ用紙がある。シュテルはそれを手に取ると、早速調理を始めた。

午前六時半。微かに目覚まし時計の音が聞こえてくる。それから少ししてキッチンに入ってくるのは、眠たそうな目をこするユーリだ。おはようございます、と間延びした声で言うユーリにディアーチェが一瞬だけ表情を崩す。

「ああ、おはよう、ユーリ。すまぬが顔を洗ったらレヴィを起こしてきてくれぬか？」

「はい、分かりました」

すぐにユーリは洗面台へと向かっていく。ちなみに聞こえてきた目覚まし時計の音は二つなのだが、レヴィが目覚まし時計だけで起き

てくることは少ない。必ず誰かが起こしに行っている。

ユーリとレヴィがリビングに入り、テレビを見始める頃。玄関の鍵が開けられて一人の少年が入ってくる。もちろんシュウで、おはよう、と全員に挨拶してからキッチンへ。

「お茶でいいかな？」

「はい。お願いします」

シュウは挨拶の後、全員分の飲み物を用意する。そこだけがシュウに割り振られている朝の仕事で、終わった後は自分の席で待機だ。

全員が揃ったところで朝食がリビングのテーブルに並べられる。今日のメニューは焼き魚に白いご飯、お味噌汁、そしてたくあん。和風のメニューだ。

「いただきます」

ディアーチェが手を合わせ、シュテルたちも続く。ここまでが朝食の流れだ。

この後、普段なら七時半にシュウは学校へと向かい、四人は洗いや洗濯などの家事全般を終えた後に今日の予定の確認となる。だが今日は、今日から一週間はいつもと違う流れだ。

食器などを流しに置いて、全員が自分の部屋へと戻る。シュウは大人しくリビングで待機。程なくして戻ってきたシュテルたちは、全員がシュウの学校の制服姿だ。

「行きましようか、シュウ。……どうしました？」

シュテルが声をかけるまで、シュウはぼんやりと四人のことを眺めていた。シュテルに声をかけられて、うん、と頷きを一つ。そして一言。

「似合ってる。みんなかわいい」

それを聞いた全員の動きが少し固まる。その反応にシュウが首を傾げると、シュテルが小さく首を振った。

「ほら、行きますよ、シュウ」

「うん。了解」

シュテルに促されて、玄関へと向かうシュウ。その後続くシュテル。後に残された三人は、

「慣れておるな」

「さすがですね」

「王様、かわいいだって！　かわいいー！」

少し顔を赤くしながら苦笑するディアーチェとユーリ、そして素直に嬉しそうにしているレヴィも二人を追って家を出た。

Side::Stern

「と、こ」までが朝の流れです」

シュテルが言う先、なのはがへえ、と少し顔を赤らめて相づちを打った。

朝のホームルーム前。シュテルはなのはたちのグループと一緒にいる。レヴィはサツカーをするという男の子たちについて行き、ディアーチェは一人クラスが違うユーリと一緒にいる。シュウは自分の席でうたた寝をしている。なのはに聞いた話では、いつものことらしい。「意外……って言うつとシュウに悪いかもしれないけど、シュウもそんなこと言うんだね」

「ええなあ、好きな人からかわいいって言うってもらえるなんて、ちょっと羨ましいわ」

フェイトとはやてが言うつて、そういつものですか、とシュテルが返す。その反応にすずかが首を傾げた。

「シュテルちゃん、嬉しくないの？」

問われ、考える。今までそれほど気にしなかったことだ。今までどう感じたかを思い出し、なるほどと一人頷いた。

「嬉しい、のでしょうね。今まで気にしたことありませんでした」

「あやふやね。まあ正直、あんたたちらしいわ」

アリサの言葉に、なのはたちが同意するように頷いた。

今日は昨日と違い、クラスメイトに囲まれるということとはなかった。

最初の授業が終わり、休憩時間。何人かのクラスメイトに話しかけられ、当たり障りのない返事をしていく。シュウの方を見てみると、

目が合った。シュウは一瞬だけ目を丸くした後、小さく手を振ってくる、シュテルが小さく頷くことでその返事をする、シュウは嬉しそうに笑みを浮かべ、机に突っ伏してしまった。

さらに次の休み時間では、どこかで見覚えのある女子生徒が話しかけてきた。相手もシュテルのことをどこかで見たことがあるらしく、どこで会ったかと二人で考える。それに助け船を出したのはなのだ。

「翠屋じゃないかな？ シュテルには時々手伝ってもらってるから」

「あ、そうかも！ シュテルさんも翠屋を手伝ってるんだね」

「シュテルはすごいんだよ、シュテルが作るお菓子もおいしいって評判で」

なのはがなぜか自慢げにそう話し、女子生徒たちの瞳が輝く。食べてみたい、作り方を教えて、と何人かに頼まれ、いずれ機会があれば、と約束してしまうことになった。

昼休み。今日はなのはたちと一緒に食べることになった。シュウを誘ってみるが、「こちらは文花から誘われているらしい。シュテルたちが来ていることを知って、何があったのか聞きたがっているそうだ。

「僕も昨日知ったばかりだから僕に聞かれても、とは思っただけだね……」。だから僕のことには気にしないだね」

そう言っ教室を出て行くシュウを見送って、シュテルもなのはたちと共に屋上に向かった。

「人気者ね、シュテル」

にやにやといたずらっぽく笑いながらアリサが言って、シュテルは肩をすくめた。三回目の休憩では男子生徒にも話しかけられており、昼食を一緒に誘われている。約束がありますので、と断ってはいるが。

「転校生だからでしょう。物珍しさ以上のものはないと思いますが」「そんなことないと思っけど……」

なのはが不満そうにそう言うが、それ以上は何も言っていない。た。

「さて、と。こうやってゆっくり話せる機会なんてそうそうないし、シュテル、あんたのこと教えなさい」

「構いませんよ。何を聞きたいんですか？」

そこからは、アリサやさすがが、シュテルがどういった生活をしているか聞いたり、他のマテリアルズのことを聞いたりといった時間になった。シュテルも家族のことを聞かれて悪い気はしないので、素直に答えていく。なのはの友人なら誰にも口を割らないだろうと判断して、隠すこともしなかった。

予鈴が聞こえて、シュテルたちは慌てて弁当箱を片付けて教室へと戻る。その途中、

「聞いたことは他の誰にも言わないから安心しなさい」

アリサにそう話しかけられ、シュテルは少し目を見開き、ありがとうございますと返事をします。

「お礼はいいわよ。あ、そうだ。今度一緒に遊びに行かない？もちろんみんな一緒に」

「そう、ですね。ディアーチェたちに聞いておきます」

そう答えながら、シュテルはわずかに微笑んだ。

Side:Levi

少し時間は戻り、朝の登校時。

「おっはよー」

レヴィが教室の扉を開けて元気よく挨拶すると、多くのクラスメイトたちが挨拶を返してくれた。そのことが何となく嬉しくて、自然と頬が緩んでしまう。ふと視線を向けた先、レヴィが入ってきた扉とは違う方から教室を出ようとしている男子生徒たちを見かけた。その手にはサッカーボール。

レヴィは瞳を輝かせ、そのグループへと近づいていく。

「サッカー、だっけ。やるの？」

レヴィがそう聞くと、グループの一人が顔を向けた。

「ああ。今からな」

「おおー！ ボクも混ぜてー！」

それを聞いた男子生徒が戸惑い、周囲の友人へと視線を向ける。誰もが困惑したような表情を浮かべていた。

「だめ……？」

少し不安になりながら、聞く。誰もが少し考えていたようだったが、やがて、まあいいかとおつづやいた。

「いいよ。一緒にやるっー！」

「ありがとうっー！」

ぱっと顔を輝かせたレヴィに、男子生徒たちがわずかに顔を赤くして、それをごまかすように教室を出て行く。レヴィはそれには気づかずに、嬉しそうにしながらそれについて行った。

朝の時間で、レヴィはクラスメイトから、特に男子生徒から一躍有名になった。サッカーで活躍できたことが大きかったらしい。最初こそルールをはつきりとは知らないため少しばかり迷惑をかけたが、覚えてからは持ち前の運動神経で大活躍だ。それを見たり聞いたりしたクラスメイトたちからも関心を寄せられている。

だが教室に戻ってきたレヴィはそんなことはどうでもいいらしく、すぐにシュウへと駆け寄って先ほどのサッカーの話をする。男子からは嫉妬の視線を、女子からはどこか微笑ましいものを見るよう視線を向けられ、シュウの心中は穏やかではなかった。それにもレヴィは気づいていなかったようだが。

休憩時間ではクラブからの勧誘の嵐だった。クラブというものがどういうものか分からないレヴィはとりあえず一通り話を聞いていたが、全て聞き終えて全クラブに共通していることを理由に、言う。

「放課後もやるの？ じゃあ、やらない。みんなと一緒に帰るから」

それを聞いてもまだ諦められない幾人かが粘り強く説得していたが、この点はレヴィも譲ることができないらしく、頑として聞き入れなかった。

昼休み。この時間もサッカーをすると聞いていたレヴィは大急ぎで弁当を食べ終え、今朝と同じグループと一緒に校庭に出る。そこで待ち構えていたのは別のクラスの男子生徒たち。険悪な雰囲気、ではもちろんなく、むしろ彼らはレヴィを見るとわずかに驚いた様子を見せてすぐに微笑んだ。

「その子が噂の転入生の女の子、か。俺たちも今朝のサッカーを見ていたけど、すごかったな」

相手がそう言って、レヴィに笑顔を向ける。

「今日はよろしく。がっかりさせないようがんばるよ」
「今日のことか分からないレヴィは、しかしとりあえずは頷いてよろしく、と返しておいた。

その後、これから隣のクラスと短い時間ながらも試合をすると聞いた。試合、と聞いてレヴィが顔を輝かせる。そんなレヴィへ頼もしいなとみんなが言いながら、作戦を細かく聞いた。

そして始まった試合はかなりの接戦になった。さすがにチーム戦となると、レヴィも身体能力にものを言わせることができない。相手の一点リードで、もうすぐ予鈴が鳴るつかつかというところで、

「レヴィ」

校舎の方から声がかけられる。見ると、ディアーチェとユーリの二人がコート側に立っていた。

「あれ？ 王様、どうしたの？」

「レヴィがここで試合をしていると聞いたからな。時にレヴィよ」

「ひゃ」

「貴様、このまま負けるつもりではあるまいな？」

ディアーチェの目が細められる。レヴィがびくりと体を震わし、でも、と言葉を続ける。

「みんなすげーいから、今のままじゃ……」

「ならば許可してやる。さっさと終わらせてこい」

レヴィが勢いよく顔を上げ、輝かせる。いいの、と問いかけるレヴィに、ディアーチェは頷きだけを返した。そのやり取りの意味が分からずに首を傾げる仲間たちのもとへと、レヴィは戻る。その表情

は、とても楽しそうで、嬉しそうで、そして背筋が寒くなる笑みだった。

そして予鈴が鳴った。

「あっはっは！ やっぱりボク最強！」

たった五分で逆転されて呆然とする相手チーム。何もしていないにも関わらず逆転してしまって、やはり呆然とする仲間たち。レヴィはその全員へと明るい声で言った。

「楽しかったよ、ありがとう！ じゃ、ボクは先に戻るよ！」

そして意気揚々と校舎へと戻ろうとしたところで。

「やり過ぎだ阿呆！」

「あいた！」

ディアーチェに怒られて涙目になっていた。

マテリアルズで最初に決められていたことがある。ただでさえなのはたちと同じ姿で目立つのだから、せめて他のことでは極力目立たないことにしよう、というものだ。レヴィには体育などで本気を出すなどという指示が与えられていた、とのことだった。

Side: Dearche

再び時間を戻し、登校時。

「では我はユーリを送ってくる」

教室に入るシュテルたちへとそう告げて、ディアーチェはユーリと共に隣のクラスに向かう。ユーリは嬉しそうにしながらも、

「私一人でも大丈夫ですよ？」

一応そう言ってみるが、ディアーチェはだめだと首を振った。

「ディアーチェ。ありがとうございます」

断っても自分を心配してくれているディアーチェはついてくるだろう、そう察して素直に礼を言つと、ディアーチェはわずかに頬を染めて目をそらした。

「我がそうしただけだ」

「はい、分かっています。それでもありがたいと思っています」

ディアーチェが苦り切った表情を見せる。レヴィはそれには気づかないふりをして、自分の教室の扉を開けた。

ユーリが入ってきたことで、クラス中の視線が一斉にユーリを捉える。ただそれは悪意のこもったものではなく、好意的なものだった。それを示すかのように、側の女子生徒が明るい声音で言った。

「おはよう、ユーリ」

「はい。おはようございます」

その後も、自分の席につくまでは何度も挨拶をされた。誰もが好意的で、明るく優しい。ユーリも挨拶をしてもらえるのが嬉しいのか、始終笑顔でそれに応じていた。

なるほど、確かに要らぬ心配だったな。

ユーリと席にたどり着き、ディアーチェはそう結論づけた。もう少しここでユーリと話してから教室に向かおう、と思っていると、

「あの、あなたがディアーチェさん？」

遠慮がちなその声に振り返ると、最初に挨拶をした女子生徒が側に来ていた。ディアーチェが警戒心を隠すことなく、訝しげに相手を観察する。ユーリが慌てて言った。

「ディアーチェ。このクラスの、私の最初の友達です」

「……ああ、そうか」

ディアーチェが頬を緩ませる。ユーリが友と認めている者なら邪険にするわけにもいくまい。自分のことはユーリから聞いたただけだろう。ディアーチェはその少女へと素直に手を差し出した。

「ディアーチェだ」

「あ、えっと……。よろしくお願いします」

相手もその手を握り、しっかりと頭を下げた。

王様。なるほど、王様だ。

周囲からそんな声が聞こえてくるが、ディアーチェは一切気にしない。ユーリへと向き直り、少しだけ寂しげに言う。

「我はいない方がいいか？」

「え？ そんなことないですよ……一緒にいてください」

ユーリに手を握られ、そうか、とディアーチェは安堵のため息を漏らした。

周囲からの視線が微笑ましく温かいものになっていたのだが、二人はそれには気づかなかった。

昼休み。授業が終わると同時にディアーチェは席を立つと、シユテルとレヴィへと目配せをする。すぐに、行ってらっしゃい、という内容の念話が返ってきた。ディアーチェも行ってくる、と念話で返し、隣の教室へと向かった。

ユーリの席には女子が三人集まっていた。四つ繋げられた机にはそれぞれの弁当箱が並んでいる。ユーリと目が合つと、満面の笑顔で出迎えてくれた。

「すまぬ。待たせたか？」

授業が終わってすぐに来たつもりだったが。少しかだけ申し訳なく思いながらユーリの元へと向かう。すぐにユーリと、そして女子三人が首を振った。

「こっちの授業が十分早く終わったの。だから気にしなくていいわ」
そう答えたのは三人のうちの一。朝に声をかけてきた者だ。朝の間にずいぶんと打ち解けることができた。他の二人は見覚えはないが、おそらくこの者の友人だろう。

誰かが用意してくれていたのか、ユーリの隣に空いている席があったのでディアーチェはそこに座った。自分の弁当箱も机に置く。

「いただきます」

誰かが言つて、ディアーチェとユーリもそれに続いた。

今日のユーリの弁当箱はいつもと違い、少し大きめのものだ。様々な種類のおかずが入っている。ユーリから頼まれ、ディアーチェが用意したものだ。その時は理由を聞いていなかったのだが、この場でそれを知ることができた。

「えっ……。本当にもらっていいの？」

「はい……。そのために作ってもらいましたから……」

ユーリの言葉を受けて、おずおずといった様子でユーリの弁当箱が

らおかずをいくつが取る三人。それを見て、なるほどとディアーチェは頷いた。ユーリはこの三人とは昨日から仲良くなっていたのだらう。ユーリの弁当を見て、誰かがおいしそうとでも言ったのか。ユーリはディアーチェが褒められると自分のことのように喜んでくれる。気を良くしたユーリが、みんなの分も頼んでみると言ったのかもしれない。

おかずを口に運ぶ三人を、ユーリが緊張の面持ちで見守る。家族以外からの評価に興味がないディアーチェは、さっさと自分の弁当を食べ始めた。ただそれでも少しは気になるもので、横目で反応を窺ってはいたが。

それぞれがおかずを食べて。のみ込んだ後の第一声は、

「美味しいー!」

というものだった。

「なにこれ! すごく美味しい! すっごく!」

友人からの絶賛に、ユーリは少し得意げだ。

「ディアーチェの料理は世界一ですから!」

さすがにそれは無いと思うが、と思いながらも、ディアーチェは何も言わない。ただどうしても表情が緩んでしまうが。

「これ、ディアーチェさんが作ったの?」

その問いにディアーチェは視線だけを向け、そつだと頷く。すると三人とも驚いたように目を丸くして、すごい! とすぐに破顔した。

「ディアーチェさん! 今度料理教えてよ!」

「我がか? 悪いが……!」

断ろうとしたところで、ユーリと目が合った。何かを期待するような眼差しで、思わず言葉に詰まってしまふ。ディアーチェは内心で、仕方がないなと苦笑した。

「我らも普段は別のことをしていることが多い。それで都合のつく日があれば、引き受けよう!」

「本当? ありがとう!」

嬉しそうな三人の笑顔。ユーリも念話で、ありがとうございますと伝えてくる。

まあ、悪くはないな。

学校というものに通うにあたって不安がなかったわけではない。
しかし実際に通ってみれば、悪くはないと思えるものだった。

体験入学（後編）

「今日もここで食べていいの？」

自分の席で自身の弁当を食べていた文花は、少し呆れたような表情をしながら目の前の人物に問うた。文花の目の前に座るシユウは、少し目を逸らして口ごもる。

「いや、せっかくみんな学校に来てるんだし……。新しい友達が増えた方がいいかなって……」

「それはそうかもしれないけど、お弁当ぐらい一緒に食べればいいじゃん」

「いや、まあ……。分かってはいるんだけどね……」

シユテルたちに友達が増えればいいと思っっているのは本当だが、しかしもう一つ、大きな理由もある。はっきり言ってしまうえば、学校ではシユウはシユテルたちを避けていた。その理由は単純に、学校での距離感が分からない、というものだ。さすがに家にいる時と同じように接するのは良くないだろうと思いい、かといってどのように接すればいいのかも分からず、今の状況に陥っている。

そんなシユウの考えも分かっているのだろう、文花はやれやれと首を振って、ぼつりとこぼした。

「シユテルお姉ちゃんたち、すごく人気だよ」

「え……？」

「シユテルお姉ちゃんはクールで格好良い。男の子だけでなく女の子にも憧れてる人は多いよ。レヴィさんは明るく元気で、男の子たちとよく一緒に遊ぶから自然と惹かれてる人も多くなって話だし……。ユーリさんは守ってあげたい子、て見られてる。ディアーチェさんは最初はつきあいにくいって思われてたみたいだけど、ユーリさんと一緒にいて気にかけているのを見て人気が急上昇」

お箸をゆらゆらさせながら、言い続ける。シユウはそれを黙って聞いている。文花は、その上、とさらに続ける。

「四人とも美少女！ 人気が出ないわけがないよ！」

なにやら熱い力説に変わってしまった気がするが、それらの言葉には概ね同意できる。やはり見ている人は見ているものだ。

「まあ、なのはさんたちがすでに人気だったから、こつなることは分かってたけど」

おかずを口に入れながら、一人で納得して何度も頷く文花。シユウは、へえ、と驚きの声を漏らしていた。

「なのはたちって人気なんだ」

「どうして私より長くこの学校にいるお兄ちゃんが知らないかな……？」

呆れたように文花はため息をついた。シユウは、どうしてだろうね、と苦笑する。理由は分かる。はつきり言って、そういった話題に興味がなかったためだ。シユテルたちと出会う前のシユウは、まだまだ自分の生活で精一杯だった。

「とにかく！ このままだとみんな取られちゃうよ！ いいの？」

ふむ、とシユウは腕を組んで考える。わずかな思考の後、シユウは頷いた。

「それはないと思う」

文花が怪訝そうに眉をひそめ、シユウが続ける。

「シユテルとレヴィは王様第一。ディアーチェはユーリ、ユーリはディアーチェが第一。ここに割って入るのはなかなか難しいよ。少なくとも一週間じゃ絶対に無理だ」

「お兄ちゃんの前例があるけど」

「僕だってシユテルの一番になれたとは思ってないよ。僕にとっては一番だけど」

「はいはい、こちそうさまでした」

文花は口を尖らせると、そっぽを向いた。それを微笑ましく思いながら、シユウは弁当を食べ進めていく。シユテルとディアーチェの合作である弁当は、やはり美味しい。しばらくそのまま無言で食べ進めていると、文花が視線をこちらへと向けてきた。

「お兄ちゃん」

「ん？」

改めて呼ばれて、シユウは首を傾げた。

「お兄ちゃんの気持ちは分かるけど、シユテルお姉ちゃんを避けちゃだめだよ。きつと楽しみにしてたはずだから。……表情からは分からないけど」

最後の一言にシユウは苦笑する。だが真剣に頷いた。

教室に戻り、シユウは自分の席に座る。ちらりとシユテルの席へと目をやると、なのはたちのグループの他、別のグループのクラスメイトも交えて何かを話している。人気者だな、と改めて思う。

文花に言われずとも、このままではいけないとはシユウも思う。せつかく学校に来ているのだから、もう少し話をしてみたいとも思う。できれば一緒に弁当を食べたい。そんなことを考えていると、シユテルと目が合った。

「……………」

思わずシユウは目を逸らす。いけないとは思いつつも、どう反応すればいいのか分からなかった。

Side…Sterin

『してシユテルよ。シユウの様子はどつだ？』

授業中、そんな念話がディアーチェから届く。シユテルは授業をしつかりと聞きながら、それに返事をする。

『変わらず、ですね。相変わらず目を合わせようとしてもしてくれません』
『むづ……。やはり黙って来たのが悪かったか？ 怒らせてしまったか…………？』

『でも家ではいつも通りだよ？ そんなに怒ってはいないんじゃないかな？』

そう言ったのはレヴィだ。シユテルもそれに同意する。だが、なおさらシユウが自分を、自分たちを避ける理由が分からない。

『やっぱり晩ご飯の時に聞いてみます？』

ユーリの言葉に首を振るのはディアーチェだ。

『家では普通にしておるのだ。わざわざ蒸し返すこともあるまい。それに、できれば「こちらから気づいてやりたい」ところではある』

『さすが王様… 尽くすタイプだ!』

『やかましい。シュテル、何かいい案はあるか?』

話を振られたシュテルは今一度考える。このクラスの来た直後、シュウは驚いた顔をしていたが、決して怒っているわけでもなかった。むしろ自分の勘違いでなければ、喜んでくれていたようにも思える。

『原因が分からない以上、もう少し様子見としておきましょう』

シュテルの言葉に、三人は仕方がないかと頷いた。

Side: Hero

「ねえ、シュウ君」

放課後。帰り支度をしていると背後から顔をかけられた。見ると、なのはが真剣な面持ちでこちらを見ていた。

「どうしたの?」

「ちょっと聞きたいことがあって……」

「分かった。移動しよう」

周囲からいくつかの視線を感じるのでシュウがそう提案すると、なのは素直に頷いた。二人で教室を後にして、屋上へと向かう。昼休みと違い、人影はかなり少ない。それでも念のため隅の方まで行ってから、シュウはなのはへと向き直った。

「それで、なに?」

「うん。どうして学校だとシュテルたちを避けてるの? 家では普通なんだよね?」

ああ、なのはが聞いてくるのか。シュテルたちが直接聞いてくると思っていたシュウは、少しだけ驚き、次いでどこか複雑そうな表情を浮かべた。それを見たなのはが、慌てたように言う。

「シュテルたちから聞いてほしいって言われたわけじゃないよ? 私が気になったただけだから」

「うん、分かってる。大丈夫」

どう答えたものかと少し考え、ここで嘘を言っても仕方がないだろうと判断して正直に話すことにした。どうせ取るに足らない、くだらない理由だ。

「僕とは一緒にいない方がいいかなって。それでちょっと避けてる」「どうしてそう思うの？」

「最初の日に騒がれちゃったからね。あんまり仲良くしているのを見られたら、また何か言われるかもしれないから。僕が言われるならいいけど、シュテルたちがそれで不快な思いをするのは嫌だなって」

おそらくシュテルたちは気にしないといいと言っただろうし、実際に気にしないだろう。それでも、もし誰かに何かを言われているところを見てしまったら、自分がとても嫌な気持ちになる。つまりはただただ自分の問題なのだ。

なのはは、そっか、と頷いた。

「ありがとうございます、シュウ君。話してくれて」

「まあ別に隠しているわけでもないしね」

二人は小さく笑い合い、その場を後にした。

Side::Stern

『そんなことを言ってたよ』

なのはからの念話に、シュテルは少しだけ渋面になっていた。

なのはにシュウから理由を聞いてきたと言われた時は少し反応に困ってしまったが、シュテルたちを知る者は誰もが何かあったのかと心配していたそうだ。その結果、なのはが代表して一先ずシュウから聞いてみる、という事になったらしい。知らずのうちにはいえんななことで心配をかけてしまったことに申し訳なく思いながらも、なのはからシュウの理由を聞く。

そして、大きなため息をついた。

『ありがとうございます、ナノハ』

『ごめんね。余計なことだったかなとは思ってたんだけど……』

『いえ、助かりましたよ』

なのはとの念話を終えて、シュテルはリビングを見る。普段通りに

テレビを見ているシュウがいて、一緒にテレビを見ているレヴィとユーリはシュウのその様子に安堵している。シュテルはひとまずディアーチェにだけ、念話で先の話伝えておいた。

突然のシュテルの念話にディアーチェは驚きながらも、全てを聞き終えた後は少しばかり憤慨しているようだった。

『今更我らがそんなことを気にすると思ってるのか、あの阿呆は』

『落ち着いてください。私たちが気にするかというより、シュウが気にするということです。シュウの気持ちの問題なのでしょ』

『むづ……。そう言われると、怒るに怒れない……』

ディアーチェの言葉に、シュテルは同意する。自分たちのこともやはり気にかけているのだろうが、シュウ自身の気持ちの問題なら自分たちは何も言えない。言ってくれなかったことを少し寂しく思うが、それも自分たちに心配させまいとしてのことだろう。

『して、どつするっ。 シュテル』

その問いに対するシュテルの答えは、即答だった。

『シュウには悪いですが、実力行使といきましょう』

Side: Hero

昼休み。今日もシュウは妹のところへと行くつもりとして席を立て、その直後に肩に手を置かれた。

「どこへ行くつもりだ？」

ディアーチェだ。なぜだろう、その声はとても怖い。シュウはゆっくりと振り返ると、その場にいる三人へと引きつった笑みを浮かべた。

「えっと……。文花のところへ、行くつもりかなって……」

「文花なら今日は友達と一緒に食べるって言ってたよ」

レヴィの言葉にシュウは目を見開き、そしてなのはへと振り返る。なのはは微笑しつつ、手を合わせていた。

なのはを見たものの、彼女を責めるつもりはない。口止めはあえてしなかったのだから。むしろシュテルたちに伝えてほしいと思っていたくらいだ。もっとも、その結果どうして捕まることになるかは思

わなかったが。

レヴィの話も真実なのだろう。そして導かれる結論。文花も一枚噛んでいる。今の自分にどうやら味方はいないらしい。

いつの間にかクラス中の視線が自分たちに突き刺さっている。シュウは冷や汗を流すが、シュテルたちはどこ吹く風といった様子だ。三人でシュウの手や腕を掴み、引きずるようについて歩いて行く。

「さあ、行きましょー」

シュテルが言って、シュウは観念したように頂垂れた。

屋上の一角を五人で使い、弁当を広げる。シュウはシュテルとディアーチェに挟まれる形で座らされた。目の前にはレヴィとユーリがいて、背にはフェンス。逃げ場はない。

「さて、シュウ」

シュテルが口を開いて、シュウがびくりと体を震わせた。それを見て取ったシュテルが、うつすらと苦笑する。

「心配しなくとも、私たちは怒っているわけではありません。貴方が私たちのことを考えて避けていたことは聞いています。ですが……」「我らに対して気を遣いすぎだ、たわけ。今更我らがそんなことを気にするとも思っていたのか？」

シュテルとディアーチェの言葉に、シュウは曖昧な笑みを浮かべた。大人しく答える。

「思っていないけど、せつかく学校に来たんだから、少しでも不快なこととは避けてほしくて」

「私たちのことに気を遣ってくれるのは嬉しいですけど、でも家族ですよ？ 避けられる方が、悲しいです」

「そつそつー 普段通りにしよつよ」

ユーリとレヴィが言って、シュウが少し目を丸くする。次に、そうか、と頷いた。申し訳なさそうに眉尻を下げて、頭を深々と下げる。そのシュウの行動に、今度はシュテルたちが驚いた。

「いめん。そつだよね、避けられるのは嫌だよね」

ユーリから言われて、すぐに想像した。シュテルからずっと避けら

れたらどう思つかを。おそらく自分なら数日はショックで凹んでしまふ。

「分かってくれたなら、いいのです」

さて、お弁当にしましよ。シュテルがそう言ったところで、この話は終わりとなった。

その後は、シュウも遠慮はしないようになった。といっても、授業の合間の休憩時間は普段と変わらない。ただ、昼食の時間は、シュウはシュテルたちと一緒に食べるようになった。シュテルたちも他のクラスメイトに誘われることがあるため、必ず全員が揃うということにはなかったが。

周りからの反応は、特に何もなかった。初日のシュテルからの説明で、登校前からシュテルたちと知り合いになっていたのだから当然だろう、と思われているのだろうか。詳しくは分からないが、何もなければならそれに越したことはない。

そうしてシュテルたちの学校生活は特に問題なく過ぎていき、あっという間に一週間は終わってしまった。

最後の日の放課後。シュテルたちはクラスメイトたちに囲まれて、別れを惜しまれていた。その様子を、シュウは黙って見守る。たくさんの友達ができていたようで、シュウにとっても嬉しく思う。

一通り話し終えたのか、クラスメイトたちが順次帰宅していく。誰もがシュテルたちに、にこやかに手を振っていた。やがて教室に残されたのは、シュウとシュテルたち、そしてなのはたちだ。

「お疲れ様、シュテル」

なのはが声をかけると、シュテルは無表情に肩をすくめただけだった。

なのははしばらくシュテルとたちとシュウのことを何度か順番に見ていたが、すぐに少しだけ残念そうに眉尻を下げた。だがすぐに笑顔になり、さてと、と立ち上がる。

「先に帰るね」

「はい。お疲れ様でした」

なのはたちが元気よく手を振りながら教室を後にする。そして残ったのは、いつものメンバーだ。だが四人は何も言わず、静かに待つ。程なくして教室の扉が開かれ、ユーリが駆け込んできた。

「すみません、遅くなりました!」

五人揃ったところで、全員立ち上がる。帰ろうか、と五人が教室を出ようとして、

「……………」

シュテルは教室を一度だけ振り返った。しばらく夕日に照らされる教室を眺めて、きびすを返した。

買い物に行ってくる、とディアーチェはユーリとレヴィと共にスパーに向かった。シュウとシュテルは二人で家路を歩く。急ぐ必要はないので、のんびりと。

「シュテル。学校、どうだった?」

シュウが聞いて、シュテルが無表情に答える。

「悪くはなありませんでした。いえ、それなりに楽しめました」

そっか、とシュウは嬉しそうに微笑む。

帰り道は、シュテルたちがシュウの見ていないところでどういったことをしていたのか聞いた。淡々と語るシュテルはやはり無表情だが、声音は柔らかい。機嫌が良さそうだ。シュウも自分の事のように嬉しく思う。

やがてマンションにたどり着き、自分たちが住む部屋へとエレベーターで上る。

「そう言えば、その制服はどうするの?」

シュテルたちの服装は、当然ながら学校の制服だ。シュテルは自分の服を見て、少し黙る。どうやらシュテルたちも何も聞いていないらしい。

「返す必要があれば、何か言ってくるでしょう」

そう結論づけて、それまではタンスにでもしまっておくことになった。

「そっか。良かった」

「何がですか？」

「うん。かわいいから」

え、とシュテルの足が止まる。立ち止まったシュテルへとシュウは振り返り、笑顔で言った。

「ずっと言う機会がなかったけど。似合ってる。かわいい」

シュテルが目を見開き、すぐに顔を背けた。その顔はほんのりと朱に染まっている。シュテルは咳払いをして、足早にシュウを追い越した。

「……………ありがとうございます」

すれ違いざまに、そんな言葉を残しながら。

シュウはシュテルの後ろ姿を眺めながら、幸せそうに微笑んだ。

うん。来てもらって良かった。

一週間の出来事を振り返りながら、シュウはそう思っていた。

バリアジャケット

マンションのリビング。夕食を食べながら、シュウはある映像を眺めていた。シュウが見る映像は、昼頃行われたという模擬戦だ。なのはとシュテルが何か大砲のようなものを撃ち合っている。

「魔法って何だっけ」

「……………」

「この世界の書物に触れ、この世界で考えられている一般的な魔法というものを臆気ながら理解しているシュテルとディアーチェは、そつと目を逸らした。確かに、この世界での物語にある魔法とシュテルたちの魔法は全くの別物と覚えてしまつう。

レヴィとユーリは意味が分かっていないようで、不思議そうに首を傾げていた。

シュウはその後は何も言わず、そして映像を見終える。少しだけ遠い目をしているシュウに何を言えばいいのか分からず、シュテルは静かにその様子を見守る。やがてシュウはシュテルへと顔を向けると、ぼつりと言葉を漏らした。

「バリアジャケットが見たい」

シュウはパストから与えられた知識で、シュテルたちの魔法については実際のところはかなりの知識がある。デバイスに関しては管理局の誰であろうと到達していないほどのものだ。それでもそれは知識だけであり、実際に見たことはほとんどないだろう。

バリアジャケットもそのうちの一つだ。むしろデバイスに関しては自分で作ればいいのだが、そうはいかないバリアジャケットはじっくりと見る機会はなかったはずだ。

「見たいのですか？」

シュテルが聞いて、シュウが頷く。

「うん。見たい。……………だめ？」

少し考え、まあそれぐらいなら、とシュテルは了承した。

「ふむ……。シュテルのものが見られれば、十分か？」

ディアーチエが聞いて、シュウが少し考える素振りを見せた。しかしすぐに頷いて、ディアーチエへと言っ。

「うん。でも今度、お願いするかも」

「まあ、いつでも言っつといい。減るものでもないからな。いつでも見せてやるっ」

ディアーチエも快諾して、食器を片付け始める。大した目的があるわけでもないのに引き受けるあたり、ディアーチエもずいぶんとシュウには甘いものだ。気を許している証拠とも言えるのかもしれない。「今やるなら別室でな」

洗い物を始めるディアーチエの言葉に従い、シュテルはシュウと共に場所を変えることにした。

そして移動した先は、当然のことながらシュウの部屋だ。誰の迷惑にもならないので都合がいい。物が少ないので、万一何かあったとしても被害が少なくてすむ。

「それでは、いきますよ」

「うん」

期待が籠もった眼差しで見つめられ、シュテルは少し気恥ずかしさを覚えて目を逸らした。そのままシフェリオンを起動させ、バリアジャケットを展開する。いつもの、なのはと色違いの黒いバリアジャケットに身を包み、シュテルはシュウへと視線を移した。

「いかがですか？」

じつとこちらを見つめるシュウ。シュテルが怪訝そうに眉をひそめていると、

「うん。かわいい」

「は……？」

「すごくかわいい」

真正面から言われ、シュテルは一瞬何を言われたのか分からずに固まってしまう。やがてシュウの言葉を理解して、頬が赤くなるのを感じ

じて慌ててそっぽを向いた。

「そうですか。ありがとうございます」

とにかくそれだけ言って、そしてすぐにバリアジャケットを戻そうとして、

「触っていい？」

再び固まるシュテル。頬を引きつらせながらも、構いませんよ、と頷く。それを確認したシュウがおそろのおそろと手を伸ばして、シュテルのバリアジャケットに触れる。へえ、とシュウが驚きの声を漏らした。

「普通の服とあまり変わらないんだね」

「まあ……。そうですね」

着ている身としては色々と違うところもあるのだが、魔法を使えないシュウにとっては変わらないものだろう。シュウはしばらくシュテルの服に関心を示していたが、やがてふとシュテルへと顔を向けた。

「……………」

無言で自分を見つめてくるシュウ。

「シュウ？　どうかしましたか？」

シュテルがそう聞くのと、

「っ」

シュウの小さなかけ声が放たれたのは同時で。

シュウに抱きしめられていた。

「……………」

声を漏らしそうになるのを堪えて、シュテルはシュウへと意識を向ける。拒絶の意思を示さないのは、シュウの体がわずかに震えていたからだ。

「シュウ……………」

少し不安を感じながらシュウを呼ぶ。シュウがわずかに身じろぎをして、そしてぼつりと言葉を漏らした。

「あまり、危ないことはしないでおね……………」

シュウの言葉に、シュテルは目を見開いた。シュウが続ける。

「非殺傷設定とかは知ってるよ。でもそれは模擬戦の話だよ。実際は……そんなもの、相手は使ってくれないよね」

シュテルは少し迷いながらも、しっかりと頷いた。ここで嘘やごまかしは逆効果にしかならないことはすぐに分かる。シュウはその返事を受けて、さらに言葉を続ける。

「僕は、シュテルを守ることができない。デバイスのメンテナンスとかカートリッジとか、それしか力になることはできない。それが、やっぱり悔しい」

シュテルを抱きしめる腕に力が込められる。シュテルはそのシュウの背を撫でながら、気づかなかった自分を恥じていた。

今までも何度か模擬戦の映像を見せている。もしかすると、シュウはそのたびに自分の身を案じてくれていたのかもしれない。心配して、不安になっていたのかも知れない。そのことに全く気づかなかった、気づけなかったことに、軽い自己嫌悪すら覚える。

「大丈夫ですよ」

シュウの背を撫でながら、シュテルはシュウを安心させるために言葉を紡ぐ。

「私も自分一人で何でもできるとは思っていません。無理だと判断した時は迷わず撤退します。ですから、そんなに心配しないでください」

シュテルがそう言うと、シュウは小さく頷いた。小さく安堵の吐息を漏らし、しかしシュウが自分を離さないことに首を傾げる。

「その……。シュウ。そろそろ離していただけませんか？」

「やだ」

シュウが顔を上げる。その顔にあるのは、いたずらっぽいシュウの笑顔。

「なんだか新鮮だから。それに、かわいって言ったのは本当だよ」
そう言って、また自分を抱きしめてくる。シュテルは少し困惑していた。シュウの行動に、ではない。

それほど嫌とは思っていないどころか、むしろ少し嬉しいとすら思っている自分に、だ。

「もう少しだけですよ……」

ようやくとその言葉を絞り出したシュテルと、

「うん。ありがとう」

嬉しそうに礼を言ってくるシュウ。

シュテルは今日何度目か分からないため息をつきながらも、微笑笑を浮かべていた。

たまにはこんな日も悪くはないですね。

そんなことを思っていた。

パスト

暗い闇の中、ゆらゆらと意識だけが浮かぶ。上も下も何も無い、そんな空間を、パストはただ流されていた。

パストは眠る。眠り続ける。古い記憶の夢を見ながら。

「所長……」

部下に呼ばれ、女は手元の資料から顔を上げた。そこにいたのは自分の部下であり、夫でもある少し年下の男だ。女は男に対して苦笑いしつつ、言う。

「二人きりなんだから所長はやめてほしいね。名前で呼んでおくれよ」

「二人きりとはいえここは研究所ですよ。帰ってからの楽しみということで」

「そうかい。残念」

女はそう言いながら、資料に視線を戻してしまう。それを見た男が慌てた。

「いや、ちょっと待って！ 用事があつてきたから！」

「ん？ あ、そうだね。当然だね」

いくら夫婦とはいえ、仕事中にただ会っただけといったことはしない。それなのに、少し会話をして満足して終わらせようとする自分に呆れてしまう。結婚するまでは仕事一筋だったのが悪かったのかもしれない。それまでは、ずっと何かに追い詰められているかのように仕事をしていた。

男が、これを見てほしいと一枚の紙を差し出してきた。それを受け取り、それに記載されたデータを見る。軽く目を通して眉をひそめ、次いでしっかりと、途中の計算式を含めて確認する。そして大きく目を見開いた。

「なんだい、「じゃあ……」

そこに記載されていたのは、複雑な魔法陣とそれに関する計算式、それがもたらす効果。そしてそれを踏まえた上での、新たな魔道具。その魔道具は、今までの常識を一変するものだった。

「おもしろいだろっ?」

「おもしろいけど、これは……。まずいね……」

「ああ、非常にまずい」

あくまで紙の上での計算だ。机上の空論もいいところだ。だがもしも実際に作ることができれば、どのようなことをもたらすのか。メリットよりもデメリットの方が遙かに大きい。女はそれを想像して、顔を青ざめさせてしまう。

「これは、忘れるべきだね。研究所で作ることはできないよ」

まず第一に、この国と隣国で行われている戦争はさらに過激なものとなるだろう。今回の戦争は、お互いの土地を、食料を求めたものではない。ただ信仰の違いからくるものなので、この魔道具がもたらす恩恵とは何ら関係がない。

男もそれを承知しているので、重々しく頷いた。そして、

「だから、僕たちで作らないか?」

女は正気を疑うような目で男を見て、そして、いいねと笑った。個人で作ってあとは隠してしまえばいい、そう考えて。このデータが間違いないか確認したかったのもある。

今思えば。この時からすでに女は少しおかしくなり始めていたのだろう。

そして一年後。仕事の合間合間で作られた魔道具は完成する。その魔道具は、パストと名付けられた。

ギフテッドの試作品は、こうして作られた。

パストはとても有用な魔道具だった。

魔力さえ与えれば、多くの願いを叶えてくれる。さすがに無から有を生み出すことはできないが、それでも重たい病に苦しむ人を完治させたり、水不足の時には雨を降らせたり、それとは逆にあまりに雨が

続いた時は雨雲を消してしまったりと、何でもできた。

ただし必要な魔力も膨大だった。雨を降らせるだけでも十人以上の一流の魔導師が必要で、病を治すとなると百人以上の魔導師の魔力が必要だった。当然ながら、パストを作った夫婦にそれだけの魔力があるはずもない。

研究所の地下には、巨大な魔力タンクがある。電池のように魔力を貯めることができるもので、毎日誰かが魔力を補充している。計算ではこのタンクで千人分もの魔力を貯めることができるらしい。夫婦はこの魔力を使っていた。実験によく使用されるものなので、適当な案件をでっち上げている。今のところはまだ疑われてすらいない。

「本当にすごいものを作ったものだね。さすがはあたしの旦那だよ」「よしてくれ。僕は構想だけだ。机上の空論を現実のものとしたのは君の手腕だよ。僕だけだと絶対にできなかった」

自宅で、夫婦はテーブルに置かれたパストを見つめながら、お互いに褒め合った。机に置かれたパストは、今はきれいな赤い玉となっている。大きさは拳二つ分程度だ。これほど小さなものが、様々な願いを叶えてくれるのだから驚きである。

二人が自分たちの最高傑作を見つめていると、家の扉が強く叩かれた。二人は驚いて飛び上がり、すぐにパストを戸棚の奥へと突っ込む。夫がそうしている間に、女は客人を出迎えるために家の扉を開けた。

そこにいたのは、黒い鎧を身につけた兵士だった。確か、それなりの地位にいる兵士だったはずだ。なぜここに。まさかパストを知られたのか、と警戒していると、兵士が姿勢を正し、言った。

「お二人に異動命令が出ております。これが命令書です」

兵士が差し出してきた紙は、確かに正式な命令書だった。それに女が怪訝そう言う。

「異動、かい？ だけどあたしは、この間子供を産んだところなんだから……」

つい一ヶ月ほど前に、女は息子を出産したところだ。本来なら子供を産んで数年は仕事を休めるはずなのだが、そんな自分に異動命令が

きた。訝しげにしていると、兵士が言葉を続ける。

「異動先での住居は用意されます。また、給金も二倍出すそうです。是非とも、戻ってきてほしいと」

女は魔法研究所の所長で、その役職は大国であるこの国でもわずか五人しかいない。そのうちの一人を遊ばせておくことはできない、ということだろう。女は仕方がないとため息をつく、兵士へと言った。

「分かりました。準備します」

そして二人が向かったのは、最前線からほど近い町。夫婦はその町外れにある小さな建物を与えられた。小さいといっても二階建てで地下室ありと二人で暮らすには大きすぎる家だったが。

「研究を続けながら、魔法だけが人を治療する。それでいいんだね？」
「はい。よろしく願います」

案内役の兵士がそう言って、部屋を出て行く。夫婦は顔を見合わせると、ため息をつきながら研究を始めた。最前線とはいえ、この国は強い。故に危険はないだろう。そう考えて。

実際、一ヶ月の間は静かなものだった。多くの兵士が戦争へと向かったが、ほとんどの者は帰ってくる。誰もが思った。もう勝利は目前だろうと。

しかしそれは、異動して一ヶ月経ったところで、最悪の形で覆された。

「ぜん、めし……？」

新居で研究を続けていると、一人の兵士が転がり込んできた。そして告げられたのは、数日前にこの町を出た大部隊が壊滅したということ。生き残りは、いないそうだ。

「すぐにここから離れてください！早くー！」

兵士が二人を急かす。優秀な研究者をこんなところで失うわけにはいかないと、優先的に逃がしてくれるらしい。ならば最初から連れてくるなとも思っが、国にも何らかの都合があったのだろう。それを

責めはすまい。

夫婦が慌てて逃げ出す準備を始めたところで、

「きゃあー」

扉の方から先ほどの兵士の悲鳴が聞こえた。振り返ると、胸から血を流して倒れていく先ほどの兵士の姿。そしてその奥には、槍を持った他国の兵士。

「急げー」

夫に急かされ、女は奥の部屋へと急ぐ。その部屋で寝ている我が子を抱きかかえ、裏口へと向かおうとしたところで。

背中から、温かいものがぶちまけられた。

おそるおそる背後を振り返る。

夫の首から、槍の先端が伸びていた。

「かひゅ、ひゅー……」

夫が何かを言おうとして口を動かすが、言葉にならない息が漏れるだけで形にならない。そのうちに、夫の目から光が失われた。

逃げる、と言いたかったのだろう。それは分かる。それほど長い期間夫婦として暮らしたわけではないが、何を言おうとしたかぐらいは、分かる。それでも体は動かない。息子を抱いたまま、目の前の敵兵を呆然と見つめていた。

「……」

敵兵は何も言わない。黙って自分と息子を見比べた後、構えた。

「ひっ……」

息子を強く抱きしめる。そして槍が突き出される。そして槍は貫いた。

赤子の体を。

「は……？」

女が間の抜けた声を出す。女の手から赤子が引き抜かれ、そして敵兵は槍に刺さった赤子を見ると、

「……汚ねえな」

槍を振った。

「あ」

べちゃり、と赤子が床にうち捨てられる。

「ああ」

赤子の体から、少くない血が流れていく。

「あああああー」

女は敵兵へと体当たりした。予想外の行動に、敵兵が驚いてたたらを踏む。その間に女は赤子に駆け寄り、抱き寄せる。

致命傷、だった。

「……………」

女は虚ろな瞳で敵兵を見据える。敵兵はおもしろくなさそうに鼻を鳴らすと、再び槍を構えた。

憎い。殺したい。

そう、強く思う。

愛する人を殺され。愛しい我が子を奪われ。そして相手が目の前に。それ以外何を望もうか。

幸か不幸か、ころん、と足下に何かが転がってきた。

パスト、だった。

「はは……………」

もしかすると。自分は今この時、このためだけにこれを作ったのかもしれない。そうとしか思えなかった。女はパストを握りしめると、ただ一言、念じた。

「死ね」

その瞬間、体から魔力が奪われる。根こそぎ奪われるかと思っただが、パストはまず側の死体から、夫から魔力を根こそぎ奪い去った。そして次に自分の魔力を奪っていき、そしてわずかな量だけを残して、パストは起動した。

そして、男の体が消滅した。

その後。女は残った力を振り絞り、一縷の希望にすがり我が子に魔法をかけた。するとどうやら間に合ったようで、我が子の体から小さな白い、もやのようなものが出てくる。女はそれをさらに魔法を使って、小さな玉の中に保存した。

我が子の、魂だ。

そこまで終えて、女は気を失った。

気がつけば、女は首都の病院にいた。どうやら誰かが自分のことを助け出し、ここまで運び込んでくれたらしい。病室のテレビが、最前線にある町が敵の手に落ちたと報道していた。

くだらない。どうでもいい。

女が視線を側のテーブルへと投げる。そこには、小さな白い玉と、赤い玉。魂の保存の魔法はそれなりに知られているものなので、愛する我が子のためにその魔法を使ったのだからと誰かが察したのか、柔らかいタオルに、落ちないように配慮された上で丁寧に置かれていた。赤い玉も同じような魔法の何かだと思われたのか、白い玉の隣に置かれている。

パストはそれらを優しげに見つめ。

そして、小さな声で、嗤った。

女自身には外傷がないため、一週間ほどで退院した。国の人間からいくつか質問を受けた後は、自宅に閉じこもった。そして、そこから多くの物を取り寄せ始めた。

大量の機材に研究資料。蓄えていた財産をほとんど使い、彼女の家は最高の研究施設へと作り替えられた。地下室には最新式の魔力タンク。これさえあれば、一万人分の魔力を蓄えることができる、らしい。女は毎日誰かを雇い、タンクに魔力を蓄えていく。

そして女は研究に没頭するようになった。

望むことはただ一つ。可愛い我が子の蘇生だけ。

パストを使えば、可能性はある。だがあれでは、どれほどの魔力が必要か分からない。もっと魔力効率を良くしたものが求められた。もともとパストそのものが偶然の産物に近いものだ。そう簡単に行き通すとは思えなかったが、それでも女は諦めなかった。

そうして十年もの月日が流れ。未だに戦争は続いている。それど

ころか、より激しくなっているらしい。らしいというのは、女は家から出ないためそうだったことが分からないためだ。

そして、女の目の前には、透き通るような蒼い玉。女はそれを愛おしそうに撫でた。パストの改良型であり、これ以上は望めないと女が認めるもの。

女はそれを、ギフトッド、と名付けた。

魔力タンクの魔力を使い、ギフトッドへと魔力を与え、その力を使う。ギフトッドもパストと同じく無から有を生み出すことができなかったが、その代わりにギフトッドそのものが体を構成する。そして我が子の魂を取り込み、小さな赤子の姿となった。

その赤子は、元が魔道具とは分からないほど人間らしかった。日々しっかりと成長する様を見て、女は満足げに嗤っていた。

それから五年は平穏な時が流れた、死んだという記録が残されていない我が子を外に出すわけにもいかず、一日中その子と遊ぶ日々。幸いながら、蓄えには余裕がある。施設の充実で一時はほぼ使い切ったが、国から雇われている研究者の職は失っていなかったようで、今でも毎月給与が振り込まれていた。ただそれも、いつまで続くかは分からないが。

その五年の間に、女も少しずつ生氣を取り戻していった。ギフトッドを作っている間は死んだような目だったが、ようやく正気に戻りつつある。ようやく、安心できるようになった。

だがそれは再び、壊された。

ある嵐の日。雷の音が聞こえてくるたびに我が子が泣いて、女はあやすように抱きしめていた。

「大丈夫。大丈夫だから。少しは落ち着きなさい」

女がそう言っても、子供は泣き止まない。母の体にしがみつき、ずっと泣いている。女は困ったように、だが穏やかに笑っていた。

女が子供をあやしていると、家の扉が勢いよく開かれた。雨風と共

に国の兵士たちが入ってきて、瞬く間に自分たちが包囲される。女が目を白黒させている間に、その中の一人が声を上げた。

「作ったものを出してもらおう」

その男は、この国の將軍だった。なぜこんな人間が、と固まっていると、男が苛立たしげに続ける。

「近隣住民から連絡があった。死んだはずの貴様の子供がいると。貴様のことだ、死者を生き返らせる魔道具でも作ったのだろう？　今すぐ出せ。我らが有効利用してやる」

なんだそれは、と思うが、すぐに女は思い至った。ギフトッドのことだろう、と。死者を生き返らせることはさすがにできないのだが、我が子で誤解されたくない。

「いや、そんなものはないよ。あたしが作ったのは、魔力によって願いを叶える魔道具だ。さすがに死者は無理だ」

男がわずかに驚き、口元を歪めて獰猛な笑みを見せる。すぐに悟った。余計なことを言ってしまった、と。

「素晴らしい。ならばすぐにそれを出せ。それさえあれば、我が国は勝てる」

頭に血が上る。ふざけるな、と言いたくなる。だが女は気持ちを落ち着かせるよめに深呼吸をして、言う。

「悪いけど、もうないよ。一つだけだから」

「一つだけ、か。まさかそれが、魔道具そのものなのか？」

男が指で指し示すのは、我が子だ。子供が怯えて女にすがりつき、女は男を睨み付けた。

「関係、ない」

「はは。その反応で十分だ。そうか、仕方がないな」

男が背を向ける。どうやら諦めてくれるらしい。ならば最初から言えば良かった、と安堵のため息をついたところで。

「じつと、と音が鳴った。え、と視線を下げる。我が子の首が、あった。

前を見る。將軍が立っている。手には赤い液体で濡れた剣。

「「これなら、文句はあるまい？」」

男が酷薄な笑みを浮かべ、女は口を開こうとして、
今度は、女の首が落ちた。

「遺恨は残さず、だ」

男の声が、微かに聞こえた。

なんだこれは、と女は思う。

一度目は敵国に家族を奪われた。だが、これは戦争だ。それも仕方がない。無論納得はできないが、他にもいくらでも自分のような人はいる。

だが、今回は何だ。なぜ本来味方であるはずのこの国の兵士に殺されなければならぬ。自分たちが何をした。静かに暮らしていただけではないか。

薄れ行く意識の中、女の目は將軍を名乗った男を捉えていた。男は自分の体が抱きしめていた我が子へと手を伸ばす。その顔には、期待に満ちた不快な瞳。

ああ、そうか。女は、声なく嗤う。静かに嗤う。

人は欲深な生き物だ。願いを叶えるものがあるなら、それに縋りたくなるのは当たり前だ。女がギフトを作ったように。だからこれは、仕方のないことだ。

ーふざけるな。

女は嗤う。心で嗤う。

そんな生き物がいていいのか、と。いていいはずがない、と。ならば答えは簡単だ。そうとも、最初からそうすれば良かったのだ。

気づけば。女は再び歪み、人でなくなっていた。

こんなくそつたれな世界、消えてしまえばいいのに。

女が心の中でそう願い、そしてギフトはそれに呼応した。母の、最期の願いを叶えるために。

「なん……」

男の声は途中で止まった。男の体が消滅している。男の周囲が、消滅していく。蒼い玉を中心にして、世界が無へと帰していく。ゆっく

りと、ゆっくりと。

全ての人間に恐怖を与え、断罪するために。

女は満足げに嗤い、そして意識を手放す。

二度と目を覚ますことはなかった。

世界が消滅していく。一つの世界の終わりの時だ。もっともそれは、ある意味人為的な終わり方ではあったが。

「全軍、放てー！」

誰かの叫び声が響き、あらゆる魔法が世界の消滅へと向かって放たれる。何に向かって放てばいいのかわからないが、とにかく有と無の境目へと放ち続ける。だがそれらも、消滅していった。

「くそー！ なんなんだこれはー！」

誰かが叫び、耐えられなくなった人間が逃げていく。戦争を続けていた二国の連合軍は、瞬く間に瓦解した。

「はは……。皮肉なものだな。手を取り合えたきっかけが、世界の消滅など」

最初で最後の連合軍の任務は、失敗になった。

「大丈夫。すぐに終わるわ」

ある家で。夫婦は子供たちを集め、抱きしめていた。もう目と鼻の先まで境目は迫っている。多くの人ができるだけ遠くへと逃げていくようにだ。

だが、逃げたところでどうなるというのか。

これはこの世界が消えるまで止まらない。そんな確信があった。

「きつとすぐに終わるからね」

「そつだとも。ああ、そつだ。言葉遊びでもしようか」

夫が努めて明るく言う。だがその体は小刻みに震えていた。

言葉遊びを始める夫と子供たち。もちろん妻もそれにつきあつ。

全員が目を閉じて、それに興じる。目を開けると、目の前の恐怖に気が狂うから。

そして、彼らは意識を刈り取られた。
痛みも苦しみもない、穏やかな消滅だった。

最後に残された場所は、小さな丘だった。そこには木造の小屋があり、残された人々が集まっていた。人数にして、十人ほど。戦争をしていた二国の王と、それを守る騎士たちだ。彼らは最後まで逃げ続け、そしてここにたどり着いていた。

終わりの時は近い。四方が消滅の境界に囲まれており、もうどこにも逃げ場はない。

「これが、戦争を続けた罰というものか……」

王の一人が自嘲する。もう一人の王は、ただただ憤慨していた。

「何故だ！ 何故わしがこの様な目に遭わなければならん！」

その二人を守護する騎士たちも、もう何も言わなくなっていた。静かに、裁きの時を待っている。

「まあ落ち着け。もうどうにもならんだ。どれ、最後に一杯、どうだ？」

その言葉に呼応して、騎士の一人が小屋の隅にある木箱から瓶を一本取り出した。安物の酒だ。グラスも人数分ある。彼はグラスに酒を注いで、その場の全員に配っていく。

「ふん……」

憤慨していた王もそれを受け取り、その場に座った、酒を飲もうとして、しかし途中でもう一人の王へと振り返る。

「どうした？」

見られていることに気づいて首を傾げると、

「貴様と最後に話せて、まあ、良かった」

にやり、と意地の悪い笑みを浮かべた。そして酒をあおる。

「ふ……」。そうだな。「このよつなことになる前に、話せれば良かったがな」

そしてその場にいる全員が酒を飲み。

世界は消滅した。

パストはその一部始終を見守っていた。自分を作った作り主の代わりに、その結末を見届けた。

「嫌になるね……」

小さくため息をつく。せつかく芽生えた感情が、ずいぶんと煩わしい。

あの時、ギフトッドが暴走した時。パストは、作り主たる女を助けようとした。だがすでに女は事切れており、パストの能力ではどうしようもない状態だった。せめてもの慰めとして、彼女の記憶と意識データをコピーして、自らに融合させた。

それが、今のパストだ。作り主の皮をかぶった紛い物。作り主は、もういない。

「ん……？」

蒼い玉が自分の周りを巡る。申し訳なさそうに。悲しげに。パストは辛そうに顔を歪めたが、すぐに優しげに微笑んだ。

「あんたが気にすることじゃないよ。仕方がなかったのさ。あの人すら、気づかなかったからね」

作り主は、パストとギフトッドのことを分かっていたいなかった。

パストは、成功作に近い。必要な魔力こそ多いが、願いを制御して叶えることができる。パストにはうつすらとだが意識があった。自我があった。故に制御が可能だった。だが、作り主はパストの自我には気づかなかった。

彼女が死に瀕した時、彼女の手元へと自らを転移させて飛んだ時に、できれば気づいてほしかったものだ。

ギフトッドは、失敗作に近い。必要な魔力が少ない代わりに、あらゆる願いを極端に叶えてしまう。パストのように自我があれば良かったのだが、ギフトッドにはなかった。そのため制御できずに、その力を暴走させた。

今は微かな自我がある。作り主の子の魂だ。だが幼くして死んだ魂故に、希薄な自我だ。すぐにまた我を失い、暴走するだろう。作り主は、気づかなかった。

「まったく、どっしてこうなったのかね……」

作り主は、ただ平穩を望んだだけだ。息子との生活を望んだだけだ。その結果が、これだ。

「あんまりじゃないか……」

当たり前前の幸せを望んだけなのに、作り主は味方であるはずの自国の騎士に殺された。人の欲望に、殺された。確かに作り主は歪み始めていたが。それは息子との生活で改善されつつあったのに。

「ああ、くそ。ちくしょう……」

せめて、自分にもっと力があれば。ギフテッドが羨ましい。

パストは自らの周りをゆらゆらと浮かぶ蒼い玉を見つめる。作り主の息子の魂が宿った、彼女の忘れ形見。

作り主は、息子との生活を望み、息子の幸せを願っていた。ならば、自分はそれに応えよう。

「任せておくれ。」の子はあしたが、ちゃんと面倒を見るよ

パストはギフテッドを招き寄せ、そして自らその中へと入っていった。パストにとっての自我となるべく、彼を制御するために。彼の行く末を見守るために。そして彼を、導くために。

「いつになるかは分からないけど……。」の子が幸せを掴むまで、あたしがちゃんと導くよ」

パストを己に取り込むギフテッド。この時初めて、ギフテッドという魔道具は完成した。

ギフテッド。あなたに最後の命令だ。

ギフテッドの中でパストは導く。彼の母として。

これからみんなの願いを叶えにいこう。小さな願いを叶えにいこう。二度とこんなことが起こらないように。あなたはあたしの命令によって願いを叶え続けていくんだ。

自分に全ての罪を被せて。

だからこれは、お前のせいじゃないよ。

パストは導く。生まれ故郷を振り切るように。振り切らせるために。

振り返らずに。さあ、おいで。あたしのかわいいギフテッド。

後に残されたものは、何も無い。消滅した世界の名残が、虚数空間が広がるだけだ。

それは、昔の話。最初の魔法の世界の、誰にも知られることなく消滅した世界の話。

パストが意識を覚醒させる。ずいぶん長い時間を眠っていたようだ。もっとも、存在していた時間から考えると瞬きの時間にも満たないが。

周囲を確認する。喫茶店、だろうか。隣には、この子が想いを寄せる少女の姿。すっかり大人の女性になっている。どうやら、本当に年単位で眠っていたらしい。

『あれ？』

声が聞こえる。心の中に響く声。

『もしかして、起きてるっ？』

ギフテッドの声。ギフテッドに宿る作り主の子の声だ。

『ああ。今起きたよ』

返事をする、作り主の子、今ではシュウと呼ばれている少年が作業の手を止めた。どうやらデバイスのメンテナンスをしていたらしい。

『シュテル。パストが起きたから、ちょっとお話ししてくるよ』

隣の少女、シュテルが少しだけ目を見開いた。どうやら驚いているらしい。すぐに、分かりましたと頷いた。

シュウはいすにもたれると、目を閉じた。

『久しぶりだね、パスト。えっと……。お母さん』

『……。ああ、久しぶり。シュウ』

本当は、母ではない。作り主はすでに死に、ここにいるのは彼女の皮をかぶった別の魔道具だ。だが、それは最後まで黙っておこうと思っ

『シュウ。暇ならでいいんだけどさ。今までのこと、教えてくれるか

い？』

『うん。もちろん』

そしてシュウウから今までのことを聞いた。喫茶店を開くためにがんばったこと、ミッドチルダに引越したこと、そしてシュテルのこと。今までの生活を、聞いた。

『こんなところ、かな？』

『……………』

『お母さん？』

長かった。本当に長かった。数千年、数万年もの時間を旅して。ようやくこの場所に立っている。何度、諦めかけたことか。そのたびに作り手の顔を思い出したものだ。

『シュウ』

『ん？』

『幸せかい？』

パストの問いに、シュウが少し黙る。突然何を、と思っているのだろう。だがすぐにシュウから嬉しそうな感情が伝わってきた。

『すごく幸せだよ』

その声を聞いて。パストは、静かに涙した。ようやく、報われた。彼女の願いが、ようやく叶った。この場に作り主はいない。彼女に、彼の笑顔を見せることができない。それがとても残念に思えるが、それでも、ようやく報われた。

『それを聞いて、安心したよ』

『そうっ…』

『ああ。それじゃあ、もう少し眠るよ』

そう告げると、シュウは少し驚いたようだった。だがすぐに、静かに言ってくれる。

『うん。おやすみ、お母さん』

『ああ……………』

彼女の願いは叶った。あとは、この子次第だ。この先どうなるかは分からないが、あとはこの子に任せよう。それまでは、自分はまた眠るとしよう。故に今言つべきことは、決まっている。

『おやすみ。あたしの可愛い、ギフテッド』

そしてまた眠るために意識を手放そうとして。

目の前に、作り主が立っていた。穏やかな笑顔を浮かべ、優しくな
瞳でパストを見つめていた。

「あ……」

思わず涙があふれてくる。ただの、幻だ。そう思っても、涙が止ま
らない。

目の前の彼女が、静かに告げる。

「ありがとう、パスト。お疲れ様……」

そして、消えた。消えてしまった。

「ああ……」

パストは静かにまぶたを閉じた。幸福感に浸りながら。ただの幻
だったのかもしれないが、パストにとっては満足だった。

それは夢か現か幻か……。

ギフトテッド

夢を見ていた。

古い、古い記憶の夢。

まったく憶えのない、けれど自分の記憶だと分かる夢。

ああ、そうか……。

夢を見ながら、シユウは理解した。この記憶が、ギフトテッドのものであることに。シユウがシユウとして生まれる前、ギフトテッドとして存在していた頃の記憶だろう。

夢はまるで早送りしているかのように、映像があつという間に流れていく。それでも、本来は自分の記憶であるためか、その流れていく映像を見るだけで、その時のことを瞬時に思い出すことができた。

例えば、この映像。目の前に立つのは甲冑を着た人間。彼が口を動かす。シユウは知らないはずなのに、思い出すことができる。不思議な感覚だ。確かこの人間は、これから勝てない戦争に向かうところだった。彼の願いは家族に対する伝言で、ギフトテッドは人間の言葉を記録してそのまま家族へと届けたはずだ。

例えば、あの映像。五歳前後の幼い子供が、小さな動物の亡骸を抱えて泣いていた。この子の願いは単純で、生き返らせてほしい、というものだった。自分には叶えることのできない願い。そう伝えるところの子は大声で泣いた。その時は仕方なく、この子の両親を呼びに行つた。両親は戸惑いながらも、事情を聞いて礼を言ってくれた。何に対する礼かは分からなかった。

そして、目の前の映像。雪の中、泣き続ける夫婦。シユウの今の両親だ。

そうだ。今なら思い出せる。ギフトテッドは、ずっと昔の、人だつたころの両親を思い出していたはずだ。そして、この夫婦の願いを叶えたいと思つたはずだ。

そうか、こんなことを考えていたのか。

当時は夫婦が笑顔になることを望んだ。ただ、それだけだ。それだ

けだったはずなのに、今となってはそんな夫婦を、両親を気にもせず
に好き勝手している。当時のギフトテッドが今のシュウを見れば、何を
思うだろうか。今となっては、分からない。

多くのことを思い出せた。多くの記憶を見ることができた。気が
遠くなるほど長い時間を旅してきた記憶。懐かしいと思うこともで
きるが、こんなことをしていたのかと他人事として捉えてしまう。

シュウがぼんやりと記憶を見ていると、不意に、視界が白い光に包
まれた。

目を開ける。喫茶店の自分の部屋だ。シュウはあくびをしつつ体
を起こし、ぐっと伸びをした。何か、夢を見ていたような気がするの
だが、いまいち思い出せない。少しでも思い出せないかと唸っている
と、ドアがノックされた。

「シュウ。起きていますか？」

「あ、うん。起きてるよ」

シュウはすぐにドアへと向かい、開ける。シュテルがいつもの無表
情でそこにいた。

「おはようございます、シュウ」

「うん。おはよう、シュテル。すぐに着替えてくるよ」

「はい。お待ちしています」

シュウはもう一度ドアを閉め、大急ぎで着替えを済ませます。外行きの
私服に着替えて、部屋から出た。

「ディアーチェたちは？」

「朝食の用意をしています。もうすぐできあがるはずですよ」

「うあ……。寝坊しちゃったか。ごめん」

申し訳なさそうに謝ると、シュテルが、違いますよと首を振った。

「シュウはいつも通りに起きています。私たちが、というよりはレ
ヴィが早起きをしただけです」

「あー……。なるほど」

レヴィが早起きをするのは珍しいが、きっとそれだけ今日が楽し
みだったのだろう。今日を企画した張本人としては、嬉しい限りだ。

シユウが嬉しそうに笑っていると、シユテルもわずかに微笑んだ。

今日はシユウの提案で、ちょっとしたパーティを開くことになっている。その準備のために喫茶店も、囑託魔導師としての仕事も休んでいる。招待客が集まる夜までに準備を終わらせなければならぬ。

朝食後、食後のコーヒーやジュースをそれぞれ飲む。しばらくそんなのんびりとした時間を過ごしていると、ディアーチェが咳払いをした。すぐに全員がコップを置いて、ディアーチェの方へと姿勢を正す。

ディアーチェはその様子に満足そうに頷いてから、しかしすぐに不機嫌そうに眉をひそめた。

「つめの役目なのだがな、店長殿」

ディアーチェの冷やかな視線からシユウが目を逸らす、ディアーチェは小さくため息をつきつつも、仕方がないやつだと苦笑した。

「今日の予定だが、昨晚話したことから変更はない。準備の間に何かあれば、すぐに我がシユウにまで連絡すること。他、何かあるか？」
全員の沈黙、つまりは何もないという答えに頷きを返し、では、とディアーチェがシユウへと視線をやる。シユウは少し困ったような表情をしながらも、とりあえず立ち上がった。

「えっと……。みんなを僕のがままに付き合わせて……」

「謝るなよ」

「ごめん、と言いかけたシユウが固まり、困ったような表情を浮かべる。少し間を置いてから、言い直す。

「僕のがままに付き合ってくれてありがとう。今日は一日大変だと思っけど、よろしく願います」

そう言って、しっかりと頭を下げる。結局頭を下げるのか、とみんなが笑っていた。

その後、もう少しの間だけのんびりとした時間を過ごし、そしてそれぞれが動き出した。

今日のレヴィの仕事は食材の買い出しだ。朝から必要になるものは昨日のうちに購入してあるのだが、今日で間に合うものはまだ買っていない。できるだけ鮮度のいいものを使いたい、というのが理由にある。

レヴィは身支度を調べると、意気揚々と出かけていった。向かう先は、ディアーチェとシュテルが懇意にしている市場だ。ほとんどの競りは終わっているが、レヴィには関係がない。ここには協力者がいる。

鼻歌を歌いながら機嫌良く歩いていると、

「あれ、レヴィ？」

「ん？」

声をかけられ、振り返る。私服姿のフェイトがそこにいた。

「おいつす！ 元気が、オリジナル？」

「うん。元気だよ。えっと、こんにち……」

「おいつす……」

「お、おいつす……」

フェイトが少し恥ずかしそうにレヴィと同じ返事をしてくれたことに、レヴィは少し嬉しくなる。渋々といった様子だが、オリジナルはこういったことでもレヴィに合わせてくれるので好きだ。時折誘われて一緒に出かけるが、それも時間を忘れるほど楽しい。

「今日は分かってるよね？」

レヴィが聞いて、フェイトが笑いながら頷いた。もちろん、と。

「じゃあ遅刻しないように！ ボクは買い物に行ってくるよー！」

そう言って立ち去ろうとしたレヴィに、フェイトがおずおずといった様子で問うた。

「私も一緒に行っていないかな？」

フェイトを伴ったレヴィが訪れた場所は、大小の建物が並ぶ一角だ。朝にはこのあらゆる場所で競りが行われている。レヴィは目利きなどではないので、その光景は一度だけ見たことがあるだけだ。

本来の仕入れの担当は、シュテルとディアーチェだ。ただこの二人に關しても目利きにそれほど詳しいわけではなく、信賴できる者に任せている。毎朝誰かがその者の店へと取りに行くという形になっていた。

「……」

そう言っつてレヴィが示す建物は、市場の側にある小さな商店だった。店の看板には店名と、新鮮な魚や果物あります、という短い言葉だけ。すでに店は開いているようだが、客は少ない。

「えっと……。確か……。……」は趣味のお店らしいんだけど、お店の人の目利きは確か。ちよつとした経緯で知り合つて、時折ご飯をご馳走する代わりに仕入れを代行してもらつてゐるんだつて」

「へえ……。いつの間になんな知り合いができたの？」

「うん。」「ウ」

「え……。？」

「だから、」「ウ」

啞然とするフェイトを置き去りにして、レヴィは店の玄関をくぐる。

店内の陳列棚には、野菜や果物、魚など様々なものが並べられていた。最寄りの市場だけでは全て仕入れることなどできるはずのない品揃えだ。不思議そうにしているフェイトへと、レヴィが教える。

「毎朝、文花がコウを連れて飛び回つてゐるつて」

「ああ……。えっと……。そう、なんだ……。それで……」

フェイトの視線は店の奥へと向けられている。そこに誰かいるのかレヴィは知つてゐるし、何を思つてゐるのかもさすがに分かる。レヴィは奥に向かうつて、

「やっほー」

「ん？ ああ、もつそんな時間かあ……」

「コウが虚ろな目をレヴィへと向ける。この時間のコウは、いつも疲れ果ててゐる。文花の魔法を駆使して朝から世界を飛び回つてゐるのだから当然だろつて。」

「大丈夫？ いつも以上に疲れて見えるよ？」

「ふふ……。パーティのことで文花がすごい張り切ってたなあ……。いつも以上にあちこち飛び回って吟味してたんよ……。選ぶの、俺やけどな……」

「えっと……。」「苦労様です……?」

フェイトが引きつった笑みでそう言つと、「コウはようやくフェイトに気づいたようで、少し目を丸くした。だがすぐに無気力な瞳に戻り、軽く手を振る。

「いつものことだから」

そしておもむろに立ち上がると、店の奥へと引っ込んだ。待つこと数分、小さなデバイスを持ったコウが出てくる。

「ほら、レヴィ」

「うん。ありがと……」

「おう。まいどあり」

金銭のやり取りは、ない。いつも月末にまとめて支払われている。この辺りは信用取引だ。

レヴィはそのデバイスを持って、また後でね、と声をかけて店を出た。

「そのデバイスに?」

問いかけてきたフェイトへと、レヴィが頷く。

「うん。全部入ってるよ。シュウがこのために作った特製デバイス、だって」

「へえ……。そんなもの、作ってたんだね……」

魔法を使うためのデバイスではないとはいえ、決して安価なものではないはずだ。ましてや特製というからには、シュウだけが持つ知識も使われているのだろう。売ればいくらになるだろうか。それを仕入れのためだけに作り、使うとは贅沢なものだ。

「さすがは、シュウだね」

微苦笑しつつフェイトがそう言つて、

「シュウはすごいんだよ。それにシュテるんも……」

突然始まる家族自慢。フェイトは優しく微笑みながら、レヴィの話聞いていた。

S i d e : D e a r c h e

「一先ずはこれでいいだろう」

ディアーチェは大きな鍋に蓋をして、満足そうに頷いた。真後ろで作業しているシュテルへと振り返り、言う。

「ではそろそろ行ってくる」

「はい。お気をつけて」

振り返らずのシュテルの言葉。いつもなら律儀に振り返って頭まで下げてくるが、今日は目の前のことに集中していた。何をつくっているのかと盗み見てみれば、手を魔法で温めながら飴細工を作っていた。器用なものだ。

邪魔をしないために、ディアーチェは静かに厨房を後にする。フロアに戻ると、シュウとユーリが携帯ゲームに興じていた。地球に遊びに行った時に貰ったものだ。

「ユーリ。そろそろ行くことと思うが、どうする？」

「あ、行きます！ 待ってください！」

ユーリがシュウへと目配せして、シュウは笑いながら頷いた。二人そろって携帯ゲームの電源を切る。ユーリは足下の荷物を持つと、席を立った。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

手を振るシュウにユーリが嬉しそうに、はいと返事をする。そのユーリを連れて、ディアーチェは玄関へと向かう。

「すまぬが留守番は任せたぞ」

「うん。了解だよ」

シュウの見送りを受けながら、ディアーチェとユーリは喫茶店を後にした。

ディアーチェが向かう先は、時空管理局の側の飲食店だ。ユーリと共に軽い食事をしながら人を待つ。コーヒーをすすりながら、わずかに眉をしかめた。

「つまいな……」

距離があるため自分たちの店の競合店ではないが、自分たちの店よりも優れているものだ。何度か丁寧に飲み、味をしっかりと覚える。また時間のある時にも改善しなければならぬ。時間をかけて飲み干して、隣を見る。ユーリは目の前のオレンジジュースをじっと見つめていた。

「ディアーチェ。飲んでみてください」

見られていることに気づいたユーリが、オレンジジュースのコップを差し出してくる。怪訝そうにしながらもコップを受け取り、中の液体を少し飲む。

「む……」

「こちらも自分たちの店よりも美味しく感じられる。ディアーチェはそれもしっかりと覚えた。」

「王様…… お待たせ！」

出入り口の方から声がする。見ると、待ち人が、はやてがこちらへと歩いてきた。管理局の制服に身を包んでいる。手には封筒。その封筒の大きさから、あまり多くはないようだな、と予想をつける。

はやてはディアーチェたちの向かい側に座った。やってきた従業員に「コーヒーを頼み、去ったところで封筒を差し出してくる。」

「「じゅんな。がんばったんやけど……」」

「気にするな。これが終われば後は大丈夫だな？」

「うん。それはもちろん」

はやての返事にディアーチェは頷くと、封筒の中の資料を取り出す。ざっと目を通して、ユーリにも渡した。書かれていた内容ははやての仕事のもので、管理局の外でもできるものだ。ユーリもすぐに読み終えて、ディアーチェへと返してきた。

従業員がコーヒーを持ってきて、はやてが礼を言って受け取る。そしてすぐに、それを急いで飲み干した。

「王様、「じゅんな」」

「「じゅんなかといえばシュウからの依頼だ」」

はやてをパーティに誘うと、仕事が多くて間に合うか分からないというものだった。それを聞いたシュウがディアーチェたちに協力を

依頼。シユウからの依頼ならとディアアーチェは引き受けた形だ。

「現場への根回しはもうやってるから、大丈夫やと思うよ。もし何かあったら、いつでも連絡してな」

「ああ」

ディアアーチェは頷くと、封筒に資料を戻してはやてへと返す。

「手伝う代わりに、遅れるなよ。子鴉」

「うん。それは任せて」

はやての返事にディアアーチェは満足そうに頷くと、ディアアーチェはすぐに店を後にした。

「ユーリ。一応我だけでも十分終わらせることができるものだが、どうする？」

移動中、ディアアーチェが隣のユーリに聞く。ユーリは一瞬きよとんとした後、慥然とした表情で言った。

「帰ります、と言つと思つています？」

「いや……。思っていない」

いつものやり取りにディアアーチェが苦笑すると、ユーリは満足そうに頷いた。ディアアーチェの手を取り、嬉しそうに笑う。

「私はディアアーチェのものです！ ディアアーチェは私のものです！ 離れませんよ？」

「そ、そついつ恥ずかしいことを真顔で言うな！ そんな目で見るな！」

視線から逃げるように歩みを早めるディアアーチェ。だが手を繋いでいるので当然ながらユーリもそれについて行くことになる。それに気づいていないのは、恥ずかしさからくる混乱故だろう。そんなディアアーチェの様子を見て、ユーリはくすくすと笑い声を漏らす。

少し歩いたところで、ようやく気持ちが悪く落ちて着いてきたのだろう。ディアアーチェは立ち止まると、その場で深呼吸した。ユーリへと向き直り、言う。

「ユーリ。あまり軽率な発言はな……」

「ディアアーチェは私たちの優しい王様です」

「だ、誰が優しいか！」

「そんなディアーチェが、私は大好きですよ？」

ディアーチェの動きが完全に止まる。顔は真っ赤になり、何度か口を開閉させているが言葉は出てきていない。たっぷり五分近くそんな状態が続いた後、ディアーチェはきびすを返した。

「行くぞ……」

「はっ」

少しぶっきらぼうになっているディアーチェの言葉に、ユーリは笑顔で返事をした。

Side:Stern

「ふう……。何とか形になりましたね」

シュテルは大きなことをやり遂げたかのように、大仰に頷いた。彼女の目の前には、数々の料理やデザートが並ぶ。シュテルはそれらを冷蔵庫などに持って行き、手洗いをしてフロアに戻った。

テーブルの一つで、シュウはうたた寝をしていた。その様子にシュテルは薄く苦笑を浮かべながら、シュウの向かい側に腰掛ける。

シュテルの担当の仕事はこれで一先ず終わりだ。あとは下拵えで終わっている料理を作り終えるだけで、これはもう少し後の時間にすることになる。それまでは少し休憩だ。

「シュウ。起きていますか？」

呼びかけるが、返事はない。シュテルは時計を見て、まだもう少し時間に余裕があることを確認する。その後にシュウへと視線を戻し、

「仕方がないですね……。あと二十分だけですよ」

どこか優しい声で、そう言った。

今日のシュウに仕事はない。せいぜい後片付けをするぐらいだろう。これには理由があり、ここ一週間、シュウはずっとデバイスの仕事にかかり切りだった。タイミング悪く、知り合いの多くから一斉に依頼されたのが原因だ。それを聞いた家族全員が、当日のシュウの仕事はなしにしようということに決まった。

昨夜も遅くまで仕事をしていたらしい。かなり遅い時間になって部屋に戻っていく音を聞いている。そのがんばりもあって、どうやらデバイスの仕事は終わっているようだが。その疲れがあるのだろう、ユーリとディーアーチエを見送った後はずっと静かだったが、眠っていたらしい。

特に何をするでもなくシュウの寝顔を見つめていると、気づけば三十分が経っていた。自分は何をしていたのかと少しだけ自己嫌悪して、シュウの体を揺する。

「シュウ。起きてください。昼食にしましょう」

シュウがゆっくりとまぶたを開く。胡乱げな瞳でシュテルの姿を捉え、ぼんやりとした声が発せられた。

「ああ……。うん……。うん……」

その反応にシュテルは眉をひそめた。大丈夫かと少しだけ不安になり、シュウの横へと移動する。かがみ込んで座っているシュウと視線を合わせた。

「シュウ……？」

呼びかける。シュウが身じろぎをして、シュテルへと視線を向けてくる。まだ意識がはっきりしないのか、ぼんやりとした様子でシュテルを見ている。そして、

「きゃっ……」

シュウの体がぐらりと揺れて、シュテルへと覆い被さってきた。思わず出てきた自分のかわいらしい悲鳴に赤面し、誰も聞いていなくて良かったと安堵する。改めてシュウの顔をつかがい見ると、整った寝息を立てていた。

「まったく……」

シュテルはため息をつき、シュウの頭を撫でる。

「シュウ。起きてください。そろそろ昼食にしないと」

そつ静かに言つのと、

「お邪魔します。シュテル、い、る……？」

客が入ってきてシュテルたちの姿を確認したのが、同時だった。シュテルが目を見開き、完全に硬直する。

客も、なのはも動きを止め、そしてすぐに顔を真っ赤にした。

「えっと、その……。お邪魔、だった……。？」

「何を勘違いしているんですか……。いえ、して当然とは思いますが」
シュテルの疲れたようなため息が、ゆっくりと吐き出された。

ようやく目を覚ましたシュウと、先ほど訪れたなのはにコーヒーを出して、次に朝食を用意する。用意と言っても、昨日の残り物を温めるだけだ。それほど時間はかからない。

「ナノハ。朝食はまだですね？」

「うん。ごめんね？」

「いつものことです」

ディアーチェ作の炒飯を温め、パーティの準備のついでに作っていたケーキも用意する。それらをテーブルに並べると、どこからかお腹の音があった。シュテルとなのはが揃ってシュウを見る。対するシュウは一瞬だけ慚然とした表情を浮かべ、

「失礼な！　まるで僕の腹の音みたいに！」

そして目を逸らした。

「僕だけど……」

シュテルが吐息を漏らし、なのはは笑う。シュウも恥ずかしそうに頭をかいた。

全員がテーブルにつき、手を合わせる。いただきます、と言って食べ始めた。

「うん！　美味しい！」

「それは良かったです。ディアーチェに伝えておきます」

なのはの素直な感想を受け、シュテルが我が事のように喜ぶ。二人の様子を見守っているシュウも嬉しそうな笑顔だ。

「さて、ナノハ。予定より早い時間ですが、何かありましたか？」

シュテルが聞いて、なのはが首を振る。

「特に何も。ただ今日と明日は休みをもらえたから、せっかくだからシュテルたちを手伝おうかなって」

「そうですね。気にしなくても良かったのですが……」

言いながら、シユテルは少し考える。計画通りに準備は進んでいるので余裕はあるが、せっかくの厚意を無下にすることもないだろう。この後も順調に進むとは限らない。そこまで考えて、シユテルはなにはへと向き直った。

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきます」

シユテルがそう言うと、なのはは安堵のため息をついて笑顔になった。

Side: Hero

昼食後、シユウは食後のコーヒーを飲みながら、のんびりとくつろいでいた。本来なら自分も今日は準備を手伝う予定だったが、シユテルたちから必要ないと言われている。気を遣わせてしまったという自覚はあるが、体力的にも限界だったので甘えさせてもらった。

ぼんやりしていると、喫茶店の扉が開かれる。最初に帰ってきたのはレヴィだ。

「ただいまー！」

レヴィの元気な声に、シユウは笑いながら、おかえりと返す。レヴィは嬉しそうにしながら、店の奥へと駆けていった。

レヴィと一緒に入ってきた人物にも片手を上げる。フェイトは少しばかり困惑していたようだったが、シユウの挨拶を受けてこちらへと歩いてきた。

「くんには、シユウ。お邪魔します」

シユウの側に腰掛けるフェイト。レヴィから聞いたのが、すぐになるのが戻ってきた。その手には、コーヒーが満たされたカップが二つ。なのははフェイトに笑いかけると、彼女の前にカップの一つを置いた。もう一つはシユウの前。お代わりらしい。

「なのは、やっぱり……」

「うん。ちょっとお手伝い」

なのはが照れたように言って、フェイトが納得したように、やっぱり、と笑った。コーヒーに口をつけて、一息つく。

「私もこれを飲み終えたら手伝っよ」

「いいの？　ありがとう」

その後、フェイトはすぐに飲み終わり、手伝いへと行ってしまった。再び一人残されるシュウ。コーヒーを飲みながら、次の来客を待つ。

しばらくして、ディアーチェとユーリが戻ってきた。奥から聞こえてくる声が四人分なので少し訝しんでいたようだったが、シュウからなのはとフェイトが来ていると聞くと、むしろ納得したようだった。

「我も仕上げをしましょうか」

「はい！　手伝いますー！」

ディアーチェとレヴィも奥へと消えて、シュウはまた一人残された。

一人残されてしまったシュウは、また一人で待つことになる。だが今回は、すぐに次の来客があった。

「あ、お兄ちゃん」

声のした方を見てみると、車椅子に乗った文花と、それを押すコウがいた。二人はまっすぐにこちらへと向かってくる。

「早かったね」

「うん。ちょっとだけ急いじゃった」

照れたように笑う文花と、少しだけ疲れたような表情のコウ。シュウはそんな二人を見て、

「文花。あんまりコウにわがまま言いすぎたら、だめだよ？」

「あはは、分かってるよ。あ、コウ。コーヒーお願い」

この妹様は人の話を聞いているのだろうか。シュウが思わず苦笑する前で、了解と言いながらコウが厨房へと向かう。コウがシュウの隣を通る時に、シュウは小さな声で謝罪した。

「ごめん。わがままな妹で」

「まあ、いつものことやし、遠慮されるよかましや」

だから気にするな、とコウは笑いながら手を振って、厨房へと向かっていった。

コウが戻ってきた後は三人で思い出話に花を咲かせる。幼少の頃

や、これまでのこと。色々あったが、今となってはいい思い出だ。そうして話している間に準備はほとんど終わったらしく、シュテルたちが戻ってきた。テーブルを繋げて、簡易的な長テーブルを作る。そして運ばれてくる料理の数々。シュテルたちが並べている間に、

「遅くなったけど、間に合ったかな？」

はやても到着。一応私服には着替えているが、その表情は疲労が色濃く見える。それでもなのはたちが手伝っているのを見て、はやては荷物を置くとそれに合流した。

料理を並び終え、全員が席に着いた。今ここにいるのは、幼なじみとも言える気の置けないメンバーだけだ。

「簡易的なものですけど、結界も張りました」

結界の担当はユーリだ。音漏れを防ぐためだけが目的で、これで遠慮無くどんな話題でも出すことができる。

「それじゃあ……。何度目かは忘れたけど。集まってくれてありがとう。今日はゆっくりしてってね」

シュウがそう言っつて、ジューズで満たされたグラスを持つ。全員が自分のグラスを持って、

「乾杯！」

シュウの言葉を、全員が繰り返した。

この集まりは、幼なじみ全員にこの店を見つけれられてからは、定期的に開かれている。特に大した意味はなく、今までの報告の場のようなものだ。いつの間にかなのはたちの所屬が変わっていたり、文花の魔導師ランクが上がっていたりと、開くたびに誰かが話題を提供してくれる。シュウの密かな楽しみだ。

一時間ほど、シュウはなのはや文花たちの話を聞いていた。はやてがもうすぐ部長になるらしい。起動六課、というそうだ。これから発足する部隊で、今後はそれ関係の仕事で忙しくなるらしく、集まりには参加できない可能性が高くなるとのことだった。

なのはたちも同じ部隊になるらしく、やはり忙しくなるそうだ。

「そっか、ちょっと寂しくなるね。この集まり、楽しみにしてたんだけ

ど」

シュウが寂しげに言つと、なのはたちは驚いた顔をして、すぐに慌てたように言った。

「ずっと忙しいってわけでもないから。だからまた、みんなが集まるしっつ」

「うん。その時はみんなの後輩も紹介してね」

「もちろん」

一時間ほど話をしたところで、シュウは断りを入れて席を離れた。玄関から表に出て、夜の少し冷たい空気を吸い込む。夜風が心地よい。

シュウは携帯電話を取り出すと、番号を押して耳に当てた。三度ほどのコールの後、相手が電話に出る。

「シュウか。どうかしたかい？」

父親のケインだ。少し緊張しているような気配が伝わってくる。シュウは少し苦笑しつつも、口を開いた。

「特に用事はないんだけどね。久しぶりに話でもしておこうかなって」

「珍しいな……。少し待ってくれ」

ケインのその言葉の後、何度かボタンが押される音が聞こえる。シュウが言われた通りに待っていると、今度は母のさくらの声が聞こえてきた。二人ともが話せる状態にしたらしい。

「シュウ。元気？」

「元気だよ。文花とコウも元気。二人ともうまくやってるみたい」

「ふむ、そうか。……コウには今度帰ってくるように言っておきなさい。もう一度殴らせると」

またケインの声だ。その声にはわずかながら険が混じる。

「一応コウも義理とはいえ息子なのに？ でも分かった。言っておく。僕の方もよろしく」

「ああ、任せろ」

シュウが意地の悪い笑顔を浮かべ、ケインも低い声で笑う。二人そ

るって低い笑い声だ。さくらが呆れたようにため息をついている。シュテルがここにいれば、さくらと同じようにやはり呆れたことだろう。未だわだかまりがあるとはいえ、文花に対する過保護はシュウもケインも似たり寄ったりだ。

ひとしきり笑った後で、シュウは一度咳払いをした。ケインとさくらが居住まいを直す気配が伝わってくる。

「昨日、ちょっと夢を見たんだ」

シュウの突然の話に、二人が首を傾げたようだ。シュウが続ける。「ギフトッドとしての僕が、父さんと母さんの願いを叶える夢だった」多分夢というよりは記憶、とシュウが告げると、二人が息を呑む。構わずにシュウは続ける。

「あの時の僕は、純粹に父さんと母さんの願いを叶えようとしていたみたいだよ」

あの時は二人の笑顔を望んでいたはずだ。それなのに今となっては、二人とは顔を合わせることもすら少なくなっている。シュウはそれを、少しだけ申し訳なく思っていた。シュウがそう思っていることを察したのだろう、ケインとさくらが苦笑した。

「シュウ」

ケインの声。シュウがなに、と返す。

「私たちは許されないことをした。だからシュウが気に病むことはないよ」

「そうよ。それにね、私たちは、シュウと文花が幸せにしていればそれで満足だから」

シュウは少し目を見開き、やがて、そっか、と目を細めた。どこの世界でも、親は子の幸せを願うものらしい。自分にもいつか、分かる時がくるだろうか。

「今度、店に来てよ。歓迎するから」

二人が驚く気配が伝わり、シュウは、そう言えば二人を招待したことはなかったと思いついた。出入り禁止にしたわけではなかったが、二人も遠慮していたのだろう。

ケインとさくらが嬉しそうに、

「ああ、近いうちに寄らせてもらおうよ」

シュウは、待ってるよと柔らかく微笑んだ。

電話を切って、小さくため息をつく。少し体が冷えてしまっているが、すぐに戻る気にはなれなかった。もう少しだけここにしよう、そう思っていると、頬に温かいものが触れた。驚いて振り返る。シュテルが湯気の立つカップを持っていた。

「どうぞ、と差し出されたカップを受け取る。ホットミルクだった。

「『両親、ですか」

「うん。今度、店に来てって言うておいた」

「そうですか」

感情のこもっていない声だ。シュウがシュテルの表情を盗み見ると、それでも少し柔らかい雰囲気を感じることができた。シュテルもシュウと両親の関係については何か思うところがあったのは知っている。心配をかけていることも。これで少しぐらいは安心してもらえただろうか。

シュテルがシュウの隣に立つ。けれど何も言わず、ただそこにいるだけだ。それがとてもありがたい。シュウは頬を緩ませ、しかしやはりシュウも何も言わず、静かな時間を二人で過ごす。

夜空を見る。地球のものとは少し違う夜空だ。

ふと、シュウは思う。パストは、どう思っているだろう、と。かつての自分が叶えようとした願いを他でもないシュウ自身が捨てている。今の現状を、どう思っているのだろうか。

「シュウ、どうかしましたか？」

不安になったことが表情に出ていたのか、シュテルが気遣わしげに聞いてくる。シュウは隠すことでもないのですが、夢のことから両親との会話、そしてパストがどう思っているのかという不安の全てを話した。

聞き終えたシュテルは、少し考えるような素振りを見せた後、

「大丈夫だと思いますよ」

「そう、かな？」

「はい。パストは貴方にギフトッドとしての生を望んでいるわけではないはずです。貴方の幸福を誰よりも願っているのは、おそらくですが他にもないパストですから」

パストと直接顔を合わせたからこそその言葉なのだろう。シユウはそれを、自然と受け取ることができた。安堵に息を吐き、薄く微笑む。それならいいかな、と小さな声で言うと、シユテルは頷いただけでそれ以上は何も言わなかった。

「幸福、かあ……。僕にとっては、今の生活で十分だけどね」

「そうですね？」

「うん。たまにちょっとした刺激があるけど、それも含めて、ね」

喫茶店で静かに平和に過ごす。シユウは今の生活を気に入っているし、満喫している。だが時折だが、シユテルたちの囑託魔導師の仕事関係やなのはたちの管理局絡みのことなど、ちょっとした事件に巻き込まれることもある。それでも、それらを含めて、シユウは今が十分過ぎるほど幸せだと感じている。

「それに、シユテルが側にいてくれるしね」

そんなことを言ってだらしない笑みを浮かべる。シユテルはわずかに目を見開き、すぐに顔を逸らした。そんな反応も可愛いなと思っっている。

「平然とそんなことを言わないでください……」

シユテルの小さな声。そんな返し方をされたのは初めてだったので、これにはシユウが驚いた。

「でも嘘じゃないよ？ 本当だからね？」

「そう分かっているからこそ、ですよ。私もそれなりに、恥ずかしいとは思いますが」

ほのかに頬を朱に染めての言葉。シユウが完全に凍り付いていると、シユテルは一度だけ咳払いをした。忘れてください、と店内へと戻ろうとして。そんなシユテルの手を、シユウは反射的に掴んでいた。

「何でしようか？」

「えっと、その……」

しばしの逡巡の後、思い切って言う。

「おめっとうっ、いいっ。」

「……………」

完全な無言。シュテルの冷めた目が心に痛い。何でもないです、と言おうとして。

「いいですよ」

そっと、シュテルが両手を広げる。まさか許可が下りると思っていなかったので再び固まり、だがすぐにシュテルの気が変わる前に、彼女の体を抱きしめた。

ぎゅっ。

「えへへ……………」

シュウが幸せそうに笑い、

「……………」

その反応を聞いたからか、シュテルも少しだけ恥ずかしそうにしながらも微笑んだ。

「シュテル」

「はい」

「好きだよ。大好き」

「ですから……………。そっぴいっことを平然と言わないでください……………」

どっしりよらかな、といたずらっぽく笑い、シュテルが小さくため息をつく。シュテルが体を離そうとするので、逃がすまいとさらに強く抱きしめた。

「あ、あの……………。シュウ……………」

シュテルには珍しく、困惑と恥じらいを多分ににじませた声。

「もうちょっ」と

「仕方ありませんね……………」

シュテルも抱きしめ返してくれる。それがとても嬉しくて、心地よい。

「私も、貴方のことが好きですよ」

そんなことを耳元で囁いてくる。シュウが嬉しくも恥ずかしさで顔を赤くすると、言った張本人であるシュテルも真っ赤になってい

た。

そんなシュテルと目が合い、しばらく見つめ合い。
そして、どちらからともなく、そつと唇を合わせた。

た。

ギフトッドは願いを叶え、特別な贈り物を多くの人々に与えてき

た。それは、シュウにとっても同じことだ。

た。

シュウの願いは叶えられ、シュテルたちという特別な贈り物を得

た。今の自分は、誰よりも幸福の中にいると思える。

シュテルの温もりを確かめながら、シュウはそんなことを思ってい

た。絶対に、この温もりを手放さない。

そつ心に誓いながら。